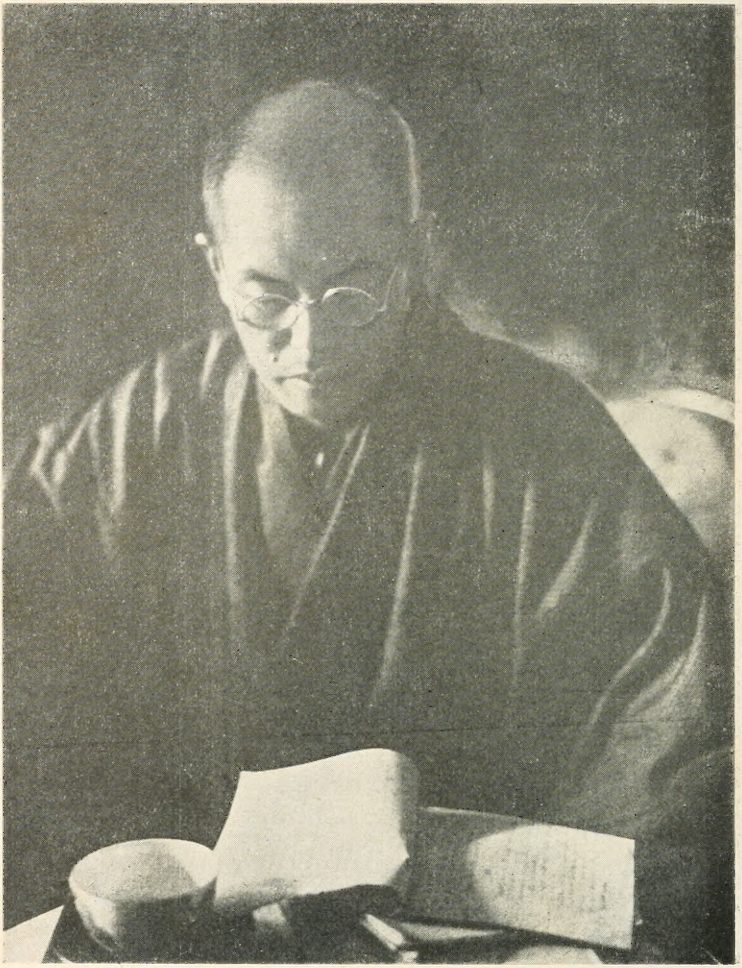
現代日本文學全集



杉浦非水裝幀

武者小路實篤集

改造社版



著者近影

「武者小路實篤集」目次

私はたえず何かしたい。
内の生命を外に出したい。
出し切りたい。それも空に
はき出すのでなく大地の
上に喰ひこむやうにはき
出したい。人間の心に喰ひこ
まうと云つてもいい。

実篤

愛慾（四幕）

人物

野中英次（二十九）
野中千代子（二十五）
野中信一（三十六）
小野寺夫婦

第一幕

一

（英次の室、午後一時頃）

英次。僕のことは安心してくれ給へ。僕は自分のことは自分で考へたいのだから。

友。君は短氣なことはしまいね。

英次。誰が短氣なことをするものか。僕はそんな人間に見えるかね。

友。なんだか君は非常に淋しいやうに見える。

英次。淋しくないとは云はないが、しかし今の世に生きて淋しくない人間がゐるかね。闇のなかに一人でおつぼり出されたやうな氣のしない人間がゐるかね、一體、今の人は何を信じたらいゝのだ。しかし何も信じることが出來ないでも死ぬやうなことはない。僕はまだ僕に見切りをつけないからね。之から何か面白いことをしようと思つてゐるのだから。

友。それをきいて僕も安心したよ。僕達は君の未來を信じてゐるからね。君に今死なれることは僕達にはつらすぎるからね。

英次。ありがたう。しかし僕は死にはしないよ。死ねれば樂かと思ふが、中々この世に強い執着をもつてゐる。何しても始まらない氣もするが、何にもしないでも始まらない。僕は今に君達によろこんでもらへるやうな仕事をするつもりだよ。

友。是非やつて見てくれ給へ。

英次。出來るか、どうか。

友。君なら出來ると思ふね。

英次。何か僕の内に生きたがつてゐるものがあるから、僕はそれを生かす迄は死ねない。

友。皆は君に感心してゐるよ。

英次　さうかね。僕は皆に笑はれてゐると思つてゐたよ。

友。わかる人にはわかる。

英次　しかしわからない人が多いからね、そして僕自身だつて自分の取つてゐる態度がいゝと許りは思つてゐない。あまり意氣地のなさすぎる話とも思ふよ。怒るのが本當ぢやないかとも思ふのだ、それを怒らないのは意氣地がないからとも思ふよ。

友　しかし皆は君を信じてゐるからね。たゞ君が淋しさの前に力をおとすことを恐れてゐる。

英次。それは大丈夫だ。僕だつて他人の出やうで自分をまけようとは思はないよ。他人がどう出て來ても、自分を生かすこと切り考へないよ。その點僕はエゴイストだよ。それは僕だつて一時參つたよ。皆が感づく前に僕は感づいてゐたからね、半信半疑ではあつたかね。しかしその御かけで皆が感づいた時分には僕の度胸はきまつてゐたよ。そして物好きな奴をよろこばすわけにはゆかなかつた。僕はなほ勇氣を得たね、僕はなほ決心をしたからね。そして僕は兄や妻にも同情してゐる。

無理はないと思つてゐる。僕は獨身の生活をしてゐるつもりになればいゝのだ。

友。君の決心をきいてうれしく思つたよ。皆もさぞ安心するだらう。それでは失敬する。

英次。それでは皆によろしく云つてくれ給へ。僕のことは心配しないでほしいつてね。僕の氣になるものはたゞ兄に食はしてもらつてゐると云ふ點だ。その點で僕は兄に怒れないのだと思つて皆に輕蔑されてゐるやうに僕はついひがむのだが、まあさう思ひたい人にはさう思はしておく、事實、まあさうだからね。

友。それでは失敬する。

英次。又來たまへ。

友。ありがたう。

（二人退場、英次まもなく登場、おちつかない形、信一登場）

信一。英次、一寸話したいことがあるのだ。

英次。なんですか。兄さん。

信一。千代子さんは何處にゐるか、知つてゐるなら教へてほしいのだがね。

英次。千代子はお兄さんと一緒ではなかつたのですか。

信一。千代子さんは一昨日一寸僕の處へ顏を見せたきりだ。

英次。僕の處へは一昨日から歸つて來ません。お兄さんと一緒だと思つてゐましたよ。

信一。千代子さんにへんな所はなかつたかね。僕は心配してゐるのだよ。

英次。僕は千代子の番人ではありませんからね。法律上では千代子の夫かも知れませんが、事實は僕は千代子とは赤の他人ですからね。千代子のことは知りませんよ。

信一。千代子さんはいつもお前のことをほめて話してゐる。

英次。千代子はお兄さんのことは僕の前でほめたことはありませんよ。

信一。さう一々皮肉には出ないでくれ、俺がわるいのだから仕方がないが、今日は俺は本當に心配してゐるのだ。

英次。僕はお兄さんを尊敬してはゐますが、お兄さんが策略をつかふ人だと云ふことを僕は知つてゐるのですからね。僕はお兄さんの云ふことを眞正面には信じられないのです。たとへばです、角までお兄さんが千代子と來てゐながら、お兄さんは今お兄さんが云つたやうなことを平氣で云へる人だと僕には思へるのですから、僕は、お兄さんと一緒になつて千代子のことは心配出來ません。

信一。お前にさう言はれても一言もないが、しかし千代子さんは。

英次。千代子さんなぞとは云はないで下さい。尤もさんをつけたければおつけになつてもかまひませんが、わざとらしくなく云つて下さい。僕は千代子をお兄さんの妻だと思つてゐるのですからね。

信一。それなら千代子さんの話はよさう。しかしお前は千代子さんのゆくへを本當に知らないのかね。何か恐ろしいことが何處かで行はれたやうな氣がして仕方がないのだ。今にも千代子さんが血みどろになつて出て來はしまいかと思ふのだ。

英次。この縁の下からでもですか。

信一。さうだとは云はないが。

英次。さうでないとも思へないのですか。

信一。千代子さんはお前を恐れてゐたよ。

英次。千代子の恐れてゐたのはお嫂さんです。

信一。たづ子をお前は疑つてゐるのか。

英次。あなたのゆか下を疑つてはゐませんよ。だがお兄さんが本氣になつて千代子のことを心配していらつしやるのを見るのは僕には意表外ですよ。僕は千代子なんかお兄さんにとつては十數人の女の一人にすぎないと思つて

ゐましたよ。

信一。そんな男に見えるかね。

英次。何しろお兄さんは一代の人氣役者ですからね。女には不自由をなさつたことはないでせうからね。

信一。僕は千代子さんが死にさへしなければいいのだ。

英次。お兄さんは本當に千代子が死んだかも知れないと思つてゐるのですか。誰かに殺されたとでも思つてゐるのですか。

信一。さうは思つてゐないよ。だが昨日へんな夢を見たのだ。

英次。千代子のですか。僕は千代子はお兄さんと一緒だと許り思つてゐたのですよ。

信一。夢だと、千代子さんはお前に殺されたやうに云つてゐたよ。この室でね。

英次。この室で殺さうと思つたことはありましたよ。だが殺すわけにはゆきませんでした。

信一。夜中にお前が短刀を見つめてゐたのを千代子さんは見たと云つてゐたよ。

英次。そんなこともあるかも知れません。しかし僕は千代子を全部的に愛することが出來るのです。千代子の缺點も皆。千代子はその時、その時で全部的に動いてしまふのですから、あいつが私を愛してゐる時には、その心を疑ふことは出來ないのですから。

信一。たしかにあいつはお前を愛してゐる。お前がもう少し嚴重に見張つてゐてくれたら、こんな所におちこまなくつてもよかつたのだといつか云つてゐたよ。

英次。あいつはどんなことだつて云ひますよ。私が何度あいつに死ぬことをのぞまれたでせう。女は後家になるまで樂が出來ないと云ふのはあいつの口ぐせです。あいつは又お兄さんの死ぬことをのぞんでもゐました。僕はあいつに殺されはしないかと思つたこともありましたよ。だがあいつは又氣がよわいのですから、僕が一寸指に負傷でもすれば、まるで僕は生命にかゝはるやうな大負傷をしたやうにさわいで、そして泣いて心配してくれるのです。あいつは死ぬやうなことは出來ませんよ。

信一。だが誰かに殺されさうな氣がすると云つてゐたよ。

英次。それはあいつの自惚れです。そんな事が云つて見たいのがあいつのくせです。

信一。それならお前はあいつが生きてゐると思つてゐるのだね。

英次。勿論、生きてゐると思ひますよ。だが死んだつてお兄さんは別に困りはなさらないのでせう。

信一。死なれては困るよ。お前は死なれてもいいのか。

英次。死んでくれたら、それも反つていゝと思ひますよ。ですが、僕にとつてはともかくもあいつは唯一の女です。浮氣ものであつても。

信一。お前の畫を見せないか。

英次。だめです。

信一。だめでもいゝから見せないか。

英次。それなら見せますかね。

信一。中々うまくなつたね。

英次　それはお世辭ですか。正直に云つて下さい。

信一。俺には畫のことはわからないが、前よりうまくなつたことだけは分る。

英次。まあ、少しづつはうまくなるでせうが、中々ものにならないものですね。

信一。なんだつてさうだよ。さうらくにものになるものぢやない。

英次。最初の作から、何處かに天才のひらめきがなくつてはものにならないと思ひますね。

お兄さんの初めの舞臺を見た時から、僕は感心したものでしたよ。自分のものにはそんなひらめきがないやうに思ふのですがね。

信一。不意に出てくるものだね。お前はものになると思ふね。

英次。それは僕だつてものにならないと思へば畫はやりませんよ。僕は他のことにはなほ望みがないのですから、畫だけにかじりつくより仕方がないやうなものですからね。しかし僕は自分がせむしに生れたことを後悔はしてゐませんよ。それだけ僕は運命にハンブルになつて、自分の仕事を一心にやつてゆけばいいと思つてゐますよ。女のことなんか、僕は考へるだけでも身の程知らずだと思つてゐるのですよ。

信一。さう云はれると一言もないがね

英次。僕はお兄さんを一面憎んでゐるかも知れませんが、しかし僕はお兄さんを天才として尊敬してゐるのですよ。お兄さんの藝は日本の誇りだと思つて、よろこんでゐるのですよ。その他の點は別としても、お兄さんの藝のますく進んでゆくのには感心し切つてゐますよ。

信一。お前にさう言はれると本當に嬉しいよ。僕は世界の内ではお前の前だけ頭をさげたいのだ。

英次。そんなことは云はないで下さい。お兄さんは空高くとんで下さい。女のことなんか氣にしないでね。僕のことなんかも氣にしないで下さい。僕は地にしがみついて何か其處からほり出して見るつもりです。

信一。僕はお前を心から尊敬してゐる。二人は一面敵かも知れないが、一面は實に尊敬しあふ、この上ない兄弟だと思つてゐる

英次。お兄さん、僕は一つの悟りをひらいてゐるのですよ。他人は自由たらしめよ。よしそれが妻であつても、自分の自由になると思ふな。自分の自由になるのは自分だけだ。それも許された小さい範圍内の話ですがね。僕はその範圍内で出來るだけ、立派な人間になるつもりですよ。僕の手を見て下さい。決して血によごれてはゐません。僕は千代子も可哀さうな人間と思つてゐるのですよ。お兄さんも、お嫂さんもね。人間と云ふものは、さう出來てゐるのですからね。

信一。さう云はれると一言もないよ。

（外で誰か來た氣はひする。英次ゆく。まもなく登場。）

英次。お兄さん一寸手つだつて下さい。

信一。なんだ。

英次。面白いものを買つたのです。

信一。さうか。

（二人退場、まもなく大きな支那カバンを二人で運んでくる。）

信一。ヘンなものを買つたね。

英次。古道具屋の店さきにあつたら不意に買ひたくなつたのです。買つた後では後悔しましたがね。

信一。隨分大きいね。いくらした。

英次。十三圓でしたよ。

信一。それはやすかつたね。

英次。お兄さんは藝だけは大事にして下さいよ。そして皆に純粹な藝術的なよろこびを知らしてやつて下さい。僕は一人になつて靜かに畫がかきたくなりました。

信一。それなら又くるよ。今日は失敬する

英次。千代子の消息がわかつたらすぐ知らせますよ。

信一。生きてゐることだけでいゝよ。

英次。正直なことをおつしやつてもいゝでせう。お嫂さんによろしく。

（二人退場。まもなく英次登場。）

英次。俺は他人の出やうで自分の生命をあげさげはしないぞ。

（友、登場）

友。さつき手帳を忘れたのでとりにきたよ。

英次。さうか。兄にあつたか。

友。あつたよ。

英次。君は兄を知らないのかね。

友。君の兄さんは舞臺で見ただけだ。

英次。俺の兄弟とは思へないだらう。兄弟にもいろ〳〵あるものだね。

友。しかし何處か似てゐるよ。

英次。口が似てゐるだらう。

友。口が似てゐる。

英次。兄は母に似てゐる。そして僕は父に似てゐる。その上に一人女の子があつたが死んでしまつた。僕はせむしでなかつたら、もう少しのび〳〵育つことが出來たらう。そしたら兄にもつとよく似たかも知れないが、感じがまるでちがつてしまつたよ。よく父に兄は鶴に比較され、僕は墓に比較されたよ。隨分ひどい比較だが、あたつてゐる。

友。…………

英次。返事が出來ないかね。あたつてゐるからね。だが僕はさう云はれてもあまり腹が立たず、ます〳〵兄を崇拜したものだよ。子供の時はね　今になると僕には又僕のいゝ所があると思つてゐるがね。たゞ他人に通じないだけの話だがね。しかしこんな僕に女難があるとしたら滑稽だらう。あるわけでもないが、僕は身の程を知れば幸福になれるのだよ。僕は僕に相當な仕事をしてゐればいゝ。僕にだつて、僕相當な仕事はいくらでもある。

友。…………

英次。君は僕を同情してゐるかも知れないが、僕は一人で心のどかに畫がかける、自分の心に感謝してゐるよ。僕は之でも一方間拔けた呑氣ものらしいよ。誰か來たらしい。

（英次退場、英次は常に千代子の歸りを人知れず待つてゐる。まもなく登場）

英次。だれもゐなかつた。僕は賢者には悲劇がないと云ふことを聞いたことがあるが、自分も出來るだけ賢者になるつもりだ。蟲のいゝ要求を出しさへしなければ悲劇は起らずにすむ。僕だつてさうだよ。妻が僕に滿足しないと云ふのは當然すぎることだ。妻が僕の處へ來た方がまちがひだ。だからそのまちがひからなほしてゆけばいゝのだ。處が僕は妻の美しい肉體に愛着を感じてしまつた。其處で悲劇が起りたがるが、悟つて見ればなんでもないことだ。何處に風が吹くと思へばそれでいいはずだ。だが中々口で云ふ程うまくゆかないがね。しかしいくらうまくゆかないからと云つて、事實をまげるわけにはゆかない。僕は依然としてせむしで、依然として墓だ。そして依然としてあまりさばけない、いや味な男だ。だが僕は畫をかけば、僕のいゝ所が出てくれると思ふのだよ。僕だつて人間だ、いい所は持つてゐるからね。其處で僕は花や、果實を相手にしたり、山や水を相手にしてゐると心のどかに仕事が出來るのだ。だから僕は自分を不幸だとは思つてゐない。

友。大きな支那カバンがあるね。どうしたのだ。さつきは氣がつかなかつた。

英次。之か。氣がつかないわけだよ、今來たのだ。昨夜ふと見つけて買ひたくなつたのだよ。今とゞけて來たのだ。中々立派だらう。だが買つたあと何となくよけいなものを買つたと後悔したよ。誰か來たやうだね。

友。氣のせゐだよ。

英次。さうかね。僕は妻が歸つて來たのかと思つたよ。僕の兄は妻を僕が殺しはしないかと思つて心配してゐるのだよ。一寸無理もない

所もあるが、僕だつて一思ひにやつてやらうと思つたこともまるでないとは云へないからね。だが人殺しするには、あとのことが目に浮びすぎるし、無理心中するには、自分に仕事がありすぎるからね。だが妻は僕に殺されるのを怖がつて逃げてゐるのかも知れない。馬鹿な奴だよ。だが自分の知らない内、夢遊病者にでもなつて妻をやつつけて氣がつかずにゐるのかも知れないがね。それは冗談だよ。今に妻は歸つて來るよ。だが僕は妻のことなんか何とも思つてゐないのだ。久しぶりに君と碁でもやらうかね。どんなに僕がおちついてゐるか君に示して見よう。

（碁をやり出す）

二

（英次の室、妻千代子三味線をひき、英次はうたをうたつてゐる。友登場）

英次。よく來たね。妻は昨晩おそく歸つて來たよ。矢張り自家は忘れなかつたと見える。

妻。小野寺さん。随分あなたに御心配をかけたさうですみませんでした。私はなんだか不意にうちへ歸るのが怖くなつて箱根へ逃げていつたのですが、金がなくなつたので、まあ殺されたら殺された時と思つて歸つて來ましたら、主人がよろこんでくれたので、私は生きかへつたやうな氣がしましたよ。

英次。俺も生きかへつたやうな氣がしたよ。首でもくゝられちや寢ざめがわるいからね。そのかはりこいつがゐると畫がかけないで困るよ。

妻。たまに歸つて來ると、すぐ畫がかけないなんて云ふのですからね。

友。畫なんかかけなくつたつていゝでせう。

妻。私が生きてゐたのをよろこんでくれたかと思ふと、すぐ又畫がかけないが始まるのですよ。

英次。何しろ朝から三味線をひき出すのだからね。

妻。三味線をひけとは誰がおつしやつたの。

英次。さう云はすやうに持ちかけたのは誰かね。何しろ畫もう一息でものにならうと云ふ所なのでね。だが氣持が呑氣になつてしまつたので、今朝、一寸やつて見たが駄目になつてしまつた。

友。その内には又うまくゆくよ。

英次。又こいつが逃げ出してくれるとか。

妻。私はもう逃げはしなくつてよ。いくら逃げてくれとおつしやつても。

英次。だれも逃げてくれなんて云はないよ。

妻。畫が出來ないでもいゝの。

英次。又ちがふ畫が出來るさ。

妻。あなたは私が居ても居ないでも一向平氣だからいやになるわ。

英次。そんなことはないよ。だがお前を座敷に押し込むわけにもゆかないからな。

妻。押し込んで下さればいゝのだわ。私のやうな人間はほつたらかしておくと何するか自分でもわからないわ。

英次。困つた奴だな。自分で自分を制御することはお前には出來ないのだね。

妻。あつと思ふと、もうすべつてゐるのですから罪はないわ。

英次。（怒らずに）馬鹿。

妻。私を座敷牢に押し込んで、御馳走食はしてくださらない。さうすれば私は反つてらくだわ。

英次。それも三日とつゞくまい。

妻。あなたの方がね。あなた酒上らない。

友。僕はのめません。

英次。トランプでもしようか。

友。今日はよさう。もう一時間程するとゆかな

ければならない處があるから。

英次。何處へゆくのだ。

友。山田と約束してあるのだ。

英次。山田つて小說をかく奴か。

友。さうだ。

英次。君はあいつを知つてゐるのか。

友。知つてゐる。

英次。逢つたら敬意を示してくれ、僕はあいつのものをいつか一つよんで感心したことがあるよ。だがあんな處へゆくよりはうちにゐろよ今日はね、僕は何となく愉快なのだ。それに二人切りになるより三人がいゝのだ。トランプやらう。

友。山田と君の兄さんの芝居を見にゆく約束をしたのだ。

英次。芝居にはまだ時間があるよ。山田は僕の兄貴のことを何か云つてゐたか。

友。ほめてゐたよ。あの位あかるい人を見たことはないと云つてゐたよ。

英次。さうか。兄は藝にかけては天才だ。女にかけてはならず者だが。人間と云ふ奴は不思議な同居人を二つ持つてゐるやうなものだね。兄貴の藝は僕は誰にも負けずに讚美するが、兄貴の品性はほめるわけにはゆかない。尤もあゝ女にもてればあゝなるかも知れないがね。兄貴の內の愛すべきものを殺さずに、兄貴の內の憎むべき方面だけを殺すことが出來たなら、僕は兄貴の半分を殺してやるのだがね。

妻。そんな話はおやめなさいよ。

英次。やめよう、やめよう。折角いゝ氣持がこはれて馬鹿氣てゐるからな。だが俺の兄弟程、面白い兄弟はないだらうな。僕は子供の時から兄貴の讚美者だが、いつも兄貴を憎んではゐたやうだ。よさう、よさう。さむけがするよ。

妻。そこの戶が開いてゐるからよ。本當にあなたが身體を大事にしなくつては駄目よ。私はあなたが大事で大事で仕方がないわ。

英次。それも本音でないとは云はないが、次ぎの瞬間には俺が生きてゐなければいゝと思ふのだらう。

妻。あなたの內には意地の恐ろしくいゝ所とわるい所とあるわ。

英次。お前にもさう云ふ所はないかね。お前のことを思ふと、大がいの人間はすてたものではないと思ふよ。

妻。よくつてよ。

英次。わるくつたつて仕方がない。俺はお前が誰よりも可愛いが、誰よりも憎い。

妻。醉つたのぢやないの。

英次。醉ふものか。だがもう酒もなくなつたね。

妻。あんまりのむといけないわ。

英次。だがあと一合位はのんだつていゝだらう。一寸とつて來てくれ。

妻。およしなさい。よした方がよくつてよ。

英次。そんなこと云はずにとつてこいよ。今日は久しぶりだからね。

妻。そんならとつてくるわ。（退場）

英次。どうだい。あいつを見て君は惡人と思ふかね。

友。思はないよ。

英次。善人ぢやないが、惡人ぢやない。僕はあいつを見ると自分が僞善者のやうな氣がすることがある。あいつ位露骨に自分の心のまゝにふるまふ奴はないからね。

友。君は細君をもう少し束縛する方がいゝ。一人で歩かさずに、一緒に出あるくがいゝ。

英次。このセムシぢやね。

友。君位なら別に氣がつく人はないよ。よしあつてもかまはないぢやないか。

英次。そんなことはどうでもいゝ、僕の不名譽にはならない。エソップもセムシだつたさうだね。セムシを僕は恥とは思つてゐないよ。だが見ていゝものぢやないが、しかし僕はあまり出歩くのは嫌ひなのだ。又他人を束縛するのは嫌ひだよ。僕は千代子を妻とはよんでゐるが、妻だとは思つてゐない、友達だと思つてゐる。妻だと思へば腹が立つことも、友達と思へば感謝出來る。僕は自分を一人ものと思つてゐるよ。僕は自分の仕事を持つてゐる人間だからその他のことは問題にしてゐない。

友。それだつて君の細君自身のために君は暴君になる必要がある。あの人は自分で自分を束縛することの出來ない人だ。

英次。他人なら束縛出來ると云ふのかい。

友。たしかに君の細君は君に束縛されたがつてゐる。

英次。それも嘘ぢやあるまい。だが僕があいつを一度も束縛しなかつたと思つてゐるのかい。あいつは束縛されればおとなしくしてゐると思つてゐるのかい。又僕を細君の番人そのものにしたいのかい。僕はもうそんなことはあき〳〵した。來るものは來るがいゝし、去るものは去るがいゝ。

友。それで君は滿足してゐるのかい。

英次。それで滿足しなかつたらどうすればいゝのだ。

友。しかし夫婦つてそんなものぢやないだらう。

英次。人によるよ。一緒にゐてお互に信じあへる夫婦、疑ひたくも疑へない夫婦、たまにははなれてくれるといゝと思つてもいつもくつついてゐる細君をもつ夫。そんなものも世間にはいくらでもあるだらう。しかし僕はそれを羨ましいと許りは思はないよ。どつちもいゝ所と、わるい所とある。僕は他人は他人だと思つてゐるよ。自分のわきに居たくない人間をわきに居させようとは思はない。

友。本當にさう思つたことはないのかい。

英次。君は察しがあまりよくないね。だが僕は自分の細君だつて獨立した一個の人間であることを疑ふことは出來ないよ　ある程度の嫉妬や、束縛や、いたはりあひは必要がないとは云はない。それ等をわるいとは思はないが、しかしお互に生きてゐるのがいやになる程束縛する必要があるとは思はない。お互に嫉妬や、嫉妬されることや、束縛から解放されて、一人の人間の味を嚙みしめるのもわるいとは思はないよ。

友。どつちにころんでもいゝのか。

英次。さうだよ。本當にころがつた者は起き上る時は何か得をしてゐるものだと云ふのが僕の主義で、まちがひがないと思つてゐる。僕は泰平な夫婦生活を讃美するよ。だが特殊な自分の結婚もわるいと許り思つてはゐない。その内に面白味があるよ。歸つて來たかな。ちがふらしい。もう歸つて來さうなものだ。それとも又逃げたかな。

友。逃げても平氣かね。

英次。平氣でなければならないと云ふことはない。平氣でないから何か其處から美しいものが生れると云ふこともあるものだ。他の人が見たら僕程、あまい馬鹿者はないだらうと思ふだらうな。だが僕には僕の生き方がある。逃げたら又あの書がつゞけられる、わるくないなあと思つてゐる。それにしてもおそいな。一寸見てくるよ。

友。酒屋はそんなに近いのか。

英次。すぐその角だよ。十間もあるまい。一寸見てくるよ。

英次。兄貴と角で話してゐたよ。（無理に笑ふ）僕が兄貴の奴、へんに心配してゐるのだよ。僕があいつを殺しはしないかと思つてゐる。馬鹿な奴だよ。兄貴も、あいつには本氣に參つてゐるのかも知れない。馬鹿な奴だ。（無意識に酒をのまうとしてカラなのに氣がつき）早く酒をとゞけさせりやあいゝのにな。自分で持つて歸らなくつたつていゝのに。（間）僕の性質が君にのみこめるかね。淺ましい境遇にゐて、おちつきはらつてゐる氣持がね、さう云つても君は信じまい。一つ三味線でもひいて一つ奧の手でもきかして上げようか。（三味線をとる）何をやらうかね。（何か唄ひかける）

（千代子登場）

英次。お待ち兼ねだ。

千代子。遲くなりました。一寸酒屋の上さんに話しこまれたので。

英次。さうか。それは運よ　あへてよかつたね。

千代子　あの酒屋のお上さんは中々器量よしですね。

英次。さうかね。

千代子。何かやりませうか。

英次。やつてもいゝね。だが酒をのんでからにしよう。

女。僕は今日はこれで失禮するよ。

英次。もう少しゐたまへ。もう十分、いやもう二十分程居たまへ。人間は時々二人切りになると危險な時のあるものだ。僕の氣分がおちつくまでゐたまへ。

千代子。氣持がわるいの。

英次。わるいこともないが、いゝともゆかない。

千代子。それなら酒はおやめになつた方がいゝわ。

英次。ともかくのまう、そして何か靜かな氣持のいゝ唄でもやつて、小野寺君に聞いてもらはう。（酒をのみながら）英雄閑日月ありと云ふが、僕には僕の心の修行がある。靜かに、靜かに、心のどかに、この一日をおくりたいものだ。

（三味線をとりあげ、ひき出す）

三

（夜、英次千代子の姿を鉛筆ですけつちしてゐる。千代子そばで着物をぬつてゐる）

英次。畫をかく呼吸がのみこめて來たやうだ。

千代子。それはよろしいね。

英次。こんな天下泰平な日がつゞくとは思はなかつたよ。

千代子。私もすつかりおちつきましたわ。

英次。あらしが過ぎたのだね。

千代子。本當ね。

英次。もう嵐が來ないといゝ。

千代子。あなたもさう思つていらつしやるの。

英次。思つてゐるよ。そして畫もうまくゆきさうだ。之から畫も賣れ出すかも知れない。

千代子。賣れたら、何か買つて頂戴ね。

英次。買つてやるよ。だがいつのことか。

千代子。ですが、賣れないでも、いゝ畫が出來れば私うれしいのよ。

英次。どうして。

千代子。でも、あなたの御機嫌がよろしいもの。畫が出來損ふとすぐ癇が起りますからね。あなたの癇は本當に閉口よ。

英次。もう、癇なんか起らないよ。俺も少しは利口になつたよ。

千代子。本當に、あなたはこの頃おちついていらつしたわ。

英次。人間は持つてゐるものを一ぺん皆すててしまふと利口になるのだな。自棄を起し切り

に出來ない人間はいろ〳〵の目にあふのも惡いと許りは云へない。

千代子。あなたにとつてはなんでもいゝのね。子供が出來ない、それもいゝだらう。私がゐなくなる、それもいゝだらう。私が歸つてくる、それもいゝだらうでしよ。

英次。さうなればいゝと思つてゐるのだよ。いろいろのことにぶつかるたびに自分の心が研かれてゆけばね。だが俺は癇持だからまだだめだよ。自分でもどうすることも出來ない時がある。

千代子。あの時、あなたは本當に私を殺さうと思つていらつしたの。

英次。かつとした時は何をし出かすか、俺の内には恐ろしい血が流れてゐるのかも知れない。俺の大祖父さんと云ふのは自分の子供があんまり泣くと云つて石の上にたゝきつけて殺したと云ふ噂がある。本當かどうか知らないが、恐ろしい話だ。そしてあとでその子のこと許り云つては泣いてゐたさうだ。實際その子を一番愛してゐたのださうだが、話には少し誇張があると思ふが、俺にもどうかするとその血が流れてはゐないかと思ふと怖くなる。その血と戰ふのが自分の一つの修養のやうな氣がしてゐる。

千代子。氣ちがひの筋なのね。怖いわね。

英次。だから僕の兄は僕を恐れ、僕は兄貴を恐れてゐるのだ。

千代子。なんだか氣味がわるくなりましたわ。

英次。本當は今のはつくり話だよ。そんな奴が先祖にゐはしなかつたかと一寸思つただけだよ。だが氣違ひにどうしてもならないと云ふ人間はないやうに思ふね。たゞ氣違ひになりやすい人間と、なりにくい人間があるだけだね。

千代子。あなたは氣違ひになりやすいの。

英次。俺のやうなのは反つてならないと思ふがどうかね。この前お前が目をさました時、短刀を見てゐたと云ふのは、お前を殺さうと思つてではなかつたが何となく短刀が見たくなつた。俺の内には矢張り武士の血がのこつてゐると見える。

千代子。いやな血がのこつてゐるのね。

英次。血のせゐではないかも知れないよ。誰でも一寸夜中に短刀が見たくなると云ふやうな氣持は持つてゐるものぢやないかね。

千代子。どうですかね。そんなことはないでしよ。

英次。お前は夜中に鏡が見たいと云ふやうなことはないか。

千代子。夜中に鏡を見るのはなんだか怖いわ。

英次。怖いからなほ見たいと云ふやうなことは。

千代子。あなたと話してゐると世の中が何んだか凄くなつてくるわ。

英次。お前は幽靈と云ふものを認めるかね。

千代子。そんなものはないものでしよ。

英次。お前も人殺しはしたことはないと見えるね。

千代子。あなたは人殺ししたことがあるの。

英次。そんなことはないよ。だが人殺しをした人は幽靈の存在を信じるだらうと思ふのだ。殺した人の姿が見えるだらうと思ふのだ。壁を見ても、天井を見ても、窓を見ても、その人の姿がまざ〳〵と見えると思ふのだよ。殺した時の姿がね。

千代子。氣味がわるいわ。

英次。だから人を殺さないものは仕合せだと云ふのだよ。

千代子。死ぬつてどんなものでせうね。

英次。深い眠りだね。さめない。

千代子。それなら惡くないものね。
英次。死の恐怖さへなければね。それに死の苦痛も大變だと思ふね。生命と云ふ奴は中々生きたがるものだから樂には死ねないね。
千代子。首しめられるのは樂ですつてね。
英次。女の肉づきのいゝ手で靜かにしめられるのは樂かもしれないが、息の出來ないのは樂ではあるまい。
千代子。だが私の兄が柔道をやつて、よく喉をしめられたさうですが、なれるといゝ氣持になると云つてゐましたよ。
英次。お前の兄は嘘つきぢやないかね。
千代子。だつてそれは本當だと思ふわ。
英次。嘘ぢやないかも知れないが、本當とは思へない。呼吸が出來ないのが氣持がいゝとは思へない。鷄の首をしめるのだつていゝものぢやない。
千代子。見たことあつて。
英次。見たことはないがね。
千代子。あなたの話は、皆想像ね。
英次。だが、まちがつてゐるとは思はない。何時かな。
千代子。八時よ。
英次。まだ早いな。だが、誰かくると厄介だから、今日は早くねるかな。
千代子。えゝ、寢ませう。
英次。お前のうしろに誰か居るよ。
千代子。あつ。
英次。あはゝゝ。
千代子。いやな方。びつくりしたわ。
英次。あはゝゝゝ。
千代子。あなたの後ろにだつてゐるわ。
英次。影法師だらう。
千代子。女らしくつてよ。
英次。セムシの女かね。
千代子。あなたは又そんなことをおつしやる。
英次。セムシと云ふ言葉をきくだけでもいやかね。
千代子。あなたのそんなことを云ふ氣持がいやなのですよ。
英次。いやかね、この姿の方は嫌ひぢやないかね。
千代子。わざとそんな風をしなくつたつていゝわ。
英次。したつていゝだらう。俺にはお前のいやがるのが面白いのだよ。
千代子。いやなくせね。
英次。毒蛇の感じもわるくないね。
千代子。私大嫌ひよ。あなたのその趣味は。
英次。さうかね。お前に似合はないね。俺は今晩、お前を殺してやる。
千代子。そんな冗談は云はないものですよ。
英次。安心するがいゝ。殺すと云ふ時は殺さないからね。
千代子。殺さないと云ふ時は殺すの。
英次。それはどうかわからないよ。
千代子。あなたは私をおどかすのね。
英次。どうかね。明日の朝がくれば許してやるよ。
千代子。あなたのその目が私は怖いわ。
英次。俺の背中が怖いと云ふ方が本當だらう。
千代子。もうそんな恰好するのはいやよ。
英次。あはゝ。お前の顔には死相があらはれてゐるよ。
千代子。あなたの顔には氣違ひ相があらはれてゐるわ。冗談はよしませうね。冗談から駒が出ると大へんですからね。
英次。さあおいで、今日はお前と俺の生死の戰ひだ。
千代子。ゆくわ。死んだつていゝわ。
（千代子、英次にとびかゝらうとする）

——幕——

第二幕

一

（小野寺の室、西洋間。小野寺、何かかきものをしてゐる。細君芳子登場。花をもつて來ていける）

小野寺。いゝ花があつたね。

芳子。あんまり綺麗だつたので買つて來ました。

小野寺。本當に美しいね。矢張り秋の花は何處か秋らしいね。

芳子。今日はいゝ天氣ね。何處か散歩なさらない。

小野寺。行かうかね。

芳子。私をつれていつて下さる。

小野寺。それはつれてゆくよ。

芳子。うれしいわ。何處へゆきませう。

小野寺。何處へ行かう。

芳子。何處へでもいゝわ。あなたとなら。あなたは。

小野寺。俺も何處へでもいゝよ。お前となら。

芳子。まあ。

小野寺。こんな天氣なら何處へ行つたつて氣持がいゝ。郊外に出さへすれば。

芳子。本當ね。そんなら私、着物着かへてくるわ。

小野寺。そのまゝでいゝよ。

芳子。羽織だけかへてくるわ。（退場）

（まもなく芳子登場）

芳子。それなら出かけませう。誰かくると出かけられなくなると困りますから。

小野寺。それなら出かけよう。

女中。郵便が參りました。

（小野寺うけとる、女中退場）

芳子。何處から。

小野寺。野中からだ。

芳子。なんて。

小野寺。こないだいつた禮と、いたつて無事だから安心してくれ、繪もかけるから安心してくれろと云つて來た。

芳子。それはよかつたわね。野中さん夫婦は無事にをさまるでせうか。

小野寺。それはわからないね。

芳子。私、野中さん氣味がわるいわ。あなたの親友の惡口を云つてはすみませんが。

小野寺。氣味のわるくないこともないな。あいつは隨分いゝ所をもつた男だが、少し趣味が病的だよ。なんだか不安心な所がある。あまり思ひつめる質なのだね。

芳子。あゝ云ふ人は呑氣になれないものですかね。

小野寺。呑氣に酒のんだり、三味線をひいてゐる時でも、何處か不氣味だね。

芳子。それではゆきませう。

小野寺。行かう。だが一寸野中にハガキをかいてからにしよう。

芳子。どなたもその間にいらつしやらなければよろしいけど。

小野寺。來たつて出かける所だと云つて斷ればいゝ。

（女中登場）

女中。野中さんと云ふ方がいらつしやいまして一寸おさしつかへなかつたら話したいとおつしやいました。

小野寺。野中が來たのか。

女中。いつもの野中さんとはちがひます。大へん立派な方です。

小野寺。それなら野中の兄さんが來たのだらう。お通ししてくれ。

女中。はい。（退場）

芳子。お通しするの。

小野寺。野中の兄さんぢや仕方がない。

芳子。私大嫌ひよ。色魔なんか通さなければいゝのに。

小野寺。何にわるい奴ぢやないよ。

芳子。それだつて私大きらひだわ。

小野寺。嫌ひで幸ひだよ。

（二人笑ふ）

芳子。まあひどい。（退場）

（信一、女中につれられ登場。女中退場）

信一。初めてお目にかゝります。いつも弟が世話になりまして。

小野寺。いゝえ、僕の方こそ。どうぞおかけ下さい。

信一。僕は一寸急ぎますから、用事だけ短刀直入に云ひますが、失禮な所や、聞き苦しい所がありましたら、許して下さい。

小野寺。どうぞ遠慮なく。

信一。實は弟のことですがね。君も御存知の通りの人間で、僕は弟を誰にもまけずに信用し、又尊敬すべき點は尊敬し、望みをおくべき所には望みをおいてゐるのですが。

小野寺。本當に英次さんはすぐれた才をもつた方として、僕達は尊敬してゐるのです。

信一。ありがたう。兄としてあゝ云ふ弟をもつてゐることは一方傲りにしてゐるのです。

小野寺。英次さんもあなたのことをいつも自慢していらつしやいます。

信一。恥かしい話です。僕は弟に天才的な所のあるのを認めて、それをどうかして生かしてやりたく思つてゐるのです。しかし御存知のやうにあいつは變りもので、一方非常にあかるい、すなほな氣質を持つてはゐるのですが、その反對の性質も強くもつてゐるのです。その性質がこの頃、頭をもたげて來てゐるやうに思ふのですが、どんなものでせうかね。

小野寺。さう思へばさう思へないこともないと思ひますが、今もハガキを戴きましたが大へん氣持がおちついて仕事も出來ると書いてありましたから。

信一。さうですか。それを伺へば安心ですが僕は弟の妻からへんな手紙を出しなに受けとつたのです。それをうけとつたので實は急にあなたの處に伺ふことにしたのですが、弟の妻から是非あなたにあつて相談してくれとかいてありましたから。

小野寺。さう云つては失禮ですが、千代子さんのおつしやることはそのまゝ信じていゝでせうか。

信一。あれはたしかに病的な所があるかも知れませんが、しかし弟の妻の云ふことも滿更うそだと許りは思はないのです。弟は妻と僕との間を疑つてゐるやうですが、又疑はれても仕方がないと云へば云へないこともないのですが、弟の思つてゐる程深入りしてゐるわけでもないのです。尤もあの細君は僕に初め近づいて來、僕を愛したために弟も愛したと云つてもいゝのかも知れません。僕は弟のことをあの人にほめて話しましたからね。今になつて見るとそれがよくなかつたのですね。あの人と弟の性質がどんなにこんがらかりあふか、僕は考へても見なかつたのですし、考へようとも思はなかつたのです。第一弟の妻になるなぞとも考へてゐなかつたのです。しかし二人が夢中に結婚したがつた時、僕は弟のためによろこんだものですがね。まあそんな話はすんだ話ですが。弟の妻の手紙には、どうも近い内に殺されさうな氣がして仕方がないと云ふのです。そして君と僕とで、どうか助けてほしいと云ふのです。自分が死れば弟だつて一生を棒にふる

にちがひないと云ふ意味のことがかいてありました。自分も死にたくはないが、逃げれば殺されさうだし、一緒にゐても殺されさうだと云ふのです。それに逃げることも出來ず、一緒にもゐられない、どうしていゝかわからないともかいてありました。

小野寺。それは嘘ではないかも知れません。こなひだあつた時はさとつたやうなことを云つてゐましたがね。坂をころがりおちたがつてゐる大石を藁繩でやつととめてゐると云ふ感じが何處かにしてゐました。

信一。どうしたらいゝかと道々考へたのですがね。轉地でもしたらどうかと思ふのですがね。あの家はよくないと思ふのですよ。

小野寺。たしかにあの家はよくありませんね。

信一。それに私の考へでは、弟の畫が少し賣れたりしだすと、又氣分がかはるかと思ふのですがね。金は僕が出してもいゝのですが、君や僕が買はさしたとしたら反つて侮辱されたと思ふでせうからね。あれは同情されることを實に嫌つてゐますから。

小野寺。本當にあの意こ地な所が英次さんのよくないくせですね。

信一。あれがあるので生きてもゆけるし、仕事も出來るのでせうが、困つたものですね。

小野寺。轉地すると云へば何處ですかね。

信一。心あたりはないのですが、あかるい、眼界の廣々した、つまらないことにこせ／＼してゐられないやうな、そして誰にもきがねせずに、二人で日なたぼつこでも出來るやうな。

小野寺。さうですね。そしたらいゝかも知れませんね。

信一。葉山あたりはどうですかね。

小野寺。いゝでせう。

信一。今度あつたらおすゝめ下さい。

小野寺。おすゝめしませう。しかしその前にいい家があるかどうか、さがして見ませう。

信一。お氣の毒ですが、どうぞよろしく。私暇な身體ですと家位さがしにゆけるのですが、一寸今、急がしい最中で。

小野寺。こなひだ芝居、拜見に上つて感心しました。

信一。いやどうも。

小野寺。畫を買ふ方は僕の友達の山田次郎が買ふかも知れません。

信一。あの方、御存知なのですか。

小野寺。先日山田と芝居見物に行つたのでした。山田もほめてゐました。

信一。あの方にほめられれば光榮です。いつかあの方のものをやりたく思つてゐるのですが。お逢ひでしたらよろしく。

小野寺。山田も、あなたにやつて頂ければよろこぶでせう。

信一。弟のこと、何分よろしく願ひます。誠に申し兼ねますが早い程、結構なのです。もしものことがあつてはとり返しがつきませんから。

小野寺。今日之から葉山へ行つて見てもよろしい。

信一。それではあまり……

小野寺。いや別に用はないのですから。

信一。本當に感謝します、弟夫婦がおちついてくれないと僕もおちつけないのです。弟の妻の手紙を持つてゐますから、一度よんで戴きますか。

小野寺。かまひませんか。

信一。あなたを僕は絶對に信用しますから。

（小野寺よむ）

小野寺。之は少しひどすぎますね。英次君も。

信一。火と油と一緒になつたやうなものですからね。へんに執着する質が二人よつたのです

からね。それに私の家には氣狂ひすぢがないことはないのです。この三代程に出ませんでしたが。
小野寺。英次さんはあんまり優しすぎるのですね。吞氣になれないのですね。
信一。困つたものです。それは弟の奴の云ふことにも誇張はあると思ひますが夜なかに短刀を研がれたりしたら、一寸ねむれませんからね。
小野寺。あんまりいゝ癖ぢやありませんね。今度短刀は僕がもらつてくることにしませう。
信一。さうして下されば本當に僕も安心します。
小野寺。それでは之からすぐともかく葉山へ行つて見ます。
信一。本當になんとも御禮の申しやうがありません。それでは之で失禮いたします。
小野寺。いづれ二三日の内に上つてお話します。うまくゆくことをのぞんでゐます。
信一。萬事よろしく願ひます。さやうなら。
小野寺。さよなら
　二人退場、芳子登場、かたづける。まもなく小野寺登場。
小野寺。之から葉山にゆくことになつたよ

芳子。どうして。
小野寺。野中が今の家にゐては碌なことがないだらうと云ふのでね。野中のために家をさがしてやらうと思つてゐるのだ。
芳子。まあ、それでは散歩はやめになつたのねつまらないわ。
小野寺。そのかはり葉山へつれていつてやるよ。
芳子。葉山へつれていつて下さる、本當？
小野寺。久しぶりに海岸を歩かう。そして今夜は月がいゝだらうから一緒に海岸へ出て月を見よう。
芳子。それなら本當にうれしいわ。久しぶりに海を見ることが出來るのね。野中さん夫婦のなかは面白くないの。
小野寺。まあ、大したことはないと思ふが細君が殺されさうに思ふのださうだよ
芳子。あの方は少しへんね。
小野寺。だが野中も一寸氣味のわるい所があるよ。
芳子。一寸すごいのね。あんな方は執念深いでせうね
小野寺。よくはわからないがね。あつさりしてはゐるとは云へまい。

芳子。野中さん兄弟はまるで反對ね。
小野寺。だがあれで何處か似てゐるよ。野中がセムシでなかつたら。
（女中登場）
女中。野中さん御夫婦がいらつしやいました。
小野寺。お通ししてくれ。
（女中退場）
小野寺。うはさをしてゐると影と云ふが、何んだか氣味がわるいね。野中が兄さんと逢はなければよかつたが。
（小野寺夫婦迎ひにゆき、二人をつれてくる）
小野寺。どうかおかけなさい。
英次。それなら失禮して腰かけたらいゝだらう。
芳子。どうぞおかけなすつて。
千代子。ありがたう。
（四人腰かける）
英次。今、兄が來たらう。
千代子。謔ですわね。
英次。合圖はよせ。兄は君の處へよくくるのかい。
千代子。兄によく似た人が角をまがる後ろ姿を見て主人は兄だと云ふのですが、私はそんな

はずはないと云つたのです。

英次。そんな云ひわけはしないがいゝよ。僕は兄と小野寺と仲よくなることを望んでゐるのだ。兄が君の處へ來た用がなんだかも僕は大がいわかつてゐる。だから遠慮なく云つてくれ給へ。兄は何しに來たのだか。

小野寺。君のことを心配して來られたのだ。

英次。僕のことかい。まあそんなことはどつちでもいゝ。どんなことを心配してゐたのだ。

小野寺。君の兄さんは君がもつと明るい、氣持のいゝ處に住むことを望んでゐられたよ。

英次。兄らしい考へだね。そして君は贊成したのだらう。

小野寺。贊成したよ。

英次。(冗談らしく、しかし皮肉に)それで僕達は何處ですめばいゝと云ふことになつたのだ。

小野寺。葉山から三浦の方にかけて何處かいゝ處はないかと思つたのだよ。

英次。志はうれしいが、僕は當分あの家からどかないつもりだよ。僕は引越は考へただけでも閉口だ。それに淋しい處へ行つていゝかどうか。

小野寺。しかし東京をはなれるのも惡くはないと思ふがね。

英次。それなら君達こそ東京をはなれたらいゝぢやないか。僕は東京をはなれたくはないのだ。また僕は兄にそんなことまで心配してもらひたくないのだ。僕は今の家で滿足してゐるし、妻だつてあの家は氣に入つてゐるわけだ。さうだらう。

千代子。あまり氣に入つてもゐませんわ。

英次。葉山の方がいゝのかい。近所に家もなく泣いたり、わめいたりしても聞き手のない處がいゝのかい。

千代子。ですけど、明るい氣持になれますわ。

英次。僕は何と云つたつてゆきたくない。お前一人でゆくなら勝手だが。

千代子。私一人家なんかもてませんわ。

英次。お前は持てるよ。

千代子。だつて一人では怖いわ。

英次。だが俺と一緒にゐるよりは怖かないだらう。千代子は僕を人殺しのやうに思つてゐるのだからな。

千代子。まさか。

小野寺。君のそんな考へ方はつまらないと思ふね。

英次。僕だつていゝとは思つてゐないが、しかし僕は當分あの家から去りたくはない。

千代子。こなひだ引越しにいゝと云つていらしつたわ。

英次。兄がどうしてそのことを知つたのだ。(急に何か思ひついたやうにおとなしく)お前が兄に手紙を出したのだね。

千代子。出しはしませんわ。

英次。夫婦なかに祕密があるのを君の前で知らせるのは不愉快だから、そんな話はよさう。君だから別に知らせたつて恥とは思つてゐないがね。僕は他人の祕密にはふれたくはないし、他人に謎をつかせるやうに持ちかける自分の趣味を、いゝものとは思つてゐないのだが、白々しくやられるとつい皮肉に出たくなるのだよ。謹まうとは思つてゐるが。

小野寺。引越したいと云ふ話があるとは君の兄さんは云つてゐなかつたよ。

英次。君も謎つき仲間かね。君の方が僕よりくはしいだらう。細君の心理を夫より他人の方が知つてゐると云ふことに平氣になりたいと僕は思つてゐるのだよ。

小野寺。君の考へ方は、君が普通の人より神經が發達してゐるからと思ふが、あまりいゝと

は思はない。もう少し呑氣になれないかね。

英次。僕もなりたいと思つてゐるのだよ。[illegible]の眞似はいやだからね。君は境遇がいゝが、昔からその點君に感心してゐるよ。君は氣がついても氣がつかない顏をしてゐる。だから馬鹿な人間は君を馬鹿にして與しやすく思つてゐるが、しかし君をだませる人間は少ないことを知らない。お世辭つかはれてよろこんだ顏して、相手の腹をのみこんですまして馬鹿にされてゐる點に感心してゐるが、僕だつて大がいのことには平氣でゐられるが夫婦となると、赤の他人のあつまりと思つても、つい要求が過大になるからね。君達の前だから、かくしてもおひつかないから云ふが、僕は今後君の忠告を入れて何處へ出かけるのもなるべく二人で一緒に出かけることにしたよ。疑惑の入る餘地をつくつて、くるしむのは馬鹿氣てゐるからね。

小野寺。僕は海岸へゆくのはわるくはないと思ふがな。

英次。僕は浪の音がひどいとねられない質なのだ。

小野寺。さうかね、僕は浪の音をきくと氣持がいゝがね。それなら山へ行つたらどうだ。

英次。僕は淋しい處は嫌ひなのだ。それに引越は厄介だよ。引越好きの人の氣持は僕にはわからない。

小野寺。さうかね。尤も僕でも一寸は何處かへ行かうとは思ふが、この家から出たいとは思はないから。

英次。兄はあの家にはいやな聯想をもつてゐるらしい。あの僕の床下から血にそんだ千代子の死骸が出て來た夢を見たのださうだ。

千代子。いやよ。そんな話。

英次。(冗談のやうに)あんまりいゝ夢ぢやないが。そんなことが起らなければ僕もいゝと思つてゐるよ。

小野寺。そんな冗談はよくないね。

芳子。冗談にもそんなことをおつしやるのはよくないわ。

千代子。主人はあんなことを云つて人をおどかすのがすきなのですよ。主人は今度兄をよんでこなひだ買つたトランクを室において、そのトランクに兄をこしかけさして、そのトランクのなかには私の死骸が入つてゐるやうな暗示を與へておいて、兄をおどかすことなんか想像してよろこんでゐるのですよ。

芳子。まあいやな方ね。

千代子。私はなんだかそんなことが本當に行はれてそして私の死骸が本當にトランクのなかに入れられてゐるやうな氣がすることがあるのですよ。

芳子。まあ。

小野寺。それは本當によくない趣味だよ。

英次。僕のなかには、兄に似て役者の血が流れてゐるのかも知れない。

小野寺。活動にでもやつたら面白いかも知れないが。

英次。活動は僕は見たことがないよ。だがあの支那カバンに死骸が事實入つてゐないで、あのなかに酒や御馳走でも入つてゐたら、一寸兄をおどかして兄がどんな表情をするか見るのもわるくないね。兄にとつたつて芝居の時の參考にもなるからね。

小野寺。狂言としたら面白いかも知れない。

英次。君も贊成するなら、一つ端役をつとめないか。

小野寺。本當にやる氣なら是非やめてほしいね。

英次。まだ本式にやつて見ようとは思はないがね。千代子、芳子さんにお願ひして買ひ物に行くなら一緒にいつて戴いたらいゝだらう。

芳子。何處へいらつしやるの。御一緒に參りませう。

千代子。それでは失禮ですけれど、おさしつかへがありませんでしたら、お伴さしていたゞきませう。

小野寺。天氣がいゝからどこへでも行つて來たらいゝだらう。そして歸りに果實のいゝのがあつたら買つて來てもらはう。

千代子。それでは失禮いたします。

芳子。一寸行つて參ります。

英次。どうもありがたう。

（千代子、芳子退場）

英次。僕はね、千代子がこの頃へんに可愛くなつて來た。僕は今迄、あいつを愛することを恐れてゐた。愛すれば逃げられた時に困るからね。逃げられても困らない程度にとめておかうと思つた。しかしこの二三日の内に不意にあいつをもうどうしても失ひたくなく思ふやうになつてしまつた。僕は困つてゐるのだ。

小野寺。困ることはないぢやないか。

英次。いや、妻も下らないと思つてゐる間はいゝ、かう氣にならなかつたが、妻を愛すればいゝ愛するほどキズが氣になり出した。僕はキズがあるから自分のものになつたと云ふことは百も承知しながら、そのキズがます／＼自分をくるしめるのだ。そして僕はこの頃、今迄よりも兄が憎く、その上に兄を恐れるやうになつた。兄はあいつのことを忘れてはゐないのだ。あいつも亦兄を愛してゐるのだ。

小野寺。そんなことはないと思ふね。

英次。いや、たしかにさうなのだ。僕は二人の愛をうたがへないのだ。二人は僕にせかれるので、ます／＼愛してゆくのだ。そして妻も兄もそれを恐れながら、どうすることも出來ないのだ。妻は僕に殺されることを恐れてゐるのは、僕から逃げよう、逃げようと思つてゐるからに過ぎないのだ。兄はまたあいつの死ぬこと許り心配して、どんなことでもして、あいつを生かしたがつてゐる。その氣持が僕にわかりすぎるから、恐ろしいのだ。僕はあいつを失つていゝのなら、何にも問題は起らない。僕は斷じてあいつを失ひたくない。僕はこの頃すつかりおちつかなくなつた。夜もあいつの逃け出す夢を見てびつくりして目をさますことが何度あるか知れない。その時の氣持のわるさと云つたらない。僕はとう／＼地獄の人間になつてしまつた。一人ですがすがしくくらしたいと思つても、その力がなく、嫉妬と憎惡が時々僕の胸をはりさくやうに苦しめる。そしてどうすることも出來ないのだ。僕はおちつきがなく、とう／＼あいつの看守人にまで墮落してどうすることも出來なくなつた。僕は之にかつ方法はたつた二つ切りない。あいつを殺すか、兄を殺すか、自分を殺すかだ。僕はこの三つの内どれを選ぶかね。僕が死ぬのが本當かも知れないが、僕が死んだら誰が僕の仕事をする。僕は自分の仕事のために死ねない。兄を殺すことも考へるが、下手人が僕だと云ふことはすぐわかるだらう。兄の行方がわからないでは誰もすませないからね。旅行してゐると云つてごまかすわけにはゆかない。僕は兄を殺して一生を棒にふる氣はない。それならあいつを殺すより他仕方がないことになる。だがあいつを失はずにあいつを殺すことが出來ない。そしてあいつなしには僕は生きられなくなつてゐる。僕はどうしたらいゝか見當がつかないのだ。君にも見當がつくまいな。

小野寺。旅行したらどうだ、二人で。

英次。同じことだよ。あいつが逃げることを信じてゐる間は、いつかあいつは逃げる。それ

はまちがひのない事實だ。僕が殺してしまはない限りはね。僕はあいつを愛すれば愛する程あいつを信用することが出來ないのだ。この氣持は家庭幸福な、貞淑な妻をもつ君にはわかるまい。いくら小説家でもね。僕は一瞬間でもあいつから目をはなすことが出來なくなつた。少しの疑惑も僕は入る餘地をつくりたくない。しかしあいつに嫌はれたくもないから、手紙をかくぐらゐの時間はぬすまれたかも知れない。あいつはすばしつこいのだから。君は辯じて見とぐるになつては困る。君だけは僕は信じてゐるのだからね。僕は疑惑を一番恐れる。疑惑は魔物だからね。正體をつかめない處にはいたる處に姿をあらはす奴だからね。

（芳子、千代子登場）

芳子。唯今。

英次。どうもありがたう。買ひものはすんだかね。

千代子。すみました。

英次。それなら失禮しようかね。

千代子。えゝ。

芳子。まあいゝぢやありませんか。

英次。之から又時々二人でよせて戴きます。

芳子。どうぞ、又いらつして下さい。

千代子。ありがたう御座います。

英次。それぢや失敬する。

小野寺。さうかい。

（二人あいさつ、退場。まもなく小野寺夫婦登場）

小野寺。本當に困つたものだな。

芳子。千代子さんていゝ方ね。

小野寺。中々いゝ人だね。だが何處か運のわるさうな所があるね。

芳子。隨分よわつていらつして、すぐ涙ぐんでいらつして困りましたわ。

小野寺。どうかしたいな。しかし他人の夫婦の間のことは手の出しやうがないね。

芳子。だまつて見てゐるより仕方がないわね。

小野寺。お前はどう思ふ。野中が細君を殺すか、殺さないか。

芳子。それはわかりませんね。

小野寺。殺される前に逃げ出すか。逃げ出す前に殺されるか。俺にもわからない。

芳子。平和にをさまるわけにはゆかないのですかね。お二人ともいゝ方ぢやありませんか。

小野寺。二人ともわるい奴ぢやないが、一寸困るね。あゝ執着してはね。氣がめいつてしまつた。散歩でもしよう。

芳子。果實を買つて歸つて來ましたわ。

小野寺。それはすつかり忘れてゐた。歸つてから食ふことにしよう。（退場しようとする）

――幕――

第三幕

一

（英次の室。英次書をかいてゐる。千代子小説を讀んでゐたが、不意に泣く）

英次。馬鹿。小説をよんでそんな大きな聲出して泣く奴があるか。

千代子。だつて悲しいのですもの。

英次。身につまされたのだらう。

千代子。さうよ。身につまされましたの。

英次。だから小説なんかよむなと云ふのだ。

千代子。小説でもよまなければなほ淋しくなりますわ。

英次。何か働くといゝのだ。

千代子。女中もおかずに働いてゐるぢやありませんか。この上働いたつて、金が出來るわけ

でもありませんし、さきにたのしみがあるわけでもありませんものね。

英次。お前は子供が出來ないと云ふのは本當かね。

千代子。醫者はさう云ひました。子宮がどうとかしてゐるって。子供が出來ない方が仕合せだと思ってゐますわ。

英次。なぜだ。

千代子。子供がこの上出來たら私の身體がつゞきませんわ。

英次。お前は死にたがってゐるのぢやないかね。

千代子。あなたは私が死ぬ方がいゝのでしよ。

英次。俺の手から逃げられるよりはね。

千代子。私だって今のやうな生活を一生つゞける位なら死んだ方がよろしいわ。

英次。今に俺の畫が賣れるやうになる。一つ二三百圓にね。

千代子。一つ十圓にだって賣れる時は來ないと私は覺悟をもうきめてゐますから、そんなことをおつしやつたつて信じません。

英次。まあ見てゐるがいゝ。

千代子。それにいくら金持になつたつて、私はこんな生活はいやです。

英次。それならどうしようと云ふのだ。

千代子。ゆきたい處にもゆけないやうな。

英次。お前が信じられないやうなことをするからさ。

千代子。私はもうあなたの顔や姿を見ても胸がわるくなりますわ。

英次。とう〳〵本音をはいたね。

千代子。もうあなたなんか怖かないのですもの。私は死んだ方がいゝのです。こんないゝ天氣にそとへも出られないでこんな處にとぢこもってゐる位なら。

英次。お前は俺が早く死んでくれればいゝと思ってゐるのだらう。

千代子。まあさうね。私は自由にとび歩きたいのですよ。あなたが自由さへ下されば、私はあなたの處へ歸ってくるにきまってゐますわ。ですがあなたのやうに私を殺すと云っておどかして私の自由をすっかり奪はれてしまへば私だっていつかとび出して見せると腹の底で思はないわけにはゆきませんわ。

英次。何とでも云ふがいゝよ。蛇が見込んだ鼠がどんな泣き聲を出したって逃がしはしないぞ。

千代子。あなたは本當にひどい方ですね。

英次。どっちがひどいのだ。

千代子。それは私がわるかったかも知れません。だが今はあなたの方がわるいのです。ずっとずっとわるいのです。私はあなたを憎悪し切ってゐます。人を束縛するにも程があります。

英次。俺が好んでお前を束縛してゐると思ってゐるのか。俺の苦しい氣持はお前だって知ってゐるはずだ。

千代子。それを知ってゐるので今まで我慢して來たのです。

英次。もう我慢出來ないと云ふのか。

千代子。私だって生きなければなりません。

英次。俺を殺してもか。

千代子。あなたは死ぬやうな方ぢやない。私を殺したってあなたは死ぬやうな方ぢやない。あなたは心中なんか出來ない方です。私を殺すことは出來[illegible]ね。私の死ぬのを笑って見ることは出來てもね。

英次。それはさうかも知れない。俺は今死んでは俺の仕事がものになることを誰にも示すことが出來ないからね。俺の仕事が後世にのこしても心ある人には笑はれないだけにはしておきたいからな。

千代子。あなたは私を殺しても書がかければいいのでせう。あなたはさう云ふ方です。

英次。それはあたりまへのことだ。

千代子。なにがあたりまへです。くやしい。

英次。泣けるだけ泣け、誰が同情してやるものか。

千代子。あなたに同情なんかしてもらひたくありません。私はもうあなたを私の夫だとは思つてゐません。あなたは暴君です。恐ろしい暴君です。

英次。小説にそんなことでもかいてあるのか。

千代子。小説がなんです。私は出てゆきますから。

英次。出る勇氣があるなら出て見ろ。

千代子。出ますとも。

英次。もう一へん云つて見ろ。

千代子。何度でも云ひます。出ますとも。

英次。よく云つたな。

（英次、千代子にとびかゝらうとする。小野寺登場）

英次。よく來たね。今（苦笑して）喧嘩してゐた所だよ。誰かくればいゝがと思つてゐた所だよ。

小野寺。夫婦喧嘩は犬も喰はないと云ふが、僕も喰ひたくないよ。

英次。まあいゝよ。あんまり人を馬鹿にするから。

千代子。小野寺さん。きいて下さい。夫は私を朝から晩まで看視して、そして私に少しの自由も與へてくれないのです。夫にそんなことをする權利があるものなのですかね。妻の生きるよろこびを全部奪つてしまふやうな、そして自殺しないではゐられないやうな目にあはせるやうな。

英次。俺はお前をよろこばしたくどんなに思つてゐるか、お前は知つてゐるはずぢやないか。君だつて知つてゐてくれるね。

小野寺。知つてゐる。

英次。それなのに、こいつは、こいつは僕を呪つてゐるのだ。そして僕と一緒にゐる位なら死んだ方がいゝと云ふのだ。夫にとつてこんな侮辱があるだらうか。（泣く）

千代子。私だつてどんなにあなたを愛さうとしたでせう。だが私にはその力はないのです。あなたの要求が無理すぎるのです。

英次。それなら出てゆけ。

千代子。出てゆきますとも。

小野寺。奥さん、そんな馬鹿なことは云ふものぢやありません。

千代子。それだつて出てゆけと云ふのですもの。私だつてこゝで死ぬのはいやです。

英次。僕だつて男だ。出てゆけ。

小野寺。君もそんな馬鹿なことを云ふものぢやない。千代子さんにゆくさきのないことは君だつて知つてゐるぢやないか。

英次。ゆくさきはいくらだつてある。もうゆくさきが出來てゐるから、俺に喧嘩をふつかけたのだよ。

千代子。そんなことはありません。私はゆくさきなんかなくたつていゝのです。

英次。ゆくさきの心あたりがなくたつてお前は出かけるかい。

千代子。あなただつて、私にゆくさきがあつたら出てゆけとはおつしやらないでせう。

（二人顔を見合せて苦笑する）

小野寺。だから夫婦喧嘩は犬も喰はないと云ふのだよ。よかつた。よかつた。どつちがわるいのか知らないが、兩方から折れるのだね。

英次。誰が折れるものか。

千代子。私だつて折れはしません。

小野寺。あはゝゝゝ。面白い。もつと喧嘩したらいゝだらう。

英次。こんな餘計なじやま者が入つたから、僕は折れてもいゝから、お茶でも入れておいで。

千代子。はい。

英次。一昨晩菊を買つて來たのを一つ見ようか。

小野寺。あゝ。

（二人退場）

千代子。（獨白）あゝゝ。もう少しの所でのがれられる所を私はまたくもの巣にかゝつてしまつた。

――幕――

二

（同じ室、數日後の午後千代子一人で掃除してゐる。英次入つてくる）

千代子。どうでした。

英次。いやすばらしいものがあつたよ。この頃は畫かきになつたことが時々心細くなつたがいゝものを見ると矢張り畫かきの仕事程たのしい、立派な仕事はないと思ふね。僕は今日程、たのしく畫を見たことはこの頃までなかつた。支那には實にすぐれた畫家がゐると思ふが、日本だつて中々馬鹿に出來ない、今日二つ見た雪舟なぞはさすがにすぐれたものだつた。雪舟でもあんないゝ畫を見たのは初めてだつた。金があつたら買ひたかつた。あいつを買つてかけておいたら隨分仕事に刺戟が出來ると思つた。兄貴が東京にゐれば買ふことをすゝめるのだがな。北海道ぢや仕方がない。畫かきはその人の本當の價値がすぐ世界的にわかるし、後の人にもわかつて、少しのいつはりもゆるさないから氣持がいゝ。畫は言葉とちがつて譃がつけないから氣持がいい。留守に誰も來なかつたか。

千代子。だれもいらつしやいません。

英次。俺は立派な畫かきになりたい。山がかきたくなつた。久しぶりに旅行して見たいな。金はいくらある。

千代子。三十圓程、ためてあります。

英次。感心だな。それとも逃げる用意かね。

千代子。もうあきらめましたわ。逃げてゆく處もありませんもの。

英次。その三十圓をもらつてもいゝかね。

千代子。えゝ。

英次。それなら久しぶりで旅行して、山でもかきにゆくかな。

千代子。その方がおよろしいわ。身體のためにも。

英次。留守はどうする。

千代子。弟に來てもらひませう。

英次。それはいゝだらう。それなら明日出かけるよ。

千代子。急ね。

英次。善は急げと云ふからね。之から一寸小野寺の處へ行つてくるよ。そしてあいつに俺の元氣な所を見せて、よろこばしてくる。

千代子。小野寺さん御安心なさるでせう。私も小野寺さんの處に御一緒に行つていけなくつて。

英次。行かう。行かう。

千代子。えゝ。

英次。俺はさう柄にないことは考へずに、一心に畫をかいてゆきたくなつた。

千代子。あなたは本當に立派な畫家になるわ。

英次。大へんおだてるね。

千代子。媚びるやうに―だつて何となくそんな氣がするのですよ。

（二人退場）

――幕――

三

（同、信一と千代子話してゐる）

信一。英次からたよりはまだありませんか。

千代子。ありません。

信一。どうしてゐるのでせう。

千代子。いろ〳〵考へてゐるのだと思ひます。私と本當に別れたがつてもをりました。御仕事に夢中になつていらつしやるのかも知れません。

信一。それでは又來ます。

千代子。まだいゝぢやありませんか。

信一。僕はこの室であなたと二人切りでゐるのはおちつかないのです。英次がいつ歸つてくるかわかりませんから。

千代子。大丈夫よ。主人は本當は病氣してゐるのですから。

信一。病氣ですか。それであなたは見舞にゆかないのですか。

千代子。ゆきたくも金がありませんから。

信一。金ならかしますよ。

千代子。本當は私も病人なのですよ。明後日まで、あなたが東京にいらつしやる間。

信一。それはよくありませんね。

千代子　それだつて仕方がありませんわ。尤もあなたが私にどうしても主人の所へゆけとおつしやれば、私、死んでもゆきますけど。私だつて生きてゐるたのしみが少しはなくつては。私はもう主人のそばにゐるのにはもう本當に閉口してゐますの。さう思ふのは惡いと思ふのですが、愛さうとすればする程、嫌氣がさして來ますの。どうしたつてもう辛抱は出來ませんの。ですが何處もゆく處はありませんものね。それに殺し兼ねない樣子を見せるのですから。あなたの兄弟でゐながら、あなたとまるでちがつて私に執着し切つて下さるので、私はありがたいとは思ふのですが。

信一。僕だつてあなたを愛してゐなかつたらこんなに苦勞はしませんよ。今度の旅興行は隨分あたつて、次ぎ次ぎと申し込みがあつたのですが、あなたのことが氣になつて、やつと六日の暇をつくつて歸つて來たのです。之から又青森の方へ出直さなければならないので、皆私の歸るといふのに反對だつたのですが、私はそんなことはきくわけにはゆかなかつたのです。

千代子。私が死んだら泣いて下さる。

信一。僕はあなたを殺したくないのです。そのためにはどんなことでもします。

千代子。私はあなたと一緒に死ねたらとよく思ふのですが、あなたはそんなことを考へたことはないでせう。

信一。僕はあなたと一緒に生きることは考へますが、死ぬことは考へたことはありません。

千代子。私は幸福に生きるといふことを考へたことはありません。もとはありましたけど。初めてあなたにお逢ひした時はね。私はあんなに嬉しいことはありませんでした。あれからいろ〳〵のことが起りましたわね。

信一。僕はあなたにあやまりたいことだらけです。

千代子。そんなことはありません。あなたが生きてゐらつしやるので私は生きてゐられるのですから。それにこゝに來たのも、私が意氣地がなかつたからです。あなたの家庭と名譽と人氣を氣にして、私の愛したのはあなたの弟さんだと見せかけようとしたのがいけなかつたのです。しかしすんだことは仕方がありませんわ。あなたは別としても、私達の不幸は虛僞な愛からうまれた結果にすぎないのです。狂言の仕損ひです。誰もうらみやうはないのですが。

信一。もうそんな話はよしませう。だが私はなんだかこの室はおちつかないのです。

千代子。あなたは氣がよわいのね。あなたは幸福だからだわ。私は生きてゐるのがつまりま

せんから、何にも怖いものはありませんわ。

信一。英次の病氣は大したことはないのですか。

千代子。えゝ、大したことはないのです。私は二三日の内には病氣がなほつてゆけると思ふと手紙を出しておきましたから安心ですわ。あなたが不意に歸つていらつしたことを聞いて私はどんなにうれしかつたか、あなたにはおわかりにならないでせう。何しろ私は監督つきであなたとはもう一生、お目にかゝれないだらうと思つてゐました。

信一。まだ私達は若いのですから。

千代子。だつて私はなが生きは出來ないと思ひますわ。今のまゝでは、主人が私が居なくつても生活が出來る時が來なければ私は本當に生きてゐるのが、いやになりますわ。

信一。英次はいゝ人間ぢやありませんか。

千代子。私だつてそれはよく知つてゐますわ。ですが人のわるいあなたのお顏を見てゐると私は時間のたつのを忘れてしまふのに、あの方の顏や、すがたを見ると本當に身ぶるひしてしまひます。人間にとつて何が不幸だと云つて、毛蟲や蛇と同じ室にすむ程いやなものはないと思ひますわ。私は二三月前まではそれ程にも思はなかつたのですが、この頃は本當に顏見るだけでもさむ氣がしてしまひます。之に罪ではないのです。わるいと思つてゐるのですけど。主人のすることなすこと、又主人の云ふ一言一句私を病的に不愉快にしてしまふのです。どうしてですか、私にはわかりませんが。

信一。それは困つたものですね。それが本當なら別れるより仕方がないでせう。

千代子。私もさう思ひますの。ですけど別れてどうしていゝのか。

信一。別れたさきのことは心配しないでもいゝでせう　しかし別れる時が心配ですね。

千代子。別れるだけなら私はどうにでもなると思ふのです。

信一。僕は弟がどんなによわるか、そのことを考へないわけにはゆきません。僕は弟を愛してゐます。自分は弟を苦しめすぎてそんなことを云ふのは蟲がよろしいがね。

千代子。主人はあなたの死ぬのをのぞんでゐます。

信一。それは本當ですか。

千代子。本當です。主人は三人の内誰か死ななければならない、さう云つてゐます。そして第一にあなたの死ぬことをのぞんでゐるのです。

信一。それも無理はありません。だが僕は今死んでやるわけにはゆきませんよ。

千代子。主人は私の死骸をこのカバンに入れたやうに見せかけてあなたをおどかすことをいつか眞劍に考へてゐましたよ。そしてあなたが私をどの位愛してゐるか見たがつてゐました。

信一。一種の復讐でもしようと云ふのでせう。あいつならその狂言をうまくやりこなすでせう。なんだか、不氣味な所がありますからね。舞臺の上でそんな所をあいつにやらしたら私よりもつとうまくやるだらうとよく考へたことがあります。

千代子。私は主人のことはすつかり忘れてしまひたいのです。

信一。あなたは隨分やせましたね。

千代子。みにくくなりましたね。

信一。あなたを僕は本當に幸福にしたかつた。

千代子。主人もよくさう申します。

信一。あなたこそ、弟のことを忘れることが出來ないのですね。

千代子。思ひたくないと思ふとなほ思ひ出しま

す。あの人が死んでくれたらと私はよく思ひます。しかしさう思へば思ふ程、あの人は丈夫になります。あんなに心の強い人は滅多にありませんね。呪はれても、呪はれても生きかへつてくるやうな方ね。時々氣味がわるくなりますわ。あなたの弟さんにあんな方があるのは不思議ですね。

信一。誰か來たのぢやありませんか。

千代子。鼠の音ですわ。何にも怖いことはありませんわ。二人切りでお話出來る時がくるとは思ひませんでしたわ。私の本當に心の底から凍りついてゐた淋しさが、だん／＼とけて來ましたわ。人間はこんなにもうれしくしてゐられるのに、毎日々々、いやな思ひして生きてゆかなければならないのでせうか。

信一。そんなことはありません。

千代子。私は地獄におちてもいゝわ、あなたとなら。主人と一緒に極樂にゐるよりどんなにいゝでせう。

信一。そんなことは云ふものではありませんよ。

千代子。いつまでもゆつくりしてゐていゝのでしよ。私、お酒を買つて來ますわ。

信一。今日は早く歸りますよ。

千代子。そんなこと云はないで下さい。せめて今晩だけは私生命の洗濯がしたいのですから。

信一。何かたしかに音がしましたよ。

千代子。大丈夫ですよ。鼠ですよ。あなたに似合はないのね。

信一。僕は世界中で弟が怖いのですよ。あいつの顔を見ると、魂が凍りつきます。

千代子。私の魂はいつでも凍りついてゐるわ。（笑ふ）

信一。たまりませんね。

千代子。私を一緒に旅行につれていつて下さらない。

信一。弟はどうします。

千代子。主人は男ですから自分で生きてゆくでせう。

信一。それでも病氣の時逃げるのはよくありませんよ。

千代子。今逃げなければ逃げられませんわ。私だつて死ぬのはいやですわ。今逃げなければ私はきつと殺されます。

信一。…………

千代子。私が死んでもいゝの。私はもう死にものぐるひですわ。私はもう死んでもこゝにゐるのはいやです。私を助けて下さい。私を生かして下さい。どうぞ私を見殺しにしないで下さい。（信一の膝に泣きふす）

信一。さう泣かないだつていゝ。私もあなたを殺すわけにはゆかない。あなたの決心が強いなら私も覺悟をきめます。弟だつてまさか死ぬやうなことはしますまい。

千代子。ありがたう。ありがたう。それで私本當に生きかへりましたわ。それなら今日之から私、用意しますから、明日の朝さそひに來て頂戴ね。それまでにあと始末しておきますわ。

信一。承知しました。それなら今日は之で歸ります。

千代子。それなら明日の朝九時頃きつと來て頂戴ね。

信一。えゝ、來ます。それでは又明日。

千代子。本當に私うれしいわ。今晩は私きつとねむれませんわ。それでは又明日ね。

信一。それではさやうなら。

千代子。それなら私も其處までゆくわ。

（二人退場、英次登場。支那カバンの上に腰かけ、氣味のわるい笑ひをする。千代子いそ／＼登場。初め氣がつかない

が、ふと氣がつき、眼をあけておどろく。辛じて氣絶せず、勇氣を奮ひ起して戰ひをいどむやうに口をきく）

千代子。いつお歸りになつたの。

英次。（つめたく）さつき。

千代子。（反つて度胸をすゑ）御病氣はどう。

英次。お前の病氣はどうだ。お前の病氣が氣になつて無理して歸つて來たのだ。

千代子。それはありがたう。

英次。俺が歸つて來たのをうれしく思つてゐるのかい

千代子。そんなことは云はなくつたつてわかつてゐますわ。

英次。どうわかつてゐるのだ。

千代子。あなたのおよろしいやうに。

英次。お前は病氣だと云ふ電報を受けとつてどんなに心配したか。俺はお前の病氣がなほるやうにどんなに神に祈つたか。そしてあんまり心配になつたので無理して歸つて來た。そして俺は何を見せられたのだ

千代子。（冷靜に）私だつて生きたいのです。

英次。俺を瞞してでも生きたいのか。なぜ正直なことを云はないのだ。

千代子。正直なことを云つて逃がして下さるとは思へませんからね。

英次　兄をよびよせたのか。

千代子　それはちがひます。信一さんは私のことが心配になつたので、不意に歸つていらつしやつたのです。ですがおそかれはやかれ私は今日のくるのを知つてゐました。又待つてゐました

英次。お前は私のことはなんとも思はないのだね。

千代子。あなたはあなた一人で生きてゆける方です。

英次。俺の病氣の最中に逃げないでもいゝぢやないか

千代子。あなたの御病氣もケ病だと云ふことは知つてゐました。

英次。俺の病氣はケ病ぢやない。

千代子。それだつて旅行が出來ないから來てくれとかいてあつたのは譃ぢやありませんか。

英次　醫者はぢつとしてゐろと云つたのだ。だから俺はお前の病氣だと云ふ電報を見たら、何んだかお前が死にはしないかと思つたのだ。

千代子。あなたが歸つていらつしやらなければ、私は死ぬやうなことはありません。

英次。俺はお前が淋しく一人でねてゐると思つたのだ。

千代子。信一さんが歸つていらつしたことを、お友達からでも知らせてもらつて歸つていらつしやつたのでせう。

英次。馬鹿！　それは嘘だ。

千代子。あなたは私の死ぬことをのぞんでいらつしたくせして（泣く）

英次。勝手に泣け、泣いたつて誰が同情しやるものか。俺にはお前の心はもうすつかりわかつてしまつた。

千代子。それなら綺麗に別れることにしませうね。

英次。（言葉は冷たく）お前が兄と手を切ることが誓へるなら俺はわかれてやつてもいゝ。

千代子。そんなさきのことにわかりませんわ。

（二人默つてにらみ合ふ）

千代子。そんな脅したつて、ちつとも怖かありませんわ。

英次。（立ち上り）お前はどうしても俺からわかれる氣なのだね。

千代子。それより他仕方はありませんわ。

英次。俺がそれを許すと思つてゐるのか。

千代子。許すも許さないもないわ。私はどうしたつて出てゆくことにきめたのですから。

英次。俺が承知しないでもか。

千代子。えゝ。

英次。出られるなら出て見るがいゝ。俺はお前を許せるだけ許さうと思つたが、そしてお前の氣持を察してやれるだけ察してやるつもりだつたが、もう俺もお前の侮辱に我慢が出來なくなつた。

千代子。我慢が出來なければどうしようと云ふの。私を殺さうと云ふの。私を殺して生きてゆけると思つてゐるの。牢屋に入つてもいいの。皆に笑はれてもいゝの。それとも無理心中でもしようと思つてゐるの。私を殺したあとのことを考へて見ても、私を殺さうと云ふの。

英次。……………

千代子。妻は夫のものなの。妻は夫の奴隷で、夫が殺してもいゝの。又夫が妻を箱のなかに押しこんで、逃げると殺すなどと云つてそれが夫の權利のやうに思つてゐるの。私だつてどの位あなたを愛したく思つたかわかりませんわ。ですけど、それは神樣が許して下さらなかつたので、私にはどうすることも出來なかつたのです。私はそれを仕方がないと思つてゐます。私はあなたに隨分すまない氣もしないことはありません。ですけど、私は決心しました。それでは之からおいとまします。お身體を大事にして下さい。

(千代子、靜かに退場しようとする。その後ろ姿を憎惡の目で見おくつてゐた英次はとう〳〵辛抱が出來ずにとびかゝる。氣違ひのやうに、なぐる。千代子も遂に抵抗する。その内に發狂したやうになり英次千代子の首をしめる。千代子死んでしまふ。それでもまだしばらくしめながら、へんな笑ひ聲を出す、暫くしてやつと立ち上る)

英次。(死骸を見つめながら低い聲で)俺のしたことはやむを得ないことだ。之より他、どうすることも出來なかつた。お前は殺される資格のある奴だ。誰も俺のしたことを尤と思ふだらう。靜かに死んでゆけ。

(英次はおちつかないやうに歩きながら氣違ひのやうに頭をふつたり、たゝいたりして、又死骸の前に立ちどまり、千代子の死に顔を見つめる。英次不意に泣き出す。)

英次。(低い聲で)お前は不幸な、不幸な女だつた。俺はどんなにお前を幸福にしてやりたかつたか。だが俺には他にどうすることも出來なかつた。南無阿彌陀佛。々々々々々……。

(急に英次は千代子の死骸にかじりつきなほ一層泣き、顔を見、急に生きかへらしたくなり、人工呼吸をやつて見、ますますあわて出す)

——幕——

第四幕

一

(翌朝。同じ室。英次落ちつきを失つて室のなかをうろつき、カバンの前へ來て頭を疊にすりつけるやうに御辭儀をしては、頭髮をかきむしつたりする。外で信一の「千代子さん」と呼ぶ聲がする。英次の態度急にかはりカバンの上に腰かける)

信一。千代子さん。(とよびながら登場、英次と顔をあはせる)

(沈默、お互に心をうかゞふ)

英次。千代子は今朝早く出かけましたよ。お兄さんの處へでもいつたのかと思ひましたよ。

(沈默)

信一。お前はいつ歸つて來たのだ。

英次。お兄さんはいつ歸つて來たのです。

信一。二三日前だ。

英次。私は昨晩おそく歸つて來ましたよ。お兄さんが東京にいらつしやることは少しも知りませんでした。千代子は何にも云ひませんでしたから。

信一。それで俺の處へ來たと思つたのかい。

英次。お兄さんの聲をきくとすぐさう思つたのです。千代子はゆきませんでしたか。

信一。來なかつたよ。

英次。本當ですか。

信一。來れば千代子さんなぞと呼びはしないだらう。

英次。わざとお呼びになつたのかと思つたのですよ。

信一。嘘つくのはお前の方が上手らしいな。

英次。芝居することではお兄さんには叶ひませんよ。

信一。どうだかね。千代子さんは何時頃出かけたのだ。

英次。六時頃でせう。

信一。何て云つて出たのだ。

英次。一寸、其處までゆくと云つて出かけたまま、まだ歸つて來ません。

信一。それは本當かい。

英次。どつちですかね。何しろ千代子は居ないのです。

信一。さうかい。退場、まもなく登場、千代子さんの下駄があるよ。

英次。他の下駄をはいて行つたのでせう。まさか足袋跣足では出かけないでせうから。

信一。お前は昨夜、ねなかつたね。

英次。僕は病氣なのですよ。大したことはありませんが、

信一。それはいけないね。

英次。醫者に旅行することは禁じられてゐたのですが、千代子から病氣だと云ふ電報が來たのでびつくりして歸つて來たのですが、反つて身體にはよかつたやうです。少しもわるくはならないやうです。

信一。千代子さんは病氣だつたのか。

英次。お兄さんは御存知ないのですか。もう千代子も病氣はいいさうで、今朝早くから起きてさむいのに外へ出てゆきましたから、さう悪いことはないのでせう。

信一。千代子さんはお前に殺されることを恐れてゐたよ。

英次。自分に疚しいことがあるからでせう。

信一。お前は千代子さんをそんな人間と思ふかね。

英次。それはお兄さんに聞きたい所ですね。しかしわるい女とは思つてゐませんが、あまり出しやばる女とは思ひますがね。人間はまだ正直になり過ぎてはいけないやうですね。

信一。おそすぎたかね。

英次。何がです。

信一。俺は千代子さんを生かしておきたかつたのだよ。

英次。千代子は死んではゐませんよ。

信一。よそごとで、本當かね、まさか嘘はつくまいね。

英次。あはゝゝ、お兄さんは僕が千代子を殺したかと思つてゐるのですか。

信一。どうも俺にはさうとしか思へない。

英次。あはゝゝ、お兄さんは千代子が僕に殺される資格があると思つてゐるのですね。僕に人殺しが出來ると思つてゐるのですか。僕は今日のやうな場面に何度も逢つたやうな氣がしますよ。それにしても千代子の歸りはおそいですね。

信一。喧嘩でもして出て行つたのか。

英次。少しは云ひあひをしましたよ。僕が歸つて來ても少しもよろこばないのですからね。反つて迷惑さうな顏をしてゐましたからね。僕だつて氣持よくは思ひませんでした。それでつい荒いことを云ひ、少しは手荒いことをしたのですが、いつものことですからその内歸つてくるとは思つてゐるのです。

信一。何處へ行つたか、あてはないのだね。

英次。僕にはあてはありません。二三十圓の金は持つて行つたかも知れませんがね。どうせすぐ歸つてくるでせう。

信一。許してくれ、俺はお前が本當に殺したのかと思つたのだ。しかし千代子さんは生きてゐてくれたとは、ありがたい。僕はお前に心から禮を云ふよ。俺はお前の顏を見た時、ぞつとしたよ。おそすぎたと思つたよ。どうしていゝかわからなかつた。

英次　お兄さんは千代子を僕の手から奪はうと思つてゐるのでしよ。

信一。そんなことはない　僕は千代子さんを愛してゐないとは云はない　しかしそれ以上、千代子さんの死ぬことを恐れてゐたのだ。あんまり殺されさうなこと許り云つてくるのだからね。俺も氣にならないわけにはゆかなかつた。千代子さんをお前に世話したのは俺だから、俺に責任があるやうな氣がするし、それにお前を人殺しにするのはいやだからね。人殺しになつてはたまらないからね。お前がそんなことをする人間とは思はないが、さつきのお前の顏にはおどろいたよ。

英次。だつてお兄さんは、私の留守なのを知つていらつしやるはずなのに、千代子の名を云つて入つていらつしやつたのですからね。

信一。わるかつたよ。わるかつたよ。昨夜なんだかいやな夢を見たのでね。夢は忘れてしまつたがね。あんまり氣になつたので。

英次　お兄さん。お兄さんは死にたいと思つたことはありませんか。

信一。別にないね。

英次。お兄さんは仕合せな方ですね。私なんかよく死にたいと思ひますね。

信一。死んではいけないよ。

英次　お兄さんは私の死ぬことを望んだことはありませんか

信一。お前はどうだ。俺の死ぬことを望んだことがあるだらう。

英次。御同樣でせうよ。お兄さん、死は一たいどんなものだと思つてゐます。

信一。死のことはよくわからないな。

英次。死んでしまつたら幸福でせうか、不幸でせうかね。

信一。死んでしまつたものは幸福だらうね。

英次。どうしてです。

信一。二度と死なくつていゝからね。

英次。お兄さんもさう思ひますか。死んだものは幸福だつてね。

信一。だが人殺しがいゝとか自殺がいゝとか云ふのぢやない。生きてゐる人間は死ぬのが嫌ひなのは當然だからね。

英次。だが死の關所をこしたものは平和だと思ひますね。死んだものを生かすと云ふことは、生きてゐるものの執着としては尤もですが死んだものにはありがためいわくですね。

信一。だが生き返つてしまふと、生き返つたことを又よろこぶのが人情だね。

英次。それはもう生きてしまつたからでしよ。死んでしまつて生きかへらないものを時々僕は羨ましく思ひますよ。

信一。千代子さんが歸つて來たらしいね

英次。千代子に何か用があるのですか

信一。いや一寸歸つて來たかと思つたのだ。

英次。もうぢき歸つてくるでせう。九時頃に一寸用があるやうに云つてゐましたからね。
信一。さうか。もうぢき十時になるよ。
英次。何處へ行つたのですかね。もうぢき歸つてくるでせう。
信一。本當に千代子さんは生きてゐるのだね。
英次。お兄さんは疑ひ深いのですね。
信一。お前の表情の内に、俺の腑におちないものがあるからね。お前は正直なので、いつもお前の表情と、言葉とは一致してゐたが、今日のお前の表情は四分五裂してゐる。
英次。お兄さんに對する私の感情がどんなものか知らないからです。僕はお兄さんを憎んでゐる。そのくせ愛してゐる。輕蔑し切つてゐる。そのくせ尊敬し切つてゐる。正直に云つて僕はお兄さんの顏を見たくないのです。そのくせお兄さんのことが氣になるのです。お兄さんがこゝにゐることを僕は嫌つてゐる。だがお兄さんがこゝから出てゆけば、千代子と何處かで逢ひさうな氣がしてお兄さんをいつまでもひきつけておきたいのです。僕の表情が一つでないのは當然です。私の留守にお兄さんはいそいで歸つていらつしやつたのですから。
信一。お前が留守だと云ふことは俺は知らなかつた。
英次。本當ですか。
信一。それは本當だよ。
英次。でも僕の留守にこゝに上つていつたことは事實でせう。僕の留守を知つてこゝに上り込んで、僕の歸つてくるのを恐れていらつしやつたことはないとは云へないでせう。私はこんな空想をすると、身を八つざきにされるやうですよ。男と女、夫婦、他の人の立ち入ることを絶對に嫌ふ氣持、お兄さんはさう云ふ氣持はおわかりにはならないでせう。泥猫のやうにしのびこんで、あとで口をふさいでおけばいゝと云ふ流儀は僕は嫌ひなのです。ましてそれが血がつゞいてゐる人だとね、なほ我慢が出來ないものです。僕は嫉妬はいゝものだとは思つてゐませんがね　肉親の、それも不具の弟に嫉妬をさせるのは罪が淺いとは云へませんね、ね、お兄さん、さうはお思ひになりませんか、僕は一度思ひ切つていろいろのことをお兄さんに云つて見たかつたのですよ。ですけどはつきり證據をつかんだと云ふわけでもなかつたのですし、そんなことを疑ふのは男として恥づべきことと思ひましたから、辛抱出來るだけ辛抱したのです。お兄さん、この僕の氣持を、十二分に味つて下さい。
信一。……
英次。お兄さん。お兄さんは僕を人殺しと云ひましたね。
信一。そんなことは云はない。
英次。さつきさうおつしやいました！
信一。人殺しはよくないと云つただけだ。
英次。それなら姦通はいゝのですか、姦通は。
信一。よしてくれ。そんな風をして脅迫するのは。
英次。私が精神上にうけた苦痛にくらべれば、お兄さんの罰は重いとは云へませんよ。
信一。なんとでも云ふがいゝ。お前がさう云ふたい度で出るなら、俺も正直に云ふよ。俺はお前に同情して、千代子さんをお前にやつたのだ。それが俺の一番のしくじりたつたのだ。自分の愛してゐる女を、愛してゐない男に世話した。それが僕の一番の罪だつた。その他の罪はその結果にすぎない。お前はそれを知つてゐたはずだ。それでもお前は結婚したがつたのだ。それがお前の罪であり、罰であつたのだ。一人の男は二人の女を愛す

ることはよくない。そのために愛しない男に世話した、二人の女を愛する方が罪が重いか、愛しない男に女を世話する罪が重いか、お前にはわかるかね。俺は道樂者かも知れない。しかし自分を愛したい女を自分のわきにカン禁したことはない。それこそ一番、男らしくないことだと思つてゐるよ。

英次。あはゝゝゝ。理窟はどうでもつくものですね。しかし僕は、妻は、僕を嫌ひながら矢張り僕を愛してゐてくれたと思つてゐますよ。お兄さんがいくら何とおつしやつたつてね。千代子は矢張り僕のものです。お兄さんのものではありません。

信一。千代子さんを殺さない限りそんなことは出來ない。

英次。それなら千代子を殺す許りです。

信一。千代子を殺す？　そんな馬鹿があるか。千代子さんを殺したらお前だつて生きてはゐられないぞ。

英次。餘計なお世話です。僕は生きてゆきますよ。僕には大事な仕事がありますからね。

信一。人殺しと云ふ名は、どの位恐ろしい名か知つてゐるか、その名が一生お前について離れないぞ。どんな時でも、一人ゐる處では殺された者が生きて來て、その人の目に姿を見せるだらう　そして全世界はその人に向つて叫びかけるだらう。人殺し、人殺し、人殺しつてね。（脅迫するやうに）人殺し、人殺し、人殺し、人殺しつてね。人間の生命、それも若くつて、生きたがつてゐる生命を無理にたち切つたものは、一生呪はれるにちがひない、人殺し、人殺し、人殺しつてね。

英次。いくら呪はれたつてかまひません。僕は千代子をあなたにはわたしません。

信一。（静かに）お前は人殺しだね。お前は千代子さんをやつつけてしまつたのだらう。

英次。そんなことはありません。

信一。それなら、そのカバンをあけてくれ。開けることは出來まい。

英次。そんなおどしにはのらない。

信一。それなら訴へてもいゝか。

英次。千代子が生きてゐたらどうしますかね。

信一。そしたら、俺はお前になんでもやるよ。

英次。いのちもですか。

信一。千代子さんがそれでなければ生きてゆけないと云ふなら生命でもやるよ。

英次。そんなに千代子をお兄さんは愛してゐるのですか。

信一。俺はどうしてか、あいつが可哀さうで仕方がないのだ。今死なしてはあんまり可哀さうだ。

英次。でも死んでしまへば同じですよ。

信一。英次、許してくれ、たのむ、あいつは生かしてやつてくれ。俺はあいつに死なれては本當に困るのだ。

英次。大丈夫です。殺すやうなことはしませんから。

信一。ありがたう。それをきいて安心したよ。それなら又あとでくるよ。

英次。千代子にもしお逢ひでしたら、私はもう怒つてはゐないとさうおつしやつて下さい。そしてすぐ歸るやうにさうおつしやつて下さい。

信一。承知したよ。本當にお前には何と禮を云つていゝかわからない。之で俺も安心して旅興行にも出られる。

英次。いつ行くのですか。

信一。明後日どうしてもゆかなければならない。

（信一退場、英次送つてゆく。英次登場）

英次。あゝ、つかれてしまつた。もう何にも考

へる力もない。（ぶつ倒れるやうにねる）

二

（悪夢の場、うすぐらい塔の一室。英次塔のなかに迷ひ込んでくる）

英次。（あたりを注意しながら）こゝまで逃げれば安心だ。（奥へ入らうとする。扉自づとしまる。英次おどろいてたちどまる。扉に大きく「人殺し！」と云ふ字があらはれる。同時に室の壁に、「人殺し！」と云ふ字が、あつちこつちにあらはれては消える。まもなく全部消える）俺はとう／＼人殺しになつてしまつた。俺の歴史には人殺しの烙印がよくおされてしまつて、いくらどうしても消すことが出来ないのだ。あつ、俺の手に血がついてゐる。血がつくわけはないのに。あゝ水があつた。（大急ぎで洗ふ）消えない、消えない、徐々にはつきりしてくる。神様、神様、お許し下さい。お許し下さい。この手の血を消して下さい。（あわてて洗つては明りの處へもつていつて見る。ます／＼手が赤くなる。氣がくるふやうに手をあらふ。初め片手だつたのだが、両手までが赤くなる）許して下さい。許して下さい。あゝ、どうしたらいゝだらう。（又人殺し！の字があらはれたり消えたりする。手はます／＼赤くなる。ます／＼あわてる。人殺し！　人殺し！　人殺し！　の聲が聞えてくる。逃げようとするが、四方の扉がかたくとざして逃げ道がない。駈けずりまはる）助けて、助けて！　（この時一人の女うづくまつたまゝの姿をあらはす。英次氣がつき、不氣味に思ひ注視する。女泣いてゐる。英次そばにより同情して）

英次。何を泣いてゐるのです。何か悲しいことがあるのですか

（女黙つて泣いてゐる。英次肩に手をかけて慰め）

英次。どうしたのです。どうしたのです。

（女、顔をあげる、口も鼻もない）

英次。あつ。（あとずさりする）

女。人殺し、あはゝゝゝ、人殺し、あはゝゝゝ。

英次。助けて、助けて！　（逃げ廻る）

（不意に扉あく、英次其處からにがれようとする。千代子真青な顔して其處に立つてゐる）

英次。（その前に跪き）許して下さい。許して下さい。許して下さい。

千代子　英次さん　私は最後に私は[illegible]あなたを愛してゐると云ひたかつたのよ。それなのにあなたは私の喉をしめて私に何にも云はさなかつたのね。私が云ひたくつて云ひたくつて仕方がなかつたことをね。

英次。許して下さい。許して下さい。

千代子。だつていくら私が許してゐると云つたくつたつて、あなたは喉をしめて私に一ことも云はしては下さらなかつたのね。

英次。許して下さい。許して下さい。

千代子。さあ許してあげるわ。だから私についていらつしやい。（手を出す）

英次。いやです。いやです。僕は死にたくはないのです。

千代子。英次さん　私だつて死にたくはなかつたのよ。さあ一緒にいらつしやい。

女。人殺し、人殺し、あはゝゝゝ

英次。あゝ。（離れようとする）

（千代子、英次を引ぱつてこようとする、英次のがれようとする。その爭ひの最中菊の花と紅葉が散つてくる。千代子少しうれしさうな顔になる）

小野寺の聲。野中君、しつかり／＼！　野中君　野中君、しつかり！　しつかり。

（英次、千代子の手からやつとのがれる）

三

（英次の室、英次倒れたまゝ。信一と小野寺と登場）

信一。あつ。

小野寺。どうしたのです。

信一。（英次のそばにかけよる）英次！　英次！

小野寺。どうしたのです。

信一。大丈夫です。生きてゐます。

（英次、うなされる）

信一　英次！　いや、英次はこのまゝにして今の内にカバンをしらべて見ませう。千代子さんは僕の處へも、あなたの處にも來なかつたとすると、どうも僕の恐れてゐたことが起つたとしか思へません。

小野寺。そんなことはないでせう。

信一。千代子さんは何かことがあつたらあなたの處へゆくはずです。それがあなたの處へゆかない所を見ると、そして弟のさつきの表情とてりあはすと、百が百まで僕の想像はあたつてゐます。

小野寺。それでもあなたをおどかすやうなことを云つてゐました。

信一。それは千代子さんか、僕をだましに。しかしあれがもしおどしだつたら、弟は役者として天才以上です。僕なんか足もとにも及びません。人間に、あんな狂言が出來るとは思へません。カバンをあければ、十が十まで私の想像があたつてゐます。思ひ切つてあけて見ませう。

小野寺。あけて見て何か他のものでも入つてゐたら。

信一。そしたら私はどんなによろこぶでせう。僕は死んでもいゝから、あいつは生かしておきたかつたのです。しかし恐らく生きてはゐません。

（カバンをあけようとする。あからない。中を注意して觀察しようと思つてあけて見ようとする）

信一。何處かにカギはありませんかね。

小野寺。英次君が持つてゐるのでせう。

信一。さがしてくれませんか。

小野寺。どうも氣になります。

信一。しかしもしこのなかに死骸が入つてゐたら、このまゝでおくわけにはゆきません。どうにかしなければ、英次一人ではかつぎ出すことも出來ません。僕は英次の一生を人殺しとして送りたくはありません。

小野寺。どうも氣がひけますがさがして見ませう。死骸が出てもあなたは英次君を憎みませんか。

信一。それは憎みます。復讐がしたくなるかも知れません。ですが、僕は死んでしまつたものにとつては復讐は何にもならないことを知つてゐます。それにエゴイストの話ですが、僕の名譽も重んじます。復讐する勇氣はありません。もしものことがあれば弟だけでも助けてやります。

小野寺。それを聞いて安心しました。

信一。あなたも矢張り、僕と同じ考へですか。このなかに死骸が入つてゐるとあなたも思ひますか。

小野寺。十が八までは思ひます。

信一。十が八までですか、まだ望みがあると思つてゐるのですか。

小野寺。えゝ、僕はまだ望みをおいて居ます。今にも千代子さんが歸つてくる。

信一。千代子さんが歸つてくる。僕はもうそんな望みはすててゐます。カギはありませんか。

小野寺。ありました。右の手にちやんと持つてゐます。

信一。持つたまゝ倒れてゐるのですか。いよいよ望みはありませんね。

（英次うなされる）

小野寺。あの聲をきくと望みがありませんね。

信一。いよ〳〵恐れてゐたことが來たのですね。

小野寺。（カギを持ち）あなたがあけますか。

信一。僕にはあける勇氣はありません。どうかあけて下さい。

小野寺。僕だつてそんな勇氣はありません。

信一。どうか、そんなことを云はないで。

小野寺。ともかくあけずにすませると云ふわけにもゆきませんから。あけて笑ひ話ですめばよろしいが。

信一。そんな希望のあることは云はないで下さい。

小野寺。（カギをあける）ふたをあけますよ。

信一。まつて下さい。私はとり亂したくありませんから。（目をつむり祈る）どうか。

小野寺。（あけて）あつ！

信一。矢張り、矢張り、本當でしたね。あゝあ、こんな、こんな目を見ようとは。（泣き出す）不幸な奴だ。本當に本當に不幸な奴です。弟も馬鹿すぎます。だが之も皆、僕がわるかつたのです。僕はどうしていゝかわかりません。（泣く）仕方がありません。すんだことです。とり返しのつかないことが出來たものです。生きかへる見込はないでせうね。

小野寺。（目をしらべたり、他をしらべたりしてゐたが）ありません。もうお死になつてから十時間以上たつてゐるでせう。

信一。馬鹿です。馬鹿です。まさかこんな馬鹿なことはしまいと思つてゐました。ですがやむを得ません。私達は生きてゆかなければなりませんから。（死骸に禮拜する。死骸の前に兩手をついてお辭儀する）許してくれ。千代子さん。あなたをこんな目にあはした、不甲斐ない私を。（泣く）

小野寺。それならふたをしますよ。

信一。どうか。

小野寺。どうしませうかね。

信一。之は僕がもらつてゆきます。

小野寺。大丈夫ですか

信一。大丈夫です。僕にはいろ〳〵の仲間がゐます。英次のことはあなたにお任せします。自動車をよんで來ますから。

（退場）

小野寺。あゝ。こんなことが前世に起つたことがありさうだ。今の時代の話ではなささうだ。千代子さん。千代子さん。皆を、皆を、許してやつて下さい。そしてどうすることも出來なかつた私達を許して下さい。

（英次うなされる）

小野寺。英次君！　英次君。

（額にさはつて見、おどろいて蒲團を出して來て、きせ、水をくんで來て頭をひやす。信一、菊の花と紅葉したもみぢの枝をもつて登場、默つてカバンを開け、花と葉でうづめ、默禱し、カバンのふたをし、かぎをかけ）

信一。さあ、やつて來て手つだつてくれ給へ。

（男二人登場）

男。このカバンだ。

（男默つてカバンを運んで退場）

信一。熱がありますか。

小野寺。隨分高いやうです。

信一。それなら僕の友人に信用の出來る醫者がゐますから電話をかけませう。何でもうちあけて安心な男です。弟は大馬鹿者ですが、生かしてやりたく思ひます。よろしく願ひます。

小野寺。出來るだけはやります。（看病しなが

ら）

信一。それを伺つて安心しました。それでは失禮します。

（二人丁寧にあいさつする。信一退場）

——幕——

（英次うなされる）

小野寺。しつかり、しつかり、氣をたしかに。

英次（やつと半ば目をさまし）あゝ小野寺、來てくれたのか。（カバンのなくなつたのに氣がつき）カバンは、カバンはどうした。

小野寺。君の兄さんがおとしまつをつけてくれることになつて持つていつた。死骸のことは安心するがいゝ。

英次。君はみんな知つたのか。

（小野寺、合點して見せる）

英次。それで君は僕をすてないのか。

小野寺。ます／＼捨てない。

（二人顔を見あはせる）

英次。ありがたう。

（英次泣き出す）

——幕——

他人の親切

自分のやうに他人に嫌はれてゐる
人間は少ないと心の底から思ふ時に、
他人に親切にされると
心の底から嬉しい。
涙が出てくる。
この涙あればこそ
自分は淋しい世界に生きてゆける。
自分はこの頃淋しいのだ。

今の自分の仕事

今の自分の仕事は
自分を鼓舞する事だ、
やゝもすると、いぢけようとする
自分を鼓舞する事だ。
自分にとつて自分程大事な人はない、
自分の仕事をしてくれる人はない。
その自分を鼓舞する事だ。

目をつむつて

目をつむつて
はつきり見える景色で
自分の好きな景色が一つある。
それは田舍で平地で
田が限りなくつゞき
畔が縦横に走つてゐるなかを
眞直な道が一本貫いてゐる。
道傍には小川があつて冬がれのくぬぎが五
六本立つてゐる
遠くに林があつて
かすかに山が低く見え、
田舍家が木のしげりの間に處々見える。
その道のなかを
百姓の女が三四人かたまつて歩く
たゞそれだけだ。
だがそれがへんになつかしい。

ある畫室の主

（愛慾後日譚）

人物

野中英次
東
小野寺
下島
山田

一

（英次の大きな畫室。英次繪をかいてゐる。東、窓から庭を見てゐる。）

東。先生。

英次。なんだ。

東。先生。僕にはどうしても松葉の色が出ないのですがね。

英次。それは自分で工夫するがいゝ。君の目にどう見えるかね。日かげの松葉と、日のあたる松葉、若い木の松葉の色と、古木の松葉の色、そのお互の關係の面白さ。それを他人に教はつたつてだめだよ。自分で滿足するまで追求しなければ。

東。庭の松を見てゐると實に美しく思ふのです。かくと少しも美しくないのです。

英次。それはまだ苦心がたりないのだよ。僕だつてまだだめだ。毎日少しづつ會得してゆくだけだよ。

東。先生は私達と同じ繪具をつかつていらつしやるのに實に自由自在の色を出されるのにおどろきます。

英次。年齢の差だよ。僕だつて君の年齢には君の半分も自由にかけなかつた。この頃の若い人の進歩の早いのにおどろく。

東。この色はどうしたら出るのでせう。どうもさえてこないのです。

英次。色と色との關係がよくないのだよ。かうすれば少しはいゝ色になる。

東。本當ですね。

英次。色と云ふものはお互に助けあつて美しくなるものだよ。人間と同じことだよ。一つの色を殺しても駄目だ。どの色もいきなければ。

東。しかしそれが中々、さううまくはゆきませんね。

英次。あたりまへだよ。なんだつて修行がいるよ。のらくらしてうまくならうと思つたつて駄目さ。

東。本當ですね。僕は先生の勉強家なのにおどろきます。

英次。僕には他のたのしみはないからね。

東。本當に先生は羨やましいと田島もよく話します。

英次。羨やましい人間なんてあるもんぢやない。

東。だつて誰だつて先生の畫をほめない人はありませんよ。

英次。僕はみんなに惡口を云はれてしまふんでたかつたことをのぞかれ、かう云つた君は一言もあるまい。だからさうでなかつたら僕はこんな畫はかけなかつたらう。ロートレークのやうにね。

東。先生は少しもひねくれてはいらつしやらな

い。

英次。あたりまへさ。自然の美しさは僕にひねくれることを許さないのだ。だが僕はやゝもするとひねくれるのを恐れてゐる。

東。先生は随分坐禪をおやりになつたのですつてね。

英次。なに、なまかじりだよ。だが白隠なんかの傳によむといゝ。少なくも勉強家になる勇猛心を起してくれる。

東。それでは私もよんで見ませう。

英次。よんで見たまへ。僕の處に本があるはずだ。

東。白隠は勉強家だつたのですか。

英次。日本人には珍らしい勉強家だね。その修行に熱心なことと、こまかいことにはおどろくべき所があるよ。僕も時々よんで見て勇氣を得る。少しでも教はりたいことがあれば千里を遠しとしない、又得たものを實際に生かすことが出來ない間は少しも滿足しない、すつかり自分を自分の理想的人物にきづき上げなければをさまらない所がある。

東。さうですかね。

英次。俺たちも之からだよ。

東。さうですね。僕も一生懸命になつてやりますよ。

英次。自分を信じて進んでゆかなければいけない。教はるものは遠慮なく教はるがいゝが、自分の心と頭と目だけは自分のものにしておかなければいけない。

東。さうですね。若いとつい、他の人の議論に動かされます。

英次。足さへ地面からはなれなければ、たまにうかれるのもいゝがね。

東。先生は會心の作が出來た時はうれしくありませんか。

英次。うれしくないこともない。だがすぐさびしくなるよ。俺の力は之だけなのかと思ふとね。そのかはり少しづつは進歩してくれるが。

東。さうですかね。先生のやうに畫がかけてもまだ淋しいのですかね。

英次。あたりまへさ。道は遠いよ。上には上がある。いつだつてもう一歩と思はない時はないね。それだからこそ、つぎ／＼と仕事がしたくなるのだ。今度こそは、今度こそはと思つてね。だが實力だけの仕事切り出來ない。しかし少しは進歩してゆくからね。しかし面白味は其處にある。十年前には、こんな畫だつてかけるとは自分では思つてゐなかつたからね。

東。先生は随分死にもの狂ひの時がおありになつたのですつてね。

英次。誰がさういつてゐた。

東。何かの評にかいてありました。

英次。批評なんてあてになるものぢやない。だが俺のやうな人間は畫をかくより取柄のない人間だからね。之で身體さへよかつたら他の仕事をしたかも知れないが。

東。先生が畫に熱中されたことは私達のよろこびです。

英次。今時のやうなむづかしい時代に畫をかくのには餘程しつかりした覺悟が必要だ。俺のやうにやぶれかぶれの人間は別だがね。しかし今時でもおちついてよろこんで立派な畫をかく人間がゐたら、俺は尊敬するがね。

東。畫をかいてゐる時だけ僕は時間を忘れます。

英次。君は畫かきだよ。君は今に僕達にまけない畫かきになるだらうよ。

東。もしさうなれたら、全部先生のおかげです。僕は先生にお逢ひしなかつたら今時分教師になつてゐたでせう。そして力のない教師と

して輕蔑されて一生をはつたでせう。先生が、私の濱でのいたづらがきをしてゐるのを認めて下さつた時、私は本當に泣きました。

英次。僕もうれしかつたよ。初めあの畫を見た時、本當の畫かきがかいたのだと思つた。そしたら、かいたのが君だといふことがわかつた時、僕はおどろいた。そして君がよろこんで畫かきになるといつた時、僕はうれしかつた。本當の掘り出しものをしたと思つたよ。

東。先生の御期待には背かないつもりです。進歩のおそいのがはがゆい氣がします。

（呼鈴がなる）

英次。誰か來たやうだね。

東。えゝ。（退場）

（東まもなく登場）

東。下島さんがお見えになりました。

英次。お通ししたらいゝだらう。

東。はい。（退場）

（東、下島直子、登場）

下島。先生、お仕事の御邪魔ではありませんか。

英次。いや大丈夫。仕事は今日は氣がのらなかつたので、東といろ／\話してゐた所です。畫が出來たのですか。

下島。はい。あんまり下手なので、先生にお目にかけるのは氣まりがわるいのですけど。

英次。そんな遠慮はいりませんよ。

下島。それでは見て戴きませう。

（畫を出して見せる。英次見る）

英次　どうもまだものになつてゐるとは云へませんね。

下島。きつと先生はさうおつしやると思つてゐたのですよ。

英次。リンゴはこんなに平べつたくはないはずです。

下島。そしてリンゴはこんなくさつた色はしてゐないとおつしやるのでせう。

英次。まあさうです

下島。どうしたらかけるのか、私にはどうしてもうまくゆかないのです。

英次。さうたやすくはゆきませんよ。

下島。先生の本物の畫を拜借出來ませんか知らん。

英次。それはいくらでも貸しますがね。あんまり參考にもなりませんよ。やつぱり本物のリンゴを見てかいたらいゝでせう。しかしとにかく畫をお貸しするだけはしてもよろしい。しかしあなたは一生畫かきでやつてゆくつもりもないのでせう。

下島。私よかつたら一生やりたいと思つてゐるのです、だめでせうか。

英次。結婚すればそれまでですよ。

下島。私、結婚なんかしないつもりです。

英次。なぜです。

下島。だつて私は一生畫がかきたいのですから。

英次。僕はあなたになるべく結婚することをすゝめますよ。

下島。それだつて、私、結婚したいとは思ひません。

英次。無理に結婚しなければいけないわけでもありませんが、したい人が出來たらする方がよろしい

下島。それはその時ですわ。

英次。畫でやつてゆくのは大變ですからね。

下島。それは私だつて知つてゐますわ。

英次。東、今何時だね。

東。いま三時です。

英次。さうか。それぢや僕は一寸失禮して小野寺の處へ出かけてくる。約束になつてゐるから。

下島。それでは私、失禮いたします。どうか先

生、私を見すてないで下さい。私は先生ばかりをたよりにしてゐるのですから。

英次。僕より他にいゝ人があると思ひますがね。

下島。先生は私に愛想をつかしていらつしやるのですね。

英次。さう云ふわけではないのです。しかし僕よりもつと親切に手びきしてくれる人があると思ふのです。僕は正直に云つて、女の方の相手は不適當なのです。

下島。先生のアトリエは女人禁制と云ふ噂がありますが、本當なのですか。

英次。さう云ふわけではないのです。だが僕は女の人が畫かきになるのに反對ではないのですが、女の人は女らしい畫をかく方がいゝと思ふのです。それには僕は不適當な人間ですからね。

下島。それでも私は先生の畫が一番好きなのですから仕方がありません。

（呼鈴がなる。東退場）

英次。しかし僕のやうな畫を女の人がかいたら滑稽ぢやありませんか。

下島。それでも私の畫を見て下さつたつていゝでせう。

英次。正直に云つて、僕が見たつて何にもならないと思ふのです。

（東登場）

東。（少し笑ひながら）先生、小野寺さんがいらつしやいました。

英次。へんな奴だな。俺がゆくことになつてゐるのに。

（東、下島、一寸笑ふ、小野寺登場）

英次。よく來た。今僕の方から出かけようかと思つてゐたのだ。

小野寺。さうか。

英次。之は下島さんと云ふ畫をかく方だ。之は小野寺君です。

小野寺。初めて。

下島。初めまして。

小野寺。新しい畫が出來たね。

英次。あゝ、少しづつはものになつて來たらう。

小野寺。本當に美しいね。

英次。まあ、僕もやつと物になりかけて來た。之も君のおかげだ。まだだめだがね。東、紅茶でも入れて來ないか。

下島。先生、それでは失禮します。

英次。まあ、紅茶でものんでいらつしやい。

下島。ありがたうございます。

英次。下島さん、一つあなたの畫でも小野寺君に見せたらどうです。

下島。いゝえ。お目にかけられるものでは。

小野寺。いゝでせう。見せて下さい。

下島。もう先生に散々惡口を云はれたので。

英次。小野寺はほめないとも限りませんよ。

下島。それではお笑ひ草に見ていたゞきますか。

小野寺。是非拜見さして下さい。

（下島、畫を見せる）

英次。隨分下手な畫だが、女としてはましな方だらう。

小野寺。さうだね。

英次。色だつて惡くない。

下島。先生、どうか冷やかさないで下さい。

英次。まあ素人としてはましだらう。

小野寺。中々感じが出てゐて、綺麗だ。

英次。リンゴの平べつたい所なんか、面白いね。

下島。いやな先生。

英次。まあさうとでも云つて、ほめておくより仕方がありませんからね。しかし正直な所、前よりはうまくなりましたよ。

下島。本当ですか、よろこぶと、あとで、おひやかしになるのではないのですか。

英次。ともかくまだ畫にはなつてゐませんがね。玩具位にはなつてゐますよ。

下島。先生は随分ひどいことをおつしやるのね。その内に先生に感心して戴くやうな畫をかきますわ。

英次。そんなことはよして下さい。太陽が西からのぼると困りますからね。

下島。よろしいわ。（畫をしまふ）（皆笑ふ）

（東、登場、紅茶をもつてくる）

英次。どうも御苦労さん。

下島。どうもありがたう。

英次。小野寺君。僕は最近個人展覧會をやらうかと思つてゐるのだよ。

小野寺。それは是非やるといゝね。

英次。君に發起人になつてもらひたいのだ。

小野寺。元よりよろこんでなるよ。

英次。山田にもなつてもらはうと思ふのだ。

小野寺。それはよろこんでなるだらう。

英次。僕も十年、苦労したから、もうそろそろ世間に自分の存在をはつきりさせてもいゝと思ふのだよ。

小野寺。それは勿論いゝね。

英次。苦しい十年だつた。

小野寺。わきで見てもくるしさうだつた。

英次。精神一到何事かならざると云ふのは譃ぢやないね。

下島。それでは先生、失禮いたします。

英次。さうですか。それでは又畫が出來たら持つていらつしやい。

下島。ありがたう。それでは皆さん、失禮いたします。

小野寺。さよなら。

（下島退場、東おくつて退場、外から笑ひ聲聞える）

小野寺。あの人、中々畫がうまいね。

英次。大したことはないが、女としてはましな方かも知れないね。ともかく熱心だからね。

小野寺。こなひだ山田にあつたら君の畫を随分ほめてゐた。

英次。こなひだ來て二枚買つてくれたよ。

小野寺。見せてもらつた。

英次。僕の畫も賣れるやうになつたから不思議だ。人殺しの畫がね。知つてゐる人は少ないだらうがね。

小野寺。君はまだそんなことにこだはつてゐるのか。

英次。こだはらないわけにはゆかない。

小野寺。もうすぎたことだ。

英次。とり返しがつくことなら僕はとつくにとり返しをつけてゐる。

小野寺。君はそのことでは苦しみすぎた。

英次。千代子は生きかへつては來ない。

小野寺。死んだ人間は君の云ふ通り生きかへらない方がいゝだらう。千代子さんはもうとつくに生れない前にかへつてゐる。

英次。ただ夢のなかでは生きてゐるよ。僕は人間が死んでしまふとすつかりこの世から無くなるものとは思へない時がある。僕は千代子の墓へお參りをしてあやまつたつて始まらないことは知つてゐるが、どうしてもゆかないと氣がをさまらない。へんだね。

小野寺。千代子さんがもし君のことをまだ思つてゐるなら、もうとつくに君のことは許してゐるよ。

英次。それはさうかも知れない。しかし殺されると云ふことはどうしたつていゝこととは云へない。僕は閉口だ。

小野寺。それは誰だつて生きてゐるものは閉口

さ。平氣で死んでゆくやうに出來てゐたら困るからね。

英次。誰が困るのだよ。

小野寺。そしたら人類はとつくに亡びてしまふ。

英次。人類が亡びて誰がよわるのだ。

小野寺。君はよわらないかい。

英次。死ぬのが平氣につくられてゐたら、人類が亡びるのも平氣だと思ふね。第一僕達は生れなくつてよかつたらう。生れなかつたら困りやうもないからね。

小野寺。それなら人間は平氣で死んでゆけるやうにつくられてゐればいゝのかね。

英次。時々はその方がいゝと思ふね。しかしいくらいゝと思つたつて、死ぬのがこはいと云ふ事實はなくならないがね。この事實も面白い所がある。だが要するに死ぬのがこはいとか、苦痛が關らないとか、恐怖はいやなものだとか、云ふ所に人間らしい所がある。それがなくなつたら人間は人形のやうなものだね。僕は肉體をもつて生きてゆくことには不服はない。そして僕は美しい肉體を讃美する。が、マだつて美しい人間を讃美してゐるいわけはないからね。

小野寺。君の精神はすつかり健全になつてゐるね。僕達はそれに感心してゐる。

英次。修行でやつと健全をたもつてゐるだけだよ。まだあやしいものさ。

小野寺。君のやうな心がけと、生活をしてゐれば、何も恐ろしいことはないと思ふね。

英次　中々どうして、さうはゆかない。一たい藝術家と云ふものは仕事の性質上ながく生きのしたいものだ。少しでも完成した仕事をしてゆきたいと思つてゐるからね。從つて死にたくない氣の強いものだ。そして死にたくないものは、何も恐ろしくないとは云へないで、何にも恐ろしい、恐ろしいから用心すると云ふ方が本當だよ。

小野寺。だが、君の生活には、名僧のやうな所があると由田が云つてゐたよ。

英次。それは大した買ひかぶりだね。僕はさうなりたいと思つてゐるが、どうして中々だよ。

小野寺。だが君は、すべてをすてゝかゝつてゐる。快樂も、金も、不平も。

英次。快樂は向ふで逃げていつたのだよ。僕はそれに未練をもつのを恥ぢるだけだ。金はこの頃だまつてゐても入つてくるが、快樂に逃げられた僕には金は役にたゝない、もつと役に立つ人が持つてゆくのが至當だと思ふね。

小野寺。それが中々出來ないことだよ。それに君は惡評されても、不當に輕蔑されても少しも腹を立てない。そして不安も感じない。

英次。あたりまへさ。僕は死刑になつても苦情の云へない人間だよ。惡評や輕蔑位ですめば、ありがたいことだ。それに僕はへんに自信があるから、最後の勝利を信じてゐるから、不安なんか感じない。自分に見えてゐる世界が、かけないのをはがゆく思ふだけだ。喰ひ込みたりないだけが問題だよ。僕はすてるものをすててかゝつてゐる。それだけが僕の強味かも知れない。だが笑つてくれるな。僕は女たちが怖いのだ。僕のものは容易出來たが、女だけはいけない。少し綺麗な女を見ると、自分が首をしめやしないかと云ふ脅迫をうけるのだよ。君にはこの氣持がわかるまいね。一寸しめて見たくなるやうな脅迫觀念におそはれるのだ。だから僕は女だけを恐れてゐる。夢中に首をしめたりしたら大へんだからね。

小野寺。それは脅迫観念だけにすぎないね。

英次。それは僕も知つてゐる。高い處にのぼると、ついとびおりたくなつたり、死ぬのがあんまり怖いとつい自殺したり、毒薬だときくとついのみたくなつたり、蛙が蛇ににらまれると蛇の方へ歩いていつたり、まあそんなたぐひだね。早くそんなことに超越したいと思ふが、まだ超越出來ない。

小野寺。しかしそんなことはなんでもないと思ふね。誰にでもあることだよ。

英次。だが程度がちがふだらう。實行しないにきまつてゐる人間と、實行しかねない人間と。

（東、戸をたゝく）

英次。はい。

（東、登場）

東。郵便が參りました。（わたして退場）

英次。（それを見）又畫の註文が來た。あいつがゐたらよろこんだらう。一人ですきなものを買はしてやつたらよろこんだらうと思ふと、つい涙が出てくるよ。小野寺、一寸そのまゝでゐてくれ。僕に君の顔をスケッチさしてくれ。生命の恩人のね。

（スケッチブックをとりあげる）

――幕――

二

（同じ場、英次花の畫をかいてゐる。呼鈴がなる。英次一寸氣にしたが、畫をかきつゞけてゐる。又暫くして呼鈴がなる）

英次。（畫をかきながら）うるさい奴だな。留守だと思つて歸ればいゝのに。馬鹿な奴だな。

（戸をたゝく音がする）

英次。はい。

（下島登場）

英次。默つて入つて來たのですか。

下島。だつていくら呼鈴をおしても、聲をおかけしても誰も出ていらつしやらないのですもの。

英次。皆留守なのですよ。

下島。あなたも。

英次。（眞面目で、少し怒つたやうに）あたりまへです。呼鈴ならして誰も出て來なければ留守にきまつてゐます。

下島。それはどうも失禮。

英次。本當に仕方がない人です。

下島。それでは私、おいとまいたします。

英次。いや、歸らなくつてもよろしい。（畫をかくのをやめる）

下島。どうか、かいてゐて下さい。私、先生のかいていらつしやる所が拜見したいのですから。

英次。それでは失禮して、もう少しかゝしてもらひます。

（英次かく。下島、感心して見てゐる。英次、急にやめる）

英次。あなたに見てゐられちや矢張りかけない。

下島。どうしてです。

英次。僕の畫は女の臭ひが嫌ひなのです。（沈默）

下島。（よわつて）どうもすみません。

英次。いや、今のは冗談です。

下島。いやな御冗談ね。

英次。誰でもないのです。

下島。東さんは御留守なのですか。

英次。東は寫生にゆきました。東に御用がおありなら、あの裏の橋の處にゐます。

下島。（急にうちけして）いゝえ、東さんに用はないのです。

英次。僕に用があるのですか。

下島。え〻。又畫を見ていたゞきたいのです。
英次。よくかくのですね。あなたは。
下島。先生はなほよくおかきになりますわ。
英次。あたりまへです。僕は他に用はないのです。
下島。私だつて他に用はありませんわ。
英次。なまけものですね。
下島。畫をかくのはなまけものなの。
英次。料理の手つだひはしないのですか。
下島。先生は女を輕蔑していらつしやるのね。
英次。輕蔑しないわけにはゆきませんからね。
下島。どうして。
英次。それでも女にい〻畫かきがゐますか。
下島。さうおつしやればさうですが。
英次。モリソやローランサンこではね。だが可愛い所はあるにはありますがね。
下島。可愛い畫もたまにはあつてもい〻でせう。
英次。家庭の仕事をしたあひまに、かくならね。
下島。先生は本當にひどい方ね。
英次。まあ、怒らずに見せて御らんなさい。
下島。どうせ、つまらないものですわ。
英次。見せないためにもつて來たのぢやないでせう。早くお見せなさい。

下島。さうして早くお歸りなさいでしよ。
英次。まあそんな所です。
下島。私が先生に畫を見てもらふと云ふと、皆おどろいてゐますわ。
英次。僕が怖くないのはあなた許りですか。
下島。皆、先生のお口のわるいのにおどろいてゐるのですよ。私はそのお口のわるい所を信用してをりますの。他の方は女だと思ふと初めつから程度をさげて、中々よくかけてゐると云つて甘やかして下さるから、信用が出來ませんわ。
英次。僕なら出來ますか。
下島。それは出來ますわ。
英次。それは感心ですね。まあ、お見せなさい。
（下島、こはさうに見せる）
英次。可愛い貧弱な花をかきましたね。
下島。いつか先生が一本の枝でも本當にかければ大したものだとおつしやつたので、小さい花を三つだけでもい〻から、本當にかいて見たいと思ひましたの。
英次。之で本當にかけてゐるつもりなのですか。
下島。さうは思ひませんけど、力がありませんから。

英次。正直にかいてありますが、色も形も單調ですね。畫面があきまだらけで、貸地の廣告でも出したやうですね。畫面を充實さすことが大事ですよ。それからこりすぎても面白くありませんね。あんまり臆病になるといけませんからね。自然は少しもいぢけてはゐないものです。
下島。（少し泣き聲で）え〻。よくわかりました。ありがたう。今度はもう少し上手にかいて參ります。
英次。力をおとすことはないのですよ。どうせあなたがものにならない人間なら、僕は惡口は云ひません。
下島。よくわかりました。
（戸をた〻く音）
英次。はい。
（東登場）
東。先生、唯今。（下島にあいさつする）
英次。畫が出來たか。
東。はい。
英次。見せないか。
東。どうもうまくゆかないのです。
英次。まあ、見せないか。
東。はい。

英次。矢張りしつかりかけてゐる。少し物質感の方が勝ちすぎてゐるね。

東。さうですか、僕は見てゐる内に物質の美しさにおどろいたので、なるべく物質感を出して見たく思つたのです。

英次。少しものがお互に孤立してゐる。

東。僕はその孤立した所に面白味を感じたのです。

英次　面白い所に面白味を感じたね。

東。（反抗的に、それをなるべくかくして）先生と僕の性質のちがひが少しはつきりして來たやうに思ふのです。先生は矢張り都會の方で、私は矢張り漁師の子だと云ふことがわかつて來たと思ふのです。

英次。さうか。それもいゝだらう。

東。僕は今迄先生に全部おひかぶされて動きがとれませんでしたが、やつと自分の道がわかつた氣がするのです。

英次。少し早すぎはしないか。

東。先生、僕だつていつまでも子供ではありません。もう二十四になつたのです。まだ畫は隨分幼稚ですが、見える世界が少しづつ先生から獨立して來たことを感じてゐるのです。

英次。それもいゝだらう。本當に自分に忠實になれゝばね。

東。僕もさう思つてゐるのです。

英次。もう君もそろ／＼獨立してもいゝ時が來たのだから、僕に満足出來ない所が出て來たのも當然かも知れない。

東。僕は先生に満足しないわけではないのです。先生の畫を尊敬してゐることは少しもかはらないのです。ですけれど、鳥のくせに鵜の眞似をするのは見ともないと云ふことに氣がついただけなのです。

英次。それはいづれ君の特色が出るよ。しかしわざと自然を無理に自分で見るには及ばない。特色は自づと出るのがいゝのだ。出さうとして出た特色には無理がある。

東。先生にはさう見えるかも知れませんが無理に特色を出した覺えはありません。

英次。それさへなければいゝのだ。本當に君には僕は望みをおいてゐるのだ。君は僕とちがつて身體もいゝし、いくらでも大作の出來るたちだから、正々堂々と正面からやつてもらへばいゝのだ。

東。僕は先生より野蠻だと云ふことを今迄恥ぢてゐたのです。この頃、野蠻も悪くないと思つて來たのです

英次　それは悲しくはない［illegible］

東。結論は［illegible］畫のやうな感じも面白いと思つてゐるのです。

英次　それは面白いね。

東。私もやつと自然が出せて來たやうに思ふのです。その内には先生をおどろかして下さるやうな畫をかけると思つてゐます。

英次。反抗のための反抗は馬鹿氣てゐると云ふだけなのだよ。

東。僕は先生に反抗してゐるでせうか。

英次　君は一本立ちにならうとしすぎてゐる。

東。さうでせうか　僕は自分のお弟子根性がいやになつてゐるのです。

英次　君はもう僕がうるさくなつて來たのだ。

東。さうかも知れません。先生が私をおひかぶさつてゐるやうな感じが僕には息ぐるしくなつて來たのです。

英次。［illegible］だからさうなるのも無理がないだらう　君の信じる通りやつていゝだらう。

東。それより他仕方がありませんからね。

英次。それはさうだらう。だが特に無理に出さないがいゝ。

東。僕もその位なことは、先生、知つてゐます。

英次。それならいゝのだよ。

東。僕には昨日まで先生の御批評は絶對だつたかも知れませんが、今日から僕も先生のおつしやることでも腑に落ちないことは、腑におちないと云ふ方が本當だと思ふやうになつたのです。それでこそ先生は先生であり、僕も僕であると思ふのです。

英次。君の考へは正しい。しかし正直に云つて君の畫はまだ、すつかり物になつてゐるとは云へない。

東。それなら私も正直に申します。先生の畫に僕はあきたらない所が出來て來たのです。

英次。鼻をあまり高く／＼しないがいゝぞ。

東。先生もあんまり一人天下におなりにならない方がようございます。

英次。ふふん。

東。先生は私を輕蔑なさるのですか。

英次。いや、僕は自分を笑つたのだよ。

東。なぜ御自分をお笑ひになつたのです。

英次。いや、俺も馬鹿だと思つたのだよ。

東。先生は私を輕蔑していらつしやるのですね。

英次。そんなことはないよ。それは一面輕蔑してゐるかも知れないが、他では大いに君を認めてゐるつもりだよ。あと二三年、君がハンブルでゐられたら、君は大物になると僕は思つてゐるのだ。

東。あと二三年ですか。

英次。さうだよ、僕のうちにもあと二三年は君に役に立つものがあると思つてゐる。自然をすなほに深く見ることが、最初だと思ふね。それからあと、自づと自分の味が出る。自分の味の出るのはおそい方がいゝ。

東。僕にはさうは思はれません。

英次。もう、そんな話はよさう、下島さんの前で、そんな話はよさう。

東。（赤面して）僕もつい云ひすぎたかも知れません。

英次。何に、僕の方も云ひすぎたかも知れない。お互にあんまり利口ぢやない。下島さん、おどろいたでせう。

下島。いゝえ、面白く伺つてゐました。

英次。面白くですか。

下島。それでもいろ／＼參考になることをきかして戴けたので。

英次。あんまり參考にもなりませんよ。

下島。男の方のお話はキビ／＼してゐて氣持がようございます。

英次。あんまり氣持のいゝ話でもありませんよ。男同志は殺風景なものですよ。

下島。だが、それでなければ矢張りいゝ仕事は出來ないのだと思ひますわ。

英次。下島さん、あなたを二人にかゝしてくれませんか。下島さん、東、かいて見る氣はないか。

東。是非かゝして戴きたいものです。

下島。えゝ、それは先生にかいて戴けば、私も光榮ですわ。

英次。（腰掛椅子をいゝ處におき）それならこゝへ腰かけて下さい。

下島。はい。今日からお始めになるの。

英次。えゝ。急に今、かきたくなつたのです。いゝでせう。

下島。それは私はかまひません。（腰かける）

英次。東、君の位置はどうだ。

東。こゝで結構です。

（二人かき始める）

三

（同じく、英次小野寺と話してゐる。）

英次。男つてあさましいものと思ふね。僕は内心さとつた人間のつもりでゐた。もう何が來ても平氣だと思つてゐた。僕は何もかもすて

てしまつた人間、自分の仕事より他のことは全部思ひ切つた人間だと思つてゐたよ。処がこの頃は、あの東のやうな子供とムキになつて議論したり、又ムキになつて競争したりする氣になるのだからね。女のゐる前でさ。恥かしいと思つても、すぐムキになる。神様と云ふ奴は、男を傑作のやうにつくつたと見えるね。僕はもう女のことはとつくに思ひ切つてゐるつもりなのだ。僕のやうな人間は女のことを少しでも考へる資格がない人間だと云ふことを自分ははつきり知つて來たつもりなのだ。人殺しで、セムシで、さばけない性質、仕事のことは死んでも忘れられない、描つた人間のつもりでゐた。處がこの頃、下島がやつてくるやうになつてから、そして東が僕に反抗的な態度を見せて、下島さんの前に自分の存在をはつきりさせようと努力してゐるのが見えてから、僕はそれに嫉妬しなければ居[illegible]だと知りながら、[illegible]出來ないのだ。そして東と同じレベルにたつて、云はなくつていゝことを云つたり、しなくつていゝ態度をしたり、そしてそれに氣がつくと、自分で浅間しいと思ふが、しかしどうすることも出來ないのだ。逢ひ見ての後の心にくらぶればと百人一首の歌があるが、實際そんな所だね。

小野寺。君は結婚する氣はないのかね。

英次。まさか、そんな氣はないよ。

小野寺。下島さんは君に氣があるのぢやないのかね。

英次。そんなことはないにきまつてゐるよ。ただ僕を神様のやうに崇拜してゐるのだね。少なくも僕を天才と信じて、僕の一言一句を信じ切つてゐる。男の弟子はどうかしたらふみにじつておひこしてやらうと云ふ所が見えて、小生意氣な感じがするのだが、其處へゆくと女の弟子は素直で氣持のいゝものだ。どつちがいゝのかわからないがね。僕を油斷したら征服してやらうと思ふ者のゐてくれるのも悪いとは思はないが。

小野寺。東と云ふ男は少し生意氣になつたね。

英次。それも女のためさ。尤も男は少し生意氣な所もあるのが面白いとは云へないが、結果をあせりすぎるのは利口とは云へないね。

小野寺。東は何處へ行つてゐるのだ。この頃よく留守だね。

英次。何とか口實をさがして、下島さんの處へ出かけるらしいのだ。下島さんは閉口してゐた。

小野寺。下島さんに氣があるのか。

英次。それは大ありさ。

小野寺。君はそれを寛大に見てゐるのかい。

英次。それより仕方がないぢやないか。まさか子供でもあるまいし、ゆくなとも云へないからね。

小野寺。それでも下島さんがいやがつてゐるのだらう。

英次。少なくも今の所ではね。だがあてにはならない。

小野寺。君は出かけないのか。

英次。僕は出かけないよ。相かはらず僕はこのアトリエに籠城してゐるのさ。僕は勿論下島さんに氣があるわけではないつもりなのだよ。あんな無垢な少女に氣があつてはたまらない。しかし東と結婚するのを望んでゐるのかと云へば、それは勿論うそさ。僕はこの頃東の行爲を見るのさへいやになつてゐる。自分で自分に愛想をつかしてゐる。個人展覽會までにはうんと仕事をしようと思つてゐるのだが、下島さんの來ない時には何だかおちつかないのだ。そして下島さんがくると我ながら恥かしい位、快活になり、冗談が云つて見たくなる。厄介な奴さ。しかし之も一つ

の修行だと思つてゐる。あながち超絶しようと許りは思つてゐない。何か、うんといゝものを生みだす機縁にしてやらうと思つてゐるのだ。

小野寺。それはいゝ思ひつきだ。君らしい考へ方だ。しかし僕は君が下島さんと結婚したつていゝと思ふね。あの人なら純粋に君のことを思つてゐるよ。

英次。だがね、（首しめるまねして）之がおそろしいよ。それに千代子を殺した告白せずに結婚するわけにはゆかない。だが告白は出來ない。下島さんの方から僕と結婚したいと云つてくれれば別だが、僕からは云ひ出せない。

小野寺。女の人からは云ひ出せないだらう。

英次。女の人が本當に僕を愛してゐてくれれば云ひ出せると思ふね。

小野寺。どうだかね。女は本當に愛されてゐることを知らなければ、中々心は動かさないものだらう。

英次。僕が下島さんを愛してゐることは下島さんは知つてゐるはずだ。

小野寺。結婚したいと云つて見なければだめだね。

英次。さうかね。しかし僕は正直な所結婚したくない。僕はたゞ下島さんが一生獨身で、僕の仕事を尊敬して、兄妹のやうに氣らくにしてくれることを喜んでゐるのだ。

小野寺。それならうまくゆきさうなものだね。東だつて、今すぐ結婚するわけにもゆかないからね。

英次。それはさうさ。そして東はまだ湖のものか陸のものかわからないからね。その點で僕は安心してゐるのだよ。だが僕がまだそんな事を考へるやうになつたかと思ふとへんな氣がするよ。

（呼鈴がなる。英次退場。まもなく衣裳屋の番頭と登場）

番頭。毎度ありがたう御座います。御注文のお品をもつて參りました。之ではいかゞで御座いますか。

（恐しく立派な幕を出して見せる）

英次。結構です。立派だらう。

小野寺。隨分立派な幕だね。なににするのだ。

英次。こゝへお伽噺の女王様の玉座をつくることにしたのさ。これが玉座の前の幕なのだ。

小野寺。君に一寸似合はないね。

英次。そりやあ、人間の心のなかにはいろ〳〵のものがかくれてゐるものだよ。僕だつてベロネゼーや、チ、アンが嫌ひとは限らないよ。着物も出來ましたか。

番頭。はい。之ではいかゞで御座いますか。

（お伽噺の女王らしい着物を出して見せる）

英次。（調べて見て）結構です。一寸御面倒ですが、この幕をあのひもに通して見せて下さいませんか。

番頭。承知しました。

小野寺。さつきからあのひもは何かと思つてゐた。

（番頭、幕をたらして見る）

番頭。いかゞで御座いますか。

英次。結構です。それから冠は持つて來て下さいましたか。

番頭。持つて參りました。（出して見せる）いかがで御座いますか。

英次。結構です

番頭。それでは失禮いたします。

英次。さうですか。

番頭。（小野寺に）どうも失禮いたしました。

（小野寺丁寧にあいさつする。番頭、英次退場。小野寺、幕や、着物、冠を見る。）

（英次風呂敷包をもつて登場）

英次。一寸君手つだつてくれないか。之を臺に敷くのだ。

小野寺。よし來た。

（二人で敷く）

英次。君、失禮だけど、この長椅子を手つだつてのつけてくれないか。

小野寺。よし來た。

（臺をのつける）

英次。（その上にキレをおほひ）これで女王様が横になつて、戀人のことを夢みてゐると云ふわけなのさ。（花が豐富に插されてある花瓶を足の方へおく）之でもう女王様さへ御いでにさへなればい丶わけなのだ。（幕のひだをなほしたりいろ／＼愉快さうにしたくをする）

小野寺。（少しあつけにとられながら、同情して見てゐる）思ひ切つた構圖だね。

英次。レンブラントのダナエの向うを張らうと云ふのさ。まさか裸になつてもらふわけにもゆかないからね。

小野寺。又東と一緒にかくのかい。

英次。いや、今度は僕一人だよ。誰にもこの畫が出來上るまでこの畫は見せないつもりさ。百號にかいて見ようと云ふのさ。僕の柄にないかね。

小野寺。いや、面白いものが出來るだらう。そして下島さんは承知したのかい。

英次。それはよろこんで承知したさ。光榮だと云つてね。

小野寺。面白いものが出來るだらう。

英次。頭のなかでうんとい丶ものがかけるつもりでゐるが、いざとなるとさうもゆくまい。だが僕はこの頃へんに元氣さ。僕のうちにもこんな快活な精神が生きてゐてくれるのかと、自分でおどろいてゐる。東には氣の毒な氣もするが、僕は自分の仕事のため、大きな仕事のためには、小さい同情は殺してかゝるつもりだ。しかし正直を云へば、東に同情なんかはしてゐない。ふみにじることに快感さへ何處かに感じてゐる。小生意氣な奴、僕に反抗出來るなら反抗して見ろつてね。戀と云ふものは一面へんな性質をもつてゐるものだね。

（鈴がなる。英次、退場、まもなく下島と登場。小野寺と挨拶する）

英次。どうです。中々立派でせう。

下島。本當に立派ですわ。

英次。之があなたの着る着物で、之をあなたがかぶつて、あすこに靜かに横たはつて下さると云ふわけです。

下島。大したことになつたのですね。私よりもつと適當なモデルがありさうに思ひますわ。私ぢやあんまり。

英次。そんなことは斷じてありません。あなたの顏や、身體つきや、感じから思ひついたのですから、他の人ではだめです。

下島。（着物をいぢりながら）なんだか恥かしい氣がしますわ。

英次。そんなことはないでせう。内心よろこんでもゐて下さるでせう。

下島。それはね。

英次。それならそれを着て見て下さい。

下島。又今度にいたしませうね。

英次。まあつけるだけはい丶ぢやありませんか。小野寺だからかまひませんよ。

下島。小野寺さまがいらつしても、それは少しも氣にはしてゐないのですけど。

小野寺。僕は今日は失敬する。又くる。

英次　さうかい。それは失敬したね。

小野寺。それぢや、さよなら。

英次。さよなら。

（小野寺、下島と默禮し、退場。英次も

近づてゆく。下島、鏡の前へ行つて冠をつけて見る。英次そつと登場。鏡の中の下島と顏を見あはす）

下島。まあ、びつくりしました。

英次。どうしてです。

下島。だつて、先生があんまり靜かに入つていらつしたので。

英次。あなたがきつと鏡を見てゐるだらうと思つたので。

下島。いやな先生ね。それでは着物を着て見ますかね。

英次。どうぞ。

下島。先生、一寸目をつむつてゐて頂戴。

英次。よろしい。

（下島、着物をぬぎ、鏡の前で下着の上に着物を着る）

英次。まだですか。

下島。まだよ。

英次。大へんおそいのですね。

下島。まあ、まつていらつしやい。（着物つけをはり、冠をつける）

英次。まだですか。

下島。せつかちですね。先生は。

英次。なんだか、目をつむつてゐる内に、美しい世界があらはれたり、消えたりしさうに思ふのですよ。

下島。さう思つていたゞければ、なほ目をつむつてゐていたゞきたいわ。目をおあきになると、現實の貧弱さにおおどろきになりますからね。（まうけの段をあがり長椅子の上に坐て、居ずまひをなほす。沈默）

英次。まだですか。

下島。もう本當はいゝのですよ。

英次。（目をあけ鏡の方を先づ見、それから下島を一寸さがして、まうけの席の上に下島のゐるのを氣がつき歡聲をあげる）あゝ、本當に素敵です。僕の夢は實現されました。

（戸をたゝくものがある）

英次。誰だ？

外。（東の聲）僕です。

英次。何か用か。

東。別に用ぢやありません。（云ひながら戸をあけようとする）

英次。戸をあけちやいかん。（戸に走つていつていきなり戸をしめカギをかけようとする）

下島。先生！　何をなさるのです。

英次。安心して下さい。僕はたゞ他の人に自分のイリユウジョンをこはしてもらひたくないのです。

下島。カギをかけるのはよして下さい。つまらぬ誤解をされてはいやですから。

英次。それでも。

下島。仕事中は入つてはいけないと云ふ札をお出しになればいゝぢやありませんか。

英次。さうでしたね。僕にはそれが氣がつかなかつたのです。馬鹿ですね。許して下さい。

下島。私は何とも思つてはをりませんわ。先生を信じ切つてをりますから。

（英次、いきなり机のところにゆき、ペンで紙に字をかく）

四

（同じ場。英次百號に下島の前の場と同じ形で横になつてゐるのをかいてゐる。）

英次。少し休みませう。

下島。えゝ。（下島、畫を見に來、英次の後ろに立つ）

英次。どうです。

下島。本當に美しくかけましたわね。私ぢやないやうですわ。

英次。あなたの内にかくれてゐるあなたですよ。

私一人が知つてゐる。あなた自身も知らないあなたです。

下島。それではこの畫の方が私よりもなほ私なのですか。

英次。まあさうですね。僕は純粋のあなたをかからうと思つてゐるのです。力はまだ足りませんが、しかし入り込めるだけ入りこんで、純粋のあなたを生かせるだけ生かして見るつもりです。

下島。純粋の私と云ふのは、あなたの見た私と云ふことになるのですね。

英次。さうも言へるかも知れませんがね。だがさうと許りも云へないでせう。あなたより僕の方がより深いあなたの美を見てるとも云へますからね。つまり客觀的にもより本當を見てゐると云へるでせう。

下島。先生のおつしやることはよくわかりませんわ。

英次。まあ腰をおかけなさい。一體人間は自分が自分を一番よく知つてゐると思ふのはまちがひなことがよくありますよ。花は、自分の美しさを自覺してゐるかも知れませんがね。だが天才のある畫家が知つてゐるだけには知らないでせう。僕なんか、自分の内の美しさを知るのは、たゞ他のものに反映する自分によつて知るだけです。僕は僕が他の内に見出し得る美によつて、自分の内に藏された美を知るのです。だから僕はあなたによつて僕の美を知ることが出來たと云ふのです。僕はそれをあなたに感謝してゐるのです。人間は單なる鏡ではない。心靈の鏡です。しかしその鏡は自分の深さだけにきりものをうつすことが出來ないものです。

下島。それでは私の深い私は私にはわからないで先生だけにおわかりになるの。

英次。まあさうです。人間は自分を愛してゐないからです。

下島。先生のおつしやることはわかりませんわ。

英次。人間は自分を愛してゐると思つてゐますが、實は自分を盲目に愛してゐて、あまやかしはしますが、本當の意味で自分を尊敬したり愛したりすることは中々出來ないのです。たとへば、あなたは僕を先生として尊敬し、信用してくれてゐる。しかし僕はそれ程自分を尊敬しても、信用してもゐないのです。ごくあたりまへの人間にすぎないと思つてゐます。あなただつてさうでせう。自分を特別に美しいとも、優れてゐるとも思はないでせう。よし思つたにしても僕が知つてゐる程は知らないでせう。あなたの美をあなたは僕程愛してゐないからです。

下島。……

英次。僕の云ふことはわかりましたか。

下島。いゝえ、ちつともわかりませんわ。

英次。困つた人ですね。

下島。どつちが。

英次。あなたですよ。

下島。つまり私は馬鹿だとおつしやるのでせう。

英次。つまりあなたは自分の美を知らないと云ふのです。

下島。それだつて、この畫の方が私より美しいのは事實です。

英次。あなたは自分を愛してゐないからです。

下島。そんなことはありませんわ。私は隨分エゴイストですわ。

英次。あなたには僕の云ふ意味がちつともわからないのですね。それともわからないふりしてゐるのですか。わからない方がいゝので。

下島。先生のおつしやることは時々わからないことがあると、東さんも云つていらしつたわ。

英次。東はこの頃も時々ゆきますか。

下島。めつたに。東さんはこの頃、何か怒つていらつしやるやうよ。

英次。僕があなたと二人切りで、一時間も二時間もゐるからですよ。

下島。そんなことはないでせう。

英次。東はあなたを戀してゐますからね。

下島。だつて先生と二人切りだつてちつともおこることはないわ。

英次。自分で人を想像するのです。僕があなたを愛してゐるとでも思つてゐるのでせう。

下島。をかしな方ね。

英次。何がをかしいのです。

下島。だつて先生のやうな女嫌ひな方が。

英次。僕を女嫌ひにきめてゐるのはあなた許りですよ。

下島。だつて先生のやうな方から見れば、私は赤坊のやうなものでせう。

英次。あなたは利口ですね。

下島。なぜです。

英次。だつてうまくとぼけますからね。

下島。今日は先生のおつしやることが少しもわかりませんわ。

英次。あなたは矢張り獨身主義ですか。

下島。えゝ。

英次。そして畫を一生やるつもりですか。

下島。自分ではやりたいと思つてゐるのです。

英次。是非おやりなさい。

下島。望みがあるでせうか。

英次。大いにあります。獨身でゐればね。

下島。先生が保證してくだされば、私一生獨身で畫をやりますわ。

英次。僕を信じ切つて下さい。さうすれば僕はあなたをものにして見せます。

下島。それは私、先生を信じ切つてをりますわ。

英次。僕があなたを殺してでもですか。

下島。先生はそんなことをなさらない方だと云ふことを知つてゐます。

英次。たとひですよ。

下島。たとひなら、殺されても信じますわ。

英次。何を信じるのですか。

　下島、笑ふ。

英次。ともかく安心してあなたの一生を僕にお任せなさい。

下島。それはお任せしますわ。

英次。條件なしにですか。

下島。それは私、先生を信じ切つてをりますもの。

英次。何を信じてゐるのです。

下島。先生は私を愛してゐて下さることを。

英次。本當ですか。

下島。えゝ、私の父のやうにね。

英次。あなたは鰻見たやうな人間ですね。

下島。なぜです。

英次。つるりと逃げ出すからです。

下島。何が逃げ出すの。

英次。あなたは子供ですね。

下島。先生から見るとね。

英次。さあ、又畫を始めませう。

下島。えゝ。

　（モデルの座につく）

英次。（見つめて畫をかかうとして、筆をまだおろさない）僕は本當にあなたのやうな弟子を一生もつ事が出來ることを實に幸福に思つてゐます。

下島。私も先生のやうな方の一生弟子にして戴けることを光榮に思ひます。

　（英次、畫をかかうとしてゐたが突然立ちあがり、戸をあける。其處に東が立つてゐる）

英次。探偵の眞似はよせ。

東。（東入つてくる）

東。先生には僕の氣持はわかるはずです。

英次。わかつたつて同情はしない。俺は自分の仕事のよくゆくことを喜ばないやうな男に同情はしない、さあ早く出てくれないか。入つては困るとちやんとかいてある。

東　戸の前にたつてはいけないとはかいてありませんね。

英次。あたりまへさ、カギの穴からのぞくなとかく必要があるか。小便無用とかく奴があつても、泥棒無用とかく奴はない。

東。………

英次。さあ、出ていつてくれないか。

東。………（默つて退場）

英次。さあ、畫を始めませう。

下島。先生は隨分、暴君ね。

英次。私は自分の仕事を尊敬する、仕事の忠實な奴隷にすぎないのですね、さあ、始めませう。（沈默）あなたは東に同情してゐるのですね。僕の仕事と、東の感情とどつちを尊敬するのです。

下島。私にはわかりませんわ。

英次。今日はやめませう、あなたは東が、ぬすみ見たり、ぬすみ聞いたりする、卑劣を尊敬するのですか。

下島。私は女ですもの。

英次。あなたは、一生畫をかく氣なら、そんな女らしい同情はすてなければいけません。

（下島、モデルの座からたち上る）

英次。（怒つたやうに）もう少しそのまゝにしてゐて下さい。

下島。はい。

英次。（かきながら）あなたは僕の仕樣がひどすぎると思つてゐるのですね。

下島。一寸そんな氣が、しましたの。

英次。もうしませんか。

下島。えゝ。よく先生のお氣持がわかりました。

英次。本當にわかつたのですか。

下島。先生はさすがに偉い藝術家でいらつしやることがはつきりしました。そして藝術の仕事と云ふものは本當にしつかりしなくてはいけないものだと云ふことがわかりました。

英次。（皮肉に）それは結構です　しかしあさましい氣もしませんか。

下島。いゝえ。だけどなんだか血みどろのやうな氣がしますわ。

英次。血みどろ。僕の手に血がついてゐるやうに見えますか。

下島。いゝえ、先生の心臟は裸ではないかと云ふ氣がしたのです。

英次。僕はおちついて、東にたいしてももつと先生らしい寛大な氣持がもちたいのですよ。だが時々あんな態度に出て、あとでわるかつたと思ふのですよ。

下島　しかし先生位のはけしさがなければ畫も中々かけないと思ひます。

英次。さう云はれると赤面します。人間て隨分面白いものですね。

下島。私、さつきは本當にどうなるかと思ひましたわ。

（戸をたゝく音がする）

英次。誰だ。

外で。（東の聲）僕です。

英次。何か用か。

東。（戸外で）先生。今迄實にお世話になりました。僕は少し考へることがありまして、之からお暇をいたゞきたいと思ひます。どうぞ先生もお身體を大事になさつて下さい。

英次。（戸をあけ）さつきの僕の言葉が原因なら、出かけるのはよしてほしい。僕は自分の云ひすぎたのを後悔して君にあやまりたい氣持になつてゐるのだから。

東。えゝ、先生のお氣持はよくわかつてをります。しかし私もいろ／＼の點で、之以上先生のお世話になるのは心苦しいのです。もう一本立ちになつてやれる所まで、やつて見たく思つてゐるのです。

英次。君の決心は強さうだから、僕も無理にはとめない。もし歸りたくなつたらいつでも遠慮なく歸つて來てほしい。それから金の方の仕事でもさがす必要があつたら、小野寺や、山田にたのむといゝ。なるべく畫で金をとつて質素にくらす方がいゝと思ふ。

東。御注意ありがたう御座います。畫をあだで償ずるのはいやで御座いますが、私も獨立した以上、あくまで先生とたゝかふつもりでをります。先生のおともだちのお世話にはなりたくないと思ひます。

英次。それもいゝだらう。

東。それでは失禮いたします。

英次。君もたつしやでゐたまへ。

東。ありがたう御座います。僕は先生を尊敬してゐることには少しもかはりはないと思ひます。たゞ僕はあることで先生とに何處までも戰ふつもりです。

英次。藝術の名においてか。

東。それと戀の名においてです。（退場）

英次。あいつは立派な男だが、惜しいことをした。

下島。先生、私おいとまをいたしますわ。

英次。いけません。もう少しそのまゝにしてゐて下さい。

下島。私、なんだか東さんのことが氣になります。一寸お逢ひしに行つていゝでせう。

英次。（心の内のたゝかひをかくして、冷靜に）いけません。

下島。なぜいけませんの。

英次。僕は今畫にのり氣になつてゐるのですから。

下島。一寸です。

英次。それならいつていらつしやい。

（下島、いそいで退場。英次傲慢な態度で歩いてゐたが、急にしやくり泣く。下島登場。）

下島。先生、どうかなさつたのですか。

英次。いや、たゞ急に淋しくなつたのです。

下島。御尤もですわ。先生、お一人になつておしまひになつたのですもの。

英次。………何か云はうとする。

——幕——

五

（同じ場。英次一人で坐禪をくんでゐる。戸をたゝくものがある）

英次。はい。

（下島登場）

英次。昨日は來ませんでしたね。今日ももう來ないのかと思ひましたよ。

下島。昨日は出ようとする所へ東さんが來て話しこんで、どうしても歸らうとなさらないので困りました。

英次。困つた奴ですね。

下島。私、東さんに同情しましたわ。あの方は本當に偉い方ね。

英次。なぜです。

下島。だつてこの頃、勞働していらつしやるのですよ。

英次。さうですか、そしてそれが偉いのですか。

下島。苦しくつたつて折れないのは偉いぢやありませんか、その上畫をかいていらつしやるのです。

英次。それはまあ感心ですね。しかしあなたが僕のうちにくるのを邪魔しに出かけて、いつ

までも歸らないなんて、あんまりほめたこと
ではありませんね。

下島。東さん少し身體の工合がわるかつたのです。熱をはかつて見ましたら八度三分ありました。

英次。さうですか。それは氣の毒でしたね。そしてどうしました。

下島。私はおとめしたのですが、夕方、無理におかへりになりました。

英次。さうですか。それでは早速ですが仕事を始めませう。

下島。えゝ。もう何日位で出來上りますの。

英次。個人展覧會が來月末にありますからそれまでにかき上げたく思つてゐるんです。

下島。隨分かゝるのですね。

英次。毎日僕の處へくるのは閉口ですか。

下島。そんなことはありません。

英次。この畫がかけたあと、又あなたをモデルにして畫をかきたいと云つてもなつてくれますか。

下島。それはよろこんでなります。

英次。東は僕のことを何とか云つてゐますか。

下島。いつも先生のことをほめておいでです。今度のことでも自分がわるかつたのだとおつしやつておいでです。自分が賤しかつたので先生の御心を曲解してゐたとおつしやつてでした。しかし先生の處から出たのはやむを得ないとおつしやつておいででした。そして先生の處には又いゝお弟子さんが出來て、神妙に世話をやいてゐる話をしたら、大變安心しておいででした。あの方もいゝ方ですね。先生のことをいつも一人で夢中になつてほめてをりますの。

英次。東はたしかにいゝ奴です、有望な奴です。あんな奴は滅多にゐません。だがあいつは喰へない所をもつてゐます。あいつは中々策略をつかふ男で、目的のためには手段を選ばない男です。僕はあの男を愛してはゐますが、あのへんな獨立心と、目的のためには馬車馬的で手段を選ばない所はどうも氣に入りません。あの男の病氣のことをきいた時も僕はあてにはしてゐませんでした。

下島。それでも熱が八度三分ありましたもの。

英次。熱許りは身體の熱でなければ上らないものぢやありませんからね。

下島。それだつてまさか。

英次。僕は今にきつと東は假病をつかつて、あなたの同情心に訴へ、自分の處にあなたを來させるやうにするだらうと思つてゐましたよ。そしてあなたはきつと同情して出かけて行くと思つてゐましたね。

下島。それはゆくかも知れません。

英次。行つてはいけません。

下島。なぜ。

英次。東にだまされなければならないと云ふ必要はないからです。

下島。それでももし本當に御病氣だつたらどうなの。

英次。本當の病人に東が自分をつくりあげたら、あなたはゆく方がいゝと思つてゐるのですか。

下島。先生のさう云ふお考へ方には私賛成出來ませんわ。

英次。東と云ふ男はさう云ふ男なのです。あいつは利口な男ですからね。

下島。私にはそんな方とは思へませんわ。

英次。それはあなたが馬鹿だからです。

下島。それでは先生は私が東さんの處へいくら東さんが御病氣の時でも、行つてはいけないとおつしやるの。

英次。斷じて。

下島。本當の御病氣の時でも。私はいくら行

つたつて大丈夫と思ひますわ。先生こそ私を信用していらつしやらないやうに思ひますわ。

英次。男には魅力がありますから。巧言令色に女はすぐだまされますからね。

下島。東さんはそんな方なの。

英次。そんな男ですよ。

下島。東さんは又先生を用心しろとおつしやつていらつしやいましたわ。

英次。さうでせう。そんな男です。

下島、先生の他の點は皆信用するが、女のことだけは信用出來ないと云つていらつしやいましたわ。

英次。人間は自分のこと切りわからないものです。

下島。（冗談のやうに）それなら東さんが假病をつかふことがわかるのも、先生にさう云ふ所があるからなの。怖いわね。

英次。僕にもさう云ふ根性はないことはないのです。たゞ實行出來ないのです。東はそれが實行出來る男です。

島。男の方のお話をきいてゐますと、怖くなりますわ。

英次。その人に何もかも許してゐる場合は別です。その他の時は、男にはあまり親切にしたり、男に氣があると自惚れさせるそぶりは、用心しないといけませんよ。

下島。先生は矢張り、私を獨占なさらうとしていらつしやるのですのね。

英次。さうかも知れません。それがどうと云ふのです。

下島。私はそんなことはないと思つてゐましたの。

英次。あなたがさう思つてゐるなら、僕もさうなりますよ。僕はあなたを束縛する資格はありませんからね。たゞ注意するだけなのです。東とあなたと結婚する氣があれば別です。

下島。そんな氣は少しもありませんわ。だけど御病氣なさつたら、見舞に位上らないとわるいやうに思ふのですよ。

英次。ゆくなら誰かと一緒にいらつしやい。惡いことは云ひません。

下島。それはさうね。それではゆく時は、弟をつれてゆくことにしませう。

英次。それがよろしい。

下島。私、馬鹿ですから、いろ／＼注意して下さい。私、先生のおつしやることならなんでもきいてまちがひないと思つてゐるのですが、つい馬鹿なので、先生のおつしやる意味をとりちがへてしまふのです。之から注意いたしますわ。

英次。僕もまちがひのないことだけを云ふことに注意します。僕はたゞ、あなたが畫をやめることを心配してゐるのです。僕の處へあなたが來なくなることを恐れてゐるのです。僕は少し淋しすぎるのですから。

下島。先生のやうな悟つた方でも、淋しいことがあるの。

英次。僕は悟つてはゐませんよ。

下島。私には先生は本當にさとつた方としか思へませんわ。いつもおちついて、しつかりして、自分の道を迷はずに歩いていらつしやる方だと思つてをりますわ。私は先生位、心の鍛へられた方を見たことはありませんわ。浮いたことはちつともおつしやらないし、いつも嚴肅で、快活で、頭がよくお働きになるのにはおどろきますわ。

英次。僕の快活になれるのは、あなたのゐる時だけですよ。その他の僕の生活は冬の最盛りのやうな生活です。

下島。さう云ふ生活をつゞけて、平氣でいらつ

しやるのに私は本當に感心してをりますわ。

英次。あんまり平氣でもないのですよ。ついよけいなことをしやべりました。畫を始めませう。

下島。えゝ。

英次。畫をかかずに、吞氣にしてゐるのもたまにはいゝものですが、もう少し喰ひ入らないと我慢が出來ませんから。ぬきさしの出來ない、何處もかしこも充實し切つて、しかも最も深い處で全體が一つになつて落ちつきはらつて、神祕の世界を暗示してゐる、さう云ふ處まで入つてかきたいのです。

（下島着物を着かへようとする）

六

（同じ室。英次、小野寺、山田話してゐる）

英次。人間と云ふものはへんなものですね。特別に僕がへんなのではないかと時々思ひますがね。悟つて見ればなんでもないかも知れませんが、悟らない所に又面白味がありますね。藝術と云ふ仕事は、悟つて許りはゐない方がいゝやうですね。東洋の畫のいゝ所はさとつた所がある所と思ひますね。西洋のいゝ畫は、さとらない所から生れたもののやうに思ひますね。兩方のいゝ所を調和させるのは、悟る方がいゝ時は悟り、悟る必要がない時は悟らない所にあるやうに思ひますよ。あてにはなりませんが。

山田。さうも云へるでせうね。死ぬまで悟る必要のない人間も、見ともないかも知りませんが、いつも悟つてゐる人間許りも困りものですね。人間は矢張りこの地上の生活をたのしく出來たら、した方がいゝと思ひますね。尤も本當に悟つた人間は、世界をよくしようと云ふ熱情にます／＼燃えてゐるものかも知れませんがね。

英次。社會をよくすると云ふことはどう云ふことですかね。私の考へでは皆が人間になることと思ふのですが、こなひだ僕の處へ、金をもらひに來た主義者の話ではプロレタリヤの世界になると云つてゐましたがね。僕はその方のことはよくわからないせゐか、よくのみこめなかつたのですよ。それで僕はかう云つて聞いて見たのです。プロレタリヤの運動と云ふものは、益々プロレタリヤがプロレタリヤになる運動なのですか。それともプロレタリヤがブルジョアになりたい運動なのですか。それとも眞人になりたい運動なのですか。さう云つて聞いてもはつきりした返事は得られませんでしたよ。へたな說教されて時間をつぶされるのがいやで、二三圓の金をやつて歸つてもらひましたが、あんなのは本當の主義者ではないでせうが、頭のよくない男でした。僕は人をおどかすのが好きな男ですから一寸おどかしてやりました。

小野寺。君の處へはくるだらう。

山田。さうは來ない。何しろ僕の生活を見たら、一寸金のことは云ひだせまい。

小野寺。君はなぜあんな生活をつゞけてゐるのだい。

山田。女と云ふものはいくら神妙でも、贅澤にはなれやすいものだからね。折角質素い生活になれて來てゐる美德を失はすのもいやだからね。又妻の父もそれをいやがるのだ。しかし僕は、貧乏生活が人間の理想とは思つてゐない。たゞいゝ世界が來た時、すぐ金持の生活が出來るものとは僕は思はないからね。

英次。しかし山田さん位になつたら、贅澤なさつていゝと思ひますがね。

山田。わるいとも思ひませんが、趣味から云つても質素がすきなのです。

英次。僕はこの頃少し贅澤がすきになつて來てゐるのですよ。その方が精神活動が豐富になれさうに思つてゐるのです。

山田。それはあなたが畫家だからではないですかね。殊に洋畫家だからではないですかね。

英次。さうかも知れませんね。

小野寺。それは山田君は贅澤にあきた人だし、君は又貧乏にあきた人だからだよ。

英次。さうかも知れないね。山田さんは贅澤からとれるものはとつてしまつた方で、僕は又貧乏で鍛へられるものは鍛へられ過ぎてしまつたのかも知れませんね。あまりに私の生活には冬が多すぎますからね、少しは春の日に憧れたくなるのです。又夏の盛りにね。

山田。本當にさうですね。僕の生活にも冬もありましたが、この頃はあまりに春らしい生活がつゞきすぎたかも知れません。

英次。自分の内にかくれてゐたものを生かすのは氣持のいゝものですね。

小野寺。君の畫はいつ出來るのだ。

英次。もう大概出來たのだ。

小野寺。まだ見せる氣にはならないかい。

英次。いや、もう見せてもいゝ。昨日かき上げたやうなものだが、今日もう一度よく見ようと思つてゐるのだ。

小野寺。それぢや見せたまへ。

英次。それぢや見てもらはうかね。

（畫のおほひをとる。二人見とれる）

山田。野中君、君がこの畫をかいたことを僕は日本人にかはつて感謝したく思ひますよ。

英次。山田さんにさう云つて戴くと、僕は本當にありがたく思ひます。

山田。日本の女性の美が、實に深く完全に出てゐると思ひます。愛してかいたと云ふのはこんな畫を云ふのでせう。

英次。僕は讃美してかいたのです。憧憬してかいたのです。

小野寺。熱愛してかいたのではないかい。何處かに執念深い所がある。

英次。そんなことは云はないものだ。

小野寺。僕はほめたつもりで云つたのだよ。

英次。あまりほめたことにはならない。

（三人笑ふ）

山田。野中君は、之を手ばなす氣はないでせうね。

英次。いえ、ないことはないのです、賣る氣ではゐるのです。少し金もほしいのです。第二のくはだてもしてゐるのです。

山田。いくら位なら手ばなす氣なのですか。

英次。まあ、二千圓と云ふフダでもつけようかと思つてゐるのです。

山田。それなら僕に賣つてくれませんか。父に買はしますから。

英次。あなたが買つて下さるなら、もつとまけてもよろしい。

山田。いゝえ、まけて戴く必要はありません。父に買はすのですから。

英次。あなたのお父さんにお氣に入るかどうか。

山田。金は父に出さして、僕がとりあげるのですよ。もし父が出さなければ、父からもらふ金を出さして買ふだけです。

小野寺。よかつたね、野中、おごらなくつてはいけないよ。

英次。おごるとも。下島さんもよろこぶだらう。

山田。もう二時になる、もう下島さんのくる時分だらう。失禮するかね。

小野寺。えゝ、歸りませう。

山田。それでは金は今日明日にもとゞけます。歸りに一寸父の處へよつて見ます。家にゐればすぐ出させて、後刻にとゞけさします。

英次。少しも急ぎません。

山田。他へ賣られると困りますからね。

（三人笑ふ）

山田。それでは失禮します。

英次。またどうぞ。

（三人退場、英次まもなく登場。英次自分の畫を見てゐる内に、涙ぐみ、よろこびのあまりをどるやうに歩く。戸をたゝく音）

英次。はい。

（下島登場）

英次。いゝ話がありますよ。

下島。どんな。

英次。あなたもきつとよろこぶでせう。

下島。どんなお話。

英次。あなたは小野寺と山田さんにお逢ひでしたでせう。

下島。えゝ、其處でお逢ひしました。

英次。山田が僕の畫にすつかり感心してくれたのです。

下島。お見せになつたの。

英次。えゝ、もう出來上つたやうなものですからね。見せてはいけないのですか。

下島。いゝえ、そんなことはありません。

英次。何かあなたは氣になることがあるのですか。

下島。いゝえ。

英次。東の病氣はどうですか。

下島。もう大概おなほりになりました。

英次。もうそれなら看護婦も免職ですね。

下島。えゝ。

英次。それから山田があの畫を二千圓で買つてくれたのです。

下島。まあ、もうお賣りになつたの。

英次。でも今後いくらでも、もつといゝ畫がかけますからね。それにあなたに合作のお禮もあけたいと思つてゐるのですよ。今度の畫はあなたと僕の合作のやうなものですからね。千圓だけ差し上げたいと思つてゐるのです。とつて下さるでせう。

下島。それは戴くわけにはゆきませんわ。

英次。なぜです。

下島。それでもあまり多すぎます。

英次。僕のすることは、なんでもよろこんで承知して下さるのが、賢いことです。遠慮なんかするのは、つまらないことです。

下島。それは先生のおつしやることは何でもおきゝするのが、一番いゝとは思ひますが、さうもゆかないことが御座います。先生にお金をいたゞく理由はありませんわ。

英次。それでも今度の畫は合作ですからね。

下島。それだつて私は先生に教へていたゞいてゐる、お禮にモデルになつただけなのですもの。

英次。お禮に仕方がなしになつたのですか。いやいや。

下島。そんなことはありませんわ。

英次。僕の云ふことはきくものです。何にも云はずにとつておいて下さい。

下島。そんなことはいやです。

英次。なぜいやなのです。あなたは僕の厚意を侮辱するのですか。

下島。先生はなぜそんなに澤山の金を私に下さりたがつていらつしやるのです。

英次。僕はたゞあなたにお禮がしたかつただけなのです。

下島。私、先生の御心もちがはつきりわかりませんわ。

英次。僕は無邪氣なつもりです。

下島。先生は私を占有したがつていらつしやるやうに私には時々思へるのです。

英次。それは僕の空想だつたこともあります。

しかし僕にそんな資格はないことを知つてゐます。だから僕は何にもあなたに要求はしません。

下島。畫におかきになりませんか。

英次。あなたも無邪氣によろこびをわけて下さつていゝと僕は思つてゐるのです。この畫がよく出來上つたことを。この畫は二人の子のやうなものなのですからね。

下島。それが賣れたので、おうれしいの。

英次。あなたは東にかぶれましたね。もつと無邪氣になつたつていゝでせう。無邪氣によろこび、無邪氣に人の厚意をうけとると云ふことはいゝことと思ひます。

下島。本當に無邪氣にいたゞいていゝの。

英次。勿論です。

下島。私は先生を信じていゝのですね。先生に少しも野心のないことをね。

英次。勿論です。

下島。矢張り私が勝つたわ。

英次。なんです。

下島。私と東さんとよく議論するのです。東さんは先生が私に野心があるにちがひないと云ふのです。私は先生は鏡のやうにすんだ心を持つて、くもりのない玉のやうな親のやうな愛をもつて私のことを心配してゐて下さるだけだとさう云ふのです。私の方が勝ちましたわ。

英次。それなら金はとつて下さいますね。

下島。え、戴く方がよければ戴きます。

英次。それで僕も安心して畫がかけます。

下島。ですけど一寸まつて下さい。私、相談してからはつきり御返事しますわ。

英次。誰にです。

下島。（一寸びつくりし、何げなく）父にです。

英次。あなたは譃つきですね。あなたは東と相談しようと云ふのでせう。

下島。……

英次。かくしても駄目です。

下島。……

英次。祕密にして、僕をだまさうと約束をしたのですか。

下島。さう云ふわけではありません。たゞ東さんが先生にあまり早くお知らせすることを恐れてゐるのです。

英次。なぜ恐れてゐるのです。

下島。先生の今度のお仕事の邪魔になつてはわるいと思つて。

英次。いつ約束したのです。

下島。昨晩でした。

英次。……（沈默）

（下島、着物を着かへる。英次、默つてゐる。泣きさうな顏をするのを辛く耐へる。下島、モデルの座につく。英次、畫筆をとり畫をかかうとして。泣き出す。下島もだん／＼悲しくなり、すゝり泣く）

英次。下島さん、泣かないで下さい。僕だつて男です。與へられた運命を耐へて見せます。僕は正直に云つて東の思つてゐる通りあなたを愛してゐたのです。專有出來たらしいと思つてゐました。しかし僕は正直に云ひますが、人殺しなのです。千代子は病氣で死んだのではなく、僕が嫉妬で殺したのです。その上、僕は片輪です。僕はいくらなんでもあなたのやうな處女を專有する資格のないことは十分知つてゐたのです。だからあなたが僕の處に來た時、僕はあなたからなるべく逃げようとしてゐたのです。下島さん、矢張り僕はだめです。すぐ歸つて下さい。僕は一人になりたいのです。

下島。先生！　本當にすみませんでした。

英次。すむも、すまないもありません。自業自

得です。早く歸つて下さい。私は人殺しを實に嫌つてゐますが、私の手はあなたの首をしめたがつてゐますから、早く逃げていらつしやる方がよろしいよ。

下島。（恐怖におそはれて英次の前に跪く）先生、許して下さい。許して下さい。

英次。僕はあなたを殺して、自分も死にたいのです。

（下島、おどろいて逃げ出す。英次、戸のかぎをかける）

下島。先生！　私、先生のおつしやることならなんでもきゝます。どうか殺すのだけ許して下さい。

英次。それなら、（かぎをはふりなげ）戸をあけてその着物をもつてお逃げなさい。そしてもう二度と來てはいけません。來いと云つても來ないでせうがね。

（下島、着物をかゝへ、かぎで戸をあけようとするが、ふるへて開かない）

英次。かぎをおよこしなさい。あけてあげませう。

（下島、こは〴〵かぎを與へる。英次いきなり、下島に接吻する。下島、半ば抵抗し、半ば服從する。英次、戸を靜かにあける）

下島。先生！

英次。下島さん、僕をにくまないで下さい。僕の内には惡魔もゐますが、神もゐますからね。

下島。先生！　私（瞬間的に英次に屈從しようとする）

英次。馬鹿！（戸からつき出さうとして）可愛い馬鹿！　幸福でゐろ、（戸からつき出し戸をしめる、初め靜かに）人殺し、人殺し、セムシ、セムシ・天才、天才、色魔、お人よし、悟つた男、何處までも生きてゆく男、お前はうまくやられたな。だが石にしがみついても生きてやるぞ。いくぢなし、いくぢなし、いくぢなし……（とう〳〵淋しさに壓倒される）

——幕——

（二六、八、一〇）

後書き

「或る畫室の主」は一、二、を第一幕、三、四、を第二幕、五、六、を第三幕としてもいゝと思ひます。

淋しさ

逐ひ出せども〳〵
淋しさ我が胸に入りこむ、
逐ひ出せども〳〵
飼犬の歸りくる如く。

泉の嘆き

はき出せども〳〵、
はき切れず〳〵
かく泉嘆く
はき切れぬ内は

火を

日常生活の内に
火を。
人間の心の内に
火を。
たえざる
火を。

人間萬歲（狂言）

（倉田百三兄に捧ぐ）

一

天使。神様。

神様。なんだ。

天使。地球がやつと冷えて表面がかたまりました。もう生物をお放しになつても大丈夫と思ひます。いかゞとりはからひませう。

神様。それならアミーバーでも一疋地球の水のなかに入れて見たらいゝだらう。

天使。それだけでよう御座いますか。

神様。それだけでも多すぎる位だらう。

天使。あんな目にも見えないやうなものを一疋つかまへると云ふのは骨が折れますが。

神様。それなら、一滴の水のうちにゐる生物をのこらず入れてやれ。何が入つてゐてもかまはないから。

天使。それならさういたしませう。

神様。地球は一億年もたゝない内にさぞいろいろのものが生れるだらう。そして又亡びてゆくだらう。

天使。彼等はなんの爲に生きるのか、知ることは出來ないでせう。

神様。俺だつて考へても見ないことを、彼等が知ることが出來るものか。だがいくら知らなくつたつて、彼等は生きなければならない。

天使。それならこの水溜りのなかから、この耳かきで一しやくひして地球におとしますがよう御座いますか。

神様。少し多すぎるがまあいゝだらう。さぞ多くのものがふえて食ふものに困るだらう。

天使。それならこれだけおとします。之からどんなものが生れるでせう。

神様。あのちつぽけな地球ぢやあまり大きなものは生れないだらう。その内には地球を七卷半でも出來る動物だつて生れる力をもつてゐるのだが。地球ぢや高々それの五億三千萬兆倍位のもの切り生れないだらう。

天使。隨分利口なものも、この内から生れますかね。

神様。それは生れなければならない用意は出來てゐる。それが本當に生きたら、地球は面白いものになるだらう。何しろ俺の腦味噌の垢のかけらが入つてゐるからな。

天使。それでは大したものが生れるで御座いませう。

神様。それを本當に生かすことが出來る奴が出來たらな。しかしそれまでに地球がつぶれるかも知れない。

天使。地球はそんなに早くつぶれますかね。

神様。そんなことは俺も知らない。知りたいとも思はない。俺の子供は多すぎるから、何處で衝突しないとも限らないし、衝突しないだつて、どんな風にならないとも限らないからね。しかしまあ、俺の考へぢや、俺の精神が地球を支配し切つてから一億年は地球の壽命があると思つてゐる。

天使。たつた一億年ですか。

神様。俺達にとつて一億年はなんでもないが、地球にとつてはそれでも退屈すぎる位、永く思ふだらうよ。

天使。それならこれをこぼしますよ。（こぼす）

神様。あゝ。それなら地球のことはお前にまか

せるよ。
天使。はい、いろ〳〵のものが生れましたら、どう云ふ風にいたしませう。
神様。黙つて見てゐればいゝ。随分お互に殺しあつたり、食ひあつたり、泣きさけんだり、苦しがつたりするだらうが、ほつたらかしておけ。たゞ他の星にぶつからないやうにするのと、天候のことを、一寸注意するといゝ。それも、いゝ加減でいゝ。どうせ、お前は無精で居眠りが好きだから丁度いゝだらう。
天使。御冗談を。
神様。はつは。
（他の天使登場）
他の天使。神様、すまないことをいたしました。
神様。どうした。
他の天使。私が計算を一寸狂はしまして、私の星の軌道を髪の毛の太さの百分の一、右にかぢを取りましたら、とう〳〵一つの星と衝突いたしまして、とう〳〵両方の星を丸焼にして發散さしてしまひました。
神様。あはゝゝ、馬鹿な奴だ。そんなにかぢをとり損ふ奴があるか、あき盲目。だが焼けてしまつたら仕方がない。その空地を何かでふさぐ必要がある。
他の天使。誠に済みません。
神様。すんだことは仕方がない。
天使。それでは失禮します。
神様。さうか。それならよろしくたのむ。
天使。はい。
神様。それから、あの数學の大先生の處に行つて、星が二つなくなつたから、あとの星の軌道をかへて調和をはかるか、又別に二つの星をつくらなければならないか、計算してもらつて來てくれ。
天使。はい。（退場しようとする）
神様。一寸待つた。お前の星は何號だつたかね。
他の天使。十五億三千三百六十番で御座います。
神様。そしてお前の衝突したのは。
他の天使。あまりあわてましたので、つい見おとしました。
神様（笑ひながら）困つた奴だな。
（第三の天使登場）
第三の天使。私の星が、十五億三千三百六十番の為に衝突されまして消えうせまして御座います。私のかぢのとり方は正確だつたと存じてをります。
神様。うん。さうだらう。そのあわてものの十五億三千三百六十番の運轉手はこゝにゐる。
他の天使。さつきはどうも失禮しました。
第三の天使。あゝあなたでしたか、どうも困りましたね、あなたには。
他の天使。誠にすみません。
第三の天使。折角私がたのしみにしてゐた、計畫がすつかり駄目になつて、乗つてゐる生物なんかは實にあわてふためいて見てはをれませんでした。折角、神様にお願ひして生命の泉をいたゞいて、それがやつとものになつて、どの星にもない程の美しい、立派なものが生れ出したので、私はどんなにか樂しみにしてをりましたのに。
他の天使。どうもすみません。
第三の天使。本當におどろきましたよ。あんな處にあなたの星が出てくるとは思ひませんでしたからね。地圖を見たら、あなたの星は、十三億七十八番さんの向う側に出てくるはずなのですからね。おどろきましたね。
他の天使。どうも面目次第もありません。
第三の天使。本當にがつかりしましたよ。何しろ十三億年の間、丹精したのですからね。出來たら返して戴きたいと本當に云ひたい所な

のです。

他の天使。本當にすみません。

第三の天使。どうも皆も、おどろいてゐました。私の星に住んでゐた、一番偉い天文學者は、あなたの星があすこにのこつと顔を出したのを見た時、自分の頭の方が狂つたのかと思つて死んでしまひましたよ。私もおどろきましたね。

他の天使。面目ありません。

第三の天使。本當にどうしてあんな馬鹿なことをしたのです。

他の天使。私の計算だと、あなたの星の方がもう三分早くあすこを通過なさると思つてゐたのです。

第三の天使（他の天使の顔をいきなりぶち）馬鹿　きちがひ、あき盲目。（ぶちつゞけようとする）

神様。よせ！　すんだことを怒る馬鹿があるか。怒つたつて星は歸つて來ないんだ、馬鹿。

第三の天使。はつ。

神様。お前にはもつと面白い星をその内、つくつてやるから、あきらめろ。

第三の天使。はつ。

神様。お前の星は何番だ。

第三の天使。九億七千八百六十三萬九千八百七十三號で御座います。

神様。天使に、お前は覺えたか。

天使。かきとめておきました。

神様。云つて見ろ。

天使。十五億三千三百六十號と、九億七千八百六十三萬九千八百七十三號とです。

神様。それに相違ないな。

他の天使達。はい。

神様　それなら數學者にさう云つてくれ。星をつくるのは簡單だからいくらでもつくるが、軌道の計算が厄介ならどつちでもいゝと。俺にはたねはありすぎるが、この宇宙は狹すぎるからあんまり星をつくるわけにもゆくまいから。

天使。はい。

二

天使。神樣。

神様。なんだ。

天使。地球にこんなものが生れました。（蛇を見せる）

神様。縄のやうなものが生れたな。

天使。どうも、見て氣持のいゝものではありませんが、どうしませう。

神様。生れたら仕方がないから生かしておけ。

天使。處が、こいつが、こんな美しい小鳥や、こんな可愛い動物（兎）を食ふのですが、どうしませう。

神様。仕方がない、食はしておくさ。

天使。これが今に地上を全部占領しさうに見えるのですが、大丈夫でせうか。

神様。大丈夫だよ。お前は本當に氣の小さい奴だな。俺の頭の垢のかけらはまだ芽を出さないかな

天使。まだ出しません。

神様。それが出れば、それが自分に氣に入らないものは段々退治てしまふだらう。

天使。早く出てくれるといゝのですが。

神様。出たらもつて來て見せろよ。

天使。はい。

第三の天使。（登場）神様。

神様。なんだ。

第三の天使。私の星がやつと形が出來だして來ました。

神様。さうか。

第三の天使。今度は大きいので、張合がありますありがたう御座います。

天声。それでは失禮いたします。

神様。さよなら。

（天使退場）

第三の天使。あの天使は何の星をうけもつてゐるのです。

神様。二十三億何番だつたかな。地球と云ふ星だ。

第三の天使。あゝ、あの小つぽけな、しかし何かあなたが飼つていらつしやる。

神様。飼つてゐるわけでもないが、一寸生命の水をやつたのだ。

第三の天使。あんな小つぽけな星では碌なものは出来ないでせう。

神様。しかしあの生命の水には俺の腦味噌の垢のかけらがとけこんでゐるから何か面白いものが生れるかも知れない。

第三の天使。勿體ないことをなさいましたね。

神様。だつて、そんなもの持つてゐたつて仕方がない。あの小つぽけな星では小つぽけ相當なものが出来るとたのしみにしてゐるのだ。

（天使達七人登場、中に女の天使もまじつてゐる）

七人の天使の一人。神様。御機嫌伺ひに参りました。

神様。お前達も達者で結構だ。變つたことはないな

七人の天使の一人。はい、すべて無事にやつてをります。

神様。それは何よりだ。一つお前達兄妹のをどりでも久しぶりに見せてもらはうかな。

七人の天使　畏まりました。

神様。（第三の天使に）七つ星が踊るさうだから手のすいてゐる奴は皆見にこいとさう云つてくれ。

第三の天使。はい。

神様。（一番若い女の天使に）お前はいつ見ても美しいな。子供はほしくないかな。

一番若い女の天使。結構で御座います。

神様。いゝ子供がほしければ遠慮はいらないぞ。

一番若い女の天使。まあ御遠慮申しませう。

（皆快活に笑ふ）

神様。可愛い奴だ。身體を大事にしろ。

一番若い女の天使。ありがたう御座います

（多勢見物にくる）

（静かなる音樂により、フラ・アンゼリコーの繪のやうに連りをどる）

（天使あわてて登場、皆居るのでおどろく。をどりすむ）

神様。なんだ。

天使。神様。こんなものが生れてゐました。これが、あなたの待つていらつしやつたものではないでせうか。（人間の小さい人形をもつてくる）

神様。俺は何にも待つてはゐなかつたが、俺達によく似てゐるな。ふん、こんなものが生れるとは思はなかつた。之は少し見つけものらしいぞ。皆に見せてやれ。

誰と云ふこともなく。まあ可愛いこと。これがあなたの星に生れたのですか。

天使。えゝ。

誰と云ふことなく。之はたつて歩きますか、はつて歩きますか。

天使。生れたてははつて歩きますが、すぐ立つて歩くやうになります。

誰と云ふことなく。之では他の動物にやられることはありませんか。

天使。あります。ですが中々利口です。

神様。利口か。

天使。えゝそれは利口です。素手では勝てないのでいろ／＼の武器を考へ出して使つてゐます。弓なんかも、もうつかつてゐます。

神様。ふん。それは面白い。

女の天使の一人。それは感心ですね。

天使。それから火をつくることを考へ出しました。

神様。さうか。それは有望だ。大事にしてやれ。

天使。それから。

神様。もうその話はそれでいゝ。さあ、もう一度をどつたり、をどつたり。

七つ星の天使達。はつ。

（七つ星をどる）

神様。さあ、今度は皆でをどらう。賑かな音樂をやつてくれ。

音樂の天使。はつ。

神様。さあ、のこらずをどれ、をどれ、俺の相手はお前だ。

一番若い（七つ星の）女の天使。はい。

三

神様。こゝから見える星の運行の美しさはどうだ。（星が大きく美しく目に見えて動いてゐる）

女の天使（七つ星の一番若い）。本當に美しう御座いますね。

神様。だがお前はなほ美しい。

女の天使。御世辭は澤山。

神様。だが、たまには俺もお世辭も云つて見たい、御世辭ばかり云はれてゐても面白くないからな。

女の天使。他の天使達が氣にしてゐますわ。

神様。それが氣になるなら、あつちへ行け。だがお前は俺のそばを離れることは出來まい。

女の天使。えゝ。

神様。俺はこの美しい眺めを一人で見てゐるのにあきたのだ、たまには二人で見たい。

女の天使。あなたにはいくらだつていゝ方があるのでしよ。

神様。ないとは云はない。だが、お前を美しく思ふにはかはりはない。そしてかうして二人だけで、この世界を見てゐるよろこびは格別だ。

女の天使。本當に、私もこんな嬉しいことは初めてです。こんな美しい高殿から、こんなに美しい天空を、あなたとかうやつて靜かに見てゐることが出來るとは思ひませんでした。あゝあの二つのぐる〳〵廻る星の美しさ、また、あの青い、すき透つた光りの美しさ、あの彗星のをかしさ。あの星の月を澤山もつてをりますこと。いろ〳〵の星がありますのね。

神様。さうだ、俺はいつも一人で、之を靜かに眺めてさうして思ふのだ。俺は何のために生きてゐるかと。

女の天使。あなたはそれを御存知ないのですか。

神様。お前は知つてゐるか、俺が何のために生きてゐるかを。

女の天使。えゝ、知つてゐます。

神様。なんのためだ。

女の天使。あなたのためよ。

神様。可愛い奴。（接吻しようとする）

女の天使。よして。星が笑つてゐますわ。

神様。そのとばりをおろせ。

女の天使。いや。もう少しかうして見てゐませう。

（鳥が鳴く）

女の天使。あゝあの鳥の美しい聲。

神様。さあ、お前一杯のまないか。ついでやる。

女の天使。ありがたう。まあ、おいしいこと。

神様。何か面白い話でもしてくれ。

女の天使。ある處に。

神様。うん、ある處に。

女の天使。非常に好色な神様がありましたって。

神様。それから。

女の天使。その神様は澤山の子供を生みましたって。

神様。それから。

女の天使。それでおしまひ。

神様。あはゝゝ。つまらない話だな。それなら今度、俺が話してやらう。一人の大變賢い神様がありましたって。

女の天使。それから。

神様。あんまり賢すぎて、他の神様とは話が出來ませんでしたって。

女の天使。それから。

神様。それで、どうせわかってもらへないなら、愛らしい言葉で囀ける相手をさがしましたって。

女の天使。それから。

神様。それでおしまひ。

女の天使。何てつまらない話でせう。

神様。夜はふけて來た。さあ、家に入らうか。

女の天使。今度は私が話しますわ、可愛い鳩が。

神様。うん、可愛い鳩が。

女の天使。二羽でねぐらをさしていそいでゆきましたって。その時、ふと雌鳩が思ひますに。

神様。それから。

女の天使。どうせおちつく處はきまってゐるのだから、一つ夫をじらすだけじらしてやらうとさう思ったのですって。

(この時、滑稽天使、尻尾をもってゐる、うれしい時それを動かす、登場)

滑稽天使。神様。神様。

神様。なんだ。

滑稽天使。大變なことが出來ました。(泣き出す)

神様。(おどろき立ち上り)どうしたのだ。何が起ったのだ。

滑稽天使。それは〳〵大變な大變な大變なことが起りました。えん〳〵〳〵。

神様。早く云へ。早く云はないと、この棒で打つぞ。

滑稽天使。それでは申します。私の大事な大事な神様の魂が、別嬪さんにさらはれてゆきました。

神様。あはゝゝ。馬鹿。

滑稽天使。魂のぬけた神様。お目出たう御座います。やがて魂がもとの古巣にお歸りになる時は、別嬪さんのおなかのなかからもそれは美しい魂がとび出すで御座いませう。謹んでお祝ひ申します。

神様。馬鹿。

滑稽天使。夜の子供等、來てをどれ〳〵。よき魂の生れくるやう、をどれ〳〵。

(夜の天使、黒い風して來てをどりながら退場)

女の天使。まあ、いゝ、滑稽な天使ですこと。

神様。さあ、とばりをおろさう。

女の天使。えゝ。

四

天使。滑稽な天使さん。

滑稽天使。なんだ、小つぽけな星の神さん。

天使。神様はまだお起きにならないか。

滑稽天使。まだ〳〵今眠りの最中だらう。

天使。困ったな。どうも。

滑稽天使。どうした、奴さん。

天使。俺の星に大水が出て、折角の生物が皆死んでしまひさうなのだ。(泣き出す)

滑稽天使。それは困るだらう。死んでは困るだらう。大水が出たら困るだらう。あなたが涙をこぼしたらなほ地球の水がふえるだらう。

天使。どうしたらいゝだらうね。

滑稽天使。どうも仕方がないな。
天使。一寸神樣を起してくれないか。
滑稽天使。駄目駄目、今はそれ所ぢやない。
天使。もう神樣は起きてもいゝ時分だよ。
滑稽天使。處が大將別嬪さんにとつつかまつたから駄目だよ。
天使。本當にしいゝいゝほがない神樣だな。
滑稽天使。まあさうせくまい、せくまい。たまにはぐつすり眠かしてやるものだ。
天使。だつて神樣ともあらうものが。
滑稽天使。だつて力がありや仕方がない。神樣だから仕方がない。お前が神樣だつたら毎日起きては來ないだらう。
天使。そんなら俺は歸るよ。
滑稽天使。勝手にお歸り。
神樣。（登場）何を云つてゐるのだ。うるさい。
天使。大、大變なことが出來ました。
神樣。何が出來たのだ。
天使。大水が、大水が出たのです。
神樣。何處に大水が出たのだ。
天使。私の星に大水が出たのです。
神樣。なんだ。お前の星の話か。もう歸つたら水もひいてゐるだらう そしてのこらず死んだかも知れない。
天使。あの昨日お見せした人間が死にたえるかも知れないのです。どうしたらいゝのです。（泣く）
神樣。ほつたらかしておけばいゝ。俺の智慧が生きてゐれば、お前よりも百倍も利口だらうよ。早く歸れ、ぐづ／＼してゐると打つぞ。
天使。はい、はい。（退場）
神樣。人のいゝ天使だが、あいつは大げさ野郎で困る。
滑稽天使。本當にあいつはお人よしです。きつと人間をつかまへて、お前は神の子だ、神に愛されてゐる、神樣はわるいやうにはなさらない、神樣がいゝやうにして下さるから安心してゐるといゝ、なぞと敎へこんでゐるのでせう。
神樣。俺は與へるものだけ與へたのだから、あとは勝手にするがいゝ。
滑稽天使。あなたの好色も人間と云ふものにうつつたら一寸困りますな。
神樣。馬鹿。
滑稽天使。別嬪さんはどうしました。
神樣。今、お化粧してゐる。
滑稽天使。七つ星の他の連中が待つてをりますよ。早く支度するやうにおつしやらないと他の連中が氣の毒ですよ。
神樣。餘計なお世話だ。
女の天使。（登場）他の方はどうしてゐます。
滑稽天使。あなたのお目ざめになるのを謹んで待つておいでになります。
女の天使。それなら、もういつでも御一緒にゆきますと、さうおつしやつて下さい。
滑稽天使。畏つて御座りまする。（退場）
神樣。もうすぐ歸るのか。
女の天使。さうして又今度一人で來ますわ。
神樣。來られるかい。
女の天使。それはあなたの力の內ですわ。
（二人接吻する。滑稽天使、七つ星の他の連中をつれて來、それに氣がつき）
滑稽天使。廻れ右！（皆の前の方にとんでゆき）諸君に忠告する、見ざる、聞かざる、云はざる、ことに御なし下され度候。終り、廻れ右！
神樣。皆さん、お早う。
七つ星の他の連中。お早う御座います。
滑稽天使。いや遲やう御座います。
神樣。馬鹿！
七つ星の連中。それでは失禮いたします。
神樣。又時々來ておくれ。

七つ星の他の連中。はい。（退場）
（天使又あわてゝ登場）

天使。神様。

神様。なんだ。

天使。御安心下さい。水はひきました。人間が、二人助かりました。

神様（窓からそとを見、無愛想に）それはよかつたな。

天使。ありがたう御座います。
（神様何かを認め、笑ひ顔して別れのしるしに布をふる）

天使。神様！

神様。なんだ。

天使。二人のこれば大丈夫でせうな。

神様。さうだらうな。（布をふりながら）

天使。ありがたう御座います。さやうなら。

神様。さよなら。

五

神様。滑稽天使！

滑稽天使。はい 何か御用で御座いますか。

神様。むしあつい晩だな。

滑稽天使。殊にむし暑い晩で御座います。

神様。誠に寢苦しい晩だ。

滑稽天使。誠に御意の通りで御座います。

神様 昨日と今日とどうしてかうもちがふのかな。昨日は隨分氣持がいゝ晩だつたがな。

滑稽天使。それはかの天女が御いでになると、ならないことのちがひかと存じます。暑さから申しますと、昨日も今日も正しく同じで御座ります。

神様。本當に同じか。

滑稽天使。誠に同じぢや、たゞ心の持ち方一つぢや、馬鹿神様がかう申してゐられます。

神様 あの女をよんで來い

滑稽天使。それはおよしになつた方がいゝと存じます。

神様。なぜだ。

滑稽天使。それでも、この頃あなたの御評判が甚だよく御座いません。神の奴なんかゐなくたつてちつとも困らないなんぞと申してをります。

神様。さうか。ゐなくつてよければ、結局幸ひぢやないのか。俺もとつくに神様にはあきてゐるのだからな。

滑稽天使。それでも皆謀叛を起してあなたが座敷牢に入れられたらどうなさります。逢ひたい方にも逢へませんよ。

神様。滑稽天使、俺は神の位置におかれてゐるものぢやない、神そのものなのだからいくら座敷牢に入れられたつて、俺はその内に又樂みを見出すことが出來る

滑稽天使。それなら今晩は一人でゆつくりお休みになつた方がいゝかと思ひます。昨晩のことでは皆憤慨してをります。殊に道徳天使なんかは、神様からあれでは、いゝ、夜はな[illegible]が澤山出來て困るだらうと申してをります

神様。俺の子供をつくると云ふことをよろこぶことが出來ないのか。世も末になつたものぢや。

滑稽天使。本當にさうで御座います。神様が一人の女天使のために夜も眠れずなぞと云ふ時代が來たのですからね

神様。そんな時は今まで何億遍あつたか知れやしない。尤もその時から俺の評判はあまりよくなかつたが、少なくも彼等は俺の利口さと俺の他人の快樂や自由の邪魔をしないと云ふことを知るだけの利口さを持つてゐた。處がこの頃の天使と來たら、頭が悪くつて、俺の心はまるでわからない。そして俺の行爲だけを自己流になるべく嚴しく解釋して得意になるやうになつた。昔もたまにはそんな天使

もゐたが、近頃程、やかましくはなかつた。ともかくあの女天使をよんで來い。

滑稽天使。他のものにお命じになつて下さいまし。私はそんな使をするのは嫌ひで御座います。

神様。勝手にしろ。誰か。

道徳天使。はい。（登場）何か御用で御座いますか。

神様。（獨白）どうもいやな奴が來たな。（道徳天使に）まあ其處にこしかけたらいゝだらう。別に用ぢやないが、話相手がほしかつた。

道徳天使。それは丁度よう御座いました。私もあなたとお話したいと思つてをりました。

神様。さうか。何の話だ。

道徳天使。どうも近頃、天上界におきまして、私を輕蔑するものが非常にふえて來ました。之は非常に危険なことと思ひます。之では段々秩序が亂れ、天使達は眞面目に自分の仕事をするのをいやがり、ずるけることを許り考へるやうになり、快樂を追つて他を忘れる傾が御座います。殊に男女間の問題になりますと、殊に甚しく、今年になつて私の見るに耐へない事實が、一億三千三百三十三萬三千三百三十三、御座いましたが、昨晩又一つふえました。一億三千三百三十三萬三千三百三十三、いや、四になりました。どうも困つたもので御座います。

神様。（嚴格に）道徳、使！

道徳天使。（思はず立ち上り）はつ。

神様。お前の役目は何だか知つてゐるか。お前は探偵でも、刑事でもないぞ。天の一方からたゞ美しい光りをもつて天使の心を照してやればそれでいゝのだ。

道徳天使。だと申しまして、今のまゝでは恐ろしい事が起ります。私は見るに忍びません。（泣く）

神様。馬鹿。出しやばり。見るに忍びないで泣く奴があるか。そんな意氣地がないから、皆に馬鹿にされるのだ。泣く奴があるか。大事な時に、俺の顔でも平氣でにらみつけろ。さうして俺でも穴に入りたいやうな恥かしい氣を起させるやうな強い目をむき出せ。お前は少しおいぼれたな。さあ、泣かないでいゝ。お前は天上界には大事な星だ。何にも驚かずに、默つて見つめてゐろ。さうすれば皆、お前を馬鹿にするやうなことを云つても、お前を怖がるのだ。そしてお前を怖れながらも尊敬し、愛しなければならないのだ。處がお前が出しやばつて、後悔してゐる人を責めすぎれば、相手は益々やけになる許りだ。お前はたゞ見つめてゐればいゝのだ。そして少し位な罪は大目に見てやるのだ。お前の力を本當に知るものは、罪をいくらか作つてゐるものだ。天使共が時々罪を犯すのは、お前の力や、御利益をましてくれるのだ。ありがたく思つていゝのだ。以後は少し心得ろ。

道徳天使。はつ、それでは先づ第一に、あなたのお顔をにらんであげませう。

神様。それには及ばない。

滑稽天使。偉いぞ、偉いぞ、道徳天使。睨め、睨め、神様をうんと睨め。神様を穴のなかにちゞみ上らすまで睨め。

神様。（少し閉口したが）處が俺は駄目だぞ。貴様を俺がつくつたのは、天使を怖がらす爲で、俺を怖がらす爲ぢやないのだ。俺には俺の道徳がある。俺位賢くなれば、又ちがふ道徳天使が必要だ。俺の道徳天使を見せてやらうか。

道徳天使。はい、見せて下さい。

神様。一寸きり見せられないぞ。俺の道徳天使、一寸おいで。

生命天使。はい。（登場）

道徳天使。誰かと思つたら生命天使か。

神様。俺達は生きてゆくのに、死滅しない爲には、道徳天使だけでは駄目だ。だが生命天使を皆に見せるのは、まだ少し強すぎる、早すぎる。もうよい、ひつこめ、ひつこめ。

生命天使。はい。（退場）

神様。わかつたか。

滑稽天使。相變らず喰へない親爺だ。俺の親爺だ。あゝ云やかう、かう云やあゝ、手がつけられない親爺ぢや、いや。

神様。道徳天使。他に用はないか。だが俺はお前を尊敬してゐるぞ。お前の光りと威嚴のますます強くなるやう、俺はのぞんでゐるのだぞ。俺もお前には皆の前では頭の上らないことにしてあるのだ。さあもう用はないのだらう。歸つた、歸つた。

道徳天使。はつ。（退場）

滑稽天使。どうです、一つ別嬪でもよんで來ませうかな。あいつの顔を見ると少し生命の洗濯がしたくなりますからな。

神様。いゝよ、あいつの顔を見たら、一人で寢る氣になつたよ。

滑稽天使。それではお休みなさい。

神様。お休み。

（滑稽天使退場。神様、帳をあけ星の運行を見。

神様。道徳天使の眼を見たら久しぶりに清い力がわいたぞ。愛する星の天使達、愛らしい我が子供達よ。俺はお前達に祝福を送る。愛する、美しい我が天使達。あまり氣持がいゝ。笛でも吹きたくなつた。一つ久しぶりにふくかな。

六

天使。神様はどこにいらつしやる。

滑稽天使。神様は今、散歩に出かけた。

天使。何處にいらつしたらう。

滑稽天使。知らないね。どうした、人間は死にたえたか。

天使。いや、段々景氣がいゝ、随分ふえた。しかし折角何か面白いものをつくり出すかと思ふと、すぐ莽氣になつて、快樂におぼれて、野蠻な人間達にやられてしまふ。

滑稽天使　さうか。矢張り小さいだけあつて望みも小さいし、先のことを考へる力がないのだな。

天使。まあそんな所だらう。何しろよく戰爭するよ。そして勝つたものは大得意だが、負けた奴は可哀さうに男は皆、殺されて、女や子供は奴隷にされてしまふのだ。何しろ、小さい處に住んで得意になつてゐるのはいゝが、仲がよくなくつて、他の奴はどうなつてもかまはない、自分達さへよければと云ふのだから、中々うるさいし、面倒だし、腹がたつよ。どうせ生れてすぐ死ぬのだから仲よくすればよささうなものだが、馬鹿で、望みが小さくつて、意氣地がなくつて困るよ。時々は一思ひにひねりつぶしたくなる程。それで生意氣と來てゐるのだからね。しかしよく見ると、滿更、すてたものでもないと思ふのだがあてにはならない。だが、自分より大きなものや強い他の動物をどん／＼やつつけることには感心する。それに中々よく働く奴もゐるし、頭のいゝ、何か拵へ出しさうな、又天使のなかでも珍らしいやうな美をちやんと具へてゐる可愛い女もゐるよ。

滑稽天使。小さいだけ可愛いだらう。だがすぐ子供をつくつて齢とつてくたばつてしまふのだらう。

天使。それはさうだ。何のためにあんなにして生きてゐるのか、一寸わからないね。だが當人は得意でゐるよ。恰も永遠に自分は生きら

れるもののやうに考へてゐる。その點矢張りあの神様の腦味噌の香位はもつてゐるらしい。

滑稽天使。さうか。まあいゝ玩具が出來て君も仕合せだ。俺は又神様と云ふ玩具をもたされてるので時々厄介だよ。あいつは中々利口で、お人よしで、好色で、威張りやさんだが、見てゐるとすきになるから不思議だ。一寸あいつが笑ふと俺は本當に死んでもいゝと思ふのだよ。(でんぐり返しをうつて)時に好人物の天使さん。俺は君にかう云ふことを注意するがね。神様は人間のことには冷淡なのだが、人間の内にある、神様の腦味噌の爪の垢のかけらのかけらのそのかけらは、信用してもいゝ。そいつがあるから人間はいつか目がさめるだらうよ。生命を愛すると云ふことが本當にわかればさ、死ぬと云ふこともわかるわけだ。そして骨折ることも生きてくる。まあ、人間のことは安心して呑氣にしてゐるがいゝよ。それはさうと俺の玩具は何處をうろついてゐるのかな。あゝ歸つて來たな。俺の尻尾が獨りでに動く所を見るとあいつは歸つて來たと見えるな。

(神様登場)

天使。おゝ神様!

神様。なんだ。

天使。私の人間に、もつともつとあなたの腦味噌をわけて下さい。

神様。あはゝゝ、そんなことは出來ないよ。

滑稽天使。神様の腦味噌を人間におしつめたら面白いだらうな。人間が神様のやうに大きなこと許り考へたら面白いだらうな。地球が太陽の腦味噌をもらつて、俺が太陽を照してやりたいと思つたら面白いだらうな。人のいゝ天使さん。神様の腦味噌の爪の垢の百億萬分の一でも人間には一寸薬がきゝすぎますよ。

天使。でもさつきあなたは人間が神様の腦味噌をいかせば戰爭なんかしないで、お互に助けあつて仲よくして、そして幸福に生きてゆかれるやうに云つたぢやありませんか。

滑稽天使。それは人間に身分相應に與へられた、何萬兆倍に神様の腦味噌の爪の垢を稀薄にしたものを持つてゐるから大丈夫と云つたのですよ。それ以上、もらつたら大へん、大へん。

天使。それでも今の人間では少し馬鹿さがひどすぎます。

滑稽天使。食ひものが足りないのでせうよ。その内にどうにかするでせうよ。君より人間の方が人間としては、利口かも知れない。

天使。それならいゝのですが、とても馬鹿なのです。

神様。さうか。そんなに馬鹿なら、一つ見たいものだな。コッケエ、一つ望遠鏡をもつて來てくれ。それから聽音器をな。

滑稽天使。私の役目がなくなつては困りますよ。(望遠鏡をとつてくる)さあよく御らんなさい。

(神様、望遠鏡で見、聽音器を耳にかける)

滑稽天使。見えますか。

神様。見えだして來たやうだ。うん、見える。何してゐるのだ。さうだ、三人が木にゆはひつけられてゐるよ。眞中のは釘にうちつけられてゐる。おゝ皆あわて出したぞ。うん、望遠鏡のガラス玉が反射したのだな。あれは矢張り神様の子だつたつて。うん、その眞中にゐるのが俺の子供ださうだ。「なぜ俺をすてるか」とその男はどなつてゐるよ。はつはつは、をかしな奴だ。こつちは又何だ。大勢人がゐるな。小つぽけな家をつくるのに大さわぎだ。こつちでは又戰爭を始めてゐるな。馬

鹿な奴だな。おや、死にかけた病人が、俺にたすけてくれと云つてゐる。死んだ方がましだらう。おや、俺に感謝をさゝげて死んでいつた、感心な奴だ。處が親達は神樣はゐないと云つて、泣いてゐる、呪つてゐやがる。馬鹿だな。俺を呪ふと、安心が出來るのかな、變な奴だな。

滑稽天使。一寸見せて下さい。神樣。

神樣。よし、見せてやらう。だがあんまり面白くもないやうだ。

滑稽天使。まあ見せて下さい。（望遠鏡と聽音器とをかりてそれをつかひながら）どうもうるさい奴だな。あゝ、こりや、見當がちがつたぞ、うん、人間の奴、なる程小さい、せはしい奴だな。あの服裝と來たら滑稽だな。あの歩きつき、どいつもこいつも妙な歩きつきしてゐるな。すました顏してゐるよ。偉くもないくせして。ひどい奴だな、人間が人間をぶつたり、蹴つたり、殺したりしやがる、亂暴な奴だな。こつちでは御宴會か、女がをどつてゐるな、まづい恰好して、おや、こつちでは隨分働いてゐるな。よくあんなに働けるものだな。だが要するに人間と云ふ奴はよく生れて、よく死ぬ奴だな。こんなせはしい、偉がりで、馬鹿で、可愛い、憎らしい動物は宇宙にも少ないだらうな。

天使。それは少ないさ。

神樣。もう、いゝ加減にしろ。それより俺は今日大變しくじりした。

天使。どうしたのです。

神樣。俺は今日いろ〳〵のことを考へて歩いてゐたら、急にあの女に逢ひたくなつたのだ。それで俺は一つ非常に立派な青年に化けて、あの女の處に出かけたのだ。

滑稽天使。えゝ。

神樣。處が女は俺が行つても逢はうとしないのだ。私は神樣より他の男の方とはおつきあひは出來ませんて、斷られてしまつたのだ。

滑稽天使。それから。

神樣。其處で大いによろこんで、實は俺だと云つて神樣の正體だしたらこの惡魔奴だまさうと云つたつて駄目だぞと皆でおひかけて來た。其處で俺は考へたが、逃げることにした。其處でわざと貧[illegible]樣におちられるだけおちて見た。そしたら皆手をたゝいてよろこんでゐた。一人いたづらな奴が上からはいたつばだけが俺をおひかけて來たが、俺の方がそれよりずつと早いから安心だ。そしたらあつちこつちから天使が顏を出してよろこんで見てゐるには閉口した。其處で俺は自分の身體を六十三にわけて歸つて來た所だ。

天使。へえ、大へんでしたね、身體がそんなにわけられるものですかね。

滑稽天使。奴さん、神樣は嘘を云はないものと思ひなさるな、神樣も冗談を云はれる。都合のわるい所は嘘でぬりつぶす。何處まで本當で、何處から嘘か、誰が知るものですか、又知りたがるものですか。

（女の天使登場。）

女の天使。神樣。

神樣。なんだ。

女の天使。あなたは今日は何處かへお出かけになつて。

神樣。いや、何處へも。さつきからこゝにゐた。

女の天使。さうお、まあよかつた。

神樣。どうかしたのか。

女の天使。今ね。私の處へ、惡魔があなたに化けて來たのです。それで皆で追ひかけたのですが、あなたが此處に逃げ込むのを見たと云ふ天使があるので、もしあなただつたら怒つていらつしやるといけないと思つて一寸來ましたの。

神樣。それはよく來た。惡魔がこゝに忍び込んでゐるといけないから一つ調べて見よう。(天使に)貴樣だらう、惡魔は。
天使。いえ〳〵、どういたしまして、御存知のくせして。
神樣。そんならこいつだらう、きつと。(滑稽天使に)
滑稽天使。はい〳〵誠にすみません。たしかに私がその惡魔奴をおかくししました。今ひつとらへてお目にかけます。
神樣。さうか。早くとらへて來い。
滑稽天使。處がその惡魔は非常に強いので、私の手ではつかまり兼ねます。それにその惡魔は今で、神樣に化けてゐるので、一寸私の手ではつかまへ兼ねます。
女の天使。早くその惡魔をつかまへて下さいな。
神樣。つかまへてやらうかな。しかしその惡魔は滑稽天使の風をしてゐるので、俺には一寸つかまへ惡いのだ。
女の天使　何處にかくしてあるのだい。
滑稽天使。この室に。
女の天使。この室に。
神樣。この室に。

女の天使。何處にゐるの、氣味がわるいわ。
滑稽天使。あなたの前にゐる、譃つきがさうです。神樣は今朝程からおでかけで、まだ歸つていらつしやいません。
神樣。冗談云つちや困るよ。おどろかないで大丈夫。實はお前の處に美男子になつて出かけたのは俺なのだ。そして皆に逐ひかけられてわざと逃げて來たのも俺なのだ。さうすればお前が來ることを知つてゐるのも俺なのだ。惡魔はこの俺には化けることは出來ないのだ。出來ても天使をそれでだますことは出來ないのだ。まあ安心するがいゝ。そして、今日はお前に御馳走してやるよ。
(武裝した天使達大勢登場)
神樣。どうしたのだ。
大勢の一人　貴樣は、惡魔だらう。正體を出せ。
神樣。化けることなら出來るが、之より他、正體を出すことは出來ない。
大勢の一人。違ふ、本當の神樣は俺達の處にいらつしやる。お前は惡魔だと云ふことは神樣が上つてゐる、早く正體を出せ。
神樣　俺の他に又神樣が出たつて。それは面白い、呼んで來い。

大勢の一人。それならお前は、神の玉璽をもつてゐるか。
神樣。(捜す)さあ大變だ、おとしてしまつた。
大勢の一人。それ見ろ。
滑稽天使。だが、この方こそたしかに神樣だ。玉璽は盗むことが出來る。だが俺の尻尾は譃の神樣の前ぢや動かない。處がこの神樣のそばにゆくと俺の尻尾は氣まりのわるい程動くのです。
大勢の一人。何と云つてももう駄目だ。玉璽をなくなすやうな神樣は神樣ではない。それにもう俺達はこの神樣にはあきた。我々は我々の神を選擧する。もう我々は神樣よりも利口になつた。そして我々は神樣よりも力強い。
神樣　それはいゝだらう。俺も神にはあきて來た。
滑稽天使。そんなことを云つては駄目です。
大勢の一人の女。それならお前は今日から地獄に落ちなければならないぞ。
大勢の一人　さうだ、この者を地獄におしこまなければならぬ
女の天使。いや、この方は本當の神樣です。この方の云ふことを聞かないでは天界はくづれるでせう。

大勢の一人の女。餘計なお世話だ。天界には私達がゐる。そして、本當の神様がいらつしやる。その神様は道徳堅固の神様だ。

滑稽天使。いや、その神様は誰ものにきまつてゐる。こゝに本當の神様がゐるのだ　この光り、この力、この愛、この權威が君達にわからないのか。

大勢の一人。わからないね。

神様。俺が本當の神様でなければ、お前達は俺を地獄におとすことも出來るのだらう。處が俺は本當の神様なのだ。俺も殘念に思ふ。君達の云ふことを聞いてあげたい。しかし俺は實際神なのだから仕方がない。俺は考へて見たが、矢張り俺はこの椅子にかうやつて腰かけるより仕方がないことを知つてゐる。（腰かける。音樂が聞える）

大勢の一人。もしかしたら、之は矢張り神様かも知れないぞ。

（道徳天使、生命天使登場）

道徳天使。君達は、神様を見あやまつてはいけない。この神様こそ、本當の神様だ。

生命天使。我々は神様を忘れることは出來るが、しかし神様でないものを神様にするわけにはゆかない。處が之は神様なのだ。

大勢の一人　どうして神様と云ふことがわかるのです。

生命天使。さあ、神様、あなたの力を顯はして下さい。

神様。信仰のうすい奴だな。さあ之でも俺は神ではないか。光あれよ！

（異様の光り、室内に漲る。妙なる音樂と共に、童男、童女をどりながら現はれる）

神様。惡魔よ、地獄へおちろ。

惡魔。（群集にまじつてゐた。急に身をふるはせもがく）あつ。（落ちる）

滑稽天使。ふん、惡魔の奴が糞をしやがつた。（キタナさうにつまみ）あゝ糞かと思つたら玉璽だつた。（神に、きたないもののやうにわたす）

大勢。（皆ふるへ上る）おゝ神様。あなたは神様だ。どうぞおゆるし下さい。（跪く）

神様。俺のゐることは忘れて皆、自分のすることだけしろ。他の天使を支配したり、他の天使の支配をうけてはいけない。するだけのことをしろ。それから俺の云ふことも合點がゆかない時はいふことをきかないでもいゝ。しかし俺を不必要なものだと思ふな。俺がなければ、お前達は生きてゐるのか無意味になり淋しくなることを知れ、一つしらしてやらう。

（神様は今迄あかなかつた重い扉をあけて入る。あたりはうすあかりになる）

大勢。神様、わかりました。わかりました。私達の内に力が段々しなびて來ます。

（急に又、あかるくなり、神様あらはれる）

神様。俺がゐなくともお前達は生きてもゐられ暜澤も出來るだらう。だが生きてゐるよろこびは得られないぞ。わかつたらいゝ。歸れ歸れ！

大勢。はい。（皆お辭儀する）

七

女の天使。昨日は私どうなるかと思ひましたわ。

神様。馬鹿だね。俺が神だと云ふことをお前は忘れてゐるからいけない。

女の天使。本當にあなたは圖太いのね。落ちつきはらつていらつしたわ。

神様。別に心配することはないからね。狂言のやうなものだから。面白いだけの話た。皆、可愛い天使だよ。

女の天使。だあなたよりにはなりませんわ。其處

へゆくと滑稽天使は感心ね。

神様。あいつは馬鹿ぢやあない。しかしもうそんな昨日の話はよさう。

女の天使。なぜあなたは、あんな力をもつてゐながら、普段はお出しにならないの。だから皆、惡氣でなくあなたを馬鹿にするのよ。あなたが本當の價値を出していらつしたら、皆、どんなによろこび、ありがたがるかわからないわ。

神様。處が俺はちつともありがたくないね。俺が全力を出して生きたら、宇宙は今とちがつた形になつてしまつて、その後は俺がいつでも力まなければ、宇宙に空虚な處が出來るやうになる。それも俺の力が強いだけなほ大きな空虚が出來る。そしたら俺はいつも力んでゐて、呑氣にかうやつて、お前と話することも出來なくなる。そして皆は俺がゐると云ふことを強く知りすぎて獨立性を失つてしまふ。なんでも一々、あの地球の天使のやうに質問に來たり、報告しに來たりしなければならなくなる。さうしたら一體、俺はどうしたらいゝのだ。俺の時間は少しもなくなつてしまふ。俺と云ふものは自由のない、皆の奴隷になつてしまふ。俺はそれは閉口だ。だから俺が居ないでも萬事がよくゆくやうに俺は自分の力を內に蓄へてあらはさないのだ。

女の天使。さうね。さうおつしやれば、その方がいゝわ。

神様。そしてその方が、いざと云ふ時に、更に強い力をもつて立ち上ることが出來る。

女の天使。あなたは矢張り私より利口ね。

神様。考へるのは俺の仕事だ。俺に愛されるのが、お前の仕事のやうなものだ。

女の天使。私の仕事はいゝ仕事ね。私はあなたに愛されなければ、生きてゐる氣はしませんわ。

神様。子供でも生れて見ろ。お前は生き甲斐を感じるだらう。

女の天使。私はあなたを淸く遠くからたゞ愛してゐようと思ひました。

神様。處が、幸か、不幸か、お前と俺との間をさへぎるものはなかつた。俺の力が强すぎたのかも知れない。俺は愛すれば、子供を生ますのが生命天使の法則なことを知つてゐるのだ。

女の天使。あの天使の前へゆくと本當に生々しますわね。しかしあんまり生々して苦しくなりますわ。

神様。其處へゆくと道德天使は、顏を見るのは五月蠅いが、しかし俺の心を淸めてはくれる。

女の天使。私、あの方の前へゆくと泣きたくなりますわ。だがその淚はいやなものではありませんわ。

神様。それなら食事をさげるといゝ。

給仕の天童。はい。（食事をさげ退場）

神様。どうだ。こゝから天使達の步いたり、舞つたり、飛んだりしてゐる姿を見ると、俺はよく泣きたくなる。あれ達が幸福で仲よくしてくれることをのぞまないわけにはゆかない。

（滑稽天使登場）

滑稽天使。又あの人間氣違ひが參りまして、お目にかゝりたいと申しますがいかゞいたしませう。

神様。こゝによべ。

滑稽天使。今日は又偉い勢でをります。

神様。何、面白いことでもあるのか。

滑稽天使。なんでも人間の內に、偉い思想が生れ出したと申してゐます。

神様。さうか。それは面白い。つれて來い。

滑稽天使。はい。（退場）

神様。どんな思想が生き出したかな。

女の天使。あんな玩具のやうな人間が、思想なんかもつてゐるのでせうか。

神様　それは持つことが出來るやうに、種にしいかけしてあるのだ、何しろ人間と云ふ奴も澤山生れるから、くづがあつてもたまにまぐれあたりにいゝものが出來ないとも限らない。尤も俺の撒いた種からはわりにいゝものが生れるはずではあるが、あてにはならない。

（天使登場）

神様　どうした。

天使。神様、やつとあなたの意志が人間社會の中に生れたやうに思ひます。人間も目がさめて來たやうで御座います。之からはきつと目に見えて世界はよくなると思ひます、實に實にたのしみです、どうもありがたう御座いました。もう之から戰爭もいたしませんでせうし、同胞をいぢめたりなんかもしないで御座いませう。之から仲よくして目に見えてすゝむで御座いませう。或は私達天使よりも賢く、そして立派な社會をつくり出してくれさうにも思ひます。うれしくつて仕方がありません。一寸御禮にまで。さやうなら。

神様。一寸待つた。

天使。はい。

神様。よろこぶのは早すぎるかも知れないが、まあ、いゝ報告をもつて來たお禮に、この酒を一杯やらう。

天使。どうもありがたう御座います。

神様。まあ、其處に腰かけたらいゝだらう。人間はどういふ風に目がさめたのだ。

天使。まだ少數では御座いますが、殺されながらも神を讃美し、兄弟姉妹を祝福してゆく人々が生れ出しました。彼等は實に貧しい、粗末なくらしはしてゐますが、その心の清さは、天使の心もそのそばに行くと、濁つて、くろずんで見えます。そして彼等は神の國が近づいた、悔い改めよと叫んでゐます。そして神を愛せ、隣人を愛せ、その敵をも愛せと申してをります。道德天使よりも更に自己の慾望にうちかつ力をもつてをります。

神様。さうか、中々感心な奴がゐるな。

天使。それから又一方では、自分の心を清め正しくし、惡に抵抗せず、眞理をとき、涅槃に入る道をといてをります。それ等の仲間には實にお目にかけたい程、立派な人間がをります。

神様。さうか、それはお前がよろこぶのはあたりまへだ。俺は話だけきいてもうれしい。本當に氣持のいゝ話だね。

女の天使。本當に私聞いてゐて涙が出る程うれしくなりましたわ。

神様。酒をもつとついでやれ。

天使。ありがたう御座います。

女の天使。御遠慮なく。

天使。それでは戴きます。こんな嬉しいことは御座いません。

神様。しかしよろこんでゐる内に、どんなことが起らないとも限らない。だが人間の内に、あの小つぽけな人間の内に、そんな力があると云ふことは不思議な氣がする。あせらずに氣ながに樣子を見てろ。俺の一寸見た所では人間には、まだいろ〳〵さう云ふ生活するには不適當なものがある。しかしそれも生かしやうによれば面白いのだが、中々面白く生かすのには骨が折れるだらう。之からまたいろいろのことが起るだらうが、お前はあわてずに、希望をもつて見てゐろ。

天使。ありがたう御座いました。それでは失禮いたします

神様。さよなら。

（天使退場）

神様。お前は今日歸らなければならないのか。

女の天使。えゝ。私は歸りたくはないのですが、いつまでもかうしてゐたいのですが、世間の義理で歸らなければなりません。私にも私のつとめがありますから。

神様。それでももう暫くはいゝだらう。

女の天使。少し位わるくつてもかまひませんが。本當に今日は氣持のいゝ天氣で御座いますね。そしてそよ風がふいてくる氣持のよさ、氣が遠くなるやうで御座いますわ。

（滑稽天使登場）

滑稽天使。大變な奴が參りました。

神様。又喧嘩でも起つたのか

滑稽天使。そんなことでは御座いません。私達がまるで考へてもをりませんでした、隣りの宇宙の神様からのお使ひが參りました。

神様。さうか、それは感心な話だ　しかしよくあの境を通りこして來たな。

女の天使。宇宙はそんなに澤山ありますの。

神様。いくらでもある。

女の天使。あなたはその全部の神様ではないの。

神様　さうだ、俺はたゞこゝだけの神だ。しかし使のものを禮儀正しく通せ。

滑稽天使。はい。

神様。だが大ぎやうにしては駄目だぞ。おどろかし損つたら反つて、こつちの貧弱な所がわかる許りだから、氣輕にお通ししろ。

滑稽天使。先刻承知しました。

神様。誰か。

外で。はつ。（大勢給仕天使が來てかたづける）

女の天使。私はどうしませう。

神様。其處でいゝ。

女の天使。それでも失禮になるといけませんわ。

神様。それなら、女官のやうに其處に立つてゐたらいゝだらう。

女の天使。それなら私、こゝであなたを扇ぎながら、使のものを見てやりますわ。

（滑稽天使と隣りの宇宙の使者、從者二人をつれて登場）

滑稽天使。あすこにをられますのが我が神様で御座います。

隣りの宇宙の天使。（丁寧に挨拶し）兼ねてからお目にかゝりたいと存じてをりましたが、今日お目にかゝれてうれしく存じます。私の方の神か、今度急に向ふ三軒兩隣りの宇宙へ御挨拶に上りたいと考へましたので、こちらにお伺ひしてもおよろしいかどうか私は聞きに參りましたのですが。いかゞで御座いますか。

神様。勿論來ていたゞければうれしく思ひます。

隣りの宇宙の天使　それを伺つてありがたう御座います　之は誠にお粗末で御座いますが、進呈いたしたく思ひますがいかゞのもので御座いませう。

神様。元よりうれしく頂きます。（送り物を女の天使にとつてもらひ、見て）之はまあ何よりの品をありがたう御座います。これは何するものですか。

隣りの宇宙の天使。それはこの度、私の方で發明いたしました丸藥で、之を口にふくんで飛びますと、隣りの宇宙でも、何處の宇宙へでも疲れず息が切れずにゆけて、その上、其處の言葉を自由自在に聞きわけ、つかひわけることが出來ると云ふ丸藥で御座います。さしづめ二箱差し上げるやうに、なほ御用のせつは、こちらの器械で、御用命下されば早速持參いたさせます。

神様。この器械だとあなたの宇宙の人と話が出來るのですか。

隣りの宇宙の天使。さやうで御座います。

神様。それでは本當におとなりづきあひが出來ると云ふもので御座いますね。

隣りの宇宙の天使。さやうで御座います。

神様。どう云ふ風につかふのですか。

隣りの宇宙の天使。一寸お貸しをねがひます。このしるしの處にこの針をやりまして、この針を押へて、之を耳にあてれば、それでいゝので御座います。一寸お話してお目にかけませう。

神様。どうか。

隣りの宇宙の天使。もし、もし、あなたは神様ですか、はい、首尾よくこゝにつきまして、今こちらの神様にお目にかゝつてをります。はい、誠に氣持よく御承諾下さつたので、うれしく思ひます。はい畏まりました。（神様に）誠に失禮で御座いますが一寸でもお話し下さるわけにはゆかないかと云ふことです。

神様。さうですか。（丸藥を口に入れようとする）

隣りの宇宙の天使。それには及びません。私の神の方が藥をくはへてをりますから。

神様。もし、もし。あなたはお隣りの神様ですか、初めてお目に、いや御宇宙の方にお目にかゝれてうれしく思つてをります。えゝ、之から私の方こそ御交際していろ／\のことを教へて戴きたいと思ひます。いえ、どういたしまして、私の方はまだ野蠻で、いろ／\教へていたゞかないと、いえ、お世辭では御座いません、全くの話です。えゝ、是非おいで下さい　私も是非お伺ひしたく思ひます。え、それを伺つて安心しました。勿論、私の方ではお隣りへ手を出す所の餘裕はございません。本當にさうです。野蠻な宇宙とは、御交際なさらない方がいゝと思ひます。どんな宇宙がまだあるかわかりませんから。ありがたう御座います、私の方でも何かお役に立つものがありましたらお命じ下さい。私をお信じ下さつてありがたう。私もあなたを信じ切るのをうれしく思ひます。それでは、おいでの時どうか御知らせ下さい。少し前に御知らせ下されば、きつと御待ちしてをります。さよなら。（隣りの宇宙の天使に）本當にいゝものを發明されたものですね。私は、あなたの神様のお聲を聞いただけで一兆年來のお友達のやうな氣がします。本當に偉大な、誠意のある、御賢明な神様と御交際出來るのを私はどんなにうれしく思つてゐるか、わかりません。

隣りの宇宙の天使。誠にありがたう御座いました。それでは失禮いたします。

神様。どうかお歸りになつたらよろしく。

隣りの宇宙の天使。ありがたう御座います。皆さん、さやうなら。

（隣りの宇宙の天使退場）

神様。（歩き出し）さあ面白くなつたぞ、俺にも話相手が出來、競爭者が出來たぞ。

女の天使。隣りの宇宙からせめて來たら大へんですね。

神様。大丈夫。そんなわからずやではないことは一言聞いただけでもわかる。俺達は人間ぢやないから、宇宙の調和をお互にやぶるやうな馬鹿なことはしない。だが急に世界がひろくなつた。俺が安心してゐる内に隣りの奴は大したものを發明しやがつた。しかし之から俺も眞價を發揮してやるぞ。さあ一つ氣持のいゝ立派な歡迎會をしてやりたいものだ。誰か。

外。はい。（給仕天使登場）

神様。接待の天使をよべ。

給仕天使。はい。

神様。面白くなつて來たぞ。

天使。（登場）神様、大變です。大變です。

神様。なんだ。

天使。人間がよくなるかと思ひましたらわるくなる許りです、どうしませう。迫害されても神を讃美してゐた人間が、今度はいつのまにか、神の名で他の人を迫害してゐます。もう人間は駄目です。どうしたらいゝでせう。(泣き出す)

神様。そんな小さいことはほつとけ、今それ所ぢやないのだ。今に隣りの宇宙の神様がやつてくるぞ。宇宙と云ふものさへ小つぽけな時代が來たのだぞ。馬鹿！　人間のことは人間にまかせておけ。そんな小つぽけなことを一一相談にくる奴があるか。

天使。(獨白)宇宙が小さい。隣りの宇宙。何のことだらう。神様は氣が狂はれたのかも知れないぞ。こりや大へんだ。どうしたらいゝのだ。えん／＼／＼。(泣く)

八

天使。滑稽天使さん。

滑稽天使。なんです。人間贔屓さん。

天使。一たいあなたに神様の心はわかりますか。

滑稽天使。わかりますよ。

天使。それなら神様は人間のことをなんと思つていらつしやるでせう。

滑稽天使。何とも思つていらつしやらないでせう。

天使。私にもさう見えますが、あんまりひどすぎると思ひますね。人間に苦しい時はきつと神様の名をよぶのですがね。

滑稽天使。それによびたければよべばいゝでせう。よぶことが人間にとつてよろこびなら。しかしその呼び聲が神様に聞えて神様からどうかしてもらへると思つたらまちがひですね。

天使。私は神様がもう少し人間のことを思つていらつしやると思つたのですがね。人間がよくなつて來たと話したら隨分よろこんで下さつたのですからね

滑稽天使。神様は氣まぐれですよ。誰でもいく分氣まぐれですが、神様に力が強いだけ氣まぐれの度も劇しいやうですよ。しかし人間のことは人間に任せるより仕方がないでせう。僕の見た所ぢや、人間は段々賢くなり、賢くなるに從つて馬鹿なことはしなくなると思ひますね。尤も天使にだつて隨分馬鹿がゐるのですから、人間に馬鹿がゐるのは仕方がありませんがね。しかしいくら馬鹿でも、あんまり馬鹿げた目に逢へば少しは目がさめるでせう。まあ氣にしないで希望をもつて、ゆつくり見ていらつしやい。

天使。しかし愛して見てゐると隨分、はがゆいことも、腹の立つことも、どうにかしたい氣がすることがあります。もう一息と云ふ所で、折角希望をもつて見てゆくのにこはれてゆくのですからね、そして善人が亡びて惡人が榮え、愛すべき人間がしひたげられて、惡どい人間が威張つてゐるのですからね。尤も時々は氣持のいゝ事件も起るのですが、それも大事な時にいゝあとつぎが出ないのでそのまゝ倒れてゆきます。

滑稽天使。それは仕方がありませんよ。その内には段々人間の内にある神様のまいた種がはえて來るでせう、まあ氣ながにするより仕方がないでせう。それは氣の毒な人もあるでせう、しかしそれは人間自身の手で段々なほしてゆくでせうよ。

天使。しかし私は氣になるのですが、神様は氣でも違はれたのではないでせうか。

滑稽天使。大丈夫、あれは氣違ひになるには、少し圖太すぎます。

天使。だが隣りの宇宙だとか、宇宙が小さいなぞと云つていらつしやいましたよ。

滑稽天使。それは本當でせう。神樣の目から見たら宇宙は小さいかも知れません。それにこの宇宙の隣りにも向ひ側にも宇宙があるのは本當ださうですよ。そして隣りの宇宙からこの神樣に使が來たのも本當ですよ。

天使。それではこの宇宙の他に、まだ宇宙があるのですか。

滑稽天使。えゝ、あると見えますね。

天使。困つたことが出來たな。

滑稽天使。なぜです。

天使。それなら地球なんて、あるかなきかの砂つぶ一つにも當らないものなのですね。

滑稽天使。まあそんな所でせうね。

天使。私はそんな小つぽけな世界の天使になつていろ／＼心配してゐる自分が可哀さうになりましたよ。

滑稽天使。だが愛するものがあればいゝぢやありませんか。そんな小つぽけな處にうぢやうぢや生きてゐる人間、そして生きたかと思ふとすぐ死ぬ人間、それは反つて同情すべきものであり、又愛すべきものでせう。そしてそんな小つぽけな處で爭つて得意になつてゐられることは、彼等のためによろこんでいゝでせう。

天使。私はいやになつた。人間が可哀さうになつた。

滑稽天使。だが御安心なさい。人間の内にはさう云ふ生活の内に、本當に神を愛すれば本當の深い、我々でさへやつと味へるやうな深いよろこびを感じることが出來てゐるのですから。すべての人間のそれが本當に生きるやうになつたら、彼等は自分の小さいことを不幸だとは思はないでせう。寧ろそんな小さいものにまで、無限の心の深さをお與へられてゐることを感謝し、其處に救ひを求めるでせう。まあ、泣くのはよしたまへ。人間のことは僕が保證する。あの生命の一滴の内にはあらゆるものがふくまれてゐる。それはあまりに生きる慾望が強すぎるが、しかしそれは萬物を抹殺して最後の到達點に達するために必要なのだ。だから安心せよ。之は俺の言葉ではなくつて、神の顔色だ。泣くな、泣くな、泣くな、いゝ天使さん、泣くな。泣くのはよしてくれ、俺は泣かれるのは大嫌ひだ。泣くとこの[illegible]ではき出すぞ。

天使。それでも、人間は可哀さうです。食ふものもなく、着るものもなく、餓ゑてゆき、凍えてゆく人間は可哀さうです。抵抗力を失はされてその上なぶり殺しになる人間の魂を、あなたは見たことはない。あゝ、早く彼等を、神の國につれてゆきたい。あゝ。

滑稽天使。なさけないね、君は。しかし仕方がない、俺も一緒に泣いて上げよう。わあ／＼わあ。

神樣。[illegible]、何を泣いてゐるのだ。うるさい奴だな。泣く稽古をしてゐるのか。

滑稽天使。人間が可哀さうです。わあ／＼／＼。

神樣。處が俺は人間に腹を立てることを、さつき聽音器で偶然きいた。それは角のはえた動物だがね。人間に[illegible]はれて、その上殺され、その上食はれるのだと云つてゐたよ。その上人間のゐる處に、他の動物は皆、嬲り殺しにされるさうだ。人間と獸達と何處がちがふのです、とさう云つてゐた。人間はあんまり勝手な眞似をしすぎてゐるやうだぞ。そして他の動物ばかりぢやない。他の仲間、他の主義の人間も、同じく、嬲り殺しにしていゝものと思つてゐるさうだ。そんな奴のために泣く奴があるか。泣くなら、もつと同情すべき、心からの寂しいもののために泣け。

滑稽天使。それでも人間が可哀さうです。わあわあ〳〵。

神様。馬鹿。もう泣くのはよしてもらはう。それより隣りの宇宙と我々は仲よくしなければならない、もし萬一隣りの宇宙と戰爭でもして見ろ。地球なんか、けしとんでしまふぞ。

天使。そ、それは本當ですか。

神様。いや、大丈夫。俺達に馬鹿ぢやない。お互に尊敬しあひ、助けあひ、愛しあふことを知つてゐる。お互はたゞ讃美しあひ、そして愛しあひ、そしてよろこびあへばいゝのだ。お互の內生活が豐富に、よろこべる材料を多くすればいゝのだ。宇宙を二つもつことがどんなにうるさく、馬鹿氣てゐるかと云ふことを俺は知つてゐる。俺達に何よりも平和のよろこび、調和のよろこびを愛するものだ。

滑稽天使。あなたは自分に滿足し、又境遇に滿足していらつしやる。好き勝手なことをしていらつしやる。之以上望むことのない生活をしていらつしやる。そして今の生活をかへずにすべてと調和してゆける心の廣さと、氣高さをもつていらつしやる。それで平和を愛す、調和を愛すと云つたつてあたりまへです。しかし實力相當な生活をしないもの、實力相當の生活の出來ないものが、出來ないなりに平和にしろとか、調和を愛せとか云はれたつて承知は出來ないでせう。どんなものです。

神様。それは自己の力を知つてゐるものの云ふことだ。お前は俺に馬鹿と云はれりや、それでよろこんで尻尾をふる。それはお前が利口だからだ。一たい、自分が蟲のいゝことをしながら、蟲のいゝことを望みながら、不當のことをして、調和を求め、平和をのぞむのは、のぞむのがまちがつてゐる。處が俺は不當なことはしない。俺は好きなことはするが、他人に嫌ひなことはさしはしない。俺を愛しもしないものに愛しろとは云はない。俺にくれたくないものを俺にくれろとは云はない。だから俺達は調和を愛する資格があるのだ。人間どもは、境遇に支配されて、少しでも得をしよう、少しでも我意をのさばらさう、樂をしよう、偉がらうと云ふのだから、一方その犧牲者が出來ないわけにはゆかない。反動は反動を生んで、殺しあはないでは我慢が出來ない。復讐しあふのが正當になつてくる。どうしてそんな奴に、平和や、調和が得られるものか、それが得られるためには心がけをかへて、不當な利益を得てゐるものが、それだけ兄弟姉妹に讓歩しなければならない、處が讓歩しだすと切りがない、生きられなくなつてくる。元も、子もとられてしまふ。今度は自分がとる方にならなければならない。うるさいことだ。ほつとけ、ほつとけ、その內には自分で目がさめる、もうそろ〳〵目がさめだしたかも知れないよ。一寸見に來たらいゝだらう。

天使。さめましたか知らん。

神様。さめたかも知れないね。

天使。それなら一寸見に來ます。

神様。見て來たらいゝだらう。

天使。さやうなら。（退場）

（神様と滑稽天使、高笑ひする。電笛なる）

神様。隣りの宇宙から何か云つて來たな。（器械をとりあげ）もし〳〵、さうです。あしたですか、かまひません。是非來て下さい。さうですね。お互に名前をつけないと不自由ですね。いつか、集れるだけ宇宙の神が集つて相談してもよろしいね。さうです、まだ野蠻な所はこまりますが、利口なよく物のわかつたものなら面白いでせう。何人でおいでになります。あなたと他に、十天使ですか、承知しました。それでは明日お待ちしてゐます。さよなら。

滑稽天使。とう／＼明日くるのですか。

神樣。さうだ。

滑稽天使。隣りの神樣はどんな顏してゐるでせう。

神樣。まあ、俺と伯仲の間だらうな。元は同一なのだから、それが完全に發達したと云ふにちがひないのだから、つまり俺のやうなものだらう。

滑稽天使。どつちの宇宙の方が大きいでせうな。

神樣。向うの方が少し大きいかも知れない。

滑稽天使。それでは肩身がせまいわけですな。

神樣。しかし仕方がない。實質でやつつけるよりは。

滑稽天使。處が實質も向うの方が上らしいですな。もしさうだつたらどうします。向うの神樣の力があなたより強くつて、天使達が皆、その神樣に喰ついたらどうします。

神樣。さうしたら、俺もその神樣に喰附いてやるが。それ程偉い奴でもなさゝうだ。まあ俺位なものだらう。

滑稽天使。もう少しは偉いでせう。

神樣。生意氣云ふな。

滑稽天使。たしかにあなたよりは三層倍も大きく、手の大きさはこの位ありませう。そしてあなたが何か云ふと、生意氣なことを云ふなと云つて、あなたの頭を押へつけるでせう。するとあなたは、四つんばひになつて、降參なさるでせう。

神樣。馬鹿云ふな。

滑稽天使。しかしそれが本當ぢや困りますね。こなひだ來た隣りの宇宙の天使に心配だつたのでそつと聞いたら、さう云つてゐました。あなたよりは比較にならない程立派な、大きな方だと云つてゐました。

神樣。それは本當か。

滑稽天使。本當ですとも。あなたが小さいのでおどろいてゐましたよ。

神樣。譃だらう。

滑稽天使。いゝえ、本當です。そして女にかけてもあなた以上ですから、別嬪はお目にかけない方がいゝと注意してゐました。

神樣。譃つけ。

滑稽天使。本當ですよ。

神樣。本當か。

滑稽天使。本當ですとも。

神樣。それは少し困つたな。

滑稽天使。何しろこゝに來る目的は別嬪さんを搜しに來るのが第一の目的ださうです。

神樣。馬鹿云ふな。しかしそんなに、大きくつて、立派なのか。

滑稽天使。へい、左樣ださうです。上には上があるものだと云ふことが初めてわかりました。どうなさります。お困りでせう。

神樣。仕方がない。事實さうなら仕方がない。あきらめるより仕方がない。

滑稽天使。他に仕方がないのですか。いくらあなたでも。あなたはまだ全力を出したことがないとおつしやつてゐましたね、一つ全力をお出しになるとよろしい。

神樣。だがそれ以上、相手が強ければ仕方がない。さても世間は廣いものだな。

滑稽天使。どうです、參りましたらう。

神樣。まだ參りはしないよ。

滑稽天使。だがあなたのお顏が少し曇つて來ましたぜ。珍らしくあなたの元氣がなくなり、額から汗が出て來ましたぜ。

神樣。譃つけ。

滑稽天使。いや本當です。

神樣。皆はそれを知つたらがつかりするだらう。そして俺に愛想をつかすだらう。

滑稽天使。それはつかしますね。今迄だつてあ

なたを本當の意味で愛してゐる天使なんて實に少ないのですからね。あなたが力をもつてゐるのでいや〳〵云ふことを聞いてゐるものが多いのですからね。

神様。お前もその一人だらう。

滑稽天使。いゝえ、殘念ながら私はあなたを愛してしまつてゐるのです。どんな神が出て來ても私の尻尾に動きません。

神様。あてにはならないな。

滑稽天使。皆があなたから背いたらどうなさりますかね。

神様。俺は平氣でゐてやるよ。俺は無益な煩悶はしないよ。自分の力を知つてゐるから、不可能なことはのぞまない。だが本當に隣りの神様はそんなに偉いのか、お前の聞いたことを委しく話してくれ。

滑稽天使。出來るだけ本當のことを申しませう。お怒りにならない約束をして戴かないと饒舌れません。

神様。怒らない。

滑稽天使。それなら申します。私は本當のことを遠慮なく申します。私は心配してかの使者にそつとたづねました。あなたの神様はどんな方だ。私の神様より大きいか。するとかの男は答へました。正直に申しますが、どんなことを私が申しましてもお怒りになりませんね。

神様。怒らないと云つたら怒らない。

滑稽天使。すると彼の使者は答へました。大きさはまづ同じだと申しました。

神様。それは本當か。

滑稽天使。本當で御座います。それで私も安心していろ〳〵のことを聞きましたら、宇宙の大きさも、はつきりしたことはわからないが、宇宙のはづれから、こゝまでは、お隣りさんのはづれから神の宮迄よりも、三尺三寸程長かつたと申してたりました、それだけこちらの方が大きいだらうとのことで御座いました。尤も宇宙は丸形ではありませんから、或は向うの方が大きいかも知れませんが、何に大したちがひはないと思ひます。隣りの事まで氣になる所を見ると、少しあつちの方が小さいやうにも思はれますが、あてにはなりません。

神様。そんならさつき云つたことは皆嘘なのだな。

滑稽天使。へえ。一寸おどかしてあげたのです。

神様。馬鹿！　それなら明日の用意はすつかりお前にまかせるから、皆と相談していゝやうにしてくれ、俺は一寸これから出かけてくるから。（退場）

滑稽天使。いつていらつしやい、又何かに化けて行つていらつしやい。とう〳〵行つてしまつたな。隣りの神様はどんな奴かな。うちのより立派だと少し困るな。だがうちの大將の方がきつと立派だらう。どれ、掃除でもするかな。

九（夢）

女の天使。（登場）神様。神様。大變ですよ。

神様。なんだ。（目をこすりながら起きる）

女の天使。あの火は何の火でせう。へんな火が三つこつちに向つて彗星のやうにとんで來ますよ。

神様。おどろくことはない。

女の天使。それでもあの火の色は、今迄に見たことのない色ですよ。それにこつちに向つてとんで來ますわ。

神様。本當に見たことのない色してゐる、わかつた、あれは隣りの宇宙の神様たち、さう云へば今日來ると云つてゐた。

女の天使。それだつてまだ夜中よ。あの方を見

て御覽なさい。

神様。それでも俺の宇宙にはあんな光りを出す奴はゐない。

女の天使。やつて來ますわ。私なんだか氣になりますわ。

神様。氣にしたつて仕方がないよ。くるものはくるし、來ないものは來ない。來たらその時、最上の力を出しさへすればいゝのだ。安心してゐるといゝ。俺は、無益な心配はしないことにしてゐる。

女の天使。それでも來ますわ。

神様。くるものはこさしておいたらいゝだらう。それより、お前の歌でもきかしてくれ。まさか、この室には入つて來まいから安心しろ。

女の天使。私、心配で歌なんか唄へませんわ。

神様。臆病ものだな。それなら俺が笛を吹いてやらう。(笛をふく)どうだ。氣が靜まつたらう。

女の天使。本當に聞いてゐる内は夢中でしたわ。

(神又笛をふく。覆面の神窓から二人の從者をつれて登場。神は氣がつかないふりして笛を吹く。女はきゝ惚れて氣がつかない)

神様。よく來たね。

覆面の神。僕は君が待つてゐるやうな者かどうか知らない。たゞ一寸逢つて見たいのでやつて來た。

神様。よく來たね。まあ、其處に腰かけ給へ。誰か。

覆面の神。いや、誰も呼ばないでくれ給へ、こゝにゐる天使はかまはない。僕はなぜそつと來たか。それは君と僕とどつちが、力が強いか、又どつちが、この宇宙を支配することが必要か、それを知りたくつて來たのだ。

神様。僕は君と力の競爭をしようとは思はない。僕は力と云ふものをつかつて君に勝つた所がそれが自分の自慢にならないことを知つてゐる。僕と君とは力の關係で關係をきめるのはよしたいものと思つてゐる。強いものが弱いものに勝つ、それは地獄での事實で、天界の事實ではない。

覆面の神。それならこゝでは何が力をもつてゐるのだ。

神様。こゝでは愛だ。生命だ。心のよろこびだ。深いよろこびを與へる力をもつものが勝利者だ。こゝでは天使の魂をよろこばす力をもつものが尊敬される。

覆面の神。それなら、君は、天使の心をよろこばす力をもつてゐるのだね。だが、僕達のうちでは、君を神にしておくのをよろこばないものが多いと聞いてゐる。しかしそれ等のものはたゞ君の力を恐れてゐる。

神様。それはさうだらう。天使も、自由の天使の内にはゐるだらう。ものには例外があるから。星にだつて軌道をふむのを好まない奴がある。しかし僕は何處までも暴力で天界がをさまるとは思はない。もしそれで無理にをさめたら、その時は天界は天界ではない。そして天使は天使ではない。

覆面の神。だが強大な力の持ちぬしが出て來て、そして君の腕をかう捩つたらどうする。

神様。(その絶大の力におどろき、又痛さを耐へながら)捩らしたいだけ捩らしておく、他に方法がなければ。

覆面の神。(手をはなし)この力が君に命令したらどうだ。それでもまだ力はつまらないものと思ふか。

神様。腕力は天界では流行しない。それは野蠻なこと、地獄的なこと、禮儀を知らぬこととして嫌はれる。勿論一時は、暴力は勝つたら

う。しかしそれは天使の心を喜ばさない。又それで天界を支配したものは自分の心の空虚さにへたばるだらう。それは稀有な花園があるのを奪はうと思つて、その花園を破壊しつくしたやうなものだ。占領は出來るだらう。だが其處に花園は出來ない。そして占領した人の心を喜ばさない。花園は再び出來るかも知れない。しかしその時は、神の愛によつて花園を支配した時だ。立派な寶玉がある。それがほしいからと云つて、それを破壊してはならない。この宇宙には、まだ隅々に、小さい部分では愛は支配しつくしてゐない。愛の支配しない處には暴力が幅をきかすのは當然だ。しかし暴力で天界を支配しようと考へ給ふな。それは天界を地獄にする。少なくも天使の心は君に從はず、よし從つてもそれは外見だけだ。心ある天使は、生命天使も、道徳天使も、その他の天使も君に魂の光りをおくることをしまい。それなしに我々は生きることは永遠に罰せられることだ。君が僕に勝たうとするならそれはたゞ愛による。君の愛が僕のより強く、この宇宙をくまなくつゝみおほせたら、僕は甘んじて、君にこの宇宙をさゝげる。それは僕にとつて宇宙を愛することだから。しかしそれには君は僕よりも禮儀を知り、僕よりも謙遜で、僕よりも平和を好み、他のものの不幸に同情がゆきわたらなければならない。

覆面の神。理窟はどうでもいゝ。俺は君をこゝから逐ひ出す。そしてこの宇宙を俺のものにする。

神様。だめだよ。僕はこの宇宙のために、君の云ふことはきかない。僕はまだ力が十分とは云はない。僕の光りは地獄や下界にまではまだ十分に達してゐない。其處ではまだ暴力が、不正が時を得てゐる。しかし君は僕程迄も、この宇宙を愛してもゐないし、又君の愛の光りは僕よりも遠くまで照すと云ふわけにはゆかない。

覆面の神。それならこの女の天使に聞いて見よう（覆面を荒々しくとる）さあ、俺のこの顔を見ろ。俺は自分を尊敬しないものにたいしては罰を與へる。この神は自分を尊敬しないものを罰しないと云つてゐる。さあ、どつちを尊敬する。どつちをお前は神として恐れる。黙つてゐてはわからないぢやないか。早く云へ。俺の方を選ぶと云へ。云はないか。（持つて來た杖でテーブルを力一杯たゝく。大理石のテーブルは二つに切れる）さあ早く云へ。

女の天使。（立ち上り、靜かに云ふ）私は私達の神様を愛します。

覆面の神。なに、だつて、もう一度云つて見ろ。

女の天使。私は私の神様を愛します。

覆面の神。さうか、俺を愛するのだね。そしてこの宇宙を俺に獻げてくれるのだね。

女の天使。ちがひます。私はあなたを輕蔑し憎みます。私はこの私の神を限りなく愛します。

覆面の神。（打ち）之でもか。こんなにお前を打つても黙つて見てゐる意氣地なしをお前はまだ愛するのか。この意氣地なしを笑つてやれ。この神はお前を愛すると云つてゐるが、自分が打たれるのが怖くつて、ぢつとしてゐる。

女の天使。私は、私の神様を愛します。愛します。愛します。

覆面の神。馬鹿、馬鹿、馬鹿。（亂打する）

神様。よせ。

覆面の神。（神をうちこゝから逃げろ、さうすれば之を許してやる。

神様。さあ、俺を打て。俺は打たれるに從つて力が加はるぞ。十へん打てるなら打つて見

ろ。十ぺん打つた時、お前のその杖はへし折られ、お前の腕の力はしなびてしまふだらう。さあ打て。力限り打て。打てまい。

覆面の神。そんなことがあつてたまるものか。打つとも、打つとも、打つとも。

神様。一つ。二つ。三つ。さあ打て。もう參つたか。

覆面の神。打つとも。

神様。四つ。五つ。六つ。遠慮なく打て。もう打てないのか。

覆面の神。打てなくつて。

神様。七つ。さあ、あと三つだ。力限り打つて見ろ。（段々覆面の神の方へ攻めつけてゆく。覆面の神やつと打つ）感心。感心。さあもう二つだ。

覆面の神。死んでも打つぞ。

神様。九つ。十。（杖、十目に、打つと共に折れる。覆面の神逃げ出す）あつはゝ。

十

神様。（椅子によつて居眠りしながら苦しさうに笑ふ）あつはゝ。

（滑稽天使、登場）

滑稽天使。呑氣な方ですね。居眠りしていらつしたのですか。隣りの宇宙の神様が遠くから來るのが見えたと知らせがありました。

神様。さうか。皆のものに知らせろ。どれ、迎へにゆくかな。（二人退場）

（男や女の天使登場）

女の天使一。隣りの宇宙の神様はどんな髪してゐるでせう。

女の天使二。矢張り私達とは少しちがふでせうね。

女の天使三。それは随分ちがふと思ひますわ。

女の天使四。さうでせうか。私は矢張り同じだと思ひますわ。神様のくせに、之より他の髪してゐたら可笑しいわ。

女の天使五。私は見たらきつと吹き出したくなると思ひますわ。第一私は目玉も二つぢやなくつて、一つか三つか、四つと思ひますわ。

（皆笑ふ）

女の天使四。それは目は二つでせう。一つや、三つなんてつりあひがわるくつて、第一ものを見るのに、一つでは不自由でせう。それに三つある必要はないわ。神様ですもの、不足なものや、くだらないものは、いくらお隣りさんだつてないと思ひますわ。

女の天使一。私はきつと角が生えてゐるかと思ふわ。

女の天使二。生えてゐれば一本でせうか、二本でせうか。

女の天使三。そんなものは生えてはゐないでせう。それより私、きつと素敵に立派な方だと思ふわ。こゝの宇宙よりも、お隣りの方がきつと大きくつて、立派だと思ふわ。

女の天使五。私はさうは思へませんわ。こゝより立派な宇宙は考へられませんもの。

女の天使四。それはあなたに考へられなくつたつて神様には考へられるわ。

女の天使五。そんならあなた隣りの宇宙へ行つたらいゝわ。

女の天使四。まあひどい。（打つ眞似をする）

男の天使一。僕はさうは思はない。それは、こつちより隣りの宇宙の方が平等かも知れない。しかし僕は星の大きさが、どれも平等で、星の光りが、どれも同色でなければならないとは思はないよ。

男の天使二。僕だつて同色になれと云ふのではない。たゞ價値だけは同一にするのが本當と思ふ。僕が神ならこんなに不平等なつくり方はしない。

男の天使三。だが僕は小さい星の方が大きい星

より不幸だとは思はない。むしろ小さい方が歩く處も小さいし、樂だと思ふよ。價値はプラス、マイナスできまる。なんでも大きければ價値があるとは云へない。プラスが多いだけマイナスが多かつたら、プラスが少なくつてマイナスの少ないのと同一價値だと思ふね。

男の天使四。ともかく僕は大きな星の方が小さい星よりずつと幸福だと思ふ。實際小さい星は、可哀さうなものだ。迷兒になつたつて誰も何とも思ひはしない。存在さへ認めないのだから。

女の天使一。あの女の天使はまだ見えないの。

女の天使二。あの人は幸福か、どうか、と皆になか〳〵議論があつたのですよ。

女の天使三。あの女の何處が神樣に氣に入つたのでせう、私は一寸考へて見ましたが、見つかりませんでしたよ。

女の天使四。それは好き好きですわ。私はあの方を矢張り特別な方だと思ひますわ。

女の天使三。へえ、さうですかね。

女の天使五。そんな話はよしませう。好き同志は好き同志で勝手にさしておけばいゝわ。

女の天使一。萬歳、と云ふ聲が聞えましたわ。隣りの神樣が來てもきつといらつしたのよ。笑つてはいけませんよ。

女の天使五。大丈夫。

男の天使一。いよ〳〵來たね。僕はこの宇宙より外に宇宙があるとはてんで考へても見なかつた。しかし宇宙がある以上はそれ以上のものがなければならないと思つてゐた。宇宙以外が空なわけはないと思つてゐた。無限と云ふものゝ無限のさきに又無限があることを意味してゐるからね。

（音樂が聞え出す）

男の天使二。しつ。やつてくるぞ。

（皆起立する。兩宇宙の神樣話しながら來る。天使の男女、ついてくる）

神樣。さうだ、本當に君がこの世にゐてくれるとは知らなかつた。まあ其處に腰かけてくれ給へ。皆も遠慮なく腰かけたらいゝだらう。

隣りの神樣。どうか御遠慮なく。私を君達の友達と思つて下さい。

接待の天使。恐れ入ります。

神樣。本當に僕は君はもつと恐ろしい神かと思つてゐた。實は内々心配してゐた。しかしあへば矢張り君は神だけのことがある。僕の心はすぐ君の心にふれた。不安は何處かへ行つて、千萬億年來の知己を得たやうなものだ。

隣りの神樣。僕も君を見た時、千萬億年來の知己だと思つた。求めてゐた者にとう〳〵あつたと思つた。僕は來た甲斐があると思つた。之から仲よく出來ると思ふと實にうれしい。皆さんの元氣さうな樣子を見るのも實にうれしい。

神樣。どうだ、皆、お隣りの神樣の萬歳をとなへよう。萬歳。萬歳。萬歳。萬歳。萬歳。

皆。萬歳。萬歳。萬歳。

隣りの神樣。ありがたう。僕は實にうれしい。君達に僕の祝福を送る。

神樣。ありがたう。僕達は君が本當の神であると云ふことを知つた。君に逢つたよろこびは、眞理や、美や、生命にまのあたりあつた時と同じよろこびを感じる。僕はこんな誇りをもつたことを實に感謝する。もし君がわからずやだつたら隨分困ると思つた。

隣りの神樣。大丈夫。僕達の宇宙だつて、少しは小さいかも知れないが、馬鹿にはしたまふな。ただ默り、一寸もののわかつた、一寸、[illegible]和と美を愛する者でなければ、彼等に[illegible]しない。調和の王冠を戴けるものが神の第一の資格だ。さう君は思はないか。

神樣。思ふね。恐ろしいものが神になる、そん

なことは許されてはないことは知つてゐた。しかし宇宙がちがふと又、どんな法則がその宇宙を支配してゐるかわからないと思つてゐた。

隣りの神様。僕も來て見るまではもつと珍らしいものに逢ふかと思つてゐた。矢張り僕達は兄弟であり、隣り同志であることを知つた。矢張り僕達は同じ神の子であることが感じられる。

神様。どうだ。もう一杯のまないか。

隣りの神様。ありがたう。(つれに)お前達も遠慮なく頂いたらいゝだらう。この酒は僕達の處と實に似てゐる。君が好きなら今度とゞけよう。

神様。ありがたう。途中で惡くならないかね。

隣りの神様。大丈夫のやうに荷づくりさせよう。

神様。皆、一つをどつたらどうだ。

隣りの神様。是非拜見したいものです。

(一、二、舞始まり、をどる)

隣りの神様。僕はこんなうれしいことはない。君とからやつて竝んで、皆のよろこびを見てゐる程うれしいことはない。僕は皆に一こと御禮を云はしてもらはう。

神様。是非どうぞ。

隣りの神様。皆さん。今日はこゝに參りまして、心からの御歡迎を受けて、僕は何んと云つていゝかわからない程、よろこびに滿されます。我々は今までお互の存在さへ知らなかつた。處が今日は君達とお友達になれる。お互に助けあふことが出來る。お互の經驗や知識の交換が出來る。お互に永い歴史で得たお隣りの寶物を自分のものにすることが出來る。私達は今日私達はお隣り同志であることを知ると共にいろ〳〵の點で教はることの多いことをよろこびます。私はこの宇宙の立派さに驚嘆しました。そして美と愛の光りが宇宙のすみ〴〵まで行つてゐるのをうれしく思ひます。私達のところへどうか皆さんも遊びに來て下さい。少しは珍らしいものもお目にかけられると思ひます。皆さんの内で、何か聞きたいことがありましたら遠慮なくおきゝ下さい。(沈默)

天使。それならば一寸おたづねしますが、私のをります世界に、から云ふ人間(小さい人形を見せ)がをります。あなたの宇宙にはかう云ふ生物はをりませんか。

隣りの神様。一寸お見せ下さい。えゝ、ゐたことがあります。今は滅亡しましたが。

天使。えゝ、滅亡した? あなたはそれをお救ひにならなかつたのですか。

隣りの神様。彼等はよろこんで死んだのです。彼等は實に不思議な生物でした。ある時は私達にまけない程利口です。しかしある時は、他のどの生物に比べても殘酷です。狂氣じみます。しかし一方臆病で、平和好きで、名譽心が強く、要するにいろ〳〵の性質をもつてゐました。調和的なあらゆる美點と、不調和的なあらゆる缺點をもつてゐました。だが滅亡する一萬年程前に、彼等は不意に目ざめました。そして不調和的な性質を公明正大な生長慾と、仕事と、美、創造とに淨化さしました。そして調和的な性質から、協力的な社會組織を生み、全體、部分が同時に生きるこつをのみ込みました 又自分達にゆるされてゐるあらゆる知識と經濟と努力で、その世界の持つてゐる、あらゆる自己に役立つものを、最高の方法に役立たせました。初めはそれで便利や、物質的の欲望を滿してゐました。その爲に一時は人の質が惡化したやうに見えましたが、不意に調和的のよろこび、魂のよろこびを完全に滿すことの必要を知りま

した。そしてそれを完全に生かすことによつて彼等はよろこんで働き、よろこんで遊び、よろこんで生き、よろこんで死にました。それ等のあらゆる生活を彼等はよろこびにかへることを會得し、つひに彼等の星が滅亡した時、大會堂に生き殘つてゐたものが集り、宇宙を讃美し、神を讃美し、自分達の生命の再生を讃美して、實に見上げるやうな死をとげました。我々は何か苦しい時や、心をいためたり、不精心が起つたり、不幸が起つたりする時、お互にかう云つて誡めあふのです。人間を見ろ。人間、あの小つぽけな蟲けらにおとることを恥ないか。人間を手本にしろ。

天使。(思はずすゝみ)へえ。そんなにまで立派になりましたか。

隣りの神様。えゝ、思ひもかけぬ時、不意に立派になりました。それまでに皆に嫌はれてゐたのですが。

天使。さうですか。どうもありがたう御座いました。

神様。本當に面白い話ですね。どれ、この頭にそんな力が入つてゐるのですかね。一つ餘興に皆で人間萬歳をとなへてやりませう。あなたと二人で音頭をとつてやりませう。

隣りの神様。いゝでせう。

神様。それならやりませう。

神様、隣りの神様。人間萬歳、萬歳、萬歳。

皆。萬歳、萬歳、萬歳。

天使。ありがたう。ありがたう。僕は死んでもいゝ。(泣き出す)

滑稽天使。泣くな。泣くな。いゝ子さん泣くな。俺も死にたくなつて來たぞ。あんまりうれしくつて、神様の仲のいゝのを見てゐるのは實にうれしいものだ。二人の神様、萬歳、萬歳。

皆。萬歳。萬歳。萬歳。

神様。さあ、賑かな曲をやれ、皆をどれ、をどれ、元氣にをどれ。

(音樂始まる。皆をどる)

天界の生活

天界の生活の美しさ、
彼等は自己の居る處にゐて滿足し、
靜かに自然の法則に從ひ、
互に愛の光をおくりあふ。
天界の生活の美しさ。

矢を射る者

俺の放つ矢を見よ。
第一のはしくじつた、
第二の矢もしくじつた、
第三の矢もまたしくじつた、
第四、第五の矢もしくじつた。
だが構ふな。
いつまでもしくじつて許りはゐない。
今度こそ、
今度こそと
十年あまり
毎日、毎日、
矢を射つた。
まだ本物ではないにしろ
たまにはあたり出した。
見よ
今度の大きな矢こそ
人類の心の眞たゞ中を
射あてて見せる
そして誤りないその
俺の放つ矢を見よ。

楠正成（五幕悲劇）

登場人物

楠正成
同　久子（夫人）
同　正行
同　正季
萬里小路藤房
快元和尚
和田正遠
湯淺入道
和田孫三郎
宇都宮某
長崎某
工藤某
其他大勢

序幕

正成の家の庭

（正成、菊の手入をしてゐる。正季、登場）

正季。隨分見事に咲きましたね。之ではお兄さんが自慢なさるのも無理はありませんね。

正成。あんまり今年は出來がよくなかつた。

正季。之でもですか。

正成。もつとすばらしい立派なのが咲くはずで樂しみにしてゐたのだ。

正季。それでも皆おどろいてゐますよ。

正成。皆は感心してくれても、私には自慢は出來ない。だが、見てゐるとあきないものだ。陶淵明が菊を愛した氣持がわかるやうだ。これを見てゐるとなにもかも忘れてしまふ。本を讀んだあとでこゝへ來てあつちの菊の世話をし、こつちの菊の世話をしてゐると本當に氣がのんびりする。

正季。お兄さんは何をつくつても本當にお上手ですね。この花壇のつくり方でも、何となく他の人とはちがつてゐますね。

正成。お前はそれに氣がついたか。之は私が道樂にやつてゐる城のつくり方によつてゐる。私は軍書をよむのが、實に好きなのだが、それでこの花壇の形も城の眞似だ。

正季。さうですか。道理で時々、花壇のつくり方がかはつてゐると思ひました。

正成。さうさ、いゝ考へがつき次第、花壇の形はかへてゆく、其處が又たのしみなのだ。

正季。お兄さんが、源平時代に生きていらしつたら隨分戰功をおたてになつたでせうね。

正成。どうだか。だが大概の戰爭の話をよむとはがゆい人間が多いね。あれでは両方が負けつこしてゐるやうなものだ。敵に勝つ手を教へてゐるやうなものだ。

正季。日本では義經なぞはいゝ武將ではなかつたでせうか。

正成。他の人に比較したらましだらう。勢ひと云ふものを知つてゐたから。それに矢張り、平家の人達が安心しきつて油斷してゐる時に一心に勉強してゐたから、矢張りそれだけのことがある。

正季。義仲の火牛の術も、田單の眞似ではありますがうまく功を奏しましたね。お兄さんがあの時平家にゐたらどうします。

正成。あゝなつては私でも駄目だらう。だからその前に地形や、敵の樣子をさぐらなかつたからいけない。前から知つてゐさへすれば逆に、火をやいて牛を逐ひかへすことも出來た

らう。又落し穴を掘つておいてもよかつたらう。戰ひには傲る心が何よりいけない。油斷がなく、力が一つになり、皆が大將を信じ切ることが必要だ。狐疑は禁物だ。そして足が浮き出しては困る。

正季。義仲も、折角平家を都から逐ひ出しながら終りを完うすることが出來ませんでしたね。

正成。德がなかつたからだ。人の心がはなれてしまつたからだ。戰ひに勝つことは出來ても、そのあと民の心をあつめることが出來なければ仕方がない。

正季。さう云へば北條ももう末路が近づいて來ましたね。世の中が物騷になりましたね。

正成。だがそんな話をしてゐるよりは、この菊に一杯水をやつた方がいゝ。籠城には何より水が必要だ。

正季。水を一杯くんで來ませうか。

正成。あゝ、くんで來ておくれ。

（正季、手桶をもつて退場。まもなく水を持つて登場）

正季。どれにやりませう。

正成。その菊までやつたから、その他のにやつてくれ。

正季。戰爭の話をしてゐると時のたつのを忘れます。

正成。北條高時は又租稅を倍にしたさうだ。

正季。それで、犬を飼ふのださうですね。

正成。まさかそんなこともあるまい。

正季。それでも皆、犬に生れた方がいゝと云つてゐます。

正成。私も時々、何に生れたら一番よかつたかと考へて見るが、まあ何に生れても面白いものはないね。まあ生れない方がいゝが、生れれば矢張り人間だらうね。勿論他のものに生れたいと思つたつて生れることは出來ないが。

正季。人間にもいろ／＼ありますが、私は自分は幸福だと思つてゐますよ。

正成。それはさうだ。私達は今時には仕合せすぎる。稅は高いが、生活の心配をする必要はない。本が讀みたい時には本が讀め、花畑の世話がやきたい時には花畑の世話が出來る。世の中の人が皆、私達のやうにくらせてゆけたら、何も問題にないはずだ。こんなに平和に、こんなに靜かにくらしてゆけることを、私は本當によろこんでゐるのだからね。たゞ私の内の火が時々、何かことの起るのを待つてはゐるが、待ちぼうけをすることが出來れば、私達程仕合せものはないだらう。

正季。お兄さんは戰爭をする夢をごらんにはなりませんか。私はよく見るのです。

正成。さうか。私も見ることがある。

正季。私はいつもお兄さんのお伴をして戰爭に出るのです。するとお兄さんはいつでもお勝ちになるのです。どんな大軍でもお兄さんと一緒にゆけば勝つのです。ですが私一人になると、から意氣地がなくなるのです。

正成。お前は私を迷信してゐてくれる。私も戰爭の夢で負けたことはない。こなひだ、大きな聲では云へないが、高時の軍勢と戰つて、もう少しで高時を捕虜にする所で眼が覺めて、惜しい氣がした。もう少し目がさめなかつたら、あの君には無禮な、民には諂ひの源になつてゐる高時をとつつかまへてやる所だつた。その時お前は菊水の旗をなびかせて先頭に立つてゐた。その姿は實に立派だつた。あの夢はお前にも見せたかつた。

正季。それは本當ですか、お兄さん。お兄さんは私をそんなにまで信用してゐて下さるのですか。私はお兄さんの爲なら本當によろこんで死にます。

正成。それは夢の話だよ。私達はあまりに呑気なのでいろいろの夢を見て楽しんでゐるのだ。戦争の恐ろしいことや、苦しいことなぞは忘れてゐる。

正季。私はお兄さんの持っていらっしゃるその無限の智慧を本當に生かしてくれる時のくるのを待ってゐます。先日快元さんに逢った時も、二人でそんな話をしました。あの人は今度こそ北條がつぶれると云ってゐました。高時の振舞は度を過してゐると申してゐました。人心がすっかりはなれたと云ってゐました。

正成。私もその事を考へてはゐる。しかしまだ北條の力に手向へるだけの力のあるものはあるまい。

正季。お兄さんの他には。

正成。せめて一萬の兵があって、私の手足のやうに働いてくれたら。——まだ私にはそれだけの力がない。それに私はあまり野心が弱すぎる。向う見ずの性質がない。あまりにいろいろのことがわかりすぎる。そして天下をとると云ふことにあまり眞劍にはなれない。人民を幸福にはしてやりたい。だが私の生れでは、今の世では私の思ふ通りにはゆくまい。私は静かに菊の世話でもしてゐる方が柄にあってゐるだらう。

正季。もし泰平の世の中でしたら、お兄さんは平和をたのしんでゆかれるでせう。しかしお兄さんが立たなければ、天下がをさまりがつかなくなったら、お兄さんは菊いぢりをやめて劍をお取りになるより仕方がないでせう。

正成。時がくれば、私は力だけのことはする。だが、私はさういふ時が来てくれないことを一方望んでゐる。

正季。ですが、一方では又さう云ふ時の来るのを望んでいらっしゃるのでせう。

正成。まるで望んでゐないと云へば譃ついたことになるかも知れない。しかし私が出ないでもすむ仕事だったら私は御免をかうむるだらう。しかし他の人では出来ない、私が出なければをさまらない仕事だったら、私はその時は菊いぢりはやめてしまふだらう。そしてこの片田舎に、私のやうな人間をそっとつくっておいたものの力を見せてやるだらう。私はいつでも立ち上る用意をしながら悠々と菊いぢりをしてゐる。其處にたのしみがある。嵐のくるのを私は恐れてばかりはゐない。私の内には火が燃えてゐる。生きたがってゐる謀計が胸の中に一杯になってゐる。だが私は又平和をたのしむことを知ってゐる。

正季。お兄さん、私はかうやって話してゐると力がうちにわいて来ます。何かしたくって仕方がありません。

正成。お前にはまだ若いからだ。世の中はさわがしくなった、官軍と六波羅の軍が戦ひを始めた、陛下が笠置寺に行幸になる、そんな風評がお前の若い血を燃やすのだ。

正季。お兄さんの血だって燃えないことはないでせう。

正成。世がさわがしくなると皆の気が荒くなる。皆ぢっとしてゐられないやうな不安を感じてゐる。

正季。私は時々お兄さんが菊いぢりをしてゐるのがはがゆくなります。お兄さんは何處までおちついていらっしゃるのでせう。

正成。私でもおちついてゐるうちに骨が折れる時がある。

（正行、八つ位、同年の子供達と戦ごっこをして現はれ、又走りながら退場。二人見送る）

正季。お兄さん。笠置へお出かけになったらど

うです。私は人間を畜生よりもおとつたものにとり扱ふ高時に我慢が出来ません。そして大塔宮に手向つて、理不尽に陛下を島流しにしようとする高時に我慢が出来ません。人民はます／＼税が高くなり、役人は貧乏人をふやすために働いてゐて、そして貧乏人の飢ゑ死するのを笑つてゐます。私にお兄さんの力があつたら、菊いぢりなんかしてゐません。私はお兄さんがきつと今に義兵をおあげになることを信じ切つてゐますが、私は時々はがゆいのです。

正成。お前はまだ若いからだ。私は自分の力を知つてゐる。陛下の御命令があればともかく、私の方からたつんで出るのでは、私には何一つ仕事をすることは出来ないだらう。

正季。[illegible]をみても、いつも陛下を思つていらつしやいます。ですからお兄さんのことですから、二人は安心してゐるのです。

正成。まあ、安心してゐるがいゝ。しかしお前は戦いといふものがどういふものか知つてゐるか。そして武士の力がまとまつてゐるといふ事を知つてゐるか。百姓の家を[illegible]にも、[illegible]るぜいの軍勢がお前の前には立つてゐる。他人は[illegible]ならない。私はまだ／＼武家を倒すだけの力を持つてゐる人は出てこないと思つてゐる。

正季。その人が菊いぢりなんかしてゐるのですからね。

正成。今の私には百姓の人間さへつかへない。それに陛下の御徳を得ていふ話だ。そしてその人々の人間をまとめる兵糧の用意が必要だ。お前はまだ若いから、それでいゝと思つてゐる。あとの責任は私にまかせて安心してゐられる。だが私にはさうはゆかない。

正季。大塔の宮は不世出な英傑でゐられるさうです。又藤房卿は智と徳を兼ねた方ださうです。

正成。だが十年とは百万の敵を引うける力はあるまい。立つことはわけない。だが戦の道筋が立たない間に立つたつてそれがなにになる。それよりは、静かに菊いぢりでもしてゐる方がいゝのだ。

正季。ですがこの機会をのがしたら、もういくらお兄さんが偉くつても駄目です。菊作りを道楽にすることの出来るのは今ですが、陛下の御心を、大塔の宮の御苦心、藤房卿の[illegible]心をが一つになつてゐる今より外に、お兄さんの力の生きる時はありません。今に官軍がまけてしまつたら、あとの祭りになります。私にはこの菊をぬいてしまひたい。そしてお兄さんが剣をとつてお立ちになる姿が見たい。

正成。その時は楠の一族はすべて死ななければならない。あの正行も死ぬだらう。

正季。今の世に自分の命のことなぞ考へてゐるものはありません。

正成。私に死ぬより他に道のないことは嫌ひだ。それよりも菊いぢりの方がいゝ。その花の清く美しいのを見ると、戦争のことなんか忘れてしまふ。

正季。この花なんか、すてておしまひなさい。

（ぬいてすてる。泣き出す）

（夫人登場）

夫人。殿さま、大へん立派なお客さんを一人おつれしていらつしやいました。あなたが菊いぢりしてゐると申しましたら、それは丁度いゝ、お客さんに菊をお目にかけたいと思つておつれしたのだとおつしやつて、こちらにお客さんとおいでになりたいさうですが、どういたしませう。

正成。[illegible]さんならかまはないからおつれしたらいゝだらう。

夫人。それならこちらへお通しいたしますよ。

正成。あゝ。
（夫人退場）
正成。正季、お前の好きな快元さんが來たさうだ。お客さんをつれて來たと云ふが、快元さんのことだから、きつと結構なお客さんに違ひない。
（快元、藤房、登場）
快元。見事に咲きましたな。（會釋する）
藤房は默禮する。
快元　お客さんが菊を拝見したいとおつしやいますから遠慮なく拝見します。
正成。どうぞ御遠慮なく、誠に恥かしい出來ですが。
快元。どうで御座います。私が自慢いたしましただけのことがございませう。
藤房。本當に聞いて想像したより立派なのにおどろきました。殊にあの一株の見事なのにはほと〳〵感心しました。
快元。どうです、お氣に入りましたか。
（段々菊を見るふりして正成達から遠ざかる）
藤房。氣に入つた以上です。陛下にお話しましたら、どんなにおよろこびになるかわかりません。私はまだこんなに一目見てたのもしく思つた人を知りません。
快元。それを伺つて私も安心いたしました。實際、あの人程、智慧のある人を私は存じません。
藤房。あの人は智慧許りではなく、誠實な點でも類のない人でせう。
快元。あなたのおつしやる通りです。
藤房。私は一目見てすつかり惚れてしまひました。
正季。お兄さん、今日は快元さんはどうかしてゐますね。それにあのお客さんはたゞの方ぢやありませんね。私はまだあんな立派な方を見たことがありません。
正成。私もあの人にはすつかり感心した。あの人が藤房卿だと言はれても、私は信用するだらう。私は自分の夢が本當になつて來たやうな恐ろしさを感じて來た。生れて初めて身體がふるへて來た。
快元、あなたのいらしつた本當の理由を知らせてもよう御座いますか。
藤房。どうぞ。あんな人が、この世にゐてくれたことは私達の運がまだつきない證據です。私達はどうしてもあの人を味方にしなければならない。
快元。大丈夫です。それではあの人になにもかも話します。
藤房。あのわきにゐる方は、弟さんですか。あなたの話してゐた。
快元。さうです。
藤房。それなら秘密にする必要はありませんね。
快元　大丈夫です。
藤房。それなら萬事、あなたにお任せします。
快元　承知しました。
正季　お兄さん、私もなんだかうれしいやうな怖いやうな氣がして來ました。
正成。まだはつきりはわからない。だが笠置からのお使ひかも知れない。
正季　私も、さう思ひます。快元さんがやつて來ます。
正成。快元の顔を見ろ、快元の背ろには運命がついてゐる。
藤房。（獨白）あゝ、あの決心した顔つき。初めて私は決心した男の顔を見る。この男を信用しないで、誰が信用出來よう。
快元。正成さん。正季さん。よく注意して聞いて下さい。私達は菊を見に來たのではなく、あなた達を見に來たのです。私は一昨日笠置へ

お召しで出かけたのです。すると陛下から、このあたりに楠と云ふ姓をもつた男はないかとのお尋ねがあつたのです。私はすぐ存じてをりますと申し上げましたら、陛下は思はず一膝のり出されて、お前はその男を知つてゐるかとおつしやるのです。至つて懇意にして居りますと申し上げましたら、どんな男だと性急におたづねになつたので、私の知つてゐることを正直に申し上げましたら、わきにゐた藤房卿を顧みられて、夢はやはり正夢ぢやつたなうと仰せられてにつこり微笑まれました。藤房卿初め、その座に居りましたもののこらずおよろこび申し上げましたら陛下には殊の外御機嫌よく、藤房卿にすぐ私と一緒にあなたの處へ行つて、あなたをつれてこいとの勅で御座います。あすこに居られるのが藤房卿で御座います。又陛下が御覧になつた夢といふのが大したものなのです。陛下が紫宸殿の庭前のやうな處で大きな常磐木の下に三公百官を從へて坐つていらしつたのださうです。その木は殊に南の枝が榮えてをりましたが、その枝の下の上座に南向きに玉座がとつてあつたのださうです。そこには誰も坐つてゐなかつたのださうです。陛下はそれを御覧になつて不思議に思はれると、二人の童子が出て來て陛下の前に跪き涙をこぼしながら、申したさうです。今天下に御身を安らかにかくまひ給ふ處は一處も御座いません。たゞその枝の下の南に向いた御座所だけは陛下のためにとくに私の主人が設けました席ですからどうか御心やすくあの席におつきになつて天下をお治め下さい。さう申して童子は天へのぼつて行つたさうです。陛下はお目がおさめになつてから、木の下に南面してすわれと云ふのは楠の守護の下で、天下を治めよと云ふことだと云ふことをはつきりお覺りになつたさうです。それであなたの事を私が申しあげた時、陛下を初め皆のものが、夢のお告げの男はあなたにちがひないと思はれたのです。それで皆、無上によろこんだのです。あなたこそ天から授けられた方だと陛下を初め皆さう思ひ込んで居ります。それで陛下はすぐ信任の御厚い藤房卿にすぐ私と一緒にあなたの處に行き、そして是非つれてこいとの勅で御座います。あなたがもし御承知下さらなかつたら、陛下の御力おとしはどの位だかわかりません。そして他の人達もどんなに力をおとすでせう。藤房卿をおよびしてよう御座いますね。

正成。（靜かに、だが聲がふるへてゐる）どうぞ。

快元。あの方は大層臆病の御疑ひな方です。それに今日はお忍びですし、何處に敵の内應者がかくれてゐるかもわかりません。それであなた達が藤房卿にたいしてあまり禮をあつくなさらないやうに、私と話す時と同じやうな態度でつきあつてほしいとのことで御座いました。どうぞそのおつもりで。

正成。畏まりました。どうぞよろしくおつしやつて下さい。

快元。御承諾下さつたと申しましてようございますね。

正成。藤房卿とよく御相談いたしましてからはつきり御返事することにしませう。ですが私の生命は陛下にさし上げることだけはお約束いたします。

快元。それを伺つて、私は本當に重荷がおりました。ありがたう。（頭をさげる）

（快元、急いで藤房卿の方へゆく）

正季。お兄さん。ありがたう。先刻の失禮をお許し下さい。

正成。正季…私はお前の心をうれしく思つ

てゐたのだぞ。もう當分菊いぢりはやめた。今度父菊いぢりをする時は花もの形もかはるだらう。お寺の形にでもするかなあ。

正季。陛下の御らんになつた夢の話を聞いた時、私はもう・・・死んでもいゝ、死んでもいいと思ひました。

藤房。結果はどうでした。

快元。およろこび下さい。生命は陛下にさしあげると申しました。

藤房。それでは一緒にすぐ、來てくれるのですか。

快元。それはあなたと御相談の上できめたいとおつしやいました。

藤房。さうですか。それでは菊を見ながらいろいろお話しませう。

快元。（大きた聲で）正成さん、正季さん、この菊を一つ載けないでせうかね。

正成。差上げませう。正季、一緒に行かう。

正季。はい。

藤房。あらたまつての御挨拶は致しませんが惡しからず　私のことは快元さんからお聞きのことと思ひます。私達は菊を拜見してゐるやうにして、いろいろ御相談申したいと思ひます。

正成。畏まりました。正季、その菊をこれで切つておあげ。

正季。はい。

藤房。あなたは之からどうすれば一番いゝと思ひます。すぐ御一族をおつれ下さつて、笠置へ來て戴けますか。

正成。私の考へでは、私はそれも考へて見ましたが、それ、面白くないと思ひます。

藤房。どうしてですか。

正成。私は田舍者にすぎません。皆さんの中に入つては、川にすみなれた魚が御殿の泉水に入れられたやうなもので、私の自由がきかなくなり、私のしたいことが一々出來なくなると思ひます。私はやはり住みなれた川で、其處の主として働きたく思ひます。其處では皆、私を信じてくれます　私の考へはのこらず生きます。私の机で考へたり菊をいぢりながら考へてゐたことをそのまゝ實行しても誰も笑はないでせう。私のもつてゐるものは、私の世界ではのこらず生きてくれますが、笠置では生きないと思ひます。

藤房。あなたのおつしやることは一々御尤です。それであなたのお力で四五十萬の敵をふせぐことが出來るとお思ひですか。

正成。出來るとは明言出來ません。しかしどうにかして日本全國の同志が立ち上るまではもち耐へて見るつもりです　それに敵の力を一つに集めるよりは出來るだけ分つ方がいゝかと思ひます。戰ひには何よりも力が一つに集まることが大事です。私の過去に大きな武功を立てた歴史でもありましたら、皆さんが私の云ふことが腑におちてもおちないでも、聞いて下さるかとも思ひますが、今の私ではどうしやうもないと思ひます。反つて私のゐることが意見を多くするにすぎないだらうと思ひます。私は自分の考へた通りにやつて見たいのです。

藤房。何處にたてこもるつもりです。

正成。私の考へではあの赤坂山がいゝかと思ひます。あすこは大軍を入れるには適しませんが、五六百の兵で守るのには適當してゐると思ひます。

藤房。もう前から義兵を上げる用意をしていらしつたのですか。

正成。さうです。私は狩が好きなやうな顔をしてこの五六年の間、この近所、いたる處を歩いて見ました。そして二つの處を選びました。こゝですから申しますが、一つは千劔破

と云ふ處ですが、こゝは千人あまりでまもるのに適當です。しかし今の私には、手足のやうに働くものは五百人位きり集める力はないでせう。それに敵は私を馬鹿にするでせう。又馬鹿にさせることが最初には得と思ひます。二度目にはその反對にうんと恐れさして見ようと思ひます。この花壇を見て下さい。之が私の考へてゐる赤坂城で、こちらが千劍破城です。赤坂城は敵がうんとあなどつてせめてくるのに都合のいゝやうにつくらうと思ひます。

藤房。こちらの城塀は二重につくるのですか。

正成。さうです。外がはのは敵がかじりつきよぢのぼらうとする時、この繩をかう云ふ風に切つてやらうと思ふのです。

藤房。御名案です。

正成。敵が私を輕蔑してくれなければものにならないのです。しかし實際の場合にはまだまだ考へなければならないことが多いと思ひます。私の考へでは、ともかく二三年籠城をして天下の義兵がならび立つのを待たうと思ふのです。今の我々の力だけでは北條をたふすことは無理と思ひます。人心はことごとくはなれてをりますが、人々にはまだ北條の力を恐れてゐます。そしてとても手向ふことの出來ないものと思つてゐます。私は小さい城で、手向へることを示すつもりです。五六百の兵で北條の大軍を防ぐことが出來るとわかれば、人々は自分達でも立ち上ることが出來ると思ふでせう。私は北條を恐れるにたりないものだと云ふことを天下に示して見せるつもりです。

藤房。あなたのお言葉を今の多くの人が聞いたらあなたを氣違ひだと云つて笑ふでせう。だが私はあなたを信じ切つてゐます。一目見た時から、私はあなたを信じました。天は私達をお捨てになつてはゐないと云ふことを知りました。陛下はさぞおよろこびになるでせう。

正成。私は謙遜はいたしません。御信用には背かないつもりです。私は今直に御加勢出來ないことはあなたからよろしく陛下に申し上げて下さい。そのかはり、私が生きて居ります限りは御心丈夫に思つて戴いてまちがひはないと思ひます。私はたゞ陛下のわきにあなたのやうな方がいらつしやらないと困ると思つてゐました。それだけが氣になつて居りました。私はお世辭は申したくありませんが、本當のことを申せば、あなたがゐて下さるので私は安心して御加勢が出來るのです。陛下には私の心がわかつて戴けることを私は信じることが出來ました。私の力は生きることが出來るのです。

藤房。どうか、陛下と、國民のためにお骨折り下さい。

正成。出來るだけのことはやつて見ます。

藤房。正季さん、あなたも出來るだけお骨折り下さい。

正季。（畏まり）はい。

正成。それでは家へ上つて少しお休みになつてはどうですか。

藤房。ありがたう。それでは快元さん、一寸休ませて戴いて又いろ／＼ゆつくりの御話でも伺ひませう。正成さん、一緒に來て戴けますね。

正成。おともいたします。

藤房。正成さん、本當にいゝ世界を來させたいものですね。そして皆のよろこぶ顔を見たいものですね。

正成。本當に、私達が頭に描いてゐる、美しい世界を來させたいものです。

（正行、戰爭ごつこをしながら又出てくる）

藤房。あの大將になつてゐるお子さんはあなたのお子さんですか。

正成。さうです。

藤房。本當にいゝお子さんですね。あの子供さん達が大きくなる時分には、世の中も餘程よくなつてゐるでせう。

正成。本當にさうしたいものです。（皆退場）

――幕――

第一幕

第一場

（赤坂城を望んで）

侍一。あすこに見えるのが赤坂城ださうで御座います。

大將。あれが赤坂城か。あの城で俺達に手向はうと云ふのか。あの小ぽけな城で。

侍一。さやうで御座います。

大將。隨分身の程を知らない奴だな。あれで天下の兵を一手にひきうけようと云ふ、身の程知らずにも程がある。あの城に何人位たてこもつてゐるのだ。

侍一。五百人ださうで御座います。

大將。たつた五百人？　それを味方は三十萬の大勢でやつつけるのだから、兎狩をするやうなものだ。それで恩賞が戴けるのだからお前達は仕合せものだ。

侍二。本當に仕合せ者で御座います。

大將。一本の柱で傾く家をさゝへようと云ふ者は、楠と云ふ奴のことを云つた言葉であらう。しかもその柱のいかにも細すぎるのには、こつちの方で同情してやりたくなる。早く降參しない内に、兎狩をはじめるとしようか。

侍三。一寸申し上げますが、楠と云ふ男は大へんな智慧者ださうで御座います。

大將。はゝゝ。さぞ智慧者であらう。片手にのせて吹きとばすことが出來るやうな城に五百の人數でたてこもつて、大塔の宮が七萬の兵でもどうすることも出來なかつた味方をやつつけようと思ふのは、さぞかし自惚の強い智慧者であらう。狼に向ふ兎のやうな智慧者であらう。はつはつは。

侍一。本當に田舍には身の程知らずが居りますものです　井の中の蛙とはあんな男をさすのでせう。きつとあの城をあれでも天下一の大きな城とでも心得て居るので御座いませう。

大將。蟷螂が龍車に向ふと云ふのは、から云ふ男のことを云つたのであらう。はつはつは。今時分はさぞ、將軍に手向つたことを後悔してゐるであらう。なべの中の魚の楠、今時分はふるへ上つてゐることであらう。身の程知らずのいゝいましめぢや。必ず[illegible]ゐるものは生かしておいてはならないぞ、楠正成の首をとつたものには、厚い恩賞をとらせるぞ。それは功勞としてはとるに足らないでも、天下の見せしめとして不相應な褒美をとらせることを、皆のものに知らせてやれ。

侍三。兵法に小敵と云へども侮らずと云ふ言葉が御座いますが、あんな小さい城でおちつきはらつてゐる所を見ますと、何かたのむ所があると見えます。

大將。お前はいつもに似合はず臆病者になつたな。あのおちつきはたゞ自惚れから作り來てゐる。自分より賢いものにあつたことがないので安心してゐる。馬鹿な奴だ。

（侍四登場）

侍四。皆のものが、一刻も早くあの城を陷れたがつてゐます。進軍の合圖をしてよう御座いますか。

大將。よろしい。一日も早くあの小ぽけな城を

おとしてしまへ、そして味方の力を知らせて、天下の者が謀叛することを思はなくするやうに骨を折れ。北條家は滅ぼすことの出來ないものだと云ふことを知らせてやれ。

侍四。はつ。

大將。それでは全軍を進ませることにしよう。皆のものも、この城をおとしそこなつては、わざわざ關東から兎がりに來て、兎狩を禁じられたやうなものだ。あの小ぽけな城、片手にのせてなげとばすことの出來る城を、一もみにもみつぶしてしまへ。全軍を進ませろ。

侍皆。はつ。

大將。こんなに呑氣な戰爭も滅多にやることは出來ない。皆遠慮はいらない。早くゆきたいものは早くゆけ。

第二場

（赤坂城の内、城壁のそば。正季、和田正遠、他に兵士數名。）

兵士一。あゝ又あすこから敵がくる。

兵士二。一たい敵の數はどの位あるのだらう。ひつきりなしにやつてくる。まるで蟻のやうだ。

兵士三。まだつゞいてゐる。皆、こつちを目がけて進んでくる。あゝ來てはいくら殺しても切りがないだらう。

兵士一。人間と云ふ奴はいくらでもゐるものだね。この小さい城をうつのに、あんなにかゝつて來なければならないのかね。

兵士三。なんだ、お前はふるへてゐるね。

兵士一。武者ぶるひだ。お前だつてふるへてゐる。

兵士三。お前の顏色はどうしたのだ。

正季。とう／＼やつて來たね。之は面白くなつて來た。これだけくればはり合がある。

和田。本當に、之でこそ天下を敵にしたと云へます。男子にとつてこの位痛快なことは少ないでせう。之ではいくら負けても恥にはなりません。

正季。力が滿ちて來た。あのなかに猛虎のやうにとび込んで行つたらさぞ愉快だらう。

和田。殿樣にはきつといゝお考へがあるでせう。

正季。さう云へば、お兄さんは何處にいらつしやるのだらう。一つよんで來よう。

正成。（登場しながら）こゝにゐるよ。敵兵が澤山來たさうだね。

正季。來ました、來ました。何十萬と云ひたい程來ました。本當に雲霞の如き大軍が爭つてやつて來ます。

正成。中々來るな。

正季。笠置が落ち、大塔の宮が何處かへかくれてしまはれたので、敵の全軍がのこらずこつちへやつて來たのですね。

正成。かうこなければ面白くない。來れば私の思つた通りのことが出來る。

正季。あの軍勢はすぐこつちへやつて來ますよ。

正成。さうだ。やつて來さうだ。やつて來てくれれば私の思ふつぼに落入ることになる。だがいくら馬鹿な敵でも、あれだけ人數が居るのだから、一人位は智慧者がゐてもいゝわけだが、矢張り居ないと見えるな。すぐやつてくる。之は思はないまうけものをした。さうだ、いよ／＼やつてくる。正季、正遠、三百の兵をつれて、あの山のかげにかくれてゐろ。そしてもし敵が矢を恐れずに堀を渡り出したら、敵軍のやうな顏して出て來て魚鱗がかりでせめこめ、又敵がこの城をせめあぐんで引あげて甲冑をとつてやすんでゐたら、私がこの旗をふるから、そしたら、菊水の旗を松の嵐に吹かせてしづ／＼と

敵陣に近づき、敵が敵か味方かとあやしんでゐるすきを見て切り込め、その時城にのこつた二百人の仲間も皆敵陣へ切り込むだらう。さあ早く、敵に氣づかれないやうにゆけ。

正季。｝はつ。
和田。｝

（二人退場）

正成。城にのこつたものは、いつも敎へてあるやうに各自の場所について、そしていつも敎へてあるやうに、私の合圖を待つて矢つぎ早に敵を射殺せ。しかし敵が堀を渡つて切り岸につくまではどんなことがあつても靜かにしてゐろ。私の云ふことを聞けば必ず勝利を得る。私の云ふことを聞かないものは敵の內應者と見なすからさう思つてほしい。決して恐れてはいけない。敵も人間だ。私の云ふことさへ聞けば、百萬の軍勢も恐るゝに足りない。いつも練習してある手なみでやれば譯くまに千人あまりは殺すだらう。敵はそれ以上向つては來まい。もし來れば外がはの城、堀を切り倒せばいゝ。敵は味方を小勢としてあなどつてゐる。必ず安心して、いつも練習してある通りをやるより仕方がない。それが唯一の生きる道だ。さあ、すぐに用意をするといゝ。私は見廻つてくるから。（退場）

（兵士たち、各自弓矢をとりにゆき、自分の席につき、矢をしらべる）

兵士一。どうだ。敵の數はます〳〵ふえるね。

兵士二。おどろいたね。

兵士三。大將の云ふ通りやれば大丈夫だらう。大將は天から陛下をおたすけする役目を仰せつかつてゐるのださうだから。

兵士一。本當に大將は陛下のお前に出て、私が生きてゐる間は御心やすくして戴きたいと云つたのださうだね。

兵士三。そしてその時陛下はお前だけがたよりだとおつしやつたさうだ。

兵士四。陛下は大將の守護さへおうけになれば、天下は又陛下のものになると云ふ、夢のお知らせを得られたのださうだ。

兵士二。和田殿もさう云つていらつした。

兵士三。正季さまなぞの大將をお信じになること神樣のやうだ。

兵士一。それにしても、敵の多いのにはおどろく。

兵士三。大將は反つてその方がいゝのだとおつしやつたね。

兵士一。それにしても少し多すぎる。

兵士二。馬に乘つてゐる人間でも何千、何萬とゐる。冑に日光があたるので、見てゐるとまぶしくなる。

兵士一。よくも集つたものだな。

兵士二。本當に少し氣持がよくない。たしかに味方が勝利を得るのだらうね。

兵士四。もうかうなつては仕方がない。大將の云ふ通りやるより仕方がない。病人は醫者の云ふ通りをきくより他、生きる道はない。

兵士一。やつてくるな。本當にやつてくるな。

兵士二。いくらでもくるさ。

兵士三。皆、顏色がわるい。

兵士二。脊汗がにじみ出て來た。

兵士一。敵は段々近づいてくるな。

兵士四。この氣持は何とも云へないな。

兵士一。近づいてくる、近づいてくる。

兵士二。野も山も敵だらけだ。

兵士四。鼠一匹はひ出るすきもない。

兵士三。大將は、あれは人間ぢやないさうだ。

兵士一。近づいてくる、近づいてくる。手がふるへる。

（正成急いででてくる）

正成。弓や矢の用意は出來てゐるな。皆、私の云ふことを信じろ。私は神樣の申し子だ。

私には毘沙門天がついてゐる。私は陛下が再び自ら政をとられるやうになる爲に神からつかはされたものだ。私を信じろ、私の云ふことにまちがひはない。必ず今日の戰ひは味方の勝利だ。そして味方は最後の勝利を得るのだ。敵の人數におどろくな。神の御命令に背くのをおそれろ。

（正成急いで退場）

兵士三。ありがたい、ありがたい。大將は人間ぢやない、神様だ。私は大將の後ろから後光がさしたのを見た。

兵士達。本當か。本當か。

兵士三。本當だ。たしかに見た。

兵士四。さう云へば私も見た。

兵士達。ありがたい。ありがたい。戰は勝つぞ。勝つぞ。

兵士三。もう何が來たつて怖くはないぞ。

兵士四。毘沙門天がくつついてゐるのだからな。

兵士一。來たぞ。來たぞ。

（外でさけび聲聞える。正成あらはれる）

正成。討て、討て、討て。

兵士達。あたつた。あたつた。あたつた。あたつた。

正成。敵は逃げ出したぞ。足なみがくづれたぞ。うて、うて、うて。

兵士達。逃げたぞ。逃げたぞ。逃げたぞ。勝つたぞ。勝つたぞ。勝つたぞ。

（兵士たち感極まつて、をどつたり、だきあつたり、泣きだしたりする。正成靜かに敵の方を見てゐる）

正成。靜かに。靜かにしろ。

（兵士たち靜まる）

正成。敵はしりぞいた。そして今に休息するだらう。その時、山に行つてゐる仲間が、敵陣に切り込むだらう。その時、皆も私と一緒に敵陣を目がけて切つて出なければならない。しかしその時も、味方は必ず勝利を得、敵は算を亂して逃げるだらう。だが一瞬間の差で勝利と敗北はわかれるものだ。油斷をしてはいけない。皆の刃をしらべ目ぬきの樣子をしらべておけ。

皆。はつ。（刀をしらべる）

兵士一。殿様。私達はもう生きてはゐられないものと思つてゐました。きつと敵に今時分皆殺しにされてゐる時分と思つてゐました。

正成。馬鹿な奴だ。しかし敵の人數が多すぎるからさう思ふのも無理はない。

兵士二。本當にあの時は怖かつた。だがこんな嬉しいことはない。

兵士三。殿様のうしろから後光がさしたのを見てから私達は怖くなくなりました。

正成。靜かに。敵は私達が追ひかけないので安心してゐる。逃げたのが口惜しいので、馬鹿にされないために、武裝をといてこつちに輕蔑を示してゐる。見てゐろ。今この旗をふると味方の軍勢が正季と和田につれられて靜かにおりてゆくから。敵は城の外に三百人の軍隊が出してあることは知らないから、味方でも來たと思ふだらう。見てゐろ。私の云ふことにまちがひはない。

（正成、小高い處にのつて旗を靜かに三度ふる）

正成。そら、出て來たろ。

兵士三。はい。

正成。あのおちついた、靜かに進んでゆく姿を見ろ。あの風になびく菊水の旗の美しさ。あの小人數で、あの大軍に向ふのに一絲も亂れない大膽さ。お前達のあらはした功名にまけない功名をあらはさうと思つてゐるのだらう。敵はまさかあればつちの人數で自分達をせめにくるとは思つてゐないので安心し切つ

てゐる。どれ、私達もそろ〳〵用意して、敵の荒膽をとりひしいでやらう。年よりのお前達二人はこゝをよく見はりしてゐてくれ。敵は大丈夫向つて來ないと思ふがよく氣をつけてゐてくれ。

兵士六、七。はい。

正成。それではそろ〳〵用意をしよう。皆に城門に集まるやうに、知らせてくれ。私は城門に待つてゐるから。

（兵士六、七の他退場）

兵士六。大將の大膽にはおどろいたな。

兵士七。おどろいた。それに萬事が大將の云ふ通りになるのだからおどろく。だが、いくら敵が安心し切つてゐても、あの大軍にあの小人數で切り込むのは大膽すぎる。大將はまだ若いから中々無鐵砲だ。だが負けたら大變だ。

兵士六。正季さまや、和田殿ときたらなほ無鐵砲者だね。大將を信じ切つていらつしやるから、少しも心配せずに、あの小人數で平氣な顏して近づいてゆく。私達には出來ないことだ。

兵士七。さうさ、あの小人數であの大軍にこつちからせめこむなぞと云ふ考へは、あたりまへの人間には出來ない。とう〳〵敵陣に近づいたね。敵はまだ安心してゐる。

兵士二人。（同時に）あつ、切り込んだ。皆さわぎ出した。あの敵のあわて方。

（奧で正成の聲）

正成の、城門をひらけ、かけ橋をおろせ。

（皆のさけび聲があがる）

兵士六。味方の勝利だ。味方の勝利だ。あの敵のあわて方、鷹におひかけられた雀のやうだ。味方のもののはたらき。劍をふり廻せば誰かにぶつかる。

兵士七。敵が逃げ出した。勝利だ。勝利だ。前代未聞の勝利だ。勝利だ。

兵士六。あの敵のざま。あのざま。あのざま。ありがたい。ありがたい。（平伏し）毘沙門天樣、ありがたう御座います。

（兵士七も平伏する）

第三場

（赤坂城中の正成の室。正成、本を見てゐる。正季登場）

正成。どうだ、面白いことはないか。

正季。少しもありません。

正成。和田はどうしてゐる。

正季。力の出し所がなくつて困つてゐます。

正成。兵士達はどうしてゐる。

正季。退屈し切つてゐます。

正成。どうも敵をあまりおどかしすぎたやうだ。

正季。敵も手をかへ品をかへて攻めて來ましたが、どうすることも出來なかつたので、とうとうあきらめたやうです。

正成。攻めて來ないのはいゝが、兵糧のつきてくるのには困つた。

正季。あの時、お兄さんがあまり農民のことを御心配なさつて、とりたてるのにあまり遠慮をなさり過ぎたので、兵糧をあつめることが出來なかつたのは殘念です。

正成。そのかはり、人々は私達が勝つことを心から望んでゐてくれる。それは兵糧にはかへられない。人心を失つたら、戰に勝つたつて何にもならないからね。それは北條を倒して自分が又北條になるに過ぎない。

正季。ですけど、兵糧がなくなつてはどうすることも出來ません。

正成。和田をよんで來てくれ。

正季。はい。

（正季退場。まもなく和田と登場）

正成。あと兵糧は何日分ある。

和田。あと四五日でなくなると思ひます。

正成。あと四五日分はあるか。
和田。御座います。
正成。皆、腹一杯たべてだね。
和田。はい。
正成。敵はこの頃はすつかり用心してゐるね。
和田。はい。もう非常に恐れて用心してゐます。寸分もすきが御座いません。
正成。どうも戰にまけるわけにもゆかないので、ついおどしすぎた。だが天下は廣いやうで狹いものだ。もう少しは敵に賢い奴がゐてい丶筈だ。私の考へた半分も實行せずにすんでしまつた。然しいくら私の智慧でも、米をすぐ作るわけにはゆかない。殊に戰ひは腹がへつては出來ない。敵はいつ又攻めて來るかわからない。油斷はないだらうが、なほ油斷をしないやうに注意しておけ。
和田。はい。
正成。私の考へでは、初めつからこの城にながく籠城出來ないことを知つてゐた。しかし私にはあの時分はこの城にたてこもる以上の力はなかつた。これよりも十分な用意をする力はなかつた。これ以上の事をすれば何處かに無理が出來て、それはあとのために面白くなかつた。しかし今の私はちがふ。天下の兵を敵にしてこの小さい城にたてこもつて三十萬の大軍を玩具にして見せた。以前の私はこの近所の人に僅かの信用を得てゐただけだ。味方の兵士さへ、私の本當の力を知つてはくれなかつた。だが之からは私は天下の楠である。私は招かずして兵を得、兵糧も得るだらう。私にはこの城は小さすぎて來た。もうこの城を見すてるのも惜しくはない。だがこの大軍の圍みを破つて逃げ出すのは兵をそこねる許りだ。何かい丶考へがあつたら知らせてくれ。
和田。あなたにい丶お考へがなければ、私達にあるわけはありません。
正成。正季！　お前はどうだ。
正季。私もお兄さんにお任せして安心してゐます。
正成。感心な心がけだ。それなら私の考へを云はう。私達は武力で勝つことは出來ない。相手が二三千ならどうにでもなる。又何處かに本當にたよりになる味方がゐてくれれば其處までさへ逃げてゆけばい丶と云ふのならどうにでもなる。しかし私達のたよることの出來るのは、五百の兵と、その家族のものだけだ。あとは全部敵の味方だ。私達のたよりになるものは全部殺され、或は島流しにされた。私達のたよりになるのは私達許りだ。そしてすべての人はたゞ私達をたよつてゐる。今私達が死んだら、人々は北條の壓制に苦しむより仕方がない。それで私達は死なずに生きてゆくことが必要だ。しかしそれだけ北條方にとつては私達を生かしておきたくないだらう。私達が生きてゐる限り、彼等は私達をさがし出さないではおかないだらう。だから私達は生きるためには死んだ眞似をしなければならない。それでその內、なるべく嵐の夜、私達は自殺したやうに見せかけ城に火をかけ、そして敵兵がそれに氣がついてかけつける時、一緒に敵の風をして、まぎれ込んで逃げ出し、そして近所のものに私達が自殺したと云ふ噂をたてさせようと思ふのだ。いくら北條でも死んだものは搜しはしまい。そして大軍は得意になつて引きあげるだらう。その後は、私達はいつでもすきな時に兵をあげることが出來る。お前達に異存があつたら云つてくれ。
正季。御座いません。
正成。和田、お前はどうだ。
和田。御名案と思ひます。

正成。それではさう云ふことにするから、明日でも兵士達にもさう云つておいてくれ。
和田。畏まりました。
正成。正季、碁でもやらないか。
正季。やりませう。(碁盤をとつてくる)
正成。和田も見てゆけ。
和田。はい。拝見いたしませう。
正成。今度は私は攻勢に出るよ。この城も敵にあづけておけばとられる心配はない。そしてこつちがとりたい時はいつでもとれるからね。その方が安心だ。それまでは今度は山に引込んで、木こりの眞似でもやるかな。それも亦面白い。(碁石をとりながら)樂しみその内にありだらう。さあ始めよう。
(正季石をおく)

――幕――

第二幕

第一場

(正成の隠れ家。正成の妻、佛壇の前でお祈りをしてゐる。正成、櫻の枝をもつて登場)

正成。もう櫻が咲き出した。すつかり春になつてしまつた。
妻。もう咲きましたか。本當に綺麗ですこと。
正成。本當に赤坂城を脱け出たのは昨日のやうに思つてゐたが、もう半年近くなる。
妻。あなたが逃げていらつした時程、うれしい時は二度とありませんでした。あなたにもうお逢ひ出來ないと許り思つてゐた所へ、思ひがけず歸つていらつしたので。
正成。あの時は實際あぶなかつた。流れ矢にもう少しでやられる所だつた。思ひ出してもぞつとする。死ぬと云ふことは何んでもないとも思ふが、お前や正行のよろこんでくれたのを見た時は、本當に生きてゐてよかつたと思つた。
妻。今もあの觀音經にお燈明をあげてお祈りしてゐた所です。一心稱名と云ふ所に矢がとまつてから、私は念佛をたやしたことは御座いません。
正成。不思議なこともあればあるものだ。私もあれから念佛をおとなへすると氣がやすまるやうになつた。私の生命は私の生命ではないと云ふことがはつきりして來た。
妻。かうやつて一生をくらすことが出來たらどんなにうれしいでせう。私はもう一度あなたと別れて生きてゆかなければならないと考へるとどうしていゝかわからなくなります。
正成。戰國に生れた以上は仕方がない。早く平和な世の中にして、お前や正行と一緒にたのしく平和にくらせる世の中にしたいものだ。私は時々自分がもう少し時代に生れたらよかつたと思ふ。私に力さへなかつたら、私は何にもしないでおとなしく幸福に生活が出來るのだがとおもふ。だが私はおとなしくしてはゐられない。私が立ち上らなければ、日本は亂れるばかりだ。そして人々はいつまでたつても平和をたのしむわけにはゆかないだらう。
妻。あなたはまた戰爭をなさらうと思つていらつしやるのですね
正成。さうだ。私も男と生れた以上、自分のやりかけた仕事を仕上げるか、死ぬかどつちかを選ばなければならない。平和にくらしたいとは思ふが、又一方、北條をたふして、自分の思ふ通りな平和な時勢をつくり出さないではをさまらない氣持もする。秩序のある平和、そして人々が自分の業をたのしんでやつてゆける世の中、私はそれをのぞんでゐる。
妻。私もあなたの妻ですから、あなたの御仕

事の邪魔をしようとは思ひません。ですけれど、この冬のやうなたのしい生活がつゞけられたら私はどんなにうれしいでせう。私は百姓の人達を見ると羨やましく思ひます。

正成。なんでもはたで見る程、樂しいものではない。

妻。ですが、毎日々々一家のものが一緒に生活出來るのはたのしいものですわね。

正成。陛下を初め、藤房卿たちは私を本當に信じてゐて下さる。私は私の生きてゐる間御心やすくおぼしめせとこの口ではつきり云つた。私はどんなことがあつても、自分の心にちかつたことはやりとげないわけにはゆかない。

妻。私にだつて、その御氣持がよくわかります。だから私は泣いても涙をお見せしないやうにして居ります。夜中に度々夢を見て泣いても、私はそれをお知らせしようとは思つて居りません。ですが私は冬がくるのを恐れてゐました。あなたが、又出かけて、いつ歸つていらつしやるか、わからないことを考へると私は死にたくなります。左衛門の佐の局が藤房卿が笠置に行かれたのをなげいて大井河に身をなげられた氣持もわかります。私に正行が居りませんでしたら、私も死にたくなります。

正成。左衛門の佐の局の自殺されたことに私は同情はするが、あの事があつたために藤房卿の心は淋しくなりすぎてゐる。私は藤房卿の心の内を察して左衛門の佐の局の死んだことがうらみたい氣がする。いつか又春が來ないとは限らない。私は必ず又春をこさせて見せる。その時、藤房卿は左衛門の佐の局が生きてゐてくれたらと思はれるだらう。あのことはよくなかつた。

妻。私はさうは思ひません。左衛門の佐の局にすつかり同情します。女の心は弱いのですから。

正成。お前は短氣を起してはいけない。お前が生きてゐてくれるので、私は戰に勝つよろこびが十倍にされるのだから。

（正季登場）

正季。お兄さん。

正成。なんだ。

正季。本當に春らしくなりましたね。

正成。あゝ、もう梅が咲いてゐた。

正季。兵糧も段々集つて來ました。

正成。今度は千人の人が二年は籠城する必要がある。少なくも三四千石はあつめなければならない。

正季。大丈夫集りさうです。陛下の爲ならよろこんでさし上げると云ふものが、續々出て來ます。そしてあなたの事は皆、神樣のやうに思つて居ります。生きていらしつたのかと泣いてよろこんでゐるものも御座います。

正成。さうか。しかしもう油斷はしてゐられないな。

正季。大丈夫です。皆北條を心からにくんで居りますから。しかし、もう春になりました。そろそろ兵をあげる用意が必要かと思ひます。

正成。私はさつき山へ行つていゝことを考へたのだ。あの、赤坂城にたてこもつてゐる湯淺入道は、毎月、月初めに國から兵糧をとりよせてゐるさうだが、私はそれを利用して一氣にあの城を奪ひとることを考へた。さうすると敵の注意は皆、私の一擧一動に集る。その時にお前は和田と一緒に千劍破の城を私のいつた通りに築き、そして兵糧を十分たくはへるといゝ。さうすればお前達は安心して手ぬかりのない用意が出來るわけだ。天水桶は出來るたけ多くつくるがいゝ。又敵がかけ橋でもつかつて來た時の用意に油は十分蓄

へておく方がいゝ。その他私の云つた通り手ぬかりなくやつてくれれば、今度こそ何十萬の兵が來ようが、一年でも二年でも三年でも兵糧のつゞく限りは籠城が出來る。その内には味方があつちこつちから立ち上つてくるだらう。そして敵は前後左右に敵を受けて、つひに滅亡するであらう。今はもう一息と云ふ所だ。處がその一息の役目をはたすことが出來るのは私達だけなのだから、手ぬかりないやうに用意しないといけない。私達が亡びてしまつたら、天下は治まる時は來ないであらう。國は常に二つの力の對立することで、いつも恐怖を感じないわけにはゆかないだらう。だから用意が十分出來るまでは私達は大事に大事をふまなければならない。

正季。赤坂城は一日でおちますか。

正成。大丈夫一日でおちる。敵の兵糧を途中で奪つて、味方を敵の武士や、人夫にばけさせ、そして米のかはりに物具を入れて、城に運ばせるのだ。それを味方の兵が奪ふ眞似をするのだ。すると敵は兵糧を奪はれては大變と城門を切り開いて切つて出るにちがひない、その時味方はわざとまけたふりをする。すると敵はよろこんで兵糧をとつたつもりで城内に凱歌を上げて引きあげる。味方の兵士と共に。さうなればもう城はこつちのものだ。私達には味方はないから、城を遠まきにしてゐる時はない。又兵士を失へば、かはりを得る見込みもない。だから兵をそこねず、時をうつさず敵の城をおとし入れる必要がある。私はそれから方々をおどして歩き、出來たら京都の方までおどかして歩く、そして千劒破の城が出來上つたら、その時千劒破の城に引あげるつもりだ。私の考へはわるくはないだらう。

正季。それはきつとうまくゆきます。私達は出來るだけその間に兵糧をあつめます。三年でも四年でも籠城出來るだけの兵糧をあつめます。

正成。米も大事だが、水も大事だ。またあの城をよぢのぼるにはかけ橋より他に道はない。その時、それをやきおとすために油が必要だ。十分たくはへるやうに注意をしてくれ。

正季。承知しました。

正成。あの城なら何百萬の兵が來たつて同じことだ。私は出來るだけ多くの兵を呼びよせて見せる。すれば他の方がそれだけお留守になるわけだ。それに兵糧だつて大したつひえだ。さう長くは戰をつゞけることは出來まい。私達は寢乍ら果報を待てばいゝことになる。

正季。本當にお兄さん、今度こそ私達が千劒破を出る時は陛下を京都にお迎へ出來、天下が平和をたのしむことが出來る時ですね。

正成。さうだ。今度こそ天下は本當に平和になるだらう。そして人々は泰平をよろこぶことが出來るだらう。そして租税はやすくなり、民はやすらかにくらせるやうになるだらう。陛下は私にそれを誓はれた。今笠置にゐられる氣持で天下を御をさめになつて下さいと申し上げたら、仁徳天皇を手本にして、民のためにつくされると仰せられた。私はその時の陛下の眞心を信じないわけにはゆかない。

正季。その時のことを思ふと力がわきます。藤房卿もさぞおよろこびになるでせう。

正成。あの人はもう人民のこと許り考へてゐる。あの人が居てくれるので私はどの位氣丈夫か知れない。あの人と話をしてゐると私の決心が强くなり、私の心が淸まつてくる。

正季。本當に珍らしいいゝ方ですね。

正成。私は陛下のお前を下つた時、あの人に大

下を陛下の手におかへしして見せることを約束した。そしたらあの方はその時は、租税をやすくし民を富まして見せることを約束された。二人は希望に燃えた。その時、あの人は泣いた。私も一緒に泣いてしまつた。私はあの時のことをおもへると生命は惜しくなくなる。約束だけはどうしても果さなければならないと思ふ。

正季。それでは兵をおあげになるのはあと一月程、間がありますね。

正成。さうだ。あと一月程、間がある。

正季。之から和田の處に出かけてその話をしてよろこばしてやりませう。

正成。何處かに正行が居たら、歸るやうにさう云つてくれ。

正季。はい。（退場）

妻。あなたは一月たつと又お出かけになるのね。そして私は又正行と二人切りで淋しい日をおくらなければなりませんのね。

正成。それより仕方がないぢやないか。

正行、登場

正行。お父さん、唯今。

妻。何處へ行つてゐた。

正行。和田の叔父さんの處へ行つて來たの。和田の叔父さんが馬になつて坊がのつて遊んでゐたの。

正成。さうか。それはよかつた。

正行。お母さん、腹がへつた。何かたべるものはない。

妻。すぐ御飯にするから待つておくれ。

正行。お父さん。いつ戰爭にゆくの。今度は坊もつれていつて頂戴ね。お父さんはいつでも戰をすると勝つのですつてね。坊もお父さんのやうになりたいな。

正成。お前が大きくなる時分にはもう戰なんかしなくつていゝのだよ。

正行。どうして。

正成。だつて、その時は、天下は皆、天皇陛下のものになつて、四海はをさまり、皆おとなしくしてゐればいゝのだよ。

正行。いやだ！　そんなこと。

正成。だが、さうなれば、お前も私といつでも一緒に花を見たり、馬にのつたり、山へのぼつたりすることが出來るのだよ。そして一緒に兎がりしたり、川へ釣りに行つたり出來るのだよ。

正行。うれしいな。坊は釣をしたり、トンボとりをするのは大好きなのだ。お父さん、今度、坊に綺麗な鳥をとつて頂戴ね。

正成。とつてやるとも、戰爭がすんだらな。

正行。早く戰爭がすむといゝな。

正成。今度戰爭がすんだら、お前に立派なお馬を買つて上げるよ。

正行。本當？　お父さん。嬉しいな、嬉しいな。お母さん、お父さんが坊に戰爭がすんだら馬を買つて下さるつて。嬉しいな、嬉しいな。さうしたら馬にのつて、お父さんと一緒に山のぼりに行きませうね。

正成。あゝ、行かう。

正行。うれしいな。うれしいな。

妻。そんなにさわぐもんぢやありませんよ。

正成。まあ、さわがしておいてやれ。よろこべる間はうんとよろこばしておいてやれ。

正行。お父さん。お馬になつてくれない。

正成。なつてやらうとも。

（正行、正成の上に馬のりになり）

正行。はい、はい。どう。どう。

妻。お父さんをそんなに馬なんかにしてはいけませんよ。

正成。よろこばしておいてやれ。油斷をしてゐるとはねるよ。

正行。お父さん。はねたつて大丈夫。はい。は

い。どう。どう。はい／＼。どう／＼。

（妻、涙ぐみ乍らうれしさうに見てゐる）

第二場

（赤坂城の一部）

兵士一。敵がせめて來るぞ。

兵士二。恐れることはない。あれつぽつちの敵に何が出來る。

兵士一。だが相手は楠正成だ。どんなことを仕出かすかわからない。

兵士三。いくら楠だつて翔があるわけぢやない。この城壁をさうたやすくはとびこすわけにはゆかない。その内には六波羅から、援兵がくるにきまつてゐる。心配なことはない。

兵士二。だが今日は兵糧のとゞく日だ。うつかりして兵糧をとられたら大へんだ。

兵士一。さう云へばさうだ。厄介な時に敵が攻めて來たものだな。見つからなければいゝが。

兵士三。心配なことはないさ。兵糧をとられたつて、援兵はすぐ來るからな。

兵士二。相手が楠でなければ怖くはないが、あいつにあつてはどんな謀をつかふかわからないから困る。

兵士三。お前はどうしてそんなに楠がこはいのだ。楠だつて三本手は持つてはゐまい、目玉だつて二つだらう。足は四本かも知れないが。あつはつは。

（湯淺、侍を三四人つれて登場）

湯淺。矢張り、菊水の旗だ。楠にちがひない。しかしいくら楠だつて恐るゝには足りない。楠だつて鬼神ではない。私は楠の軍勢を一つやぶつて私の力を示してやる。だが敵がせめて來てもあまり遠くまで追ひかけてはいけない。敵にとつて不足のない敵だ。それだけ用心しなければならない。それにしても兵糧のつくのがおくれてゐるのが氣になる。

侍一。敵が方向をかへました。何か見つけたのにちがひありません。

侍二。さあ大へんだ。敵が兵糧を運んでくるのを見つけたのです。そら、あすこから、兵糧を運んで來ます。

湯淺。さうだ。とう／＼見つかつた。だが、つきそつてゐる兵士達も氣がついたらしい。逃げようとはしないで、健氣にも戰はうとしてゐる。

侍一。戰爭が始まりました。私達も助けに行きませう。

湯淺。さうだ、早く三百人程つれて助けにゆけ。城は私が番してゐてやる。

侍一。お願ひします。それでは早速、助けにゆきます。

湯淺。早く行つてやれ。

侍一。はつ。

（侍一退場）

湯淺。どうだ、味方の兵士は中々強いだらう。さすがにより拔きの兵だけある。楠の兵も攻めあぐんでゐる。

侍二。本當に窮鼠猫を咬むと云ひますが、決心した兵士程強いものはありません。

湯淺。（沈默。暫らく見てゐて）味方の勝利だぞ。うまくいつた。敵は逃げ出した。援兵も勇ましく走り出したぞ。敵は兩方からはさまれると大へんだと思つて逃げ出したぞ。楠と云ふ奴も聞きしに劣る臆病ものだ。さあ一つ迎へに行つてやらう。

（湯淺、侍たちと退場）

兵士一。どうだ、あれでも楠は偉いのかね。

兵士二　風評と云ふものはあてにならないものだな。

兵士三。それ見ろ。楠だつてたゞの人間だ。目が二つ鼻が一つさ。あは、はつは。

兵士一。楠軍がせめて來たぞ。味方はあわて出した。だが大丈夫、兵糧はもう其處まで來た。楠はさぞくやしいだらう。
兵士一。あまり評判がいゝので少し高慢になつたのだらう。
兵士三。それにしてもあんまり利口ぢやないな。
兵士一。とう／＼まにあはなかつた。ざまあ見ろ。
（人夫たち、俵をどん／＼かつぎこんでくる。湯淺たち登場）
人夫頭。こゝでようございますか。
湯淺。御苦勞、御苦勞。十分休んでくれ。
人夫頭。へい。へい。ありがたう御座いました。本當にどうなるかと思ひました。
人夫一。本當におどろいたな。あゝ暑い。
人夫二。生命がないかと思つたよ。
湯淺。さぞびつくりしたらう。
人夫頭。本當にびつくりいたしました。さあ皆、こゝへつんだ／＼。
（皆、俵を持つて來ておいて汗をふく）
湯淺。御苦勞、御苦勞。敵はあきらめて引き上げたな。あぶなかつた。一寸の所だつた。
人夫頭。おかげで生命びろひいたしました。
湯淺。まあゆつくり休んだらいゝだらう。
人夫頭。ありがたう御座います。
湯淺。本當によかつた。幸先がいゝ。さあ向うへ行つて休むとしよう。
（湯淺たち退場）
兵士一。隨分びつくりしたらう。
人夫頭。びつくりしました。
人夫一。うまくいつたな。
人夫二。うまくいつた。
人夫三。思ふ通りになりましたね。
人夫頭。しつ。
人夫四。やつつけませうか。
人夫頭。まだ早い。
兵士三。本當にうまくいつたな。
人夫頭。ありがたう御座います。
兵士一。あぶなかつたね。
人夫頭。えゝ、もう少しでやられる所でした。運のいゝ時は運のいゝもので、おあつらへ向きにゆきました。
（人夫たち笑ふ。兵士も笑ふ。侍登場）
侍。もう大丈夫で御座います。
人夫頭。よろしい。早くつかまへろ。殺すのだけは許してやれ。
（皆、兵士一、二、三、にかゝる）
兵士一。何するんだ。
兵士二。何するんだ。
人夫頭。聲を出すと首をはねるぞ。
（兵士たちゆはへられる）
侍。うまくゆきましたね。
人夫頭。うまくいつた。皆、自分のかゝりの俵をほどいて、用意をしろ。
人夫達。はい。
（皆、俵をあけてあわてて武裝する。人夫頭、楠正成になる。皆小旗を城壁にのつてふる）
正成。門をあけろ。
（湯淺たちとんで來る）
湯淺。どうしたのだ。
（湯淺たちは拔劍した兵士たちにかこまれる）
正成。（挨拶しながら）湯淺氏、初めてお目にかかります。私は楠正成と云ふものです。長い間、城を守してゐて下さつてありがたう。その功によつて、皆さんをお許しします。何處でもおすきなところがありましたら、おいで下さい。
湯淺。あゝ、あなたが楠殿でしたか。さつきは失禮しました。どうぞ思ふ存分に私を處置

して下さい。

正成。いや、私はあなたを憎みません。あなたと私とは假りに敵味方にわかれてゐますが、私達は手向はないものを殺しはしません。何處へでも勝手においで下さい。

湯淺。（正成の前に平伏し）今日から私達をあなたの臣下にして下さい。私はまだあなたのやうな人にあつたことはありません。

正成。ありがたう。それでは今後お互ひに助けあひませう。あなたの家來の人達の意見を聞いて下さい。手向ふものは殺します。行きたいところのある人は行かします。私の家來になりたいものはよろこんで家來にします。

湯淺。お前達はどうだ。

侍達。（正成の前に跪き）どうか家來にお加へ下さい。

正成。ありがたう。あの人達の繩をほどいておあげ。私達は一寸前までは敵だつたが、今後は仲のいゝ味方だ。こんな嬉しいことはない。それではあつちへ行つて休むといたしませう。

湯淺。はい。

（皆退場。兵士一、二、三、一番おくれる）

兵士二。どうだ。楠正成は矢張り偉いだらう。

兵士一。本當に感心し切つた。

兵士三。目は二つ、鼻は一つだが、俺達よりは賢いやうだ。

兵士二。あたりまへよ。今日から楠の家來だ。天下に敵なしだ。ありがたいぞ。ありがたいぞ。

兵士一と三。うれしいぞ。うれしいぞ。

第三場

（天王寺内、正成一人燈の下で何かかいてゐる。和田孫三郎、湯淺登場）

和田孫三郎。殿樣、敵がまた攻めて來たさうで御座います。

正成。さうか。

和田孫三郎。宇都宮が大將で六七百騎ださうです。今夜は柱松に陣をとつてゐるさうです。小人數ですから、今夜逆襲して追ひ散らしたらどうかと思ひます。先日隅田高橋の五千の軍勢を一やぶりにやぶりました勢ひでは、今度は子供を相手にするやうなものと思ひます。

正成。さうではない。この前は敵が大軍なのにほこりを持つてゐた。それでついせめこんではならない處にせめこんで來た。だから陣形がくづれて立てなほすひまがなかつた。今度は小人數で來た所を見ると敵は非常な決心をしてゐるにちがひない。戰つてこの一戰にかつのはわけはないであらうが兵を多くそこねては味方にはつゞく兵士がない。敵にはいくらでもあとがある。入れかはり、たちかはり出て來られては、味方はつひにはつかれて最後の勝利を得ることはむづかしいであらう。私達は兵を大事にしなければならない。そして小敵に勝つた所が名譽にもならない。今度は一度勝を先方にゆづつて、こゝを戰はずにひきあげよう。宇都宮は坂東一の弓矢とりで、それに從ふものは皆、生命知らずの連中だ。だからこの際私は一度退いて、そして相手が氣づかれし、臆病風がふき、生命が惜しくなるのを待つて戰はう。私には二三日の内にはこゝを一人の兵士の生命をそこねずに、とりもどすことが出來ると思はれる。まあ萬事を私に任せて、安心してほしい。私達はこゝでは敵の注意をあつめるだけが仕事だ。千劍破の城が出來るまで、私達の實力を敵に買ひかぶらすことが必要だ。すると敵は私達を恐れて、大軍をさしむけるだらう。そしてそのために鎌倉や、六波羅の守りが薄

くなり、敵の數がます／＼多くなつて、遂に内からくづれるやうになるだらう。それには無理な戰ひをして、勝つてもこつちの兵士の生命を多く失つてはならない。大敵を恐れず、小敵をあなどらずと云ふのはこのことだ。敵は心を一つにし、生きて歸るつもりのものはない、たゞ一人でも多くを殺し、差しちがへて死ぬつもりで來てゐるにちがひない。そんな奴にぶつかるには味方の生命は大事すぎる。さあ、之から一つ逃げ出すことにしよう。そして相手をよろこばして、生きることのたのしさを知らせてやらう。そしていつ私達が攻めこむかわからないので、たえず不安をうけるだらう。大軍でないから、用心しすぎる。人間の神經や、力には限りがある。其處をおどかして戰はずにひきあげさしてやらう。明日の晩から、山々の峯には松明がとぼるだらう。さて／＼美しいことで御座らう。萬事は私にまかしてくれるだらう。

和田孫三郎。おまかせいたします。

湯淺。おまかせいたします。

正成。それなら之から逃げるとしよう。宇都宮はさぞよろこぶだらう。うんとよろこばすがいゝ、すると力がなくなり、生命が惜しくなるから、それではすぐ逃げるとしよう。

二人。はい。

第四場

（天王寺の庭。夕火をたいて宇都宮其他四五人あつまつてゐる）

宇都宮。楠の奴はちつとも出て來ないな。まるで幽靈のやうな奴だ。毎晩山々にあかりをつけて、今にもせめよせさうな姿を見せて、さて來たかと思ふと、松の音と、波の音ばかりだ。

侍一。殿樣の武勇のほまれにおどろいたので御座いませう。

宇都宮。俺はこの矢で楠を射殺してやるつもりだつた。

侍二。京都では楠に勝つことの出來たのは殿樣許りだと云つて、大層な評判ださうで御座いますね。

宇都宮。そんな話だ。

侍三。凱旋なさつたら京の女たちはさぞさわぐでございませう。

宇都宮。それにしても一戰して、この矢であいつを殺してやりたいものだ。あいつを殺しさへすれば天下に恐るゝものはない。何しろ赤坂の城では三十萬の軍勢を玩具にして見せたといふ奴だから、敵にとつて不足はない。早くせめて來てくれればいゝのに。篝火だけでは相手にしやうがない。今日も亦今に篝火をたくだらう。

侍一。本當に氣味の惡い、幽靈のやうな敵ですね。

侍四。あ、火が又つき出しました。

宇都宮。一つ、二つ、三つ。おゝついた、ついた。おゝ美しいことだ。

侍四。段々近くになりました。

宇都宮。おどろいてはいけない。敵の策略なのだから、火の數は毎晩々々ふえてゆくがたゞおどかしにすぎないのだ。幽靈にすぎないのだ。

侍一。それにしても今日の火は又格別です。敵は何萬ゐるかわからない程です。

宇都宮。さすがに楠だ。中々味なことをやる。臆病者のすることはちがつたものぢや。

侍四。海にも、山にも、野にも、林にも、楠に心をよせるもので一ぱいと見えます。

宇都宮。臆病者奴。聲をふるはすな。

侍四。正體のわかつた敵なら恐れはしません。

宇都宮。油斷をするな。火は近づいて來たぞ。

皆は十分に用意してゐるだらうな。
侍一。え丶、十分に用意してをります。
宇都宮。楠といふ奴はあてにならない奴だからな。居ると見せて居ず、居ずと見せて居る奴だからな。來るやうな顏して來ないかと思ふと、其處にのこつと來る奴だから、油斷をしては駄目だぞ。
侍一。大丈夫です。

（紀と淸原登場）

紀。どうです、今日は又特別に火がもえますね。隨分近づいたやうですね。
宇都宮。それがあてになればい丶のだが、楠のことだから自分は呑氣に何處かで休んでゐるのかも知れない。また何處か他を荒してゐるかも知れない。さうかと云つて安心してゐるといつくるかも知れない。こんな幽靈のやうな敵を相手にしたのは初めてで、さすがの私もどうしてい丶かわからなくなつた。
淸原。本當に皆、困つてゐます。疲れ切つてゐます。犬の遠吠、松風の音、波の音でも一々敵が來たのかと思はれて、神經が休まりません。死ぬるのは皆平氣だが、之には閉口だと申してをります。皆、つかれて來まして、戰ふ勇氣もなくなつて來ました。いくら勇氣つけても、死んでもい丶と云つて居眠りしたり、都に歸りたいなぞと云ふ奴まで出て來ました。敵はきつと呑氣に休むだけ休んでゐるのですから、このま丶では味方がやられるのは火を見るよりたしかと思ひます。もう見切り時で、之からそつと凱旋されたらどうかと思ひます。さうすれば、敵を追ひはらつたから歸つて來たと云へば、それで面目は十分たつと思ひます。
紀。もうこのま丶ではとても皆、辛抱が出來ないと思ひます。
宇都宮。どうだ、皆、幽靈と戰ふか。それとも歸るか。
皆。お歸りになる方がい丶と思ひます。
宇都宮。それでは歸るとしよう。
淸原。皆もさぞよろこぶと思ひます。
宇都宮。楠と云ふ奴は本當に風のやうな奴でつかむことが出來ない奴だ。
淸原。それでは皆に知らせて來ます。

（二人退場）

宇都宮。それでは都に歸ることにしよう。
侍達。はい。

（奥で歡呼の聲聞える）

宇都宮。皆、よろこんでゐるわい。それではいさいで引あげよう。

（皆退場。暫らくして百姓四五人登場）

百姓一。とう／＼引あげたな。逃げるのも早いな。
百姓二。楠樣はなんと偉い方だらうな。
百姓三。私達の家をおやきになるやうなことはなさらないし、お逢ひしても丁寧ない丶方だね。
百姓四。本當にい丶方だ。逃げたことを早速お知らせしよう。
百姓一。なにもう御存知だ。うちの息子がすぐ馬を走らせただからな。
百姓二。それぢやもうぢきいらつしやるな。
百姓一。あ丶もういらつしやる。本當にあの方はおとなしい、い丶方だよ、おらのはなれをお貸ししただが、百姓の眞似もお上手だつたよ。そして今日明日には又こ丶へ歸るのだと云つていらしつたよ。
百姓四。うはさをしてゐれば影がさすと云ふがもういらつしやつたよ。

（正成、湯淺、和田孫三郎、その外五六人つれて登場）

正成。とう／＼又歸つて來ましたね。（百姓を見て）隨分御世話だつた。おかげで勝つことが

出來ました、ありがたう。

百姓達。お目出たう御座います。

正成。ありがたう。

湯淺。火が綺麗ですね。まるで畫のやうです。

和田孫三郎。本當にこんな美しい景色を見たことはありません。

正成。今、あの山の上で火が盛んに燃えてゐるでせう。今にこつちから合圖をすると、あれが消えます、すると方々の火が一度に消えます。見ていらつしやい。（侍達に）お前達の持つてゐる松明で、あの峯に向つて、頭の上に三つ輪をかけ。

侍達。はい。（松明で頭上に三つ輪をかく）

（山の火消える。他の火も消える）

正成。さあ家に入りませう。

（侍急いで登場。正成に書面を渡す。正成見る）

正成。やつと千劍破の城も出來たさうです。（百姓たちに）皆さんどうもありがたう。いつまでもおたつしやでゐて下さい。

百姓達。御機嫌よう、御身體をお大事に

正成。ありがたう。

（正成たち退場、百姓たち見送る）

——幕——

第三幕

第一場

千劍破城內

（正季、和田正遠、正成を案內して登場）

正成。（方々調べ乍ら）よく出來た。之なら三年はおろか、四年でも、五年でも、日本國中を相手にして戰ふことも出來る。

正季。お兄さんはおくたびれになつたでせう。

正成。大丈夫。昨日はぐつすりねたので今日はもうすつかり元氣になつた。

正季。お兄さんが方々あれ廻つていらしつたので、味方も方々から頭をもたげたやうですね。

正成。大塔の宮を初め、赤松入道、平野入道達が兵をあげた。しかし之等もたよりにするわけにはゆかない。敵はあまりに大勢だ。しかしこの城だけはおとすことは出來まい。私が考へに考へたこの城をおとすことが出來るやうな人があつたら、私はよろこんでその人の家來になるだらう。だがそんな人が人間の內にあるとは思へない。私は人間の力を知つてゐる。人間には出來ることと出來ないことのあるのを知つてゐる。この城なら兵糧と水がつゞく限り、そして內應者が出ない限り、落ち入ることはないだらう。そして兵糧は十分にあり、水はまたありあまる。そして內應者は出るとは考へられない。この城から出る時は、陛下を京都にお迎へする時であらう。

正季。聖德太子樣のおかきになつた未來記には、陛下が來年には京都におかへりになり、そして今度こそ本當に天下を親ら御治めになるとかいてあつたさうですね。

正成。かいてあつた。

正季。皆、それを信じ切つてよろこんでをります。

正成。可愛い奴だ。今にあすこあたり、人間が一ぱいになるだらう。敵はたゞ私達許りを恐れ、味方はたゞ私達許りをたよりにしてゐる。赤坂城にこもつた時とはちがつて今度は更に大軍でせめよせるだらう。だがこの城はおとすことは出來まい。

正季。この前のやうに人が一ぱいになり、旗がなびき、甲冑や武器がかゞやき、馬が嘶く樣は見物で御座いませう。

正成。かう云ふ景色が見られるのも半年ぶりだな。あの木かげ、山かげ、谷あひに、いろいろの陣幕がはられ、旗がなびき、人が往來するのはさぞ美しいだらう。こゝから見下ろすと、人間は蟲けらのやうに見えるだらう。だが恐ろしい敵とは見えず、可愛い蟲のやうに見える。

正季。この谷々は今に人間の死骸にうづめられ、血は流れて川をなすでせう。

正成。兵隊は可哀さうだがやむを得ない。この土地はさぞ肥えるだらう。さあ殘つた處を見せてもらふか。

正季。どうかお調べ下さい。

（三人退場）

第二場

（前と同じ場所、兵士二人見張りしてゐる）

兵士一。寒いね。

兵士二。寒い。

兵士一。いやな風がふく。

兵士二。本當に冬になつた。

兵士一。いつまでこんな日がつゞくのだらう。もうあき／＼してしまつた。

兵士二。本當だ。毎日々々同じ日がつゞく。

兵士一。戰にはいつも勝つが敵は益々ふえる許りだ。

兵士二。そして味方は少しづつへつてゆく、昨日まで元氣にしてゐた人間が一人々々死んでゆくのはいやなものだ。

兵士一。俺達の仲間も段々へつたね。

兵士二。敵の何百分の一切り死なないが、しかし赤坂城にたてこもつてからのこの二年の間には仲間も三四十人は死んでゐる。

兵士一。もつと死んでゐるだらう。山田も死んだ。江崎も死んだ。木田、高崎、大井、大村。

兵士二。もう數へるのはよしてくれ、隨分死んだな。

兵士一。生きてゐるのが不思議な位だ。

兵士二。本當に江崎はいゝ奴だつたな。

兵士一。山田も、木田もいゝ男だつた。

兵士二。大井が生きてゐたらこんなに退屈しないですんだらう。あいつは話がうまかつたからな。

兵士一。死んだ奴の夢を見る程いやなことはないね。昨日、山田にあつた夢を見たが、もうぢき君もくるね、なぞと云ひやがつた。ぞつとしてしまつた。

兵士二。本當に死んだ奴の夢を見ると氣持のわるいものだ。だが江崎の夢見たら泣いてしまつた。

兵士一。お前は江崎とは仲がよかつたからな。

兵士二。あんないゝ奴はない。

兵士一。本當にいつになつたら故郷に歸れるのかな。

兵士二。歸る前には死んでしまふだらう。

兵士一。そんな緣起のわるいことは云はないでくれ。俺は百までは生きるつもりなのだからな

兵士二。あはゝゝ。慾の深い奴だな。

兵士一。そんならお前はすぐ死んでもいゝのかい。

兵士二。俺も死にたかないよ。

兵士一。同じこつちやないか。おゝ寒い。

兵士二。之は今に雪が降つてくるかも知れない。

兵士一。雪模樣だ。へんに寒いな。

兵士二。大將の云ふやうに、味方が出てくれるだらうかね。なんだか俺には益々敵がふえる許りに見えるがね。

兵士一。それでも大將は、來年になると天皇陛下がおかへりになると云ふ豫言の本を御らん

になつたさうぢやないか。

兵士二。だが大將のことだから、もしかしたら、つくり話かも知れないぜ。どうも俺はあの場にゐたが、あとで考へると、あやしいと思ふのだ。坊主とぐるになつて、あんな本をつくつたのぢやないかと思ふよ。大將は中々喰へないからな。

兵士一。さう云へば人を瞞すことはうまさうだな。

兵士二。俺達は今に處々から味方が出て、北條をぶつたふしてしまふと思つてたのしみにしてゐるが、俺は中々北條は倒れないと思ふのだ。何しろ今迄、いろ／＼偉い方が出て、何萬と云ふ軍隊で戰つても一度も勝てたことはないのだからね。赤坂城だつておちてしまつた。吉野もおちてしまつた。もうこの城より他に味方は一人だつてゐないのだ。大將一人力んだつて何にもならないと思ふよ。

兵士一。だが俺は大將だつて、馬鹿ぢやないから負けるときまつた戰ひはしはしまい。何か勝つ見込があるのだらう。

兵士二。それが味方が方々から出てくれて、敵の本陣があぶなくなるのを待つと云ふのだが、それがいつのことかあてにはならない。俺達は千人足らずで、何百萬と云ふ限りのない敵を相手に戰つてゐるのだから、こんな張合のない仕事はない。

兵士一。そんならどうすればいゝと云ふのだ。

兵士二　他にしやうがないから、こゝにゐるより仕方がないが、心細い話だ。

兵士一。赤坂をまもつてゐた連中は、降參したら一人のこらず殺されたさうだね。

兵士二。そんな話だ。何處から聞えて來たのか。降參したがるといけないと思つて大將が又つくつた話かも知れない。

兵士一。俺はそれを本當と思ふよ。敵の捕虜の話だからな。

兵士二。どつちにしても俺達はこゝにゐるより仕方がない。だが、心細い話だよ。

兵士一。お前と話してゐると段々心細くなる。俺は大將の云ふことを信じてゐるのだ。

兵士二。信じられる者は仕合せだ。大將は今にも方々から義兵がむらがり起つて、幕府をたふしたり、六波羅をたふしたりすると思つてゐる。だが幕府だつて、六波羅だつて馬鹿ばかり集つてはゐるまい。自分のことだから大將が考へるよりは考へてゐるだらう。

兵士一。だがこの大軍ぢや、幕府や、六波羅にはさう兵士が殘つてゐるとは思へないね。

兵士二。馬鹿だな、貴樣は。天下は廣いものだ。人間はいくらでもゐるよ。

兵士一。さうかな。人間てどの位ゐるものだらうね。

兵士二。いくらだつてゐるね。もう俺達の手だつて五六千の人は殺したらう。だが少しはへつたかと思つて見ると、へつた所でなくてふえてゐるのだからな。

兵士一。さう云やあ、本當にさうだ。今度は少しへつたらうと翌日たのしみにして起きて見ると、ふえてゐるのでがつかりする。

兵士二。それ見ろ。いくら殺したつておひつくものぢやない。そして味方は五六百も殺されて見ろ、もう手も足も出せやしない。千人殺されたらおつりが出る。

兵士一。まあ、そんなことを云つておどかすなよ。だが、いつになつたら、俺達は故郷へ歸れるのかな。

兵士二。あの世に行つたら歸れるだらうよ。だが本當にあき／＼したな。寒い風がふく。

兵士一。本當にいやな風がふく。寒い風がふく。

（正季、和田正遠登場）

正季。中々寒くなりました。

和田。本當に冬になりました。

正季。敵は益々ふえてきましたね。

和田。百萬にはあまるさうですから。

正季。敵の身になつたら、早くこゝをおとして故郷に歸りたいでせうね。

和田。隨分いろ／＼のことを敵もやつて見ましたね。

正季。だが兄の智慧はその上その上とゆくのですからね。

和田。本當に何處まで智慧がおありだかわかりませんね。

正季。さうです。孔明、張良も兄にはおよばないでせう。今度は敵がどんな方法でせめてくるか見物です。

和田。敵はもうすつかりこの城をせめおとすことは斷念したやうですね。水ぜめでしくじつたので、今度は兵糧ぜめでもするつもりでせう。

正季。あいつたちの食ふ米は大したものでせうね。

和田。日に少なくも百萬として六千石は食ふでせう。私達の千日分を一日で食ふわけですからね。

正季。大した費ですね。

和田。其處があなたのお兄さんのつけこみ所なのです。だから敵の兵がへること許り恐れていらつしやいます。

正季。さうです。兄は敵がふえる度によろこんでゐます。

和田。かうなつてはどつちの兵糧がながくつゞくかと云ふことで勝負がきまります。あいつ達を養はなければならない、百姓達は隨分氣の毒です。

正季。今の世に生れて、氣の毒でない人間があるでせうか。いくら高時でも枕を高くしてねてゐるわけにはゆかないでせう。夢のなかに菊水の旗が忍び込まないともきまらないでせう。

和田。それはさうです。百萬の人數でもおとすことの出來ない城が一つあると云ふことはどんなに彼等の誇りを傷つけることかわかりません。

正季。それに反して味方にとつてはこの城がおちないと云ふことは唯一の力になるでせう。

和田。それだけになほ彼等はこの城がおとしたいので、兵をどん／＼ふやすのでせう。しかしふやせばふやす程、自分達にとつて危險なことは知らないのです。

正季。其處が運のつきと云ふものですね。それにしても、北條の力もともかく大したものですね。之だけのものをこゝに派遣してまだ、鎌倉や、六波羅に多くの兵を養つてゐるのでせうから。

和田。それは日本全國をともかく押へつけてゐるのですから。しかし私達の同志は大きな川のやうなもので、全部を押へつけずに、一部許りを押へつけるのに夢中になつてゐて、手うすな處が出來ると、何處からか堤をやぶり出すにちがひありません。一つ堤が切れ出したら、もうしめたものです。

正季。堤はやぶれさうで中々やぶれませんね。

和田。中々、何事も思ふやうにはゆかないものです。

正季。本當にさうです。そして思はない時に道がひらけるものですね。

和田。ともかく私達は油斷は出來ませんが、たのしみです。希望がもてるのですから。

正季。本當にさうです。兄が死なない限り、私達は希望をもつことが出來ます。

和田。さうです。あなたのお兄さんがいらつしやる限り、私達は希望を失ふことは出來ません。

（正成登場）

正成。お前達はこゝにゐたのか。

正季。何か御用ですか。

正成。別に用ぢやないが、退屈したので、話をしようと思つてお前の處へ行つたら居なかつたので、何處へ行つたかと思つてゐた。

正季。お兄さん、敵は益々ふえますね。

正成　ありがたいことだ。

正季。敵も、もうすつかり怖がつて攻めて來ませんね。

正成。どうしたらおとすことが出來るか考へてゐるのだが、まだいゝ考へが出來ないのだらう。

正季。お兄さんが敵の方にいらしつたらどうなさいます。

正成。守る人によるが、まあ兵の數は五六千にへらすね。しかし後から敵がせめると困るから、五六萬はいつでも援兵に出られるやうにしておくな。十萬以上の兵をこゝにおくのは少し馬鹿にも念が入つてゐる方だらう。殺つぶしにすぎないからね。それだけの金があれば、まだ面白いことはいくらでも出來るだらう。これだけの人間を遊ばしておくのは少し勿體ないね。

（兵士三、藁人形に甲冑をつけたものをもつて出てくる）

兵士三。之でよう御座いますか。

正成。結構々々。

正季。之はなにになさるのです。

正成。之はあそびだよ。あまり敵がせめて來ないので退屈だから一寸いたづらしてやらうと思ふのだ。

兵士三。この通りのを二三十つくればいゝのですね。

正成。さうだ。

兵士三。皆に話しましたら、皆大よろこびでうまくゆけば面白いがと云つてをります。

正成。うまくゆくかどうかわからない所が又面白いのだ。

正季。それをどうなさらうと云ふのですか。

正成。さつき一寸思ひついたのだが、この頃皆、退屈してゐるやうだから、眠けざましをしてやらうと思つたのだ。之を明日くらい内に二三十門の前にならべておいて、皆が一度に、矢叫びしてそして少し位矢を射つて引きあげるのだ。すると敵は味方が死にもの狂ひでとう／＼とび出したと思つてあわてゝ向つてくるだらうと思ふのだ。するとこつちは門の中に入つてしまふのだ。するとうすぐらい内に、ねぼけ眼と來てゐるからこの藁人形を人間とまちがへて、死に物狂ひに向つてくると思ふのだ。其處で氣の毒だが、上から石をおとして、つぶしてやらうと思ふのだ。どうだ、うまくゆきさうだらう。

正季。それはきつとうまくゆきます。

正成。時々は敵の肝膽をひしいでやらないと、敵の兵隊が逃げ出すと困るからね。赤坂城の時は敵に油斷をさすことが必要だつたが、今度は敵を恐れさすことが必要なのだ。

正季。それでは皆と一緒に私達も手傳つて藁人形をつくりませう。

正成。それも面白いだらう。

（兵士一、二の外退場）

兵士二。さうまくゆくかな。

兵士一。うまくゆくだらうよ。

第三場

（敵の陣屋。大將たち集つてゐる）

長崎。又やられたのか。誰の許しでやつたのだ。

工藤。誰の許しと云ふこともなかつたのださうです。朝まだきに敵がせめよせるやうな氣配

がしたので、皆、敵がいよ／＼兵糧がつきて討つて出たのだと思つたさうです。それで皆、あわてて向つていつたのださうですが、朝早くつてまだあたりがくらかつたさうで、藁人形を人間とまちがへて進んで行つて、上から岩石を投げられてやられたのださうです。

長崎。馬鹿な奴だ。もの笑はれだ。

工藤。皆も、あんまり長くなるので、鎌倉の思召も氣にしてゐたので、ついよろこんでしくじつたのださうですから、どうか大目に見てやつて下さい。

長崎。今となつてはやむを得ないが、相手が楠だから用心に用心しろと云つてあつたのに聞かないからそんな目にあふのだ。

工藤。皆、後悔してをります。しかしあの場合無理はないと思ふのです。それにしても楠と云ふ奴は喰へない奴です。

長崎。あいつの喰へないのは今始まつたことぢやない。味方はいつも攻めてゆけば必ずやられるのだ。

工藤。だからと申しまして、このまゝにして居りましたら、いつあの城がおちるかわかりません。鎌倉の方では、あまり城がおちないので御機嫌がよくないさうです。

長崎。しかしお前達にいゝ考へがあるか。名越の時だつて、お前が賛成して、あんな目にあつたのぢやないか、あいつは普通の人間ぢやないのだ。

工藤。しかしぐづ／＼してゐる内に段々敵の仲間が方々から頭をもちあげないとも限りません。

長崎。そんなことを私が知らないと思つてゐるのか。いゝ考へがあるなら云つて見るがいい。

工藤。さうおつしやられると私も困ります。（沈默）

長崎。誰かいゝ考へのある人はないか。（沈默）誰もなければ矢張り今までのまゝでやつてゆくより仕方がない。

（侍、登場）

侍。鎌倉からの飛脚がこの手紙をもつて參りました。

長崎。さうか。（文を押戴き、中をあけ、よむ）ゐさい承知いたしましたとつたへてくれ。

侍。はい。（退場）

長崎。又鎌倉から、あまり城をおとすのに日数がかゝりすぎるとの御言葉です。天下が段々、不穏になつて來たさうで、どうあつても、早く落城させるやうにとの御命令です。何かいいお考へがありましたら、どなたでもかまひませんから、御遠慮なくおつしやつて下さい。（間）このまゝにしてゐましては、鎌倉にたいして申しわけがありません。何か考へのある方はおつしやつて下さい。

（沈默）

長崎。それなら全軍にふれをして、いゝ考へがある人があつたら申し出すやうにさせませう。百萬人もゐるのですから、何處かに楠にまさつた男がかくれてゐてもよささうなものと思ひます。楠を退治することが出來る謀を考へたものはどんな人でも軍功第一として大名にとりたてるやうにします。又大名の方でしたら二倍の御加増をするやうに御骨折します。（沈默）どなたでもいゝお考へはありませんか。今、ありませんければ、二三日内にお考へ下さい。又皆さんの臣下の方でいゝ考へをもつてゐる人がございましたら御知らせ下さい。赤坂と吉野がまたゝく間におちましたのに、この城許りにつまづいて、この大軍でいかんともすることか出來ないのは、我等にとつてこの上ない恥と思ひます。よく／＼御考へ下さい。

工藤。畏まりました。

長崎。それでは今日の會議は之でやめます。
南部。一寸御待ち下さい。
長崎。何かいゝ御考へがあるのですか。
南部。私の家來に、一人中々の智慧者が御座いまして、いつもこの城を、自分の考へ通りにすればすぐおちるのだがと申してをります。今朝の戰ひでも、皆に、城のそばに近づくなと申してとめましたので私達の仲間のものは一人も生命をおとしたものは御座いませんでした。そのものを御召しになつて考へをおききになつたらどうかと思ひます。
長崎。それは是非聞きたいものです。あなたは何かそのお考へをお聞きになつたことはありませんか。
南部。なんでも非常に大きな梯をつくつて、それを敵の城壁にかけて、すきまをあたへず乘つてゆくのださうですが、くはしくは當人にお聞き下さい。
長崎。それでは後程、私の處によこして下さい。それを聞いた上で又御相談することにしませう。お話のことがうまくいつてこの城をおとすことが出來たら、大した恩賞があると思ひます。それでは今日の會議は之でやめるとしませう。之に私ごとですが、今晩私の處で又神歌をやりますから、お氣が向いた方はおいで下さい。
皆。ありがたう。

第四場

(正成、一隊の兵士をあつめ、皆水はじきをもつてゐる。火が盛に燃え、油桶がおいてある。)
正成。まだ時間がある。もう一度油はじきの稽古をしよう。
皆。はい。
正成。水をはじけ。
(皆、目標に向つてはじく)
正成。五番、もつと右へ、七番、もう少し左。九番、もう少し上。よし〳〵。やめ。(皆やめる。)油の時もそれと同じことをやればいゝのだ。
(見張りの兵士、城壁から聲をかける。)
兵士。敵はます〳〵せめて參ります。
正成。よろしい。まだ堀の處まで來ないだらうな。
兵士。もう二三町で堀につきます。非常に大きな梯でございます。間は二丈程もあるかと思ひます。長さはどの位あるかわかりません。何千と云ふ人間がそれを車にのせてもつて來ます。
正成。安心しろ。
兵士。はい。
正成。皆、どんなものを見ても恐れてはいけない。安心して、俺の云つた通りにしろ。さあ火をもつとたけ、油の用意をしろ。
(皆云はれた通りにする。正季見張りからおりて來る)
正季。お兄さん。敵は途方もないものをつくつて來ました。前代未聞の梯です。
正成。いや未聞のことはない。魯般の雲の梯と云ふものの眞似をしたのだらう。馬鹿な奴だ。だが今度こそ、敵もあわてだしたと見える。策がつきたのだらう。もうぐづ〳〵してはゐられなくなつたのだらう。面白い、やつと待つてゐる時が來たと見える。
(見張りの兵士登場)
兵士。敵はとう〳〵やつて來ました。
正成。面白い。それなら氣の毒だがやつつけてやるかな。
(火、益々盛んに燃える)
正成。さあ皆、今日こそ、皆に地獄の樣を見せてやる。あさはかな人間の智慧の恐ろしさを見せてやる。皆よく見ておけ。今度の戰ひが

すめば、もう器はしないでもすむだらう。そして皆に戦と云ふものがどんなに恐ろしいものか、よく見ておいて話してやれ。

兵士一。恐ろしい梯だな、化物のやうだな。

兵士二。何千と云ふ縄でひつぱつてどうしようと云ふのだ、途方もないものを考へたものだな。

兵士三。どうしようと云ふのだ。

兵士二。なんだかすごくなつて來た。

兵士四。之から何をはじめようと云ふのだ。

正成。おどろくな。あの梯をこの城壁にかけて、この城にせめよせようと云ふのだ。だが氣の毒だが、あの梯は焼かれて谷間におちるだらう。そして人々は二百尺にもあまる高さから谷底におちるだらう。私のするやうに薪のかゝりけ火のついた薪をもて、そして梯の上に薪をたげるのだ。そして、油がかりは正季の眞似をして油を薪の上にかけろ。

皆。あつ。あぶない。

正成。さあ、薪をなげろ、油をかけろ。油をそそげ。薪をなげろ。

皆。（恐怖を感じて）のぼつてくる、のぼつてくる。何千人と云ふ人間がのぼつてくる。のぼつてくる。どうしよう。どうしよう。

正成。あわてるな。おちつけ。大丈夫だ。油をかけろ。薪をなげろ、なげろ、油をかけろ。五番もつと右、八番もつと左、十番もう少し右。さうだ。その見當だ。

（皆少し氣がくるつてゐる）

皆。登つてくる。登つてくる。

正成。大丈夫、大丈夫だ、燃え上つたぞ。

皆。燃えあがつたぞ。燃えあがつたぞ。燃えあがつたぞ。

（くづれ落ちる強大の音）

皆。あゝ、おちた。おちた。勝つたぞ、勝つたぞ。あゝ助かつた。怖かつた。助かつた。助かつた。勝つた。勝つた。

正成。萬事はすぎてしまつた。敵はあつけにとられてゐる。

（皆をどり出す）

正成。石をなげろ。石をなげろ。あゝもう、許してやれ。あの死骸のありさま。

正季。うまくゆきましたね。

正成。うまくいつた。

和田。お目出たう御座います。

湯淺。（出てくる）お目出たう御座います。

正成。お目出たう。萬事はすぎてしまつた。

湯淺。どうなるかと思ひました。

正季。敵はひきあげます、ひきあげます。

正成。私の仕事はやつとをはつたやうなものだ。

（侍、登場）

侍。から云ふ矢文が參りました。

正成。（開いて見て喜ぶ）皆よく聞け、之は大塔の宮の命をうけて忍びのものからよこした矢文だ。陛下は隠岐の島からのがれられた。そして新田義貞が鎌倉を攻めるために兵をあげたさうだ。そして大塔の宮からそれも私達のおかげだとの感謝のおことづけがあつたさうだ。

正季。お兄さん。（泣き乍らだきつく）とうとう待つてゐた時が來ましたね。

正成。來たやうだ。私も泣きたくなつた。

（皆泣く）

正成。（跪き）神様ありがたうございました。

——幕——

第四幕

第一場

（都大路、還幸の見物人ぞろぞろ歸つて

くる。いろ／＼の人が通る。默つてゐるもの、笑つてゐるもの、何か考へてゐるもの、お互に饒舌つてゐるもの、皆どんどん通りすぎる）

（男一、二、登場）

男一。隨分立派でしたね。

男二。皆、得意さうでしたね。

男一。陛下はさぞおよろこびでせう。

男二。私は楠さんを見た時涙が出ました。

男一。あの人は泣いてゐたやうですね。（去る）

（男三、四、五、登場）

男三。人間の運と云ふものはわからないものだね。

男四。榮枯盛衰は常ならずと云つたのは本當だ。

男五。昨日まで敵だつたものが、今日はもうすつかり忠臣になりすまして居る。（去る）

（女一、二、登場）

女一。本當にさぞおうれしいでせうね。

女二。立派にお勝ちになつて、お歸りになつたのですから。

女一。あの一番威張つてゐるのは足利さんね。
なぜ楠さまが一番いゝ役におつきにならないのでせう。

女二。それはお生れがちがふから仕方がない。

女一。私は楠さまが一番、偉いと思ひますわ。

女二。あんな忠義な方は他にありはしない。（去る）

（男六、七、登場）

男六。今度の戰爭で隨分人が死んだと思ふが矢張り、人間といふものは澤山ゐるものだね。

男七。それはいくらでもゐるよ。

男六。今度は本當に王政復古になるわけだね。どうかはるかね。

男七。どうかはつたつてこつちたちにはあまり影響はないだらう。矢張り大名が幅をきかせるのにかはりはないだらう。（去る）

（男八、九、登場）

男八。俺は高氏の得意さうな顏を見たが胸がわるくなつた。

男九。あの兄弟の人相はよくないね。其處にゆくとさすがに楠はいゝ顏してゐる。あの男は誠實な男にちがひない。嬉し涙をためてうつむいてゐた。他の奴はたゞ得意になつてゐる。

男八。楠の通つた時は、皆、さすがに興奮してたね。女なんか大さわぎしてゐた。（去る）

（女三、四、登場）

女三。本當に隨分御苦勞をなさつたのね。

女四。本當に、陛下と、楠さんだけは本當に御苦しみになつたのですわ。

女三。さぞおうれしいでせうね。（去る）

（男十、十一、登場）

男十。本當にから始終政變があつては、皆も困りますね。今度はもう之で戰爭も終りにしたいものですね。物騷でたまりませんからね。

男十一。今度は大丈夫でせう。楠さんがゐますからね。

男十。ですが矢張り、野心家が澤山ゐますから何を始めるかわかりませんよ。

男十一。本當に野心家には困つたものです。（去る）

（女五、六、登場）

女五。私、楠さんてもつと立派な方かと思つてゐたわ。足利さんの方がずつと立派ね。

女六。それは馬だつて、いゝなりだつて比較にはなりませんわ。

女五。私は楠さんと云ふのはもつと身體の大きい、立派な方かと思つてゐたのよ。

女六。泣いていらしつたやうよ、女見たいな

方ね。

女五。私あんな顔大嫌ひ。（去る）

（男十二、十三、登場）

男十二。評判できくと楠さんは他の人とはかはつた方のやうな氣がするが、見れば矢張り何處もかはつたことはありませんね。あれでそんなに利口なのですかね。一寸想像がつきませんね。私は宇都宮さんを楠さんかと思ひました。

男十三。さうですか。私は矢張り、あの方だけはちがつてゐると思ひました。他の方は皆、呑氣によろこんでいらつしやいましたが、あの方だけは何か考へていらつしやるやうでした。

男十二。之で世の中も少しは靜かになるのでせう。

男十三。さうしたいものですね。殺許り高くなつてはやり切れません。（去る）

（女七、八、九、登場）

女七。お姉さんは楠さんを見た時、泣いていらつしたわね。

女八。お前だつて泣いてゐたぢやないか。

女七。だつて泣かないわけにはゆきませんわ、あんないゝ方つてありはしませんもの。

女九。お姉さん。私も泣いたわ。

女八。お前も泣いたね。いゝ子だね。（去る）

（男十四、十五、登場）

男十四。あの行列の内で一番、よろこんでゐたのは矢張り楠さんだと思ふね。あの人は今日の日をどんなに待つてゐたらう。そしてその日がちやんと來たのだからね。夢でなく、本當に。

男十五。それはさうだ。そして楠さんの兵卒け他の兵卒よりずつと規律が正しく、立派だつた。身なりこそ、他のにおとつてゐたらうが、皆いかにも永い間苦戰、苦闘したことが一兵卒の顏にもあらはれてゐた。（去る）

（女十、男十六、登場）

女十。本當に齡をとると、いろ〳〵の事を見るものですね。

男十六。さうだね。たつた昨日あんなに威張つてゐた人達が何處かへ逃げていつてしまふかと思ふと、昨日まで逆賊のやうに云はれてゐた人が、立派な風してのりこんでくる。之からあともどうなるかわかりはしない。世の中と云ふものは恐ろしいものだね。

女十。本當ですね。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

第二場

（楠の宅の一室。正成の妻と正行登場）

正行。お父さんは今日、お歸りになるのね。

妻。あゝ、もうぢき御歸りになるのだよ。

正行。うれしいな。お馬をもつて歸つてきて下さるでせうね。

妻。もつて歸つていらつしやるだらう。

正行。うれしいな。坊はお父さんと一緒にお馬に乘つて、お山へのぼるのだ。そして戰の御話を伺ふのだ。うれしいな。お父さんが藁人形をつくつて、敵をおだましになつた話や、大きな天にもとゞくやうな梯を敵がかけて來たのを、水弾で御退治になつた話なんかもして戴くのだ。うれしいな。

妻。お父さんはなんでもお話して下さるよ。

正行。その水弾を一つ御土産に持つて歸つて下さるといゝのだがな。その水弾だときつと水が天までとゞくにちがひないね。お母さん。

妻。（笑ひながら）そんなにはとゞきやしないよ。

正行。だつてお父さんがおつくりになつた水弾だからきつと天までとゞくよ。お母さん。あ

の杉のてつぺんまで位はきつととゞくわね。お母さん。

妻。うるさい子だね。それより今度からお前は行儀よくしないといけませんよ。

正行。なあぜ。

妻。だつてお前はお父さんのあとつぎで、大きな御國の御主人になるのだからね。皆の御手本にならないといけないのだよ。

正行。さうお、大きなお國をお父さんがいたゞいたの。

妻。あゝ。

正行。うれしいな。さうしたら、兎や鹿も澤山ゐるわね。お母さん。

妻。それはゐるだらう。

正行。さうしたら僕はお父さんと狩りにゆくのだ。戰爭はやめにしたかはりに、狩りにゆくのだ。

（腰元登場）

腰元。快元さんがお見えになりました。

妻。さうか。こゝへ御通ししておくれ。

腰元。はい。（退場）

快元登場

妻。よくいらつしやいました。（挨拶する）

快元。今日はお目出たう御座います。

妻。ありがたう。どうぞこちらに。正行御挨拶おし。

快元。坊ちやんも大きくなりましたね。

妻。えゝ。御かげで。

（正行退場）

快元。先日一寸京都に參りまして、御主人様にも一寸お目にかゝりました。

妻。さうでしたか。元氣にしてをりましたか。

快元。えゝ、非常に元氣にしていらつしやいました。都ではもう、楠さまと云へば大評判で、もう御主人程賢い方はないと、皆お噂してをります。陛下にも一寸お目にかゝりました時に、御主人のことを御知らせしたことを御よろこび下さつたので、大變名譽をほどこしまして、うれしく思ひました。實際、御主人の御働きには皆感心し切つてをります。

妻。どういたしまして。大塔の宮様の御援助がなく、足利様や、新田様が兵をおあげ下さらなかつたら主人もどうすることも出來ませんでしたらう。

快元。皆はさうは申してをりません。陛下や大塔の宮様のことは格別で御ざりますが、他の人達は日和見で、負けないときまつてから兵を擧げたのですから、誰もかげでほめるものは御座いません。

妻。主人もさぞよろこんでをりませうね。

快元。はい、随分よろこんでをられました。之で重荷をおろしたとおつしやつていらつしやいました。早く家に歸つて又菊いぢりでもしたいと話していらつしやいました。それにしても、大塔の宮様と、足利様との仲のよくないのを大層、御心配になつて御いででした。

妻。そんな噂を一寸うかゞひましたが、本當で御座りますか。

快元。本當で御座ります。しかしどうにかまとまると思ひます。

妻。本當に、うるさいもので御座いますね。大塔の宮様は随分御苦勞遊ばしたのですから、どんなにして上げてもおよろしいと思ひますが。

快元。さうです。しかしそこが足利兄弟のよくない所で、あの兄弟は何かたくらまないではゐられない男なのですが、陛下の御氣に入るためにどんなことでもするのですから、さすがに御賢明な陛下も、足利兄弟を殊の外御信用になつておいでです。

妻。さうですか。しかし大したことはないので御座いませうね。

快元。それは大したことはないと思ひます。

（正行登場）

正行。お父さんが歸つていらつしたよ。

妻。さうかい。どうして知らせてくれなかつたのだらう。

（正成登場）

妻。ちつとも、存じませんで。

正成。いや、反つて知らせないやうに歸つて來たのだ。一刻も早く歸りたかつたので、正季と二人で馬を走らせて來た。

妻。さうですか。

正成。快元さん。よく來てくれましたね。

快元。反つて御邪魔かと思ひましたが、御逢ひしたくなつたので。

正成。よく來て下さいました。私もお逢ひしたいと思つてをりました。

正行。お父さん、お馬買つて來て下さつて。

正成。あゝ、買つて來たよ。正季お叔父さんがつれて來たから、見せておもらひ。

正行。（お辭儀し）ありがたう。

（駈け出し退場）

正成。丈夫でいゝな。

妻。はい。

快元。大塔の宮樣のことはどうなりました。

正成。萬事よくゆきました。御機嫌がなほつて、非常に御盛んな御行列で御入洛になりました。陛下とゝ御機嫌よく御對面で、初めて顏をお合はしになつた時、大塔の宮樣は感きはまつて、お泣きになりました。私達も、一緒に泣きました。

快元。さうですか。それはよう御座いました。

正成。なにもかも初めつからやりなほされるのですから、隨分大へんと思ひました。田舍者の私たちが見てゐると、目がくらむやうに、いろ／＼のことが一時にもち上つて來ます。京にゐるよりは、千劍破にゐる方が樂なやうな氣がして、早く家に歸りたくつて閉口しました。矢張り、野菊は、野に咲いてゐるに限ります。陛下もお氣の毒です。誰か一人常まれつ兒がゐるといゝのですが、さう申しては失禮ですが、如才ない方が多いので、わるいことは皆、陛下のお袖の下にかくさうとするのですから困つたものです。しかし藤房卿も近い内にお戻りになりますから、どうにかなるかと思ひます。私達がいくら考へても、これ許りはどうすることも出來ません。

妻。あなたはすつかりお疲れになつてゐるやうですね。元氣でよろこんでいらつしやると許り思つてをりました。

正成。陛下にお逢ひした時のよろこびは百年の苦しみもつぐのつてあまりあるものだと思つた。還幸のおともして京都へ入る時も、私はどんなにうれしかつたか知れない。私は、神樣に感謝の祈りをさゝげ通しにしてゐたと云つても嘘ではない。しかしその後、一日二日とたつうちに、私は段々氣が滅入つて來た。その原因がよくわからないのだ。そして人々に機嫌のわるい顏でも見せれば、私が他の人の恩賞を猜んでゐるやうに思はれる。私はそんな賤しい人間ではないつもりだが、あたりの空氣は、私を益々、孤獨に、淋しくする。傲慢と、虚僞と、お世辭、それに猜みと、野心、それ等がむらがり立つて、もつれからんでゐる。單純で、善良で、生命をすてることをなんとも思はない、私を信じ切つてくれた人々ときりつきあつたことのない私には、宮廷の空氣は息ぐるしい。私は一年籠城してゐたよりは、十日宮廷にゐた方が歳をとつた。私は一日も早く家に歸ることより考へなかつた。都を出て、段々田舍に入るに從つて、私は胸がせい／＼して來た。水をはなれた魚が、住みなれた水に歸つたやうな氣がした。私は自

分の内にこんなに力のないことを感じたのは初めてだ。泣く元氣もない。たゞぐつすり眠りたいとそれ許り考へてゐた。

妻。それはお疲れが出たからですよ。あんまり御無理をなさつたからですわ。今に疲れがおなくなりになつたらそれは御元氣になりますわ。ね快元さん。

快元。えゝ、さうにきまつてゐます。

正成。私は都で見たことが、皆、夢だつたらいゝと思ふ。そして目がさめたら、千劒破城だつたら、さぞいゝだらうと思ふ。あの時は希望があつた。大きな、希望があつた。

妻。又ちがつた新しい希望がわきますわ、どうすることも出來ないことは氣になさらない方がよろしいわね、快元さん。

快元。さうですとも。いくらでも希望をつくり出すことが出來るものです。

正成。私の大きな希望はつぶれてしまつたか、いやまだ／＼藤房卿がゐる。私はあの人が歸つて來たら、一度ゆつくり逢つて見たい。

快元。私はまたその內京都に行きますから、藤房卿にお逢ひして、あなたのお考へをお話しませう。

正成。どうぞ。お前、心配しないでいゝ。私も正成だ。何處かに生きる道を見出して見せる。私はあまりに子供だつたのだ。信じてはならないことを信じすぎてゐたのだ。今その罰をうけてゐるのだ。だが今に立ち上るだらう。その時は何も恐れずにすむだらう。心配しないでいゝ。さあ、一つ庭の樣子でも見せてもらふか。快元さん。一緒に來ませんか。

快元。ありがたう。今日は之で失禮しませう。又今度。

正成。藤房卿にお逢ひでしたらどうぞよろしく。

快元。承知しました。さよなら。

正成。さよなら。

妻。さよなら。又どうぞ。（皆退場）

第三場

（月夜。正成、緣側で月を見て涼んでゐる。妻登場）

正成。正行はねたか。

妻。よく寢ました。

正成。中々、利口で元氣だね。

妻。えゝ、中々利口です。

正成。あいつの一生を仕合せにしてやりたい。

妻。世の中も、どうにかおちついてゐるやうで御座いますね。

正成。こゝにゐると世の中のことは知らずにすむ。いろ／＼のことが夢のやうだ。

妻。何事もなかつたやうですね。

正成。さうだ。すぎたことは夢のやうで、赤坂にこもつたことも、千劒破にゐたことも自分ではないやうだ。北條が亡んだが別にかはつたこともないやうだ。稅は高くなつても、やすくはならないだらう。私の領地だけは少しは安く出來るつもりだが。そして人民の苦しみも前とふえてもへりはしまい。だが皆、あきらめてゐるやうだ。都にゐる野心家たちは何かくはだててゐるかも知れない。しかしこゝにゐれば別に氣にもならない。

妻。私はこの頃は實にたのしく、心うれしくくらしてをります。こんな時が、來てくれようとは思ひませんでした。

正成。一寸さきは暗と云ふが、さきのことは人間にはわからない。私達はかうしてゐるといつ迄も平和にくらしてゆけさうにも思ふ。しかしかうしてゐる内に、どんなことが起つてゐるかわからない。高時は自分達が自殺しなければならないとは思はなかつたらう。又千劒破を攻めた長崎なぞは、自分が坊主になつ

て、降參して、そして首をはねられなければならないと云ふことは知らなかつたらう。今後どんなことが起るか誰も知つてゐるものはない。

妻。もう大丈夫だと思ひますわ。此間京都から來た人の話だと、京都は實に賑かになつて、御所なぞは目がさめるやうに立派になつて、人々は泰平をたのしみ、君の御威德を讃美してをりますさうです。

正成。私の聞いたのは少しちがふ。私は千種殿や、文觀僧正の生活を聞いたが怖くなつた。その贅澤は少しも北條一族にかはらない。殊に大塔の宮樣は粗暴のお振舞が多いさうだ。そんなはずはないとも思ふが。皆、苦しい時には隨分立派なことも云ひ、立派な振舞もする。だが位置がかはると、今迄自分達が呪つてゐた人達と寸分ちがはないことをする。人間は皆五十歩百歩だと思ふ。北條一族だけが出來のわるい人間ではない。人間があまりに權勢をもつと云ふことは恐ろしいことだ。

妻。ですけど都では皆、よろこんでさわいでをりますさうですよ。噂と云ふものは何んでも大きく聞えるものです。そして想像すると切りがありません。

正成。まあ靜かに見てゐるより仕方がない。

（腰元登場）

腰元。藤房卿がお見えになりました。

正成。藤房卿がお見えになつたつて。

腰元。はい。

正成。あゝさうか。

（正成、妻、腰元と迎へに立つ。やがて藤房、正成と登場）

正成。本當に來て戴いて恐れ入ります。私の方から御訪ねしたいと思つてをりました。

藤房。快元和尚からあなたのことを聞いたら急に逢ひたくなつて來たのです。

（腰元、座蒲團その他をもつてくる）

正成。どうも失禮な處ですが、反つて涼しくつて、それに月があまりよろしいので。

藤房。こゝの方が本當に結構です。始終、あなたのことを思つてをりました。

正成。私こそ始終おうはさしてをりました。

藤房。あなたの御働きについては、私はなんと御禮していゝか、又何と云つてお賞めしていゝかわかりません。私の心の内は御わかりになつてゐて下さると思ひます。常陸に流されてゐても、たえずあなたのことを思つて心嬉しくくらしてをりました。

正成。さうおつしやつて戴くとお恥かしい氣がします。

藤房。恥かしいと云へば私の方の事です。あの時、希望に滿ちていろ／＼お話し、そして陛下が政をおとりになりさへすれば、あとは私が引きうけたやうなことを申したのが、恥かしく、穴に入りたいやうな氣がしてゐます。

正成。お察しします。

藤房。私は今度は隨分希望に滿ちて歸つて來たのです。いろ／＼の計畫もたてゝをりました。しかし歸つて日がたつに從つて、私は自分が馬鹿だつたことをはつきり知りました。私が歸つてからも、陛下は、いろ／＼申上げました。しかし陛下は、他の人の云ふことの方が、御氣に合すので、私の云ふことは御聞き入れになりません。それは御無理ではないのです。だが恐ろしいことが起ります。あなたはまだ御存知ないでせうが、一昨日大塔の宮樣が謀叛の嫌疑でおつかまりになりました。

正成。えつ、それは本當ですか。

藤房。謀叛のことは知りません。しかしつかまへられ、一室に押しこめられたのは本當です。そして今日、不意に、足利直義に宮樣をおあ

づけになりました。直義は直ちに鎌倉におつれしたやうです。

正成。恐ろしいことですね。

藤房。足利兄弟は殘忍な男です。何をし出かすかわかりません。大塔の宮樣にも落度はまるでないとは云へないかも知れません。ですが、陛下をなきものにしようとはおくはだてにはならなかつたでせう。たゞ足利兄弟を亡ぼさうと御計畫なさつていらつしたことは事實です。足利兄弟が御繼母にあたる三位の局にとり入つて陛下の弱味をしつかりにぎつて放さないことは恐ろしい程です。三位の局は隱岐にまでついていらつして陛下と艱難困苦を共にされ、三人の皇子をお産みになつていらつしやるのですから陛下が特別にお愛しになるのは御尤なのですが、其處につけこむ、彼等兄弟は恐るべき人間です。殊に直義と來たらどんなことでも野心を滿たすためにはやり兼ねない男です。困つたことが起つたものです。今に何か起つて、天下はまた麻のごとく亂れるでせう。私はがつかりしました。

正成。あなたにがつかりされては、私達は誰をたよりにしませう。どうかしつかりしてゐて下さい。

藤房。私は陛下を限りなく愛してをります。笠置からおちた時なぞ、陛下も私も三日も何にもたべずに、うろつきまはりました。そして谷の清水をのんでは、私達は顏を見合はせ、少しの音にも私達は恐れを抱きました。その時、陛下は、「さしてゆく笠置の山を出でしよりあめが下にはかくれがもなし」とおつしやつたので、私はとめどなく涙が出て、「いかにせんたのむかげとて立ちよればなほ袖ぬらす松のしたつゆ」とお答へしましたが、その時のことなぞ思ひ起すと、陛下が少しでもよろこんでいらつしやるのを見ると、私はうれしく思ひ、なほおよろこばせしたく思ふのです。ですが、あなたが快元和何におつしやつたやうに、足利兄弟は、わざと、人々の恩賞をへらすやうに陛下に申しあげて、そして人々に陛下をお恨みするやうに持ちかけるのです。そのやり方の巧みなのにはおどろく程です。そして陛下に御注意申し上げれば、それは猜みからだと御思ひになるのです。何んでも思ひ込むと、それを何處までも押し通される御癖がさう云ふ時にもつきまとつて、私の云ふことは更におきゝがないのです。

正成。本當に今に恐ろしいことがおこりますね。

藤房。それは起ります。私はこの二三ケ月の間程、人間の弱さを知つたことはありません。隨分立派な人だと思つた人が、猜んだり、憎んだり、女のくさつたのよりなほ圖太くなります。そして皆、惡鬼に逐はれたやうで、幸福さうには見えません。お互に疑ひあひ、猜みあひ、憎みあひ、落し入れあひ、そして第二の北條になりたい連中が少なくないのです。私はこの頃、よく考へますが、人間が權力を持ちすぎることは恐ろしいことです。人間の優しみがなくなつて、權力許りをもとめ、惡鬼のやうになり、お互に倒しあはなければをさまらなくなります。

正成。新田義貞はどんな人です。

藤房。あれは眞面目な男ですが、器量が大きいとは云へません。とても足利兄弟の圖太さの敵ではありません。

正成。たよりになる人はありませんか。

藤房。ありませんね。あなたに、高氏の圖太さがないのは殘念なことです。

正成。あなたに直義の執念深さのないこともなけかはしいことです。

藤房。(淋しき笑ひ、私はもう望みも何にもな

くなりました。私にはもう目あてがつかないのです。

（妻、御馳走をはこぶ）

妻。何にも御座りませんが。

藤房。ありがたう。三年前にこちらにお伺ひした時は、隨分、たのしみでしたがね。

正成。（苦笑して）來て見たら、元の杢阿彌ですね。

藤房。天下が自分の味方になると思つてゐたのが馬鹿なのですね。其處へゆくと、足利兄弟は仕合せものです。希望に燃えて、こつ〳〵細工をしてゐますからね。

正成。私達の仕事は、北條のかはりに足利をおくためにすぎなかつたかも知れませんね。多くの人を殺しただけが、私の仕事だつたのだと思ふと、私は本當にどうしていゝかわかりません。（泣く）

藤房。本當にあなたは見上げた方だ。私はあなたが今の世にゐて下さるのでどんなに氣丈夫か知れません。私は人間に愛想をつかしかけた時に之からもあなたのことを思ふでせう。すると心が清まり勇氣づけられるでせう。

正成。あなたにさう云はれると恥かしい氣がします。私こそ、あなたのことを思ふと勇氣づけられます。

藤房。私は今日は本當は、何にもあなたに云はずに、月がいゝので、あなたが笛がお上手だと聞いたので、二人で笛をあはせようと思つたのです。

正成。上手と云ふことはありませんが、あなたとおあはせするなら本望です。

藤房。奥さんは琴が御上手ださうですね。

妻。あんまり下手で、おはづかしいのです。

正成。御遠慮する方が本當かも知れないが、之も一生の思ひ出になるだらう。遠慮せずにあはしておいたゞき。

妻。はい。

正成。正季をよんでおやり。

（妻退場）

藤房。靜かな晩ですね。

正成。えゝ。

藤房。私の弟は流されてゐる内に死にました。私は京都に歸れるやうになつた時、本當に同情しましたが、今になれば、どちらが幸福だつたかわからない氣がします。

正成。生きてゐると云ふことは恐ろしいことですね。

（琴、笛を腰元もつてくる。妻、正季登場）

（藤房に丁寧に挨拶する）

藤房。暫らくでしたね。

正季。はい。

藤房。隨分お働き下さつて、感謝してをります。

正季。恥かしい話です。

正成。それでは始めませうか。

藤房。えゝ。

（三人合奏する。奏し終る）

正成。藤房さん。あなたは出家なさりはしますまいね。

藤房。どうしてです。

正成。なんだか、あなたの笛の音を聞いてゐたらふとそんな氣がしました。

藤房。そんなら私一人でふきますから、あてて御らんなさい。

正成。はい。

藤房。あなたの笛を私の笛ととりかへてはくれませんか。

正成。それは私も望んでをりましたが、申し出すのを遠慮してをりました。

藤房。それではおかへしませう。

正成。はい。

（二人笛をとりかへる。藤房笛をふき出す）

——幕——

第五幕

第一場

（正成の室。正成登場。御所から歸つたまゝだが、何か心に苦悶があるらしく、襖をしめて暫らく端坐する。ふと笛に氣がつき、靜かにふいて見る。外から正季）

正季。お兄さん、入つてようございますか。

正成。入つてもいゝ。

（正季、登場）

正季。おくたびれになつたでせう。

正成。別にくたびれはしない。

正季。御前の首尾はどうでした。

正成。私の笛の音でわかつたらう。

正季。大へん靜かに聞えました。

正成。（うれしさうに）さうか。

正季。それでは上首尾でございましたのですね。

正成。わるいやうでもあるし、いゝやうでもある。

正季。それでは陛下は笠置へ行幸になることを御承知になつたのですね。

正成。さうぢやない。

正季。それでは陛下は何處に行幸になるのです。

正成。行幸はのびたのだ。

正季。いつ迄、のびましたのです。

正成。私が死ぬ迄のびたのだ。

正季。（うれしさうに）それでは、足利兄弟が九州の大軍をひきつれて京に征めのぼつてくると云ふ噂はうそでしたか。

正成。うそではない。

正季。それでも思はぬ援兵がそれ迄に到着することになつたのですか。

正成。さうぢやない。

正季。（考へる）何かいゝお考へがお浮びになつたのですか。私達がとても考へつかないやうな。

正成。さうぢやない。

正季。私には見當がつかなくなりました。それでは私達はどうすればいゝのですか。

正成。（斷乎と）兵庫にゆくのだ。新田殿をたすけに。

正季。それで勝てる見込がついたのですか。

正成。負けにゆくのだ。

正季。御冗談をおつしやらないで本當のことをおつしやつて下さい。

正成。皆、本當のことだ。

正季。それでも、お兄さんは陛下に笠置にもう一度行幸して戴くより他に仕方がない、とおつしやつていらつしたぢやありませんか。

正成。今でもさう思つてゐる。

正季。それではなぜ兵庫へいらつしやるのですか。

正成。御命令だから。

正季。お兄さんは自分の考へをおつしやらなかつたのですか。

正成。云つた。

正季。一度京都へ足利兄弟を入れて新田殿と挾みうちする計畫をたてて、必勝疑ひなしとおつしやつていらつしたぢやありませんか。そのお考へをおつしやつたのですか。

正成。くはしくお話した。

正季。それなのに御採用なかつたのですか。

正成。陛下は御採用にならうとした。しかし其處に稀代の智慧者が出て來た。

正季。お兄さんよりも、もつと智慧のある者が

正成。ゐた。その男はかう云ふのだ。味方はいつも少數の兵で大敵に勝つのは謀によつて

ではない、陛下の御威光によつてだと云ふのだ。

正季。誰です。そんなおべつかをつかふものは。

正成。閥門の宰相清忠殿だ。そして戰はずして皇居をかへることは不名譽なことだといふのだ。

正季。それは正氣のさたなのでせうか。

正成。さうと見える。其處にゐる勇士の面々一人のこらず、清忠殿の考へに同意された。私の考へに同意してくれたものはたゞの一人もなかつた。

正季。お兄さん、それは本當ですか。

正成。本當だ。

正季。それでお兄さんはどうなさりました。私がわきにゐなかつたのが殘念です。私だつたら、怒鳴りつけてやつたでせう。釋迦に說法すると云ふ言葉がありますが、お兄さんの考へが不名譽だなぞと云ふ人間を私はそのまゝにしてはおけません。

正成。そんなことを云つたら、世間の人をのこらず殺さなければならないだらう。世間の人は大概そんなことを云つてすましてゐるのだ。

正季。それでもお兄さんが、どんなに深くお考へになつてゐるか、もう少しはわかつてくれてもいゝはずぢやありませんか。

正成。藤房卿もそれで愛想をつかして隱遁されたのだ。自分の意見がそのまゝ通るなぞと思つたら大まちがひだ。

正季。それでもお兄さんの考へに從ふより他に勝つ道はないぢやありませんか。

正成。多くの人はどうすることも出來ない目に逢ふまでは目が覺めないのだ。

正季。それでお兄さんはどうなさいました。まさか彼等のまちがつた考へをそのまゝ御承知にはならなかつたでせう。

正成。處が私があつけにとられてゐる內に衆議は一決してしまつたのだ。そして私にすぐ兵庫にゆけと云ふのだ。私はもう少しで吹き出したくなつた。腹が立つよりも、笑ひたかつた。そして泣きたかつた。

正季。それで見す見す負けることを知りながら、御承諾なすつたのですか。

正成。さうだ。口答へすれば、彼等はこの私を臆病者だとさへ思ひかねない人間だ。彼等は戰は正しい方がかつ、勇氣のあるものがかつ、大敵と雖も恐れるなと云ふのはこのことだと云ふのだ。彼等は人數が多く、自分が出かけるのでもなく、ものがはつきりわかるのでもないから、調子にのつて偉さうなことを云ふ。そしてそれが皆、おべつかになつてゐるのだ。そして誰もそれがどう云ふ結果になるかと云ふことは考へないのだ。

正季。救はれない馬鹿です。許すことの出來ない厚かましい奴ですね。お兄さんはなぜそれを押へつけてしまはなかつたのです。

正成。私も、それが恥かしい。自分の考へが正しいのに、自分を潔くするために、がんばることが出來ず、見す／＼味方を死地におとし入れる自分の弱さがはがゆかつた。私は途中で何度あともどりして、もう一度皆に考へなほしてもらはうかと思つたか知れない。だが私はその勇氣がなかつた。それは又無結果に終ることもわかりすぎてゐた。だが考へてくれ。どうしてあの人間共を承知させることが出來るか。それは私が第二の北條にならない限りは出來ないことだ。彼等はたゞ死を恐れる。彼等を生かしたまゝに默らすことは釋迦がいらつしてもむづかしいことだ。彼等は死刑に處する權利をもつてゐるものだけを恐れる。又位階や、恩賞を與へらるものだけの云

ふことを聞く。彼等はいくら本當のことを云つて聞かしたつてわかるわけはない。お前は彼等を說きふせることが出來ると思ふか。それは藤房卿にも出來なかつた。さうして私にも出來ない。私が兵庫にゆくことに反對したら、彼等は私を君の命をきかないものときめるだらう。そして私を生命の惜しい臆病ものと云ふだらう。何と云はれてもかまはないとしても、私には足利の眞似は出來ない。さうすれば兵庫にゆくより仕方がない。

正季。お兄さん、私は口惜しう御座います。足利兄弟は、何といふ運のいゝ男でせう。清忠の奴は何と云ふ恩知らずの馬鹿でせう。お兄さんがいらつしたからこそ、北條は亡びたのぢやありませんか。天下にたゞ一人の味方もない時、天下を相手にして、少しも恐れず、百萬の敵さへ、玩具にすることが出來たのはお兄さんだけぢやありませんか。お兄さんの云ふことさへ默つて聞いてゐればいゝのに、それに口答へするばかりではなく、教へてかかり、臆病あつかひするに至つては本當に濟度しかたい馬鹿ものです。彼等は罰をうけなければなりません。きつと罰をうけるでせう。

正成。それにしても私は恥かしい氣がした。もし碁の名人があつて一生一代の晴れの勝負の最中、必ず勝つ手を知つてゐながら、碁をまるで知らない男の云ふことを聞いて必ず自分が負ける處に石を打たなければならないとしたら、それは碁の名人にとつて、どんな恥辱だらう。その位なら死んだ方がましだと思ふだらう。その氣持を察してくれ。

正季。お兄さんの御心はよく解りました。私は口惜しう御座います。（男泣きに泣く）

正成。だが正季、私は一方うれしくもあるのだ。

（外で、妻、泣くのを耐へ、耐へてゐるのが感じられる）

正成。私は覺悟が出來たのだ。私はもう未練がなくなつたのだ。何うかすれば自分の望む世界が來はしないか、自分にはまだ何かしなければならない使命があるのではないかと云ふ未練がなくなつたのだ。天は許して下さつた。私はするだけのことをした。私はしなければならないことはしてしまつた。そして私の到達した處は何處か。お前は知つてゐるだらう。さつきの笛の音が語つてゐたはずだ。私は歸るべき處に歸ることが出來るのだ。それはうれしくもなく悲しくもない。

外で妻の決心した聲。正行、おいで。

外で正行の聲。はい。

（妻、正行登場）

正行。お父さん、御土産は。

正成。正行！　お前はもう赤ん坊ではないぞ。私の云ふことをよく聞け。お前はお母さんの云ふことをよく守らなければならないぞ。そしてこの正成よりも大きな人間になれ。清濁合せのむ人間になれ。そして私に出來なかつたことをしろ。お前は、今日からはしつかりしなければならない。

正行。お父さん、坊は偉い人間になります。お父さんのやうに。

正成。私より偉くならなければならない。私より平氣で大きな仕事をする人間にならなければならない。だが、この子は私よりもなほ、潔癖で、一徹ものらしいな。この子の未來が思ひやられる。だが、神や佛がこの子を守つて下さるだらう。

（妻、忍び泣く）

正行。お母さま、どうしたの。

正成。泣くことはないぢやないか。武士の妻が夫の戰死することの覺悟が出來てゐないでど

うする。お前がそんなにわからない人間なら私はお前を妻だとは思はないだらう。正成の妻ともあらうものが、夫が戰場に出ると云つて泣く奴があるか。さあ、もう泣くのはよしてくれ。そして靜かに語りあかさう。私は心の底があかるくなつて來てゐる。私は歸るべき處に歸れるよろこびをかすかに感じて來てゐる。泣くのはよしてくれ。

妻。はい。

正成。お前の心はわかつてゐる。正行をたのんだぞ。お前よりは私の方が、仕合せものだ。お前達を出來たら守護してやる。私はうれしくなつた。私は一番お前を恐れてゐた。そのお前が本當に決心してくれた。それでこそお前だ。正成は心でお前を見上げてゐる。どうか、辛抱して、この子を立派な人間にしてくれ。正行、お前はお母さんに孝行にするのだぞ。そして、立派な人間になるのだぞ。

正行。えゝ、お父さん、坊は偉い人間になります。

正成。感心、感心、それでこそ私の子だ。さあ二人とも向うへ行つてゐておくれ。私達は一寸相談しておきたいことがあるのだから。

妻。はい。正行、行きませう。

（二人、淋しく未練をのこしながら退場）

正成。正季、今度は皆戰死してもらふことになるだらう。生命の惜しいものや、あとの困るものは、戰爭につれては行かないつもりだ。お前、和田と相談していゝやうにしてくれ。

正季。はい、承知しました。

正成。正季！　お前はこんな兄を持つて氣の毒だつた。

正季。何をおつしやるのです、お兄さん、そんなことおつしやると私は本當に怒りますよ。私はお兄さんの弟だと云ふことをどんなに名譽に思つてゐるか知れません。

正成。正季、ありがたう。

（顏を見合はせる）

―幕―

第二場

（戰場。兩軍、入り亂れてゐる。敵兵が逃げ出す。正季阿修羅のやうにあらはれ、敵を逐ひちらす。疲れて小さい小屋の縁に腰をかけて休む。味方の兵士登場）

正季。お兄さんを見なかつたか。

兵士一。はい。氣がつきませんでした。

正季。お前達の働きの立派なのに感心したぞ。

兵士一。皆、手傷を負ふに從つて勇氣百倍して參りました。

正季。大軍を逐ひちらすのは面白いものだな。

兵士一。はい。

（敵がまた味方の兵を追つてよせてくる。正季、多くの敵を相手にして一歩も退かないやうに戰ふ。味方、苦戰。この時、正成、少し味方をつれて現はれてくる。その勢ひにおぢけて敵兵逃げる）

正季。あゝ、お兄さん。

正成。あゝ、正季か。

正季。よく來て下さいました。もうお逢ひ出來ないかと思つてゐました。

正成。これでお前と五度、あつたわけだな。敵はとう／＼四方を圍んだな。

正季。はい。

正成。どうだ、まだたゝかふ元氣があるか。

正季。大丈夫です、お兄さん。お血がたいへん出てゐますよ。

正成。大したことはない。

正季。あの小屋で傷をゆはへてあげませう。

正成。それではゆはへてもらふかな。そしてもう一あばれあばれて見よう。

正季。えゝ、さうしませう。

正成。この家は死ぬのに丁度いゝ家だ。

正季。私もさう思つてゐました。

（二人家のなかに入り障子をしめる）

正季。（内で）痛くは御座いませんか。

正成。（内で）痛くはない。

（敵、又味方を逐つてやつてくる。切りあふ。正成、正季あらはれる。縁に立ちながら）

正成。楠正成、正季、こゝにあり。生命の惜しいものは、逃げろ、逃げろ。

（敵、たじろぐ。味方急に力をもりかへす。敵逃げる）

正季。それではお兄さん。御一緒に行きませう。

正成。行かう。又あとでこゝで逢ふことにしよう。

正季。はい。

（二人退場。合戰。敵、味方追ひつ追はれつする。暫らく、空）

正季。お兄さん。お兄さん。

（兵士二、登場）

正季。お兄さんに逢はなかつたか。

兵士二。あすこで戰つていらつしやいました。

正季。さうか。

（正季その方へかけてゆく）

（正成登場）

正成。正季。正季。正季は居ないか。

（和田登場）

正成。和田か。お前も隨分傷したな。

和田。あなたも、隨分お負傷なさりましたね。

正成。之で、私も獅子王にでもなつたやうな氣がするよ。

和田。あなたのお勇ましい姿を見ると、皆決死の勇がわきます。

正成。私は又皆の死を恐れない姿を見ると、私も負けてはゐられないと思ふ。

（敵又せめてくる）

和田。五月蠅い奴だな。私は追つぱらつて參ります。

（和田、味方の兵と共に敵兵を追ひ散らす。正成それを見送る。敵兵一人、正成の後ろから忍びよる）

正成。影がうつつてゐるぞ。逃げろ、逃げろ。

（敵兵、逃げる。まもなく大勢で正成をとりかこむ。正季、來て之を見、怒つてをどりかゝり、敵を逐ひ散らす）

正季。お兄さん、殘念しました。味方がもう少しで直義を殺す所でした。もう一息と云ふ所で敵の大將が一人とびこんで來て、逃がしてしまひました。

正成。さうか。

正季。お兄さん、味方はどん／＼やられ出しました。皆、さすがに疲れて來ました。手傷をおはないものは一人もないでせう。

正成。さうか、それならもう一度、戰つてそれで死ぬとしよう。

正季。それがよう御座いませう。

（和田、兵士達をつれて登場）

和田。前面の敵はおひちらしました。

正成。さうか、それは勇ましかつたな、皆、御苦勞だつた。

（敵兵、又攻めてくる）

正成。さあ、之が最後のたゝかひだぞ。勇士の手なみを見るがいゝ。（敵兵のなかに眞先に切りこむ

（暫し空。正成達、疲れて歸つてくる）

正成。敵は一先づ逐ひ散らした。正季、もう思ひおくことはないだらう。

正季。はい。

正成。それでは一緒にゆくとしよう。和田、私達はあの家のなかで死なうと思ふ。それで靜かに死にたいから、外の者だか見はりしてゐてくれ。

和田。畏まりました。

正成。皆さん、勇敢に戰つてくれてありがたう。私達は御禮を云ふ言葉がありません。皆さん、どうもありがたう。

（正成、正季、皆に丁寧に挨拶して、小屋の内に入り障子をしめる。皆、家のまはりに護衛として立つ。）

正成。正季！　とう／＼私達は死ぬ時が來たな。

正季。はい。

正成。お前はかう云ふ死に方をすると思つてゐたか。

正季。思つてゐたやうな氣もします。前世でいつか、お兄さんとこんな處で死んだことがあるやうな氣がします。

正成。さう云へば、私もそんな氣がする。

正季。お兄さん、隨分ひどいお負傷ですね。

正成。十二ケ處傷をうけた。お前も隨分ひどい負傷をうけたな。

正季。はい。

正成。お前は何か望みがあるか。死ぬ時の望みは叶ふことがあるさうだ。

正季。（笑ひながら）お兄さん、もし叶ふなら七度、生れかへつて野心家を殺してやりたく思ひます。第二の北條を、第二の足利を。

正成。（笑ひながら）正季。お前は仕合せものだ。それなら用意はいゝか。

正季。お兄さん、お兄さんの御望みはなんですか。

正成。私は罪業深い人間だが、眠りに入つたら、もう目はさめたくはない。だがもし目がさめたら、今度こそ、自分より馬鹿ものの云ふことはきかずにすむ世界に生れたく思ふよ。私を殺せるものは足利兄弟ではない。私を殺すものは、坊門の宰相清忠、あの阿呆だ。だが私は死ぬことを恐れはしない。すべてはなるやうになるだらう。私は凡事をなにかに任せた。死んでもいゝ許しを私はそのものから受けとるのだ。用意はいゝか。

正季。はい。それでは、お兄さん。

正成。正季！

皆。あつ。（驚く）

（障子に血かゝる）

——幕——

（二三、三、三）

男子一たび

男子一たび決心したことは
やり通す。
風がふいても
雨がふつても
何んでもやり通す。
生きてゐる限りは
何年かゝつてもやり通す・
死ぬまでやり通す。
もつといゝことを考へつくまでは
やり通す。

男子一生の仕事

男子一生の仕事が樂に出來上るものと思つてゐるのか。馬鹿

生れけり

生れけり、
死ぬ時迄は
生くる也。

清盛と佛御前

登場人物

清盛
妓王
妓女
その母
佛
侍、腰元及びその他大勢

第一幕

一　清盛の室

(清盛何か考へてゐる。侍現はれ平伏する)

侍。殿樣。

清盛。なんだ。

侍。佛と云ふ白拍子が見えまして、是非殿樣にお目にかゝりたいと申しました。

清盛。なに、佛が來て是非俺に逢ひたいと申したか。歸せ。見たい時にはこつちから呼ぶ、呼ばない間はくるなと申せ。

侍。はつ。(退場)

(妓王登場)

妓王。殿樣。

清盛。妓王か。何んだ。

妓王。佛と云ふ白拍子が見えたさうで御座いますね。

清盛。あゝ、來たさうだ。

妓王。なぜお歸しになりましたのです。

清盛。逢ひたくないからだ。

妓王。逢つてやつて戴くわけには參りませんか。

清盛。なぜお前は俺に佛を逢はしたいのだ。

妓王。それでも折角來たのですから。

清盛。折角來たものは歸してはいけないのか。お前は意氣地がなさすぎる。お前は心の内では佛を俺が歸したことを喜んでゐるのだらう。

妓王。なぜで御座いますか。

清盛。お前より他の女は俺には用がないことを示してやつたからだ。

妓王。そのお心ざしは難有う御座います。しかし佛に逢つてやつて戴きたう御座います。妾が佛にお逢ひになるのをさまたげたやうに世間で風評されるのも心苦しく御座いますから。それに佛とやら申す有名な白拍子の舞姿も見たく思ひますから。

清盛。淺墓な奴だ。怖いものが見たいのか。

妓王。いえ、妾は怖くは御座いません。妾は殿樣を信じてをります。

清盛。俺の心を信じてゐる？ お前は奇特すぎる女だ。お前に呼ぶ勇氣があるなら呼ぶといい。俺は風評の佛には用はない。

妓王。それなら呼びましてよう御座いますか。

清盛。呼んでもいゝ。

妓王。……

清盛。あはゝゝ。呼んでもいゝと云はれて見たら呼びたくなくなつたのだらう。呼びたくなければ呼ばなければいゝ。

妓王。呼びます、呼びます。

(妓王退場。妓王暫らくして登場)

妓王。呼びもどさしにやりました。

清盛。さうか。皆のもの共に見たければ見に來

でも苦しうないと云つてやれ。

妓王。はい。

(妓王退場。暫らくして妓王登場。侍、腰元登場、雨わきにならぶ。先刻の侍登場)

侍。佛が參りまして御座います。

清盛。こゝに通せ。

(佛、十六歳にして少し大きく豐かに美しき白拍子、靜かに現はれ靜かにすわり、靜かに妓王と皆に會釋する)

清盛。風評に聞いてゐた佛とはその方か。

佛。はい。

清盛。あはゝゝ、風評もあてにならぬものぢや。

妓王。(清盛のそばに坐つてゐる)殿樣、そんなことをおつしやるものではありません。

清盛。いや、風評の方がいゝと云ふのではない。風評の方が惡いと云ふのだ。佛、よくまだぐづぐづしてゐたな。

佛。はい、車にのらうとしてをりましたら御召し歸し下さいましたので、悦んで上りましたので御座います。

清盛。妓王があまりお前に逢つてやれと云ふので、逢ふ氣はなかつたのだが、妓王にめんじて逢ふことにしてやつたのだ。今樣でも一つ聞かしてもらはうか。

佛。はい。(居ずまひをなほし)「君を初めて見る時は、千代も經ぬべき姫小松、御前の池の龜岡に、鶴こそ群れ居て遊ぶめれ」

(三度くりかへす)

清盛。見事、見事、いざ舞を見せてくれ。鼓打を呼べ。

腰元一。はつ。

(呼びに立つ。早速鼓打をつれ歸る。妓王の顏にはかくし切れぬ不安と嫉妬現はれ始める)

清盛。さあ舞へ。

佛。はい。(佛舞ふ。舞ひ終る)

清盛。佛の外、皆退れ! 退らぬか。

(妓王の外、皆退場)

清盛。妓王、お前も、もう退つていゝ。何をぐづぐづしてゐるのだ。お前の室に退れ。退らぬか。

(妓王默つて立ち上る。佛見兼ねて立ち上り)

佛。妓王樣はこゝにいらつして下さいまし。私はもうお暇をいたします。清盛樣、妓王樣をおとめ下さいまし。どうぞ清盛樣。清盛樣。

(立つて清盛のそばにゆく)

(妓王退場)

清盛。心配しないでいゝ。

佛。私はもうお暇いたします。

清盛。俺のそばにゐるのがいやなのか。

佛。妓王樣のことが氣になります。妓王樣にすみませんから。

清盛。すむもすまないもない。妓王は妓王の前にゐた俺の寵愛してゐた女から俺を奪つたのだ。お前は又妓王から俺を奪ふのだ。何も不思議はない。

佛。私のあとにも亦誰かくるでせう。私は一目見て妓王樣に御同情申しました。私は退ります。

清盛。佛、ゆく處までゆくまで見切りをつけるものではない。お前は俺のやうに強くならなければいけない。俺をのぞんで俺の處へ來て今更、妓王一人に氣兼ねをする位なら初めから來ない方がいゝ。すべてが思ひのまゝに用意された今になつて、手をひつこめるのは餘りに意氣地がなさすぎる。妓王の事は心配するな。

佛。それでも、あんまり早く思ふ通りになりすぎましたので。

清盛。臆病者め。お前はもう俺のものだ。妓王

のことが氣になるならさつさと歸るがいゝ。しかしお前は歸らずに俺のそばにくるだらう。佛。風評よりも優れてゐるものはそなたとわし許りだ。さうだらう、佛。

佛。えゝ。

二　妓王の室

妓王。（室をかたづけながら）二度お使があつた。さうして今すぐ出てゆけと云ふ御言葉だ。出てゆけとおつしやらないでも出てゆく、妾はもうこゝに居られない人間だといふことは知つてゐる。だが今すぐ出てゆけと云ふ御言葉は餘りなさけない。つゞけさまに二度も使をよこされて今すぐ出て行けとは餘りにむごいなされやうだ。妾にとががあるなら知らぬこと、三年の間、妾はたゞの一度もお氣にさはるやうなことはしなかつた。身の冥加を感じて謹み深くくらしてゐた。妾は自分程仕合せなものはないと思つてゐた。さうして女と云ふ女からうらやましがられてくらしてゐた。母も妹も妾に感謝してゐた。しかし妾は佛に見かへられたのだ。さうして今すぐ出てゆけと云はれたのだ。妾は之から皆に笑はれなければならない。皆に後指をさゝれなければならない。雲の上にのらなかつたら妾はおちなかつた。妾はたゞ清盛様の御威光だけでくらして來たのだ。清盛様からはなれた妾はたゞの女だ。小さい女だ。まだぐづぐづしてゐると使をよこされるかも知れない。母が聞いたらさぞ嘆くだらう。妹が聞いたらさぞ怒るだらう。佛よ、お前は妾から清盛様を奪つたことを心から知つたのだね。さうして妾を早く逐ひ出す爲に、妾がゐればお暇をすると云ふのだね。妾は本當にお前にまけた。お前はさぞいつまでも美しくつて、三十になつても四十になつても美しくつて、さうして清盛様の御寵愛を一身に受けることだらう。（嘲笑ふ）

（女中登場）

妓王。なにか用かい。

女中。……

妓王。又御使かい。

女中。はい。

妓王。今歸る支度をしてゐる最中だとさう申せ。

女中。はい。（退場）

妓王。また使か。今すぐ出てゆきます。この室を佛に見られても笑はれないだけに始末がつけば出てゆきます。たつた三日雇はれた女中でさへ、いゝ女中が出來たからもう用はない、暇をやるから出て行けと云はれたら、淋しいだらう、悲しいだらう、心細いだらう、まして妾は三年こゝに居たのだ。さうして御寵愛を受けたのだ。佛さへ來なかつたら、佛さへ禮を心得てゐたら、佛の心が鬼のやうでなかつたなら、妾はからもむごたらしく逐ひ出されることはなかつたらう。いゝわ、やがては思ひ知る時があらう。佛よ、お前は何時までも美しくはない、何時までも日本一の舞の上手ではない。世の中はひろい、女は澤山生れる。さうしてお前は齢をとる。佛、お前も秋にあはなければならない。さうだ、佛、妾はお前の心の内に淋しい種をまいてあげよう、本當のことを知らしてあげよう。お前は妾に勝つたかも知れない。しかし佛よ、お前は妾がお前の内にまくたねを枯らすことが出來るなら枯らして御覽。さあ、今、種を、淋しい種をお前の内にまいて上げるよ。耐へられるなら耐へて見よ。

（硯箱をとりよせ、障子に、「萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋にあはで果つべき」と一首の和歌をかきつける）

妓王。（歌を見て、冷たく微笑み）萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草、いづれか秋にあはで果つべき。いづれか秋にあはで果つべき。佛よ、よく讀んで味つてみよ、いづれか秋にあはで果つべき。これを見て佛よ、もしお前が淋しくならなかつたならば、妾はお前に本當にまけたのだ。だが佛よ、もしお前が之を見て心の底に淋しさを植ゑつけられたら、妾はお前に負けたのではない。佛よ、妾はもうゆく、さぞ嬉しいだらうね。さぞ樂しいだらうね。いつまでも若くつて御いで。（淋しく笑ふ）

三　前と同じ室

（佛、燈火をもち、清盛に導かれて登場）

佛。このお室で御座いますか。妓王樣のいらつしたお室は、綺麗にかたづいてをりますこと。さすがに妓王樣と云はれる方だけあつておたしなみのおよろしいこと。

清盛。この室にはお前に對する妓王の呪ひが滿ちてゐる。お前はそれにかたなければならない。

佛。かちますわ。

清盛。もし勝てないやうなれば、お前は俺の寵愛を受ける資格のない女だ。お前は自ら進んで、俺の處に來た。妓王のゐることを知つて俺の處に來た。

佛。妾はたゞあなたの前で舞ひたかつたのです。妓王樣を逐ひ出して妾がこゝにゐのこらうとは思ひもまうけませんでした。もし妓王樣が妾を逐ひ返す爲にどんな手段でもおとりになるやうならば妾はさぞこゝに居心がよかつたでせう。

清盛。そんな遠慮はいらない。妓王にはたゞ力がなかつただけの話だ。妓王の心が美しいからではない。妓王には力のない卑劣さがある。あれを見よ。曲りくねつた女の嫉妬の醜さをあの歌に見よ。

佛。え、何處に。

清盛。あすこに。

佛。本當に歌がかいてありますね。本當に見事な筆のあとで御座りますこと。何とかいて御座いますのでせう。

清盛。呪ひの言葉だ。淺墓な弱蟲の呪ひの言葉だ。

佛。（そばにより讀む）萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋にあはで果つべき。あゝ。いづれか秋にあはで果つべき。

清盛。あはゝゝゝ。佛、お前にはその歌が胸にこたへるか。そんなありふれた言葉が胸にこたへるか。お前も弄ばれる爲に生れたたゞの女だね。可愛い女だね。なぜお前はだまつてゐる。なぜお前はその歌を嘲笑はない。野邊の草が秋に枯れるのは天命だ。當然のことだ。妓王はその當然なことを今朝まで知らずにゐた。お前に逢ふまで知らずにゐた。今だつて眞に知つてはゐまい。それはたゞお前のかよわい芽を呪ふための言葉に過ぎない。

佛。……

清盛。なぜお前は默つてゐる、なぜお前は默つてゐる。

佛。（清盛の胸に泣きくづれ）清盛さま。一生妾をすてないで下さいまし。一生妾をすてないで下さいまし。妓王樣の呪ひを嘲笑へるやうに妾を愛して下さいまし。

清盛。お前はあまりに弱い、あまりに弱い。

佛。たよるものが欲しくなりました。一生たよれるものがほしくなりました。

清盛。弱蟲、雨が降れば雨が降つてもいゝぢやないか、風が吹けば風が吹いてもいゝぢやないか。その時その時、お前にあふ道は開けてゆく。眞にその處にまでゆき切らない内に思

ひ切る者ばかりが不幸なのぢや。妓王だつてさうだ。妓王さへしつかりしてゐれば又芽が出る時がくるのだ。

佛。それでも妓王様は。

清盛。あれは馬鹿な見えをはる。あれは馬鹿な見切りをつける。しかしそれはあれの馬鹿な罪だ。まだ秋も來ないさきに、まだ春の眞盛りに一寸した風にふかれても枯れるやうな馬鹿な草なのだ。お前はそんな簡單な女ではないはずだ。ゆく處までゆき切つて道がとぢてもなほ道を切りひらく女なのだ。だからお前は安心してゐられるはずだ。

佛。あなたのお言葉は強くひゞきます。力が妾の内に入るやうな氣がいたします。しかし妓王様の歌は妾の胸から消えませぬ。

清盛。あはゝゝゝ、妓王はお前に勝つたか、しかしわしにはかたない。わしはこの歌をあざわらふ。（清盛、歌のかいてある障子の紙をやぶく、さうしてそれを火で焼く）かうしてお前の心からも妓王の呪ひをやきつくしたい。さうしてお前の顔を再び初めてあつた時のやうに華なものにしたい。

佛。清盛さま、妾は淋しう御座います。早くこゝを去りませう。

清盛。行かう。（二人退場）

第二幕

一　清盛の室

清盛。お前はまだ妓王のことが氣になつてゐると見えるね。

佛。はい。時がたつに從つて妓王様の呪ひの和歌が妾の心にしみ込みます。

清盛。お前は妓王に勝てないのか。

佛。妓王様のことよりも、あの歌の意味が、思ひ當る時が來さうで心細くつて仕方がありません。幸福にくらしてゐればゐる程、妾はあなたに捨てられたあとが日にはつきり浮びます。

清盛。お前は臆病ものだ。

佛。はい、妾はあなたのお世話になつてから臆病ものになりました。あなたにすがるやうになつてから臆病ものになりました。あなたがなくつては生き甲斐を感じられなくなつてから臆病者になりました。

清盛。なぜだ。

佛。妾はもう自分の力で立つてをりません。さうしてあなたは妾を何時でも遠慮なくお捨てになれる方です。誰か妾より舞のうまい美しい若い女がくればあなたは妓王様をおすてになつたやうに妾をお捨てになります。え、きつとお捨てになります。妾はその時のくるのを忘れられません。妾はもつと頼りになるもの、もつとあなたより強いものをあこがれてをります。

清盛。おれより強いものをあこがれてゐる。俺より強いものがあるか。お前は俺よりも強いものがあると思つてゐるのか。

佛。妾の申してをりますのは、人間では御座いません。死なないものです、いつまでも妾を捨てないものです、安心して妾のすがれるものです。

清盛。そんなものがあるものか。まぬけ。生れたものは死ぬのだ。

佛。さうしてさかえたものは滅びます。

清盛。默れ、佛、お前は俺を呪つてゐるのだな。

佛。いえ／＼さうぢや御座いません。妾はあなたのことが氣になりますので。

清盛。お前は坊主みたいな奴だな。よし、俺のことは安心しろ。俺は榮えぬく人間だ。俺は勝ちぬける人間だ。

佛。ですが。

清盛。黙れ、佛、お前には俺は大きすぎる。俺のことを氣にする必要はない。思ひのまゝに自らの運命をつくれる人間だ。お前のやうな意氣地なしではない。俺はすべての人の運命をつかさどつてゐるやうに自己の運命もつかさどつてゐる。俺はお前のやうにまだ來ない運命の顔を想像してこはがるやうな男ではない。

佛。清盛さま、ものの憐れを知らない清盛樣。

清盛。よし、佛、お前は妓王のことを恐れてゐるのだな。俺はお前のやうな意氣地なしは嫌ひだ。俺はもう一度お前のまへで妓王をいぢめて見ようと思ふ。

佛。およし遊ばせ。そんな罪なことはおよし遊ばせ。

清盛。黙れ。お前のやうな意氣地なしの云ふことは俺の耳には入らぬ。誰か！

腰元。（奥で）はーい。（登場）

清盛。妓王の家に使をやつて、佛がさびしくしてゐるから佛を慰めに明日こいと申してやれ。

腰元。はい。

佛。（腰元に）少しお待ち。（清盛に）清盛さま、そんな罪なことをおつしやるものではありません。妾は妓王さまに逢ひたくは御座いません。

清盛。お前が逢ひたがらなければ、なほお前に逢はしたいのだ。

佛。罪でございますわ。

清盛。罪であつてもなくつても俺は妓王をお前の前で辱めてやりたいのだ。さうしてお前の弱い心を踏みにじりたいのだ。

佛。何も妾を慰めにこいとおつしやらなくとも、たゞ、來い、久しぶりでお前の舞が見たくなつたとおつしやればいゝぢやありませんか。

清盛。それでは興がうすい。（腰元に）お前は何をぐづ／＼してゐるのだ。早く俺の云つた通りに使を出せ。ぐづ／＼してゐるとお前の爲によくないぞ。

腰元。はい。（退場）

佛。清盛さま、あんまりですわ。あんまりですわ。

清盛。お前は俺に愛されたいならば、強くならなければならない。妓王の舞ふのを笑つて見なければいけない。人の苦しむのを平氣に見てゐられないやうな人間はこの世に生きてゐる資格のない奴だ。さうしてこの俺のそばにゐる資格のない奴だ。

佛。あなたは恐ろしい方、本當に恐ろしい方。

二　妓王の家

妓女。お姉さま、お姉さまのやうに毎日々々家に許りゐて物を思つていらしつてはお身體にいけませんわ。少し何處かへお出かけになりませんか。お氣がまぎれるかも知れませんわ。

妓王。妾のことは氣にしないでおくれ。妾の身體はもうどうなつてもいゝのだから。

妓女。そんなことをおつしやつてはいけませんわ。お母さまが御心配遊ばすわ。

妓王。妾は本當に不孝ものだよ。妾はもうお母さまの御心を慰めるだけの力もないのだよ。妾は一人で黙つてゐたいのだよ。妾はもう人ごみのなかに出る氣はまるでないのだよ。妾のことは心配しないでおくれ、さうしてなるたけ妾のことは忘れてゐておくれ。

妓女。本當に佛は恩知らずですね。今にきつとひどい目にあひますわね。妾は毎日々々佛を呪つてゐますわ。

妓王。佛のことはもう云はないでおいておく

れ。名を聞いてもぞつとするから。もうすぎたことだから。それに皆妾の不つゝかからだよ。誰もうらむことはない。妾は誰にも顔を見られずに、一人ぼつちで靜かにしてゐたいのだよ。お前に許り働かして勝手なこと許り云つて、さぞ腹も立つことがあるだらうが、

妓女。そんな、そんなことをおつしやるものではありませんわ。妾はお姉さまの御かげでからやつてゐられるのですわ。人樣になんのかのと云はれるのは皆お姉さまの御かげですわ。妾は、お姉さまのやうな方の妹だと云ふことをほんとに嬉しく思つてゐますわ。

妓王。それは皆昔の話だよ。今では妾の爲にお母さまも、お前も人に笑はれるやうな目に逢はなければならないのだよ。妾は本當にすまないと思つてゐるよ。

妓女。そんなことをおつしやつてはいや。誰も笑ふ人はありませんわ。あつてもお姉さまのためならばお母さまも妾も本望ですわ。

(母、退場)

母。妓王、氣分はどうだい。

妓王。大層よろしいやうで御座います。

母。さうかい、それはいゝね。

妓王。お母さま、妓女をつれて散歩でも遊ばしていらつしやつたらどう? 今日は大層天氣がよろしう御座いますから。

妓女。お姉さまも御一緒に。

妓王。妾は今日一寸用があるから。

母。お前ね。

妓王。はい。

母。怒つてはいけないよ。今ね。

妓王。はい。

母。今ね、清盛さまからお使があつてね。

妓王。え、清盛さまからお使が。何と云つてお使が御座いました。

妓女。お姉さまに歸つてくれと云ふお使?

妓王。そんなわけはないよ。何と云つて參りました。何か不愉快なことでも申して參りましたか。

母。あゝ、清盛さまから明日お前に來てくれ、さうして佛が退屈をしてゐるから今樣をうたつたり舞を舞つたりして慰めてやつてくれと云ふお使だつた。妾は腹が立つて、くやしくつて仕方がないのだ。使はまつてゐるのだ。何と云つて返事をして上げよう。

妓王。そんなことを申して來ましたか。妾は參りませぬ。佛の慰めなどに誰が參りませう。參れぬとさう申して使をおかへしなすつて下さい。

妓女。本當に誰がそんなことを云はれて行くものですか、行かれるものですか。あんまり馬鹿にしてをりますわ。お母さま、きつぱり斷つておやりなさい。

母。妾もきつぱり斷る方がいゝと思つてゐるのだよ。佛の慰みに來いとおつしやるのは餘りにひどいおさげすみだからね。

妓王。妾達はもう清盛さまから、扶持も何も戴いてはゐませんわ。今まで何の音さたもないのに、そんな蟲のいゝことをおつしやつて來たつて誰が參りますものですか。あんまり蟲がよすぎますわ。

妓女。妾が斷つて來ますわ。

母。いゝよ、妾が斷つてくる。(母、退場)

妓女。お姉さま、口惜しう御座いますわね。

妓王。行くものか、行くものか、誰が行くものか。

妓女。あんまりですわ。あんまりですわ。ね、お姉さま。

三　清盛の室

清盛。まだ使は歸つて來ないか。

佛。はい。

清盛。妓王はくるとお前は思ふか。

佛。いらつしやりはなさりますまい。

清盛。來る！　もし來ないやうならばどうしても來さして見せる！

佛。それが殿樣の惡いおくせですわ。

清盛。惡くつてもよくつても俺は思つた通りのことが出來るのだ。だから思つた通りのことをしないではおかない。

（侍、登場）

清盛。使が歸つて來たか。

侍。はい、歸つて參りました。

清盛。何んと云ふ返事だつた。

侍。都合あつて參上いたすわけには參りませんとの返事で御座いました。

清盛、なに、來られないと云ふ返事だつて。そんな返事をもらつて使に行つた奴はおめ〳〵と歸つて來たのか。

侍。何と申しても承知いたしませんのださうで御座います。

清盛。承知しないと申したのか？

侍。はい。

清盛。使のものをこゝに呼べ。

侍。それでも。

清盛。苦しうない。呼べと云つたら呼べ。

侍。はい。（退場）

（まもなく使に行つた侍登場。畏まる）

清盛。どうしても來ないと申したさうだな。もう一遍之からすぐゆけ。さうしてどうしても明日來いと申せ。もし來ない時にはこつちにも覺悟があるとさう申せ。

侍。はつ。（平伏す）

佛。殿樣、そんな御無理なことを。

清盛。無理ではない。よし無理であつてもかまはない。死を怖れる人間は俺の云ふことをどうあつても聞かなければならないはずだ。親子兄弟を愛するものはどうしても俺の云ふことを聞かなければならないはずだ。この一番大事なことを知らぬものには俺は容赦はない。早く行け。

侍。はつ。（平伏して退場）

佛。殿樣、あなたは何處まで無理をお通しになるおつもりなの？

清盛。死ぬまで。

佛。あなたでも死なければなりませんわね。

清盛。あたりまへさ。俺だつて死ぬ。それが何になる。俺は死ぬことを恐れてはしない。

佛。あなたがあまり無理なことを遊ばすと、あとの方がお困りになりますわ。

清盛。あとの奴のことはあとの奴が勝手にする。俺はそんな奴のことをかまつてはゐられない。

佛。妓王樣はさぞ妾をおうらみになるでせうね。

清盛。何百、何千の妓王がうらまうとそれが何んだ。世の中に俺程うらまれてゐるものはない。意氣地のない奴は人をうらむのだ。大きい人は人からうらまれるものだ。俺は死ぬ者の内で一番大きい。だから人にうらまれる。お前は死ぬ者の内で一番美しい。だからお前も人からうらまれるのを平氣にならなければならない。

佛。あなたのおつしやることは妾にはわかりません。

清盛。あはゝゝゝ。お前は可愛い、臆病ものだな。

四　妓王の家

妓女。お姉さま、さぞ清盛さまはお怒りになつていらつしやるでせうね。

妓王。それはお怒りになるだらうよ。けれどいくらお怒りになつたつて、佛の惠みにはなり

たくないからね。その位なら死んでしまふ方がいゝ。

妓女。本當にさうですとも。いくらお怒りになつたつてかまひはしませんわ。

妓王。けれど又使をおよこしになるかも知れないね。

妓女。それでもきつぱり斷つたとお母さまはおつしやつていらつしやいましたわ。

妓王。何しろ相手が清盛樣だからね、思つたことは何處までも通さなければ辛抱が出來ない程增長していらつしやるからね。

妓女。本當に清盛樣程、我儘のしたい放だいをなさる方はありませんわね。あれで一生を通すことが出來たら餘り冥加がよすぎますわね。

妓王。本當にあんまり運のよすぎる方だから、遠くで見てゐるとあぶないやうな氣もするけれど、そばによつて見るとさすがに運のいゝ方だけのことはあるやうな氣もする。何しろ恐ろしく强い所のある方だからね。神樣も一寸手のつけやうのない方だからね。

妓女。本當に清盛樣には神樣まで御遠慮していらつしやるやうね。もし今度又使が來て是非來いとおつしやつたらどうして。

妓王。矢張りどうしても上れませんと云ふより仕方がない。それで都から逐ひ出されようが、殺されようが、佛の慰みになるよりはいゝからね。

妓女。まさかお殺しにもなりますまい。

妓王。それがあてになればいゝがね。

妓女。もしものことがあつたら妾も生きてはゐませんわ。

妓王。何を云ふのです。妾こそ生きて甲斐のない身體だけれど、お前は何も世をはかなむには當らないぢやないか。そんなに妾を思つてくれると反つて妾が心苦しい。どうか妾を一人にさしておくれ。

妓女。妾はお姉さまお一人をこゝにおくのが心配ですわ。

妓王。妾の見張りなんかしなくつても大丈夫だよ。妾は死にはしないよ。お母さまのお嘆きになるのを思つただけでも妾は生きてゐるよ。安心するがいゝ。少し默つて妾を一人にさしておくれ。いゝだらう。

妓女。はい。それなら一寸用をして來ますわ。

妓王。それがいゝよ。

（妓女、退場）

妓王。佛、よくも、よくも、お前は清盛樣をそそのかして妾をなぐさまうとするね。妾はこの一年許りに五六年齡をとつて醜くなつた。お前はそれを知つてゐるのだらう。さうして清盛樣が時々妾のことを思つて下さるので、今の妾を見せて、妾に恥をかゝせ、清盛樣に今更のやうに妾のつまらぬものだと云ふことを見せたいと思つてゐるのだらう。さうして今更にお前の美しいのを清盛樣に知らせようと思つてゐるのだらう。佛、お前の考へはあたつてゐる。妾は醜い、さうしてお前はさぞ美しくなつたであらう。だが妾はお前の慰みものにはならない。妾は死んでもお前の慰みにはならない、ひき立て役にはならない。さうして妾はお前をのろつてゐる。お前の心は蛇であらうが、鬼であらうが、お前の美はやがて衰へる。さうしてお前より美しい女はうまれる。その時清盛樣はお前を捨てるのに何の心殘りがあらう。美しい女よ、生れよ。美しい舞の上手よ、顯はれよ。早く早く顯はれよ、さうして清盛樣の寵愛を佛の手より奪ひとれ。本當に、本當にさう云ふ時がくる。佛よ、いづれか秋にあはで果つべき。佛よ、少しは妾の心を思ひやつてもい

いはずだよ。（少し默し）妾はもういやだ。生きてゐるのがいやだ。何も考へるのがいやだ。妾はねよう、妾はねよう。（寝床を敷き、横になる）

（母、妓女登場）

母。妓王。

妓女。お姉さま。

妓王。なんです。

妓女。又使が参りました。

妓王。（起き上りつゝ）なに又使が來たと？ お前はなぜ妾にそれを默つてゐないのだ。さうしてなぜ斷つて歸さなかつたのだ。

妓女。お姉さま！（泣く）

妓王。お母さま、どうしたのです。

母。清盛様が非常な御立腹で、今度、もう一度斷られたら、こつちにもすることがあるとのお話ださうだ。使に來たものは御承知下さるまではどうしても歸りませんと云つてゐるよ。

妓王。お母さま、御心配には及びません。妾の首を使のものにおわたし下さい。

母。なにを云ふのです。

妓王。妾の首を切つて使にわたして上げてくれと申したのです。

妓女。お姉さま、そんなことをおつしやつてはいけません。お母さまや妾のことを思つて下さらなければいけません。

妓王。妾はそれを思つてゐるのだよ。だからこの場合妾が死ななければならないのだよ。妾が死ねばいくら清盛さまでもまさか、それ以上どうなさらうともおぼしめすまい。妾はもうどうせこの世に生きてゐても面白くはない。妾は生きて恥をかくよりは死にたい。死にたい。

妓女。お姉さま、御尤です、御尤です。妾もおともしますわ。

妓王。お前は何を云ふのだい。妾が死んだらなほさら、お前は生きてゐなければなりませんよ。お母さまのお世話を誰がするのだい。

母。もしお前達が死ねば妾も死ぬだけの話だよ。だけどお前、お前は清盛さまの云ふことを聞いてはくれないか。誰だとてお前を笑ふものはないよ。お前を憐れむ許りだよ。清盛さまのなされやうは人も知つてゐる、お前に罪がなくつてお暇がでたことは誰も知つてゐる。かげでは誰でもお前を賞めて佛のしかたを憎んでゐる。お前は苦しいだらう。さぞ苦しいだらう、だがお前は行つてくれないか。心ある人は皆お前の味方だよ。

妓王。……

母。妾は自分の生命が惜しいから云ふのではない。だけどお前に死なれるのはこの上なくつらいよ。お前をつらい目に逢はせたくはないけれども、妾を可哀さうだと思つて、承知をして上げてはくれまいか。お前はまだ白拍子だ。白拍子の間はどんな處へでも呼ばれたらゆかなければならないのだよ。まして相手が清盛様だ、今の世に清盛様のおぼしめしにそむくのは神様にそむくよりも恐ろしいよ。ね、お前もつらいだらうが、母がかうやつて手を合せて頼むから行つてはくれないか。

妓王。（泣きながら）はい、参ります。妾のふつゝかからいろ／＼御心配をかけました。参ります。

母。妓女や、お前もその時一緒に行つて上げておくれ。

妓女。はい、お姉さまさへ御承知下されば、お伴さして戴きますわ。

妓王。來ておくれね、來ておくれ。

母。それなら返事をしてくるよ。

妓王。少しお待ち下さい。

母。不承知かい。

妓王。いゝえ。けれど。

侍。さぞつらいだらうね。

妓王。お母さま、口惜しう御座います。（泣き伏す）

（妓女も母も泣く）

五　清盛の室

（初め清盛一人）

清盛。妓王はもう來さうなものだ。あいつの今日の樣を見るのは久しぶりの慰みだ。女にとつて嫉妬程恐ろしいものはない。俺はこれを妓王の心の内に見る。燃え上る炎を見る。俺には何でも極端でないと面白くない。なまやさしいことは俺にとつては刺戟にはならない。今日の佛の顏も亦見ものだ。あいつの心も今日はなまやさしい心ではない。俺は今日二人の心がいかにもつれあふかを心の限り強く味ひたいと思つてゐる。

（侍、登場）

侍。妓王樣がおいでになりました。

清盛。一人で來たか。

侍。いえ、妹樣と外の白拍子二人と四人でおいでになりました。

清盛。いつもの所に案内しておいたか。

侍。はい。

清盛。暫らくまたしておけ。見物の人々は皆見えたらうな。

侍。はい。皆樣お見えになりました。

清盛。席はちやんととつておいたらうな。

侍。はい。

清盛。よし。

（侍、退場）

清盛。あはゝゝ。とうとう來た。之から見ものだ。生血の出るやうな慰みは之から始まるのだ。佛の足音がする。そろそろ始まり出した。

（佛、登場）

佛。清盛さま、お願ひで御座います。

清盛。なんだ。

佛。外ならぬ妓王樣のことですからどうかこゝの室にお通しなさつて下さいまし。

清盛。いや、妓王にはあの室でいゝのだ。俺は今日妓王を辱めに呼んだのだ。

佛。どうしても妓王樣をこの室にお通し下さいまし。妾は昨晩はろくに眠れませんでした。明日からどうしたら妓王樣のお心を慰めることが出來るかとそれ許り考へてをりました。妾は出來るだけ妓王樣の御心をいためないやうにしたいと思ひました。妾はそのことを殿樣にお願ひしたいと思つてをりました。けれど殿樣は今日は少しも御相談がなく御自分御一人でいろいろの事をおきめになりました。妾は[illegible]になつてをりましたけれどあんな處で妓王樣にお逢ひになるとは思ひませんでした。妓王樣は妾が初めて上つた時、こゝにお通し下さいました。妾もこゝへお通しして御心やすくお話をしたいと思つてをりました。どうか、この願ひを叶へて下さいまし。

清盛。いくら何と云つても今さらかへられない。かへられてもかへようとは思はない。今日は俺は妓王の泣き顏を見せてやりたいと思つて多くの人をよんでおいた。お前の云ふことは取り上げることは出來ない。

佛。それならば妾にお暇下さいまし。妾は心苦しくつて仕方がありません。

清盛。意氣地がないにも程がある。今さらそんなことを云つてゐるやうで何になる。さあ一緒に行かう。さうして久しぶりに妓王の今樣でも聞かう。

佛。どうしても妾の云ふことは聞いては下さいませんか。

清盛。きくことは出來ない。

佛。それならば妾はお暇をいたします。

清盛。戯れ！　佛、お前はお前の身體を愛しないか、お前はたゞ一人の體を愛したいのか、お前は俺のいふ事を聞かなければならない。それが今はお前のたゞ一つの務めなのだ。さあ行かう。妓王は待つてゐるだらう。

佛。少しお待ち下さい。

（二人、退場）

六　廣間

（妓王、妓女、外に白拍子一人、腰元に席に案内される。腰元、あいさつして退場）

白拍子の一人。立派なお室で御座いますこと。

他の一人。本當に立派で御座いますね。

妓王。この室は立派な室ではないよ。妾の通される室ではないよ。妾を辱めて妾を怒らすつもりでこの室に通したのだよ。だか妾は今日どんな目にあはされても平氣でゐて見せようと思ふよ。妾は佛の思ふ通りにはならない。妾は清盛樣の思ふ通りにもならない。妾は皆が思つてゐるよりもずつと平氣な顔して皆が張合がないやうに思はしたく思つてゐるよ。それが妾の出來る唯一の復讐なのだ。いや／＼、妾にはまだ一つしようと思ふことがある。妾は清盛樣にはかてないけれども、佛には勝てるつもりだ。佛の心にはかてるつもりだ。いかに佛の心が蛇であらうか鬼であらうか、妾は佛の心にはかてるつもりだ。

妓女。お姉さま、本當に勝つて頂戴よ。立派に勝つて頂戴よ。さうして今日は皆で驚くやうに立派にふるまひませう。

妓王。本當に妾は昨日から決心してゐる。妾は人に笑はれるやうなことはしない、人の憐みになるやうなことはしない。妾は苦しい。けれど妾はかつ。きつとかつ。

（清盛、佛と登場、つゞいて平家の一門の公卿、殿上人、諸大夫、侍、登場、設けの座につく。妓王等平伏してゐる、佛はうつむいてゐる）

清盛。妓王、暫らくぶりだな。妓女も來たか。外のものも御苦勞であつた。

妓王等。はつ。

妓王。お忘れもなくお招き下さいまして難有く存じました。

清盛。何か用があつたさうだが、佛が是非今日お前に逢ひたい、お前の今樣が聞きたい、お前の舞が見たいといふので無理にも來てもらつたのだ。佛はお前が來てくれたので嬉しく思つてゐる。佛、何かあいさつをしてやれ。

佛。妓王樣、おなつかしう御座いました。

妓王。妾も……

清盛。お前は時々佛を慰めに來てくれ。佛はお前にあつていろ／＼話したい事があるさうだ。

妓王。…………

清盛。早速だが今樣でも聞かしてもらはうか。

妓王。はい。（ゐずまひをなほし唄ふ）佛もむかしは凡夫なり、我等も遂には佛なり、いづれも佛性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ（二度くり返す、二度目は少し涙聲になる。人々の内に涙をすゝる者もある。妓女は耐へかねてうつむく。佛は遂に泣き伏す）

清盛。妓王、お前は淺薄な奴だな、つまらぬことをいふもので佛の機嫌を損ねてしまつた。今日は之でやめにしよう。その内又改めて呼ぶ、今度は佛の機嫌を損ねないやうにいたせ。退れ。

妓王。はい。（平伏する）

清盛。皆のもの、御苦勞だつた。

妓女等三人。はつ。（平伏する）

清盛。誰か案内してやれ。

腰元。はい。

（腰元に案内されて妓王等退場）

清盛。皆のもの、苦しうない、席を立て。

皆。はつ。(清盛と佛をおいて皆退場)

清盛。佛、お前はなぜ泣いた。お前はもつと強くならなければならない。お前のおかげで折角の今日の餘興も流れてしまつた。

(清盛退場。佛泣き崩れてゐる)

七 妓王の家

母。まだ妓王は歸つて來ないかい。

女中。はい、そんなに早くはお歸りになりますまい。

母。さうだらへ、ばとうたね。妾、氣になつて仕方がないのでさつきから何遍角まで行つたか知れないよ。

女中。一寸角まで見にまゐりませうか。

母。あゝ、氣の毒だが見て來ておくれ。

女中。はい。(退場)

母。短氣を起してくれなければいゝが。あの子は勝ち氣で苦勞を知らないから、短氣でも起しはしないかとそれ許りが氣になる。清盛さまも清盛さまだし、佛も佛だけれども、どうせ世の中はさううまくゆくわけはないのだから、あきらめてさへくれればいゝのだけれども、あの子は小さい時から一徹者で、人に負けるのが嫌ひだから短氣を起しはしないかとそれ許りが氣になつて仕方がない。それはあの子の怒るのも無理はない。だが今はそんなことを云つてゐられる世の中でもなければ、妾達はそんなことを云つてゐられる身分でもないのだ。今の世に生れて殺されなければ仕合せとするより仕方がない。恥かしいとか、戀しいとか、口惜しいとか云つてゐる暇はないのだ。だがあの子は可哀さうだ、無理もない。さぞ口惜しいだらう。だがそのつらい所も耐へなければならないのだ。その日その日の御飯さへどうかしてでも戴ければ妾はそれで仕合せだと思つてゐる。あの子もそれで我慢してくれればいゝのだが。どうも氣になる。

(女中登場)

母。見えなかつたかい。

女中。はい。

母。どうしたのだらうね。あの角まで行つて見えなければ暫らくは歸つて來まい。妾はかうやつて半日も娘の歸るのを待たされたら痩せてしまふ。だが四人一緒に行つたのだからもしものことがあつたら何とか云つてくるだらう、まさか妾に知らせるのを恐れて默つてはしまい。

女中。そんな御心配はございません。きつともうぢきにお歸りになります。

母。氣の毒だけれどももう一度角まで行つて見て來てはくれまいか。ぢつとしてゐられないから。

女中。はい。(女中退場)

母。本當にどうしたのだらう。もしものことがなければいゝが。何んだか胸さわぎがして仕方がない。まさか蟲の知らせではあるまい。何んだか氣にかゝる。妾も見に行かうか知らん。矢張りよさう。どうも氣になつていけない。

(女中あわてゝ登場)

母。見えたかい。

女中。はつきりは申せませんけれど、どうもさうとしか思へない車が見えましてございます、きつともうぢきお歸りになります。車を急がせてくるやうでしたから早速お知らせにあがりました。

母。さうか。それはどうも御苦勞だつた。

(母と女中退場、まもなく車の音聞え、暫らくして、妓王妓女、沈默して登場、母同じく沈默して登場)

母。さぞくたびれたらう。よく歸つて來てくれ

た。妾は氣が氣でなかつた。ほんとによく歸つて來てくれた。妾はこんな嬉しいことはない。

妓王。……

妓女。……

母。よく我慢をしてくれた、よく短氣をおこさずにゐてくれた。妾はそれ許り心配してゐた。

（三人沈默、やゝあつて）

母。（妓女に小聲で）首尾はどうだつたい。

妓女。お母さま、口惜しう御座いました。

母。それはさうだらう。妓王は今樣をうたつたのかい。

妓女。はい、お姉さまはお氣の毒でした。皆聞いてゐる人はお姉さまに同情して涙ぐんでいらつしやいました。たゞ淸盛さまだけは微笑んで聞いていらつしやいました。

母。（小聲で）佛は。

妓女。佛はお姉さまが少しあてつけの今樣を歌はれたので、くやしがつて泣きくづれました。それで座が白けて、妾達にすぐお暇が出たのです。

母。佛はくやしがつて泣いたのか。

妓女。はい、聲を出して泣きました。

母。淸盛さまは怒つていらつしやらなかつたかい。

妓女。はい、別に。けれどその内に又佛をなぐさめに來いとおつしやいました。

母。そんなことをおつしやつたかい。

妓女。佛は大勢の前でお姉さまをなぶりものにしようと思つたらしいのです。けれど皆はお姉さまの方に同情したので口惜しかつたのです。今にきつと又お姉さまを呼んで今日の仕返しに慰まうとするにちがひありません。澤山人がゐるので殊勝らしく見せかけて、お姉さまを見て、おなつかしう御座いますなぞと申しました。白ばくれてゐるにも程があります。妾は腹が立つて仕方がありませんでした。

母。無理はない。妾も聞いて腹が立つよ。たゞ仕方がない。この世に生れた以上は何よりも辛抱が大事だ。あきらめるのが大事だ。

妓王。お母さま、お母さまが辛抱してくれ、あきらめてくれとおつしやるので、妾はならぬ堪忍を無理にしたのです。もうこの上堪忍することは妾の力には及びません。何にももうおつしやるのはよして下さい。妾をどうか一人にさして下さい。妾はもう何にも申したくもありません。何にも聞きたくありません。

母。無理はない、無理はない。それならば妾はあちらに行きませう。今日は何にも考へずに靜かにしておくれ、（退場）

妓王。（妓女に）お前もあつちに行つておいで。妾を一人にさしておくれ。

妓女。はい（退場）

妓王。妾はあなた方二人の爲に惜しくない生命を今日までながらへました。そのおかげで今日のやうな日に逢ひました。妾はあなた方二人の爲に辛抱するだけのことは辛抱いたしました。恥をかくだけのことは恥をかきました。妾は出來るだけのことをあなた方二人の爲にいたしました。妾には之以上の力はありません。どうか妾に先立つ罪を許して下さいまし。お嘆きになることはわかつてをりますけれど妾は死にます。妾はもう淸盛樣や、佛の慰みにはなりません。生きてゐればこそこんな恥もかきます、出來ない堪忍もいたします、耐へられない辱しめにあはされます。妾はもう生きる氣はありません。人に顏を見られる氣もありません。どうか先立つ罪をお許し下さい。さうして妾のことは病氣

で死んだのだと思つておあきらめ下さい。」妓王は剃刀を出し、それをながめる　たゞ一つきで妾はいやな世の中から去ることが出來るのだ。辛い世の中から逃れることが出來るのだ。妾が死ねば誰も妾を恥かしめることも出來ないのだ。（ふと氣をかへて）さうだ、こゝで死ぬのはやめよう、何處か人の目につかない處に行かう。

（妓女登場）

妓王。何か用かい。

妓女。いゝえ、

妓王。一寸こゝへおいで、お前に、一生の御願ひがあるのだよ。きいてくれるだらうね。

妓女。はい、妾に出來ることなら。

妓王。出來ないことでもきいてもらはなければならないのだよ。

妓女。早く云つて頂戴な。なんだか氣になりますわ。

妓王。お母さまに默つてゐるのだよ。

妓女。はい。

妓王。お前は妾に同情してくれるだらうね。

妓女。はい。

妓王。妾はもうこゝに居るのがいやになつたのだよ。だから遠く〳〵行かうかと思つてゐるのだよ。淸盛さまのお力の及ばない處に行かうかと思つてゐるのだよ。

妓女。お姉さまがいらつしやれば妾もゆきますわ。

妓王。そんな勝手なことを云ふものではない。妾がゐなくなればお母さまのことはお前がお世話するより仕方がないぢやないか。誰もほかに世話するものがないぢやないか。妾はお前がこゝにゐてくれればこそ安心して遠くに行かれるのだ。また逢へないことはない。五六年もたてば妾は歸つてくるだらう。だからお前はこゝにゐておくれ、妾の一生のお願ひだからね。

妓女。いけません、いけません。お姉さまはうそをついていらつしやるのですね。お姉さまの心はわかつてをりますわ。妾もお姉さまが生きていらつしやらなければ妾も生きてはをりませんわ。

妓王。妾は何も死ぬとは云はないよ。

妓女。おつしやらなくつたつてわかつてをりますわ。妾は妹ですわ。お姉さんのお心はわかつてをりますわ。遠くに行くならば何もお姉さま一人いらつしやらなくつたつていゝでしよ。本當に思ひとゞまつて頂戴ね。

妓王。妓女、妾はお前をうらむよ。お前は妾がもつと生きてゐられると思ふのかい。もつと妾が生きてゐて恥をかゝされるのを見てゐたいのかい。お前はあんまりだよ。お前は妾の心を知つてゐながら、妾を苦しめようと思つてゐるのだよ。なぜ妾を樂に死なしてはくれないのだい。

妓女。お姉さま！（泣いて抱きつく）お姉さま、お姉さま、お姉さま。

妓王。さ、泣かないでおくれ。お母さまのお氣がつかない内に妾をのがしておくれ。それが一番有難いお前の心ざしだよ。

妓女。そんなことは出來ません。出來ません。お母さま、お母さま。お姉さまが。

妓王。（默らさうとして）何を云ふのだい、お默り。默らないと承知しないよ。もしお母さまに知れたら大變ぢやないか。

妓女。お母さま、お母さま。早く來て頂戴、早く來て頂戴。

母。何をそんなにさう〳〵しく云ふのだい。（登場しながら）

妓女。それ所ではありません、お姉さまは自害なさるおつもりなのです。

妓王。うそです、うそです。お母さま、うそで

す。

母。うそならばうそでいゝが、お前が死ねば妹も死ぬだらう。妾だつて生きてゐようとは思はない。お前はそのことを知つてゐるだらうね。知つてゐるのならば死にたければ死ぬがいゝ。妾達もお前が死ねば一緒に死ぬだけの話だ。

妓王。(暫らく沈默)お母さま、妾は死ぬことは思ひ切つてをります。

妓女。うそですわ、うそですわ。

妓王。その證據がみたければ見せて上げませう。さあ、御らん下さい。(黒髪をかみそりで切りとり、その髪の毛を見せる)

母。あつ。

妓女。あつ。

妓女。(暫らくして)お姉さま、お姉さま、妾も尼になります。尼になります。よく生きて下さいました。

妓王。お前は尼になる必要はないよ。尼になつてはいけないよ。

妓女。なりますなります。妾も浮世がすてたくなつてをりましたのです。

妓王。それはいけないよ。お母さまのことはどうするつもりだい。

母。なりたければなるがいゝ。妾も兼てから尼になりたいと思つてゐたのだ。妾達は尼になるのが一番いゝのだ。その代り三人一緒にゐようね。せめて三人だけは何時までも一緒に居ようね。さもなければ今の世に生きてゐることは淋しくつて仕方がない。

妓王。お母さま。

妓女。お母さま。

―幕―

第三幕

一 佛の室

(夕月がのぼる)

佛。妾はもうこゝには一日もゐられない。母が生きてゐる間は無理にも辛抱してゐた、それが又自分の心の云ひわけにもなつてゐた。だが母がなくなつてしまつた今、もうこゝには一日もゐられない。妾は淋しくつて仕方がない。清盛樣のわきにゐるのが妾にはこの上なく淋しい。あの方は妾と人間がちがふ。あの方の平氣でなさることを妾はたゞ見てゐることさへ出來ない。妾は清盛樣を嫌ひではない。それ所か好きだ。あの強いお心が妾をひきつける。けれども妾は淋しい。妾にはお傍に生きてゆかれない性質がある。妾は臆病だ。妾は弱い、妾は安心がしたい、妾は何も心配がしたくない。妾は人に恨まれるのが嫌ひだ。それにもまして妾は清盛樣にすてられる時のことが目に見えて仕方がない。妓王樣が妾の心にまいた種は芽が出た。さうして妾の心を絶えずなやまする。妾は妓王樣にあやまりたい、妓王樣にうちとけたい。妾ははりつめた氣には生きられない。妓王樣は嵯峨の奥に柴の庵をむすんでお母さまと、妓女さまとお三人で尼になつていらつしやるさうだ。清盛樣はそれを聞いてお笑ひになつた。弱いもののゆく處だ、死なぬさきから死を恐れる奴のゆく處だとおつしやつたが、妾はそれを聞いた時涙が出た。すみません、すみませんと心で云つた。清盛樣がもう少しお優しい方だつたら、さうして妓王樣をもう少しいたはつて下さるやうな方だつたら、妾はかうも心を惱ましはしなかつたらう。さうして妓王樣も尼にまではならずにすまされたらう。(言葉の調子が少し急になる)妾は本當は清盛さまの心を知つてゐる。恐らく妾許りが清盛樣の心を知つてゐる。清盛樣は強い方だ。さうに

ちがひない。だが、腹の底まで無情な方ではない。無情を装つていらつしやる方だ。優しくしていらつしては生きてゆかれないので、無情なまねをしていらつしやるのだ。頼朝様をお助けになつた優しい心を今だに時々呪つていらつしやる。俺は無理をしすぎた、俺は何處までも無理を通さなければならない。俺は誰にも愛されてはゐない。俺は誰をも恐れさせなければならない。そんなことをおつしやつたことがあつた。妓王様のことも少しはひどかつたと思つていらつしやるらしい。だが、「さう思ふことが腹がおたちになるらしい。のがれられる罪をもつてゐるものは罪をのがれようとする。あらへばおちる汚れは洗つておとしたくなる。だが、清盛さまの罪はのがれられない罪なのだ。洗つてもとれない、汚れなのだ。それを苦にすることは清盛様にはつらすぎるのだ。妾はさう思つてゐる。さうして妾は今の内に罪をのがれたいと思つてゐる。妾は妓王様に逢ひたい。さうして妾の心をやすめたい。妾は清盛様にお暇を戴かうと今までに何遍思つたらう。清盛様はその都度お許しがなかつた。しかし妾はもうこゝにぢつとしてはゐられない。妾はゐられる間、こゝに居た。さうして清盛様のあれた心をお慰めした。だが妾はもうこゝにはゐられない。こゝは妾には餘りに淋しい。（しのびなく）さうだ、手紙をかいて、一刻も早く。（手紙をかゝうとする。

二　清盛の室

（腰元二人入つてくる、あかりをつけ室をかたづける

腰元一。この頃の佛御前の御様子をどう思ひになつて。

腰元二。何處かおわるいのではないでせうか。

腰元一。妾はもしかしたら子供でもお出來になつたのではないかと思ひますわ。

腰元二。そんなことはないでせう。いくら清盛さまだつて御齢が御齢ですからね。

腰元一。それでもこの頃の御様子では……

腰元二。しつ、殿様が御歸りになつた。

（二人あわてゝ、あかりを持つて迎へにゆく。間もなく、清盛にあかりを見せつゝ入つてくる。暫らくして）

清盛。佛はどうした。

腰元一。今朝から御氣分がわるいとおつしやつて、御室にとぢこもつてはかりいらつしやいます。

清盛。呼べ。

腰元一。はい。（退場。暫らくして）

清盛。お前はこの頃の佛の様子をどう思ふ。

腰元二。何處かお身體がおわるいのではないかとおあんじしてをります。

清盛。さうか。俺は佛が本當の病氣ならばいゝがと思つてゐる。だが佛は病氣ぢやない。見てゐろ。あいつは今にきつと逃げ出すから。

腰元二。そんなことは御座りますまい。

清盛。あいつは俺のそばにゐるのがいやになつたのだ。

腰元一。そんなことが。

清盛。噓だと思ふなら見てゐろ。

腰元二。あんなに殿様のことを思つていらつしやる方が。

清盛。いくら思つてゐてもあいつはこゝにゐられないことがある。

腰元二。なぜで御座います。

清盛。あいつは後生を願つてゐる。この俺よりも頼りになるものを求めてゐる。（間）佛はまだ見えないか。もしかしたら？　そんなことはあるまい。

腰元二。見て參りませうか。

清盛。よし。今にわかるだらう。

腰元二。どう遊ばしたのでせう。

清盛。別に今朝から變つた樣子はなかつたか。

腰元二。はい、別に。(間)ですが一寸氣にかかることもないことは御座いません。

清盛。なんだ。

腰元二。今朝お目にかゝりました時、隨分お前にもお世話になつたとおつしやつてお頭にさしていらつしやつた簪を戴きました。その上へんなことをおつしやいました。

清盛。なんと云つた。

腰元二。この頃は心細くつて仕方がない、今にも病氣になつて死にさうな氣がする、もしものことがあつたら、妾の今迄にお前にしたいろいろの罪を許してくれて、妾の後生を祈つておくれ、とおつしやいました。その時、涙ぐんでいらつしやいました。そんなお心細い事をおつしやるものではありません、貴方程お仕合せな方はないでは御座いませんかと申しましたら、仕合せすぎるだけ末恐ろしい氣もするのだよ、だがそんなことはないだらうね、とおつしやいました、さうして淋しくお笑ひになりました。

清盛。さうか。

腰元二。もしものことが御座いましたら。

清盛。そんなこともあるまい。それにしてもあまり遲い。(腰元一、顏色をかへて登場)

腰元一。殿樣、大變でございます。佛御前が何處にもお見えになりません。

清盛。よく室を搜して來い。置手紙でも何處かに入れてあるだらう。

腰元一。もしものことがありましたら。

清盛。大丈夫、死にはしまい。きつと妓王の處へでも行つたのだらう。二人で室を搜して來い。

腰元二人。はい。

(この時、一人の腰元、登場、腰元一にささやき、一通の手紙をわたし、退場)

腰元一。殿樣お手紙が御座いましたさうで御座います。

清盛。さうか。(手紙をとり讀む)俺の思つた通り、妓王の處へ行つた。尼になつて。

腰元二人。尼に?

清盛。さうだ。驚くことはない。俺の思つた通りだ。侍をよべ。

腰元二。はい。(退場)

腰元一。本當に佛御前はどう遊ばしたので御座いませう。氣でもお狂ひになつたので御座いませうか。

清盛。默れ。(沈默)

(侍、腰元二と登場、平伏する)

清盛。佛は嵯峨の妓王の處へ逃げた、すぐつかまへて來い。輿を持つて。

侍。はつ。(退場)

清盛。少し。(すぐ侍を呼び戻す)

腰元一。はい。(退場)

(侍、登場、腰元一も)

清盛。つかまへにいつて歸るには及ばない。佛のあとをおつて佛におひついて俺は生きた佛にはまだ用はあるが、死んだ佛には用はない、許してやるから安心して成佛しろ、佛は運のいゝ奴だ、から俺が云つたと佛につたへろ。さうして嵯峨の妓王の處まで守護してやれ。もしものことがあつたら、お前の命はないぞ。

侍。はつ。

清盛。さうして天下に傳へよ。もし佛に指をさしたものがあつたら、逆磔にするぞ。俺が云つたと。佛にたいしての俺の佛心は他の人間に對しては惡魔にでもなるであらう。俺は齢をとつたので情け深くなつたと思ふはまちがひだぞ。よし、早く行け。

侍。はつ。(退場)

清盛、俺は之からどうしたらいゝのだ。俺の可愛い人形がなくなれば、俺は又血なまぐさい玩具でもさがさうか。佛は俺を恐れても、俺は俺を恐れはしない。早く退れ。俺のいふことを聞かないと俺の刃は血にかわくぞ。

（腰元、退場）

清盛。あはゝゝ。皆のものは俺を恐れてゐる。だが俺は俺を恐れない。俺の未來も、よし恐れても佛のやうには恐れない。その時は鬼神のやうになつてやる。

三　嵯峨の奥の柴の庵

（月夜。柴の庵で佛、妓王、妓女、既に尼となつてゐる。忍びの姿で佛、花道に現はれる。つゞいて侍、息をきつて現はれる）

侍。佛御前。

（佛おどろきながらそれをかくして聞かないふりに行かうとする）

侍。佛御前。清盛さまのお使で御座います。

（佛おどろく、けれどなほ聞かないふりをする）

侍。佛御前、御心配には及びません。清盛さまからお許しが出ました。さうして御安心なさるやうにことづけてくれとのお言葉で御座いました。

佛。（立ちどまり、ふりむき）いゝえ、あなたでしたか。さうしてそれは本當で御座いますか。

侍。本當で御座います。清盛さまは初め貴女様を召取つてつれてこいとおつしやいました。それで私が貴女のあとを追はうとしましたら、お使が又御座いまして、もう一度お召しで御前へまゐりましたら、生きた佛にはまだ用があるが、死んだ佛には用はない、許してやるから安心して成佛しろ、佛は運のいゝ奴だとおつしやいました。さうして貴女様を守護してゆけとおつしやいました。もしものことがあつたらお前の命はないぞとおつしやいました。

佛。えつ。それは本當で御座いますか。

侍。本當で御座います。

佛。勿體ない。そんなにまで妾のことを思つて下さるのですか。妾はお傍に何時までもゐたく思ひましたが、弱い妾の心がそれを許してくれませんでした。どうか、妾が清盛様の御運の爲に、後生の爲に念佛をいたすことをお許し下さいとおつしやつて下さいまし。清盛さまは妾の心は殘りなく御存知で御座いませう。まだ心のこりなことは澤山御座りますが、この世には最早望みも御座いません。皆様にくれぐれもよろしくおつしやつて下さいまし。どうか妾のことをわるく思はないでくれと申して下さいまし。本當に皆様に失禮な我儘なこと計りいたしました。

侍。さうおつたへいたしませう。

佛。（紙包を侍にわたし）それならば之を、清盛さまに。

侍。（受けとり）髪の毛では御座いませんか。

佛。えゝ。妾の毛で御座います。

侍。貴女様も。

佛。お驚きになるには及びません。どうかそれをお笑ひ草におとゞけ下さいまし。それならば之で、お役目御苦勞で御座いました。皆様にどうぞよろしく。さうして清盛さまにも。

（佛は涙をかくして静かに會釋し、あとも見ずに妓王等の庵の方にゆく。侍、あとを見送る。家の内の三人、念佛をはつたりやめる）

妓女。お姉さま、いゝ月で御座いますこと。

妓王。本當にいゝ月だ。お前は淋しくはないか。

妓女。いゝえ、ちつとも。

妓王。妾は時々淋しいよ。だが念佛をおとなへすると淋しさも忘れられる。妾はこの頃どうかすると佛のことを思ひ出すよ。

妓女。佛のことを。

妓王。だけども以前程憎いと許りは思はない。もう昔のことは皆夢だ。本當に靜かで淋しい、だが何處か暗い今の心持では佛のことも憎くばかりは思へない。妾が佛だつたら、矢張り佛と同じことをしたらうと思ふよ。佛に罪はない。

妓女。そんなら清盛さまに？

妓王。清盛さまにも罪はない。誰にも罪はない。迷ひがあるばかりだ。清盛さまは一番迷ひの烈しい方だ。あの方のそばにゐると時時、恐ろしいことがある。夜半なぞに惡夢に魘はれになると、何とも云へないお苦しみやうをなさるのだ。あれを見ては清盛さまも憎くは思へない。あんなに苦しい夢を御らんになる方も少ないだらう。外の人ならあんな夢を見る前に氣絶してしまふだらう。

妓女。どんな夢を御らんになるの。

妓王。或時などは骸骨許りある野原をお歩きになつてゐると、その內に目立つて大きいのが「平家の滅亡近きにあり」と云ふかと思ふとその骸骨がのこらず一度に笑ふのださうだ。清盛さまはその時どうなさると思ふ。

妓女。わかりませんわ。お怒鳴りになるの。

妓王。さうではない。何とも云へない聲で一緒にお笑ひになるのだ。お身體中脂汗をおかきになりながら。

妓女。まあ。

妓王。妾はその時その話を伺つてお強い方だと思つてゐた。今思ふとお氣の毒な方のやうに思はれる。

妓女。今でもおうなされになるでせうか。

妓王。なるだらうよ。殆んど毎晩だからね。なれない人はおどろくよ。

妓女。さうで御座いませうね。

妓王。お茶を入れて、お母さんにお上げ。

母。妾はいゝよ。

妓王。そんなことをおつしやらないで、皆でお茶でものんで月でも見て何か面白いお話でもいたしませう。なんだか昔のことを思ひ出しましたら、淋しい氣がして來ましたから。

（妓女立つて、お茶をたてる。佛、竹の編戸をほと〳〵と打ちたゝく）

妓王。（おどろき、きゝ耳を立てる。小聲で）誰か戸をたゝくやうですね。

妓女。（少し奧で）本當に。

母。風だよ。今時分誰もくる人はないよ。

妓王。いえ、たしかに戸をたゝく音がいたします。一寸見て來ませう。

母。およし。もしものことがあるといけないから。

妓王。しきりに戸をたゝく。

妓女。又狸のいたづらかも知れませんわ。

佛（小聲で）おたのみ申します　おたのみ申します。

妓女。女のやうですわ。若い。

妓王。さうだ。妾があけにゆきますわ。

母。妾がゆかう。かう云ふ事は年よりの役だからね。

妓王。それでももしものことが御座いましたら。

母。大丈夫だよ。妾がゆくのが一番安心だよ。こはいことはない。惡者ならあんな編戸はこはして入るからね。それにいくら今時でも佛の道に入つてゐるものに手出しをするものはありはしないからね。どんな惡者だつて地獄に落ちるのは恐ろしいからね。

妓王。三人一緒に參りませう。

妓女。それがよろしいわ。

母。それならば二人で行かう。念佛を心にとなへることを忘れてはいけないよ。

（三人、手に手をとり、竹のあみ戸にゆく。妓王、あみ戸をあける。佛、靜かに入り、丁寧に挨拶する）

妓王。どなたです。

佛。妓王さま、佛で御座ります。

妓王。御佛前？

佛。はい。（かつぎをあけ顏を見せる）

妓王。何の御用でいらつしたのです。

佛。貴女にお目にかけたいものが御座いまして。

妓王。何をです。

佛。はい。（かつぎをとる。尼になつてゐる）

妓王。あなたが。

佛。はい。貴女のいつぞやの御言葉が思ひあたりました。

妓王。あんなお美しい髮を。

佛。貴女樣の美しい髮をお切らせした姿で御座いますもの。

母。妓王や、きたない處だけれど、奥へお通ししたらいゝだらう。

妓王。はい。それならばむさくろしい處で御座いますが、こちらへどうぞおいで下さいまし。

佛。それならば妾の罪はお許し下さいますか。

妓王。もうとつくにお許し申してをりました。今しがたもお風評申してをりました。昔のことは恥かしい夢のやうな氣がいたします。迷ひとは云ひながらよくもあんな露骨な眞似をいたしたものだと思ひました。どうぞこちらへ。

佛。難有う御座います。

（四人、家に上る。侍、それを見てもと來た道を歸る）

妓王。之が妾の母で御座ります。

佛。どうぞ昔のことをお許し下さいまし。

母。何もお許し申すことは御座りません。お心おきなく。

佛。有りがたう御座います。

（二人、會釋する）

妓王。これが妾の妹で御座ります。

佛。妓女樣でございましたか。いつぞや心ならず失禮いたしました。

妓女。妾こそ。

（二人、會釋する）

妓王。よくおいでになられましたね、こんな處へ今時分。

佛。はい、一心で參りました。

妓王。清盛樣はよくお許しで御座いましたね。

佛。はい。逃げて參りました。

妓王。逃げて。

佛。はい。死ぬ覺悟で逃げて參りました。

妓王。死ぬ覺悟で。

佛。はい。もうどうしてもぢつとしてはゐられなかつたので御座ります。なんとなく恐ろしくつて、後生が恐ろしくつて、ぢつとしてはゐられませんでした。貴女も御存知のやうに清盛樣のわきにをりますと、恐ろしいこと許りで御座ります。すべての人の憎みと呪ひが息する度に心の内にしみわたるやうな氣がいたします。さうして清盛さまは、ます〲御氣性が劇しくなる許りで御座います。母がなくなりますまではそれでも清盛さまに一心にしがみついてはをりました。ですがこの頃はしがみついてゐる手に力がなくなつて、やゝもすると一人で泣いて許りをりました。母の死に目にも逢へませんでした

妓王。それはお氣の毒なことで御座いましたね。

佛。清盛さまは妾の心を[illegible]にしやうとなされました。一緒に皆の呪ひ、憎みをあざわらへるやうな人間になさらうと遊ばしまし

た。ですが、さうなさらうと遊ばせば遊ばす程、妾の心は淋しく、悲しくなりました。何もたよるものがなくなりました。清盛様をおたよりするのが恐ろしくなりました。妾はもつと確かなものを求めました。妾は嵐の吹かない、激流にさらはれる心配のない、心のおちついた人間になりたく思ひました。その度に思ひ出すのは、貴女のことで御座いました。初めはお氣の毒に思ひましたが、今ではおうらやましく思つてをります。

妓王。何事も夢のやうな氣でをります。樂しいのですか、悲しいのですか、それもわかりませぬ。たゞ御佛におすがりして念佛を申してくらしてをります。人様にうらやまれるやうな身分でも御座いませんが、人様をおうらみ申す氣もなくなりました。たゞ後生を願つて安らかに送つてをります。

佛。それが何よりおうらやましい氣がいたします。それに妾は貴女のことが氣になつて氣になつて仕方が御座いませんでした。貴女のお許しを得ないでは氣が咎めてなりませんでした。妾は今ではたゞどなたにも恨まれるやうなことはしたくない、と思つてをります。皆様と仲よくしたいと許り思つてをります。さもないと生きてゐることは淋しくなります。

（妓女、お茶をすゝめる）

佛。（會釋し）本當に皆様おそろひでさぞお樂しみでございませう。この世の内で、こゝだけが嵐が吹かないやうな氣がいたします。

妓王。それでも時々淋しい、つらいことも御座ります。

佛。その時は皆様がさつきのやうに念佛をおつしやつて、互の後生をお祈りになるので御座いませう。さうしてつらいことがあればある程、罪が消えてゆくことを御感じになるので御座いませう。清盛さまのわきではつらいことがあればある程罪を重ねてゆくやうな氣がいたしまして、なほ末恐ろしい氣がいたします。

妓王。貴女のおつしやることはよくわかります。（間）清盛さまはさぞお怒りになつていらつしやるで御座いませう。

佛。いえ、唯今こなたに上らうとしました時清盛さまからお使が御座いました。さうして逃げたことと、尼になることを許して下さいました。

妓王。本當にお許しになつたのですか。

佛。はい、生きた佛には用があるが、死んだ佛には用はない、安心して成佛しろとおつしやつて下さいました。清盛様は無理に妾をつれ歸れば、妾が自害することを御存知なのです。

妓王。それ程迄の御決心で……

（この時、清盛、忠通の侍と他に一人の侍をつれて登場）

佛。はい。

妓女。お姉さま、人の足音が、何でせう。

妓王。本當に何でせう。

（清盛、編戸をあけて入る）

清盛。佛、清盛だ。

妓王。誰？

清盛。（皆平伏する、清盛、上座に上り）佛、途中でお前からの送りものを確かに受けとつた。しかし俺には之は用のない品だから、返してやる。（佛に投げる）それからお前をつれに歸る。俺は一度は許したが、二度とは許さない心算だ。

佛。其處にゐる清盛様は狐狸か何かが假りに姿をあらはしたので御座いませう。清盛様ともあらう方がこんな眞夜中に一人の女に逢つてこゝまでお出でになるわけは御座いませぬ。御自身の生命を何よりも大事に思召す清盛様が、この眞夜中に、この嵯峨に、もしものこと

が御座りましたらば、どう遊ばすお考へで御座います。そんなはずがあるわけはございません。

清盛。お前はそれを本心で云ふのか。この俺はしようと思ふことはどうしてもする。俺は佛をよこしてお前の尼になることを許した。しかしそれは俺の一時の出來心だ。俺の本心ではない。俺の本心はお前を失ふことを許さない。お前は清盛のお前だ、お前のお前ではない。お前は俺のお前をぬすんだのだ。俺の半身をぬすみさつたのだ。俺はその半身を人手にさらしたくなかつた。俺は自ら來た。俺について來い。

佛。參りません。

清盛。ついて來なければ俺にも考へがある。ついて來い。

佛。妾は貴方のお傍では生きてゐられません。

清盛。俺はお前が傍にゐないと生きてゐられないのだ。

佛。そんな事をおつしやることを恥かしいとはお思ひになりませんか。

清盛。俺は恥かしいと云ふことを知らない。來ないか。

佛。生きた佛は參りません。

清盛。どうしてもか。

佛。はい。

清盛。お前はこの清盛を憐れとは思はないか。

佛。貴方をあはれと思へるものはこの世には御座いません。

清盛。よく云つた。佛、俺はその言葉を聞きにこゝまで來たのか。

佛。清盛さま。（清盛のすそにすがり）お許し下さいまし。妾の身體はすべて御佛に任せました。

清盛。俺がもう少し若かつたら、或はお前ともう少し早く生れてゐたら、そうして二人の間に男の子が生れてゐたら、それは重盛よりももつと強い、この俺よりももつと強い男の子が生れてゐたらう。天下はその時泰平の御代を喜ぶことが出來たかも知れない。元來お前と俺とは一緒に生きてゆけない人間ではないのだ。たゞ時がわるいのだ。時がお前と俺を一緒になれない不具にしてしまつたのだ。俺は自分の生れた、又生まれた勢にまきこまれるより仕方がない。人々は苦しまなければならない。一間よし。佛、お前は許してやる。俺は一人で家に歸る。今後の清盛は以前の二倍も恐ろしい清盛になるかも知れない。

佛。そんなことをおつしやつてはいやでございます。

清盛。默れ、佛。それは俺達がどうすることも出來ない勢だ。妓王、お前の妹に佛をやる。有りがたく思へ、大事にしろ。

妓王。はい。

清盛。それならば歸る。又逢ふ時があるかも知れない。

佛。清盛さま。（泣きつゝ）

清盛。安心しろ。俺はたゞ俺のかれなかつたので生きた佛をつれて歸れたら、つれて歸らうと思つてこゝまで來たのだ。安心しろ。

佛。清盛さま、お願ひが一つ御座います。

清盛。なんだ。

佛。あなた樣の後生を願ふことをお許し下さい。

清盛。お前の力で願へるものなら願つて見ろ。だが俺はたのみはしない。許してやる許りだ。俺におり皆のもの、さわがして氣の毒だつた。

皆。はつ。（皆平伏する）

佛。清盛さま、御機嫌よろしく。

清盛。佛、お前も。又皆も。

皆。恐れ入ります。

清盛。あはゝゝゝ、清盛もこゝに居たいやうな氣がして來た。佛めの力は強いものだ。だが俺にはもつと強いものがある。それが俺を待つてゐる。それならば皆のもの、たつしやにしてゐろ。

皆。殿樣にも御たつしやで。

（清盛、靜かに歸る。皆、殊に佛、淚ぐみ見送る。清盛の姿が見えなくなる。樂のなき音自然に聞えだす。佛、我に返つたやうに、妓王のそばによる

佛。妓王さま。

妓王。えゝ。

佛。妾をいつまでも妹と思つて下さいまし。さうしてどうぞ御佛の御手にすがられるやうにして下さいまし。

妓王。そんなことが、妾に。

佛。御遠慮は反つてうらめしう思ひます。妾はほんとに淋しくつて、仕方がありません。

妓王。それならば及ばずながら御力になりませう。さうして御佛におすがりいたしませう。

佛。ありがたう御座います。皆樣もどうぞ。

妓王。御念佛を皆で御となへいたしませう。

皆。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。（念佛をとなへる、靜かに幕）

（一四・一〇）

疲れたら

疲れたら休み
元氣になつたら又働く
春の日

俺をやつてしまへ

俺をやつてしまへ、
自然に、
そして自然の内からまた／＼
のこ／＼出てくる
俺は。

袋はくさつたが

袋はくさつたが
中にある寶玉はます／＼かゞやきだす
眞理に生きた男。

佛陀と云ふ

佛陀と云ふ男は
偉い奴だ。
生きたまゝ眞理になつた。
もう死ねない。

花も

花も咲かないではゐられないだらう。
こんな天氣では。

其處は

其處は極樂か
いや人間のあこがれの生んだ國。

見たもの

見たものよ驚け
人間の生んだ、この美しさ。

神に愛されて

神に愛されてゐると思へる間
俺は強いぞ。

さあ俺も

さあ、俺も立ち上るかな。
まあ、もう少し坐つてゐよう。

俺は、俺は

俺は、俺はと云ふと氣がひける
春の日。

その妹

（この一篇を亡き姉に捧ぐ）

登場人物

野村廣次（盲目、二十八歳）
靜子（廣次の妹）
西島（三十三歳）
芳子（西島の妻）
高峯（二十七歳）
綾子（高峯の妻）
小間使、女中、老婆、古本屋

時

現代（冬）

第一幕

廣次の室

（廣次机の前に坐つて手さぐりで何かかいてゐる。靜子登場）

廣次。靜ちやん。

靜子。えゝ。

廣次。手紙が來たやうだね。

靜子。さうですか。一寸見て來ませう。

（靜子退場、まもなく登場）

廣次。來てゐなかつたかい。

靜子。叔母さんの處へ手紙が來ただけです。

廣次。さうかい。どうして來ないのだらう。

靜子。本當に。もういくら何んでも來さうなものですね。

廣次。つまらないので返事をよこす氣がしないのかも知れないね。

靜子。そんなことはありませんわ。旅行でもしていらつしやるのでせう。

廣次。それならいゝけど。僕にはさうは思へないよ。

靜子。きつと御らんになればおよこしになつてよ。

廣次。あの人の處にはいろ〳〵の人の處から見てくれと云つて可なり原稿がゆくらしいから、いつでもとりつぱなしにして讀まないかも知れないね。讀めば何んとか云つて來さうなものだがね。お前の手紙はいくら何んでも讀みさうなものだがね。

靜子。きつと今に來ますよ。待つてゐる内は中々來ないものですね。一寸忘れてゐる時に來るものですわね。

廣次。忘れる暇は一寸なささうだからな。

靜子。それでも今日は來ると思ひますわ。

廣次。昨日も靜ちやんはさう云つたよ。一昨日もさう云つたよ。

靜子。本當にハガキ一つでも下さればいゝのにね。

廣次。自分の價値を他人の手に任せてゐるやうな氣がして心細くつて仕方がないよ。送らなければよかつたのだ。

靜子。そんなことをおつしやつてゐたら切りがありませんわ。私はきつと今にいゝ御返事があると思ひますわ。あの方があれをよんで感心なさらないわけはないと思ひますわ。萬一感心なさらなくつたつて厚意をお持ちにならないわけはありませんわ。あの方はお兄さんの名を御存知なわけなのですもの。

廣次。それはもう忘れてゐるよ。もう四五年前

の話だからね。

靜子。それでもお兄さんの畫をあんなにお賞めになつたのですもの。さうしてお兄さんが戰爭で盲目におなりになつた時あの方一人、簡單でしたけれど惜しいことをしたとお書きになりましたわ。

廣次。あれからもう三年になる。あの人は今では他の人を賞めてゐる

靜子。それでもお兄さんのことを忘れてはいらつしやらなくつてよ。きつと。

廣次。目さへちやんとしてゐれば、俺は今時分皆を驚かすやうな畫をかいてゐるのだが、高峯なんかに負けてはゐないのだが、しかしそんな話はよさうね。俺にはお前がゐる。さうして俺は新らしい仕事を始めた。さうしてその仕事がものになることをやつと感じて來た。

靜子。さうそ、高峯さんと云へば、こなひだ綾子さんにお目にかゝりましたわ。

廣次。何處で。

靜子。通りで。赤ちやんを抱いていらつしやいましたわ。丸髷に結つていらつしやいましたわ。

廣次。高峯も一緒かい。

靜子。いゝえ。

廣次。話したかい。

靜子。はい。お兄さんのことを聞いていらつしやいましたわ。

廣次。なぜ、だまつてゐたのだい。

靜子。忘れてゐましたの。

廣次。高峯のことを云ふのを恐れたのだらう。（間）綾子さんの顏はまだこんな顏をしてゐるかい。

（鉛筆で簡單にかいた女の顏を見せる）

靜子。よく似てゐますわ。何時おかきになつたの。

廣次。今さつきだ。お前の顏もかいたよ。

靜子。よく似てゐますわ。

廣次。お前はこの時まだ十五だつた。もう隨分ちがつただらう。

靜子。それ程ちがひませんわ。

廣次。之は俺の自畫像だ。まだ目がある時だ。

靜子。どうしてかけます。

廣次。ちやんと頭にしまつてあるからね。はつきり目に見えるよ。色つやもわかる。光線の工合もわかるのだよ。だけど之以上はかけないのだ。之たつて目や口が何處についてゐるかわからない。

靜子。ちやんとかけてゐますよ。

廣次。しかし之ぢやものにならないから仕方がない。だけどもうあきらめてゐるよ。三年たつたのだからね。お前を隨分泣かせたね、俺も泣いたけど、もうさう癇癪は起らなくなつた。いくら起したつて疲れ切るより仕方がないのだからね。それに今では叔父さんの處に厄介になつてゐるのだから、さう癇癪を起すわけにもゆかないからね。しかしそれが反つてよかつたのだ。俺はもう本當に目のことはあきらめた。それに新らしい仕事が出來かけて來たからね。西島君があの作をほめてさへくれゝば、俺は嬉しいのだ。俺だつてかき足りないことは知つてゐるが、まだ初歩だからね。その内にものになることさへはつきりわかればそれでいゝのだ。俺は一人前の人間ぢやないのだから何よりも根氣が大事だからね。

靜子。本當に私、いゝ御返事があるといゝと思つて祈つてをりますのよ。

廣次。馬鹿！　しかし祈りたくもなるね。俺はどうしてかう意氣地がないのかと自分でも不思議だよ。今度のが駄目だと云はれたつて失望はしないよ。何んと云つても今となつてはこの仕事にかじりつくより仕方がないのだか

られね。だけど希望だけは見せてもらひたい氣もするよ。俺の内にあるものは何時かきつとこの世に出るとは思ふけど、もう待ちどほしいよ。皆が仕事をしだして世間が活氣づいてゐるらしいからね。本當にうつかりしてはゐられないよ。叔父さんや叔母さんだつて親切にはして下さるけど、どうしたつて食客だからね。癈兵の金だつて知れたものだからね。他人に慈善事業をさして生きてゆくのはたまらないからね。それにお前だつて肩身がせまくつて叔父さんが嫁けと云ふ處へはゆかなければならないからね。俺の自由もお前の自由も俺の仕事の成功するかしないかできまるのだからね。さう思ふと俺はもうぢつとしてゐられないよ。その内にお前も俺からひきさかれてつれてゆかれさうな氣がして仕方がない。それさへなければ俺はこんなにまであせらないかも知れない。俺は自分の畫が世間から賞められ出した時も、之で自由が得られるやうになるかも知れないと、それを一番喜んだのだつた。今の時代には生活の安定を得なければ自由は得られないからね。

靜子。私はどうしたつてお兄さんのわきを離れはしませんわ。きつと今にお兄さんの仕事は私を幸福にして下さると思ひますわ。私はそれを疑つたことは御座いませんわ。それは一日でも早い方がよう御座いますわ、私だつて急ぎはしませんわ。私安心して待つてゐますわ。（何か思ひついて）それはさうとしてお兄さん、私今日へんなこと聞きましたのよ。

廣次。へんなこととはなんだ？

靜子。お怒りになつてはいやよ。お兄さんは今朝小間使の手をお握りになつて？

廣次。誰がさう云つた？

靜子。叔母さんが見ていらつしたのですつて。なぜそんなみつともないことをして下さつたの。

廣次。わるかつたよ。俺は女の顏や姿や手や足を見ることが出來ないのでね、一寸さはつて見たかつたのだよ。たださはつて見ればよかつたのだ。心のなかのことは知らないけど、さはるぐらゐなことは盲目の俺には許されていゝと思つたのだよ。叔母さんが見てゐると云ふことは知らなかつたのだよ。

靜子。御[illegible]たちなんかも笑つてゐましたわ。叔母さんは小間使に怖かつたんだとおつしやいましたよ。

廣次。さうか、仕方がない。

靜子。叔母さんはもう小間使に人がゐない時にお兄さんのそばにゆくとあぶないから行くなと云つていらつしたわ。

廣次。さうか。仕方がない。

靜子。仕方がない、ですまされないわ。本當にみつともない。お聞きしてゐて顏から火が出るやうな氣がしましたわ。

廣次。許しておくれ。

靜子。口惜しいとはお思ひにならなくつて。

廣次。思ふ資格も今はないからね。

靜子。本當にしつかりして頂戴よ。

廣次。するよ。俺は今新しい仕事を考へてゐた。お前が今暇なら一寸かいて貰ひたい。

靜子。えゝ、書きますわ。（机のわきによる。廣次座をゆづる。）

廣次。いゝかい。

靜子。はい。

廣次。今度は俺が演說してゐる所だよ。いゝか、誰かある會場で演說をしてゐるのだ。

靜子。えゝ、ようございますよ。

廣次。いゝかい、本當に演說をしてゐるやうにして云ふよ。

靜子。はい。

廣次。始めるよ。(立ち上り)笑つてはいけないよ。
靜子。笑ひますものですか。
廣次。本當に笑ふ暇はないね。俺達は死にもの狂ひにならなければならないのだ。少しぐらゐ書きおとしがあつてもあとでなほせるから聞きなほさず書いておくれ。
靜子。はい。
廣次。本當にはじめるよ。(演說をするやうに、しかし筆記出來るやうにゆつくりしやべる)私は盲目です、戰爭で盲目になつたのです。から云へば諸君は死なかつたのを幸に思へとおつしやるかも知れません。たしかに私は死なかつたことを幸と思つてゐます。しかし私にとつて目を失ふことは少しつらすぎます。(廣「書けたかい」靜「はい」)諸君はそんなことは云はないでもわかつてゐると、お思ひになるかも知れません。しかし私にとつて目を失ふことは、諸君の察して下さるよりもつらいことだつたのです。諸君、私は畫家だつたのです。どうせ下手畫かきだとお思ひになるでせう。どうせ目がわるくなくとも、大した仕事はしないにきまつてゐるとおつしやるでせう。それを考へると、私は口惜し涙をこぼします。(廣「書けたかい」靜「はい」)私はさうでないと云ふ證據をあげることは出來ません。又私は今後さうでないことをお知らせすることは許されない身の上です。私は諸君に何と思はれても私は默つてそれを受け入れなければならないのです。(廣「書けたかい」靜「はい」)諸君にとつては私が盲目になつたのは何事でもありません。日本にとつても何事でもありません。第一私の生きてゐることが、諸君にとつて何になりませう。私が戰爭で死んだ所が、諸君はいさゝかも痛痒を感じられないでせう。(廣「書けたかい」靜「はい」)諸君はいかなる天才の若死をも心から悼むことをされないでせう。まして私のやうなものが、死なうが生きやうが、盲目にならうがなるまいが、諸君にとつては何事でもないでせう。私から泣言を聞かされるのさへ、不快に思はれるでせう。(「書けたかい」「はい」)それを私は決して無理だとは申しません。決してそれを不當だとは申しません。しかしそれだけ私にとつては淋しい氣がいたします。今は少しあきらめてゐます。しかしあきらめるまでは一通りのことではありませんでした。(「書けたかい」「はい」)永遠に私の目は開きません。諸君の顏を見ることは出來ません。想像はします、しかし心細い氣がします。見たいもの許りです。私がよし畫かきでなかつたにしろ私は盲目になつたことを悲しみます。不自由です、他人に迷惑を與へます、一人前ではなくなります、見たいものが見えません。よみたいものがよめません。(「書けたかい」「はい」)私の世界は手にさはるものと、耳に聞えるものと、香のするものとです。さうしてその度に見たいと思ひます。大事なものが一つかけて居るやうな氣がします。さうして私の希望はその爲にすべてこはされました。(「書けたかい」「はい」)私は畫かきです。私の希望は畫をかくことによつてのみ滿たされると思つてゐたのです。私の運命は私の畫が進歩する事によつて開けてゆくと思つてゐたのです。私は今でも目の前に自分のかきたいと思ふ繪ははつきり見ることがあります。夢の内には美しい色と形とを見ます。しかし私はそれをかくことは出來ません。(「書けたかい」「はい」)私の五六年の苦心はもう一歩と云ふ時に消えてしまひました。もうとり返すことが出來ないのです。他の人は知りません、私と私の唯一の妹は泣

きました。何度泣きましたでせう。床に抱きあつて泣きました。口惜しいのです。なさけないのです。もうあらゆる希望はなくなつたのです、絶望です。私は召集される前に一つの畫をかいてをりました。妹が立つてゐる姿です。諸君はどうせ碌な畫ではなかつたとお思ひになるでせう。(間。「書けたかい」「はい」)さう思はれても、私はどうすることも出來ないのでせう。この目がどうしても開いてくれないやうに、諸君よ、假りに假りに私を有望な畫家だつたと思つて下さい、さうしてどうかそれを疑はないで下さい、どうせ〳〵私の畫はまだものにはなつてゐなかつたでせう。しかしもう一歩進めば、ものになる所だつたと思つて下さい。少なくも私はその仕事をしてゐた時、自分の未來に希望を認めてゐたと思つて下さい(「書けたかい」「はい」)私はその畫を描きながら妹に云ひました。俺は戰ふよ、きつと勝つよ、俺の運命、お前の運命もひらけるよ、俺の畫かきになつたことをお父さんも喜んでくれるだらう、叔母さんも輕蔑はしないだらう。二人はいつまでも叔父さんの家の食客になつてゐる必要はないのだ。幸運は私達を待つてゐてくれるのだ、俺はそれを今感じてゐる、目の前に勝利の幻を見てゐる。もう少しの辛抱だ。私は本當にさう思つたのです。私は自信を得つゝあつたのです。さうして妹も私のその言葉を信じてゐてくれたのです、妹許りではありません、友もそれを信じてくれました。(「書けたかい」「はい」)ある展覽會に出した私の畫は私の尊敬する批評家から可なり程度の高い褒め言葉すらもらつたのです。かう云つても、諸君は知れたものだとお思ひになるでせう。しかし假りに私を有望な人間だと思つて下さい。有望な人間が、もう一歩と云ふ勝利の自覺を得た時召集されて、戰爭に行つて盲目になつて歸つて來たと思つて下さい。それはあり得ないことではないでせう。(間)諸君はその人に同情することを禁じないでせう。しかし私がその人だと云へば、諸君は自惚れてゐると思はれるでせう。私は情けない氣がします。しかし、さけることの出來ない運命を呪つて許りもゐられません。私は畫がもう二三日で出來上ると思つた時に召集されたのです。私はその場合召集されるのにいやでした。しかし私は抵抗することは出來ません。妹も泣きました。私も泣きました。しかし私は戰爭にゆかなければならなかつたのです。(「書けたかい」「はい」)私は戰爭へゆきました。私は大の非戰論者でした。人を殺すことは嫌ひな男です。又人に殺されることはこの上なく嫌ひな男です。私は國家が戰爭をしたことにも不服だつたのです、私は友とその話をしてゐました。私は兵隊にとられた爲に、少し進歩がおくれたのです、さうしてそれをやつととりもどしたと思ふ時に戰にとられたのです。(「書けたかい」「はい」)戰爭にゆきました。鐵砲もうちました、憐れな敵の軍事探偵を銃殺する群にも入りました。私は心のなかで黙禱し、その人の爲に祈りながら、さうしてねらいをはづしましたが私はその人の生命をたすけることも、死の恐怖からゆるめることも出來ませんでした。私はなぜあんなことをしなければならなかつたのでせう。今でもその人の顔が目に浮びます。何かの力が私にそれをさしたのです。何の力か私は知りません。私はそれに抵抗することが出來なかつたのです。自分の死ぬのが怖かつたからでせうか。それだけだつたでせうか。

靜子。そんなに[illegible]かけませんね。

(小間使登場)

小間使。静子さま、奥さまが一寸。
静子。すぐ參りますと云つて下さい。
小間使。はい。
（小間使退場）
廣次。行つておいで
静子。一寸行つて來ますよ。
（静子退場、廣次鉛筆をとりあげ字を書かうとして自棄をおこし）
廣次。あゝあ。（仰向けにたふれる。暫らく沈默）
（小間使登場、廣次起きる）
小間使。お客さまがいらつしやいました。
廣次。誰？
小間使。西島さまとかおつしやいました。
廣次。なに？ 西島？ すぐこゝにお通ししてくれ、きたない處ですがと云つて。さうして静子に西島さんが來たと云つておくれ。
小間使。はい。
（小間使退場、廣次一寸片附する）
（西島小間使に案内されて登場）
小間使。どうぞお敷きになつて。（座蒲團をすゝめる）
西島。ありがたう。
小間使。いらつしやいました。
廣次。よく來て下さいました。
西島。どういたしまして。（二人挨拶する。一寸沈默）もつと早く御返事すればよかつたのでしたが、昨日まで一寸旅行してゐましたので失禮いたしました。今朝お作を拜見しましたので早速手紙を書かうかと思ひましたがそれよりお目にかゝつた方が話がよくわかるだらうと思ひましたので來ました。お宅は近いのですから。
廣次。どうもありがたう。
西島。お作はいゝものだと思ひました。君でなければかけないと思ひます。まだ書きたりない處はあるでせうが、君の心の苦しみが、よく出てゐると思ひました。君は君の痛や涙や君の全生活を作の内にしぼりだすことの出來る少數な人の一人と思ひました。君の書いたこの前作を拜見した時もさう云ふ氣がしましたが、今度君のお書きになつたものを見て矢張りあゝ云ふ書をかいた方の作だと思ひました。私は同情は出來ますが不自由なのによくあれだけ書けたと思ひました。
廣次。ものになつてゐるでせうか。
西島。なつてゐると思ひます。まだむらな處がないとは云へませんかもしれませんが、何しろ君の心の苦しみがよく出てゐます。さぞ苦しかつたらうと思はれます。
廣次。本當にもう少しで自殺しようかと思ひました。生きてゐるのが不思議なやうです。盲目で死なゝかつたのも不思議ですけど、盲目になつてから自殺しなかつたのも不思議です。妹が居てくれたからです。私がこんなにみじめに生きて居ても、妹は私の生きてゐることを喜んでくれました。さうして私の死ぬことを望んではくれませんでした。私がどんなに苦痛を感じても、妹は私を離してはくれませんでした。私は他人手を借りないでは生きてゆかれない人間になりました。今から盲目の字をならふ氣もしませんし、ならつたつてそれを目あきの字になほすのには他人手を借りなければなりません。本をよむのでも盲目の本とかふものには碌な本はないと思ひますからね。矢張り讀んでもらはなければなりません。その點私の頭は一々に面倒に出來てゐますので、自分のよみたいもの切り讀めない頭なのです。それに自分の生きてゐることが他人に迷惑をかけることになるのですから、氣がいけません。幸な妹が居てくれるので助かつてゐます。もし妹が居ませんでしたら私は生きてゐることに希

望は爪の垢程ももつことは出來なかつたでせう。

西島。本當に御同情します。本當に隨分苦しかつたでせう。

廣次。何しろ一人前の人間になるのが大變な努力なのですからね。塙保己一なぞと云ふ人のことがこの頃よく考へられます。まるで忘れてゐたものですが。さうして慰められてゐます。馬琴だとかミルトンだとかも盲目になつて、自分のかきたいものを口述したさうですが、齢とつて仕事をし上げて皆から尊敬されたあとで盲目になつたのですからさう慰めにはなりませんが、ヘレン。ケラーのやうな人のことを考へると鼓舞してくれます。盲目になつてしまつた以上、今更不平を云つても始まりませんから、どうかして盲目でも出來る仕事で、自分の運命を切り開いてゆきたいと思ひます。根氣では他人に負けない心算ですし、死ぬ覺悟は出來てゐます。どうにかしてものにならうと思つてゐます　なりたいと思つてゐるのです。ですが、自分ではまだよくわからないのです。畫の方だと、少しはわかつてくれたのですが、畫はまだ六年はわかりませんでした。やつとわかりかけた時に目をやられたのですから、少し可哀さうな氣もします。今だつて頭の内には時々畫が出來ることがあるのです。夢のなかでよく畫をかいてゐる夢を見て目を覺して怒鳴ることもあります。あの小説の内にもかきましたが聾が作曲は出來ても、盲目で畫はかけない氣がします、色をつかはない簡單な畫ならかけてもいゝと思ふことがありますが、思ふやうにはゆきません。それでも時々こんな畫で退屈まぎれにかいて見ることもありますが、自分には見えませんが。（さつきの畫を見せる。）

西島。之は自畫像ですね。

廣次。えゝ、まだ目のあいてゐる時のです。目に未練があるわけではないのですが、と云つてないことはありませんが、目がつぶれてからの自分の顏は見えませんからね。

西島。あゝ、之は高峯の細君ですね。

廣次。わかりますか。

西島。よく似てゐます。

廣次。もう子供が出來たさうですね。

西島。えゝ。

廣次。隨分變つたでせう。

西島。いゝえ、さう變つてはゐません。之は妹さんのですね。

廣次。さうです。

西島。之によく似た貴君のおかきになつた油畫をもつてゐます。

廣次。さうですか。

西島。高峯の細君からもらつたのです。

廣次。今見たらたまらない畫でせう。

西島。そんなことはありません。今でもいゝ畫だと思つてゐます。

廣次。せめてもう十年も畫がかけたらと時々思はないことはありません。しかしもうあきらめてはゐます。

西島。あの小説にかいてありましたが、畫は大概お破りになりましたか。

廣次。えゝ、大概小刀で切りさいてしまひました。

西島。あすこを讀んだ時惜しい氣がしました。

廣次。その方の未練はありません。あんなものが殘つてゐたつて何にもなりませんからね。どつちにしろ知れたものですからね。（間）それから少しあつかましい氣もしますけど、私のものを貴君の雜誌にのせて戴くわけにはゆかないでせうか。

西島。私一人の考へではおのせしたいと思ひますが、私一人の考へでもゆきませんから。

廣次。無理にとは申せませんけど、よかつたら載せて戴けるとありがたいのです。

西島。なるべく載せるやうに骨折つて見ませう。しかしあの作一つでさう反響を得ることは出來ないでせう。

廣次。それは私も知つてゐます。

（静子お茶と菓子をもつて登場）

廣次。静子かい。

静子。はい。

廣次。妹です。

静子。よくいらつしやつて下さいました。

西島。初めて。

（二人挨拶する。静子お茶をついですゝめる。）

静子。よく來て下さいました。（間）御返事がないので兄は心配してをりました。

西島。旅行をしてをりましたので、今朝拜見しましたので早速お伺ひしたのでした。

静子。兄のものはどうですか。

西島。いゝものだと思ひました。

静子。それは本當で御座いますか。

西島。お世辭は申しません。

静子。出して戴けますか。

西島。友と相談して見ませう。

静子。あなたお一人のお考へではどうお思ひになりますの。あなたお一人のお考へでどうにでもなるのでは御座いませんの。

西島。さうもゆきません。

静子。それでもあなたが是非出さうとお思ひになれば、ゆかないことはないのでしよ。

廣次。静ちやん！

静子。それでも、私今出すとおつしやつて戴かないともう出して戴けないやうな氣がするのですもの。

廣次。そんな勝手なことを云ふものではないよ。

静子。私はいゝものだと伺つた以上は日參をしてでも出して戴きますわ。皆さんはあんな盲目に何が出來ると云つていらつしやいますわ。それに、私一寸心配なことも御座いますのよ。二人が氣兼ねして一寸の時間をぬすんでやつと書き上げたものか、西島さんのお考へ一つでどうにでもなるのだと思ふと、私おすがりしたい氣もしますわ。それも物になつてゐない物なら仕方がありませんけど。

廣次。默つておいで。西島さんの方にもいろいろ御都合がおありになるだらうし、あの作は出したつてどうせ思ふやうな反響があるわけもないからね、それに私達の仕事はゆつくりするより仕方がないからね。

静子。お兄さん。そんな呑氣なことを云つてはゐられませんのよ。私、もしかしたら近い内におよめにゆかなければならないかも知れませんのよ。

廣次。そんなことが。

静子。それでも叔母さんがさうおつしやいましたわ。叔父さんが大變お世話になつてゐる方の息子さんが私を是非もらひたいとおつしやるのですつて。叔母さんは喜んでいらつしやいましたわ。私のことを果報者だとおつしやいましたわ。

廣次。静ちやん。お前はゆく氣があるのかい。

静子。いゝえ。私はお兄さんのわきを今はなれることは出來ませんとさう申しましたの。お兄さんのお仕事の手だすけをしなければなりませんからとさう申しましたの。

廣次。さうしたら。

静子。とも倒れになるやうなことはよせとさうおつしやいましたわ。（忍び泣く、暫らく沈默。）

廣次。お前は本當にゆきたくないのか。俺のことを思つてくれるのは嬉しいけれど、俺は唯

で又どうにかするだらう。俺の仕事は氣永な仕事だ。どうにかするだらう。お前は俺の犠牲にならない方がいゝ。

靜子。本當に私はゆきたくは御座いませんの。お兄さんのお傍にゐたいの。

廣次。(嬉しさをかくし切れず)それは本當か。さうしてお前は何と返事をしたのだ?

靜子。もう二三年待つて戴きたいと申しましたの!

廣次。さうしたら?

靜子。待てばきつと結婚するかとおつしやつたの。

廣次。お前は何と云つた?

靜子。それはわかりまんわと申しましたの。

廣次。さうしたら。

靜子。さうしたら大變お怒りになつて、外様にそんな御返事が出來ますか、とおつしやいますの。それでは私それならお斷りして下さいと申しましたの。さうしたら叔母さまは本當にお怒りになりましたの。さうしてそんな御返事が出來ますか、さうしてもし叔父さまがそれで免職をされたらどうしますとおつしやるの?

廣次。お前どうした。

靜子。そんなことはあるわけはありませんわと申しましたの。

廣次。うん。

靜子。さうしたら叔母さんは、いゝえ、さうにきまつてゐますとおつしやるの。

廣次。それから。

靜子。私、泣いてしまひましたの。

廣次。(歎息をつく)あゝあ。

靜子。叔母さんは自分の娘だつたらこんな氣ずゐな眞似はさせないとおつしやいましたわ。

西島。失禮ですが、その話の方のお名前を聞かして戴くことが出來ますか。

靜子。相川とおつしやるのです。

西島。相川三郎と云ふ方では御座いませんか。

靜子。さうで御座います。御存知でいらつしやいますか。

西島。その人なら知つてゐます。

廣次。どんな人ですか。

西島。正直に云ひますと、僕より六つ下の級にゐた人でよくない噂で學校を退校された人です。

靜子。そんな風評は存じてゐます。叔父さんがよく惡口を云つていらつしやいました。相川さまも三郎さまにはお困りでいらつしやると申してゐました。

廣次。そんな人の處へゆけと叔母さんが云ふのか。

靜子。さもなければ私のやうなものを相川さまでもらひたいとはおつしやりはしませんわ。

廣次。よし。それならどうしてもいつてはいけないよ。

靜子。それでももし叔父さまが免職をさせられたら。

廣次。そんな不當なことで免職になつたつて。

靜子。それでも、その時私達はどうして生きてゐられますの。

廣次。そんな話はもうよさう。西島にいやなお話ばかりおきかせしました。こんな話はお聞かせしたくはなかつたのですが。

西島。いゝえ。ちつとも。

靜子。兄さんの小説は出してはいたゞけませんでせうか。

西島。出しませう。原稿はお返ししようと思つて持つて參りましたが、それならば戴いてゆきます。

靜子。失禮なこと許り申しました。御作をよく拜見して居りましたので、もうよく知つてゐて下さる方のやうな氣がしますもので、私の

方許りで存じてゐると云ふことをつい忘れますので。

西島。いゝえ。私の方でも野村さんのことは勿論、あなたのことも存じてゐます。野村さんのおかきになつたあなたの肖像は私の室にかゝつてをります。

静子。まあ！ 兄のかいた畫をかけてゐて下さるのですか。

西島。えゝ、かけてゐます。高峯の細君からもらつたのです。

静子。高峯さんの綾子さんはよくいらつしやいますか。

西島。えゝ。妻とも友達なので。

静子。お逢ひになつたらよろしくおつしやつて下さい。

廣次。高峯君にあつたら僕からもよろしく云つたとおつしやつて下さい。もう少し元氣になつたらお目にかゝりたいと思つてゐるとおつしやつて下さい。今まだ畫の話をするのがつらい氣がしますから。

西島。さう申しませう。それなら失禮します。それからこんなことを申すのも變ですが、御入用の節は餘分のことは出來ませんが、どうか御遠慮なく。

廣次。ありがたう。又よかつたらこんな處ですが、どうか。

西島。ありがたう。私の處にもおいで下さい。少しは蓄音器のいゝ盤も御座いますから。

廣次。ありがたう。

静子。今日來て下さつたので、どんなに兄が喜んだで御座いませう。どうか又おこりなくおいで下さい。

西島。ありがたう。

廣次。お送りして上げておくれ。

静子。はい。

西島。さよなら。

廣次。さよなら。

（西島と静子退場。静子登場）

廣次。歸つたかい。

静子。お歸りになりました。お兄さんのお作がいゝと云ふことを聞いて私本當に安心しましたわ。

廣次。さうかい。俺は西島君があの小説を出すやうになつた動機が少し氣に入らないのだよ。しかし今そんなことを云つてゐる時でもないが。西島君はお前がたのんだから出す氣になつたのだ。お前が頼まなかつたら、西島君は僕の小説を出すとは云はなかつたらう。

静子。お兄さんはすぐそんな厭味なことをお考へになるのね。

廣次。しかしそんなことはどうでもいゝ。結婚の話と云ふのは本當なのかい。

静子。本當ですとも。

廣次。さうして何時までに返事をすればいゝのだ。

静子。早い程いゝのださうです。もう向うではくるものにきめていらつしやるのださうです。是非くれ、不服はないだらうね、とおつしやつたのださうです。

廣次。そんな馬鹿なことが。

静子。それでも相川さまはそれは頑固な方なのですつてね。自分の云ひ出したことは理でも非でも通さうと云ふ方ですつてね。少なくも下なものに對しては。さうして叔父さまが本人に聞いて見ますとおつしやつたら、君の處の食客ぢやないか、本人に相談をする必要が何處にあるのだ、それとも君は三郎に不服があるのか、とおつしやつたさうです。

廣次。叔父さまはどうしたのだ。

静子。叔父さまはそれではつきりした返事はなさらなかつたのださうです。すると君の處にゐる娘をどうしてもくれなければ、その結

果はどうなるか君は知つてゐるだらうね、君は働があるから僕の會社でつかつてゐると思つてゐるのか、まあ考へておいてもらひたい、とさう云つたさうです。

廣次。そんなことを云つたのか。なぜさつき其處まで云はなかつたのだ。さうすれば少しは金のさいかくをしてもらつて最後の決心をしなければならなかつた。

靜子。最後の決心とは。

廣次。二人で何處かで家をもつのだ。

靜子。そんなことは出來ませんわ。

廣次。そんならお前はどうする心算だ。

靜子。どうしていゝかまるでわかりませんの。お兄さんは私がゐなくなつたらどうなさつて。

廣次。お前はゆく氣があるのか。

靜子。お兄さんは。

廣次。俺はゆくことには斷じて反對だ。しかし俺には不服を云ふ資格はない。

靜子。私だつてさうですわ。

廣次。お前は俺がゐなかつたらすぐ承知をするだらう。

靜子。それは承知するかも知れませんわ。私一人さへ[illegible]それでいゝのですからね。

廣次。だけど俺がある。俺の仕事がある。承知してはいけないよ。

靜子。はい。

廣次。今お前がゐなくなつたら俺の希望は消えてしまふよ。もう一歩と云ふ處だからね。お前がどうしてもゆきたいと云ふ處なら俺はあきらめるかも知れない。だが今度のことはお前も不服なのだからね。お前の本心は叔父さん一家の犧牲になりたくないのだらう。

靜子。はい。本當は。

廣次。俺の犧牲になつてくれる方を喜んでくれるだらう。俺は無理なことは云はないつもりだ。お前の一生を犧牲にしようとも思はない。俺はお前の爲にも仕事をしたいと思つてゐるのだ。お前を幸福にしてやりたいと心の底では思つてゐるのだ。この三四年の間お前にかけた苦勞は非常だつた。俺はそれを自分の仕事で酬いたいと思つてゐたのだ。さうしてその希望がかすかではあるが見えて來たと思つてゐたのだ。俺はそれを喜んでゐたのだ。俺は自分の爲にも仕事の成功を願つてゐる。しかしお前の爲にも願つてゐた。お前こゝにおいで！　お前には本當に苦勞をかけた。もう何時迄も苦勞はかけない。俺も男だ。（靜子の目に指をさはり）お前は泣いてゐるのか。今は泣く時ではない。心を鬼にする時だ。

靜子。それでも免職になつたら叔父さまもお可哀さうですわ。本當にいゝ方なのですもの。

廣次。さうか。矢張りお前はゆきたいのだな。ゆきたければゆきたいと云へ。

靜子。お兄さん。何をおつしやるの？（泣く）

廣次。ゆきたくないのか。それなら泣くことはないぢやないか。力のない意氣地なしと、不正な人間の犧牲になつては馬鹿氣てゐるよ。

靜子。それでもお兄さん、叔父さんが免職になつたら、どうして食つてゆくお心算。

廣次。二人だけならどうにかやつてゆける。西島さへ本氣に力を入れてくれればどうにかなるにちがひない。しかし一體相川はなぜそんなにお前をもらひたがるのだ。お前は相川に逢つたことがあるのか。

靜子。えゝ。十日程前に電車でお目にかゝりましたの。叔母さんのお伴して電車にのりましたら三郎さんがお友達と御一緒にいらつしたのです。

廣次。敬語なんかつかふのはよせ、馬鹿？　それで。

静子。御終りになつてはいやですよ。それで叔母さんが丁寧に御挨拶をなさつて私をこれは私の家に厄介になつてたります姪で御座います。御見知りを願ひますとおつしやつたの。

廣次。それでお前は丁寧にお辭儀をしたのか。顏を赤くして。（間）それが氣に入つたのだ。

静子。それからもつといやなことが御座いますの。

廣次。なんだ。

静子。私、一昨日叔父さんの御伴して相川さんの處へ參りましたの。

廣次。なぜ行つたのだ？

静子。私何にも知らなかつたのです。たゞ叔父さんの御伴をして行つたのです。行く時叔母さんが何時になく御機嫌がよくつて、着物のことやお化粧のことをやかましくおつしやるので變だとは思つたのですが私のことでしたから、別に氣にもかけずに御伴して行つたのです。途中まで行くと叔父さんが一寸相川さまの處へおよりしようとおつしやるのです。私は何氣なくついてゆきましたの。立派なお家でしたわ。いゝ趣味の家とは思ひませんでしたが、如何にも金がかゝつたと云ふお家でしたわ。

廣次。さうして相川のお父さんやお母さんにもあつて丁寧にお辭儀をしたのだらう。

静子。えゝ。しましたの。

廣次。馬鹿！

静子。しかしそれだけならまだいゝのです。もつとずつとひどいことが御座いました。今になつてはつきりわかります。

廣次。どうしたのだ。

静子。湯に入れとおつしやつたのです。

廣次。それは本當か。さうしてお前は入つたのか。

静子。叔父さまも是非入れて戴くといゝ、結構なお湯だからとおつしやつたのです。

廣次。それでお前は入つたのか。

静子。はい。

廣次。一人でか。

（静子泣く）

廣次。泣いてゐてはわからないぢやないか。誰と入つたのだ。

静子。あとで奥様が入つていらつしやいましたの！

廣次。馬鹿！　馬鹿！　お前は恥知らずだ。

静子。さうして私が湯から出ました時、其室に三郎さまが何氣なく立つていらつしやいました。

廣次。お前はどうしたか。

静子。私は、まさか故意だとは思ひませんでした。あつと申しました。その時三郎さんはあわててお逃げになりました。

廣次。さうしてお前は御かげでいゝ氣持になりましたと云つて禮を云つて歸つて來たのか。

静子。はい。

廣次。俺が盲目にならなかつたらそんなことはさせなかつた。俺が西洋に生れてゐたら三郎と決闘してやる。たゞはおかない。泣かないでもいゝ。策略にかゝつたのだ。それを聞いたら俺はなほ承知は出來ない。皆がぐるだ。もしお前が相川の處へ行くならその前にこの俺を殺してくれ。あんまりだ。あんまりだ。

静子。それでも私よりもつと可哀さうな女がいくらでもありますわ。

廣次。俺は恥知らずにはなれない。いゝ。其處までしてくれたのは俺達にとつては仕合せだつた。何時までも負けてはゐないぞ。俺だつて男だ。碁にかけては天才だと迄云はれた人間だ。俺にかみついたつて負けてはゐない。行かう。行かう。

靜子。何處へ。
廣次。西島君の處だ。
靜子。何しに？
廣次。お前も來い。
靜子。何しに。
廣次。お前は默つて叔父さんのお伴をするのぢやないか。默つて俺のあとをついておいで。
靜子。はい。
（二人退場）

——幕——

第二幕

西島の室

（二階。蓄音器あり。壁に畫がかけてある。西島、帽子をかぶつたまゝ登場、帽子を疊の上になげる）

芳子。おかへり遊ばせ。どうでした。
西島。行つてよかつた。いろ〳〵のことを考へさせられた。
芳子。目はまるでお見えにならないの？
西島。さうだ。
芳子。隨分御不自由でせうね。
西島。たゞの人間だつて目が見えなくなつてはたまらない。まして畫かきだつたのだからね。
芳子。もう畫はかけませんわね。
西島。それはかけないさ。
芳子。あなたがいらしつたので喜んでいらしつて？
西島。喜んでゐた。しかしそれ所ではないのだ。
芳子。何かあつたのですか。
西島。あゝ。妹に縁談が起つてゐるのだ。
芳子。妹さんがゐなくなつたら不自由でせうね。
西島。それはどうすることも出來ないだらう。筆記する人をやとふことも出來ないだらうし、讀んでほしい本をよんでもらふことも出來ないからね。
芳子。妹さんはこの畫に似てゐますか。
西島。之よりは大人らしくなつてゐるが、よく似てゐる。
芳子。それでは綺麗でせうね。
西島。まあ綺麗な方だ。
芳子。それでは行つた甲斐がありましたね。
西島。馬鹿！
芳子。ですが、およめにゆくのではお困りでしよ。
西島。それがどんな處へゆくのだと思つてゐる。先日芝居の歸りに電車にのつた時、俺の前に酒に醉つて居眠りしてゐる奴がゐたらう。いやな顏した。
芳子。道樂者らしい。
西島。俺が相川三郎と云ふのらくらものだと云つたらう。
芳子。えゝ。
西島。その人の處へゆくかも知れないのだ。
芳子。どうしてです。
西島。あいつのお父さんのやつてゐる會社に、野村の叔父さんが出てゐるのだ、野村の叔父さんと云ふのはあんまり働きのない奴らしいのだ。それで相川のおぼしめしにそむくと、職を失ふかも知れないのだ。それで是非野村の妹を相川の三郎にやりたく思つてゐるらしいのだ。
芳子。野村さんはそれを承知なさつてゐるのですか。
西島。承知はしないさ。いくら盲目になつたつて、野村は男だからね。だけどしまひには承知しなければならないだらうと思ふのだ。野村は叔父の世話に半分食客になつてゐるのだ

からね。

芳子。野村さんのお父さんやお母さんは？

西島。もう兩方ともゐないのだ。

芳子。それでは隨分お困りでせうね。

西島。お前が野村の妹だつたら相川の處へゆくかい？

芳子。あんな人の處はまつぴらですわ。見た所から淺薄な顔してゐるのですもの、それにあんな下品な顔は閉口ですわ。

西島。お前がもしあの人にどうしてもゆかなければならなかつたらどうする？

芳子。逃げますわ。

西島。俺は道々考へた。あんな男の細君になるよりは淫賣婦になる方がいゝと思つたよ。まだ自由があるからね。あゝ云ふ奴と一生一緒にゐると云ふことはたまらないことだ。

芳子。本當にさうですよ。

西島。野村の妹もとんでもない奴に見こまれたものだ

芳子。どうにかならないでせうか。あの人を見なければさうも思へませんが、少し御氣の毒ですわね。

西島。野村が目をあいてゐたらどうにか出來たらう。しかしどうせゆくものなら目が見えない方が野村にとつて仕合せかも知れない。

芳子。妹さんはお氣の毒ですわ。どうにかならないでせうか。

西島。矢張りまだ金の世の中だからね。それに野村の妹のやうな位置が一番いけないのだ。もつと貧乏してゐればまだどうにかなるのだ。しかし野村の位置ではむつかしい。叔父さんに働きがあつたとしても職を失つたら一寸めんくらふだらう。まして働きがないのだからね。

芳子。隨分お氣の毒ね。

西島。俺は道々どうしたらいゝかと考へたよ。しかし俺には考へられなくなつた。野村は金をとることは一寸出來ないからね。叔父さんが職を失つたら、それも自分の妹の爲に職を失つたのだからね、もう叔父さんの世話にはなつてゐられないからね。金がなければ今の世には生きてゆかれないからね。

芳子。それではどうしても相川と云ふ人の妻にならなければならないでせうか。

西島。まあ、暫らくあいまいにしておくより仕方がないね。その内に野村が少しでも有名になれば、又どうにかならないと云ふこともないからね。しかしそれもあてにはならない話だが、俺は野村の處へ行つて野村が目の不自由なことと許りに拘泥して、目さへあれば目さへあればと思つてゐるのを見て自分に目のあるのを今更に勿體なく思つたよ。さうして野村の兄妹が金の爲に苦しんでゐるのを見ては、なほ自分がすまなく思つたよ。本當に野村は運のわるい奴だ。さうしてその運ととつくみあひをしてゐる野村の有樣を見ると悲壯な感じがする。勝たしてやりたいと云ふ氣がする。

芳子。本當に勝たして上げたい氣がしますわね。

西島。この小説にもかいてある樣に、實際畫をかいてゐる夢を見て泣いたり、癇癪を起したりしたらしい。どうかして起き上らう起き上らうとしてゐるらしい。それに較べると俺なんか勿體ない程運がいゝ。俺の境遇にゐて何かしなければ餘程の馬鹿だ。俺はいゝ土地におちた種だ。さうして最も肥えた土地に頭をおさへられることもなく生長して來た。野村はその反對だ。少し芽を出しかけるとすぐ運命にたゝきつけられた。畫がものになりかけた瞬間に戰爭にとられて盲目になつた。やつと文學をやりだして、希望が少し見えだした

時に、妹を奪はれかけてゐる。あんまりいゝ口をもちすぎたので恨まれたやうに、今度はあんまりいゝ妹をもつてゐたので恨まれたのだ。

芳子。原稿は持つて歸つていらしつたの。

西島。あゝ。今度雜誌に出すことにしたのだ。野村の妹が是非出してほしいやうに云つたので。

芳子。本當に出してお上げなさいよ。

西島。だけど出したつて反響はないよ。そればかりではない。きつと惡口を云はれるにきまつてゐる。何時になつたら原稿でくらせるやうになるかわからない。野村は之から隨分苦しまなければならない。

芳子。何をしても隨分大變ですわね。

西島。當人になれば又決心がちがふだらうが、はたで見ると心配なものだ。

芳子。誰かいらつしやいましたわ。

西島。さうだ。高峯夫婦が來たのだらう。

芳子。（窓からそとを見）さうですよ。

西島。くるだらうと思つてゐた。（窓にゆき聲かける）おい。

（二人退場、間もなく西島と高峯二人登場）

西島。君がくるだらうと思つてゐた。

高峯。旅行はどうだつた。

西島。別に面白いこともなかつた。それより今日面白い人にあつた。

高峯。誰に？

西島。野村に。

高峯。野村？　盲目の？

西島。あゝ。

高峯。どうして？

西島。昨日遲く歸つて來たので今朝、不在に來た手紙を見てゐたのだ。すると女の手の手紙があるのだ。見ると野村廣次拜とかいてあるのだ。僕ははつとした。野村の妹がかいたのだなと思つたのだ。僕はすぐ封をあけてよんだら簡單に小說をかいたから見てくれ、もし雜誌にのせて戴けるとありがたいとかいてあるのだ。僕はおどろいてすぐ小說をよんで見た。野村の妹がかいたにちがひない。綺麗に淸書してあつた。僕はよんで泣いてしまつた。

高峯。よくかけてゐるかい。

西島。まだむらはあるけれど、野村の氣持はよくわかる。自分のことがかいてあるのだ。妹の大きい畫をかいてゐる時に召集されたことや、盲目になつて家に歸つて來て、癇癪を起して畫をやぶくことや、妹達にどなりつけることや、絕望して死にかけることなぞが書いてあつた。君のことも少しかいてあつた。

高峯。なんて？

西島。君がいゝ畫をかいたと云ふことを聞いて心細く思ふことがかいてあつた。

高峯。綾子のことは？

西島。別に君の細君のことはかいてなかつた。しかし君の細君の簡單な畫をかいてゐたつけ。

高峯。畫をかいてゐた？

西島。どうせ目が見えないのだから簡單な畫きりかけないらしいが、自分の顏や、妹の顏もかいてあつたつけ。目やなんかの位置が少し狂つてはゐたが、中々似てゐた。

高峯。妹は中々綺麗になつたらう。

西島。あゝ隨分綺麗になつてゐる、身なりはかまはないけれども。

高峯。あのくらゐ綺麗な女は珍らしいだらう。

西島。この畫によく似てゐる。本當に美しい。それに處女らしい淸さがある。

高峯。何處にゐるのだい。

西島。五六町はなれた處だ。
高峯。だらりで何時か妻がこの近所であつたと云つてゐたつけ。
西島。さうだ。君によろしくと云つてゐたつけ。君に逢ひたいけれど、逢ふのは矢張り恐ろしいやうなことを云つてゐたつけ。畫の話をされるのが恐ろしいやうなことを云つてゐたつけ。
高峯。それはさうだらう。盲目になることは考へるだけでも恐ろしいからね。僕達の世界は半ば以上目の世界だからね。色や光が見えなかつたらたまらない。
西島。ミケルアンジエロやレンブラントの畫も見るわけにはゆかない。僕のかくものを妹がよんで聞かせるらしいが、天才の作品を讃美してゐる所をよむ時は妹の人も苦しいだらう。
高峯。こゝにある、之等の畫が見えないのだからね。さうして自分のかいたものをもう見ることが出來ないのだからね。あいつは特別に美しい目をもつてゐた男だつた。俺の妻なんかはよくそれを云つて惜しがつてゐた。不幸な奴と云ふものはあるものだね。
西島。だけど野村だから起き上つて來たのだね。
高峯。さうだ。あいつは實際意志の強い、負け嫌ひな男だからね。あのくらゐ負け嫌ひな男は珍らしいだらう。徵兵にとられて出て來た時の勉強と來たら大したものだつた。何時行つても畫をかいてゐた。俺は畫かきだ。畫さへかけばいゝのだ。しじゆうあいつはさう云つてゐた。そのくせ人が一寸でも惡口云ふとすぐ喰つてかゝつた。一寸でも默つてはゐられなかつた。目さへやられなければ今時分可なりの仕事をしてゐたらう。僕も絶えず野村に刺戟をされたらう。今の僕よりも大きい仕事を少しはしてゐたかも知れない。思へば戰爭と云ふ奴は恐ろしい。
西島。しかし野村の不幸はそれ許りではないのだよ。今また大きい不幸が野村の妹を目がけておちかけてゐるのだ。僕はそれで隨分いろいろのことを考へさせられた。
高峯。どんなことが起りかけてゐるのだ。
西島。野村の妹を相川三郎と云ふ奴がもらひたがつてゐるのだ。
高峯。相川でもらひたがるのなら野村の叔父さんは大喜びだらう。
西島。三郎と云ふ人を知つてるかい。
高峯。知らない。
西島。本當ののらくらものなのだ。手くせがわるいと云ふので學校を逐ひ出された奴なのだ。このあひだ電車でのりあはせたが、高慢なしに、見てゐると胸がわるくなつた。品性が少しも顏面に生きてゐないのだからね。
高峯。そんな奴が野村の妹をもらひたいと云ふのか。
西島。さうだ。恐ろしい侮辱だ。
高峯。世間にはそんなことが澤山あるだらうね。
西島。それはあるだらう。しかし兩方知つてゐるだけに僕は今更に恐ろしい氣がした。それに野村だつて今妹を奪はれるのはどんなに苦しいか知れやしない。妹がゐればこそ仕事が出來るのだからね。實際野村も云つてゐたが、妹があるので生きてゐられたやうなものだ。それに今度の小說たつて妹がゐたから書けたのだ。それに妹がゐなくなつたらどんなに不自由かわかりはしない。野村にとつては妹は目であり、杖であり、唯一の相談相手であり、唯一の喜びゝ悲しみを別つものだ。
高峯。野村はその話を聞いてどうしたのだ。

西島。どうしたか、僕のゐる時に野村の妹がその話を聞いて來たのだ。さうして野村にそのことを云つたのだ。野村は隨分おどろいたらしい。しかし妹がゆきたい處ならゆけと云つてゐた。しかし相手がいやな人間だと聞いた時、決してゆくなと云つた。しかし叔父さんが免職された時のことを考へさせられた時、野村は目に涙をためて默つてゐた。

高峯。さぞつらかつたらう。今の世は實際金の世の中だ。金がなければどうすることも出來ない。

西島。本當だ。僕も今更に金の力と云ふものの馬鹿に出來ないことを知つた。どうにかなると云つたつて、どうにもならないのだからね。野村も自分は一人まへの人間ぢやない、他人に自分の事業をさせて生きてゆかなければならないのだからたまらないと云つてゐたが、實際さうだ。この問題がもう二三年あとに起つたならばまたどうにかしやうがあつたらう。今起つたのは少し無慈悲だ。

高峯。だけど、もう少し前に起つたらもつと可哀さうだつた。

西島。僕はかう云ふことも考へてゐるのだ。僕が偶然行つてゐる時にこの話が起つたのだらう。それは野村の運命に僕が手をさへなければならないからではないかと思つたのだ。いくら考へても僕はあの妹を相川にやるのは不服なのだ。僕が知らなければいゝ。知つてゐながら見す見す野村の妹を相川にやるのはあまり意氣地がなさすぎるやうな氣もするのだ。僕ももう三十三だ。二三年前の僕ではない。どうかすれば金がとれないこともない。僕は助けられるものなら助けたいと云ふ氣もしてゐるのだ。

高峯。本當に助けられるものなら助けてやるといゝのだ。

西島。處がいろ／＼考へたが考へれば考へる程心細くなつて來た。僕は兄から毎月五十圓もらつてくらしてゐるのだ。僕は時々金まうけをするけれど、それは一ケ月苦しんでやつと三十九圓六十錢たのだ。さうしてとつた金はマイナスの方に消えてしまふのだ。僕の處へでも時々金の無心を云つて來る人がある。僕は五圓以上人にやれたことは殆んどない。さうして五圓でも人にやると月末にきつと五圓ぐらゐ金に困るのだ。僕は死にもの狂ひになればどうにかなると云ふ氣のする時もあるが、今は死にもの狂ひになつてもどうにもならない氣がする。いやな人間にでも頭をさげてゆけばどうにかなるものかも知れない。しかしそれは耐へられない。僕は文壇にでて少しは名が知れてからもう五年になるがさうして自分は決して怠けた心算はないがそれでさへ金とはこんなに縁がないのだ。だから人を二人養ふと云ふことは、とても出來ない。又野村が之から文學で食つてゆくと云ふことはなほ望めないことだ。僕は殘念だけれど、之は救はれないと思つた。野村の妹は相川の處へ自分から進んでゆくことになると思つた。野村自身の爲にもさうしなければならないときつと僕は思ふにちがひないと思つた。さう思ふことは耐へられない。僕等だ。僕は相川の奴が思ふやうになると思つてゐるだけでも癪にさはるのだ。まして一家實思ふやうになるのにはたまらない。それが野村のやうな人材とまで云はれた、しかも美しい賢い妹なのだから。

高峯。本當にどうかしてやりたいね、さもないと野村はあんまり可哀さうだ。

（芳子登場。）

西島。何か用か。

芳子。蓄音器をやつてはいけなくつて？

西島。やつてもいゝ。
芳子。こゝでやつてもよくつて？　下にもつてゆくのは厄介ですから。
（高峯に）
西島。いゝね？
高峯。僕も聞きたいと思つてゐるのだ。
西島。いゝよ。
芳子。はい。（退場）
西島。何しろ金の力と云ふものがさう云ふ所まで跋扈するのは癪にさはるよ。人の一生に無遠慮にさはつてくるのだからね。
高峯。本當だ。
西島。本當にどうにかしてやりたい氣がするよ。どうにもならないと云ふことがはがゆくつて仕方がない。どうにもならないと云ふのはいひわけのないやうな氣もする。
（西島の妻、高峯の細君綾子登場）
綾子。野村さんにお逢ひになりましたつて？
西島。えゝ。
綾子。野村さんは本當にお氣の毒ですね。
西島。本當に氣の毒です。
綾子。靜子さんも御氣の毒ですね。
西島。本當です。
綾子。運のいゝ方は何處までも運がおよろしいし、運のおわるい方は本當に何處までも運がわるいのですね。
西島。本當にさうです。野村君も目さへわるくなければ運のいゝ人間になれたのでせうが。
高峯。しかし野村だから其處まで來られたのなら今に起き上るだらう。
綾子。小說が御座いますの。
西島。えゝ、あります。今度雜誌に出さうかと思つてゐるのです。
（原稿を綾子に渡す。綾子ひろひ讀みする）
芳子。何をしませう。
（芳子、蓄音器をよくしながら）
綾子。何んでも。本當に御氣の毒ね。
高峯。讀むのはよせよ。
綾子。靜子さんに縁談がおありになるのですつて。
西島。えゝ。
綾子。相手の方が面白くない方なのですつて。
西島。えゝ。
芳子。何をしませう。
綾子。何んでも。
（女中登場）
女中。盲目の方が美しい女の方といらつしやいました。
西島。名は何と云つた。
女中。野村とかおつしやいました。
西島。野村が來たのだ。こゝに通していゝかい。
高峯。野村さへよければ。しかし用ぢやないか。
西島。聞いて見よう。
綾子。階子段をお上りになるのは厄介でせう。
（西島と芳子退場）
高峯。隨分野村に逢ふのは久しぶりだ。
綾子。本當で御座いますね。
高峯。戰爭にゆく前に逢つた切りだ。その後向うからも音さたがなかつたから。聞お前は。
綾子。私も。一度逢ひにゆきましたら、誰にも逢ひたくないとおつしやつて、その內に默つて故鄕にいらしつてしまつたので。
高峯。お前は野村を愛したことはないのかい。
綾子。いゝえ。
高峯。厚意はもつてゐたのだらう。
綾子。それは厚意は持つてをりましたわ。
高峯。野村が目さへわるくなかつたら、お前は野村の妻になつたらう。
綾子。そんなことはありませんわ。

高峯。あてになるものか。
綾子。野村さんは私のことなんかなんとも思つてゐませんわ。
高峯。お前の方は思つてゐたのかい。
綾子。私の方も思つてはゐませんわ。
高峯。野村はお前を思つてゐたかも知れないよ。
綾子。そんなことはありませんわ。
高峯。しかし野村は今でもお前の畫をかいてゐるさうだよ。
綾子。そんなこと。畫なんかかけるわけはありませんわ。
高峯。だけど西島はさういつてゐたよ。又簡單な畫なら盲目でもかけるよ。
（階子段を人があがる音がする。二人沈默する。西島をさきに、靜子に手をひかれて廣次登場。女中座蒲團を持つて來る。）
靜子。お兄さま。高峯さんと綾子さんですよ。
廣次。暫らく。
高峯。暫らく。
（四人お辭儀する）
廣次。高峯君とは隨分暫らくお目にかゝりませんでしたね。お噂はよくうかがつてをりました。
高峯。小説をおかきになつたさうですね。
廣次。どうせ恥かしいものです。新まいですからね。
綾子。靜子さん、先日は失禮しました。
靜子。私こそ。あんまり思ひがけない處でお目にかゝりましたもので。
（西島夫、座蒲團とお茶を持つてくる）
芳子。私はまだ故郷にいらつしやるのかと思つてゐました。
靜子。父がなくなりましたもので、去年上京いたしたのですが、兄が何處にもお知らせしてはいけないと申しますので。
西島。野村君はどうです？
芳子。蓄音器をいたしませうか。
廣次。聞かして頂きませう。
西島。御用は？
廣次。あとで。……
高峯。もしなんなら僕等は下へゆくよ。
廣次。いえ、君なら……下さつてかまひません。しかし蓄音器をきかして頂きませう。
靜子。お兄さん、それでもあんまりおそくなりますと。
廣次。まだいゝよ。お前のやうにこはがつたら切りはないよ。
西島。それなら蓄音器は又今度にしませう。
廣次。いゝえ。どうかやつて下さい。
芳子。それなら高峯さんのお好きなのをやりますよ。
高峯。えゝ。
（蓄音器をする。西洋の唄。芳子と高峯一緒にうたふ）
芳子。うらもやりませうか。
西島。よせよ。
芳子。はい。
西島。お前下へ行くといゝ。
綾子。私も下へまゐりませう。
廣次。どうぞこゝにいらしつて下さい。皆さんに御相談したいのですから。
西島。あれから叔父さんから又お話があつたのですか。
廣次。いゝえ。別に。
西島。私がお伺ひした話だけは、高峯君なんかにお話しました。かまはないだらうと思ひましたので。
廣次。さうですか。かまひません。實はその事で急にもつとお話したいことが出來たのでした。聞けば聞く程相川のやり方が嫌になつたのです。人を人とも思はないやり方なのです。

それで私は心から腹を立てたのですが、何しろごまめの齒ぎしりで、何にも役に立たないのです。自分の腑甲斐ないこと許りが目立つのです。どうしていゝか自分にはわからなくなつたのです。厭味ではなしに私のやうな人間は何されても默つてゐなければならない人間かとよく思ひます。私は盲目になつてから癇癪も強くなつたかも知れませんが、忍耐がなほ強くなつたと思つてゐます。その必要があつたからです。私は翼を折られた鳥です。いくらどんな目にあつても、苛められても飛ぶことは出來ません。たゞ默つて運命に手向ふだけです。死ななかつたのが不思議だつたのですから、それで不服を云へないかも知れません。私はよく自分に、お前は死んだはずの人間だ、生きてゐるのを勿體ないと思へ。さうして忍耐せよ、とさう申します。それが私にとつて美德ではないのです。力がないくせに悲壯の感じを味ひたいからです。さうして自分を慰めたいからです。今度のことも考へれば考へる程私は不服の云へない人間です。齒ぎしりしながらそれも仕方がない、と云つて泣き寢入りするべき人間です。そのことは重々知つてゐる心算です。それにもかゝはらず私は今度のことは默つて見のがすることが出來ないのです。妹が可哀さうです。さうして自分が可哀さうです。

（間）尤も自分の可哀さうなだけならば私は辛抱が出來る心算です。又時によつては立派に辛抱してお目にかける心算です。しかし今度のことはたへられません。西島君がおかへりになつてから妹からいろ〳〵のことを聞きました。相川のやり方がひどいのです。

妹が。

靜子。お兄さん。あのことは、だまつてゐて。

廣次。いゝぢやないか。云はなければ話がわからない。

靜子。それでもあのことだけは。

廣次。默つておいで。妹が叔母と一緒に十日程前に電車にのつたら、相川にあつたのださうです。さうして叔母に紹介されたのださうです。さうして一昨日叔父が妹をだまして相川の處へつれて行つたのださうです。

靜子。叔父さまがだましたと云ふ程ではありませんわ。

廣次。だましたのと同じぢやないか、默つてお前をつれて出かけて途中で相川の處へ行かうなぞと云つたのは。さうして妹を相川の處へつれて行つたのです。さうして妹は相川のお父さんにもお母さんにもあつたのです。さうして。

靜子。お兄さん。

廣次。一生のことだよ。聞け。さうして湯に入れとすゝめられたのです。さうして湯に入つてゐると相川のお母さんが湯に入つて來たのださうです。相川のお母さんはもと玄人だつたさうで、女中と一緒に風呂に入るやうな人なのださうです。つまり妹は體のいゝ體格檢査をされたやうなものなのです。

靜子。お兄さん、本當にお兄さん。

廣次。默つておいでと云つたら。さうして妹が風呂から出ましたら、其處に相川と相川の母が立つてゐたのださうです。妹は[illegible]ですから、故意だとは思はなかつたのださうです。私はそれを聞いたらもう我慢が出來ませんでした。さもなくとも我慢は出來ないのですけど。皆ぐるなのです。私達を馬鹿にし切つてゐるのです。

高峯。（獨言のやうに）それは出來ないのがあたりまへだ。

綾子。あんまりですわ。

芳子。本當に。

西島。許せないことだ。

廣次。私はそれを聞いた時、から云ふ時西洋人は決鬪するのだと思ひました。又私は相川の體格檢査をしてやりたいと思ひました。しかしそんなにされても私達はどうすることも出來ない氣がするのです。

西島。廢兵の金は。

廣次。それは叔父の手に任せてあるのです。私の實印も、叔父に任せてあるのです。さうしてこの縁をこはせば私達は叔父の家にはゐられません。

西島。（一寸沈默）かまはないでせう。お出なさい。少しの金ならば當分どうにかなるでせう。その先はその先です。きつと餓ゑ死にはさせません。

廣次。それでも。

西島。そんなことを云つてゐる時ではないでせう。

靜子。叔父さま達はどうなさるでせう？

西島。二月三月返事をまつてもらふことは出來るでせう。斷り切るとどんな邪魔をされるかわかりませんから。野村君の仕事を一先完成するのを口實にして二月か三月家出をしたらいゝでせう。さうすれば叔母さんはぬけめなくうまいことを云つてくれるでせう。その間に免職されればそれまでです。反つていいかも知れません。さもなくもその内に野村君の仕事も少しは目鼻が出來るかも知れません。その時になつて斷然たる處置をとつても遲くはないと思ひます。返事を急ぐ必要はないかと思ひます。

靜子。お兄さん。そんなら西島さんのおつしやる通りにいたしませうか。

廣次。…………

靜子。私、それが一番いゝかと思ひますわ。

廣次。それでもあまり蟲がよすぎるからね。

靜子。それでもそれより他、仕方がありませんわ。

西島。金の方の心配ならおよしなさい。明後日迄に三十圓だけはつくりませう。君のかいた小説の原稿料としてとつて下さい。

廣次。それでもあんまりですから。

靜子。お兄さんは急に元氣がおなくなりになつたのね。三十圓はいりませんわね。

高峯。本當にさうしたらいゝでせう。私もいざと云ふ時には出來るだけお手つだひします。

廣次。それでも蟲がよすぎるから。

靜子。それでもお兄さんはその心算でいらしつたのでしよ。

西島。それとも外にいゝお考へがあれば、御遠慮なく云つて下さい。

廣次。いゝえ、それで不服があるのではないのです。なんだか金の無心に來たやうな氣がして氣がとがめるのです。

西島。それならさうしませう。

靜子。十五圓もつくつて戴けばさしあたりよろしいわね。

西島。それならば明後日までに二十圓だけつくりませう。その内に十圓だけつくりませう。決して御心配はいりません。

廣次。それでも戴くわけはないのですから。

靜子。それは戴くわけはありませんけど。

西島。ありますよ。それで君達が相川の手からはなれることが出來れば、私はどんなに嬉しいかわからないのです。お話を伺ふと、貴女がいらつしやらないからと云つて叔父さんが免職されるやうなことはないと思ひます。

高峯。それはきつとそんなことはないね。叔母さんはしつかりものだからね。

廣次。僕もさうも思ふのです。しかし相川の父爺が父爺だから、しかし僕は叔父の一家のことはかまはないと思ふのです。僕は叔父のこ

とをかまつてゐられる人間でもありませんし、叔父もきつとぐるだと思ひますから勝手、にしろと云ふ氣はあるのです。

西島。本當にさうだ。君の叔父さんは君の犠牲にしてもいゝ方のやうな氣がする。君の方が犠牲になる必要はない。

靜子。それでもお子さんなんかも御座いますから。

廣次。可愛氣のない子ぢやないか。俺が盲目だと思つて人の前にそつと來て不意に耳のわきでラッパをふいたり、人が見えないと思つて、赤んべをしたり、なぐる眞似をしたり、ひどい時には小便をひつかける眞似までする。話にならない。

靜子。それでも子供が二人よれば仕方がありませんわ。惡氣ぢやないのですもの。

廣次。惡氣ぢやなくつてもいゝ氣はしないよ。どうせ碌な者にはならないよ。犠牲になつてやるやうな代物ではない。

高峯。それはかまふ必要はないね。

芳子。本當にありませんわ。

綾子。靜子さんはあんまりお優しいからいけないのですよ。

靜子。あんまり優しくもありませんわ。それなら、おいとまいたしませうか。

廣次。あゝ。

西島。もつと居たつていゝのだらう。

廣次。もつと蓄音器でも聞いて行かうか。

西島。よければきいてゆきませんか。

靜子。折角ですが又今度にいたしませうね。

廣次。高峯君達は今日は赤ちやんをつれてこなかつたのですか。

高峯。今日はおいて來ました。

廣次。今度家をもつたらどうか君も來てください。

高峯。ありがたう。

靜子。綾子さんもね。どうぞ。

綾子。ありがたう。是非上ります。

廣次。それならさよなら。

靜子。大變お邪魔をしました。

西島。それなら明後日又來て呉れ給へ。

廣次。ありがたう。

皆。さよなら。

（靜子、廣次の手をとり、あとの人皆送る。暫らくして西島、高峯兩夫婦室に歸る）

西島。隨分同情をするだらう。

高峯。本當にたまらないね。

綾子。靜子さんはお氣の毒ですね。始終涙ぐんでいらつしやいましたわね。

芳子。本當に妹さんはお美しい方ですね。

高峯。それにしても相川のやり方はひどいね。

西島。惡氣ぢやないのだらうけど、たまらない。まるでわかつてゐないのだ。

高峯。何んでも勝手になると思つてゐるのだね。さうして自分の方のことだけ考へてゐるのだね。

西島。本當に相川の體格檢査もしてやるといゝのだ。きつと花柳病になつて、またなほつてゐないのにちがひない。考へれば恐ろしい。先日俺は病院に入つてゐる友達を訪問したら、いたいよう、いたいよう、と子供のやうな叫び聲が聞えるのだ。なんだと聞いたら、梅毒患者で夜も眠れないやうになつてゐるのだと云つてゐた。初めの夜なんかその聲を聞いたらねられなかつたと云つてゐたつけ。そのあとで又行つたらもう聲が聞えなかつた。死んぢやつたのだと云つてゐた。六つ六歳もうきかないつたさうだ。金持の子なんださうだがね。あんな目にあふ人間は滅多にないのだらうけど、ありふれてゐると云ふことであんまり馬鹿には出來ないからね。相川の方こそ體格檢

査をしてやるといゝのだ。しかしそんなことをしてくれと云へば叔父さんは免職されるにきまつてゐる。考へれば考へる程野村の叔父は相川の奴隷のやうなものだね。どんな無理でも聞かなければならないのだ。

高峯。ありがたがつて聞いてゐるのだらう。

西島。それはさうかも知れない。その犠牲になつてはたまらない。

芳子。本當に。お氣の毒ですね。

綾子。本當に。しかし西島さんがあゝ云つてお上げになつたので御安心なさつたでせう。

西島。俺は早く仕事がしたい。金の力をかりるのはいやだ。しかし金持になりたいとも時々は思ふ。金でもつて惡勢力に勝つことは出來ないことは知つてゐる。今更に釋迦や耶蘇の道は實に本當な道だつたとも思ふ。しかし自分なんかまだ、今の世では金の力を要求することがある。さうしてその方では殆んど無能力者だからね。

高峯。本當に僕達の仕事は、金には縁はないね。アトリエ一つまだ建てることが出來ないのだ。

綾子。もうお暇しませうか。子供が泣いてゐはしないかと氣になりますよ、泣き聲が聞えるやうな氣がしますわ。

高峯。それなら行かう。

西島。又來給へ。

高峯。ありがたう。君もその内に來給へ。

西島。近い内にゆく。畫も見たいから。

綾子。その時、あなたもよかつたらきつといらつしやいね。

芳子。ありがたう。きつとゆきます。

皆。さよなら。

（四人退場、まもなく西島と芳子登場）

芳子。（蓄音器をかたづけながら）廣次さんの妹さんは隨分美しい方ね。

西島。あゝ。

芳子。さつきそんなにも美しくないやうなことをおつしやつた癖して、（間）明後日迄に二十圓をどうしておつくりになる心算。

西島。うちにいくらある。

芳子。二三圓切りありませんわ。

西島。郵便局には。

芳子。十圓切り。

西島。それでは今月はどうする心算なのだい。

芳子。來月分を拜借しようと思つてゐましたの。それより仕方がありませんわ。貴方はちつともかまはないのですから。

西島。どうにかなるよ。

芳子。明後日迄に三十圓つくるやうなことをおつしやつていらつしやいましたが、お出來になる心算だつたの。

西島。出來なかつたら本を賣る心算だつたのだ。この本でも皆賣れば二三百圓にはなるよ。

芳子。皆お賣りになるおつもり。

西島。さうでもないけど。いざとなれば賣つてもいゝと思つてゐるよ。本は買へる時に買へばいゝ。どうせさう讀めはしないのだから。

芳子。いつまでお世話なさるお心算なの。

西島。必要がなくなるまでだ。

芳子。そんな呑氣なことをおつしやつては困りますよ。私に許り心配かけて。私は夜も碌に眠れませんわ。昨晩だつて、私は自分のもつてゐる着物をならべて見て、皆三四年前につくつた着物で、一つも着られる着物がないので泣いてゐる夢を見ましたわ。

西島。そんな贅澤なことを云つたつて仕方がないよ。

芳子。贅澤ではありませんよ。本當に一つも着物がつくれないのですもの、すまして外をあるくことの出來る着物はありませんわ。皆

古いはやり許りですわ。

西島。そんな呑氣なことが云つてゐられるかい。

芳子。あなたは野村さんの妹さんが綺麗なものでそんなことをおつしやるのですわ。

西島。そんなことはないよ。

芳子。きつと貴夫はあの方があんなにかゞやくやうに美しくなかつたら、金なんかつくらうとはおつしやりません。

西島。默らないか。

芳子。本を皆お賣りになるといゝわ。

西島。賣らなければならない時がくれば、賣るとも。

芳子。野村さんの妹さんは貴夫の顏許り見てあなたには何んでも云へると思つていらつしやるのですわ。さうして貴夫にあまえてゐるのですわ。今日初めてお逢ひになつたのに。

西島。お前は同情しないのかい。

芳子。同情しますわ。ですけど貴夫があんまり同情なさるのですもの。きつと私がゐなかつたらいゝと思つていらつしやると思つたら腹が立つて來ましたわ。

西島。そんなことがあるものか。お前は野村の話を聞いても、俺のすることがまちがつてゐると思ふのかい。お前を餓ゑ死させるやうな眞似をしてまで俺は野村兄妹を助けようと思つてゐると思ふのかい。着物なんかどうだつていゝ。着物のことなんか考へる餘裕があるなら、野村のことを考へてやるがいゝ。俺一人の考へでどうでもなるのぢやないか。お前は自分のこと許り考へてゐない。廣次の妹が相川の處へ行つてもいゝ、いけばいゝ氣味だぐらゐ思つてゐるのだらう。

芳子。そんなことはありませんわ。ですけどあんまり美しすぎますわ。心配になりますわ。

西島。大丈夫だよ。

芳子。それに一月や二月のことぢやありませんからね。私心配ですわ。貴夫は少しもかせがうとなさらないし。

西島。俺はどんなことがあつたつて、餓ゑ死さしてもらへないことを知つてゐるからな。お前だつて、お前の實家がお前を餓ゑ死させやしない。俺達は自分のことを心配しなくつていゝ人間だ。

芳子。私はそのこと許りを心配してやしませんよ。

西島。お前は俺を信用出來ないのかい。

芳子。今は出來たつて、あとで出來ない時が來さうな氣がしますわ。それに毎月金をつくるのは大變ですわ。本がなくなるのも淋しいわ。

西島。それなら俺は廣次に、妹を相川にやるより仕方がないと云へばいゝのかい。

（本をとつてたゝきつける。お客がゐた時ののみかけのお茶がこぼれる。暫時沈默）

西島。茶をふけ！

（芳子不平さうな顏して淚ぐむ、しかし從順にお茶をふく）——幕——

第三幕

廣次の借間

（二階、至つて粗末、天井低し。廣次一人で氣をむさくさせてゐる。さうかと思ふと耳に注意をあつめてゐる。まもなく靜子登場）

廣次。どうだつたい。雜誌は出てゐたかい。

靜子。えゝ。二つ三つ出てをりました。

廣次。俺のものの評は出てゐたかい。

靜子。いゝえ。

廣次。出てゐなかつたのかい。

靜子。はい。

廣次。矢張り西島の云つた通り反響はなかつたかな。

靜子。まだ出ない雜誌もありますから。

廣次。俺は矢張り空想家だ。あの小説が出たら、何處からか手紙がくるかと思つてゐた。又誰かが俺をたづねて來はしないかと思つてゐた。もう世間では俺の名は忘れてゐる。忘れてゐるのがあたりまへだ。覺えてゐると思ふのが蟲がいゝのだ。

靜子。それでもお兄さんのいらつしやる處がわからないのですから仕方がありませんわ。

廣次。本屋か、西島の處へ手紙をよこしさうなものだと思つてゐたのだ。俺はあの作が不滅なものとは決して思つてはゐない。しかしどうかしたら俺の運命をもう少しは切り開いてくれるかと思つてゐた。しかしそれは蟲がいいのだ。

靜子。なんでも氣永におやりにならなければ。

廣次。俺達は氣永にやつてゐられる身分ではないよ。俺達はさう何時までも西島の世話に許りはなつてはゐられない。

靜子。そんなことをおつしやつたつて仕方がありませんわ。西島さんはお兄さんがさう思つて無理をなさることを心配していらつしやいましたわ。

廣次。西島はその心算だらう。しかしそれで安心はしてゐられないからね。

靜子。それはさうですわ。ですけどお兄さんはこの頃少しあせりすぎていらつしやるやうな氣がして。

廣次。あせらないではゐられないからさ。俺はもう一日でも早く安心がしたいのだ。俺はものになる人間だと云ふことをしつかりつかみたいのだ。俺は西島に世話になる甲斐のある人間だと云ふことを知りたいのだ。さもなければこんな生活をしてゐるのは男として恥づべきことだ。あんまり蟲がよすぎる。

靜子。西島さんはお兄さんの心をよく御存知ですから、やきもきなさることはありませんわ。それより頭でもおこはしになつたらそれこそ大變ですよ。

廣次。俺の頭はそんなことでは參りはしないよ。大概の修行はつんでゐるからね。俺の頭は苦しむことには馴れてゐる。

靜子。それでもこの頃は夜も碌におねにならないでしよ。

廣次。それ程のことはないよ。しかし少し寢不足かも知れない。お前も寢たりないだらう。

靜子。私は平氣ですよ。私は頭はつかひませんから。私は利口になる必要がないのですもの。

廣次。お前はどうしてさう野心がないのだらう。

靜子。私の希望は皆、お兄さんが一人で背負つて下さるのですもの。

廣次。（皮肉らしく）たよりになる兄だからな。

靜子。私、本當にたよりにして安心してゐますわ。

廣次。俺はこの頃、自分が少したよりにならなくなつてゐる。

靜子。そんな心細いこと。

廣次。俺はお前が留守の間いろ〳〵のことを考へた。俺は本當に心細くなつた。俺は西島に手紙を書かうかと思つた。俺は昨日お前に俺のかいた小説をよみなほしてもらつたね。あの時以來、俺は希望をとり返すことが出來ないでゐる。もつとかけてゐると許り思つてゐたのだ。處がまるでかけてゐない。あんなことでは何時になつたら、俺の仕事に日の目が出來るかわからない、叔父さんの家にゐる間時

聞さへ俺のものだつたらと思つてゐた。しかし今は時間は俺のものになつたが、俺の仕事は少しもはかどらない。

靜子。それでもこゝにいらしつてから二つおかきになりましたわ。

廣次。あんなものはかいた部類に入らない。

靜子。それでも西島さんも、高峯さんもお賞めになりましたわ。

廣次。それは俺に厚意があるからさ。俺に希望が與へたいからさ。

靜子。そんなことはありませんわ。私も本當にいゝものだと思ひますわ。

廣次。駄目だ。俺の運命を切りひらいてくれる力のない作が何になる。皆腹の底で俺を盲目だと思ふのであんなものを賞めるのだ。厚意は嬉しくないことはない。しかし厚意を喜ぶ理由は今はない。

靜子。西島さんになんと云ふ手紙をおかきになるつもり?

廣次。俺は本當のことを聞かしてもらひたいのだ。それから俺は金をとる道をさがしてもらひたいのだ。

靜子。なんで金をとるお心算なの。

廣次。俺はそれを何度と云ふことなく考へた。俺は商賣しようかと思つた。何かつまらない話でも書かしてもらはうかと考へた。併し本當云ふと、俺は何にもいゝ考へは浮ばなかつた。

靜子。矢張りそんな迷ひを起さずに、今の仕事をしていらつしやるより仕方がありませんわ。その内にうまい話があるかも知れませんわ。

廣次。俺もさう思つてゐた。誰かうまい話をもつてくる人がありさうなものだとも思つた。處がない、あれば隣りの婆さんが何處からか聞いて來た話のやうなものだ。

靜子。もうおよしなさいよ。あの話。

廣次。相川の話よりは不愉快ぢやなかつた。實際いやな奴の妻になるよりは妾になる方がいゝ。

靜子。いやなこつてすわ。

廣次。今に藝者になれ、女郎になれ、プロスティチュートになれなぞと云つてくる奴があるだらう。

靜子。いやな方ね。本當に。

廣次。あはゝゝ。情けないと云ふより滑稽だ。俺は昨晩思つたよ。今にお前は内證で夜はかせぎ晝は俺の仕事を助けるやうになるかも知れないと。

靜子。お兄さん。およしなさいよ。そんな話。

廣次。それでも相川の妻になるよりはいゝ。

靜子。相川の妻になるとは誰も云ひませんわ。

廣次。お前の心の内で一滴でも相川の妻に、思ひ切つてならうか知らんと思ふ心があつたら承知しないよ。

靜子。ありませんわ。

廣次。なければいゝ。

靜子。お兄さんは本當に疑ひ深いのね。

廣次。盲目になると人間は疑ひ深くなるよ。お前の顏が見えないと、殊にお前の目が見えないと、お前の心のあり場所が不安心でいけないことがある。どうも耳へ入るものだけでは信用が出來ないからね。怒つてはいやだよ。俺は先日からから思つてゐる。もしかしたら俺のかいたものにたいして恐ろしい惡口が何處かに出てはしまいかと思つた。それをお前が知つてゐながら俺にかくしてゐるのではないかと思つた。今日もそんな氣がした。お前が何にも出てゐないと云つた時、俺は腹の底に力がなくなつた。他人の惡口では俺はへこたれ切りはしない。しかし盲目のかなしさに、いろ〳〵の空想が浮ぶ。さうして浮んだ

空想は消えない。お前がさうでないと云つても、女々しい愛から默つてゐてお前一人が心をいためてはしないかと思ふのだよ。この頃お前のことを思ふとなんだか淋しいよ。お前の泣いてゐる姿や作りが目の前にちらつくよ。俺も淋しいが、お前はなほ淋しくはないかと思ふよ。

靜子。そんなことはありませんよ。お兄さん、私は段々希望をはつきりもつて來ましたわ。さうしてこの頃嬉しいのですよ。

廣次。お前の手はこの頃水仕事をするのでこはくなつたね。

靜子。いゝぢやありませんか。

廣次。お前の手の美しさは俺を喜ばしてゐた。目の見える間は勿論、目が見えなくなつてからも。その美が段々こはれてゆく氣がする。

靜子。指なんかどうなつたつてよろしいわ。

廣次。それはなつたつていゝけれど、惜しい氣もするよ。

靜子。ちつとも惜しかありませんわ。それよりお兄さんは少し衰弱におなりになつたのね。寢不足がいけないのですわ。少しおやすみになつたらどう。

廣次。さうだな。寢たら少し元氣になるかも知れない。俺も元氣にするから、お前も元氣におしよ。

靜子。えゝ、私は元氣にしてゐますから、本當にお兄さんも元氣にして頂戴よ。お兄さんがいやなことをおつしやると私も心細くなりますわ。本當に安心して、自分の仕事をしていらつしやればいゝのですわ。

廣次。どつちにしろ、それより外に道のひらけやうがないのだ。安心おし、きつとものにするから。實際西島は俺の心を知つてゐる。俺がいゝ氣になつて西島の世話になつてゐないことを知つてゝくれるから安心は安心だ。

靜子。蒲團を敷きませうね。

廣次。あゝ。

（靜子、粗末な蒲團を敷く）

靜子。敷きましたわ。

（廣次、手さぐりで、ねる）

靜子。お寒くなくつて？

廣次。あゝ。寒くはないよ。

（一寸沈默）

廣次。靜ちやん。

靜子。えゝ。

廣次。何をしてゐる？

靜子。何にも。

廣次。何か考へてゐる？

靜子。何にも。

廣次。叔父さんのうちのことを時々考へるかい。

靜子。時々は考へますわ。

廣次。しかし出たことは後悔しないかい。

靜子。後悔しませんわ。

廣次。今晩靜ちやんは西島が來るかも知れないと思つてはしなかつたかい。

靜子。どうしてわかるの。

廣次。俺もくるかと思つたからさ。

靜子。お兄さんは鶴子さんを戀したことがおありになつて？

廣次。どうして不意にそんなことを云ふのだい。

靜子。私はこの頃時々さうではないかと思ひますのよ。

廣次。正直に云へばおもつたことはある。さうして今でも思つてゐると云つても譃ぢやない。

靜子。[illegible]？　こなひだ鶴子さんにあつてどうお思ひになつて？

廣次。嬉しかつたよ。もつと逢つてゐたい氣もしたよ。

靜子。あんまり隨分お苦しかつたでしよ。
廣次。疲れてゐるからね。
靜子。あの晩、一晩お泣きになつていらつしやつたわね。
廣次。あゝ。いろ〳〵のことが考へられたのだ。お前も泣いてゐたらう。
靜子。はい お兄さんがなんとなくお氣の毒な氣がしたので。西島さんのお宅にゆくといろいろのものがありましたから。
廣次。さうしてそれが俺に見えないからか。
靜子。一緒にお話が出來ないので。
廣次。二人はあの日歸つて來て殆んど何にも饒舌らなかつたね。
靜子。本當に。
廣次。俺達は淋しいね。
（沈默。二人のすゝりなく聲がかすかにする）
廣次。この淋しさから何か生れなければあんまり悲慘だ。
（沈默）
廣次。靜ちやん。枕許へおいで、さあ。
（廣次右の手を出す。靜子兩手で大事さうにそれをさする）
廣次。俺の一生の仕事はお前にさゝげるよ。
靜子。そんなことを云ふとお兄さんの奥さんになる方がお氣の毒ですわ。
廣次。俺の妻になるやうな奴がゐたら、どうせその女は幸福ぢやない。
靜子。そんなことありませんわ。
（沈默）
靜子。お兄さん。
廣次。もう默つておくれ、眠られさうだから。
靜子。はい。
（沈默）
靜子。お兄さん。（返事がない）もうお寢になつたの。
（靜子室をかたづける。婆さん登場）
婆。お客さんです。
靜子。さうお。お通しして下さい。
婆。はい。（退場）
（靜子少しして迎へにゆく。西島登場）
靜子。今さつき、おいでになるかも知れないと兄とお噂してをりましたのです。
西島。野中君は、何處かおわるいのではないのですか。
靜子。いゝえ、昨晩少しも寢ませんでしたのでたつた今寢したのです。（廣次の方を向いて）お兄さん。西島さんが。（起さうとする）
西島。もつと寢さしておいておあげなさい。
靜子。それでもあんまり失禮ですから。
西島。僕はかまひません。どうせ今日は暇なのですから。雜誌屋へ一寸よりましたら。
（靜子手に指をあてる）
靜子。（小聲で）あのことはまだ兄には申してないのです。
西島。（小聲）さうですか。
（二人障子をあけて外を見ながら）
靜子。兄は反響がないので氣をくさらしてをりました。
西島。さうですか。
靜子。（少し小聲で）云はうとも思ひましたのですが、あんまりひどい批評ですから。
西島。腹が立つたでせう。
靜子。もう少しで本屋で泣く所でした。あんまりですから。あんなことを云はれたつて大丈夫、兄のものはいゝものですわね。
西島。大丈夫です。誰だつてあの位の惡口は云はれるものです。心細く思つていらつしやるといけないと思つて上つたのです。
靜子。ありがたう御座います。あなたの御[illegible]を兄のものが汚したやうに書いてありましたわね。なぜあんなくだらないものを雜誌で出し

たのだらう、出すもの、出すものだ、載せるもの、載せるものだとかいてありましたわね。

西島。馬鹿ですよ。野村君のやうな人があることが持へられないもので、つくりものだ、詩題だ、其人まるだしのセンチメンタルなものだと云つたのです。あそこに出てゐる、實感がわからなかつたのです。生きる苦しさが感じられないのです。しかしそんな惡口を云はれたつて安心です。云ふものは亡びますが、云はれるものは勝ちます。

静子。それでもこの新聞に出てゐたのと同じやうなことが書いてありましたのでたいへん心細い氣がしました。

西島。安心です。私なんかも隨分いやな評をされたことがあります。同じ人に同じやうな惡口をされたのです。文學はやめるがいゝとも云はれた計りでなく、下等の鼠かりな、見得坊の、淺薄な、譫かしかりに思はれたのです。しかし批評された私はまあ下りにもならず、どうかかうか、いはば勝利の道を歩いてゐます。批評した奴は皆滅亡してしまひました。一二三年前まではなかなかはうついてゐましたが。

静子。本當にあなたがそんな惡口を云はれたのですか。

西島。えゝ。一小さき超人とか云ふ小説でした。

静子。あれですか。私はあれを兄によんで聞かせて一人で泣きましたわ。いゝものだと兄は感心し切つてをりましたわ。

西島。批評家は頭からそんなものを見ないと疑つてかゝるのです。そんなにいゝものがこの世にころがつてゐるわけはないと頭からきめてかかつてゐるのですからたまりません。

静子。あなたのお話を伺つて安心しましたわ。

西島。それはさぞおあせりになるでせう。しかし氣永にやるより仕方がありません。二三年は反響がない覺悟でなければ。

静子。兄は、あなたのお世話になつてゐるのを頻りに氣にしてをります。

西島。それはいけません、十分なことは出來ませんけれど、そのことは安心して下さい。

静子。私はあなたにおすがりして親身に乘つたやうな氣でをりますのですけれど。

西島。あんまりいゝ親身でもありませんけれど。この家はおうるさくはありませんか。

静子。いゝえ。

西島。もつといゝ家がありさうなものですが。

静子。兄は、こゝがやすかつたので氣に入つたのです。私も氣に入つたのです。こゝからあなたのお家の屋根が一寸見えます。

西島。さうですか。

静子。あそこの隠家のうしろに一寸家根が見えますね。

西島。えゝ。

静子。あれがあなたのお家です。

西島。本當にさうですね。あの隠家が僕の家のすぐ向うにある家です。

静子。私は、來た時から、さうではないかと思つてゐましたが、二三日前に本當にさうだと云ふことを知りました。

西島。よくわかりましたね。

静子。それはわかりますわ。

西島。こゝは中々見はらしがよろしいね、

静子。えゝ。（一寸沈默）もう兄を起しませうか。

西島。僕はかまひません。

静子。本當に、いろいろお世話になりましたね。

西島。いゝえ。

静子。兄は、早く、いゝものをかいて、あなたの御信用に背かない事がしたいと申してゐまし

たわ。
西島。さうですか。
静子。あなたは鴨居に頭がおとゞきになりますわね。
西島。えゝ。髪毛で鴨居の掃除が出來ます。
静子。本當にね。あの時、あなたが來て下さらなかつたら私は今どうしてゐるでせうとよく考へますわ。
西島。本當にあの日あなたの處へ行つたのは偶然とは思へない氣がします。
静子。私、どうかして兄を安心させたいと思ひますの。兄はあせつてゐますし、自分について少し疑ひ出してゐます。本當に心細いらしい時があります。私も時々本當に心細くなる時が御座います。兄がものになつてくれたらどんなに嬉しいだらうとよく思ひます。
西島。大丈夫だと思ひます。
静子。あなたは私達に金をくださる代に本をお賣りになるやうなことはないのでせうね。
西島。なぜです。
静子。私はそれが一寸氣になつてゐるのです。
西島。どうしてです。
静子。初めて上つた時に見覺えてゐました本がつぎに上りましたら見つかりませんでしたから。
西島。誰か持つていつたのでせう。
静子。それならよう御座いますけれど、永い間のことですから御無理をなさると困りますよ。
西島。大丈夫です。なが年の功で、働けば金がとれるのですから。
静子。早く兄もさうなるといゝと思ひますの。「間」あなたの處には大變御本がおありになりますが、あんなに勉強しないと、いゝもの、書けないと云ふことはないでせうね。
西島。そんなことは決してありません。私だつて、讀んだ本はあの内の十分の一もありません。さうして讀んでもすぐ忘れてしまひます。
静子。兄は少しは横文字も出來たのですけれど。
西島。出來ないでも大丈夫です。
静子。あなたは私達をあはれんでそんなことをおつしやるのではないでせうね。
西島。私は有望でない人には同情しません。
静子。あなたは私に同情して下さるのではないでせうね。失禮なことを申しますけれど。
西島。貴女がゐなくつてもお兄さんを信用するには變りはありません。
静子。私はあなたを信用してをりますわ。
西島。どうか信用して下さい。
静子。私は兄が可哀さうで仕方がありません。あなたも、高峯さんも立派にやつていらつしやるのに。高峯さんの綾子さんをかいた畫は隨分評判で御座いましたわね。
西島。えゝ。
静子。今、高峯さんは綾子さんの裸體畫を書いていらつしやるのですつて?
西島。えゝ。
廣次。それは本當かい。
静子。(おどろき)いつお目ざめになつたの。
廣次。たつた今だ。
静子。西島さんがいらつしやつてゐますよ。
廣次。よく來てくださいました。ちつとも知りませんで、失禮しました。なぜお前は知らせなかつたのだ。
静子。よくねていらつしやるのですもの。今の話を聞いていらつしたの。
廣次。夢のやうに聞いてゐた。
静子。いやな方ね。ぬすみ聞きして。
廣次。つい聞いたのだよ。(起きる)蒲團をかたづけておくれ。

静子。はい。
廣次。今日は、君が來て下さるかと思つてゐたのです。
西島。さうですか。
廣次。雜誌は何時頃出來ますか。
西島。明日頃でせう。
廣次。私のものを又出しても不服を云ふ人はありませんか。
西島。え丶、ありません。この前は皆賞めてゐました。
廣次。世間では何とも云はないさうですね。
西島。え丶。
廣次。それがあたりまへですが、淋しい氣もします。
西島。反響がまるでないと思ふ時に、ぽつ〳〵反響のあるものです。
廣次。君はどうでしたか。
西島。少しほめられだしたのは三年のちでした、世間で存在を認めだしたのは五年目でした。もつと早い人もありますけれど、それは先輩に認められた人に限るやうです。今の先輩に認められるやうでは心細い氣がします。どうしても後輩に認められるやうなゆき方をするものは二三年辛抱しなければならないでせう。苦しいこともあるでせうけれど、辛抱が必要です。
廣次。私は辛抱にかけては人にまけない心算でしたが、この頃はへんにあせつていけません。お茶をおくれ。
静子。はい。まだ西島さんにお茶もあげませんでしたわね、御免あそばせ。
廣次。お菓子でも買つておいで。
静子。はい。
西島。それには及びません。
廣次。買つておいで。
西島。遠慮するやうに、本當に……
静子。(笑ひながら)お兄さん、私今氣がつきましたわ。お兄さんはお氣がつかないの。
廣次。なんだ。
静子。お菓子を買ふお金は誰から戴いたの。
廣次。それだつていゝぢやないか。俺の處にあるものは一つ殘らず西島君に買つて戴いたやうなものだ。今更それを可笑しがる程のことぢやないぢやないか。
静子。それでも、西島さんが遠慮なさつて、お兄さんが買へとおつしやるのが可笑しいわ。
廣次。馬鹿、默つておいで!
静子。はい、(蟇口をさがす)
廣次。少し遠くへ行つて、いゝのを買つておいで!
静子。はい。(退場)
廣次。(沈默。小聲で)妹は行きましたか。
西島。え丶。いらつしやいました。
廣次。許して下さい。實は私はまだすつかり寢てはゐなかつたのです。うと〳〵とはしてゐましたがさうしてお話を殘らず聞いたのです。
西島。殘らず。
廣次。え丶、殘らず聞きました。盲目になつてから疑ひ深くなりました。妹が私を起しましたけれど、その起しかたは、私の寢てゐることを望むやうな起しかたの氣がしたのです。さうしてあなたの御返事も、私の寢てゐるのを幸に思つていらつしやるやうに思へたのです。それで私もさう思はれてゐたいやうな氣がしたのです。どうか怒らないで下さい。私達兄妹が互に信用してゐないやうなのも不快に思はないで下さい。
西島。不快に思ひたくも思へません。
廣次。私にはこの頃いろ〳〵のことが考へられるのです。私はこの頃本當に心細くなつて來ました。惡口を云はれるのが心細いので

はありません。尤も心細くないこともありませんけれど、それはどうにでもなります。いつまでも負けてはゐません。私の心細いのはいつまでもあなたのお世話になつてゐなければならないことです。

西島。そのことなら安心して下さい。

廣次。本當にそれでいろ／＼御迷惑をかけてゐることと思ひます。それに私はへんなことを聞きました。氣にすることではないのです。ですが御迷惑をかけはしないかと思ふのです。妹はそのことを知つてゐるか、知つてゐないか知りません。

西島。何です。

廣次。あなたが聞いたらおおどろきになるやうなことです。

西島。なんです。

廣次。近所の噂だと、妹をあなたの妾だと云ふのです。

西島。えゝ。そんな。

廣次。隨分馬鹿にした噂です。私はそれを聞いてあなたにすまないと思ひました。

西島。僕にすまないことはありませんけれど。隨分ひどいことを云ふものですね。さぞ腹が立つたでせう。

廣次。私は一月ぶり位に湯に行つて、その話を一寸聞いたのです。私の耳は他人のよりはよく聞えます。小聲だつたのですが、聞えたのです。私はかつとして、身ぶるひがいたしました。其處にたふれるかと思ひました。

西島。御尤もです。

廣次。私は歸つてから、すぐあなたの處へ手紙を出して、あなたのお世話になることをお斷りしようかと思つたのです。そんな噂をたてられて、それが新聞にでも出たら、さぞ御迷惑だらうと思ひました。又奥様も、さぞ腹をお立てになるだらうと思ひました。私はどうなつてもいゝから御斷りしなければならないと思つたのです。ですが考へてゐる内にお斷りしたあとのみじめさが目に浮んだのです。さうなれば妹はきつと相川の處へゆくでせう。私にはそれは又堪へられないのです。

西島。それなら私さへ來なければいゝでせう。私があんまり何度も來たものでそんな噂が立つたのでせう。そんな噂が立つと知つてゐたらそんなに來なかつたでせうが。

廣次。あなたが來て下さらなかつたら、私は勿論、妹も淋しがるでせう。どうして私はかう不運なのかと情けなくなります。私はどうせものにならない人間なのかと思ひました。私は生きてゐても死んでも同し人間ではないかと思ひました。そんなことはない、そんなことはない、私は自分に何度もさう云つて自分を慰めます。しかしそれはただ慰めにすぎないのかと思ひます。自分はどうなつてもいい、ただ妹が可哀さうだと思ひます。二三日前です。妹が歩いてゐましたら通りの婆さんか或人に頼まれたのだと云つて、月三十圓位で妾にならないかとすゝめられたさうです。妹は可笑しくつて腹も立たなかつたと申しました。しかし妹の泣いてゐることは私には感じられました。恐ろしい侮辱です。

西島。こゝはきつと處がいけないのです。何處かへ引越したらいゝでせう。

廣次。さうも思つて見ました。ですけれど私の心細いのは、さう云ふ噂許りから來るのではないと思ふのです。この様子でゆけば、二月たつても、三月たつても、私は決心がつかなくなる許りです。私にはいろ／＼の恐ろしい空想さへ浮びます。進むことも退くことも出來ない時が來さうな氣がします。現在私は事實を正視することが出來ないやうな氣持になつてゐます。どうにかなると云ふ氣持は今はし

ません。私は本當に臆病ものになりました。

西島。心配しないで下さい。僕の方はどうにかなると思ひます。さうしてこゝへはなるべく來ないやうにします。淋しかつたらどうか君の方から來て下さい。

廣次。ありがたう。(間)私は時々どうしてかう運命にいぢめられるかと思ひます、私より運のわるい人はあるでせう。しかし私は隨分運命には從順なつもりです。さうして出來るだけのことをやつてゐる心算なのですが、いざと云ふ時になると何時も思ひがけない、不幸が起つて來ます。さうして私に致命傷を與へようとします。これでもか、これでもか、これでもまだくたばらないのか、運命はそんなことを囁いて嘲笑つてる氣がします。きつと今に何か起つて來さうな氣がします。さうして私を世話する人間も運命から睨まれてゐるやうな氣がします。さうして運命はあなたから私をひきさきさうな氣がします。

西島。私は大丈夫だと思ひます。

廣次。あなたは大丈夫でせうが、奥さんが。

西島。……………

廣次。妹が歸つて來ました。昔の運命劇にありますやうに私の一家は何かに呪はれてゐる氣さへします。そんなこともないでせうが。

(靜子登場)

靜子。唯今。

廣次。早かつたね。

(靜子菓子を紙にのせて出す)

靜子。さうお。それなら又何處か散歩して來ませうか。なんだか西島さんがお歸りになりさうな氣がしましたので。

廣次。散歩してこないでもいゝよ。(西島に)私は先日妹にイフィゲニエの譯をよんでもらつて自分の家にもあんな呪ひがありはしないかとさへ思ひました。それとも、私が今度出した小說にあります通り、敵の探偵を殺したのが祟つて居るのかとも思ひました。他の人は殺した瞬間に致命傷は受けなかつたでせうが、私はその瞬間には致命傷を自分が受けたやうな氣がしました。さうして私の一生は狂ひ出すかも知れないと思ひました。私が盲目になつたのはそれからまもなくでした。見てはならないことを見たのかと思ひました。まだ碌に戰爭もしない內でしたからなほ氣がとがめたのかも知れません。

靜子。お兄さん、それは神經ですよ。そんなことはあるわけはありませんわ。お兄さんの運命はきつと今にひらけますよ。私はそれを疑ひませんわ。もう一息と云ふ處に來ていらつしやると思ひますわ。

廣次。生意氣なことを云ふな。お前にはそんなことがわかるものか。

靜子。わかりますわ。ね、西島さん。

廣次。俺だつて、もろくは負けはしないよ。俺だつてお前が俺を信用する以上に俺を信用してゐるよ。「今に見ろ」と云ふ氣はたえずしてゐる。石にかみついてもと云ふ氣もたえずしてゐる。しかし俺には俺を十重二十重にとりかこむ見えない禍があるのだ。俺はそれを感じてゐる。

靜子。私、その見えない禍をとつてあげますわ。

廣次。お前にとれるかい。

靜子。とれますわ。昔からさう云ふ禍をとるのは女のつとめですわ。イフィゲニエがさうですわ、橘姫だつてさうですわ。私だつてそれが出來ないことはありませんわ。

廣次。お前は何を考へてゐるのだ。

靜子。(笑ひながら)何んでもありませんの。ただふと私にさう云ふことが出來さうな氣がしましたの。

廣次。それなら早く禍をとつてくれ。

靜子。そんなにせいたつて駄目ですわれ。西島さん。時がありますわね。いざと云ふ時が。

廣次。お前は相川の妻になつてはいけないよ。

靜子。誰がなるものですか。(西島に)ね。(間)兄はこの頃よく不意にお前、相川の妻になつてはいけないよ、どうしても相川の妻になつてはいけないよと申しますの。本當にどうかしてをりますの。(氣をかへたやうに)お兄さん。今日も隣りの婆さんが私に妾になる氣はないか、月四十圓でと申しましたわ。二三日前からくらべると十圓あがりましたわね。

廣次。又、そんなことを云つたか?

靜子。本當にうす氣味のわるい世の中ね。

西島。本當に引越したらどうです。

靜子。引越したくはありませんわね。お兄さん。私金で私が自由になると思つてる人が出れば出る程面白いと思ひますわ。何時か西島さんがおつしやつたやうに金で自由にならない女のゐることを知らせてやりたいのですよ。私もつと〳〵侮辱されて見たいのですよ。私、きつとかちますわ。さうしてさう云ふ奴をじり〳〵させてやりますわ。

廣次。お前は何んと返事したのだ。

靜子。よく考へておきますとさう云つてやりましたわ。さうしたらもつと詳しく話さうとするので、閉口しましたわ。なんでもさきの男と云ふのが四十幾つとか云ふのですつて。本當に面白いことがありますわね。今にどんなことを云つてくるか知れやしませんわ。

廣次。お前はどうかしてゐるね。

靜子。どうかしないではゐられませんわ。私、本當はもつと可笑しなことを聞きましたの。

廣次。なんだ。

靜子。西島さんは耳を押へてゐて頂戴よ、聞かないふりをして頂戴よ。隣りの婆さんは、今の旦那からはいくら貰つてゐると申しましたわ。

西島。(立ち上り)僕は歸ります!

靜子。なぜ? お怒りになつたの。

西島。いゝえ、怒りはしません、が、頭痛がしますから。

靜子。さうですか。それでは又ね。

西島。ありがたう。さよなら。

靜子。さよなら。

廣次。さよなら。

(靜子送らうとする)

西島。どうか送らないで下さい。

靜子。(小聲で)お怒りになつていらつしやるの。

西島。いゝえ。たゞ急に一人になりたくなつたのです。

(二人ふと手を握りあふ)

靜子。(小聲で)近い内に二人だけでお話したいと思ひますが、御都合のいゝ時をお知らせ下さい。

西島。(小聲で)お知らせしませう。(普通の聲で)さよなら。

靜子。さよなら。

廣次。さよなら。

(西島退場。一寸沈默)

廣次。なぜお前はあんなものの云ひ方をするのだい。

靜子。それでも、それでも、氣が狂ひさうだつたのですもの。あんまりですわ。(泣く、廣次も涙ぐむ)

——幕——

第四幕

西島の室

(第二幕に同じ、たゞ本棚に白い布がかぶ

せてある)

西島。皆でいくらになります。

古本屋。皆で二十圓五十錢です。

西島。さうですか。(本棚をしらべて三四の本の選擇に迷つたあとで大きい本一册とる)之を加へるといくらになります。

古本屋。いくらの本ですか。

西島。十圓の本だつたと思ひます、書いてあるでせう。

古本屋。(本をしらべ)えゝ書いてあります。十圓です。四圓にいたゞきませう。

西島。(又一册を出してくる)これは二圓の本です。

古本屋。それなら八十錢に戴いておきませう。

西島。全體で二十五圓三十錢になりますね。

古本屋。えゝさうです。

西島。それなら今日はそれだけにしませう。

古本屋。ありがたうございました。(蟇口を出し金をとり出し勘定する)

(女中登場)

女中。高峯さんがいらつしやいました。

西島。お通ししてくれ。

女中。はい。(退場)

古本屋。それならばこれで二十五圓と三十錢で御座います。

西島。たしかに。

古本屋。(本をつゝみ)それならば本を戴いてゆきます。

西島。どうか。

(高峯登場、會釋して古本屋退場)

西島。(坐つたまゝ)失敬。

高峯。(坐りかけながら)失敬。

西島。暫らく逢はなかつたね。こなひだ不在に來てくれたさうだけれど失敬した。明日頃でも行かうかと思つてゐた。

高峯。昨日あたり君がくるかと思つてゐた。病氣か知らんと思つてゐた。

西島。病氣ではなかつたのだけど、この頃は身體がへんにつかれて出不精になつた。

高峯。何かやつてゐるかい。

西島。金まうけに小說を書いて見ようと思つたけれど、しくじつてしまつた。頭がつかれてゐるのでこの頃は夜がよく眠れないのだ。

高峯。それはいけないね。

西島。君はあれは出來たかい。

高峯。出來た。氣持よくいつた。近い内に見に來てくれ給へ。

西島。是非行かう。(時計を見る)

高峯。何處かへゆくのかい。

西島。いゝや。人がくるのだ。

高峯。僕がゐてもいゝのかい。

西島。二時にくる約束だから。

高峯。今何時だい。

西島。一時一寸すぎだ。

高峯。それなら僕は一寸ゐて失敬しよう。

西島。失敬だけど、一寸二人だけで相談がしたいと云ふのだから、今晩か明日の朝ゆくよ。

高峯。野村にこの頃逢つたかい。

西島。あゝ、三四日前に逢つた。

高峯。どうしてゐる。

西島。相變らずよわつてゐる。あいつのことを考へると、どうしたらいゝのかまるでわからなくなる。

高峯。今度の小說は面白かつたね。野村でなければ書けないね。

西島。あゝ、君はそのことを書いてやつたかい。

高峯。まだ書いてやらない。

西島。書いてやると喜ぶだらう、自分の力について隨分疑つてゐるらしいのだ。

高峯。目が見えなくつては自分で字が書けないので困るだらう。夜中に書きたくなつても妹を起すわけにもゆかないだらうし。妹

は飯の用意なんかもしなければならないだらうし。

西島。なにしろ目をやられてはたまらない。なほしたい處も碌になほせないだらうし、讀みなほすのも厄介だし、妹に知られたくないことは書けないし、いろ〱僕達にはわからない苦しみがあるだらう。

高峯。野村の書いたものにはそれが何處となく出てゐて、それに打克たう、打克たうとしてゐる所が、悲壯な感じを與へるね。生きることは苦しいとゴオホが云つたさうだが、野村なんかも本當の意味で生きることを苦しんでゐるのだから、それが何處ともなく出てゐるね。時々はいたましい感じがする。

西島。本當に逢へば逢ふ程氣の毒な氣がする。見てゐても苦しい。本人はさぞ苦しいだらうと思ふよ。それにキタナイ處に住んでゐるのだらう。いろ〱噂をたてられてゐるらしいのだ。それがまた、たまらない噂なのだ。

高峯。それは近所の噂の種になるだらうね。何しろ盲目と美しい娘とだからね。

西島。それに貧乏なくらしをしてゐるのだらう。それだものだからへんな誘惑を受けるらしいのだ、靜さんなんかお妾さんになつたらどうだと勸める人がゐるのださうだよ。隨分馬鹿にしてゐるね。

高峯。それはたまらないね。

西島。又見そめた奴でもゐるのだらう。しかしそれもいゝが、もつとひどい噂さへあるのだ。僕が何度も行つたもので、僕を靜さんの旦那だと近所では思つてゐるのださうだ。僕より他の人はめつたに行かないからね。

高峯。僕もゆきたくは思つてゐるのだけど、淋しさを與へさうな氣がしてゆかないのだ。

西島。僕はさう云ふ噂をたてられるのを困りはしないけど、二人に氣の毒で仕方がない。それで僕はもう暫らく行くのをやめようと思つてゐるのだ。二人は又そのことが新聞にでも出ると大變だと云つてゐるのだ、出ないとは限らないからね。僕はその話を野村から聞いておどろいてゐた。すると買ひものに出かけた、靜さんもそれを聞いて來たのだ。僕はそれを聞いて座にゐたたまれない氣がした。僕はすぐ立ち上つて野村の處を辭して一人で何處と云ふことはなしに歩きまはつた。泣きたいやうな氣がしたのだ。恐ろしいことが近づいて來たやうな氣がしたのだ。かくすのもいやだから白狀するがね。今日二時からくると云ふのは野村の妹なのだ。二人で相談したいことがあると云ふのだ。僕はこの頃野村の運命には自分は手をさへることが出來ない人間のやうな氣がするのだ。

高峯。僕の畫が若しかしたら賣れるかも知れないのだ。さうしたら半分野村に送りたいと思つてゐるんだ。

西島。今は金の方のことはどうでもなるのだ。正直に云ふと僕は金の心配は自分一人だけでしたいとさへ思つてゐるのだ。かう云へば僕には恐ろしいことが近づいてゐることがわかるだらう、一言で云ふと僕は久しぶりで又戀と云ふことを知つたのだ。

高峯。……

西島。恐ろしいことだ。さうしてこの恐ろしいことから恐ろしいことが生れさうな氣がするのだ。僕は近い内に、妻と遠い〱處へ旅行しようかと思つてゐるのだ。僕はその爲にも金まうけをしようかと思つてゐるのだ。しかし僕の一番恐れるのはそのことではない。そのことならば僕さへ辛抱してればいゝのだ。そのくらゐなことが出來ないことはない。恐ろしいのは野村の妹が自分からすゝんで相川の妻になりさうな氣がするのだ。さう思ふ

のは僕許りぢやない、野村もそれを恐れてゐるらしい。しかももつと恐ろしいのは自分の心の内のあるものと、野村の心の内のあるものが、それを望んでゐることだ。さうして野村の妹がそれを感じてゐることだ。

高峯。…………

西島。恐ろしいだらう。僕はこの頃それで少しもおちつかないのだ。

高峯。僕にはよく君の云ふ意味がわからない。

西島。簡單に云ふと、僕には野村の兄妹を養ふ力が今になくなりさうなのだ。半年ぐらゐはやりくりがつくかも知れない。しかしそれ以上やりくりはつかないだらう。僕は今迄に金のとれる口は皆自分の方からこはしてしまつた。原稿の値上げをせまつたり、尊敬が足りないとおこつたりして、さうして僕はこの頃、創作をやりかけるとしくじつて許りゐるのだ。僕も野村も今に自分を生かす爲には犠牲者を要求するのだ。それは二人の女の誰かだ。僕の妻か、野村の妹かだ。さうしてそのことを野村の妹は感じてゐるのだ。

高峯。恐ろしいね。

西島。僕は第三者の救ひをたのまうかと思つた。僕はいろ／＼の人を頭に描いた。だが僕はいゝ人も見つからなかつた。その上にいゝ人を見つけたくもなかつたのだ。僕は自分をこんなに恐ろしい人間だとは思はなかつた。僕は靜さんに最後の手段としてよき夫を世話しようと思つた。いゝ人が見つからなかつた。さうして自分は見つからないことに凱歌を揚げた。（時計を見る）あゝもうぢき二時だ。今日は僕の失禮を許してくれ給へ。僕の頭はどうかしてゐる。君と其處まで散歩をしよう。

（無言で二人退場。女中登場。あとかたづけをする、暫らくして）

女中。はい。（返事をして下へゆく）

（靜子、女中と登場）

女中。ぢきに歸つていらつしやいます。貴女がいらつしたら待つてて戴きたいとおつしやいました。高峯さまがいらつしやつたので送つていらつしやいました。

靜子。さうですか。西島さまと高峯さまによく似た方が角をおまがりになる所を見ましたつけ。矢張りさうで御座いましたのですね。

女中。きつとさうで御座いませう。（座蒲團をすゝめ）どうぞお敷きになつて。

靜子。ありがたう。

（女中退場、靜子おちつかないやうに歩きまはる。そつと自分の肖像畫の前に立ちどまる。足音がするので本棚の處にゆき、たれてある布をあげ見つめる。女中茶を持つてくる）

靜子。又古本をお賣りになつたの？

女中。えゝ。さつき古本屋が來まして、こんなに本をもつてゆきました。

靜子。さうですか。勿體ない。

（女中お茶をついですゝめる）

靜子。ありがたう。奥さまは？

女中。實家へ行らつしやいました。

靜子。さうですか。

女中。きつと殿樣はもう歸つていらつしやるでせう。

（女中退場、靜子障子をあけ外を見たが、耐へ切れずにしのび泣く。急に氣をとりなほし、涙をふく。まもなく西島登場）

西島。どうも失禮しました。（走けて來たらしく息がせはしい）

靜子。たつた今上つた所です。

西島。さうですか。

靜子、高峯さんがいらつしたのですつて？

西島。えゝ。
静子。いついらつしたの。
西島。一時頃でした。
静子。早くお歸りになつたのね。
西島。歸つてもらつたのです。
静子。私がくるからとおつしやつて？
西島。えゝ。
静子。あなたは正直な方ね。
西島。それでも相手が高峯ですからね。隠すのは氣がひけます。
静子。先日は失禮しました。
西島。僕の方こそ。
静子。あとで兄におこられましたわ。
西島。おかくしになつたので。
静子。何を？
西島。雜誌に評が出てゐたことや何んかを。
静子。いゝえ、まだ兄は知りませんですよ。
西島。いゝえ。御存知ですよ。こなひだ二人で話したことを野村君は皆聞いていらつしたのですよ。
静子。皆？　私には聞かないふりしてをりますよ。私もさうかとも思ひましたわ。あとで。
西島。野村君は元氣ですか。
静子。何んだか淋しがつてゐます。頭をこはしたらしいのです。
西島。それは御心配ですね。あんまり無理をなさるから。
静子。本當に。ですが無理もしたくなるでせう。あなたも今日は神經質の顔をしていらつしてね。
西島。さうですか。僕はわりに元氣です。
（風が少しふきこむ）
西島。寒くはありませんか。
静子。いゝえ、別に。
西島。障子をしめてよろしいか。
静子。えゝ。兄は今日私があなたの處へ上るのを心配してをりました。
西島。なぜです。（障子しめに立ちながら）
静子。なぜですか、私にもよくわかりませんの。兄はこの頃よく私のことを心配しますの。病氣になつてはいけないよ、やけを起してはいけないよ、思ひ切つたことをしてはいけないよ、と申しますの。私が兄について心配することを兄は私について心配しますの。
西島。本當にあなたはやけを起したくはなりませんか。
静子。ならないことも御座いませんが、出來るだけ辛抱したいと思つてをりますの。
西島。本當に辛抱してください。
静子。ですけれど隨分長い辛抱ですわね。さうしてあなたに御迷惑をかける辛抱ですわね。
西島。僕はちつとも迷惑はうけません。
静子。本がある間は、でせう。さうして本がある間ももうすぎですわね。あなたはこの頃少しもお金をおとりにならないのですね。
西島。とる必要がありませんから。
静子。（無理にほゝゑみながら）とれないからでは御座いませんの。本が段々なくなつては奥さまもお淋しいでせうね。
西島。本はあなたが思つてる程なくなつてはしません。
静子。私はもうだまされてゐる顔はしませんわ。本當の事おつしやつて下さつたらいゝでせう。
西島。どうか心配しないで下さい。この上あなたに心配かけたくはないのですから。
静子。そんなことおつしやると皮肉に聞えますよ。
西島。（立ち上り歩きまはる）決して皮肉ではありません。
静子。（西島の方は見ず、坐つたまゝ）なぜあなたは私の事をそんなに心配して下さるの。

西島。失禮かも知れませんが、あまりお氣の毒に存じますから。

（沈默）

靜子。本當のことをおつしやつて下さい。私はどうしたら一番いゝので御座いませう。どんな殘酷なことでもよろしいからおつしやつて下さい。

西島。今のまゝにしていらつしやるのが一番いいと思ひます。

靜子。本當にさうお思ひになるの？　どうか本當のことをおつしやつて下さいな。私どんなことを云つて下さつても嬉しいのですから。

西島。……

靜子。おつしやることが出來ませんの。

西島。どうか今のまゝにしてゐて下さい。

靜子。今のまゝにしてゐても決して恐ろしいことは起りませんの？

西島。どうか今のまゝにしてゐて下さい。つらいこともあるでせうが。

靜子。恐ろしいことが未來に待つてをりませんでしたら。私、今のまゝを幸福と思つてゐますわ。ですけれど私にはいろ／＼のことが私達を待つてゐるやうな氣がしますわ。

西島。どんな處でどんな幸運が待ちぶせしてゐるかわかりません。今のまゝより仕方がないでせう。今迄のやうにしてゐて下されば僕はよろこんで出來るだけのことはします。

靜子。それを私は恐れてをりましたのですわ。私はあなたに出來るだけのことはして戴きたくはなかつたのです。たゞ餘分だけで助けて戴けるものなら助けて戴きたいと思つたのです。それに恐ろしい噂が奧樣に聞えましたら、奧樣もいゝ氣はなさらないでせう。私達の爲にあなたは共倒れになつてもいゝと云ふ氣を起していらつしやいます。私にはそれがよくわかつて參りました、それが何より恐ろしいのです。本當のことをおつしやつて下さい。今の内にどうかしなければならないのでせう。

西島。そんなことはないと思ひます。その内に道が開けるだらうと思ひます。

靜子。私にはさうは思へませんわ。今にとり返しがつかなくはならないでせうか。本當のことをおつしやつて下さい。私は決心しなければならない氣がするのです。

西島。もう少し辛抱して下さい。

靜子。辛抱ならいくらでもいたしますわ。ですがこのまゝで行つたら恐ろしいのでせう。

西島。……

靜子。きつと私、今にあの事が新聞に出るかと思ひますわ。兄ではありませんけれど、私達は本當に禍にとりかこまれてゐる氣がしますわ。私達は本當に心細う御座いますの。あなたももう私の處へは來て下さらないでせう。あの噂が奧さまの耳に入つたら私もう上れませんわ。本當に私はどうしたらいゝのでせう。

西島。あなたは私が世話する力もないのに餘計なことを云つてあなた達を苦しめたとは思ひませんか。

靜子。決してそんなことは思ひませんわ。

西島。私もあんな噂をたてられた今、お世話するのが心苦しい氣もします。ですが、よかつたらどうか世話さして下さいませんか。世話することを許して下さつたらどんなに嬉しいでせう。

靜子。あなたは、あのいやな噂を奧さまにお話しになつて？　さうして私達を世話する事を奧さまは喜んでいらつしやいますの。今日本をお賣りになつたことは奧さまは御存知なの？　さうして私が今日一人で上ることを奧樣は御存知なの？

西島。……

靜子。隱していらつしやるのでせう。（間）奥さまは私を憎んでいらつしやるのでせう。

西島。そんなことはありません。

靜子。あなたはなぜ本當のことをおつしやつて下さいませんの。私を信用して下さらないの。私は本當にどうしたらいゝのでせう。あなたはそれを知つていらつしやるのでせう。知つていらつしやるならおつしやつて下さいな。相川の處へゆけとおつしやつても私はお恨みはいたしませんわ。

西島。あなたはもう僕の世話になるのはいやなのですか。さうしてお兄さんはどうなさります。

靜子。本當にこの頃のやうでしたら。

西島。あなたは僕に力がないのをびつくりしたのでせう。

靜子。そんなことはありませんわ。ですけれど私の思つてゐるよりは、（微笑み）金持ではおありにならないのね。

西島。僕はまだ捨身にはなりません。まだ力を出し切りはしません。金だつてまだとれる餘裕があります。

靜子。それならなぜ本をお賣りになるの。

西島。一番簡單ですから。さうしてなくなつてもちつとも仕事に差支へがないのですから。

靜子。本を書いた方がそんなことを聞いたら怒るでせうね。

西島。怒りはしません。

靜子。へんなことを聞きますが、あなたは兄の爲に金を出して下さるの？　私の爲に金を出して下さるの？

西島。兩方です。

靜子。私、もつとさきが聞きたい氣もしますけれど、本當は聞いてはいけないことですわね。ですが兄はものになりますわね。

西島。あなたさへわきに居れば。

靜子。私がゐなくなつたつてものになるでせう。もし筆記する人がゐましたら。妻の代理をつとめるいゝ人がをりましたら。

西島。萬一、さう云ふ人がをりましたら。

靜子。あなたは私がゐる爲に兄を有望だとおつしやるのではありませんわね。

西島。決してそんなことはありません。

靜子。私が居なくつても金を出して下さいますか。

西島。あなたがゐないとは。

靜子。假定で御座いますわ。

西島。あなたが兄をたのむと一ことおつしやつたら。

靜子。さう申しませんでしたら。

西島。……

靜子。御免遊ばせ。

西島。（ふところから紙づつみを出し）これだけ今日持つて歸つて下さい。

（蛇足。以上西島の會話は立つたり坐つたりして話されたものと思つて下さい。靜子は火鉢によつて火箸をいぢりながら獨言するやうに云つてゐると思つて下さい。今西島は又立つて歩いてゐると思つて下さい）

靜子。（受けとり）ありがたう御座います。（それを見ず自分のわきにおく）

（沈默）

靜子。私、かうやつてゐますと、本當に氣が落着きますの。御邪魔にはなりませんわね。

西島。なりません。

靜子。奥さまは何時お歸りになるの。

西島。晩飯頃でせう。

靜子。朝からいらつしたの。

西島。えゝ、十一時頃でした。

靜子。それならもうお歸りになるかも知れませ

んわね。

西島。大丈夫です。

静子。それでもお留守に上つてお留守に歸るのは變で御座いますわね。

西島。それでも留守に來て、留守に歸ることがあるのですから仕方がありません。

静子。私は本當にどうしたらいゝでせう。

西島。（歩きまはつてゐたが、充血した目をして、静子に近づき）すべて私にまかせて下さい。（静子の肩に手をかけ、接吻しようとする）

静子。（驚いて立ち上り）何をなさるの。

西島。…………

静子。あなたは矢張り私を妾にしようと思つていらつしやるのね。本當に恐ろしい方ですわ。

西島。（良心に恥ぢて）許して下さい。許して下さい。決してさう云ふ心算ではなかつたのです。

静子。どつちにしろ、同じことですわ。私歸りますわ。

西島。怒つていらつしやるの。

静子。怒つてはしませんわ。ですけど悲しい氣がしますわ。

西島。本當にもう決してしません。許して下さい。一言許すと云つて下さい。本當にとりかへしのつかないことをしました。

静子。障子をあけて下さい。

西島。はい。（障子をあける）

（沈默）

静子。明日の午後二時に來て下さい。

西島。上つてもよろしいのですか。

静子。二時よりあまりおそくつても早くつてはいけません。二時よりあまりおそくつても早くつてもいけません。

西島。えゝ。時計を見てちやんとその時分に上ります。

静子。うちの前に立ち止つていらつしたり、うちの前を行つたり來たりなさつては困りますよ。

西島。しません。

静子。それならお暇します。

西島。之をもつて歸つては下さいませんか。

静子。いりません。

西島。どうしても許して下さらないのですか。

（静子默つて傘をとる）

西島。（嬉しさうに）許して下さつたのですね。

（静子西島の手を握り）

静子。私を憎まないで頂戴よ。（急に身を轉じ俯向く）さよなら。

西島。又あした。

静子。（退場しながら）きつと二時ですよ。

西島。えゝ。

（西島送つてゆく。まもなく西島登場。障子の處から静子の後姿を見送り、障子をしめ溜息をつき、机の上にうつぶす。暫らくして）

西島。おい。

外。はい。

（女中登場）

西島。かたづけてくれ。

女中。はい。

（女中かたづけて退場）

西島。（獨言）あゝ俺は馬鹿だ、馬鹿だ。思ひちがひしてゐた。（髮毛をかきむしり）許して下さい、彼女の運命に狂ひがないやうに。（沈默。不意に頭をかきむしる。不意にやめる。）

芳子登場。

芳子。唯今。

西島。大變早かつたね。

芳子。ですけど丁度いゝ時に歸つて來たのでせう。

西島。何を云ふのだい。

芳子。もつと早かつたらお怒りになるでせう。

西島。……

芳子。今迄、誰がこの室で貴夫とさし向ひになつてゐたか知つてゐますよ。

西島。それが何んだ。

芳子。それだつて私の留守に、すましてこゝへ上げるなんて。貴夫は今日私が實家へゆくかと何度も念を押しになつたわね。私の留守にわざとお呼びになつたのではなくつて。さうでせう。

西島。相談があつたのだ。

芳子。私が居てはいけない御相談。

西島。お前がゐれば野村の妹は遠慮するからね。

芳子。をかしな方ですわね。

西島。何が。

芳子。靜子さんのことだとすぐお怒りになるのね。

西島。お前が角のあるものの云ひ方をするからさ。

芳子。それでも女は女同志で相談するのがあたりまへですわ。

西島。女が女同志相談が出來るかい。まして細君になつてゐる女と。

芳子。細君のある男の方と話するのがなほ可笑しいわ。へんな噂があるつて實家の父や母は心配してをりましたわ。

西島。どう云ふ噂だ。

芳子。云ふとお怒りになるから云ひませんわ。

西島。野村の妹が俺の妾だと云ふ噂だらう。誰に聞いたのだ。

芳子。御存知なの？　知つてて靜子さんも貴夫も平氣なの。

西島。噂がなんだ。

芳子。外の噂とはちがひますわ。

西島。お前は誰に聞いたのだ。

芳子。そんな噂と云ふものはすぐ傳はるものですわ。實家の知つてゐる人があの近所に住んでをりますのですよ。貴夫と靜子さんが一緒に歩いてゐるのを見たと云つてゐましたわ。私辯解しましたら笑はれましたわ。

西島。笑ふ奴は笑ふがいゝさ。

芳子。靜子さんは貴夫の思つてゐるやうな方ではなくつてよ。靜子さんは譃つきですよ。

西島。何が？

芳子。叔父さんの家には足ぶみもしないと仰しやつていらつしやいましたわね。

西島。それが譃だと云ふのかい。

芳子。譃ですわ。

西島。證據があるのかい。

芳子。ちやんと見ましたわ。

西島。本當に見たのかい。

芳子。そんなことを譃はつきませんわ。

西島。何時見たのだい。

芳子。たつた今！

西島。今？　とう〳〵行つたか。

芳子。ちやんと入る所を見ましたわ。今迄だつて何度もいらつしやつたに違ひありませんわ。

西島。本當に見たのだね。

芳子。えゝ。

西島。……

芳子。そら御覽あそばせ。

西島。默れ！　野村の妹は相川の妻になることにきめたのだ。

芳子。私きつとさうだらうと思ひましたわ。

西島。お前にわかるかい。たつた今きめたのだ。この俺がきめさしたのだ。野村の妹は俺のたよりにならないことを知つたのだ。俺の最も恐れてゐたことが起つたのだ。お前はそれを見て默つてゐたのかい。

芳子。それだつて駈けていつて留めることも出

來ないぢやありませんか。貴夫之からすぐ行つて留めていらつしやればいゝわ。（本棚のそばに行つて本棚を見る）本をお賣りになつたのね。

西島。賣つた。

芳子。いくらお賣りになつたの。

西島。二十五圓だ。

芳子。そのお金をどうなさつて？

西島。皆野村の妹にやつた。

芳子。まあ。うちはどうなさるお心算。

西島。お前の方はどうだつた。

芳子。だめでしたわ。

西島。どうにかなる。

芳子。うちなんかどう なつたつていゝのでせう。私なんかどうなつたつていゝのでせう。私なんか心配して死んでしまふ方がいゝでせう。噂は矢張り本當なのですね。（泣く）

西島。譃だ。明日になれば皆わかる。お前は野村の妹には感謝していゝのだよ。萬事過ぎた！

芳子。（ヒステリー的に、靜子の肖像を見て）この額を外して頂戴。

西島。外さう。（額をはづす）俺け之から一寸散歩してくるよ。（退場）

――幕――

第五幕

廣次の室

（廣次、一人で靜子の歸りの遲いのをまちかねてゐる。電燈がぼんやりついてゐる。足音する）

廣次。靜ちやんかい。

靜子。はい。（登場）唯今。（お辭儀をする）

廣次。何をぐづ〳〵してゐたのだ。俺が一人でゐればどのくらゐ不自由だと云ふことはお前は知つてゐるのだらう。それなのに今日は何時もに似あはずゆつくりのそつと歸つて來たのだね。

靜子。之でも急いで歸つて來ましたのよ。

廣次。そんな譃ついたつて駄目だよ。目がなくつたつて耳があるからね。急いで歸つて來た奴の呼吸の違ひぐらゐはわかるからね。それに今日は何時もに似合はず足音が低かつたよ。まるで泥棒みたいにそうつとあがつて來た。俺に逢ふのが恐いやうな歩き方をしてゐる。

靜子。そんなことはありませんわ。

廣次。金をもらつて來たか。

靜子。はい。二十五圓だけ戴いて來ましたわ。

廣次。そんなにもらつて來たのか。拂はなければならないものは拂つておけ。

靜子。はい。

廣次。お前は俺の時間を尊敬しなければいけないよ。お前の留守にどんな事があつて俺に書きたいものが出來るかも知れないからね。用がすんだらさつさと歸つて來てくれないと困るよ。

靜子。はい。

廣次。それは遊んでくるのもいゝさ。たまだから。だけど、俺達はまだそんな呑氣なことを云つてゐられる人間ぢやないのだからね。それは歸りたくないこともあらう。俺の顏許り見てゐても面白くはないだらうから。

靜子。そんなことはありませんわ。

廣次。そんなら何をぐづ〳〵してゐたのだ。俺は何度癇癪を起さうとしたか知れやしない。俺はそれをぢつとこらへてお前の歸るのをおとなしく待つてゐたのだ。無理はないと思つてゐたのだ。だけど四時がうつてもまだ歸つて來ない。きつともうぢき五時だらう。俺は心細い氣がして來た。お前まで俺を馬鹿にし

てゐると思つて來た。俺はお前に馬鹿にされたつて苦情は云はない。俺はお前の運命を兄らしく荷ふことも出來なければ、お前を幸福にすることも出來ないのだから。お前はこんな兄をもつたことを後悔するのも尤だと思つてゐる。

靜子。何をおつしやるの。お兄さん。

廣次。俺は本當のことを云つてゐるのだ。

靜子。それが本當のことですつて。私はお兄さんを輕蔑したことがありまして。

廣次。輕蔑してゐる？ お前は俺が世間から惡口を云はれた時、默つてゐた。云へば俺が絶望するとでも思つたのだらう。お前ぢやあるまいし、俺は自分の力を知つてゐるよ。西島に聞かなくつたつて知つてゐる。お前は俺を憐れんでゐるのだ。

靜子。さうぢやありませんわ。お兄さんがあまりあせつていらつしやるので、お知らせする氣がしなかつたのですわ。

廣次。さうだらう。それで、俺が寢たふりしてゐると西島に、本當に兄はものになりませうかなんて聞く氣になるのだらう。俺は目が見えないだつてお前の心はわかつてゐるよ。

靜子。そんなに憎まれ口がおつしやりたければおつしやるといゝわ。

廣次。俺は憎まれ口を云つてはしないよ。俺はお前にも苦情の云へない人間だ。俺は世界中の皆に輕蔑されていゝ人間なのだ。俺は自分一人では生きてゆけない人間だからね。

靜子。ひがんでいらつしやるのですわ。

廣次。ひがますやうなことを誰がしたのだ？

靜子。誰もしませんわ。

廣次。お前は本當に俺を馬鹿にするね。（机の上のインキ壺をいきなり妹にぶつける。インキ壺こはれる）

靜子。（泣き聲）何をなさるの。

廣次。お前が俺を馬鹿にするからさ。いくら盲目になつたつて、俺は俺だ。それが腹が立つなら出て行つてくれ。

靜子。（インキ壺のこはれを集め、インキをふきながら）お兄さんにはどうして私の心がおわかりになりませんの。（泣く）

廣次。泣くがいゝ。そんな聲におどかされないよ。お前はどんなことをしたつて俺はお前に怒る資格がないと思つてゐるのだらう。それはさうだらう。けれど、俺にだつて意地はあるからね。居たくなかつたら出て行つてもらはう。

（靜子むせびなく。廣次びつくりしてそばにより）

廣次。もう泣かなくつていゝ。本當に俺は腹立ちまぎれに云ひすぎた。許してくれ。ね。お前の心はわかつてゐる。たゞ俺は、お前についていろ／＼心配なことが心に浮んだのだ。途中で負傷しやしないか、惡者にどうかされやしないか、お前は心細くつてやけを起しはしないか、とかいろ／＼のことを考へてゐたのだ。其處へお前がいゝのこつと歸つて來たのだ。俺は安心したと共に急に腹が立つて來たのだ。實はさつきから書いてもらひたいものがあつたのだ。それでなほお前の歸るのを待つてゐたのだ。さあ機嫌をなほしておくれ。お前がどのくらゐ俺の事を思つてゐてくれるかと云ふことは俺だつて知つてゐるのだ。許してくれ、惡かつた。

靜子。（やつと泣きやみ）お書きになりたいものがあるのですつて。

廣次。あゝ。しかしいゝ。

靜子。書きますわ。

廣次。書けるかい。

靜子。書けますわ。

廣次。それなら書いてもらはうかね。飯を食つ

てからでもいゝけれど。

靜子。まだ四時半ですよ。書きますわ。（机に向ひ鉛筆で）さあ、云つて頂戴。

廣次。いゝか。

靜子。はい。

廣次。AとBの會話だからね。

靜子。はい。

廣次。「お前はどうして食つてゐるのだ」「或人に食はしてもらつてゐるのだ」「或人と云ふのはお前の身内のものか」「友達だ」「友達はどうしてお前を食はす氣になつたのだ」「俺に同情したのだ」「どうして同情したのだ」書けたかい。

靜子。はい。

廣次。「どうして同情したのだ」「妹がいやな男と結婚をしなければならなかつたからだ。その結婚をやぶる爲には俺は妹と一緒に食客になつてゐる家を出なければならなかつたのだ」「それならその友は君に同情したのか、君の妹に同情したのか」書けたね。

靜子。はい。

廣次。「兩方だ」「兩方か、俺にはさうは思へない。君の妹は美しいのだらう」「美しいのだ」

靜子。そんなことを書くのはいやですわ。

廣次。書け！　本當のことだから書け。出す出さないは別だ。

靜子。……

廣次。お前は俺の云ふことさへ書けばいゝのだ。手が頭に苦情を云ふ奴があるか。書け！

靜子。はい。

廣次。「それならば兩方ではあるまい」「その男は僕の仕事も信用してゐる。さうして妻をもつてゐる」「その男は非常な金持か」「さうではない」「その男の名は〇〇と云ふのだらう」「さうだ」「世間では君の妹をその妾だと云つてゐる」

靜子。なんの爲にそんなことをお書きになるの。西島さんにあてつけるやうな氣がしますわ。

廣次。默つて書け。俺は解決しなければならない問題にぶつかつてゐるのだ。俺は今迄それにさはらないやうにしてゐた。しかしいつまでもそんなことはしてはゐられない。俺はこの問題と何處までとつくめるかを、自分で知らなければならない。書けた工合で見せなければそれでいゝ。書くのがいやなのか。

靜子。いゝえ。書きますわ。

廣次。「……妾だと云つてゐる」「世間が何と云つても恐れない」「しかし君の妹の縁談はそれでこはれはしないか」「こはれればなほいい」「しかしいゝ縁談があつた時こはれたら困るだらう」「世間の噂を恐れる奴にはいゝ奴はない」「それでもその噂が本當らしい時には誰もいゝ氣がしないからね。一體妻をもつ男が若い女と友達になると云ふことは許せないことなのだ」「Cはあたりまへの人間ではない」「君はCを信用し過ぎてゐる」書けたかい。

靜子。はい。

廣次。「妹もそんな人間ではない」「君は妹を信用しすぎてゐるな。今は信用していゝだらう。しかし長の月日の内にはどうかな。君がCの位置にゐたらどうだ。少なくもCの家庭を亂すやうなことはないか。君は默つてゐるね」

靜子。お兄さん、私頭痛がして來ましたわ。

廣次。もう少しだ。之からが大事なのだ。之からが問題なのだ。書けるだらう。

靜子。書きます。

廣次。「……君は默つてゐるね。返事が出來ないのだらう。Cの家庭はたしかに君達の爲に

亂されてゐるよ。そのくらゐなことは小說家でない僕だつてわかることだ。疑ひと云ふものはどんな處だつて入るからな。又今後のことを人間は心配する動物だからな」B怒鳴る「どうすればいゝのだ」「君は自分の力で食つてゆけないのか」「ゆけない。俺は盲目だからな。それに俄めくらだ」「君はどうしていゝか知らないのだね」「知らないのだ」「妹を金持と結婚させるのだな」「馬鹿！」「それならCの世話になるのか。さうしてその內に何處からか牡丹餅の落ちてくるのを待つてゐるのだね。その內にひどいめにあふことはないか」「俺は苦しい。俺の理想は俺が早く自分の仕事をある處まで仕上げることだ」

靜子。そんなに早くおつしやつちや書けませんわ。

廣次。お前は泣いてゐるね。俺達は泣いてゐられる身分かい。俺達は死にもの狂ひにならなければならない時ぢやないか。しをれてゐる時ぢやない。戰爭に出て、敵にとり圍まれたと云つて泣いてゐる奴があるか。いゝか。

靜子。はい。

廣次。「俺は苦しい。俺の理想は早く自分の仕事で食べるやうになることだ。自分の力で自分達の運命を荷へるやうになることだ」「お前にはそれが出來るか」「出來ないことはないと思ふ」「本當にか」「俺だつて男だ。さうして妹がゐる。俺は死にもの狂ひだ。もう一步と云ふ處にゐてくたばり切るやうな男ではない。侮辱と誤解は俺を淋しくする。俺の書いたものは恐ろしい惡口を云はれた。救はれないもののやうに云はれた。だが俺はそれでくたばり切つて、最初の一念を通さないやうな男ではない」「君の妹は？」「妹だつて俺の妹だ。金の爲にいやな男に一生を賣るやうな女ぢやない」

（靜子聲出して泣く）

廣次。なぜ泣くのだ。泣くことはないぢやないか。俺を憐れむのか。俺は憐れまれたくない。泣く奴があるか。書け。

靜子。は、はい。

廣次。「妹だつて俺の妹だ。金の爲にいやな男に一生を賣るやうな女ではない。およそそれは卑しいことだ。淫賣婦になることは一瞬間を賣ることなら、妻になることは一生を賣ることだ。それはこの上なく恥づべきことだ。妹はそんな妹ではない」なぜそんなに泣くのだ。默つてゐてはわからないぢやないか。お前は矢張り、俺が心配してゐたやうに下等な心をもつてゐたのだな。それで苦しいのだな。まさか叔父さんの處へ行きはしまいね。（間）なぜ默つてゐるのだ。

靜子。は、はい。

廣次。行つたのか。

靜子。……

廣次。行かないのか。

靜子。はい。

廣次。行かなければいゝ。俺は今日お前の歸りがおそいのでお前のことを思つてゐたら、お前の姿が目に浮んだ。それはうつむいてしをれて、死ににでもゆく人のやうな恰好をして道側をのこ／＼步いて行く姿だつた。さうしてそのお前は何處に入つたと思ふ。西島の處ではなくて叔父さんの處だつた。まさか行きはしまいな。行つたら承知しないよ。お前の位置の苦しいことは知つてゐる。お前は時々相川の處へ思ひ切つてゆきたくなりはしないかと俺はそれを恐れてゐるのだ。俺も男だ。お前も俺の妹だ。思つても腹の立つ相川の處へゆく氣は起すなよ。苦しいことは澤山あるだらう。しかしとりかへしのつかないことをしてはいけないよ。何といつたつて俺のこ

とを思つてくれるのはお前許りだ。お前のことを思ふと力がわくのだ。俺は時々癇癪も起す、つまらぬことでお前を泣かすこともする。俺は他の人には自分の憂さをもらすことが出來ないのだからね。さあ泣くのはよしておくれ、お前が泣くと俺まで心細くなる。それは實際泣きたくなることもあるだらう。俺でさへ時々どうしてい丶かまるでわからない時がある。西島がゐてくれなかつたら實際どうすることも出來ない。西島は俺の心を知つてゐる。西島に世話になるのは心苦しいが、西島だから一方安心もする。西島が何かに書いてゐたが、ドミーエはコローの世話になつて、コローにだからこそ世話になつても氣がとがめないと云つたさうだが、俺も西島だから安心してたよれるのだ。いやな噂が立つたからと云つて、西島は世間の噂にまけるやうな男ではないからね。さうしてその内には俺にも力が出來るからね。心配することはないよ。

靜子。お兄さん。

廣次。なんだ？

靜子。西島さんはさう金持ではありませんのよ。

廣次。それでも、毎月二十圓の金ならどうにかなるだらう。

靜子。さうもゆきませんのよ。西島さんは私達に下さる金をつくる爲に本を片端から賣つていらつしやるのよ。

廣次。それは本當かい。

靜子。本當ですわ。

廣次。さうか。

靜子。本當に私どうしてい丶かわかりませんわ。

廣次。……

婆。西島さんがいらつしやいました。

廣次。西島が來た？　お前は西島の處へ行つたのだらう。

靜子。え。西島さんがいらつしやるわけはありませんわ。誰かのまちがひぢやなくつて。

婆。い丶え。西島さまです。

廣次。お通しして下さい。

（婆さん退場）

廣次。何の用で今時分來たのだらう。

靜子。本當に變ですわ。

（西島登場）

廣次。よく來て下さいました。

西島。一寸、散歩のついでにおよりしましたのです。

廣次。さつきは妹が出まして。

西島。どういたしまして。（靜子の方を向き）さつきは失禮しました。

（靜子、顏をそむける）

西島。君と二人だけで一寸お話したいことがあるのですが。

廣次。それなら靜ちやん、下へいつておいで。

靜子。はい。（默つて退場しようとする）

西島。（小聲で）怒つていらつしやる。

靜子。（小聲で）なぜ約束をおたがへになつたの。

西島。（小聲で）餘程今日は御遠慮しようかと思つたのですが。まだ貴女はお留守かと思つて。

靜子。留守のわけはないぢやありませんか。

西島。私の處の歸りに何處かへおよりになつたのでせう。

靜子。（びつくりする。しかしそれをごまかし）い丶え、何處にもよりませんでしたわ。

西島。それは本當ですか。それなら私の妻が見ちがへたのかも知れません。

廣次。何です？

靜子。なんでもないです。

廣次。早く下へおいで。
靜子。もう私下にはゆきませんわ。
廣次。なぜだ。
靜子。だつて、西島さんがどんなことをおつしやるかわかりませんもの。
廣次。下へおいで。
靜子。(小聲で)そのことをおつしやつては承知しませんよ。
西島。(小聲で)それなら矢張り本當なのですね。
靜子。(小聲で)餘計なお世話ですわ。あなたは明日の午後二時前にはいらつしやらない御約束ぢやありませんか。
西島。それでも。
靜子。(小聲で)あなたは、私をいぢめる爲にいらつしたの。餘計なことをおつしやつたら、私、一生お恨みしますよ。本當に今日いらつしやるのは少しあつかましくつてよ。
廣次。何をぐづ／＼してゐるのだ。
靜子。ね。
(靜子、拜む眞似をし)
(廣次沈默。靜子、沈默を守るしるしに口に指をあて、形で念を押す)
廣次。早くゆけ。
(靜子、又口に指をあて、拜む眞似をして退場。沈默。廣次は何か考へながらぢつと坐つてゐる。西島立ちながら考へて居る。二人の目に涙がやどる)
廣次。西島さん。本當ですか。
西島。何がです。
廣次。妹が叔父の處へ寄つたと云ふのは。
西島。よくは知りませんが。
廣次。妹はあなたの處に何時迄ゐました。
西島。三時頃でしたらう。もつと早かつたかも知れません。一時間はいらつしやいませんでした。
廣次。さうですか。私は父君の處に妹はゆつくりしてゐたのかと思ひました。
西島。もつと早くお伺ひしたかつたのです、が明日の二時に上るお約束をさつきしましたので。その時、お妹さんは二時前に來ては困るとおつしやつたので、この前を一度通りながら三十分程歩いて來ました。それでもとうとうお寄りしないではゐられなかつたのです。そのくせ私は何と君に云つていゝか知らないのです。
廣次。……………
西島。今日お妹さんが叔父さんの處にお寄りにならなかつたにしろ、その內、お妹さんは叔父さんの處へいらつしやる決心だと思ふのです。私はそのことを今日お話してゐる內に感じました。そのくせどうすることも出來なかつたのです。今のまゝにしてゐて下さい、今のまゝにしてゐて下さいと私は云つたのですが、お妹さんには、それが不安で仕方がないらしいのです。何しろいろ／＼のことが起つて來て、それが一つになつて、妹さんを。
廣次。さうです、さうです。本當にさうです。私もそれを恐れてゐたのです。今日一人でゐて今更にどうすることも出來ないことを感じたのです。私はどうかしてその恐ろしいことに勝たうと思ひました。あんまり侮辱ですからね。私だつて男です。盲目ですけど男です。たつた一人の妹をこんなにまで思つてどうすることも出來ないのは殘念です。侮辱です。そのくせどうすることも出來ないのですからね。私は相川と云ふ人間が、そんなに恐ろしくない人間ではないかと時々思つて見ます。しかし私は人のことを思ふとすぐその容貌が目に浮びます。それは事實あり得ない程醜いものに浮びます。それに相川のやり方

は今思つても侮辱です。人を馬鹿にしてゐます。私は相川の子を妹に生ますのはいやです。さうしてそんなにまで思つてゐるものに妹をやるのは相川にたいしたつて罪のやうな氣がします。恐ろしい侮辱です。私はその侮辱をだまつて受けなければならない人間でせうか。私はそんなに賤しい人間でせうか。私はそんな不淨なことをしなければ生きてゆかれない人間なのでせうか。私の仕事はそんな不正なことをしなければ出來ないのでせうか。私の仕事は妹を幸福にする仕事ではなくつて、妹を不淨なものにしなければ出來ない仕事なのでせうか。思へば思ふ程たまりません。私は目のいゝ時に、よくたまらない人間の顔を見ました。それは生々した所のない、美しい所の少しもない、ふやけた顔です、不良少年らしい顔です、神經のない愛のない顔です。

西島。それでもそんな男ならば妹さんを愛しはしないでせうか。

廣次。さうも思はないことはありません。しかし私は今度の結婚に相川よりも叔母が進んでゐるのだときめてゐます。妹でも相川の處へやらなければ叔父の家はどうなるかわかりません。叔父の位置はあぶないのですから。叔父は働きのないくせに少し餘計金をとつてゐます。從つてつッかひ棒がいるのです。それには妹が入用なのです。今度のことは向うがたつてほしがつてゐるよりも、叔母がたつてやりたがつてゐるのです。さうして叔父もその氣になつたのです。私達は叔父の犧牲になる必要は斷じてありません。尤も妹はそれを知つてゐながらも、無理はないと云つてゐました　妹は叔父と私との仲たがひを默つて恐れてゐるのです。妹は廢兵の金をほしがつてゐるのです。私は廢兵の金もあまり氣持のいゝ金とは思つてゐないのです。私は好んで戰爭へ行つたのではありません。又私はまだ自分を殺人だとは思つてゐませんから。

西島。……

廣次。ですけど、ですけど、そんな强いことを云つてもなにになるでせう。實力は殺人と同じことです。私は强いことを云つてゐながら、何をする力もないのです。妹を怒つたり、泣かしたり、いぢめたり、するより外何にも出來ないのです。さうして癇癪を起すより外、力がないのです。私は時々生きてゆく資格のない人間ではないかと思ひます。少くも現代は私の生きてゆくことは望みません。それは私に力があり過ぎるからではなく、無さ過ぎるからです。自分ながら發狂しないのが不思議な時があります。

西島。妹さんはそれを心配していらつしやいました。

廣次。さうでせう。妹の心はわかります。それだけ可哀さうです。それだけはがゆいのです。妹は下で心配してゐるでせう。私は自分達程不幸な人間はないとは云ひません。私は自分を不幸な人間とはまだ云ひたくありません。私はいくら運命にたゝきつけられたつて、生きてゐる間は、かうやつてこの世に坐つてゐます。さうしてあはよくば起き上つてやらうと思つてゐました。二人で苦しんで來たのです。もし得られるものならば勝利も二人で喜びたかつたのです。今迄の妹の私に對する愛や、私の爲の苦しみは、どんなものでせう。どんな償いをもつてもそれを報いることは出來ません。それなのに、私は今それをこんな風に報いなければならないのでせうか。私はどうすることも出來ないのでせうか。私が死ねば妹が幸福になるなら死んでやりた

い位に思はないことはないのです。それなのに、どうすることも出來ないのです。こんな意氣地のないことがあるでせうか。こんなはがゆいことがあるでせうか。

西島。どうか僕に任せて下さい。

廣次。それは妹が承知しませんでせう。

西島。……（心に恥ぢる）

廣次。時々、どうでも勝手になれと云ふ氣がします。私は何事も與へられることは耐へなければならない人間です。（間）妹の泣き聲が聞えやしませんか。

西島。いゝえ。私には聞えません。君には聞えますか。

廣次。耳のせゐかも知れません。さつきから泣かして許りゐたのです。逃げ路のない處に逐ひこんでおいて、それで泣かして許りゐたのですから妹もたまりません。何しろ十重二十重にとり圍む柵を一刀兩斷しないではゐられない氣持になりながら何うすることも出來ないので、それが癇癪になつてもらす處がないので妹の上にばかりもらすのですから、妹もたまりません。

（静子、静かに音をさせずに登場、さうして西島を見て淋しく微笑む）

廣次。其處にゐるのは静ちやんかい。

静子。えゝ、さうよ。

廣次。なぜ上つて來たのだ？

静子。それでも下にゐると淋しいのですもの。お兄さんに怒られても上の方がよろしいわ。

廣次。お前は叔父さんの處へ行つたのだらう。

静子。いゝえ。誰がそんなことを云ひましたの。

廣次。本當に寄らなかつたのかい。西島さんの處には三時迄切りゐなかつたのだらう。

静子。よくは知りませんけれど、そんなものだつたかも知れませんわ。

廣次。お前の歸つて來たのは四時半だつたらう。その間一時間半は何處にゐたのだい。

静子。私、たゞ歩いてゐましたの。

廣次。本當かい。

静子。明日まではさうしておいて頂戴ね。西島さん、私一生恨みますよ。あなたはいゝお考へがあつていらつして下さつたの、それとも私をいぢめるためにいらつしたの。

廣次。何を云ふのだ。お前、矢張り本當なのだね。

静子。知りませんわ。

廣次。お前は僕に何故默つてゐたのだい。

静子。自殺する人は、默つて自殺してもいゝと思ひますわ。自殺しろとはどんな方でもおつしやるわけにはゆきませんものね。西島さんだつて私を助けることがお出來になりもしないくせして、お出來になるやうな顔していらつしやるのですもの。

西島。許して下さい。

廣次。静ちやん、何を云ふのだい。そんなにお世話になつてゐながら。

静子。それだつて私の心を御存知のくせして、さつき知らん顔していらしつて、今になつてすましてお兄さんの處へ相談しにいらつしやるのがをかしいわ。

西島。明日が待てなかつたのです。まさか私の處の歸りにおよりになるとは思はなかつたのです。そんなにあてつけなことをして下さらないでもいゝと思つてゐます。

静子。あてつけではありませんよ、私は今日はお暇乞ひみたいなつもりで上つたのです。皆さんが見たがらないことを私は見ましたわ。私は私が一日でも早く自分のゆきつく處へゆきつかないと、どんなことを惹起るかちやんと知つてゐますわ。私のしたことは恥知らずですわ。私は往來を歩くのでも小さくなつて

ゐましたわ。私程賤しい女はないやうな氣がしましたわ。ですが、仕方がありませんわ。お兄さん、お腹が立つならどうぞ、私を打つて頂戴、お蹴りになつてもよくつてよ。ですけれど、私を妹だと思つて頂戴。私お兄さんの傲りをきずつけることを思ふとたまりませんわ。私が一人賤しいのですわ。私は一生を賣つたのですわ。私愛してゐない、寧ろ憎んでゐる人に一生を賣つたのですわ。私のしたことはどんな女だつて恥ぢますわ。ですけれど私は悲しくはありませんの。私は生きてゐてお兄さんの仕事を見ることが出來るのですもの。お兄さんはいくら私を賤しんだり憎んだりして下さつたつて私は蔭でお兄さんの爲に祈つてゐますわ。

廣次。俺の世話を誰がするのだ。

靜子。お兄さんに手を握られた小間使がしますわ。

廣次。承知したのか。

靜子。喜んでゐましたわ。叔父さんも叔母さんも喜んでいらつしやいましたわ。皆喜んでゐましたわ。さうして私を賤しんでは下さいませんでしたわ。私は賤しんでくださつてもかまはないと思ふ方には賤しまれませんでしたわ。西島さん、もう歸つて頂戴ね。明日は來てくださらなくつてもよろしいわ。

（西島、默つて歸らうとする）

靜子。お歸りになるの、私を輕蔑していらつしやるの。私のわきにゐるのはもうおいやなの。

西島。そんなことはありません。私はあなたの前には罪人です。あなたが歸れとおつしやれば歸ります。居殘る。

靜子。あなたはちつとも私にわるいことをなさらなかつたぢやありませんか。あなたはいつでも私に力を與へて下さいましたわ。私に御恩は忘れはいたしませんわ。あなたは餘計なことをしたとお思ひになるでせう。ですけれど私はどんなに嬉しかつたか知れませんわ。之から今迄よりも兄の友達になつて下さいますわね。本當は今日來て下さつた方がよかつたかも知れませんわ。明日あなたがいらつしやる時分には私はゐなかつたかも知れませんわ。私、兄に置手紙して明日逃げようかと思つたのですわ。さうしてあなたに來て頂くのは、たゞ私の置手紙を讀んで下さる爲でしたわ。あなたにも手紙を書いておくつもりでしたの。さうしてあなたがこゝに來て下さつてる時分に私は何をしてゐるか、御存知？　その時分私は叔父さんにつれられて相川さんの處へ行つてゐますわ。

廣次。それは本當かい。

靜子。九分通り本當なの。今晩叔父さんが相川さんの處へいらつしやるの。

廣次。お前はそんな約束までして來たのかい。

靜子。それでもおせきなさるのですもの。

西島。私に來いとおつしやつた時は、もうそれがわかつてゐたのですか。

靜子。まさか相川の處へゆくと迄は思ひませんでしたけれど、叔父の處へは行つてゐる心算でしたわ。さうしてお兄さんのお許しを得てこれから歸つて來ようと思ひましたわ。明日小間使をつれて來ますわ。あの子はいゝ娘ですわ。それに字も書けますわ。さうして可哀さうな娘ですわ。私がなくなるとすぐにきつとよくしてくれますわ。

廣次。靜子、お前は強いことを云つたけれど、お前の決心をかへるだけの力のないことを許しておくれ。俺はかうやつて見まもつてゐるだけだ。俺には力はないのだ。お前のすることはいゝことかわるいことか、俺は知らない。たゞ俺はどうしろとも云へないのだ。恐ろし

いことは遂に來た。俺はどうしていゝかわからない。反對していゝか、贊成していゝかそれもわからない。その力もない。

靜子。お兄さん、許して下さつて。やつぱり妹だと思つて下さつて。

西島。僕は失禮します。

靜子。お怒りになつていらつしやるの。

西島。怒るどころですか。恥かしい氣がするのです。私は本當にあなた達にすまない氣がするのです。私はまだどうかなるかと思はないことはありませんが、それは自分の良心に對する云ひわけにすぎないでせう。

靜子。西島さん、本當に、あなたの處へ行つた歸りに叔父の處へ行つたことを許して下さいね。私、叔父の家を出て、かうしてゐたのを無意味とは思ひませんわ。あなたの澤山の本を賣らしてそんなことを云ふのはすみませんけれど、あなたには仕事はありますわね。ある偉い詩人が戀が報いられないことを感謝して、詩が書けると云つたさうですわね。私、理窟では一番あなたに濟まない氣がいたしますのよ、ですがあなたは大概のことには負けない方ですわね。私がそんなことを思ふだけでも生意氣の氣がしますわ。又何時かお目にかゝれますわね。私御恩は嬉しく思ひ出しますわ。

西島。ありがたう。野村君、それなら又。

廣次。それならば又。さうか。

西島。ありがたう。さやうなら。

廣次。さやうなら。

（行かうとしてふりかへる、靜子と手を握る）

西島。（小聲で）どうか許して下さい。

靜子。（小聲で）氣にすることはありませんわ。

西島。（小聲で）氣になつて仕方がないのです。

靜子。氣にしないで下さい。私、御親切を嬉しく思つてるのですから。

西島。それなら又何時か。

靜子。え。奧さまによろしく。

（西島退場、靜子送らうとする）

西島。（辭退するやうに）どうか。

（二人、退場、靜子まもなく登場）

（沈默）

靜子。怒つていらつしやるの。

廣次。怒つてはゐない。

靜子。許して下さつて。

廣次。許す力も反對する力もない。

靜子。私の心はわかつて下さいますわね。

廣次。わかる。

靜子。私のしたことは惡いことでせうか。

廣次。知らない。俺はどうしていゝかわからない。お前をとりかこんでゐる[illegible]をとりのぞいてやりたいたがその力はない。力がないのですましてゐるのをすまなく思ふだが、この目では仕方がない。身體を大事にしておくれ。僕の仕事もその內には目鼻がつくだらう。

靜子。あせらないで頂戴ね。私生きて見られるのだと思ふと嬉しくつてよ。

廣次。俺はあせらない。

靜子。泣いてはいないですよ。

廣次。俺はこんなにまでしなければ生きてゆかれない人間か。さう思ふと情けないよ。

靜子。…………

廣次。俺は力がほしい。

――幕――

（一四、一二、三、――一五、一、四）

わしも知らない

登場人物

釋迦
目蓮
流離王
その寵姫
好苦行士
子供、侍、僧侶、腰元等大勢

一

〔釋迦一人何か考へながら静かに林の内を歩いてゐる　目蓮、釋迦を捜しに來て見つける。目蓮は心配にたへかねてゐる

目蓮。一寸御話いたしたいことが御座いますが、御邪魔にはなりませんか、

釋迦。目蓮か、なんだ？

目蓮。はい、（釋迦と顔を見合せ、涙ぐむ）

釋迦……

目蓮。世尊の御心の内を御察しいたします。

釋迦。目蓮、御前もさぞつらいだらう。人々はまだ氣がつかないらしいな。

目蓮。人々はたゞ恐れてをります。しかしまだ望みはもつてをります。

釋迦。さうか。いぢらしいことだな。

目蓮。どうしても助かりませんか？

釋迦。今度は助かるまい。

目蓮。あなたはどうなさる御つもりです。

釋迦。わしは默つて見てゐる心算だ。それより他はわしには許されてゐない。

目蓮。それでも、それではあまりにむごたらしくはおぼしめしませんか。

釋迦。むごすぎる。さすがのわしも今度は少し迷つてゐる。だがそれはわしには許されてゐない。わしはたゞ人々の虐殺されるのを見てゐなければならないのだ。

目蓮。流離王と云ふ人間は恐ろしい人間ださうで御座いますね。

釋迦。流離王は恐ろしいと云ふよりも、流離王の内に燃えてゐる恨みが恐ろしいのだ。流離王は先年わが釋種の爲に辱められたことを償いないでは我慢が出來ないのだ。さうして今この城の内に樂しさうにくらしてゐる人々は皆それが爲に近い内に虐殺されるのだ。殊に可哀さうなのは男の子や女の子だ。目蓮、あすこに樂しく遊んでゐる子供等は皆近い内に流離王の軍勢につかまへられて弄殺にされるのだ。

目蓮。はい、私もさうかと存じてをりました。あの子供等の可愛い姿を見るにつけて私は涙がこぼれます。

釋迦。わしもだ。あの子供等はあまりに可愛すぎる。わしはあの子供等の顔をまともに見ることが出來ないのだ。

目蓮。私もで御座います。

釋迦。わしは人間の運命はすべて知つてゐる。わしはわしの力で助けることの出來ない多くの人間の運命を知つてゐる。わしはそれを見る度に可哀さうだと思はぬことはない。だが今度程可哀さうだと思つたことはない。わしはたゞ見てゐるより仕方がないのだ。

目蓮。それでも

釋迦。さうだ、それでもだ。しかしそれでも見

てゐるより仕方がないのだ。お前はまだ眞に自分の力を知らない。わしの力を知らない。運命の力を知らない。だからどうかすればどうにかなると思つてゐられる。しかしわしにはわしの力がわかり過ぎてゐる。だからわしは今度はたゞ見てゐるより仕方がないのだ。

目蓮。それならばどうしてもあの可憐な人々をたゞ見殺しにするより仕方がないのでございますか。

釋迦。さうだ、仕方がないのだ。

目蓮。あの人々の最後の希望も消えたので御座いますか。

釋迦。さうだ、消えたのだ。

目蓮。世尊！

釋迦。目蓮。

目蓮。恐ろし過ぎることで御座いますね。

釋迦。さうだ。

（子供の群、戯れながら現はれ、二人を見、二人を隔てて環をつくつて、踊りながら遊ぶ。）

釋迦。可愛い者だ。

目蓮。本當に……（目蓮涙ぐむ）

男の子一。小父さんが泣いてらあ。

女の子一。何が悲しいの？

男の子二。目にごみが入つたの！

目蓮。あゝ、目にごみが入つたのだよ。

女の子二。見て上げませうか。

目蓮。いゝよ。もうとれたから。それよりいゝ子だから向うへ行つてお遊び。小父さん達は今用があるのだから。

男の子一。向うへ行かう。

皆。行かう　行かう。（をどるやうに走けて消える）

目蓮。世尊！　私はもうどうなつてもよろしい。どうかあの子供等をたすけて下さい。たすけて下さい！

釋迦。わしだつて助けたい。しかし助けることは出來ない。それがこの世の運命なのだ。

目蓮。どうしてもあの子供等は皆、殺されるのでございますか。

釋迦。さうだ、皆殺されるのだ。一人のこらず殺されるのだ。それも一通りの殺され方ではない。

目蓮。默つてゐて下さいまし。默つてゐて下さいまし。

釋迦。お前は人の運命を見るのが怖ろしいのか。しかし可哀さうな子供達だ。何も知らない。何も知らない。だが殺されなければならない。

目蓮。あゝ、私にはどうしていゝかわかりません。私の信仰の弱いことはいくらでもせめて下さい。私はどうしていゝかわかりません。

釋迦。（厳かに）目蓮！

目蓮。はい。

釋迦。すべてのことは過ぎてゆく。過ぎてゆく嵐だ。過ぎてゆく洪水だ。過ぎてゆく、戰ひも、死屍はいくら山を築かうとも、血はよし川の如く流れようとも、斷末魔の叫びは天地に響からうとも必ず過ぎてゆく。さうしてゆく先きは海だ。涅槃だ

目蓮。（他の事に心を奪はれてゐる者のやうに）涅槃で御座りまするか。

（と云ふと同時に何か會得したやうに輝かな表情をする。二人沈黙。退場）

二

（迦毘羅城の一室。初め誰もゐない。たゞ下の方ではげしき戰ひの有樣、のゝしる聲、わめく聲、つるぎの音。この時あわたゞしく二人の女、極度の恐怖におそれながらかけ込み、逃げまはる。それを追ひかけて、[illegible]、四人の兵士た

つれてをどり込む)

好苦。この室を血でけがしてはいけない。その女子供を窓から投げ捨てよ。

(兵士しも女を室から投げすてる)

好苦。よし〱。(窓の處にゆき)味方の大勝利ぢや。敵はのこり少なになつた。王様もさぞ御滿足であらう。(一時に下で萬歳の叫び聲聞える。好苦梵士も窓から下に向つて手をふる)どれ、王様をこゝに御案内申さう。室をかたづけておけ。

兵士皆。はつ。

(好苦梵士退場。兵士室をかたづけながら)

兵士一。王様の恨みも之ですつかりはれた。

兵士二。はれ過ぎたやうなものだ。

兵士三。男も女ものこらず殺した。子供は皆つかまつた。

兵士四。それで王様を辱めた奴はのこらず死んだわけだ。

兵士三。なにを王様はへんなにお憤りになつてゐるのだい。

兵士一。君はまだ知らないのかい。先年王様がこの城にお客様に御いでになつた時、うつかりと新しい[illegible]堂があつたので、お入りになつて、さうして其處でお休みになつたのだ。

兵士三。あゝ。

兵士一。處がその家は元來こゝの王様になるべきはずの釋迦の爲にたてたもので、釋迦が入る迄は誰も入ることが禁じてあつたのだ。其處へ釋種の奴が兼々生れが卑しいと云つて輕蔑してゐた我等の王様が入つたので、釋種の奴等はすつかり怒つたのだ。さうして皆で王様を辱めたのだ。さうして王様のお歩きになつた處は穢れたと云つて皆けづりとつたのだ。さうしてお休みになつた處はすつかりつくりなほしたのだ。だから王様はすつかりお怒りになつたのさ。

兵士三。さうか、それではお怒りになるわけだね。

兵士一。それでつまり今度はその復讐なのだ。腹いせなのだ。

兵士二。(口を入れ)だからのこらず殺せと云ふ御命令だつたのだ。

兵士三。さうか、それですつかりわかつた。(兵士四、窓にゆき)

兵士四。隨分高いよ。さつきの二人の女はひしやげてしまつてゐる。女を[illegible]は勿體ないな。

兵士二。何を云つてやがるのだ。(窓により)隨分死んでゐるな。敵の死骸許りだ。

兵士一。(窓にゆき)今迄あいつ等が皆生きてゐたのだと思ふと可笑しいね。

兵士三。何人位死んでゐるだらう。

兵士四。五六萬はゐるだらう。見渡す處、死骸許りだからな。大勝利だ。

兵士二。足音がする。きつと王様だ。

(皆、お出迎へに入口の方にゆく。流離王、好苦梵士等をつれて機嫌よく入つてくる。流離王、窓より下を見る。下で兵士共の狂へるやうに萬歳を叫ぶのが聞える。王様それに會釋する)

流離王。(好苦梵士に)味方は大勝利だつた。之で數年來のわしの胸の中のうさもはれた。子供の外は一人殘らず殺したらうな。わしを辱めた奴は一人のこらず殺したらうな。

好苦。御意の通りで御座います。

流離王。それでわしの胸もはれた。子供は何人位捕虜にいたしたかな。

好苦。男と女、各々五百人づつで御座います。

流離王。子供は何にも知らない。許してやつてもいゝと思ふが、お前はどう思ふ。

好苦。御言葉に背きまして恐れ入りますが、決

してお許しになつてはいけないと存じます。彼等は何時までも子供では御座いません。さうして一生、自分達の生命の助けられたことを難有がらずに、父兄弟の殺されたことをうらみます。さうしてどんなことをたくらむかわかりませぬ。之はどうしてもお殺しになるより仕方がないと存じます。

流離王。何時もながらお前の云ふことは尤だ。早速殺させることにいたさう。

好苦。それがよろしう御座います。どうして殺させませう。何か面白いお樂しみになるやうな、さうして後世にまで語り傳へられるやうな趣向で殺させませうか。さうして意氣地のない釋迦の度膽をとりひしいでやりませうか。

流離王。それは面白いだらう。

好苦。私にお任せ下さいまし。

流離王。よし。

（好苦梵士、兵士の長を呼び何か囁く。兵士の長畏まつてさがる）

流離王。どう云ふ趣向ぢや？

好苦。面白い殺させ方をいたさせますから、御覽下さいまし。

流離王。お前の趣向ならさぞ面白いことであらう。兵士共、苦しうない、見たければ見るがいゝ。

兵士皆。はつ

（流離王、好苦梵士と窓より下を見、兵士達は他の窓にゆき下を見る）

流離王。死骸の山を築くのか。

好苦。いえ、空地をつくるので御座います。

流離王。さうか。この土地はさぞ肥えることであらう。穴をほり出したな。生きうづめにする心算なのか。

好苦。まあ見てゐて下さいまし。

流離王。穴の數は千はないな。

好苦。五百で御座います

流離王。さうか。一つの穴に男の子と女の子を入れるのだな。

好苦。さうでは御座いません。女の子の方は國へ土産に持つて歸つて、あの波陀羅の池に投げ込まうかと存じてをります。

流離王。それもよからう。あの池はどうせうめることになつてゐるからな。その上に宮殿でも建てさせようか。穴はあれでもういゝのか。餘り淺すぎはしないか。

好苦。まあ見てゐて下さいまし。（好苦梵士下に向つてなにか合圖をする。暫らくして）

流離王。あはゝゝゝ。子供等は皆わしの方を見てゐる。あの何とも云へない顏はわしに助けてくれと云つてゐる。

好苦。[illegible]るとおつしやつてはいけませんよ。

流離王。[illegible]皆首だけ出してゐるな。之からどうしようと云ふのだ。[illegible]面白くなつて來たな。

（好苦、再び合圖をする。下の方にて數百人の士卒が重いものをころがすやうなカケ聲聞ゆ。暫らくして不意にやむ）

流離王。あの何千貫あるかわからないやうな車はどうしたのだ。

好苦。あれは先程見つけた車で御座います。[illegible]と思ひます。

流離王。あの車を[illegible]のか。あゝさうか。あの車であの子供等の頭をひきつぶすのだな。

好苦。御意の通りで御座います。

流離王。さすがはお前の考へぢや

（好苦梵士二度目の合圖をする。下で再び以前のカケ聲聞ゆ。窓によつて見てゐるさすがの兵士達も餘りの殘酷さにおどろいてゐる。一人の兵士は腦貧血を起し

(てしやがんで頭を押へる)

流離王。好苦梵士。面白く子供の頭がつぶれてゆくな。釋迦にこの有樣が見せてやりたい。

三

(世尊には拘拘留園におはしまして、流離王が爲す業の一伍一什を御覽じ給へど、只一言も宣はず、十大弟子五百の阿羅漢皆お側に侍りて默然たり。暫らくして目蓮釋迦の前に進み)

目蓮。矢張り私達はこゝにかうしてをりますればいゝので御座いますか。

釋迦。いゝのぢや。

目蓮。今、七萬の釋種は皆殺しにあひ、五百の童男、五百の童女の生命は流離王の弄ものにならうとしてをります。それでもこゝにかうしてをりましていゝので御座いますか。

釋迦。いゝのぢや。

目蓮。阿羅漢の内には親兄弟を見殺しにするのがつらくつて、自ら縊死ぬ方がいゝと思つて居りますものも澤山御座います。それでもこゝにかうして皆を見殺しにしてもいゝので御座りますか。

釋迦。いゝのぢや。

目蓮。阿羅漢の内には迷を起しかけてをるものも御座ります。なにとぞ、こゝにかうしてをります理由を教へて戴きたう御座ります。

釋迦。目蓮。お前にも似合はないことを云ふな。我が教は過去、現在、未來を通して宇宙の調和に從ふ道ぢや。數十萬の人の生命、何萬の子供の生命がよし惡人の手に失はれようと、我が教は儼然と聳えてゐる。我が教は現在のみの教ではない。我が教はやがて失ふこの世の生命を無上のものとはしてゐない。我が教は我等の生命によつて失はれはしない。又流離王の虐殺で失はれはしない。もしわれ、現在の情にうごかされて流離王の手許に荒れこむか、或は流離王の前に憐みを請へば、我が教は立ちどころに崩れるのである。わが教は宇宙の教ぢや。過去、現在、未來の教ぢや。一時のこの世の愛によつて亂されるべき教ではない。もし汝等の内に我が教に心を滿すことが出來ず、今虐殺されつゝある憐れな人間の爲に自分の身を捨てないでゐられないものがあれば、われとわが身を捨てるがいゝ。だがわが教、過去、現在、未來をつらぬくわが教に從ふものはこの處にわれと共にゐるがいゝ。さうして亂されかけたるこの世の狂ひをくひ留めるがいゝ。すべてのものは消えてゆく、しかしわが教は消えてはゆかない。わが教に從ふものは、宇宙の心を心にしなければならぬ。涅槃の心を心にしなければならない。今、何萬の人は歸るべき處に歸つた。目蓮、お前はさうは思はないか。

目蓮。はつ。(目蓮、畏まり禮をし、座にもどる)

釋迦。(まぼろしを見るやうに)今五百の男の子は首だけ出して生きうづめにされてゐる。鐵の車にその首をつぶされてゐる。あのわめく聲、あの骨のくだける音。あれが流離王や好苦梵士の出來る最も强い仕事なのぢや。彼等はわが教をあのやうにくだきたがつてゐる。しかしわが教はくだかれない。あゝ、すべては恐ろしい靜かさに歸つた。五百の男の子は生れた處に歸つたのぢや。憐れなのは五百の女の子ぢや。彼等は救ひを求めて救ひを得ない。だが波吒羅の池は彼等を故鄕に歸すであらう。さうして流離王も、好苦梵士もやがては自らきづく高樓と共に燒け死ぬのぢや。

(誰云ふともなく、嬉しげの嘆息聞え、

嬉しげに「それは本當ですか」と云ふ聲聞ゆ）

釋迦。お前達には流離王や、好苦梵士の燒け死ぬのが嬉しいのか。彼等は燒かれて死ぬ。しかしそれは喜んでいゝのか、悲しんでいゝのかわしは知らない。彼等はわしとちがふ力に導かれて生きてゐる。彼等は燒かれなくともやがて死ぬ。しかし彼等は皆燒殺される。さうして彼等と共に何千と云ふ可憐な男や女、子供や老人も燒け死ぬのぢや。わしは彼等も憎めない。

（沈默）

四

（黑い幕の前。土地の若い男三人）

甲。いゝ月だ。

乙。今日も亦あのお城では酒宴だ。

丙。今日は七日目ぢやないかい。

甲。何が。

丙。七日の内に必ずあの七重のお城が燒けて、あすこにゐるものが殘らず燒け死ぬと云ふ風評があつてから。

乙。さうだ、七日目だ。

甲。燒けさうもないね。

丙。俺はきつと燒けると思ふよ。あんな慘酷なことをして建てたお城だからね。

乙。あのお城の床下では今でも女の子の泣き聲が聞えるさうだ。何しろ五百の女の子があの下に生き埋めにされてゐるのだからね。

甲。何しろ恐ろしいことだつた。

丙。あのお城は燒けないはずはない。きつと燒ける。

甲。燒けないよ。

丙。賭をしようか。

甲。しようとも。

乙。あの人達は何時でもあの七重の塔の一番高い室で酒宴をしてゐるね。もし火事があつたらどうする心算だ。

丙。あいつ達は流言を輕蔑してゐることを人々に見せてゐる心算でゐるのだ。それが天罰なのだ。

甲。天罰なんかあるものか。

丙。天罰はなくともお城は燒けるのださうだ。さうしてあすこにゐる人々は皆燒けるのださうだ。王樣も好苦梵士も。

乙。勝手に燒ける奴は燒けるがいゝ。しかし又新らしい王樣がくるだらう。

甲。それは來る。

乙。流離王樣よりいゝ王樣がくればいゝが。どうでもいゝや、勝手になるがいゝ。

甲。何しろ燒けないよ。

丙。何しろ燒けるよ。

乙。今日は又盛な酒宴をやつてゐるらしい。

甲。燒けない方がいゝ。

丙。燒ける方がいゝ。

乙。どつちでもいゝや、俺に損得はないからね。

丙。もう少し向うへ行かう。

（三人退場。黑い幕とれる。流離王の宮殿の内も高き一室。酒宴の最中）

流離王。好苦梵士、今日は七日目ぢやな。七日目ももうぢき過ぎる。

好苦。さやうで御座います。七日目も殆んどすぎました。

流離王。あはゝゝ。火事もないやうぢやな。

好苦。流言と云ふものはかうしたものにきまつてをります。

流離王。大いに飲まう。皆遠慮をするな。（側に侍つてゐる寵姫に）お前はまだ怖いか。

寵姫。はい。どうもまだ氣がおちつきません。早く夜があけてくれればいゝがと思つてをります。

流離王。もうぢき夜もあけるだらう。（舞踏を

する男女等に、又舞へ、」

（男女數名、音樂にあはせて舞ふ、腰元共見てゐる人々に酒をついで廻る。舞はをはる）

流離王。御苦勞。酒をついでやれ。（寵姫に）久しぶりに今夜はお前の舞を見せてもらひたい。皆のものにも見せてやれ。

寵姫。今夜だけはお許し下さい。

流離王、いや、今夜だから是非舞へ。

好苦。是非私どもも拜見いたしたく存じます。

寵姫。それでも今夜だけは、胸さわぎがしてとても舞ひ終ることが出來ませんから、明日になればお舞ひに……

流離王、今日だから是非舞へ、わしの命令だ。

（寵姫是非なく立ち上り舞ふ。まさに舞ひ終らんとする時、不意に風が起り、家をゆすぶる。寵姫顔色を失ひ、自失して立つ。又心つきからく舞ひ終る。風は益々ふく。寵姫席にもどり流離王の手をかたく握る。一同皆無言、風の音に耳をすませる。流離王気がついたやうに）

流離王。あはゝゝ。皆そんなに恐ろしいのか。臆病どもだな。風がなんだ。七日目と云ふ流言が恐ろしいのか。風よ。もつと吹けよ。吹けるだけ吹け。さうして臆病共を嘲笑へ。あはゝゝ。面白い。好苦梵士、お前は風を恐れはしまい。

好苦。御意の通りで御座います。私達は天も恐れません、地も恐れません。死も恐れません。恐れるのはたゞ我が君の御心に背くこと許りで御座います。輪廻を信じてゐる人々はこの風を喜びませう。さうして今にもこの宮殿が焼けるかと心待ちをしてゐるで御座いませう。しかし夜があけて見ると風はやんでをります。うらゝかな朝が來ます。さうしてこの宮殿は以前にもまして安らかに麗はしく輝くことで御座いませう。さうして我が君の光はいやが上にも輝き渡ることで御座いませう。

流離王。よく云つた。好苦梵士、お前は本當に我が片腕だ。我が子だ。我が友だ。我が師だ。お前がわしのそばにゐてくれるのは獅子が翼を得たやうなものだ。（寵姫に）さあ好苦梵士に酒をついでやれ。

寵姫。はい。

好苦。難有く戴きます。皆、一緒に我が君の萬歳をおとなへいたしませう。

（皆立つ）

好苦。萬歳！

皆、萬歳！

（萬歳を三呼す）

流離王。さあ。皆遠慮なく酒をのめ。今晩は無禮講だ、わしは今晩程嬉しいことはない。皆、わしと一緒に喜んでくれ。心おきなく酒をのんでくれ。（寵姫に）お前も腰元どもと一緒に皆に酒をついでやれ。今夜は無禮講ぢや。

（風一ときはげしくなる。沈默）

流離王。（立ち上り）さあ人々舞へ。出來るだけ賑かな曲をやれ。

（人々亂れをどる。さうして調子にのり切つた時、火事だ、火事だ、と云ふ聲何處ともなく聞え、あわてる人々の足音亂れ聞える。音樂はばつたりやみ、同時に人々舞をやめる）

流離王。何だ、火事ぢや？　皆のもの苦しうない、早く逃げろ。好苦梵士、逃げられるか逃げられないか、見てまゐれ。

好苦。はつ。

（人々は戸口からとび出し、又室に逃げこみ、窓から下を見たり、戸口から出て見たり、うろたへ切つてゐる　この時一人の腰元飛びこみ、恐怖のあまりうは言の

やうに）

腰元。火事です。火事です。放火です。一人の女が氣が狂つて火をあつちこつちにつけたのです。火事です。火事です。

（人々は決心せるやうに、戸口から消え或は窓からとびおりる。腰元も、無意味に走り廻つてゐたが、戸口から消える。のこつたのは流離王と、流離王にかじりついてゐる寵姫と、方々見廻つて歸つて來た好苦梵士の三人。煙は入り出す）

流離王。（寵姫の耳をおさへ、寵姫の顏を強く胸にあて、好苦梵士に）どうだ、望みはあるか。

好苦梵士。御覺悟が大事かと存じます。下はすべて火の海で御座います。

流離王。さうか。

（流離王、いきなり寵姫を突きとばし、寵姫の「あれつ」と言ふ言葉の出るか出ない内に、刀をぬき寵姫をさし殺す）

好苦梵士。我が君には氣でもお狂ひになりましたか。

流離王。いや、こんなことでは氣が狂はぬわ。わしは流離王ぢや。たゞわしが戀する女の見苦しい樣が見たくなかつた迄ぢや。

好苦。恐れ入りました。

（煙はます／＼はげし）

流離王。お前はこの火をどう思ふ？　天罰だと思ふか。

好苦。いえ、いえ、私はたゞ臆病な女が七日の内に必ず燒けると云ふ流言を信じ切つて、不安のあまり氣が狂ひ、自ら火を放つたのだと存じます。天罰では決して御座いません。

流離王。さうぢや、偶然ぢや、偶然ぢや。わしもさう思ふ。釋迦を信じる人々に偶然のことだと云ふことを知らすことが出來ないのが無念ぢや。（戸口からまひ込む煙を見て）だがいゝ。覺悟はいゝか。お前の劍をぬけ。

好苦。はつ。（劍をぬく）

流離王。わしが合圖とともにお前はその劍をもつて見事にわが胸をつらぬけ。わしはこの劍をもつてその時お前の胸をつらぬく。

好苦。畏まりました。

流離王。勇士の最後を後世にまで語り傳へるものがないのが恨みぢやな。

好苦。御意の通りで御座います。

流離王。足の下がそろ／＼あつくなつて來たやうぢや。覺悟はいゝか。いゝか。

（合圖の終るやいなや、互に胸をつらぬき倒れる。煙はます／＼はげし。三十秒計りして、一人の女逃げこみ、この場の有樣を見て）

一人の女。王樣が死んだ。王樣が死んだ。王樣が死んだ。（室の内を逃げまはり、又戸口から逃がれようとして、煙にまかれたふれる。風一きは強くふく）

五

（林、朝早く、うらゝかな天氣、昨夜の嵐をたゞ倒れた木、散つた枝が語つてゐる。小鳥が嬉し氣にさへづつて居る。釋迦、目蓮靜かに登場）

目蓮。うらゝかな天氣で御座います。

釋迦。嬉しさうに小鳥が囀つてゐる。

目蓮。昨日の嵐によく死ななかつたものでございますね。

釋迦。死んだものがないとも限るまい。生きてゐるものだけがうたつてゐるのだ。

目蓮。昨夜の風は夢のやうで御座いますね。ただ倒れた木や、散つた枝だけが昨夜の嵐を語つてをりますが。

釋迦。………

目蓮。世尊、流離王の宮殿も燒けたさうで御座いますね。

釋迦。燒けた。

目蓮。さうして皆燒け死んださうで御座いますね。

釋迦。皆燒け死んだ。

目蓮。すべてのことは夢のやうで御座いますね。

釋迦。曾つて二人のまはりを廻つた子供等も今は安らかに眠つてゐよう。惡夢の後の安らかな眠りのやうに眠つてゐよう。わしはあの子等のことを忘れはしない。だがそれはわしの敎を弱くはしない。流離王や好苦梵士も今となればわしの夢の色を濃くしに來たやうなものだ。消えてゆけばお前達の恨みものこるまい。さうして彼等は火事に燒けずともやがて消えてゆくのだ。

目蓮。すべてのことが過ぎました。

釋迦。しかし又生れる、何度でも生れる。わしの敎を覺らぬものにとつてはこの世に生きることは迷の内に生きることだ。さうして平和な夢を見るものは稀だ。今、朝日は輝きわたる。だが今に夕がくる。すべてはめぐる。死ぬ、生れる。生れる、死ぬ。流離王の許に親兄弟、或は子供を仕へさせてゐた人々は今はさぞ悲しんでゐるであらう。誰が仕合せか、誰が不幸か、誰が知らう。わしの敎がゆきわたらない内は人々は無意味に惡夢を生んで、われとわが身を苦しめることであらう。さうして他人を苦しめることであらう。小鳥は啼いてゐる。日はうらゝかに照り渡つた。すべてのものは何事もないやうな顏をしてゐる。さうして道ゆく人に逢へば多くの人は何事も知らないやうな顏をしてゐよう。迦毘羅城の滅亡も、流離王の宮殿の燒けたことも彼等はたゞ笑ひ話にすますであらう。わしは彼等の爲にそれを喜ぶものだ。だがわしはわが敎に從つてすべての人が調和して生きてゆくことを望んでゐる。さうしてさう云ふ時の來るのを夢想してゐる。

目蓮。さう云ふ時が參りませうか。

釋迦。くる。

目蓮。いつさう云ふ時が參りませう。

釋迦。それはわしも知らない。

（沈默）

——幕——

（一三、二、二一）

もう一歩

いかなる時でも自分は思ふ、
もう一歩
今が實に大事な時だ。
もう一歩。

心愛に滿つる時

心愛に滿つる時
花咲く、
天を讃美す、
よろこびの使
來らずと云ふことなし。

よろこび

心淸く、
けがれなき時
よろこび生れる
恰も靑空の如し。

この道より

この道より
我を生かす道なし
この道を歩く。

三和尚（一幕）

登場人物
一休
白隠
澤庵
釋迦　達磨

（淨土の一部。林のかけ。一休は皆にかくれてよく其處に來る。今も其處に來てゐる。つれ〴〵に自作の江口を謠つてゐる。）

一休。……月も影さす棹の歌、歌へや歌へうたかたの、あれは昔の戀しさを、今も遊女の船遊び、世を渡る一節を歌つていざ遊ばん。……夫れ十二因縁の流轉は車の庭に廻るが如し、鳥の林に遊ぶに似たり。前生又前生曾つて生生のさきを知らず。來世なほ來世。更に世々の終りをわきまふることなし。……

（白隠登場。さまたげると惡いと思つて退場しようとする。一休それを認め）

一休。白隠さんか。逃げないでもいゝぢやないか。

白隠。お邪魔かと思ひましたので。

一休。邪魔なものか。君でも來てくれるといゝと思つてゐた所だ。一つちよいちよぼくれでも聞かしてくれないか。君のつくつたちよいちよぼくれは聞きものださうだから。

白隠。中々さうたやすくはやれませんよ。それよりお暇でしたら何か浮世に居た時のお話でもいたしませう。

一休。それも面白いだらう。しかし是非ちよいちよぼくれも聞かしてほしいね。

白隠。それは又今度にしませう。

一休。又今度は情けないね。

白隠。それならあとにしませう。

一休。してくれるか。

白隠。まあ、あとの工合で。

一休。きつと聞かしてもらふよ。

白隠。一休さん、あなたが浮世にゐた時分何が一番お苦しみでした。

一休。矢張り女だらうね。白隠さん。

白隠。さうですか。あなたは蜷川さんの奥さんをどうかしようとなさつたさうですが、本當ですか。

一休。本當だよ。あぶない所だつたよ。蜷川の妻がわしに氣があるやうについ自惚れたのだね。處が蜷川の妻はいざとなつたらさすがに堅かつたのでものにならないですんだのだよ。あぶない所だつたよ。

白隠。あとで蜷川さんの奥さんが來たときあなたは追ひ歸したといふので皆ほめてゐましたよ。

一休。あはゝゝ。それはわしのすることはなんでも賞めればまちがひのないと思つてゐる人々だらうよ。だけどいくらわしだつて遊びかへさないわけにはゆかないぢやないか。わしは蜷川の細君が身をけがさずに歸つたことを喜んでゐたのだよ。さうして感心だと思つてゐたのだよ。可愛い、それに女だと思つてゐたのだよ。蜷川は何に喜んでやつたのだよ。わしだけがわるい者のやうな氣がしてすまない氣がしてゐたのだよ。其處はまた面白くも思つてゐたのだよ。其處へいゝ鹽梅に蜷川の妻が出て來て、蜷川は是非わしに度々行

つて泊つて來いと云つたと云ふのだらう。蜷川と云ふ奴は何處まで馬鹿な奴なのかと思つて腹が立つたよ。來る奴も來る奴だと思つたよ。「生悟りめ」わしはさう怒鳴つてやつて逐ひ歸した。わしはその時はもう清いわしになつてゐたからね。あとで蜷川に逢つた時は二人で笑つたが、あいつの生悟りには時々閉口したよ。しかし人は珍らしくいゝ奴だつたがね。蜷川の妻が來た時にはさすがのわしも驚いたよ。あはゝゝ。それより君には何か面白い話があるさうぢやないか。なんでも非常に美しい娘に子をうましたとかうまさないとか。

白隱。そんなに美しい娘ではありませんでした。しかしいゝ娘はいゝ娘でした。

一休。おのろけかね。

白隱。のろけ所ですか。その話が實に滑稽な話で、あなたにお聞かせするのも恥かしいやうな話なのです。處が話がうまくゆきすぎて美談の一つにされてしまつたのです。

一休。それは結構ぢやないか。

白隱。處があまり結構な話ではなかつたのです。實はその子は私の子ぢやなかつたのです。

一休。お前さんの子ぢやなかつたのか。

白隱。私もどうも自分の子ぢやないやうに思つたのですよ。手を出した覺えはなかつたのですからね。

一休。ふん。

白隱。たゞ可愛い娘だ位は確かに思つたのですがね。或日いきなりその親爺にどなり込まれてこの生臭坊主、なぜ俺の處の娘をはらましたと云はれたのですよ。おどろきましたね。そんな覺えはないがと思つたのですがね、あんまりきめてかゝられたので自分の知らない内に、そんな眞似でもしたのか知らんと思つてしまつたのですね。

一休。お前さんならさう思ひさうなことだな。もつともわしでもさう思ふかも知れないが。あはゝゝ。

白隱。笑ひ所ぢやなかつたのですよ。しかしさう云はれるのにさうぢやないとも云へないのでつい、「さうですかね、娘さんがさうおつしやるならさうかも知れませんね」と云つてしまつたのです。處が、「知れませんね」と云つたのが親爺さんをすつかりおこらしましてね、「他人を馬鹿にするな」と云つて頭を一つなぐられましたよ。

一休。お前さんの頭ならさぞなぐり甲斐があつたらう。あはゝゝ。

白隱。私はその一撃に僻易したわけでもなかつたのですが、とう〳〵私の子だと云ふことを認めたことになつてしまつたのですね。尤もその内にはあの娘の爲なら一苦勞してやつてもいゝと云ふ柄にない老婆氣があつたかも知れませんがね。

一休。あはゝゝ。

白隱。それでも村中に私が娘つ子をだましてはらましたと云ふことが知れ渡つてしまつたのです。どうも私が通るとあぶないと云つて娘つ子は逃げ出すと云ふさわぎになつてしまつたのです。しかし私は身に覺えがあんまりなかつたせゐかわりに平氣でゐられたので、反つて時々は面白いやうな氣もして來ましたよ。それで子供が生れるとまもなく親爺が私の處へもつて來たのです。子供が泣きますし、小便はたれますし、乳をもらはうとしても、助平和尚と云ふ名をとつたので、同情を失つてしまつたので、隨分困りましたよ。尤も助平和尚と云はれても不服も云へませんがね。

一休。あはゝゝ。

白隱。その内に娘が氣がさしたのか、なんでもあとで聞くと私が子供を抱いてゐる後姿を何處かで見て泣いたとか云つてゐました。矢張り子供のことが氣になつたので、遠くから一目でも見たい位に思つたのかも知れません。それで親爺に泣いて實はあの子は白隱の子ぢやないと白狀したのですね。白隱の子だと云ふと親爺に怒られずにすむとでも思つたのでせう。親爺はそれ迄私をいやに信用してゐたのださうですからね、親爺はそれを聞いて眞靑になつてとんで來ましたよ。涙までこぼして平あやまりにあやまりましたよ。私はやつと助かつたと思ひましたよ。

一休。あはゝゝゝ。

白隱。しかしその子を親爺に渡した時は一寸淋しい氣もしましたよ。いつのまにか自分の子供のやうな氣にもなつてゐましたのですからね。

一休。あはゝゝゝ。

白隱。處がそれが非常に有名になりましてね。それからの信用と云ふものは大したものになりましたよ。急に自分の身體から後光でもさして來たやうに皆が大事にしてくれるので、何だかすまないやうな氣もしましたよ。あとでその娘の親爺がなぜあの時そんなことは決してないとおつしやつては下さらなかつたのですと云ひましたから、自分にはよくわかりませんからね、そんなことはないやうには思ひましたが、自分の知らない内にどんなことをしたかわかりませんからね、あなたの處の娘さんがさうおつしやるならまちがひもないだらうと思ひましたからね、反對することも出來なかつたのですよと云つて大笑ひしましたつけ。

一休。あはゝゝゝ。それは面白い。それでその娘はどうしたかね。

白隱。娘は私が骨を折つて、と云つてさう骨を折つたのではないのですがね、私が口をきいてその子の父親と一緒にしてやりましたつけ。

一休。それなら喜んだらう。

白隱。それは喜んでくれました。子供の爲にもそれが一番いゝと思つたのです。しかし何處かで鳶に油揚をさらはれたやうな氣もしないことはありませんでした。あはゝゝ。

一休。あはゝゝゝ。之はいゝ話を聞いた。

白隱。皆に吹聽しちや困りますよ。つぶしのきかない奴がゐますからね。

一休。大丈夫だよ。そのかはりちよぼくれを聞かしてくれるだらうね。

白隱。どうも困りましたね。

（澤庵登場。一休氣がつく）

一休。澤庵さん、いゝ所に來た。之から白隱さんが御經をよむ所だ。

澤庵。何の御經です。

一休。阿呆陀羅經とか云ふ御經ださうだ。

白隱。噓ですよ、澤庵さん。

一休。本當なのだよ、澤庵さん。さあやり給へ。白隱さん、君だつて男ぢやないか。やると云つた以上はやらないのは卑怯だ。ね、澤庵さん。

澤庵。それは是非聞きたいものですね。

一休。澤庵さん、一寸他の話だがね、お前さんは娑婆にゐる時は澤庵と云ふ漬物をつくられたさうだね、どうも話に聞くと私の大好物のものらしい。いゝものを考へ出されたね。白隱さんの阿呆陀羅經にしろ、お前さんの澤庵にしろ、どうも早く生れすぎたものは損なやうだね。

澤庵。白隱さん、是非伺ひたいものですね。

白隱。一休さん、澤庵さんのつくられた澤庵は是非あなたにあげたいと思ひますよ。それは

何とも云へないいゝ味のするものですよ。お茶づけにしてたべると何とも云へない味がしますよ。私なんかは大好物で、あれがあるので隨分助かりましたよ。さうしてたべる度に澤庵さんのことを思ひ出しましたよ。私も澤庵さんの澤庵にまけないやうな白隱と云ふ漬物でも考へ出さうと思ひましたが、駄目でしたよ。

一休。食ひものを考へ出すのは偉い。私なんかも考へ出さうと思つたが、中々いゝ考へが出なかつた。

白隱。本當にさうですよ。中でも澤庵と來ますと。

澤庵。もう澤庵の話はよしませう。どうも自分の名前を云はれてゐるやうで。

一休。あはゝゝ。私は父上皇からどうかして食物をつくることは出來ないかと内々やつて見たことがあつたが、どうものにならなかつたよ。

白隱。さうですか。私も實は内々考へて見たことがあるのです。

澤庵。それは本當ですか。私も考へて見たのですよ。さうして内々食べて見たこともあるのですよ。

一休。何のことはない三馬鹿だね。

（三人笑ふ）

一休。本當に面白い。こんな面白いことは近頃ない。あゝ、白隱さん、ごまかさずに一つおやりなさい。

白隱。それなら一つ思ひ切つてやりますかね。

一休。感心々々。

白隱。どうも大概忘れましたよ。覺えてゐるだけやつて見ますかね。

一休。覺えてゐるだけで結構。

（白隱、笑ひながら容をあらため）

白隱。女郎の誠とたまごの四角、みそか／＼のよい月夜、天ぢや／＼と皆樣おしやる、天の川もいやでそろ、文のかず／＼戀でこがれても。わしは當座の花はいや。數の男の思ひもこはい。見目の好いのも氣の毒ぢや。器量よしめと譽めそやされて。男ぎらひの獨寢を。命取りめと皆樣おしやる。わしは命はとらぬもの。那須の與一は矢さきで殺す。おふくが目もとで人ころす。かずの殿子はかぎりもないが。わしがいとしはたゞひとり。婆が小唄は面白かろが。ふく／＼がしらでは知りやるまい。知音どしなら歌ふもよいが。やぼな客には御遠慮めされよ。歸命頂禮七佛傳來。我等の親玉釋迦牟尼如來も、僅と聽くより首だけ嵌り。戀にこがれて命も拋つ。肝心の小唄の文句を。老男さん老女さん皆樣聞きない。諸行は無常ぢや。是生滅法。生滅滅已で寂滅爲樂と。有つても知れぬで弘法大師がいろはにほへとにとばいて置かれた。夫でもすめずば標木蓮坊主が。大小取雜ぜ喋舌るをきかんせ。眞に浮世は墓ないものでな。人間萬物山でも川でも。日月星辰竹木世界も。花吹きや散ります。盈つれば虧けます。生れりや死にます。有るもの無くなる。それでも皆樣千年萬年。此世に居るぞと思ふでござろが。うろうろする間に無常の風が。何處から來るやら俄に起ると。鬼をも組むよな剛氣な男も。天人見るよな美しい少女も。出る息一回とまるが境で最早彼方へもよれぬ筈だよ。そこで地水火風の四大は。元へ歸つて無くなるやうだが。さしひき殘つて一つの含藏識。一生なしたる善業惡業。これには本より形がないから。土にもならねば灰にもならねば。善業には善所へ惡業は惡所へ。幕が替りて衣裳を着けかへ因緣次第で六つの衢の。天堂人間地獄や餓鬼畜生。牛にもなつたり馬にもなつたり。死んだり生きたり。定まり無ければ。このの

道理で諸行は無常ぢや。是生滅法と申したものだよ。是れでは透切安氣はならぬと。佛や菩薩の教に隨ひ、精しく進んで修行に身をいれ。貪瞋癡慢の根を斷枯らして。六道生死の絆が切るれば。これが即ち生滅滅已で。こゝに到るとこの身がこの世で。眞實無相の安閑恬靜月を枕に虛空に安臥。華嚴世界を一目に見はらし。（白隱、不意にふつりとうたふのをやめて）まあこんなものです。

（一休、時々白隱の言葉にあはせ、時々まちがへては又眞似してゐたが）

一休。面白い。面白い。さすがは白隱さんのちよぼくれだけある。見上げたものだよ、白隱さんは。（と調子にのらうとして澤庵に氣がつき）澤庵さん、あなたも一つ隱し藝をやつて見せて下さい。

（澤庵默つてへんな恰好をし、手をうごかす）

一休。なんです。そのへつぴり腰のをどりは？

澤庵。をどりではありません。お三どんが澤庵をつけて重しをおいた所です。

（三人笑ふ。一休たち上りてをどりだす）

一休。（ふし長短をつけ）おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。……

（釋迦、達磨靜かに登場。初め白隱澤庵氣がつき微笑む。一休氣がつかずにをどつてゐる。ふと氣がつきおどろき立ちどまる）

釋迦。なにですか。それは？

一休。之はおそろひでよくいらつしやいました。今のは日本のをどりで御座います。

釋迦。おもしろいをどりあります。遠慮せずにをどつて下さい。

一休。ありがたう。もうをどらないでもいゝので御座います。

釋迦。あまり面白さうだつたから一寸來て見ましたのです。あとで皆に日本のをどりを見せてやつて下さいませんか。

一休。畏まりました。

釋迦。之から一寸ゆかなければならない處がありますから皆さん失禮します。

（皆默禮する

釋迦。だるまんさ。れきませう。

（釋迦。達磨退場。一寸沈默）

一休。あゝ、とんでもないことを約束してしまつた。

澤庵。一休さん、あなたでもお釋迦樣には頭が上りませんね。

一休。上りませんよ。さがる許りですよ。子供の時からの癖か、つい難有い氣がして來ますよ。

白隱。本當に難有い氣がしますね。ついお釋迦さんの顏を見ると涙が出て來ますよ。

一休。本當だ。それにしても踊らなければならないかな。うるさい奴が出て來て又國辱だなんて云はなければいゝがな。

（三人笑ふ）

――幕――

（一三、五、二七）

神よ

自分の力を出し切つた時
神にいのる
私の力はこれきりです
あとはあなたにお任せします
神よ。

だるま（一幕）

登場人物

だるま

A（エー）

B（ビー）

僧侶

だるまの修行してゐる小さい堂の前。

（A、B、登場）

A。この堂に住んでゐる男を君は知つてゐるかい。

B。知らない。

A。さうか、この堂の内には珍らしい男が住んでゐるのだ。

B。どんな男だい。

A。八九年の間壁許り見てゐると云ふ男が住んでゐるのだ。

B。壁を八九年見てゐる？　何の爲だい。

A。何の爲だかわかれば珍らしい男ぢやないことになるが、誰も何の爲に壁とにらめつこしてゐるかを知つてゐるものはないのだ。皆の云ふ所だと白癡だらうと云ふことになつてゐる。

B。そんな大きな聲で云ふと内へ聞えやしないか。

A。大丈夫、白癡でその上、つんぼと來てゐるのだからね。

B。つんぼなのかい。

A。つんぼなのさ。

B。それで壁許り見てゐるのかい。

A。さうだ、壁許り見てゐる。

B。どうして食つてゐるのだい。

A。近所の人間が、飯だけはかゝさずもつて來て入れてやつてゐるらしい。

B。それは感心だね。

A。それは時々は、飯を運ぶのを忘れる時もあるだらう。三日や四日運ぶのをわざと忘れて見た時があつたが、平氣で矢張り壁を見てゐたさうだよ。

B。圖々しい奴だね。

A。だが白癡としたら出來のいゝ白癡で、わるいことは何にもしないのだ。そしてたゞ壁だけ見てゐるのだから、始末はいゝのだ。餓死されると困るので、飯は食はしてゐるが、それもごく少し切り食はないのだから、別に困ることはないのだ。

B。だが飯をやらなかつたら、何處かへ行くだらう。

A。處がそんなことが考へられる男ではないやうだ。飯を入れてやらなければ出て食ふなんて考へは起らないらしい。

B。珍らしい馬鹿だね。

A。その癖、顏だけは中々怖い顏してゐる。賢さうな顏してゐる。こんな話がある。何年前かに戰爭があつた時、敵の兵隊がこゝをあらしたことがあつた時、この内にゐるやつ、、、こさんだけは、逃げないで矢張りこゝで壁を見てゐたさうだ。皆が逃げろと云つたつてつんぼだらう、だから平氣でゐるので、皆も死ぬなら勝手に死ぬがいゝと思つて逃げたのださうだが、、、やつこさんはそんなことは一向平氣で、相變らず顏を壁に向けて坐つてゐたら、敵兵が入つて來て、首を切らうとしたさうだが、

いゝやつこさんは平氣でゐたさうだ。あんまり平氣なので兵隊の方が怖くなつて、之は餘程偉い人にちがひない、聖者にちがひないと思つてお辭儀して逃げたさうだ。誰だつて顔を見ると、白癡だとは思へないからね。

B。どんな顔してゐるのだい。

A。見たければ見せてやらう。(戸をあけようとする)

B。默つて戸をあけてもいゝのかい。

A。いゝとも。鍵かけたつて聞えやしないからね。時々人が來ると僕はこゝをあけて見せてやるが、自分の首が落ちかけたつて、平氣な男だから、戸位あけたつて、おどろきはしないよ。(戸をあけようとする)中々かたい戸だよ。(あける)どうだ、中々偉さうな顔してゐるだらう。白癡とは思へないだらう。

B。思へないね。中々するどい顔してゐるね。一寸見ると、白癡といふより氣違ひに見えるね。

A。だが、氣違ひとしてはおとなしすぎるのだから、矢張り白癡なのだらう。

B。さうかね。見かけは中々堂々としてゐるね。白癡とはどう見ても見えないね。

A。人は見かけによらないと云ふが、本當だね。僕は初め、こいつはきつと利口な人間なのだが、心願のために無言の行をしてゐるのだと思つて、内々尊敬してゐたが、あんまり鈍いのでがつかりしてしまつたよ。この前、僕がこゝを通つた時、一人の男があいつの頭をなぐつて、いゝ音がするだらうと云つてゐたがね。僕はあいつが起き上るか、どうかするだらうと思つてゐたが、少しも表情が變らなかつた。つまり何にも感じなくなつてゐるのだね。

B。さうかね。しかし人間も、其處まで馬鹿になればいゝね。

A。本當だよ。僕もその點では、こいつに感心してゐるのだよ。何んだつて怖いものはないのだ。飢死することも、殺されることも、平氣なのだからね。なぐられたつて惡口されたつて、蚊がとまつた程にも思はない。そのかはり樂しみなんかも何にも感じないだらう。何のことはない金でつくつた彫刻のやうなものだね。もう生きながら死んでゐるやうなものだね。たゞ息がかよつてゐると云ふだけにすぎないね。人間もかうなつてはおしまひだよ。だがそのかはり、心配もないだらう、苦勞なんかもないだらう。この位呑氣な人間はないだらう。

B。しかし本當にあれで馬鹿なのかね。僕にはさうは思へないね。

A。しかし利口な人間が、今時に、こんなことを八九年もつゞけることは出來まい。だつて壁を見てゐたつて何になるだらう。何にもなるわけはないぢやないか。

B。それはさうだね。しかし頭をたゝかれても本當に顔色をかへないかね、たゞかへないふりをしてゐるだけなのぢやないかね。

A。いや、たしかにかへないね。僕はよく見てゐた。

B。しかし遠くで見てゐたのだらう。それぢや目玉の動きなんかよくわかるわけはない。

A。それなら僕が一つ頭をたゝいて見るからよく見て居給へ。

B。たゝいても大丈夫かい。この男にいきなり、怒鳴られたら腰をぬかしさうだよ。何しろこんな怖い顔は滅多に見たことはないからね。

A。大丈夫だよ。いゝかい、なぐるからよく見て居給へ。

B。大丈夫かい。本當に。

A。大丈夫とも。よく見てゐたまへ。

B。よく見れば見る程、珍らしい顔だね。どうもこいつが、怒り出したら、しめ殺されて喰はれさうだね。

A。いや、こいつは實に温和しい奴なのだ。恐いのは顔だけだよ。それならなぐるよ。

B。よし。

（A、頭をなぐる）

A。どうだ。

B。不思議だね。どうも不思議だ。もう一度なぐつて見てくれないか。（そばによる）

A。よし。（又なぐる）どうだ、矢張りかはらないだらう。

B。かはらない。不思議だね。生きてゐるのかね。

A。生きてゐるにきまつてゐるよ。

B。どうも矢張り君の云ふ通り、この男は[illegible]だね。[illegible]ないのだね。僕はこんな男を見たことはない。[illegible]に一つ僕にも打たしてもらはうかね。

A。あゝ、かまはない、遠慮なく打ちたまへ。

B。まるで君のもののやうだね。はつはつは。

A。はつはつは。

B。一つそれではなぐらして貰はうかね。

A。遠慮なく。

B。それでは今度、君が見てゐてくれ給へ。

A。よし。

B。なぐるからね。（なぐる）どうだ。

A。なんともない。

B。本當にこの頭はなぐるといゝ音がするね。もう一つなぐつて見てもいゝかね。

A。いゝとも。

B。お許しが出たからなぐるかな。だが氣の毒だね。

A。感じないのだからかまはないよ。

B。一つうんと力入れてなぐつても大丈夫かね

A。君の力位なら大丈夫だらう。

B、不意に感じて、飛び上られてはびつくりするね。

A。大丈夫だよ。この前なぐつた奴は、君よりカが強さうな男だつたよ。

B。それなら、これが最後だから、話のたねに力一杯なぐつてやらう。（力をこめてなぐる）

だるま。（同時に）喝。

（二人、腰をぬかす）

A。許して下さい。

B。許して下さい。

（だるま、默つて立つて外へ出て身體の汗をふき、便所にゆく）

A。なんだ、小便に行つたのだ。びつくりしたな。あの聲にはおどろいたな。何んて云ふ聲だらう。

B。本當にびつくりした。逃げ出さうか。

A。あんまりびつくりしたので腰が立たなくなつてしまつた。

B。僕の腰も云ふことを聞かなくなつた。だからよせばよかつたのだ。君があんなことを云ふので、ひどい目にあつた。どうなるだらう。

A。ともかく逃げられるだけ逃げよう。（ゐざりながら逃げようとする）

（だるま、歸つて來て、又以前の處に坐る）

A。こいつは逃げないでも大丈夫だよ。いゝ、やつこ[illegible]びつくりして聲は出したものゝ此處は[illegible]癇癪性でなぐられたことは氣がついたが、[illegible]ゐることは知らないのだ。不意に小便に行きたくなつただけなのだ。君があんまり[illegible]くたゝいたので、ひよつと氣がついたが、小便に行きたくなつたのだらう。何んでもなかつたのだ

B。随分おどろかされたな。あの聲には、一時はどうなるかと思つた

A。もう一度なぐる元氣があるかね。
B。もうとてもない。腰はたつかね。
A。やつとたちさうだ。隨分おどろいたね。壽命が三年もちぢこまつたやうだ。
B。どうもいくぢのない話だね。
A。いゝ話の種が出來てうれしいだらう。
B。しかし腰をぬかした話は内證にしておかう。
A。あんまり名譽なことでもないからね。
B。君はもつと度胸があるのかと思つたよ。
A。しかし僕にはもう一度位なぐれる元氣があるね。
B。本當かい。
A。本當とも。だが君がおどろくと可哀さうだからやめておかう。
B。なに、僕はあの戸口で見てゐるから、なぐれるなら一つなぐつて見せてもらはう。だがなぐる勇氣は君にはないだらう。さつきのやうぢや、とてもそんな勇氣が君にあるとも思へない。
A。なくつてどうする。一つ俺の勇氣を見せてやらう。（こはごはだるまに近づき、手をふり上げる）
（だるま、ふり向く）

A。（跪き）お許し下さい。お許し下さい。
だるま。今日は何日かな。
（A、B、びつくりして口をもがもがする）
だるま。お前さん方は、つんぼなのか。
A。いえ、いえ。
だるま。今日は何日かな。
A。へい、へい、今日は十一月の十二日で御座います。
だるま。さうか。それでは今日でまる九年、ここにゐたわけだな。
A。へい、へい。
だるま。（立ち上り）鈍骨の俺も九年でやつと悟りの道を得られたわけだ。佛さんのおつしやつたことは本當だつた。ありがたし、ありがたし。
（二人、あつけに取られて見てゐる）
A。あなたはつんぼではなかつたのですか。
だるま。つんぼではない。
A。さつきの失禮をどうぞお許し下さい。
だるま。お前さんは私に何にもわるいことはしなかつたぢやないか。
A。それでもあなたの頭をお打ちして。
だるま。あゝお前さんだつたか。それはどうもありがたう。お前さんに頭をぶたれたので、私は、悟りに入れたのだ。佛さんが、お前さんにのりうつつて私をぶつて下さつたのだ。
（若き立派な僧侶、一人登場。だるまに最敬禮をする）
僧侶。佛さまよりのおつげでお迎へに參りました。
だるま。さうか、それなら一緒に行かう。（二人に氣輕にお辭儀し）さつきはどうもありがたう。
（僧侶とだるま、退場　二人、あつけにとられる）

——幕——

（二三、一一、一二）

本氣になつて

本氣になつて
押さないと
この戸は開かないぞ
この戸は。

或る日の一休（一幕）

登場人物
一休和尚
寺男
土器賣
武士
野武士

（山の小さい庵。冬。夕近く。庵の眞中に圍爐裏あり、一休圍爐裏のわきに蒲團着てねてゐる。寺男圍爐裏にあたつてゐる。一休目をさまし欠伸をする。寺男一休に話しかける）

寺男。和尚さん、和尚さん。

一休。なんだ。

寺男。腹がへりましたな。

一休。腹もへるだらう。一昨日から何にも食はないからな。しかしもう暫らく我慢しろよ。その内にいゝ小鳥でもひつかゝるだらうからな。

寺男。それでも隨分腹がへりましたな。

一休。そんなことをいふなよ。そんなことをいはれると、どうやら俺も腹がへつて來たやうだ。

寺男。和尚さんも隨分お腹がへりましたらう。

一休。お前の方が働くだけなほへつたらう。俺は寢て許りゐるからな。だが可笑しなもので腹がへつて來たよ。何か入れてやらないと腹の蟲が承知しさうもなくなつて來た。

寺男。和尚さん、本當に何時になつたら御飯にありつけませうな。

一休。もう何處かで人が死んでもよささうなものだ。その内引導でもたのみにくるだらうよ。

寺男。それがあてになりませんからな。

一休。何處か近所にお前の知つてゐる奴はないか。

寺男。處が一人もありませんので。

一休。さうか。困つたな。（一寸考へて）しかしまて、何處かに心張棒があつたな。

寺男。ありますよ。

一休。それをよこせ。

寺男。なにをなさるのです。

一休。うまいことを考へたのだ。

寺男。どんなことをお考へになつたのです。

一休。飯にありつけることを考へたのだ。

寺男。この心張棒で

一休。さうだ。それにお前の手ぬぐひをよこせ。

寺男。なにをなさるのです。

一休。一寸鉢卷をするのだ。

（一休和尚起きあがり鉢卷をして心張棒をもち下駄をひつかけ家をとび出て、山路を急いで下りてゆく）

寺男。氣まぐれの和尚さんは又どんなことを考へたのだらう。あゝ腹がへつた。しかし思ひ切つて和尚さんがどんなことをするか見に行かう。和尚さんのすることだからまちがひもあるまいが、今の有樣は一寸氣にかゝる。

舞臺廻る

（山路　山路を土器賣が土器をかごに一ぱい荷つて歩いてくる）

土器賣。あゝくたびれた。

（荷をおろして休む。この時一休が手ぬぐひで鉢卷をして、心張棒をもつてしのび足で登場。土器賣を見ると、一休、「やい、その土器を貸さないか、俺は一昨日から何にも食はないのだぞ」と大音に叫びながら心張棒をふりまはして土器賣に打つてかゝる。土器賣、おどろいて品物をすてて逃げうせる。一休土器賣の逃げうせたのを見送り、微笑みながら鉢卷をとり、心張棒をすてて土器賣の荷物を荷つて心張棒をひろひあげ杖のかはりにそれをつきながら、土器賣の逃げた反對の方へ急ぎ足に行かうとする。さうして寺男にばつたり出會ふ）

寺男。和尚さん、その土器はどうなさつたのです。

一休。あはゝゝ。この土器か、この土器は土器賣から借りて來たのだ。

寺男。借りてどうなさるのです。

一休。これを店へ持つて行つて、その金で飯を食はうと云ふのだ。お前にも食はせてやるよ。あとからついておいで。

寺男。よくかしてくれましたね。

一休。あはゝゝ。それはこの手ぬぐひと心張棒のおかげで貸してもらへたのだ。

寺男。その手ぬぐひと心張棒をどう云ふ風におつかひになつたのです。

一休。この手ぬぐひで鉢卷をしてな、この心張棒をふりまはしてな、土器賣をぶんなぐる眞似をしたのだ。さうしたら人のいゝ土器賣は土器をおいて逃げていつたのだ。

寺男。そ、それではつまり和尚樣は追ひはぎをなさつたのですね。

一休。見やうによつてはさうなるかも知れない。

寺男。訴へられてつかまつたらどうなさります。

一休。さうなれば一興だ。まさか餓ゑ死させもしまいからな。

寺男。和尚さん、本當にひどいことをなさりましたね。

一休。なにもひどいことはしはしないよ。俺のすることにまちがひはないから安心するがいい。土器賣はあんまり金持面もしてゐなかつたが、今朝の飯は食つて來たやうな顏をしてゐた。この土器を一寸借りたつてまさか二日間飯の食へないこともあるまい。

寺男。それでも追ひはぎは餘りよくはありませんね。

一休。いや、餓ゑてする泥棒はわるいことではない。自分の身體を餓ゑさすより泥棒する方がいゝのだ。餓ゑずに泥棒をすることは俺でも賞めはしない。しかし餓ゑてする泥棒は賞めていゝ。俺は前から餓ゑたら泥棒をしてやらうと思つてゐた。さうして餓ゑた奴の手本にならうと思つてゐた。

寺男。和尚さん、それでも貴僧がおたのみになれば、よろこんで金をくれる人が御座いませう。何も土器賣のやうなものゝその日その日の商賣道具をおとりにならないでも。

一休。さうではない。その日ぐらしの土器賣のやうなものゝ商賣道具でさへ餓ゑたものはぬすんでいゝと云ふことを俺は皆に知らしてやりたいのだ。俺のすることにまちがひはない。安心するがいゝ。さ、腹がへつたらう。これを賣つて飯でも食はう。なんなら一杯のましてやつてもいゝ。さあ行かう。

寺男。和尚さん、なんだか氣になりますな。

一休。物の道理のわからぬ奴だ。さあ行かう。

寺男。それでも。

一休。氣にすることはない。腹がへつたものは何してもかまはないのぢや。さあ行かう。腹

かへつて動けないか。

寺男。動けますことは動けますが。

一休。氣になるのか。顏にも似合はない臆病者だな。

（この時一人の武士登場、うや／＼しく一休に近づき）

武士。御貴殿は一休さまでは御座りませんか。

一休。さうぢや、一休ぢや、何か御用かな。

武士。はつ。實は私の父が今朝身まかりまして。

一休。さうか、それはいけなかつたな。

武士。父が臨終に引導は是非一休さまにお願ひしたいと申しましたので。

一休。さうか、それは殊勝な御心がけぢや、きつと極樂往生なさるやうに引導をして進ぜよう。

武士。早速御承知下さいまして有難う存じます。

一休。實は一昨日から一文なしで、この男もわしも一昨日から何にも食はないので腹がへこぺこなのだ。もし金の持ちあはせがあつたら、御布施を今もらひたいのだが、金の持ちあはせがあるかな。

武士。はつ、わづかばかりながら持つてをります。

一休。わづか許りで結構。御遠慮なくお出し下さい。

武士。はつ。（武士持ちあはせの金を皆一休にわたす）

一休。あはゝゝゝ、貴君は正直な方だ。なにも全部およこしになるには及ばない。三人で山わけにしませう。（一休金を三つにわかち、その一つを武士にわたし、他の一つを寺男にわたし、あとの一つを自分のふところにしまふ）

一休。それぢや早速參らうかな。（寺男に）お前は氣の毒だがこの土器をさつきの土器賣にかへして來ておくれ。（土器を寺男にわたし）このかごに處と名がかいてあるからな。さうしてもう不用になりましたからお返しします、先刻は失禮いたしましたと、よく／＼禮を云ふのだ。それで向うがおこつたらあの坊主は一休といふ氣ちがひ坊主で、餓ゑればぬすみをしてもいゝと高言して、よくこんなことをいつて毎度私が困るのですとか何とか云つて頭をぺこ／＼さげて來てくれ。さうしてお詫のしるしとしてこの金を渡してやつてくれ（一休いくらかの金を武士から紙をもらつてそれにつゝんで渡す）さうして何處かで飯を食つておいで。酒がのみたければのんでもいい、しかし空腹にのむのは遠慮しろよ。

寺男。はい。

一休。この金を渡すから歸りに米と麥と味噌と大根を買つて來てくれ。

寺男。はい、畏まりました。

一休。（武士に）おまたせしました。御一緒に參りませう。

武士。お支度は？

一休。いや、口さへ持つてゆけばそれで御存父を極樂往生させるのには十分です。しかし引導を渡す前に飯を頂きたいのですが。

武士。畏まりました。

一休。何しろ一昨日から何にも食はないのですからな。わしの顏を見てもおわかりになるだらうが。（寺男に）お前は御苦勞だな。

寺男。どういたしまして。御飯にありつけると思ひましたら腰に力が入つて參りました。それでは行つて參ります。

一休。なるべく怒らさないやうにしろよ。

寺男。はい。

（一休と武士は武士の出て來た方へ、寺男は土器賣の逃げた方へ退場）

二三分程りに幕をおろす

（幕あがると、第一場と同じ舞臺、同日夕、圍爐のわきに寺男心持醉つていゝ心持に居眠りしてゐる。一休の着てゐた蒲團を着てゐるが、半ば蒲團がはづれてゐる。圍爐の火は殆んど消えてゐる。其處へ一休歸つてくる。寺男の寢てゐるのを見て、そつと庵に登り、蒲團をちやんと寺男に着せてやり、圍爐に火をたいてそれに鐵瓶をかけ明りをつける。さうして暫らく沈默。覆面の野武士おとづれる）

野武士　おたのみ申す。

一休。何御用、

野武士。金の無心ぢや。

一休。面白い處に金の無心に參られたものだ。

野武士。さうぢや、破戒の坊主の處に無心に參つたのぢや。有金を皆よこせばよし、さもなければ貴殿の細首をもらひ受けるまでぢや。

一休。恐ろしい勢ひですな。何もそれ程迄に云はずとも有金はのこらず出します。まあ湯でも一ぱいおのみ下さい。

野武士。そんなものはのみたくない。

一休。さうですか。それならば暫らくお待ち下さい。今のこらず有金を差し上げますから。しかし差し上げると云ふ程はありませんよ。

野武士。ないものは出せとは云はぬ。

一休。中々道理のわかつた方だ。（一休自分の懷中から一つの紙づつみを出し、寺男の枕許においてある紙づつみをとつて中をあらためずに野武士にわたす。野武士あらため見て）

野武士。之でのこらずのことはあるまい、まだかくしてゐるだらう。

一休。疑ふならさがして御覽なさい。

野武士。本當は拙者は金がほしくて參つたのでは御座らぬ。貴殿の首がほしくつて參つたのぢや。（野武士太刀に手をかける）

（この時寺男目をさましおどろいて蒲團をかぶる）

一休。わしの首がほしい、こんな首が何かになりますかな。

野武士。さうぢや。貴殿を生かしておくのは國を亂す基ぢや。

一休。なぜかな。

野武士。貴殿は生佛とあがめられる位置にありながら、酒をのみ、肉をくひ、殺生をなし、遊廓にかよひ、男の兒をもてあそび、詐欺をなし、おひはぎをなし、本當にひとしい事をつくる。貴殿のやうな坊主を生かしておくのは拙者の腹の蟲が承知せぬのぢや。

一休。御尤もなお尋ねぢや。しかしわしは酒をのんだ方がいゝと思つた時に酒をのんだのぢや、肉を食ふ方がいゝと思つた時に肉を食つたのぢや、殺生をした方がいゝと思つた時殺生をしたのぢや。すべてしていゝと思つた時にしたのぢや。一體之等のことはお前さんの思つてゐる程の罪ぢやないのぢや。釋迦が何と云はうとも。

野武士。どう云ふ時に酒をのんだり肉を食つたりしていゝのか。

一休。たとへば自分が私に酒をのんだり肉を食つたりしておきながら他人の酒をのんだり肉を食つたりするのを墮落呼にはりするやうな奴の前では、酒をのんだり肉を食つたりしてやるのぢや。

野武士。僧侶の身でありながら殺生をしてもいい時があるか。

一休。さうぢや、殺生をすると地獄におちると善男善女をおどしつけてる奴の前では殺生をすましてして見せるのぢや。

野武士。遊廓に行つていゝ時があるか。

一休。道樂者でも遊女でも心の持ちやうでは悟りを得られることを知らしにゆくのがなぜわるいのぢや。わしはお前さんのやうに他人に嚴格な武士よりは遊女が好きぢや。

野武士。なぜ男の兒を弄ぶのがいゝのぢや。

一休。男の兒を弄ぶのはいゝことではない。しかしいやな奴にねらはれてゐる男の兒を奪ひとるのはいゝことなのぢや。わしは男の兒が可愛さで弄ぶ氣にはなれなかつたが、弄びながらでも立派な男にしこむことは出來るものだと思つてゐる。

野武士。なぜ詐欺をした。

一休。食ふに困つてゐる奴を助ける爲だつた。又世の中のおろかな奴の目をさます爲でもあつた。又腹の蟲を喜ばせる爲でもあつた。

野武士。なぜ追ひはぎをした。

一休。一昨日から飯を食はなかつたからぢや、わしは何時ぞや、饑ゑた一家の主人が自分の子供の腹がへつたので火のつくやうに泣くのを見兼ねて大福もちをぬすんでひどい罰を受けた話を聞いてたから、餓ゑたらぬすみをしてやらうと思つてゐたのぢや。お前さんは二日飯を食はなかつたことがあるかな。お前さんに子供があつて、それが餓ゑ死しさうになつたらどうなさるかな。わしは餓ゑてする泥棒をひどく罰する奴が腹が立つのぢや。

野武士。どんな時に春畫のやうな詩をつくつたのぢや。

一休。若い僧侶達が淫慾を恐れ過ぎる爲にどのくらゐ苦しんでゐるか、お前さんは知るまいがな。わしはそれを知つてゐるのぢや。さうしてさう云ふ人々に同情してゐるのぢや。わしでさへ淫慾を時々燃やす事があると知つたら、彼等は幾分か安心するだらう。わしはさう思つてゐるのぢや。（一寸間おいて）人間は互に責むべきものぢやない、助けあふべきものぢや。少なくも互に許しあふべきものぢや。それともお前さんは罪にけがされたことのない男かな？　もしさうならばわしは生れて初めて罪にけがされたことのない人間を見るのぢや。とつくりお顔を拜まして下され

（野武士、金のつゝみを一休の前にそつとほりなげて一目散に逃げて行く。一休は何事もなかつたやうに手をあぶる。寺男蒲團から首を出し）

寺男。和尚さん、助かりましたな。私はどうなるかと心配してをりました。

一休。あはゝゝ。簡單な人のいゝ可愛い野武士ぢや。お前のはうの首尾はどうだつた。

寺男。上々で御座いました。あなたの一休樣だと云ふことを云ひましたら、さうおしやつて下さればよろこんで土器を進上いたしましたのにと申しました。實にいゝ奴でした。

一休。さうか、どうしてわしはかう皆に愛されるのかな。

（寺男起きかける）

一休。もつとねるならねてゐろ、まだねむさうな顔をしてゐる。

寺男。それでも御飯の支度を。

一休。いや、それはわしがするからいゝ。二日もかゝらずに飯をちやんとつくつて見せるわ。

寺男。それならおたのみして、もう一眠りいたします（寺男又ねむる）

一休。今度お前が目をさます時分には飯の支度が出來てゐるだらう（暫らく間おいて）どれ、米でもとがうかな。（一休立ち上る）

――幕――

（一九二三、三）

秀吉と曾呂利

登場人物

秀吉
淀君
曾呂利、其他

（廣間、築庭見える）

秀吉。一萬五千人と三萬六千人よせるといく人になるかね。

淀君。五萬一千人です。

秀吉。それから七千人ひくといく人になる。

淀君。四萬四千人。

秀吉。四萬四千人が一日六合飯を食ふといくら米がいるかね。

淀君。二十六萬四千合ですから二百六十四石になります。

秀吉。まちがひないね。

淀君。まちがひありません。しかしそんなことは誰かに任せればいゝことでしよ。

秀吉。一寸覺えておく方がいゝことがあるのだ。

淀君。もうそれでおしまひですか。

秀吉。いや、まだある。三十八に四十五よせてそれに二十八よせたらいくつになる。

淀君。百十一になります。

秀吉。うん、感心にまちがはないな。

淀君。あたりまへですわ。

秀吉。おれにわからないと思つて出鱈目云つてゐるのかと思つたのだ。それなら三に一つをたしたらいくつになる。

淀君。五つです。

秀吉。三に一つだよ。

淀君。えゝ、五つ。

秀吉。そんなら一に一たしたら。

淀君。三つ。

秀吉。馬鹿！

淀君。あなたにそのまゝおかへしおわかりになるの。

秀吉。生意氣云ふと打つぞ。（打つ眞似をする）

淀君。打てば逃げますわ。（立ち上り逃げる）

秀吉。さつきから出鱈目云つてゐたのだらう。

淀君。えゝ、出鱈目よ。

秀吉。その手は喰はないぞ。お前は近頃生意氣になつたな。

淀君。あなたは近頃、又浮氣ものになりましたね。

秀吉。譃つけ。

淀君。私が知らないと思つてゐるの。

秀吉。俺だつて知つてゐるぞ。

淀君。あなたはやきもちやきね。

秀吉。その點だけはお前には叶はないよ。

淀君。算術はどうですかね。字をかくこと、和歌をよむことはどうですかね。

秀吉。それから馬鹿な點でも俺は叶はなかつたね。

淀君。どうですかね。

秀吉。お前はもつと俺をこはがらなければいけないぞ。

淀君。處が怖くないのですから仕方がありませんわ。怖くなる藥でも、あなたのお氣に入りの曾呂利にさう云つて搜さしたらいゝでしよ。

秀吉。あいつ自身も少しはのんでもいゝからな。

淀君。だけど皆はなぜあんなにあなたが怖いのでせう。

秀吉。皆に利口だからさ。

淀君。それでは私達は馬鹿だからお氣に入るのね。

秀吉。さうさ。俺だつてたまには馬鹿になりたいからな。

淀君。たまですつて。聞いてあきれますわ。

秀吉。なまいきを云ふと、手打にするぞ。

淀君。よろしいわ。私之でうけて見ますわ。

秀吉。それならうけて見ろ。（刀をぬく）

淀君。（刀かけの刀をぬき竹光なのにおどろく）之はどうしたの。

秀吉。あはゝゝ。それは曾呂利の奴をだましてやらうと思つてこしらへたのだ。曾呂利の奴がその刀をしきりと欲しがつてゐたから中味をすりかへておいてやつたのだ。今日曾呂利に褒美にやらうと思つてゐるのだ。

淀君。それは面白いわ。それで何の褒美にやるの。

秀吉。俺の行脚するのをとめた褒美だ。

淀君。それなら行脚しなくなつたのは曾呂利にとめられたからで、私がやきもちをやめて上げたからではないの。

秀吉。それだつてお前がやきもちをやくのをやめたから行脚をやめたとは皆には云へないからな。曾呂利をつかつて、俺の行脚をやめたことを皆に知らせてやらうと思つてゐるのだ。

淀君。どう云ふ風に曾呂利をつかふの。

秀吉。それは俺も知らない。今に曾呂利がやつて來たら相談しようと思つてゐるのだ。

淀君。皆さぞ安心するでせう。

秀吉。三成の他はな。

淀君。三成だつて隨分心配してゐましたわ。

秀吉。昨日の晩まではな。

淀君。へんなことをおつしやるのね。

秀吉。お前は昨晩、何をしてゐたか俺は殘らず人に見さしておいたぞ。（間）まあ驚かなくつていゝよ。俺は自分の女の祕密を他の奴に知らせて喜ぶ程の馬鹿ぢやないからな。

淀君。私、昨晩はおとなしく一人でゐましたから、調べていたゞいた方がなほよかつた位ですわ。

秀吉。お前は俺を誰だと思つてゐるのだね。

淀君。あなたは本當にをかしな方ね。

秀吉。もつとこびろ、こびろ。

淀君。誰か來ましたわ。

秀吉。曾呂利の奴だ、あてられると困るので足音をたててやがる、しやくにさはるからあてゝやれ。

（曾呂利、襖をあける）

秀吉。一寸待つてくれ、いやなに、かまはない、今日は又いやに靜かに足音をさせずに來たな、泥棒猫のやうな奴だな。

曾呂利。そろり、そろりと參りました。いゝ所を拜見いたしたいと思ひましてな。ありがたう御座いました。

秀吉。どうだ、皆は俺が行脚をすると思つて心配してゐるかね。

曾呂利。えゝ、非常な心配をしてゐます。今日あすにあなたがいよいよお出かけになると云つて心配して、皆、眞青な顔をしてゐます。福島、加藤などと云ふわからずやどもはもうすつかりしよげて、私が今一寸會つた時も、どうにかしておとめしてくれと皆、私をたのむやうにしてゐました。

秀吉。それでお前は何と云つた。

曾呂利。私が太閤さんでも、こんなわからずやと、すきますまい、一寸これは失禮、女の方とちがつて男の方にとてもすきもすきで困る、いくら[illegible]太閤さんでも、世の中がい

やになるより仕方がない。私はこれから一緒におともさして戴くわけになつてゐるので、こんなうれしいことはないと思つてゐると申してやりました。

秀吉。さうしたらどうした。

曾呂利。皆怒り出しました。ですが私にはあなたがついてゐるから、平氣です。之から太閤さんによばれてゐるのだから、なぐりたい人は今なぐつて下さい、太閤さんから御褒美があるでせうから、と申しましたら皆、ゲンコのやり場がなくなつて困つてゐました。皆さん、そんなに太閤さんが大事なら、太閤さんの處へ行つて、私達はもうお互に仲よくしますから、そして御心配はかけませんから、どうか御氣樂にゐて下さいとさうおそろひでお出かけになつたらいゝでせう、と云つてやりましたら、之から皆で御願ひに出かける所だが、お前もたのむから骨折つてくれと云ふ御話でした。それで私は御一緒に旅行してあるくのをたのしみにしてゐるのだから、中々たゞでは御相談にのれないと云ひましたら、皆さんがいろ〳〵のものを見せて、之をやるから、仲間になつてくれとおつしやるので、それまでおつしやるなら、皆さんでやつて見て、駄目でしたら、私がやつて見ることにしませうと云つておきました。ですから皆が云つてもお聞きになつては困ります。私が出るまで。

秀吉。よし、よし。だが、お前はうまいことを云はなくつては駄目だよ。いくらお前の云ふことがきゝたくつても、あんまり馬鹿なことを云はれると、俺が感心するわけにはゆかないからな。

曾呂利。その點は御安心下さい。あつと云はしてお目にかけます。しかしうまくいつたら、その刀を頂戴したいもので。

秀吉。この刀か、之は中々やれないぞ。之をほしいと云つてゐる奴はいくらでもゐるのだから貴樣にやると皆が、うらむからな。

曾呂利。いや大丈夫です。私がうまいことをやつてお目にかけます。

秀吉。お前はこの刀をとることを誰かにたのまれてゐるのだらう。そしてもらつたらすぐ賣らうと思つてゐるのだらう。

曾呂利。まあそんな所です。

秀吉。誰と約束したのだ。

曾呂利。まだ約束はしません。一番たかく買ふ人に賣るつもりです。

秀吉。誰が一番高く買ふと思ふ。

曾呂利。まあ、利口でない人が一番高く買ふでせう。

秀吉。俺に賣らうと思つてゐるのだらう。

曾呂利。あなたはけちですからね。

秀吉。利家か。それともあのお前の好きな家康か。

曾呂利。あなたのお好きな家康になら、たゞでも上げてよろしいが、あの男はあなたよりなほけちでせうな。

秀吉。いくらけちでもたゞならもらふだらう。

曾呂利。一たいあなたは下さるのですか、下さらないのですか、どうせ下さらないものを、かれこれ云つても、云ふだけ損ですからな。

秀吉。お前がうまいことを云つて、即座に俺が思ひとゞまることが出来たら、やつてもいゝ。

曾呂利。よろしい。それでは聞けなかつたら、あなたを行脚させるやうにしむけますよ。家康なんかはあなたが行脚するのを内々のぞんでゐますよ。あいつの顔を見ると胸がわるくなりますね。あの馬鹿なくせに利口面して、お人よしの顔をして、すましてゐるのを見ると、生きてゐるのが、なさけなくなりますよ。あれが世間に君子人として通用できる顔なのですからな。世間に丁度いゝ顔のあれが代表

だと思ふと、人間に愛想がつかしたくなります。

秀吉。それだつて、利用の道もあるよ。おまへでもつかひ道があるからな。世界は廣大なものだよ。

曾呂利。それであなたが一番利口で通用するのですから世界は廣大なものですね。

秀吉。その上、淀が一番美人で通用し、お前が一番頓智のある人間で通用するからと云ひたいのだらう。だが日本だけが世界ぢやないからな。支那には少しは話せる奴も居るだらうよ。

曾呂利。何しろ遁世して行脚をしたいと云はないと、自分の意志が通らない男子が一番利口なものなのですからね。

秀吉。冗談もいゝ加減にしろ。それにおべつかつかつて生きてゐるものもある。

曾呂利。玩具にするには都合がありますからね。

秀吉。どつちが玩具なのだ。

曾呂利。兩方でせう。ね、淀君樣。

淀君。私は知らないよ。あまり失禮な事を云ふと。

秀吉。默るなよ。曾呂利は人間だと思ふと腹がたつ。

淀君。それならなんだと思へばいゝのです。

秀吉。人間の言葉をしやべるチンだと思へばいい。

淀君。まあ。私もそれなら之からさう思ひませう。さう云へばチンに何處か似てゐますわね。

曾呂利。猿に似てゐるのと、チンに似てゐるのとどつちが名譽でせうね。

秀吉。曾呂利、皆が待つてゐるだらう。

曾呂利。あんな連中は待たしておく方がよう御座います。

秀吉。それなら俺はいよ／＼明日たつことにしたと皆につたへてくれ。

曾呂利。畏まりました。

秀吉。お前はうまくやつてくれないといけないぞ。俺はもう、行脚する氣はもうまるでなくなつたのだからな。

曾呂利。前からおありにはならなかつたのでせう。

秀吉。いや、一寸行かうかとも思つてゐた。

曾呂利。まあ、お二人の御機嫌がなほつたのはありがたいことです。それなら皆をつれて來ますからね。

秀吉。三成もよべ。

曾呂利。畏まりました。（退場）

淀君。曾呂利はいやな奴ですわね。

秀吉。あいつは馬鹿ぢやない。

淀君。あんな圖々しい奴を見たことはありませんわ。

秀吉。あれで人はいゝのだ。

淀君。さう云へば何處かあなたに似てゐますわね。

秀吉。人のいゝ所が似てゐるのだらう。

淀君。ずるい所が似てゐるのですわ。

秀吉。俺も日本中で、一寸なつて見たいと云ふ男は曾呂利位なものだ。

淀君。まあいやですわ。

秀吉。だが日本一の俺を玩具にするのはわるくないからな。

淀君。あなたは曾呂利の玩具になつてゐるの。

秀吉。俺がお前の玩具になつてゐるやうなものだ。お前は俺の玩具で、俺はお前の玩具だ。

淀君。私はあなたの妻ではないのね。

秀吉。名前なんかなんだつていゝが、不足なお前を妻だとは思つてゐないよ。

淀君。不足ですつて。

秀吉。お前が知らなければ、若君の二歳に聞

いたら知つてゐるだらう。だが俺以外の子供も生んだらお前の首はとんでゆくぞ。
淀君。私以外に子供をつくつたら、あなたの首もとんでゆきますよ。
秀吉。そしたら又行脚をするさ。
淀君。もうそのおどしにはのりませんよ。
秀吉。曾呂利の奴、餘計なことを云ひやがつた。
淀君。曾呂利は、あの刀をほしいと云ひましたね。あなたの方が少しお人わるね。
秀吉。處があいつはもう感づいてゐる。
淀君。どうして。
秀吉。お前がうれしさうな顔してゐたから。
淀君。大丈夫よ。
秀吉。まあ見てゐるがいゝ。誰が一番馬鹿だか。俺はちやんと知つてゐる。
淀君。誰？
秀吉。今に見てゐろ。大勢利口でない、可愛い奴がやつてくるから。
淀君。あんまり可愛くもないわ。
秀吉。お前は福島が、大すきだつたね。
淀君。あんな男は大嫌ひ。
秀吉。それなら加藤清正か。
淀君。あの男も大嫌ひ。
秀吉。向ふでも好いてはゐまいよ。
淀君。あんな男達に好かれてはたまりませんわ。だが家康と來たら一番嫌ひ。
秀吉。さう嫌ふなよ。あの男は、あれで馬鹿ではない。俺の力をよく知つてゐる。
淀君。あなたはお人よしだから、家康におだてられてよろこんでゐるのですわ。
秀吉。俺は家康はどんな男かちやんと知つてゐるよ。あいつは大名育ちで、見かけはおつとりしてゐるが、俺から面白い所をなくしてひからびさしたやうな、實利一點ばりの面白くない男だよ。感情なんか爪のあかほども持つてゐないが、世間ではあんな方が通用するのだ。世間に通用するためだけに生きてゐる男だから、がつ／＼してゐるが、便利な所がある。
淀君。大勢やつて來ましたわ。
秀吉。面白いぞ。曾呂利の奴、なんて云ひやがるかな。俺の豫期してゐるより利口なことの云へる奴はあいつ一人だからな。
淀君。どうせ私は、馬鹿ですわね。
秀吉。やきもちをやかなければ、お前は一番利口ものだ。
淀君。そして浮氣さへなさらなければ、あなたは、一番利口ものですわね。
秀吉。うるさい連中がやつて來た。お前は默つてゐろよ。
淀君。どうせ私は碌なことは云ひませんからね。
秀吉。さうだよ。お前の言葉の無意味で、毒のないことを知つてゐる奴は、さう多くはないからな。
淀君。馬鹿が多くつて困りますね。
秀吉。そしてお前もその變り種の一人だから困るよ。
淀君。何とでもおつしやいまし。
（小姓登場）
小姓。加藤清正、福島正則、石田三成、その他三四人の方がお目にかゝりたいと申してゐます。
秀吉。曾呂利も入つてゐるか。
小姓。えゝ、をります。
秀吉。通すのはいゝが、俺に忠告することだけはやめてほしいとさう云つてくれ、俺の決心はかへないからつて。
小姓。はい。
淀君。譃つきね。あなたは。
秀吉。譃から誠も出るものだからな。
淀君。正直な人は可哀さうですわ。

秀吉。お前も可哀さうと云ふ言葉を知つてゐるのか。

淀君。あなたが知つてゐる位は私も知つてゐますわ。

（六七人登場、平伏する）

秀吉。おそろひに、おいとまごひに來たのか。御苦勞、御苦勞。俺の留守の間のことはよろしくたのむぞ。

清正。畏れ入りますが、今度のことは思ひとゞまつて戴くわけにはゆきませんか。

秀吉。お前たちに云はれて思ひとゞまる位なら、俺だつてもうとつくに思ひとゞまつてゐる。俺の方がお前達よりはよく考へてゐるから、そのことなら聞きたくない。他に話がなければ今日は少し明日の用意があるから、歸つてもらはう。

三成。どうぞそんなことをおつしやらないで、私達にわるい所があれば、いくらでもなほすやうにいたしますから。

秀吉。お前達は出來るだけのことをしてゐてくれるのだから、俺はこの上、お前達に何にも望むことはない。

清正。今、あなたに、遁世されては天下はどうなるか、わかりません。

秀吉。そんなことは俺の方が考へてゐるから安心するがいゝ。

正則。どうしても思ひとゞまつて戴くわけにゆかないのですか。

秀吉。ゆかないね。

正則。こんなに申しましても。（わつと泣き出す）

（皆まけずに泣く）

秀吉。三成、お前は目に唾をつけるのをもつとうまくやらないといけないぞ。曾呂利、お前はなにしに其處にぼんやりすわつてゐるのだ。早く歸つて出かける用意をしろ。

曾呂利。御許し下さい。私は、出立の用意をしようと思ひまして、いそいで家へ行かうと思ひましたら、急に弟から聞いた話を思ひ出したので、急に旅だつのがいやになつて、おことわりに上つたのです。

秀吉。臆病ものめ。それなら三成、お前と一緒に行かう。

三成。どうぞ思ひとゞまつて戴きたう御座います。今、あなたがおいでにならなくつてはまた天下は亂れてしまひます。私達はどうしていゝかわからなくなります。

秀吉。それなら清正、お前と一緒に行かう。

清正。私もそれにはお斷りいたします。どんなことがありましても、お思ひとゞまつて戴かないと困ります。

秀吉。わからない奴許りだな。それなら且元、貴樣は一緒に來てくれるだらう。

且元。私達は自殺してでもお思ひとゞまつて戴く決心で參りました。

秀吉。本當か。

清正。はい、もしどうあつても、この天下をお見すてになつて、行脚をなさらうとお思ひになるなら、私達一同は、死をもつておとめいたさうと思つてまゐりました。

秀吉。面白い、こゝで皆、自殺してもらはう。俺も云ひ出したことはあとにひくのは嫌ひだ。

淀君。どうかそんなことをおつしやらずに。

秀吉。默つてゐろ。死ぬなぞとおどかされて、あとにさがる俺ぢやない。早く皆自殺して見せてくれ。貴樣達も名の知れてゐる男だから、今更生命が惜しいとは云ふまいな。

清正。元より私達がいくらお願ひいたしましてもおきゝ入れ下さらなければ、この場で私達は自殺してお目にかけます。

秀吉。それは面白い。早く自殺して見せてくれ。

清正。畏まりました。

三成。自殺の用意をして参りませんでしたから一寸用意をして参ります間、御猶豫を願ひます。

秀吉。馬鹿！　死ぬのに用意なんかいらない。そのもつて來た、短刀で腹さへ切つて見せたらいゝのだ。早〻用意をしろ。三成、御前から先きに腹を切つて見せてくれ。

淀君。さうおせきにならないでもいゝでは御座いませんか。

秀吉。默つてゐろ。おーい、皆出て來い、面白いものを見せてやるから。

（腰元達出て來て並ぶ）

正則。（三成に）介添は俺がして上げる。早く腹を切りなさい。

秀吉。正則、お前も三成と一緒に腹を切れ。

正則。はつ。三成、それなら俺が腹の切り方を教へてやるから俺の眞似をしろ。

且元。私もどうか、一緒に死なして下さい。

秀吉。お前が云ひ出したのだから一緒に死ぬといゝ。

且元。ありがたうございます。

秀吉。清正！　お前は三成の首を切る役をしろ。それから嘉明は正則の首を切つてやれ。それから行長は且元の首を切れ。

三人。はつ。（皆用意にかゝる）

秀吉。それから曾呂利、お前も一緒に自殺をしろ。

曾呂利。どういたしまして。私は殿下と御同樣に他人樣が自殺するのを拜見するのは至つて好きで御座いますが、自分が死ぬのは至つて嫌ひで御座います。どうもこゝにいらつしやる方々のやうに、自殺するのが好きな病には一ぺんもかゝつたことが御座いません。そればかりはどうぞお許し下さい。

秀吉。許すわけにはゆかない。俺はお前の自殺するのが見たいのだ。そのかはり介添は淀君にさせてやる。少し切り方がまづいかも知れないが、なるべく死なないやうに首をはねるやうにさせるから、安心するがいゝ。俺もお前達皆が死んでくれるので、この世に思ひおくことはない。おかげで之から愉快に安心して方々旅行して步ける。風流を友にして浮世を忘れることが出來る。

曾呂利。（急に笑ふ）はつ、はつ、はつ、はつ。

秀吉。曾呂利、氣でもちがつたのか。

曾呂利。いや、つい殿下があまり、いつもにお似にならずに、馬鹿なことをおつしやるので、つい可笑しくなりまして、失禮いたしました。

秀吉。失禮は許してやるから、早く自殺しろ。

曾呂利。畏まりました。泣き出す眞似をする）

淀君。（そつと　あなた、本當に皆をお殺しになるつもりなの。

秀吉。うん。急に殺して見たくなつた。

淀君。冗談なんでせう。

秀吉。うん、冗談だらう。皆、首が切れてしまふまで冗談にしておかう。

淀君。本當のことをおつしやつて下さい。

秀吉。何をだ。

淀君。本當にお殺しになるつもり。

秀吉。どうだかね。そんなことはお前なんか口ださなくつていゝ。早く曾呂利の首を切る用意をしろ。

淀君。私にはそんなことは出來ません。もう皆、そんな自殺の狂言なんかやめて早くお歸り。

清正。之は淀君樣のお言葉とは思へません。私達は自殺の狂言なんかはいたしません。私達は本當に死んでお目にかけます。

淀君。それだつて、殿下だつてあとで後悔なさることはわかつてゐるよ。

清正。その御後悔こそ。私達がのぞんでをる

のです。

（段々皆用意が出來てくる）

曾呂利。（一層大きな聲で泣く）わあ、わあ、わあ。

秀吉。曾呂利の馬鹿、何て云ふ聲を出すのだ。そんなに死にたくないのか。

曾呂利。（けろりとして）私は自分が死ぬのが悲しくつて泣いたのでは御座いません。又こゝにゐる方々が死ぬのがなさけなくつて泣いたのではないのです。こゝにいらつしやる方方は人を殺すことは屁とも思つてゐない方です。ですから自分の頭も三つや四つ切られたつてお困りにはならないだらうと思ひます。又常々私を輕蔑なさつて、畜生のやうにおあつかひになつてゐる方々ですから寧ろ何か理由がつけば、死なして上げたい方許りです、しかしあなたはちがひます。あなたは、私はなんだか自分の子供か、孫のやうに思へて、あなたのお生命が大事で大事で仕方がないのです。そしてこゝにゐる方たちもあなたのことを本當に思つてゐて下さる點だけで、いつも私は之等の方を尊敬し、又愛してをりました。

秀吉。それはそれでいゝとしてなぜ泣いたのだ。

曾呂利。殿下の玉顔を拜してをりました所、殿下は近い内に私の弟があつた天狗のやうな目にお逢ひになることが、お人のよろしい御人相にあらはれてをりますのがはつきりわかりましたら、急に自分の死ぬことを忘れて、殿下が御可哀さうになつて、涙がとゞめ兼ね、聲を忍ぶことが出來ず、つひに殿下の御耳にたつしましたやうなありさまで。

正則。三成、さあ一緒に仲よくめいどに參りませうかな、もう用意はよう御座いますかな。

三成。もうすぐ出來ます。

曾呂利。皆さん、一寸待つて下さい。私も云ふだけのことを云つたら、お伴しますから、どうか私の用意の出來るまで待つて下さい。性急の正則樣、少し待つて下さい。

秀吉。正則、待つてやれ。

正則。はつ。

秀吉。お前の弟が天狗に逢つたつて本當か。お前に弟があつたのか、ちつとも知らなかつた。

曾呂利。お耳に入れても仕方が御座いませんでしたから、御知らせしませんでした。尤も妹がありましたら、私に似て器量よしに違ひありませんから、御耳に入れないでよさうと思ひましても、御耳に入りましたことと存じますが。

秀吉。餘計なことは云ふな。天狗に逢つてどうしたのだ。嘘つくとゆるさんぞ。

曾呂利。どうせ死ぬのですから、ゆるして戴かないでも結構ですが、嘘は申しません。私の弟はそれは私に似て賢い、勇氣のある、古今未曾有の男で、身の丈は殿下よりは五寸程低く、頭のまはりは殿下の三倍もあり、智慧におきましてはこの曾呂利よりも賢い位ですから、殿下よりは五倍以上賢く、太つてゐることはだるまの如く、見るから甘味さうな男で御座いました。

秀吉。甘味さうな男と云ふのはどう云ふ男なのだ。

曾呂利。肉の出來が、喰べたらうまさうに出來てゐまして、私が見てもよだれが出さうですから、天狗が見たらなほ喰べたくなるだらうと思ふやうな身體つきで御座いました。

秀吉。へんな身體つきの奴だな。

曾呂利。それで山を一人で歩いてゐたのを天狗に見つけられたのです。ですから助かりやうがないのです。天狗はよだれを三千丈程たらしまして、弟は瀧かと思つたさうですが、

まあ、少し大けさと見ましても、あのお庭のかけひ位のよだれは垂らしたらうと思はれます。天狗の身の丈は見上けるばかり、鼻の高さは三尺六寸五分、口の大きさは徑一尺、耳の大きさは見おとしたさうで御座いますが、大方普通の人よりは小さくはないだらうとの話で御座います。

淀君。口の大きさはどの位あつたの。

曾呂利。口の大きさは淀君様が團子をおあがりになる時の御口より、三まはり半大きかつたさうで、眼光のするどさは、殿下のお怒りになる時にさも似たり。

秀吉。馬鹿云ふな。

曾呂利。その聲は殿下が三軍を叱咤される時に劣らず、弟をつかまへて申しますには、なんとお前はうまさうな身體をしてゐる男ではないか、俺はまだお前程うまさうな人間を見たことはない、お前に逢へたことは俺が三千年前から望んでゐて未だ曾つて滿されたことのないよろこびだ、その頭の骨を嚙みくだく時は、どんなに氣持がいゝだらう、又その目玉は鯛の目玉より百倍も甘味からう。よく來てくれた、感謝する、と申したさうです。

秀吉。馬鹿。馬鹿だな、貴樣は。

曾呂利。其處で弟は、前にも申した通りの臆病で御座いましたから腰はぬかしはしませんでした。たゞ腰の方が、地面にすわりたがつたさうで、もう立つのがいやだと申したさうです。そして身體中から勇氣がほとばしり出して汗となり、身ぶるひとなり、そしてどうぞ食ふのは助けてくれと申したさうです。お笑ひになつてはいけません。私の弟は大へん正直もので、食はれたくないのに食はれても平氣だと云ふ顏の出來ない男で御座います。自分の頭が嚙みくだかれるのを名譽と思ふよりは、情けないと思ふ男で御座いまして、死ぬのは何よりも嫌ひな男で御座いました。死んだら生きられない、可愛い女房の顏も子供の顏も見えない、さぞ女房子も泣くだらう、泣かしたくないと云ふ至つて正直な男で、死んではおいしい御飯も戴けないと云ふことをよく知つてゐる賢い男で御座います。

淀君。それからどうしたの。喰はれたの。

曾呂利。中々どういたしまして。弟は利口もので御座います。しかしあんまり早く話してしまふと、それだけ早く切腹しなければなりません。切腹もお芝居でするならいくらでもしてお目にかけますが、本當にするのはあまり好きでないので、なるべく遲い方が結構なのですから、それに私の話がすめば正則さまはまあいゝとしても、三成さままでおなくなりにならなければならないのですから、なるべく御ゆつくりおきゝを願ひます。えゝと、何處まで話しましたか知らん。弟はもう天狗には逢ひましたのですね。それともまだ一人で山を歩いてゐましたか知らん。

秀吉。天狗に喰れる所だ。さつさと話してしまへ。

曾呂利。さうでした。思ひ出しました。天狗は中々弟が許してくれなぞと云つたからつて同情するやうなお人よしではありません。早く食ひたいので、よだれが縷々出る許り。「俺に食はれるのを名譽とは思はないのか、ありがたいとは思はないのか、俺に食はれるためにお前はそんなに大きくなつたのぢやないか。食つてやるから、ありがたく思へ。それでこそお前は生き甲斐があつたと云ふものだ。よろこべ、よろこべ。どうだ、こんなうれしいことはないだらう。泣いてゐるな。そんなにありがたがつて泣かないでいゝ。嬉し泣きをあんまりされると水氣がなくなつてまづくなる。お前の心は感心だが、俺もすきで

食つてやるのだから、さうありがたがらないでもいゝ―どうもあんまり蟲のいゝ天狗なので弟もおどろいてしまつたさうですが、いくらおどろいても食はれるのが本當では弟もなさけないので、どうしたらいゝだらう。其處で弟は、私のことを思ひ出してくれたさうです。私なら妻子はゐませんし、親兄弟は一日も早く死ぬことを望んでゐる。俺のかはりに兄貴を食はしたら、萬事好都合、こんなにうまい話は又とあらうかと思つたさうです。どうも親切な弟もあればあるもので、それで、弟が云ふのに、私が食はれるのは實にありがたいことですが、それではあまり勿體なすぎます、私ももう少し修行がつみまして、あなたのおなかに入つてもいゝだけの立派な人間になりましたら、それは私も遠慮せずに入りますが、今の私のやうな修行の足りないものではおなかに入れて戴いても、失禮になる許りです、幸ひ私の兄は私とちがつて身體も私よりはずつと上等で、その上、天狗樣に食はれる修行も私よりつんでもう免許皆傳を許されてをります、どうか私のかはりに今度は兄をめし上つて下さい、兄の頭は一種特別の味を持つてゐることは、私が生命にかけて保證いたします、と申したさうですが、天狗は、兄もいづれ食ふことにするが、お前を許すわけにはゆかない、お前の修行のたりないのは知つてゐるが、いくら修行したつて味にはちがひない、反つて齢をとるとまづくなる、このくらゐが丁度いゝのだと云つて、弟の頬をつまんで見たさうです。いよ／＼弟の生命はあぶなくなつて來まして、之からどうなりますか、一寸一服さして戴いてから申し上げます。

秀吉。たばこをのましてやれ。

曾呂利。ありがたう御座います。お酒も一杯戴きたいのですが、いけませんか知らん。

秀吉。のましてやつてもいゝ。

曾呂利。私だけでは皆に氣の毒ですから皆にも飲まして上げて下さい。

秀吉。飲ましてやつてもいゝ。皆に酒をもつて來い。

腰元。はい。（立つ。用意をする。皆のむ。）

曾呂利。（いく杯ものむ。殿下、殿下もおのみ下さい。もう之がこの世のお別れですから。しかし一ケ月もたゝない内に又あの世で殿下、一杯やりませう。尤も殿下は地獄で、私が極樂ですと一寸困りますな。しかし私も、生れて一ぺん位本當のことを云ひましたから地獄にやられるかも知れません。さうしたらまたぢきお目にかゝれますね。ながくつて一月の辛抱ですね。

秀吉。俺はそんなに早くは死んではやらないよ。

曾呂利。處が弟は急にかう云ふことを思ひついたのです。どうもこれはこのまゝでは食はれるにきまつてゐる、なぜ天狗に自分が食はれ、なぜ鳥や兎は俺に食はれるのだらう、之は天狗が俺よりも大きくつて力が強いからだ、天狗だつて俺より弱かつたら俺の方が食つてやれるのだが、どうも殘念なことだ。其處で弟はあの家康や、家康にくつついてゐる、何とか云ふ男がありましたな、あの男のやうな謀を思ひついたのです。之は天狗をおだてるに限る。其處で弟は、天狗さま、天狗さま、お鼻の高くつて赤い誠にお偉い天狗樣、私は子供の時から、世界に天狗樣程偉いものはない、あの方は自由自在に身を變じることが出來る、大概のものは大きければ大きい切りで、小さくなりたくもなれず、小さければ大きくはなれない、實にいくぢのない、不自由な、なさけないものだ、處が天狗

さまになると、無極に大きくもなれ、小さくもなれる、實に不思議な偉い方だと聞いてをります、本當ですか知らん、私にはさう云ふことは信じられないのですが。すると天狗は、大得意になつて、元より俺は、大きくも小さくもなれる、と云つたのです。其處で弟はいくらあなたが偉くつても今すぐなれると云ふわけにはゆかないでせうと云つたら、天狗はから／＼と笑つて、そんなことが出來ないでどうして天狗になれるものかと云つたのです。それで弟はそんなら一つ拜見させて戴けますか、拜見出來れば私は本當にあなたを崇拜し、あなたに食はれあなたの肉になることを無上の光榮と思ふことが出來るでせうと申したのです。それなら一つ見せてやらう、大きくなつて見せようか、小さくなつて見せようか。弟は大きくなつて下さいと云つたのださうです。すると、めきめき、めきめきと大きくなつたさうで、あすこに見える山よりも三寸程頭が高くなつたさうです。弟もこれはおどろいたと思つて、感心しきつて見とれてゐましたら、又めきめき、めきめきと小さくなつて、元の天狗にもどり、どうだ、驚いたらうと申したさうです。弟は感心しきつて、本當に本當にあなたは偉い、實に偉い、こんなに偉いとは思はなかつた、世界はあなたのものだ、あなたに敵はない、あなたがそんなに偉い方とは思はなかつた、實に偉い方だ、おつたまげる程偉い方だ、實に偉い方だ、おつたまげてしまつた、(首をふりながら)實に偉い、實におつたまげた、實に偉い、實におつたまげた、實に偉い。

(皆笑ふ)

秀吉。馬鹿だな、貴樣は。もう澤山だ。

曾呂利。其處で弟が申しますのに、しかしいくらあなたでも小さくはなれないでせう。なれないでどうする。私のこの手のひらにのれるやうになれますか。なれないでどうする。天狗は弟の手のひらを廣げさしてぽんととんだかと思ふと、五寸位の天狗さまの人形のやうなものが、弟の手のひらにのつたさうです。どうだと天狗は弟の手のひらで云つたさうです。弟は、實に感心しましたがもつと小さくなれませんか。なれないでどうする、さう天狗に云つて段々小さくなつてゆく。それを感心して見るふりして顏を近づけて行つてそのすきをねらつて、いきなりぱくりつと弟は天狗の首をかみ切つて、あはつはつ、あはつはつ、あはつはつと笑つたさうです。それから、その話をきいた人々は皆申しました。なんと云ふ馬鹿な天狗なんだらう、なんと云ふ馬鹿な天狗なんだらう、あはつは、あはつはゝ笑つたと申します。

秀吉。(立ち上り)出かしたぞ。曾呂利！ お前の忠告を感謝するぞ、お前の話をきいて俺は行脚をするのを思ひとゞまつた。お前の云ふ通りだ。皆もう死ぬのはやめろ。そして仲よくしろ。俺はもうこゝにがんばつて、俺の力限り天下のために働くぞ、皆のもの、安心してよろこべよろこべ。曾呂利、褒美にこの刀をやるぞ。

曾呂利。(後ろにとびすさり、平伏し)ありがたう御座りました。(刀をおしいたゞく。そして一寸重さをはかる)

秀吉。清正、正則達、さつきの俺の言葉を氣にかけずにゆるしてくれ。お前達の忠義の程、一生、忘れずに思ひ出してはよろこぶだらう。

清正達。(平伏し)ありがたう御座ります。

秀吉。さあ、皆、酒をのめ。皆に酒をついでやれ。

勝元達。はつ。

曾呂利。殿下、私はこの刀をいたゞきましても、私には勿體なすぎます。この場でどなたかにお賣りしてもよろしう御座いますか。いかゞで御座います。

秀吉。それは又一段と面白いだらう。立つて賣れ。賣れ。皆もなるべく高くかつてやれ。

曾呂利。さあ皆さん、この刀はいくらで買つてくれます。一分でも高い方にお賣りいたします。殿下の前ですから中をお目にかけることが出來ないのは殘念で御座います。

正則。中は見ないでもわかつてゐる。五百兩なら買ふ。

曾呂利。五百兩は少し可哀さうです。

秀吉。八百兩で買つてやらう。

清正。千兩なら戴きます。

嘉明。千二百兩なら戴きます。

曾呂利。もう上はありませんか。

三成。二千兩なら戴きます。

行長。二千三百兩。

正則。二千五百兩。

三成。三千兩。

（正則、三成に、何するかわからない。秀吉、曾呂利はそれを面白がる）

曾呂利。もう他にありませんければ、三成樣に買つて戴きます。

正則。三千二百兩。

淀君。曾呂利、それで賣つておしまひ。

秀吉。三千三百兩。

三成。三千五百兩。

秀吉。三成に賣れ。

曾呂利。はつ。

秀吉。三成、お前はよくしたぞ。曾呂利、お前はこの刀はいくらなら買ふかな。

曾呂利。この刀の價値は外許りで中味は木ですから十兩を一文こしても、私はこの刀は買はうとは思ひません。殿下はいかゞですか。

秀吉。この刀がお前の手になくて、他の人の手にあつたら、五兩でも買ひたくないな。曾呂利、苦しうない。刀を拔いて見せてやれ。

曾呂利。はつ。（拔いて見ながら）よく切れさうで御座いますね。（刀で鼻をこすつて見せる）

秀吉。そのお前の稀代な面の皮でこすられちや折角たんせいして張つた銀紙が皆はげてしまふぞ。

曾呂利。はつ。（皆に刀を見せる）

（正則初め皆どつと笑ふ。三成苦笑）

秀吉。三成、だがお前の命にくらべれば安いものだな。世界にはお前より利口なものもゐるものだ。大事にしまつておけ。

三成。はつ。（平伏する）

——幕——

（二二、一二、三）

笛を吹く男

一人の男が
笛を吹く
誰も來ないが
笛を吹く
一人が來たが
笛を吹く
二人が來たが
笛を吹く
十人來たが
ふえを吹く
百人來たが
ふえを吹く
何も知らずに
ふえを吹く

野島先生の夢

（千家元麿兄に。君の詩はあまりに僕を喜ばしたから
この一篇を君に捧げさしてもらふ）

（野島先生の書齋。簡單な西洋間。先生何か書いてゐる。書き損ひ許りしてゐる。正面に入口があつて、その左手に黒板がある。右手に本棚がある。黒板には十一月二十日迄、脚本一つ、同三十日迄、小説一つ、十二月五日迄、日記十枚、同十日迄、脚本一つ。あとはお斷りとかいてある。一人の男登場）

男。先生！

先生。（筆をおき、ふりかへり）なんです。

男。一つ私の方の新年號に小説をかいて下さいませんか。

先生。駄目ですよ。あれを御覽なさい。今日はもう十五日なのに、まだ何にもかけないのですからね。やり切れませんよ。

男。そんなことをおつしやらないで、どうぞお願ひしたいのです。私の方の豫定が御座いまして、是非先生にかいて戴かないと困るのです。

先生。それは君の方もお困りかも知れませんがね、僕の方はなほ困りますよ。一たいどうもこの頃は雜誌が多すぎますね。君達の云ふことを一々聞いてゐた日にはどんな天才だつてくたばつてしまひますね。天才を殺すものは雜誌記者ですね。實は今、私はそのことで腹を立ててゐたのですよ。

男。困りましたな。どうも。私を助けると思つて是非書いて下さい。

先生。駄目ですよ。

男。なんなら二三枚のものでも結構です。

先生。それも駄目ですよ。

男。折角こゝまで來たのですから。

先生。それは君の勝手ぢやありませんか。

男。どうも困りましたな。

先生。僕の方だつて實は引受けすぎて困つてゐるのですよ。この上引受けた日には生命がありませんからね。毎月二つも三つも書かされたら、事實、作者が參つてしまひますよ。今の日本にいゝ奴の出ないのも、その罪の半分は雜誌記者の罪ですね。勿論、引受ける方もよくありませんがね。つい日本人にはなんでもいさぎよく引受けたがる傾きがあるやうですからね。引受けたあとではいつも、引受けなければよかつたと思はないことはありませんよ。このまゝぢや、お互に考へものですね。あなた達の方だつて、いゝものをかいてもらはなければ損でせう。讀者だつて一夜づくりの作ばかり讀まされちや可哀さうですよ。それから同じ人間があつちこつちに顏を出すのも面白くありませんね。一つ雜誌仲間で相談して、一人の人には一月に一つ以上たのまないことにしたらどうです。さもなければ作者を一手で買ひしめるのですな。今の作者は少し金を餘計出せば雜誌記者の云ふことはよく聞きますからね。さうしたら日本の文壇の爲にきつといゝでせう。少し位餘計出したつて雜誌の爲にも反つていゝでせう。今のやうぢや、お互に面白くありませんな。

男。御尤です。それなら今の御意見を御感想として私の雜誌に出してもよろしう御座いますか。

先生。それは困りますね。今のは雜談です。別に

に面白い考へでもありませんからね。しかし私も作家の一人として、作家の未來を尊敬するやうに注意してもらひたいものですね。何か原稿が出來た時、それをある人の手にゆだねる。その人がいろ〳〵の人の原稿を一手にあつめて、それをあなた方の集つてゐる處で朗讀する。そしてそれをその場でせり賣りする。そして手數料をその内から五分なり七分なりとる。さう云ふ商人があつたらお互に便利ですね、書く方も何も無理せずにかけますからね。そしてあなた方も自分の雜誌に丁度向くのを買ふことが出來ますからね。今のやうに出來、不出來にかゝはらず、一枚いくらときまつてゐるよりその方が正當でせう。

男。それは結構な御考へですね

先生。しかしそんな商賣人があつたら、私なんか眞先に不愉快を感じるかも知れませんがね。今のまゝでは作家が可哀さうですよ。あなた方の方ではいらなくなればすてればいゝでせうがね。

男。それではどうしてもかいて戴けないのですか。

先生。えゝ。とてもかけませんからね。折角ですが。

男。それなら失禮します。さよなら。

先生。さよなら。

（男、退場）

先生。この上かゝされてたまるものか。いくらお人よしだつて、もう何と云つて來たつて約束はしないぞ。

（青年、登場）

青年。先生。

先生。あゝ君か。どうした。

青年。先生、矢張り駄目でした。

先生。それは困つたね。斷られたのか。

青年。えゝ、何處も斷られたのです。それで實は昨日から何にも食べないのです。もう思ひ切つて國に歸らうと思つてゐるのです。

先生。かへつてそれはその方がいゝかも知れない。

青年。それで誠に申し兼ねますが、汽車賃をかして戴きたいのです。

先生。いくらいるのかね。

青年。五圓あれば歸れます。

先生。さうか。今、妻が居ないので金のあり場がわからない。まあいゝ、この本でも持つて行つて賣り給へ、五圓位にはなるだらう。實は僕も二十圓許り友達に借金してゐるのだから、餘分には上げられない。

青年。いや、結構です。それなら戴いてゆきます。

先生。あゝ持つてゆき給へ。

青年。ありがたう。さよなら。お身體お大事に。

先生。君も身體を大事にしたまへ。

（青年、退場）

先生。まあこれで一先づあいつもかたがついたか。

（青年二、登場）

青年二。先生。

先生　君か。何か用か。

青年二。一寸御願ひがあつて上つたのです。

先生。なんだ。

青年二。一寸二十圓許り貸して戴けないでせうか。

先生。困るね。

青年二。私ももう忘れたわけではないのですが。何しろ妻が病氣しましたので。

先生。それは君の困るのはよくわかるよ。しかし僕の方だつて困るのだ。先日君にかしたのも實は人にかりたので、まだ返せないのだからね。

青年二。それはわかつて居ます。しかし私も先

生にお願ひするより仕方がありませんので、さもないと宿を逐ひ出されさうなのです。それに子供も、病氣なのですが醫者に見せるわけにもゆかないのです。こんなことを先生に申し上げるのはわるいことは知つてゐますが。

先生。困つたね。しかし君の困るのも無理はないからからしよう。僕のこの本をいつもの古本屋に入れて金を借りてあげよう。今、手紙をかくから待つてゐたまへ。

青年二。どうもすみませんね。

先生。病氣なら仕方がない。僕もどん／＼原稿がかけるといゝのだが、この頃どうも思ふやうにかけないので金がうまく入らないのだ。二十圓や、三十圓の金はどうかなるが、君一人ではないのだから、僕も實は困るのだ。それならこの名刺を持つてゆき給へ。

青年二。ありがたう。

先生。さよなら。君の奥さんによろしく。大事にしたまへ。

青年二。ありがたう御座います。さよなら。

先生。さよなら。

（青年二、退場）

先生。困つたな、どうも。

（青年三、登場）

青年三。先生。

先生。君か。身體はどうだ。

青年三。どうも思はしくありません。

先生。困つたね。

青年三。それで昨日家を逐ひ出されたのです。

先生。それで昨晩はどうした。

青年三。上野の公園で野宿してしまひました。金がないのですから。それで昨日の朝から飯を食はないのです。それで先生の處へ上れる義理はないのですが、上つたのです。

先生。困つたね、それは。それなら仕方がない。其處に休んで居たまへ。今うちには誰もゐないのだ。飯をとつてくるからね。

（先生退場、まもなくおはちやお膳をもつてくる）

先生。さあたべたまへ。今茶をわかしてくるから。

青年三。すみませんね。

先生。なにいゝさ。（退場）

（まもなく郵便と茶をもつてくる）

先生。（手紙をだまつて見てゐる）君、こんなことを云つて來た奴がある。この頃、僕がお金にキタナクなつたと云ふのだ。金をほしがつていろ／＼くだらない創作をするやうになつたと云ふのだ。馬鹿な奴だ。俺は金はほしいが、金のために心にもない創作はしやしない。俺の金のほしいのは、したいことがしたいからだ。俺が乞食坊主にならない限りは金をほしがるのはあたりまへだね、君、君とふたりで乞食にでもなれば、俺は金はいらなくなるが、こゝにかうやつて住んでゐる以上は、そして妻子を持つてゐる以上は金がいる。しかしこんなハガキをよこす奴はどうせ親のすねを嚙つてゐる奴にちがひない。こんなことを云ふ位なら自分から乞食になつて、俺のやうに乞食になれと云ふがいゝのだ。しかし俺は乞食になつて早く死ぬよりは惡口云はれたつて一日でも生きてゐたい。馬鹿々々しい。

青年三。先生、私は之からどうしたらいゝでせう。

先生。困つたね。當分僕の處に居たまへと云ひたいが、僕の處には女子供がゐるからね。それなら君は何處か海岸へゆきたまへ。毎月少しの金ならどうかするよ。友達にもたのんで見よう。

青年三。本當に御氣の毒ですね。

先生。なに、大丈夫だよ。しかしさしづめ金が

いるだらうね。まあ何とかしよう。

青年三。何かかいていらつしやるのですか。

先生。いや、書き損ひ許りしてゐるよ。しかしもう締切日がせきだからね。ともかく早くかいてしまはないと氣になるよ。見たまへ、あの通り豫約があるのだからね。それでもあと五つ許りは斷つたのだよ。やり切れはしないよ。そしていゝものをかゝなければならないのだからね。

青年三。隨分大變ですね。

先生。何しろ早くかいてしまつて、自分の頭を自由にしてやりたいよ。今の作家は可哀さうだよ。

青年三。何をおかきになるのです。

先生。まだきまらないよ。さつき「今日蓮」と云ふものをかいて見たが、面白くゆかないのでやめてしまつたよ。

青年三。「今日蓮」と云ふのは珍らしいものですな。

先生。「今日蓮」が演說した所をかいたのだがね。かう云ふ風に演說するのだ。(滑稽な身振をしながら)日本の亡びるのを恐れるものは俺の云ふことを聞け、日本の未來を恐れるものは俺の云ふことを聞け、今のまゝでゆけば日本の未來は恐ろしいぞ。決して安心してはゐられないぞ。金まうけもわるくはない。しかし金のない旅人は泥棒を恐れなくつていいが、金のある旅人は泥棒を恐れなければならぬ。武器をもつた旅人は反つて泥棒に殺されることもある。富國强兵、それだけに日本の未來をたくさうと思ふものは、國を亡ぼすものだぞ。又黃色人種だと云ふ自覺をつよくしてひがみが强くなりすぎると反つて國を亡ぼすぞ。我等はむしろ人種にとつて害のない役にたつ民族であることを示さねばならない。黃色人種は決して恐るべき人種ではない。人間の生命を尊敬しない人種ぢやない。平和の民だ。そして文明の民だ。人類にとつてなくて叶はない民だ。おゝ、人類にとつて人類にとつて有益無害の國民だ。文明な國民だ。眞面目に眞劍に人類の文明の爲に働いてゐる人間だ。働かうとしてゐる人間だ。この人間の地球の一部分に存在してゐることは人類にとつてよろこびだ。同時に各國にとつてよろこびだ。このことを世界に事實によつて知らさなければ日本は亡びるぞ。平和の戰ひ、殊に精神的の戰ひにかて。世界の不和を少しも亂さない精神的の仕事でかて。黃色人種の存在が白色人種にとつても人類にとつても實に實に必要な、大切なものだと云ふことを示さねばならぬぞ。このことを眞に知つてゐるものはこの俺だけだ。俺の云ふことを聞け、俺の云ふことを聞け―「今日蓮」はこんなことを云ふのだが、誰も何もぶつけなければ、聞く奴もないのだ。だからつまり芝居にはならないのでやめてしまつたよ。しかし僕は迷信的にも日本の未來を心配するよ。今の日本はまだ人類的に必要な仕事を一つもしてゐない。そして人類の意志に戻ること許りしたがつてゐる。君はさうは思はないか。

青年三。(飯を食ふに忙しくつて碌に聞いてゐなかつたが)思ひますよ。それでその脚本はどうしたのです。

先生。やぶいて捨てたよ。

青年三。惜しいぢやありませんか。

先生。本當に惜しいと思つてくれるか。

青年三。(空々しく)惜しいと思ひます。

先生。ともかく、日本でさう云ふ仕事を自覺してしようと思つてゐるのはこの僕だけだ。

青年三。先生はそれなら今日蓮ですか。

先生。「滑稽日蓮」と云ふ所かな。あはゝゝ。僕の身體も中々大事だよ。

青年三。それでつまり私を置くわけにはゆかないと云ふのですね。

先生。まあ、正直に云へばさうだ、妻子があるからと云ふのは少し不正直かも知れないね。一體いくらあつたらくらせるかね。

青年三。十圓はどうしてもかゝります。

先生。それはさうだらう。この頃ぢや十圓ぢやむづかしいだらう。おまけに病氣ぢや。しかしさう云つてそれなら十圓以上出してくれと云はれると困るのだ。何しろ僕の周圍は僕より貧乏人が多いから困るよ。僕は之でも五十圓は親からよこすのだからな。しかし毎月その内から三十五圓位はきまつて出さなければならないのだ。其處へ又十圓出すことにするとあいつがいやな顏するからな。しかし君の生命と妻のいやな顏とは交換が出來ないから、無理に承知させるよ。一體あいつは俺を信用しないで、俺のうちにいくら金があるか、知らしてくれないのだ。どうせさうないにきまつてゐるから、聞けば反つてこつちの損になるから、さはらぬ神に祟りなしで、僕も知らん顏してゐるのだ。あいつはさうしなければ僕達がひぼしになると思つてゐるのだ。たまにはひぼしになるのも面白いと思つてゐるのだが。

青年三。先生、中々面白いものぢやありませんよ。

先生。さうだらうな。さうならあいつの慾の深くたいのは僕にとつてはわるくないのだ。

（女中、登場）

女中。唯今歸りました。

先生。さうか、御苦勞さん。

（女中、退場）

青年三。お女中さんは何か買ひものに行つたのですか。

先生。いや、宿に一寸行つたのだ。

青年三。それに御苦勞さんは少し可笑しいぢやありませんか。

先生。さう云やあ、可笑しいね。口ぐせになつてゐるのだね。

青年三。先生の處のおくらしは隨分かゝるでせう。

先生。隨分かゝるね。まあ百圓はかゝるね。あいつが中々贅澤好きだからね。しかし聞いて見ると僕の方が贅澤者らしいよ。食ひ物なんか。尤も薩摩芋でも食はしておけば別に不平も云はないのだがね。

青年三。先生は酒も煙草も上らず、電車にも滅多におのりにならないでせう。

先生。この頃はわりに乘るよ。徒歩主義をやめたよ。若い時とちがふからな。

青年三。先生はおいくつです。

先生。まだ三十三だね。しかしこの頃は皆に先生々々と云はれるので、年とつた氣になるよ。

青年三。よくそれでくらしてゆけますね。

先生。まあ、出鱈目だね。そのかはり、毎月何かかくことになるね。しかしそれでもおつかないので、よく親の處に無心にゆくね。もう本當から云へば三四百圓以上借金してゐるだらう。この頃は出かける度に豫防線をはられるよ。しかし妙なもので金に困らないと中々親のそばによりつかないね、妻もよく實家に出かけるよ。しかし金の話はよさう。氣にしだしたら切りがない。それより日本の未來のことを氣にしてゐるが氣持がいいよ。何しろうんといゝものをかくのだね。そしてうまくいつたら君にも少しは[illegible]に送れるがね。本當に醫者にも見てもらへず、薬は勿論、滋養分もたべられないのだから同情するよ。どうかしたいとは思ふけど。

（女中、登場）

女中。廢兵が來ました。何か買つてくれと云つて來ました。

先生。さうか。蟇口は。（と開けて見）矢張り三錢切り入つてゐないな。あいつはいつも財産をのこらずもつて出あるく奴だからな。と云つてもう二三圓もあぶないのだがね。お前の處に十錢ないかね。

女中。ございます。

先生。それならそれで何か買つておいてくれ。

女中。はい。（退場）

先生。うちで一番金持は女中だよ。時々借りるのだ。もう五六十圓はたまつたらう。あいつがいつも二十圓か、三十圓ためると、僕が出さしてしまふので、たまつたこともなく、ためる氣もなくなつたらしい。しかしどうにかなつてゐるのだから困つてはしないのだ。今困つてゐるのは約束の仕事が出來ないことだ。かうなつちや破れかぶれだ。しかし其處でいゝものがかけるといゝのだが、よくしたもので中々かけない。尤も暇があればあるで遊んでしまふのだから、どつちがいゝかわからないよ。（黒板の方を時々見て）しかしあれぢや困るね。もつと他をたのめばいゝと思ふのだよ。無名な人でいゝ人がありさうなものだがね。しかし雜誌記者に云はせれば無理もないのだ。賣らなければならないからね。尤も僕のを出したつて賣れるわけもないのだが。僕なんか流行らないのに流行つ兒だと思はれたのだね。まあそれで得してゐるのかも知れないから、不服も云はないが。本を出す度に損させるやうな氣がして、氣がひけるよ。しかし本屋の損は自業自得だから氣にもしないがね。その內には皆に愛想つかされて暇になるだらう。早く愛想をつかしてくれたら、大きなことをしてやるのだがね。

青年三。私の原稿を世話して戴くわけにはゆきませんかね。

先生。世話したいことは世話したいが。そんなことを云つちやわるいが、まだ僕の方がましだね。もう少しいゝものをかいてくれると世話し甲斐があるがね。

青年三。私だつて世間で歡迎してくれれば勇氣も出ます。さうすればいゝものもかけると思ひますがね。かいてゐてもどうせ發表は出來ないのだ、金にもならないのだ、藥代はおろか、燒芋も買へないのだと思ふと勇氣が出ませんね。其處を無理して勇氣を出すと、無理な勇氣が出たものになるのですから、困りますよ。

先生。まあ、氣ながにやるのだね。

青年三。しかし先生、氣ながにやりたくもどうも生命の問題ですからね。

先生。なに、君の病氣はなほらないことはないよ。

青年三。もう少し金があればなほるとも思ひますが。

先生。困つたね、どうも。ともかく困る人が多すぎる。尤も文士や畫家がものにならない間、他のことをしないでは金に困るのはあたりまへだ、しかし僕はどうも自分が不合理に金に困らないで來たのだから、あんまり偉いことは云へない。だから僕は斷りたい時も斷れないのだ。

青年三。先生。每月金を出して戴くのが、お困りなら僕だつて男です、どうにかします。まさか、野たれ死もしますまい。

先生。なに、君に每月十圓位はまだ送れるよ。君でもうおしまひだ。あとは何と言つて來ても月々きめて出すのはやめるが、君までならよろこんで出せるよ。

青年三。本當ですか

先生。本當だよ。僕は君達の役に立つのは嬉し

いのだよ。尤もあまり大勢來られちや困る。
青年三。奥さんは大丈夫ですか。
先生。あいつは珍らしく、反對しないよ、君は疲れたらう。僕も仕事しなければならないから一寸失敬するよ。
青年三。どうか。
（先生、原稿をかき出す）
青年三。先生、先生の頭ははげ出しましたね。
先生。あゝ、はげて來たよ。
青年三。僕の友達に、矢張りはげて來た人がありますがね。
先生。あゝ。
青年三。それが滑稽なのです。何んでも頭を夜通し外氣にふれさすといゝと云ふことを考へて、壁に穴をあけて其處に頭を突込んでねてゐますよ。
先生。それは本當か。
青年三。本當ですよ。こなひだ犬に小便をひつかけられたさうですよ。あはゝゝ。
先生。あはゝゝ。それは本當かい。
青年三。どうですか。それはおまけかも知れませんが。先生もなさつちやどうです。
先生。その人の實驗した樣子でやつてもいゝがね。しかしそれぢや碌にねられないだらう。しかし暫らく默つてゐてくれ給へ、今大事な處だから。
青年三。畏まりました。（何か本をさがす。原稿のかたまりを見つける。手にとつて見る）隨分原稿をよこす人がありますね。
先生。あるよ。
青年三。之ではたまりませんね。（よむ。そしてふき出す）こいつは滑稽ですね。女を見て、「喰ひたい。食ひたい。食つたらさぞ甘からう」はおどろきますね。
先生。おどろくだらう
青年三。まるで人食ひ人種の小說ですね。こんな小說を外國人が見たらおどろきますね。あはゝゝ。私の知つてゐる女に、牛肉が馬鹿に好きで、牛の歩いてゐるのを見ると食慾を起す人がありますがね。女を見て食慾をおこすのはおどろきますな。はゝゝ
先生。君は元氣だね
青年三。えゝ、久しぶりに思ふ存分食つたら元氣が出ましたよ。病氣なんかどつかに行つてしまひましたよ。何しろ腹一ぱい飯食ふなんて云ふことはこの一月まるでありませんでしたからね。
先生。そんなことはないだらう。一週間程前に君が來た時も、隨分食つたよ。
青年三。いえ、あの時も實は、奥さんが御馳走して下さつたので、もう一杯食べたいと思つた所でやめたのですよ。あはゝゝ。
先生。あはゝゝ。
青年三。それはさうとして少しはいゝのがゐますか。
先生。ゐないね。しかし可笑しなもので二三年もよこしてゐる内に、どうかするとめき／＼よくなる奴もゐるね。しかしそんなのは例外だね。僕はもうよむ氣もしないので、ぱらぱらとやつて見るだけだよ。頭は大抵よむがね。妻がほめるものだけは一寸よむことにしてゐるのだ。さもなけりや、やり切れないからね。それに妻の意見はこの頃僕の意見と殆んど同一になつたからね、信用してもいゝのだ。
青年三。さう云へばこなひだ或人にあつたら、先生夫婦の話が出て、あんな仲のいゝ夫婦はないさうだね、本當かいと云ひましたから、本當とも、本當ともと大いに力を入れて贊成しておきました。
先生。それはどうも御苦勞さんだつたね。
青年三。まあ、さう云つたつて譃ぢやありませ

んからね。先生夫婦はそりがあつてゐますからね。足りない所をおぎなひあつてゐますからね。二人で一人前ですからね。

先生。失禮なことを云ふな。

青年三。どうです。かけましたか。

先生。かけるものかね。さうしやべられちや。

青年三。どうです。思ひ切つちや。私も之から海岸にゆくとなると暫らくお目にかゝれませんからね。先生、近頃浮氣はなさいませんか。

先生。失禮なことを云ふな。かう忙しくつては、女一人を持てあますね。

青年三。あはゝゝゝ。あてになりませんな。

先生。君はどうだ。まだあの女の名前は見つけないか。

青年三。まだ發見しません。しかしあの女は天女ですな。あんな女がゐる世界から死んでゆかなければならないのは考へものです。實は田舍にゆきたくてもそれでゆけないのです。

先生。困つた奴だね。矢張り食ひたい方かね。食つたらさぞ甘からうかね。

青年三。どうして先生、そんなものぢやありません。あの女が女優になればたいしたものですね。さう云へばこなひだ電車で先生のものをよんでゐましたぜ。

先生。譃だらう。

青年三。いや、本當です。餘程、先生のものをお好きなのですか聞かうかと思ひましたが、大勢人がゐるので聞けませんでしたよ。しかし熱心によんでゐたことはたしかです。先生にお祝ひしようと思つて今迄忘れてゐました。どうです、あんまりいやな氣はなさらないでせう。

先生。しかしどうも君の話はあてにならないからね。

青年三。いや、之は本當です。神にかけて本當です。尤も僕は無神論者ですが。

先生。君は無神論者かい。

青年三。まあ無神論者です。死ぬともうその人間はおしまひだと云ふのが僕の説ですからね。こなひだなんか餘程自殺してやらうと思ひましたよ。あんまり淋しくつて。一人でゐると隨分淋しい時がありますからね。そしてどうせ自殺するならあの女に一つ聲でもかけて一言饒舌つてあの女の聲を聞いてから死なうと思ひましたがね。實はまだその女の聲を聞いたことがないのですからね。しかしその勇氣はどうしても出ませんでした。どうもあの女に話しかけるよりは死ぬ方が樂です。人間と云ふものは意氣地のないものだとつくづく思ひましたね。しかし死ぬまでには一遍話して見せます。

先生。困つた奴だね。

青年三。先生だつてあまり困らない方ぢやないでせう。五六年前でせう、私も上野のある處をあるいてゐたら男と女が飛び出して來ましたよ。けしからん奴もあるものだと思つて月の光りですかして見ましたら、それはどうも先生と奥さんに似てゐましたよ。

先生。馬鹿云ふな。

青年三。どうです。さうでせう。

先生。馬鹿云ふな。僕のかいたあれは嘘だよ。本當は上野ぢやなかつたのだよ。

青年三。どうですかね。しかしともかくもあの女は女優になつたら大したものですね。先生が勸めたらきつとなりますよ。なつたら日本中大さわぎですね。御輿に入れて日本中かつぎたいものですね。さうすれば死んでもかまひませんがね。人間と云ふものはどうせ簡單なものですからね。こなひだジャン・ダークの活動寫眞の廣告を見て思ひましたね、日本にも外國人がせめこんで、あの女が大將

になつて出かければ、私も生命をなげすてててお伴するがなあと思ひましたよ。

先生。どうも困つた奴だね。君は。

青年三。しかし先生、ある日本の小說家が自分のことを正直にかいた作に、自分の戀人が人妻になつてから訪れて來たので夢中になつて、別れる時、夢中でその女の手を握つて、つまり握手したのですね、そしてその時鐵砲でうたれて死んだら、どんなによかつたら、極樂往生疑ひなしだと云ふ意味のことがかいてあつたのがありますね。

先生。あるね。

青年三。あれは先生のお作ぢやないのですか。

先生。あゝ、俺の作だよ。

青年三。(笑ひながら)それなら五十步百步ぢやありませんか。さう云ふ氣持のわからない人間は憐れむべき人間ですね。

先生。うん、憐れむべき人間だ。

青年三。ともかく先生は女優のいゝのが出るといゝとおつしやつたでせう。あの女はきつとすゝめたらなりますよ。さう云ふことに趣味がありさうですからね。それに先生が。

先生。しかし君は聲をきいたことはないのだらう。

青年三。聲がわるいわけはありませんよ。

先生。どうして。

青年三。あの顏で聲のわるいわけはありません。

先生。聲のわるくない顏つて見たことはないな。

青年三。先生、僕は本氣なのですよ。生きてゐる內に一度あの女の舞臺が見たいものですね。萬々が一、聲がわるかつたら活動寫眞の役者にするのですな。あゝ云ふ女を活動寫眞にすると日本國の名譽になりますからね。是非一つ先生にお骨折りを願ひたいものですね。先生だつていゝ女優が出て、先生の云ふこと許り聞く女優がゐたらいゝでせう。與さんの方は僕が引受けて、やきもちをお燒きにならないやうに骨折りますよ。あゝ云ふ女優が出ると、若い男は皆脚本をかきたがりますね。僕も死んでも一つあの女にやつてもらへるやうな脚本をかきますよ。日本の文藝の爲に大きな仕事が出來ますよ。

先生。それはいゝ女優が出ることは僕ものぞむがね。

青年三。先生もさう云ふ空想を描くことがおありになるでせう。

先生。ないことはない。しかしそれより大事なことはいゝ仕事をすることだよ。僕は日本の未來の爲にこの二三年の內には、大きな仕事をしないわけにはゆかないのだ。さう云ふ仕事をすることを賴まれてゐるのだ。

青年三。先生、誰にたのまれてゐるのです。

先生。先づ人類にたのまれてゐる。

青年三。大きく出ますね。

先生。それから黃色人種にたのまれてゐる。それから。

青年三。日本にたのまれてゐるでせう。

先生。まあさうだ。それから俺にたのまれてゐる。それから世界の青年にたのまれてゐる。

青年三。それから全世界の美人にたのまれてゐるのでせう。

先生。それから妻子にもたのまれてゐる。それから僕の氣持になることをのぞんでゐる人からたのまれてゐる。日本に劇場や美術館や病院をほしがつてゐるものにたのまれてゐる。それから今後生れる人に、それから世界をひつくり返したい人に。

青年三。それで出來さうですかね。

先生。處が中々出來ないので困つてゐるよ。出來ないと云ふのは腹が立つ。二三年で出來な

ければ一生でやつて見せる。だが中々大變だよ。呪ふべきはこの天才につまらぬ仕事をたのむ雜誌記者ぢや。俺は片ぱしから斷つてやるぞ。

青年三。それは誰の聲色です。ともかく大變ですな。

先生。大變だよ。かうしちやゐられない。しかし僕は一方至つて呑氣ものだから、まだ神經衰弱になつたことも、不眠性になつたこともない。眠り藥にはお目にかゝつたことがない。いつでも餘裕しやくしやくだ。力を出し切つたことはないな。

青年三。偉いですな。

先生。偉いだらう。だから僕は僕を讚美するのに慣れてゐる。同等あつかひされるのは僕にとつては至極迷惑だ。しかしそれなら大きい仕事をやればいゝのだが、それが中々出來ないのだから公然と威張るわけにもゆかない。今に見ろ、今に見ろと云ふのだ。(何か思ひだし) こなひだ、骸骨がペンを持つて机に向ひながら今に見ろと云つてゐる、まづい畫をよこした奴があるがね。當らずと雖も遠からずだな。僕は死ぬ迄には日本人は馬鹿に出來ない人間だと云ふことは示してやるよ。

青年三。先生は相變らず、自分のこと許り考へて居ますね。然しあの女のことを考へて下さい。日本の未來を一人で背負ふのは無理ですよ。一つ日本の女の爲に氣焰をはかうぢやありませんか。

先生。どうも女を知らない一人者にあつちや叶はない。なんでも彼女、彼女、彼女だからな。

青年三。先生を彼女イズムに於ける先覺者として私達は尊敬してゐるのですから、是非一つ肩をぬいで下さい。(間) さうそ、それから又一つお願ひがあるのですがね。是非きいて戴きたいので。

先生。なんだ。

青年三。是非きくとおつしやつて下さらないと僕の信用にかゝはりますからね。

先生。聽けたら聽くよ。

青年三。聽けなかつたら聽けないよですか。それは困りましたね。

先生。僕はたのまれることは一體嫌ひなのだ。たのまれることに碌なことはないから。

青年三。しかし満更、おいやなことでもないのですよ。實は僕の友達が今度芝居をやることになつて、その旗あげに先生のものをやりたい、それについては皆で先生に一度お目にかかりたいと云ふのです。あつてやつて戴けませんか。

先生。そんなことか。そんなことならよろこんできくよ。しかし旗あげに僕のものをやるのは利口ぢやないね。

青年三。しかし是非、先生のものがやりたいと云ふのです。

先生。それは感心な心がけだ。

青年三。それなら之からよんで來てもよろしいか。皆この近くに集つて稽古してゐるのです。

先生。いゝとも。君の云つてゐるあの女もその仲間に入れたらどうだ。

青年三。駄目ですよ。その仲間は下手なのですから。どうかそれならつれて來ますから。あの話は決してして下さつては困ります。

先生。云はない。皆下手なのか。

青年三。しかし熱心は熱心なのです。それでは一寸よんで來ます。皆さぞよろこぶでせう。

(退場)

先生。よく饒舌る奴だな。何處まで本當で、何處から謔なのかまるでわかりはしない。しかし勝手にしろ。俺は俺の仕事さへしてゆけばいゝのだ。(テーブルに向ふ)

（小僧、そつと登場、黒板の字を消し、片手に持つてゐる紙きれと見くらべ、時々うしろを見ながらかく。「野島先生の頭ははげる、同時にひからびる。この頃のかくものの力のなきことよ。憐れむべし憐れむべし。今にバケの皮がはげて皆に愛想をつかされる。その末路や憐れむべし」かいてからカリカチュアを矢張り紙を見ながらかき、舌を出してそつと逃げる。野島先生は氣がつかない。やゝたつて女中登場）

女中。おハガキが參りました。

先生。さうか。（受けとる）

（女中、退場）

先生。「私はお前が好きだつたが、この頃嫌ひになつた。世間にもて出したら堕落した。この頃お前のかくものはなんだ。もうお前にはだまされない。恥ぢ知らず。くたばりやがれ。はげの、出來損ひの、くたばり損ひの、へぼ文士の、おたんちんばろおおがす。御作なんかやめて、死んぢまへ」

（先生、苦く笑ふ。その時、黒板に氣がつく）

先生。（立ち上り見にゆく）なんだ。「野島先生の頭ははげる同時にひからびる。この頃かくものの力のなきことよ。憐れむべし憐れむべし。今に化の皮がはげて皆に愛想をつかされる。その末路や憐れむべし」いやな奴だな。（ぼんやり立つて見てゐる）誰が書いたのかな。まさかあいつではあるまい。おーい。

女中。はい。

先生。誰かこの室に入つたものはないか。

女中。（一寸顏を出す）存じません。

先生。それならいゝ。

（女中、退場）

先生。そんなに頭がはげて來たかな。（鏡に顏をうつして見るが、中々見えない）

（十四五歳の少女、登場）

少女。叔父さん。

先生。おゝ芳子か。

少女。なにしていらつしやるの。

先生。俺の頭は隨分はげてるかね。

少女。えゝ、隨分うすくなりましたよ。それがどうしたの。

先生。こんなハガキをよこした奴があるのだ。

少女。どれ。（讀み）隨分いやなことを云つてくるのね。おたんちんばろおおがすてなに

先生。何かね。しかしどうせほめた言葉ぢやないだらう。

少女。破いてよ。

先生。あゝ破いてもいゝよ。

少女。こんなこと何でもないわ。叔母さんは、御不在？

先生。もうぢき歸つてくるだらう。そのハガキを書いた奴は大概わかつてゐるから、何んでもないがね、あの黒板が氣味がわるいのだ。誰か呪つてゐるやうな氣がするのだ。

少女。どれ。（讀出して見て、笑ひ）こんなものなんでもないわ。ですがこの畫は叔父さんにそつくりよ。さうだ、黒板にもこれと同じ畫がかいてあつてよ。

先生。黒板にもかいてあるかい。

少女。えゝ。ですが消して來ましたわ。之も消していゝでせう。（消す）妾が呪ひなにたいするおまじなひをかいて上げませうね。（黒板にかきながら）妾の信ずる大臣よ、妾は跪く。大臣よ、あなたの未來は祝されてあります。大臣よ、あなたの身體は呪ひの矢には不じ身です。大臣よ、王樣、萬歳、萬歳、萬歳。

先生。芳子、お前は可愛い子だ。お前は大層綺麗になつたな。あゝお前だね。

少女。何が。

先生。お前はこなひだ電車で叔父さんのものをよんでゐたらう。
少女。えゝ、よんで居ましたよ。
先生。(寫眞を見せ)その時、お前のわきにこんな人が居やしなかつたかい。
少女。ゐましたわ。妾の顔をしみ〴〵見てゐましたわ。
先生。お前が女優になるといゝと云つてゐたよ。
少女 いやな方ね。妾、大嫌ひよ、あの人
先生。なぜ?
少女。だつて、妾のあとをつけたり、妾をへんな顔をして見たりするのですもの。なんだか顔に墨でもくつついてるのかと思ひましたわ。妾の顔を見て今にも話しかけさうにしたり笑ひたさうな顔するのよ。
先生。同情しておやり。病身なのだからね。それに食ふにも困つてゐるのだから。
少女。だけど氣味のわるい人よ。
先生。お前のことを世界中で一番美しい女だと云つてゐたよ。
少女。いやなお世辭云ふ人ね。妾、さう云ふ人大きらひ。
先生。あんまり嫌つてやるのは可哀さうだよ。
少女。だつて嫌ひなものは仕方がないわ。
先生。お前を御輿に入れてかついだら、死んでもいゝと云つてゐたよ。お前が大將になつたら、お伴してよろこんで死ぬと云つてゐたよ。お前と話が出來たら死んでもいゝと云つてゐたよ。
少女。もうよして頂戴。そんな話。それより妾、芝居を見たいと思つてゐるのですよ。叔母さんにつれてつて頂かうと思つて來たのよ。
先生。よろしい、ではよくだらう。
少女。叔父さん、妾に一つ芝居をかいて頂戴な。
先生。どうするのだ。
少女。學校でやるの。妾、かう云ふことがしたいのですよ。
先生。どう云ふことが?
少女。妾、戰爭大嫌ひと云ひたいのですよ。
先生。そんなことわけないぢやないか。いきなり、妾、戰爭大嫌ひと云つて引こめばいゝぢやないか。
少女。妾のお父さまは戰爭で死にましたのです。から、妾は戰爭が嫌ひですと云つて泣きたいのよ。皆よつて戰の話をして面白がつてゐるのを妾が辛抱して聞いてゐますのよ。一人でだまつて。その内にとう〳〵たまらなくなつて妾、泣き聲出して立ち上つて怒鳴つてやるの。妾戰爭、大嫌ひ。戰爭で父がなくなりました。
(芳子、泣眞似してゐる内に、本當に泣いてしまふ)
先生。まあ、泣くのはおよし。芳子。(自分も泣き出す)
少女。妾、もう泣きませんわ。妾は戰爭の好きな人の處には死んでもお嫁にゆかないのよ、お母さんもそれは御承知なの。
(ドン〳〵と大聲出しながら青年三を先登に女二人男二人入つてくる。青年三、何か云はうと思つて、少女を見、電氣にうたれたやうにたちどまる)
少女。どうぞお入り下さい。(丁寧にお辭儀する)
先生。どうか、入つてくれ給へ。遠慮なく。芳子、椅子が足りないから椅子を持つて來てくれ。
少女。はい。
青年三。ほ、ぼ、僕が持つて來ます。
先生。それなら二人で一つづつとつて來たらい

いだらう。
少女。それなら御一緒にとりに行きませう。
青年三。あ、あ、ありがたう。
（皆、笑ひたさうな顔をする。二人退場。
まもなく椅子を一つづつ持つてくる）
先生。どうか腰かけてくれたまへ。
青年四。ありがたう。
（皆、腰かける、沈默）
先生。（青年三に）君はいやに默つちやつたね。
芳子、お茶をもつて來ないか。そして水菓子
をとりにやつてくれ。
少女。はい。（退場）
先生。あいつは僕の姉の子です。父は戰爭でな
くなつたのです。今度芝居をやるといふので
何かかいてくれと云ひに來たのです。
青年三。先生、そ、そ、それは本當ですか。
先生。君はいやにどもるね。喉でもどうかした
のぢやないか。
（皆、笑ふ）
先生。なあに芝居すると云つたつて學校でや
るだけなのだよ。どうせ碌なことは出來ない
よ。
青年三。そ、そ、そんなことはありません。
先生。いや、そ、そ、そんなことはあるのだよ。

（皆、笑ふ）
青年三。先生、どうか質のわるいことはなさら
ないで下さい。
先生。ともかくその芝居の註文が面白いのだ。
皆が戰爭の讚美をしてゐると、あいつがそれ
を默つて聞いてゐる。とうとうたまらなくた
つて妾は戰爭が大嫌ひ、妾の父は戰爭でなく
なりましたと云つて泣きたいのださうだよ。
そして今、泣眞似してゐるうちに本當に泣い
てしまつたので、よわつてしまつたよ。
青年三。おも、おも、おもしろい話ですね。
先生。（わざと）そ、そ、さうだね。
（皆、笑ふ）
青年三。先生はどうも質がわるい。（話をかへ）
皆、是非先生にお目にかかつていろいろ御
話がうけたまはりたいのださうです。皆もい
やに固くなつたね。之が田原君で、之が川中
君で、この方が妙子さんで、この人がすみ子
さんです。
青年四。どうぞよろしく願ひます。
先生。僕の方こそ。
青年三。是非先生のものがやりたいと云ふので
す。僕はよした方がいゝだらうと云つたので
すがね。どうも先生のものは舞臺上の約束に

かなつてゐないし、出たらめだし、人氣もない
し、面白がる人もあるまいと云ふのですが、
皆、それでも先生のものをやりたいと云ふの
ですよ、皆偏人で出來ないことがやつて見たい
のださうですよ。どうせ皆に出來ることをやれ
ば皆に叶はないにきまつてゐるのですから、
皆に出來ないことをやつて見ようと云ふので
す。まあ先生のものをやるのには丁度。
（少女、登場。皆にお茶をつぐ）
青年三。ちよ、ちよ、丁度いゝのですね。
先生。なにがいゝのだ。
青年三。いや、な、な、なんでもありません。
（少女にお茶を出されて丁寧に御辭儀す
る。先生馬鹿笑ひをする）
先生。あはゝゝ。話のつゞきを是非聞きたい
ね。芳子、今面白い話があつたのだ。
青年三。う、う、嘘ですよ、先生。（茶をこぼす）
先生。あはゝゝゝ。君は餘程どうかしてゐる
ね。
（青年びつくりしてとび上り、はんけち
を搜すがない。自分の着物でふかうとす
る）
少女。よろしいのよ。（手巾を出してふく）
青年三。お、お、恐れ入ります。

少女。面白いお話でなんですの。是非お伺ひしたいものですね。

青年三。な、な、なんでもないのですよ。(セキをする)先生、もう、もう許して下さい。

先生。はゝゝ。それで君達は本氣に僕の脚本がやつて見たいのですか。

青年四。およろしかつたらどうぞ。

先生。それは勿論よろしいが、やつたあとで後悔しても、それは君達の責任ですよ。

青年四。勿論、それは私達が責任をもちます。そんなことはあるわけはありませんが。

(青年三、時々汗を着物でふく、少女退場)

先生。僕は自分のものに自信はもつてゐます。しかし世間的にはまだまるで自信はありません。又實際云ふと、自分ではある自信がありますが、それが他人によつて演じられる時に、何處まで生かしてもらへるかは知らないのです。それは君達によつて知らしてもらふより仕方がないのです。僕は自然に、そして反つて無器用にやつてもらひたいのですよ。

(少女、登場)

青年四。え、出來るだけ先生の御註文通りにいたします。

先生。處がそれは困るのだ。僕は君達の勝手にやつてもらひたいのだ。君達の自由にやつてもらひたいのだ。君達自身が面白がつてやつてもらひたいのだ。初めは、無理かも知れないけど、見物なんか忘れてやつてもらひたい。見物は石ころか、でくの坊位に思つてもらひたいのだ。そして夢中でやつてもらひたい。勝手にやつてもらひたい。見えなんかかまはずに、出來るだけ勝手に、しかし表現と云ふことは忘れてほしくはない。そして調子は少し誇張していゝ、しかしそれも自然でなければいけない。俗にやられるのは閉口だけれど、君達のもつて生れたやうにやつてもらひたいのです。

(青年三、又汗をふかうとする)

少女。之でおふきなさい。之は綺麗なのですから。

青年三。ど、ど、どうもありがたう。い、い、いりません。よ、よ、よろしい。

少女。どうか御遠慮なく、本當にキタなくはないのですよ。

青年三。お、お、おそれ入ります。

先生。つまりあれです。あの手巾を受けとる所の表現、あゝいけば傑作です。

少女。そんなにお笑ひになるものぢやないわ。

(皆、笑ふ)

叔父さんは本當にいやな方ね。

先生。おこるなよ。僕は惡氣で云つたのぢやない。なんでも自己流にやつてほしいのですよ。かたくならないやうに。しかしそれは反つて樂なことではないでせう。しかしさうして出來上つたら大したものです。僕のものなんか、中でも自己流にやつてほしく思ひますよ。見物が一人のこらず居なくなつても、平氣でしまひまでやる位な勢ひでやつてほしいのですよ。一つ出來るだけ我儘をやつて、笑はれて見るのですね。そしてトガキにどんなことがかいてあつたつてかまひませんから、君達のやりいゝやうに。一番あたりまへにやつて下さい。

青年四。しかしそれが一番むづかしいのです。

先生。君達は日本の新しい芝居の元祖にならなければならないのだから、その位のむづかしさには勝つ氣がなければ駄目ですよ。ね君、さうだらう。

青年三。え、え、さうで。

先生。日本人は窮屈で、臆病で、お弟子根性がつよくつていけない。自分で自分を支配する

のはいゝけど、他人の云ふことを聞くのもいいが、それでその人がもつて生れた大事なものを失つては駄目ですからね。僕は日本の芝居には殊に亂暴者がほしいのですよ。型なんか、やぶつてやぶつてやぶりぬくのですね。

青年四。えゝ、出來るだけは笑はれてもかまひませんからやります。

先生。さうさ、笑はれなければ駄目だ。

青年三。せ、先生、そ、そんなことをおつしやるのは、火に油をかける様なものです。皆、こんなに神妙にしてゐますがね。そ、其は先生の前ですからですね。

若き女一。まるであなたが女王の前にいらつしやる時のやうなものですわね。

青年三。先生。このを、を、女なんかに逢つちや敵ひませんよ。(皆、笑ふ)

若き女一。しかしそれは先生の悪感化かも知れませんね。罪は矢張り先生にあるのかも知れませんね。(皆、笑ふ)

青年四。そんなら遠慮ぬきにして對話でもやつて見て戴かうか。あまり御邪魔してもわるいから。

青年三。そ、そ、それはいけない。

若き女一。あなたはさつき是非々々やつてくれとおつしやつたぢやありま……

青年三。あなたは僕の心を知つてゐるくせにそれは殘酷です。僕は先生お一人だと思つたのです。

先生。是非やつて見せて下さい。

青年三。先生は實際たちがわるい。

青年四。それならやりませう。

青年三。それはいけない。それはいけない。斷じていけない。お願ひだからいけない。そしたら僕はこゝにゐない。

少女。是非それは拜見したいわ。

青年四。どうだね、君。

青年三。それならやり給へ。僕も男だ。死を恐れない男だ。やつてくれ給へ。是非やつてくれ給へ。僕は成佛する。

先生。あまり程度のひどいものなら僕はやることを禁ずる。

青年四。(笑ひながら)なあに、至つて無難なものです。

先生。それなら一つやつてもらふかね。しかしこゝはせまいでせう。

若き女一。こゝで結構なのです。しかし妾が女王さまになつてよろしいのですか。

青年三。なつて下さい。辛抱します。

青年四。僕、君になつていゝのかね。

青年三。僕は本當に怒るよ。

青年四。わるかつたよ、許してくれ給へ。それなら始めますから悪い所があつたらさう云つて下さい。正直に云ふと作も役者も同[illegible]になつてゐないのですから

(少し空地をつくる。先生の妻、登場。皆に挨拶しながら)

妻。唯今。皆さん、よくいらつしやいました。

先生。丁度いゝ所に歸つて來た。之から對話がある所だ。山田君のかいた。

妻。あなたがかいたの。

青年三。えゝ、さうです。

妻。まあ、おえらいのね。

青年三。なに、くだらないのですよ。

妻。男子さん、よくいらつしやいましたね。

少女。叔母さま、暫らく。こなひだから來たい、來たいと思つてゐたのですよ。

先生。今度、是非お前に芝居につれてつてくれと云ふのだ。

妻。是非一緒にゆきませうね。

少女。叔父さんのお芝居はいつあるの。

青年三。ま、まだ、き、きまつてゐません。

妻。あなた、どうかなさつたの。顔が眞赤よ。

（先生、笑ふ）

青年三。どうもないのです。

妻。お身體どうです。

青年三。相變らずです。

妻。それはいけませんね。（夫に）あなたの芝居をやるのですつて。

先生。あゝ、この方達がやりたいと云ふのだ。

妻。さうお。

青年四。そんなら始めます。

先生。えゝ、どうぞ。

青年四。私は病人なのです。そしてこゝに煎餅蒲團にくるまつて寢てゐるのです。素人の下宿の三疊敷の室で。（寢る）あゝ苦しい、あゝ苦しい。水がのみたい。水がのみたい。どなたか水を下さいな。水を。皆不在なのか知らん。あゝ苦しい。水、水、水を下さい。喉がひきつる樣です。（起き上らうとしてたふれる）あゝ自分はこの儘にくたばるのか。水ものめずに。助けて下さい、助けて下さい。

若き女二。（障子を一寸あける眞似して）なん神樣、助けて下さい、ですの。うるさい。

青年四。どうか水をくださ い。水を。

若き女二。もう默つてゐて下さい。店のさはりになりますからね。

青年四。水を下さい。水を下さい。お願ひですから。

若き女二。だまつていらつしやい、默つてゐないと追ひ出しますよ。金をはらはないで、人をなんだと思つてゐるのです。私はあなたの下女ぢやありませんよ。水なんかあげられませんよ。（障子を力を入れてしめる眞似する）

青年四。あゝ、僕は、僕は呪はれてゐる。水ものめずに死ぬのだ。死んでも誰も泣いてはくれない。うるさがられる許りだ。よし、僕はもう追ひ出されてもいゝ、こんな家にはゐてやらない。今度娘が來たら、こいつをぶつけてやる。あゝ僕はもう生きてゐるのも、死ぬのもいやだ。來やがつたな。又あの娘か。來たらぶつけてやるぞ。

（若き女一、障子をあける眞似をする。青年四、缺けたコップをふり上げながら、若き女一と顏をあはせる。びつくりして手をおろす）

若き女一。御病氣はいかゞです。叔父が伺つて來いと申しました。

青年四。あ、あ、ありがたう御座います、た、た、大變よろしいと、先生にどうか申し上げて下さい。

青年三。き、き、君、せ、せ、先生なんて僕はかきはしなかつたぢやないか。

若き女二。いゝえ。ちやんとかいてありますよ。

青年三。なぜあなたはかいてないと云つてはくれないのです。侮辱だ、侮辱だ。先生、怒らないで下さい。どうか怒らないで下さい。

先生。ちつとも怒つてやしないよ。芳子だつて怒つてはしないよ。

妻。あゝ、あれが芳子さんなの。

青年三。譃です、譃です、奧さん、譃です。

先生。さあやりたまへ。つゞきを。

若き女一。何かわたしに出來ることがあつたらしてこいと叔父が申しました。

（青年三、顏を手でおほひ、下を向く）

青年四。來ていたゞいたゞけでどんなに嬉しいでせう。ありがたく思つてゐます。

若き女一。もう水がありませんのね、水を持つて來ませうか。

青年四。いゝえ、よろしい、恐れ入ります。

若き女一。水ぐらゐ持つてくるのは何でもありませんわ。持つて來て上げませう。

（コップを持つて去る）

青年三。もうよしてくれ、お願ひだ。よしてくれ。

妻。一たいどうしたの。

芳子。やつて頂戴、しまひまでやつて頂戴。

青年四。女王さま、女王さま。死んでもよろしい。死んでもよろしい。

妻。大へんなのね。

（若き女一、水を持つてくる）

若き女一。こゝにおきますよ。

青年四。あ、あ、ありがたう。

若き女一。それでは又上ります。

青年四。あ、ありがたう。どうぞよろしく。

若き女一。さよなら。

青年四。さよなら。又來ていたゞけますか。

若き女一。その内、いつか上ります。（去る）

青年四。（水を少しのむ）神樣、神樣、私は生れたことを感謝します。（間）あゝ今のは夢か。

青年五。（障子をあけて入つてくる）どうだい、身體は。

青年四。相變らずだよ。

青年五。だつて君は嬉しさうな顏してゐるよ。

青年四。あゝ、今、實にいゝ夢を見たのだ。

青年五。どんな夢だ。

青年四。女王さまが、御自分でこゝにいらつした夢さ。そして御自分で水さへくんで持つて來て下さつたのさ。僕はもうありがたくつて、ありがたくつて涙が出た。

少女。もうよして頂戴。もうよして頂戴。妾はだまされませんわ。あなた達は皆ぐるになつて妾を馬鹿にしていらつしやるのです。

青年三。そんな、そんなことはありません。ぼ、ぼ、僕はお孃樣がこゝにいらつしやるとは思はなかつたのです。許して下さい。許して下さい。ぼ、僕がわるかつたのです。先生、許して下さい。許して下さい。僕は、もうながい生きはしません。許して下さい。許して下さい。すみません。すみません。僕は一生のお願ひを先生にだけお知らせしたいと思つたのです。せ、せ、先生お一人だけに。そして一生に一度でよろしいから心からの喜びと感謝を味つて死にたいと思つたのです。一人で寢てゐるとあまり淋しいので、望んではならないことを望んだのです。許して下さい。許して下さい。

少女。望んではならないこととは思ひませんわ。ですが、こんな芝居してまで。

青年三。ゆ、許して下さい。許して下さい。

先生。許しておあげ。そして一度だけ病氣見舞にゆくことを承知しておあげ。

少女。お叔母さまは一緒に來て下さいますか。

妻。えゝ、一緒にゆきませう。

少女。それなら、一度か、二度あがります。

青年三。それは本當ですか、本當ですか。先生、ぼ、僕は死んでもよろしい、死んでもよろしい。（跪いて泣き出す）

青年三の友達皆。萬歳、萬歳。女王萬歳。

（芳子、妻によりそふ。女中、水菓子を持つて來、入口に立ち止る）

（一七、一一、七—一〇）

俺達は杉の林

俺達は杉の林
協力はするが
獨立する、
俺達は人間
協力はするが
獨立する。

神と男と女

（樂園のやうな處、鳥なき、種々の花咲き亂れてゐる。一人の男草の上にねてゐる）

男。鳥も獸も皆仲間がゐて樂しさうに話してゐる。それなのに俺だけ一人だ。俺には誰も話相手がない。美しいものを見つけても、共によろこんでくれるものはない。甘い果物を見つけても共に食つてよろこぶものはない。この園はのこらず俺のものだと神樣は云つた。そして神樣は私にいろ〳〵のものを見せて自慢する。こんなにいろ〳〵な美しい花をつくることが出來るのは俺が偉いからだらうと云ふ。こんなに可愛い小鳥や、美しい鳥を見せては、どうだ、この美しいこと、この可愛いこと、見てゐると我を忘れるだらう、どうだ、この獸は、この果物はと云つて自慢して見せてくれるが、私はなんだか淋しい。私はいろいろのものに名をつけることを神樣は許してくれたが、名前は考へたつて話す相手がなければ仕方がない。私は木や果物に一寸名をつけて見たり、動物に名前をつけて、撫でたり、さすつたりした所が、相手にはまるで私の心はわからない。話しかけたつて返事もしてくれない。だが仕方がない。無理にも元氣をつけて昨日考へたをどりでもをどつて見よう。（立ち上りをどる）

林檎や梨の木
葡萄や、蜜柑
私はリスだよ、
お前が好きだ

私は兎で
はねるのが好きだ
私はお猿で
木登り大好き、

獅子が吠えれば
私も吠える
馬が走れば私も走る。
駝鳥がをどれば私もをどる。

さあ、今に神樣がやつてくる。そして私に何かほしいものはないかと云ふだらう。今日こそ私は私と話が出來るもの、私と喜びを分つものがほしいと云つてやらう。いつも來ると、自分のつくつたものを自慢して、私がそれで滿足しなければならないやうにきめてかかられる。私は人がいゝし、神樣におこられては困るから、滿足してゐる顏してゐたが、今日こそ思ひ切つて云つて見よう。（をどるやうに）私は仲間がほしい。私の言葉がわかるものがほしい。私の心がわかるものがほしい。私が愛すると愛してくれるものがほしい。私が抱けば、私を抱いてくれるものがほしい。私が夢中になれば、一緒に夢中になつてくれるものがほしい。（休む）あゝ喉がかわいた。水を一杯のんでやらう。（小川に口つけてのむ）うまい〳〵。

（神登場）

神。相變らず元氣だな。どうだ、水はうまいだらう。この水と云ふ奴を考へ出すには俺も隨分骨折つた。太陽と星をのぞいては、空氣と土と水が俺の三大傑作だ。中々俺も考へたも

のだ。この水と云ふものを考へ出したので、こんなにいろ〳〵のものが育つことが出來たのだからな。どうだ、鳥も、獸も、木だつて草だつて水をのむ時のよろこびと云ふものは大したものだ。我ながら水を考へ出した時は、さすがに俺は神だけのことがあると思つた。第一この清さだけでも大したものだ。又それが千變萬化するのだから面白い。俺も一つ水をのんでやらう。（のむ）さうだ、この味がないやうな所に無限の味を出す所が中々むづかしかつた。さうだ、之をのむと俺さへ氣がせいせいする。又之で身體をあらふ時の氣持のよさは特別だらう。どうだ、之以上のものがつくり出されると思ふかね。

男。いゝえ、思ひません。

神。さうだ、之以上のものがつくれると思ふものがあつたらそれは神の心を知らない、馬鹿ものだ。そんな馬鹿者には、木の葉一つだつてつくることは出來まい。又つくれないのでいゝのだ。そんな奴が水をつくつたら、水はあつちこつちにへばりつくあくどいものきり出來ないだらう。さうすればお前なんか生きてはゐられまい。こんな立派な國は生れるわけにはゆかなかつたらう。

男。神樣。

神。なんだ。

男。お願ひが一つあるのです。

神。お前はそれなら、こんなにいろ〳〵のものを貰つてまだ滿足が出來ないのか。何が不服なのだ。

男。何もかも結構なのです。ですが、私は淋しいのです。

神。淋しい？ こんなに鳥や獸や、美しい花が咲いてゐて、それでまだ淋しいのか。

男。私は話相手がほしいのです。

神。お前の話相手には俺がゐる。

男。それはさうですが、あなたは私にくらべては偉すぎます。私は人間であなたは神樣です。私は私と同等なもので、私が可愛がることが出來るものがほしいのです。

神。それには犬や、羊や、兎が與へてあるはずだ。

男。彼等には私の言葉がわかりません、私の心がわかりません。一緒にあなたのおつくりになつたものを讃美することが出來ません。美しい花を見出してよろこんで彼等に見せたつて彼等はよろこんでくれません。

神。さうか。お前も矢張り相手がほしくなつたのだな。俺だけでは滿足が出來ず、俺を讃美する歌や、をどりだけでは滿足が出來なくなつたのだな。

男。さう云ふわけではないのです。

神。だが實際はさうなのだらう。よろしい。俺はお前に相手をつくつてやらう。だがお前は俺よりもそのものを愛したら、罰を受けなければならない。その時はお前は俺の云ふことがわからなくなるだらう。

男。それは御安心です。どんなものが出來ましても私はあなたを忘れるやうなことはありません。あなたの御心に背くやうなことはありません。ます〳〵あなたに感謝するばかりです。

神。俺がつくつてやらうと思ふものは、お前が何ものにかへても愛しないではゐられないものだ。お前は俺にさう云ふものが出來ないと思つてゐるだらう。處が俺は、俺をさへお前が愛するのを忘れるやうな、すばらしいものをつくることが出來るのだ。

男。いえ、どんなものをおつくり下さらうとあなたより強く他のものを愛することは出來ません。あなたがおつくり下さつたすべてのものを越えてあなたの心は大きく深く美しいの

です。そのお心に一度でもふれた私がどうして他のものに心を動かされるでせうか。

神。處がお前は、俺が今つくつてやりたがつてゐるものが、出來ると、つい俺のことは忘れてしまふだらう。だが俺はお前を驚かして見たい、よろこばして見たい、あらゆる馬鹿なことをさして見たい。そしてお前が有頂天になるのを見たい。

男。私はおちかひします。あなたより以上他のものを愛することは出來ません。

神。それなら俺がゐるので滿足しろ。そしてをどつたり歌つたりすることで、俺と話が出來るのに滿足しろ。

男。しかし私は、私と心を一つにするものがほしいのです。あなたはあまりに偉すぎます。もうおちつきはらつて、何もかも知りつくしていらつしやいます。私はとてもあなたと一緒にはなれません。時々は一緒になれる時もありますが、あとでつかれます。そして休息がほしくなります。

神。まあ何とでも云ふがいゝ。俺にお前の心がわからないと思つてゐるのか。お前は鳥や獸のよろこびをよろこびたいのだらう。お前はお前に愛撫されるものを求めてゐるのだらう。そしてお前の胸に顔をあてて、私はあなたのものよと云ふものを求めてゐるのだらう。遠慮はいらない。お前の求めてゐるものに、形と生命を與へて見せてやらう。

男。……

神。お前は默つてゐるね。俺の機嫌を損ねるのを恐れてゐるのだね。さうだ、俺はお前にもつと勇氣を與へておいたつもりだつたが、俺の前に立つ時はお前は一個の奴隷のやうだ。俺の愛兒のやうぢやない。俺のありあまる力の前にはお前は小さすぎたのだ。だが今にお前は、この俺に向つてさへ、男らしく立ち上る時がくるだらう。

男。男らしく？

神。さうだ、俺が今お前に、女と云ふものをつくつてやる、するとお前は男になるのだ。そして牡山羊が牝山羊にぢやれかゝるやうに、お前はその女にぢやれかゝつて子供を生ますだらう。

男。私はあんな賤しいことは決してしません。

神。何とでも云ふがいゝ。俺のつくるものを見ろ。

（神、大きな岩を手の平で押しつぶし又大きなかけらをかきとり、木を切り倒し、其處に荒々しく彫刻を始める）

神。どうだ、之をうつくしいとは思はないか。

男。……（見とれてゐる）

神。どうだ、氣に入らないか。

男。……

神。どうだ、お前にこんな美しいものを見たことはないと云ふだらう。

男。はい。

神。之をつくることが出來る俺は神だと云つてもいゝだらう。

男。えゝ、あなたは神樣です。

神。之を生かしてやらう。生きろ。

（彫刻生きる。おどろいてあたりを見る、神を見て微笑む）

女。私は何處にゐるのです。

神。お前は地上に生れたのだ。

女。地上に。

神。さうだ、地上に。

女。私は今迄、どうしてゐたのです。

神。ねむつてゐたのだ。

女。ねむつて？

神。さうだ。

女。私には何もかもわかりません。

神。それならかうしたらわかるだらう。（頭を

さする）

女。やつとわかりました。私は今迄生れるのを待つてゐました。

神。さうだ、俺によびさまされるのを待つてゐた。まあ、この水で顔を洗つて、そして一杯水をのんでごらん。

女。（顔をあらひ）まあ氣持のいゝこと。（のみ）まあおいしいこと。まあ美しい人がゐますわ。

神。それはお前がうつつてゐるのだ。

女。さうですか。そしてあの方は。

神。それはあすこにゐる人がうつつてゐるのだ。

女。まあ。

神。もう俺には用はないだらう。二人仲よくして立派な子供でもつくるがいゝ。（退場）

男。神様は何處へいらつしやいました。

女。私は存じません。

男。あなたは腹がへつたでせう。

女。ちつとも。

男。之でもたべたらどうですか。（葡萄をとる）

女。ありがたう。

男。おいしいでせう。

女。本當においしいものですね。まあ綺麗な花がありますこと。何といふ花ですか。

男。藤です。

女。之は。

男。牡丹。

女。之は。

男。あやめ。

女。之は。

男。薔薇です。

女。まあいゝ香がしますこと。

女。あれは。

男。櫻。

女。まあ綺麗ですこと。目がさめるやう。

男。ですけどもつと綺麗なものがあります。

女。さうお。何處に。

男。今に教へてあげませう。

女。あの鳥の綺麗ですこと、いゝ聲でなきますこと。

男。お氣に入りましたか。

女。えゝ、私、皆大好きですわ。

男。之等は皆あなたのものです。

女。私のものですか。

男。あなたと私のものです。

女。私達のものなのですか。そしてあなたは今迄誰といらつしたの。

男。一人です。この地上には人間は私きりだつたのです。

女。お一人だつたの。

男。えゝ、話相手もなく、よろこびあへる女もなかつたのです。

女。一番美しいものは何處にありますの。

男。そら、その泉の中に。

女。なにもありませんわ。

男。其處にうつつてゐるぢやありませんか。

女。雲！

男。いゝえ。

女。他に何もうつつてゐませんわ。あゝわかりました。あなたが一番美しいのです。

男。いゝえ、其處にうつつてゐるぢやありませんか。髪毛が長くつて、顔は神様よりも美しく、その目は星よりも美しい。その頬と唇はどんな花よりも美しい。

女。私にはわかりませんわ。それより、其處にある美しい木の實をとつて頂戴。

男。え。

女。この色の美しいこと。之はなんといふの。

男。リンゴ。

女。たべるのが勿體ないやうですね。

男。あなたの手は實に美しい。

女。あなたの手のお丈夫さうなこと。さぞあなたは力が強いでせうね。そしてあなたのその若々しさ、神様よりずつとずつとお立派ですわ。

男。私をほめてくれたのはあなたが初めてです。あなたの爲なら私は生命も惜しくありません。あなたの美しさは何にたとへたらいゝでせう。私は時々あなたの夢を見ましたが、あなたは夢より何倍美しいかわかりません。

女。私もあなたの爲なら生命はいりません。

男。私はもうあなたを失ふことは出來ない。あなたに逢ふ迄の私は、人間に生れたよろこびを百分の一も知らなかつた。私は男ではなかつた。私には勇氣も力もなかつた。私は神の人形にすぎなかつた。今、私は一人の人間、一人の男です。傲りを持つた一人の男です。私は今でこそ私が、この樂園の王となることを知ります。そして鳥や獸が私達の爲にゐることがはつきりします。お聞きなさい、あの小鳥の歌を。あの歌は神を讃美してゐるのだと思つてゐました。しかし今になればあの歌は私達を讃美してゐるのです。あなたのゐる處には神も必要がないのです。御らんなさい、あなたが現はれたら、神は何處かへ行つてしまひました。

女。私も神よりもあなたを愛します。あなたさへゐて下さつたら、私は安心して生きてゐられます。あなたがもしゐないで、私が一人ここにゐるのでしたら、私はどんなに淋しいでせう。そしてどんなに恐ろしいでせう。（獅子吠える）あゝこはい。（男のそばに思はずよる）

男。こはいことはありません。あれは私の大好きな獸です。獸の内で最も勇ましい獸です。あいつの走つたり、吠えたりする時の姿は勇ましいものです。しかし私達には害はしません。

女。ですが、恐ろしい聲を出しますわね。私あんな聲は好みませんわ。

男。あなたが嫌ひなら、あいつを何處かの谷に逐ひこんでやりませう。そしてあなたの優しい胸をさわがせないやうにしませう。

女。えゝ、さうして頂戴。私は臆病なのですから。私をおどかさないで下さい。

男。大丈夫です。之から私はあなたの爲に働くことを自分の仕事にします。私はこんなに嬉しいことはないのです。私は今迄誰の爲にも働く氣にはなれなかつたのです。私が働いてやつてもよろこんでくれるものはなかつたのです。私は一人で歌をうたつたり、をどつたりして神と、神のつくつたものを讃美してゐればよかつたのです。そしてそれをよろこんでくれるのは神だけでした。そして私は神にとつてはあるかなきかのあはれなものにすぎなかつたのです。處が、今は、あなたがゐる、私の力をたよつてくれる、あなたがゐる。私の生命を自分の生命のやうに思つてくれるあなたがゐる。私は生甲斐が出來た。こんなよろこびが人間に與へられてゐることを今日初めて知りました。

女。あゝ、怖いものがやつて來ましたわ。

男。あれが、その獅子だ。俺が追つぱらつて來てやる。（退場）

女。あの人の身體の立派なこと。そしてあの足の丈夫で早いこと。私は美しいとあの人は云つた。私はそんなに美しいか知らん。あの人は何處まで行つたのだらう。早く歸つてくればいゝのに。まあこの花の美しいこと。あの人を一つおどかしてあげよう。（花をあむ）

（詩登場）

神。お前は嬉しいか。生れたことが嬉しいか。
女。（花をあみながら）えゝ。
神。その花をどうするのだ。
女。之で髪をかざつてあの人をおどろかさうと思ひますの。
神。あの人はおどろくだらう。そしてよろこぶだらう。
女。何か御用なのですか。
神。別に用ぢやない。たゞ俺は自分のつくつたものを見るのがたのしみなのだ。お前をつくつた俺を讃美したいのだ。
女。あの方もあなたがつくつたのですか。
神。さうだ、随分よくつくつてあるだらう。
女。本當に。
神。俺はなんでもつくつた。時々はくだらないものもつくつた、時々はすばらしいものもつくつた。
女。獅子もあなたがつくつたの。
神。さうだ、あれは俺の傑作の一つだ。
女。いやなものをつくつたのね。あれは今にきつと、恐ろしいものになりますよ。
神。だがあの生々した勇ましい形を見ろ。
女。あの人の方がずつと勇ましいわ。
神。あれは勿論、俺の第一の傑作だが。
女。それからこのいろ／＼の花をつくつたり小鳥をつくつたのは感心してあげますわ。
神。それはありがたいね。
女。あの人はどうしたのでせう。まさか、あの獣にどうかされはしないでせうね。
神。大丈夫。今、あの獅子を谷間に追ひこんだ、こつちに來られないやうに垣でもつくつてゐるのだらう。あいつも早く歸りたいと思つてゐるだらう。それともお前を喜ばさうと思つて珍らしい花か、果物でもさがしてゐるのだらう。
女。（髪を花でかざりつゝ）之で綺麗になりましたか。
神。うん、美しくなつた。
女。（水にうつしながら）この白い花と赤い花と、位置をとりかへた方がよくはないでせうか。
神。うん、とりかへた方がいゝかも知れない。
女。一寸とりかへて下さい。
神。よし、よし、とりかへてやらう。
女。あなたは私のお父さんね。
神。さうだ、お前のお父さんだ。
女。そしてあの方もあなたの子供ね。
神。さうだ、あれも俺の子だ。
女。あの方をよろこばすのにはどうしたら一番いゝでせう。
神。お前自身がよろこべばいゝだらう。あいつの生きてゐることを、あいつの元氣なことを、あいつのよろこぶことをよろこべばいゝのだ。
女。それでいゝのですか。
神。それでいゝのだ。
女。あの方があすこから歸つて來た時、私は一寸かくれてゐて、あの方がどの位私を愛してゐるか、知りたく思ひますわ。あんまり歸りがおそいのですもの。
神。それも面白いだらう。
女。私はあすこにかくれてゐます。あなたはお教へになつてはいけませんよ。
神。教へはしない。
女。あなたは私の味方ね。
神。よし、お前の味方をしてやらう。もうぢきやつてくる、早くかくれろ。
女。はい。（草むらにかくれる）
（神も一寸かくれる。男、いそいで登場、方々さがす、神姿をあらはす）
神。お前はなにを搜してゐるのだ。
男。神樣、神樣、あれはどこへゆきました。ど

こへゆきました。

神。俺は知らない。

男。あなたはなんでも御存知なはずです。

神。處が俺は知らないのだ。

男。それなら逃げたのでせうか。私を嫌つて。

神。知らない。

男。何かにさらはれたのではないでせうね。

神。知らない。だが大概大丈夫だらう。今に歸つてくるだらう。

男。道に迷つたのではないでせうか。

神。知らない。だが大概大丈夫だらう。あんなものはゐなくなつたつてさうおどろかなくつたつていゝぢやないか。

男。あゝ、あなたがどうかなさつたのでせう。

神。知らない。もしそんなにあれがゐなくなつて困るなら、かはりを一つつくつてやらう。

男。いゝえ、あれを返して下さい。私はもうあの人なしには生きてはゐられません。きつとあなたは何處かへかくしたのです。

神。いろ／＼珍らしいものがあるので、それを求めながら何處かへ行つたのだらう。だが今に歸つて來るよ。安心して、おちついて、待つてゐればいゝ。

男。おーい、おーい。（耳をかたむけ）おーい。

（泣きさうな聲になり、あつち走り、こつち走り、狂氣のやうによぶ）

神。そんなにお前はあいつが戀しいのか。そんなにまでお前はあの子を思つてゐたのか。

男。えゝ。どうかしたのですか、あの人は。まさか、あなたが殺したりはなさらないでせうね。

神。大丈夫。俺は自分の自慢の作品をさうたやすくは殺しはしないよ。

男。本當に何處に行つたのです。あの人は私にあふのがいやで逃げたのですか。

神。お前を愛してはゐるやうだ。

男。それなのに何處へ行つたのです。

神。お前の歸りがおそいので氣にしてゐた。お前をさがしにでも行つたのではないか。

男。私をさがしに行つてくれたのですか。それでは私は之からさがしに行つて來ます。

神。お前がさがしに行つてゐる間に歸つて來るかも知れない。もう少し待つてゐたらいゝだらう。

男。おーい、おーい。何處へ行つたのだ。早く歸つて來ておくれ。私はもう氣になつてぢつとしてゐられません。もし私のゐない内に歸つて來たら、こゝに待つてゐるやうに云つて下さい。（女姿をあらはさうとする。神それをとめる）

神。承知した。（男は驅けずり廻りながら叫びつゝ退場）

男。おーい、おーい。（女、泣きながら出てくる）

女。あなたはなぜ、あの方をとめて下さらなかつたのです。私はもうすつかりあの方を信じることが出來ました。どうかあの方を早くよびもどして下さい。

神。駄目だ。もう少し辛抱しろ。俺はあの男に、俺の力を知らしておく必要がある。お前もだ。俺の云ふことをきかなければ、元の木にもどしてしまふ。さもなければあいつを土に返してしまふ。

女。お許し下さい。お許し下さい。

神。安心しろ。俺の云ふことを聞けば、お前達を幸福にしてやる。さあ早くかくれろ。

女。あの方は私がこゝにゐて、よろこんで迎へてあげたらどんなにお喜びになるかわかりませんわね。

神。早くかくれろ。

女。それでも。

神。俺の云ふことをきかないか。

女。きゝます、きゝます。私はかくれながらあの方の幸福を祈つて上げよう。（かくれる）

男。（あわてゝよびながら登場）まだあの人は見えませんか。

神。まだ来ない。お前は逢はなかつたか。

男。逢ひません。何處へ行つたのでせう。何處へ。あなたに御存知ないはずはないでせう。あなたは神様ですから。

神。無論俺は知つてゐる。しかしお前も知つてゐるはずだ。お前は神様よりも偉い人間なのだから、神の奴の知つてゐること位知つてゐていゝはずだ。

男。あなたは人間と云ふものが、どんなものだといふことは御存知なはずです。

神。そしてお前も知つてゐるだらうな。自惚れてはいけないぞ。人間といふものは力の弱いものだ、俺が味方しない時は人間は蟲けらとちがひないのだ、偶然に生きてゐるのにすぎないのだ。

男。あの人は何處にゐます。そして、無事にしてゐるのでせうね。

神。あの女は、俺の云ふことをきかなかつた。それで俺はあいつを、お前が獅子を逐ひこんだやうに谷間に逐ひこんだ。そして二度とこゝには来られないやうにした。

男。神様、私もどうかその谷へつれていつて下さい。

神。だめだ。其處には花は一つも咲いてゐない。小鳥もとんでゐない。果實も一つもなつてゐない。水は一滴もわき出ない。

男。あなたはひどい方ですね。其處へあんな優しい美しい人をとぢこめたのですか。

神。それでも、俺よりもお前を美しくつて、立派で、力強いと云つたから。

男。私を其處へおしこんで下さい。私も云ひます。あの女はつくり主よりも遙かに美しく、遙かに優しく、遙かに愛らしく、そして善良だと。

神。さうして荒野の内にすむことがどの位つらいことかお前には知るまい。

男。處があの人は、あの優しい人は一人でそんな目にあつてゐるのではありませんか。私はあの人のためならよろこんで荒野の内にも住みます。

神。其處では朝から晩までお前は働いて、そして身體中の汗をしぼり出し、生爪をたえずはがして、血みどろな手をして岩にかじりついて一生をくらさなければならない。

男。それでもあの人は其處にゐるのぢやありませんか。苦しい處ならなほ私は其處にゆきます。

神。行つて後悔するな。

男。後悔なんかしません。私も人間です。あなたにつくられたのは事實でせうが、つくられたものがつくつたものよりすべての點でおとると云ふはずはありません。その谷は何處にあります。

神。俺よりすぐれてゐるならば、自分で其處をさがすがいゝ。

男。よろしい。私はそれをさがし出して見せる。

神。だがお前がさがし出す迄には、あの女は餓死するかも知れない。お前は俺に抵抗するのではあいつを助け出すことは出来ないぞ。それとも俺と戦つて勝てるか。

男。それならどうすれば許してくれるのです。

神。あの女の生命よりも、俺を愛すると云へ。

男。嘘をつくわけにはゆきません。をしどりの處に行つてお前の仲間よりも神を愛せとても駄目でせう。あなたがさういふ風につてしまつたのです。

神。よろしい。俺は嘘をつけとは云ふまい。だがそれなら、俺に從順になれ。

男。あなたが無理さへなさらなければ。そしてあの人をひどい目におあはしにならなければ。

神。それでも罪のあるものは罰しなければならない。

男。ですが、その罰がひどすぎては辛抱が出來ません。

神。面白い。辛抱が出來なければ、どうしようといふのだ。俺に手向はうと云ふのか。

男。勿論、あなたの出やうによつては私は生命をすててもあなたに手向ふ。もしあなたがあの人の生命でも奪つたら、私は死ぬまであなたを呪ふだらう。正直なことを云つたものを罰するなどと云ふことはよくない。

神。俺にかつたら許してやる。

男。死んでも勝つてみる。

（神に、手向はうとするが、中々手向へない、とう／＼思ひきつてくみつく、すぐ倒される）

男。さあ殺して下さい。

（神は男をおこしてやりながら微笑んで）

神。お前が死ねば、あの女は生きてはゐられないぞ。

男。どうせあの人は生きてはゐないのだらう。

神。いや、あの女はお前の來るのを待つてゐる。

男。本當ですか。

神。本當だ。

男。さうして私をあの谷間につれていつてくれますか。

神。女は谷間にはゐない。

男。何處にゐるのですか。

神。それはまだ云へない。しかし幸福にしてゐる。そしてお前が幸福になるやう、俺に從順になるやう泣いて祈つてゐる。その聲が俺には聞える。

男。それは本當ですか。

神。本當だ。

男。あなたは矢張り神樣です。

神。さうだ、俺は神だ。お前は俺をどんな時でも信じなければならない。

男。それでもあなたはあの人を殺すやうなことをおつしやつたので。それであの人は私を愛してゐてくれるのですね。

神。さうだ。

男。それなのになぜかくれてゐるのです。

神。俺が命じたから。

男。なぜそんなことをお命じになつたのです。

神。お前の内に傲慢な根性が起つたからだ。

男。神樣。私はもう自分の力を本當に知りました。（跪いて）お許し下さい。

神。あの女に逢ひたいか。

男。はい。

神。さあ、もう出て來てもいゝ。

女。はい。（姿をあらはす）

男。あつ。

（男、おどろく。同時によろこび、見とれる。二人、思はず近づく。さうして沈默して、二人顏見合せて笑ふ）

神。さあ、これで安心したらう。元氣にお互にたすけあつて生きてゆけ。之からは苦しい時も、たのしい時もお前達は二人だ。之から隨分苦しい時があるかも知れないが、お互に助けあつて進むがいゝ。（男に）さつきの勇氣を失ふな、俺をも恐れずに、正しいと思ふ方に進んでゆけ、そしてさつきの眞心を失はずに愛するものの爲にはどんな苦しいことをもやり通せ。（女に）お前も、さつきの祈りの心を失ふな。そしてこの男のよくなるやう徐々男らしくなるやう力をつけよ。そしてさつ

きのやうに忍耐強くあれ。わが愛する子供らよ。

二人。はい。御心に從ふやうにします。

男。あなたはさつきのことをのこらず見てゐたのですか。

女。えゝ、私ははら／＼して見てゐましたの、何度と叫出したかつたか、わかりませんわ。その度神樣に注意されたので、祈りながらぢつとしてをりました。

男。あなたは私を愛してゐて下さるのですね。

女。えゝ、生命にかへても。

（女、男の胸による。男、かき抱く）

神。（獨白）之は少し、薬がきゝすぎたかな。それもまあいゝだらう。

（三三、五、二一―二三）

靜かな淋しさ

靜かな淋しさ
あこがれと詩の母胎
うまれ出づる小さき白き花。

春になつた

本當に春らしくなつた
春は矢張りいゝ
へんにのどかだ。
いろ／＼のものが
地の底から
頭をもたげてゐる
はひ出してくる。
お早う
やつと春になりましたね。
なんだか
すべてがうれしさうだ。

どの枝も

どの枝も
生長する
うれしい／＼
どの眼も食ひ入る
うれしい／＼

過去の人間

過去の人間よ、
君達が地上にのこした
働きのつみかさなりを
我等は喜びをもつて
生かしたく思つてゐる。
君達は苦しい所を
よく生き貫いてくれた。
そして地上に
いろ／＼の仕事を仕出かしてくれた。
それは一朝一夕では出來ないことだ。
あらためて君達に感謝する。
君達の苦心、血、
勞働、愛を
無意味には消えさせないつもりだ。

我等は

我等は
過去の人間から受けとつたものに
我等は精神と勞働とを加味して
未來の人間に渡すものである。
出來るだけよくして渡したい。

かちかち山

一

（婆さんは爺さんの歸つて來るのを働きながら待つてゐる。其處に近所の兎がたづねてくる）

兎。お婆さん、お婆さん。

婆。誰かと思つたら、兎さんか。よく來てくれた。暫らく顏を見せなかつたね

兎。一寸病氣をしてゐましたので、

婆。それはいけないね、お爺さんもお前さんのことを時々心配してゐたよ。

兎。さうですか、お爺さんはおたつしやですか。

婆。たつしやにしてゐるよ。だが山に行つてまだ歸つて來ない。もう歸つて來さうなものと思つてゐるのだよ。どうしたのだらうね。

兎。本當にもうおちき日がくれますね　わるいものにでもお逢ひにならなければよろしいが。

婆。妾もそれで今心配してゐたのだよ。一寸留守番してくれないか　一寸さがしてくるから。

兎。お婆さん、それより私が捜して來て上げませう。山までとんでゆくのは造作もありませんから。

婆。さうかね。それでは氣の毒だが見て來てもらはうかね。

兎。なに、わけないことですよ。御遠慮には及びません。それなら一寸さがして參ります。

婆。せつかく來てくれたのにね。しかしお前さんも用心おし、この頃は物騷だからね。

兎。大丈夫です。それなら行つて參ります。

婆。御苦勞だね。

（兎、とびながら退場）

婆。本當にあの兎はいつもかはらず親切ものだ　それもお爺さんが、あれが川におちたのを助けてやつたことがあるからその恩を今だに覺えてゐるのだらうか、恩を覺えてゐるのは感心な話ぢやないかね。

（爺さん狸をしばりつけひきずつて登場）

爺。婆さん、歸つて來たよ。

婆。爺さんか、よく歸つて來なさつた。さぞおくたびれだらうね。

爺。なに、ちつともくたびれはしないよ。それよりいゝ土産物をもつて歸つてやつたよ。之御らん。

婆。おゝ、立派な狸だね。よくそんなものがとれましたね。

爺。あゝ、こいつが午睡してゐる所をつかまへたのだよ。狸じるでもつくつてやらうと思つて持つて歸つて來たのだよ。

婆。さうですか、それはよう御座いましたね。しかし殺すのは可哀さうですね。

爺。なに、之は人をだまして許りゐるわるい狸だから、殺す方がいゝのだよ。

婆。兎にはお逢ひになりませんでしたか。

爺。あゝ、あの可愛い兎が來たか。どうしてゐた。

婆。病氣してゐたのださうです。そしてあなたのお歸りのおそいのを氣にして、今あなたを捜しに出かけました

爺。それは氣の毒なことをしたな。あいつは恩を忘れない感心な奴だ。

婆。さうですよ。誰にでも親切にしてやるものですね。

狸。あいた、あいた。
婆。どうしたのだ。
狸。お婆さん、手が切れさうだ。お願ひだから少し繩をゆるめて下さい。
婆。そんなことは出來ないよ、お前は逃げるつもりだらうから、逃がしはしないよ。
狸。お婆さんは今、誰にも親切にしてやるものだとおつしやいましたね、
婆。だが相手によるからね
狸。私だつて命をたすけて下されば、どんなことだつてしますぜ。
婆。それが信じられれば、すぐでもほどいてやるが。お前の根性はまがつてゐるからね。
狸、だけどお婆さん、私たちにもさうわるいものではありませんよ。私だつて自分を信用してくれるものにはそれだけの事はして見せるつもりなのですが、誰も信用してくれないので、ついやけを起して、勝手にしろと云ふ氣を起すのです。元々わるいものぢやないのです。命さへ助けて下されば兎なんかに負けずに御恩をかへします。狸じるにして食つたつて、食つてしまへば食はない前と同じぢやありませんか。ためしに生かして見て下さい、決してわるいことはしません。又私のやうなものが、わるいことをした所がどうせ大したことは出來ません。御慈悲です、御助け下さい。
婆。お爺さん、どうしようかね。泣いてゐますよ。
爺。その言葉があてになりや許してやつてもいいが、あてになるかならないかわからないからね。
狸。お助け下さい。お助け下さい、御恩は一生忘れません。
婆。爺さん、助けてやらうかね。
爺。いたづらをする所を見ると隨分腹も立つが、この態を見ると、可哀さうになるね。
狸。お助け下さい。お助け下さい。命の御恩は忘れるわけはありません。いくら私のやうなものでも。

——兎登場

兎。お爺さん、何時お歸りでした。
婆。御苦勞だつたね、お前が出るとすぐ歸つていらしつたよ。この狸をとつて。
兎。大きな狸ですね。
爺。兎さん、暫らくだね。病氣だつたさうだね。もういゝのか。
兎。えゝ、おかげでこの通り丈夫になりました。一時は助からないかと思ひましたが、やつと助かりました。またこのやうにお月さまを見てはねられるやうになりました。
狸。お助け下さい。お助け下さい。
婆。この狸が命をたすけてくれと云ふのだがね、もうわるいことは決してしないと云ふのだがね。そして恩を忘れないと云ふのだがね、助けてやりたくもあるのだが、あとが怖いやうにも思ふのだよ、あとさへこはくなければすぐでもゆるしてやりたいのだがね。
狸。お助け下さい。お助け下さい。私はどんなことしても生きてゐたいのです。生かしておくだされば私はどんなに難有がるかわかりません。
爺。それはさうだらう。生かしてもらへればいゝ。お前たつて夢中でよろこぶだらう。だが時がたつとそんなよろこびは消えてゆくからね。
狸。そんなことはありません。そんなことはありません。
爺。お前の云ふ言葉が本當なら、よろこんで助けてやる。もう狸じるも喰ひたくないからね。だがあてにはならないからね。兎さん、お前さんもさう思ふだらう。嘘つくこと切り

知らない狸だからな。

兎。お爺さん、だけど殺すのは可哀さうですよ。まさかゆるしてやつてもわるいことはしないでせう。

爺。それなら今日食ふことはやめて暫らく小屋にでも入れて飼つておくか。それで狸が本當に改心したらその時ゆるしてやるか。

婆。それがいゝでせう。

爺。それなら今日食ふことは許してやるよ。

狸。ありがたう御座います。御恩は忘れません。

爺。そのかはりわるいことをしたら、すぐ食つてやるからそのつもりでゐろ。

狸。畏まりました。そのかはり惡いことをしませんでしたら、一生食はないで下さいますか。

爺。それは食はないでやるよ。

狸。ありがたう御座います。

爺。それなら裏の木にゆはへつけてやらう。

（狸をつれて退場）

婆。狸のやつ、ふだん謔をつくもので、どうもあいつの云ふことはあてにはならない。あてにさへなれば逃がしてやつてもいゝのだがね。

兎。私は逃がしてしまふ方がいゝやうに思ひますよ。しばりつけたり、かごに入れたりすると、又うたがひ深い狸のことですから、食はれやしないかと思つて、すきがあると逃げようとしますよ。

婆。本當は逃がしてやつてもいゝのだが、逃がすと、すぐ又恩を忘れて畑をあらしたり、爺さんをだましておどかしたりするからね。一ぺんなんか爺さんがだまされてもう少しで川におちさうになつてやつと助かつたこともあつたのだよ。だからあてにはならないよ。

（爺さん登場）

爺。ゆはへつけてやつた。之から一つ逃げられないやうな丈夫な小屋たつくつてやらなければ。

婆。狸はよろこんでましたか。

爺。涙をこぼしてゐたよ。だがあいつの涙はあてにはならないからね。

兎。お爺さん、許してやつたらどうです。飼ふのも大變ですよ。

爺。だがあいつはすぐ又いたづらをするからね。いたづらをしないと云ふことさへわかればよろこんで逃がしてやるが、それがいくら考へてもあてにはならないからね。それで困るよ。お互の心がわからないのだからね。わかつたつて又かはらないとも限らないのだから困るよ。それも他のものとちがつて、狸だからね。許してやりたいが、さうもゆかないよ。

兎。それなら、今日は之で失禮します。何か御用があつたら云つて下さい。

爺。まだいゝぢやないか。

婆。本當にもつと遊んでおいで。

兎。ありがたうございます。しかし今日はあんまりさむくならない内においとましませう。

爺。身體を大事におし。

婆。本當に。又おいで。

兎。ありがたうございます。それなら失禮します。

爺。
婆。｝さよなら

（兎退場）

婆。兎は感心ですね。

爺。あいつはいゝ奴だよ。世の中があいつのやうな奴許りだつたら面倒なことはおこらないのだ。だが兎の中でもあんな奴は珍らしい。狸があいつのやうに信用が出來たらすぐよろこんで許してやるのだがね。第一つかまへもしなかつたら。

婆。今日は狸じるをくひそこねましたね。

爺。くひそこねたよ。だが反つて氣持はいゝ。今晩はよくねむれるだらう。

婆。いゝ夢でも見られるでせう。どれ、足をあらふ水をくんで來ませう。

爺。いゝよ。井戸端に行つてあらつてくるから。

二

（裏庭。そまつながんこな狸小屋がある。その内に狸がゐる。その前で婆さん、米をついてゐる）

婆。あゝくたびれた。（腰をのばす）

狸。おくたびれでせう。

婆。若い内はそんなでもなかつたが、齢とつたのですぐ息が切れるよ。

狸。さうで御座いませうとも、見てゐて御氣の毒に存じます。

婆。お前も、そんな處にゐたら退屈するだらうね。

狸。退屈しないこともありませんが、おかげでまだおてんたう様をおがめるのですからありがたく思つてゐます。

婆。お前の心がけさへよければ、何もそんな處に入れておきたくはないのだがね。

狸。私も毎日々々、どうしたら私の眞心が、お二人にわかつて戴けるかそれ許り考へてゐるのです。こんなにありがたがつてゐる心持が通じないのは口惜しう御座います。

婆。そんなにありがたく思うてゐてくれるのかい。

狸。それはもう心の底からありがたく思つてをります。さもなければ罰があたります。何しろ命をたすけて下さつたのですから。ですから私はかうやつてあなたがいゝおとしになつて働いていらつしやるお姿を見ると涙がこぼれます。早く眞心が通じて御信用を得て、あなた方のお手つだひが出來る身分になりたい、さうしたらどんなに身を粉にしても御恩がへしをしてお目にかけるのにと思つてゐます。

婆。本當にお前がそんな心でゐてくれるなら妾達はどんなに嬉しいかわからないよ。だがお前の今までが今までだから、信用していゝのか、わるいのかわからないよ。

狸。お疑ひになるのも御尤です。ですけど私は今度と云ふ今度、心を入れかへました。

婆。その證據が見せてもらへるものならね。

狸。こんなに思つても見せられないものですかね。（泣眞似する）

婆。まあ、さう泣くものではない。眞心はいつか通じるものだから、氣ながにまつておいで。どれ、お爺さんの歸る前に米をついておかなければ。

（米をつき出す）

狸。お婆さん、お婆さん。

婆。なんだ。

狸。その米を私につかしてはくれませんか。

婆。どうして米をついてくれるのだ。

狸。私をこゝから出して下さい。さうすれば米をついて上げます。そしてついてしまつたら又こゝに歸ります。さうすればお爺さんにもわかるわけはありません。

婆。それは出來ないよ。出てみるまではまた入るつもりでも出て見たらもう入る氣にはならないだらうからね。

狸。そんなことはしません。あなたに御迷惑はかけません。

婆。いや〳〵、手つだつてもらはなくつてもいいよ。妾一人で澤山だよ。

狸。ですが私はこんないゝ身體をして遊んで食はして戴いてはすみませんから。

婆。いゝよ。いゝよ。

（婆さん、また米をつく）

狸。お婆さん、お婆さん。

婆。うるさいね。なんだ。

狸。どうもお婆さんは米をつくことが下手ですね。それぢやくたびれる許りですよ。

婆。默つて見ておいで。

狸。お婆さん、あなたは隨分疑ひ深い方ですね。あなただつて私に働いてもらふことは滿更、おいやぢやないのでせう。

婆。そりや、本當に働いてくれるなら、妾も助かることは助かるよ。妾も齡とつて、この作業が少し重くなつた。

狸。それ御覽なさい。惡いことは云ひません。私はこゝにゐて何もせずにゐるのにあきました。身體がだらけて困ります。私は働いて見たいのです。ひとをあんまり疑ふものではありません。信用すれば二人ともとくが出來るのに、あなたのやうに疑つてはきりがありません。なんなら私を逃げられないやうにゆはへておいて下さつてもよろしい。決して御迷惑はかけません。本當にあなた達は疑ひ深くつていらつしやいますね。御親切ないゝ方なのですが、疑ひ深い爲に、私をお許しにならないので、どの位損していらつしやるかわかりません、そのおかげで私を許しにはいただけないのですね。いくら私が神妙にしてゐても、いゝ心がけを持つてゐても、狸の奴のことだからどんなことを思つてゐるかも知れない、からあなた方は思つていらつしやるのでせう。そして惡氣のないものを苦しめになつてそして自分も損していらつしやるのでよ。御氣の毒です。

婆。お前があの兎のやうな心がけのものだつたら妾だつて疑ひはしないよ。お前が今迄あまり不正直だつたから妾達は信用したくても信用出來ないのだよ。

狸。それでも信用して下さらないからいけないのです。腹の底から信用して下されば私だつてわるいことはしません。知己の恩に感じます。しかし疑つてかゝられるので、折角眞心をもつてゐても、馬鹿氣て出せなくなります。狸の奴又人をばかさうと思つて眞面目な顔してゐやがるが、だまされはしないぞ、その手は喰はないぞ、なぞと思つてゐられるとつい馬鹿にされてゐるやうに見えて、だまさうと思へばかういふ風にだませるのだと云ふことがお見せたくなりますよ。

婆。お前の云ふことにも道理はある。何んでも聞いて見ると尤な所があるものだ。だがね、妾達がお前さんを信用しないのも無理はないと思ふだらう。

狸。それは御尤です。實際今までの私はわるかつたのです。後悔してゐます。之から娑婆にも出して戴けたら心を入れかへようと思つてゐます。

婆。本當にさうするがいゝよ。

狸。ですけど何時になつたら許して戴けるかわかりませんので時々心細くなります。お爺さんのお心でもかはつて、お客さんでもくると、狸じるをつくつて御馳走してあげようかなぞとやられはしないかと時々心配になります。

婆。安心しておいで、お爺さんはそんな方ではないから。

狸。本當にそんなお方ではないことは存じてをりますが、どんな心のもち方で。

婆。お前こそ疑ひ深いね。そんなこと決してないから安心おし。

狸。ですけど、心配になるのも無理はないでせう。

婆。さあ、もう默つてゐておくれ。

狸。それでも心配で。

婆。安心だよ。どれ、米をつかなければ。お前と話してゐたので、おくれてしまつた。

狸。どうもお氣の毒でしたね。私につかして下されば、見てゐるまについてお目にかけます。

婆。それならお爺さんに内證で出してやるから、ついておくれ。うまくついたら御馳走してやるよ。だが繩でしばつておかないと、もしもの時、妾がおこられるからね。

狸。よう御座いますとも、しつかりしばつておいて下さい。そして私が少しでも逃けようとしたら繩をおひきになると首がしまるやうにやつて下さつてかまひません。

婆。それなら今、繩をとつてくるよ。

（婆退場）

狸。あの婆は疑ひ深い婆だな、だが疑はれても仕方がない。その内には逃けてやるから。それには信用をとらなければ駄目だからな。こんな處で一生をすごしちや馬鹿氣てゐる。それに狸汁にすると云はれりや、それまでだからな。御約束がちがひますと云つても始まらないからな。どうかして逃げられないものかな。

（婆繩を持つて登場）

婆。それなら之でゆはくからぢつとしておいで。

（柵の間から手を通し、狸の助けをかりてゆはく）

狸。之なら、もう逃げようと思つても逃げるわけにはゆきません。もう大丈夫です。

婆。それなら出してやらう。

狸。ありがたう御座います。

（狸、小屋から出る）

婆。お前に米がつけるかね。

狸。その杵をよこして下さい。この通り上手につけます。

婆。それならひもはこゝへゆはへつけておくよ。

狸。えゝ。どうせ逃けはしませんから何處でもゆはへておいて下さい。（米をつく）

婆。中々うまいね。

狸。うまいものでせう。なれればもつとうまくついてお目にかけます。

婆。本當にそんなに働ける身體をしながら今までなまけて許りゐたのだね。

狸。恐れ入ります。之からは心を入れかへて働きます。あの兎さんを手本にして、なまけないやうに皆に親切にして、皆によろこんで貰ひます。

婆。本當にさうしてくれると妾も嬉しいよ。さうすれば皆もお前に親切にするだらう。そしてお前に逢ふのをよろこぶやうになるだらう。

狸。それにしても、もう少し早く氣がつけばよかつたのです。どうせ皆に親切にしたつて誰も信用してはくれない、たゞ皆油斷してゐればこつちが殺される許りだ、誰も私を愛してゐるものはない、あつても、利益の爲には私を殺す位、なんとも思つてゐない、さう思つてゐました。だから誰でも見れば疑はないではゐられなかつたのです。そして損するのがいやですから、だまされない用心許りしてゐました。

婆。本當に、皆、だまされない用心をして、いらない心配許りしてゐるのだ。

狸。さうで御座います。相手が損をしなければ自分が損する、相手を殺さなければ自分が殺されると思つてゐるのです。

婆。くたびれたらかはらう。

狸。いえ、少しもくたびれはしません。お互に助けあふといふことは誰も云つてもゐますし、知つてもゐます。しかし助けあはう

とすれば、すぐだまされて損をしやしないか、向うで愛しもしないのにこつちで愛しては馬鹿にされはしないか、そんなこと許りが考へられます。

婆。其處へゆくと兎は感心だよ。お爺さんが、兎が川におちたのを助けてやつてからお爺さんの爲には命でもすてようと云ふ氣でゐるからね。

狸。ですけど、それも恩を着れば得をすることがわかつてゐる間ぢやないでせうか。

婆。そんなことはないよ。隨分つけたね。もうぢきお爺さんが歸つてくるだらうから、あのなかへ歸つておくれ。

狸。まだ大丈夫ですよ。もう一つきですからついてしまひませう。

（狸、いきなり婆さんのすきを見て、自分の繩で婆さんの足をすくひたふす）

婆。何をするのだ。

狸。（婆を足でふみつけて）婆さん、油斷しちやいけませんよ。この私は何を考へてゐるか、知つてゐますか。この杵であなたを殺さうと生かさうと、かうなれば私の勝手です。もうあなたの云ふことをおとなしく聞く必要がなくなつたのです。

婆。お前はよくもだましたね。

狸。だます氣ではなかつたのですが、お婆さんが油斷を見せたのがわるかつたのですよ。私の繩をほどけばよし、ほどかなかつたら、打ちころすからさう思へ。

婆。人殺しい。

狸。聲出すと承知しないぞ。どうか助けてくれとさう云へ。

婆。どうか助けて下さい。

狸。繩をほどくか。

婆。ほどきます。

狸。いや、ほどいてもらはないでも、自分でほどけるわ。

婆。さあ、もう逃がしてあげるから、早く逃げるといゝ。

狸。もうかう云ふ所を見せた以上はたゞ逃げるだけではおひつかない。毒を喰はば皿までだ。氣の毒だが婆さんの生命はもらつたぞ。

婆。（逃げようともがく。狸、うち殺す）お爺さん、兎、助けて！　人殺しい！

狸。ざま見ろ。どれ、婆に化けて、俺の肉を食はうとした爺にこの婆のまづい肉を喰はせてやるか。

（婆さんの死骸を家のなかにもちこむ）

三

（家のうち、狸すでに婆さんにばけてゐる。二人膳にすわつてゐる）

爺。さうか、狸奴、そんないたづらをしたか。それなら仕方がない。おかげで狸じるが食へるわけだ。

狸。あまりおいしくないかも知れませんよ。何しろ齢とつてゐますから。

爺。あの狸はそんなにとしをとつてゐたか。

狸。もう六十二になるさうですよ。

爺。それならばお前と同いどしだね。そんなにとしとつてゐるとは見えなかつた。どれ、御馳走になるかな。

（爺さん箸をとつて椀を口のそばにもつてゆかうとする。戸をたゝくものがある）

爺。誰だ。

兎。私です。

爺。兎さんか。いゝ所へ來た。上つて狸汁でも食つてゆかないか。

兎。狸を殺したのですか。

爺。わしの不在に婆を怒らしたのか、殺してしまつたのださうだ。戸をあけておやり。

（狸、逃げてしまつてゐる）

爺。婆さん、何處へ行つたのだ。（戸を自分であける）さあ、こつちへお入り。

（兎上る）

爺。婆さん、兎にも狸汁をよそつてやつておくれ。

外で狸の聲。婆を食つたお爺さん、縁の下を御らん。

爺。今のは狸の聲ぢやないか。何と云つたのだ。

兎。お爺さん、氣をしづめて下さい。

爺。なんだ、お前はどうかしたのか。

狸。（外で）婆を食つた爺。

爺。あれは狸ぢやないか。婆さんは何處へ行つたのだ。婆さん、婆さん、婆さん。（うろたへだす）

狸。（外で）婆を食つたぢゝい。

（兎、外へとび出す）

狸。（逃げながら）縁の下を見ろ。縁の下を見ろ。

爺。婆さん、婆さん、婆さん。（あかりで縁の下を見る）あゝ（氣が狂ふやうに）大變だ、大變だ。兎さん、兎さん、大變だ。婆さんが狸にやられた。婆さんの骨だらけだ。あゝあ、婆さん、なぜこんな目に逢つたのだ。あゝあ。

（泣きくづれる）

（兎登場）

兎。どうしたのです。

爺。之を御らん。畜生！ 覺えてゐろ！ あゝ何と云ふことが出來たのだ。（兎も見ておどろく）

兎。お爺さん、お爺さん、このかたきはきつとうつてあげますよ。あんないゝ方がどうしてこんな目におあひになつたのだらう。あゝあ。

（兎もなく）

四

（上手に山がある、狸その端のこちらがはから草をかついで出てくる。兎も草をかついで下手からでてくる。後ろに草叢あり）

兎。狸さん、狸さん、そんな知らないふりしないでもいゝぢやないか。

狸。あゝお前さんだつたのか。私はお前さんだと云ふことに氣がつかなかつたのだ

兎。隨分暫らくお目にかゝらなかつたね。少しやすんで話でもしよう。

狸。あゝ、やすまう。（二人すわる）

兎。このあひだは隨分ひどいことをおやりになつたね。

狸。それだつて、あゝするより仕方がなかつた。あゝしなければ俺の方が今時分食はれてしまつてゐるだらうからね。婆は俺を食ひたがつてゐた。あの婆はお前さんも食ひたがつてゐたよ。何かお前さんがしくじりでもしたら、きつとあの婆にお前さんも殺されたよ。あの婆は見かけによらない悪い婆だ。お前のことなんか、陰では悪口許り云つてゐたよ。

兎。さうかね。そんなにおそろしい婆さんだつたかね。それならつまり、君は僕の命の恩人と云つてもいゝのだね。

狸。何も恩にきせるわけではないが、正直に云へば、まあさう云ふわけだ。

兎。それなら僕はだまされてゐたのだね。

狸。さうとも、さうとも。あの婆程、うまく嘘をつく奴はありはしない。

兎。さうかね。君もあの婆さんにはその點敵はないかね。

狸。どうしてノヽ、僕なんか足もとにもよりつけないよ。あの人のいゝ面して、恐ろしいこと許り考へてゐたのだ。あんな奴とは誰も思はないだらう。しかし俺をたますことは出來

なかつた。

兎。さすがは狸さんだけのことがあるね。

狸。何しろ人は見かけによらないとはよく云つたものだよ。俺なんか、誰の云ふことも信用しない、油斷はしない。だからだまされることはない。

兎。さうかね。僕はすつかりだまされてゐたよ。

狸。それは君は正直ものだからさ。

兎。そのかはり僕は夜はよくねむれるし、かうやつてゐても氣がおちついてゐられるよ。君は夜もろくにねむれないだらう。

狸。それはさうさ。たまに安心して居ねしてゐるとあの爺につかまつたのだ。油斷もすきもありはしない、かうやつてゐても俺は少しも油斷はしない。油斷は大敵だ。何處から敵が出て來て、俺をおとし入れようとしてゐるかわかりはしない。この世の中は恐ろしい世の中だ。誰だつて信用は出來ない。

兎。この僕でも信用は出來ないか。

狸。それは君は信用するさ。君は少しとろいつては失禮だが、足りなく出來てゐるからね。今時に珍らしいよ。誰にも厚意をもつて、安心してつきあへるのだからね。

兎。疑ひだせば切りがないが、信用出來ることもないことはないよ。僕だつて疑はないことはない。君の話をきくまでは君を隨分惡い奴だと思つてゐたよ。生命を助けてもらつた恩人をあんな目にあはしたと思つたからね。しかし話をきいて見れば無理がない。無理はない所か、僕を殺さうと思つてゐる人間を殺してくれた恩人なのだ。僕は君に逢つて話をきいたのを嬉しく思つてゐるよ。さもなければいつまでも恩人を憎んでゐるわけだからね。恩人を憎むと云ふことはよくないことだから、一たい僕は人を憎むことはきらひなのだ。

狸。爺はこの頃どうしてゐる。

兎。可哀さうに、すつかりしよげて家に許りゐる。病氣が出て、家にねてゐる。もしかしたらもう外には出られまい。

狸。さうか。それをきいて安心したよ。

兎。なぜ？

狸。だつてあの爺は俺を殺さうとねらつてゐるだらうからな。今度つかまつたらどんな目にあふかわからないからな。婆が爺を殺さうと思つてゐたと云つてもあの爺は本當にはしないからな。

兎。いくら婆さんだつて爺さんを殺さうとは思つてはゐなかつたらう。

狸。あてになるものか。しかし爺の病氣は本當なのだね。

兎。本當とも、僕は毎日出かけてゆくが、どうも今度は助からないかも知れない。

狸。あの爺も、もういゝとしてゐるのだから早くたばるがいゝのだ。

兎。そんなことを云ふものではないよ。

狸。もう日がくれて來た、それなら之で失禮しよう。

兎。さうか。

（狸ゆきかける）

兎。狸さん、僕は今舟を二つつくつてゐるが、一つ、出來たら舟あそびをしないか。

狸。してもいゝ、出來たら知らせてくれ給へ。

兎。あゝ、出來たら知らせるよ。競爭でもして見ようか。もし氣に入つたら一艘御恩かへしに上げてもいゝ。

狸。それは氣の毒だな。

兎。なに、遠慮はいらないよ。

狸。それぢや、出來たら知らして呉れ給へ。さよなら。（獨言）あの兎は何處まで馬鹿なのかな。（退場）

兎（立ち上り）狸の奴、俺をだましたつもりで、俺にだまされてゐることを知らないのだ。俺はあの死んだ婆さんがどんなにいゝ方だと云ふことはちやんと知つてゐる。狸なんかにだまされるものか、今にあいつをひどい目にあはしてやるぞ。さうだ、この火うち石であいつの背負つてゐる草を燒いてやれ。大聲を出し）狸さん、狸さん。（あとを追ふ）

五

（前の場の草叢の向うに狸再び姿をあらはし上手に山の端が出てゐるそのうしろへとぼとぼ歩いてゆく。兎おひつく）

兎。狸さん、狸さん、あなたはそつちにゆくのですか。それなら一緒に歸りませう。

狸。一緒に歸らう。

兎。秋の景色がいゝぢやありませんか。

狸。いゝね。

兎。狸さん、あなたは爺さんが病氣だと聞いたらすつかり元氣になりましたね。

狸。安心したからさ。別に不思議はないよ。

（兎、狸の油斷を見て火うち石を出して、かちかちやる）

狸。かちかち音がしたね。あれは何の音だ。

兎。こゝがかちかち山と云ふのですよ。

狸。かちかち云ふから、かちかち山か、面白い山だね。

（兎火をつける）

狸。ぼうぼう云ふね。

兎。ぼうぼう云ふのはぼうぼう山ですよ。

狸。ぼうぼう云ふのはぼうぼう山か。

兎。さうですよ。

（狸山のかけにかくれる、火がもえ上る）

狸。あつゝ、あつゝ、あついよ。大變だ、大變だ。助けてくれ、助けてくれ。

兎見て

兎。どうしたのです、狸さん。どうして火がついたのです。あついでせう。さぞあついでせう。

（木の枝であふぎながら山のかけにかくれる）

六

（一と同じ庭。狸の小屋がなくなり、そのかはり、他の處に新らしい婆さんの墓が出來てゐる。爺さん、墓の前を掃除しながら時々涙ぐむ。兎、花をもつて登場）

兎。お早う御座います。

爺。よく來てくれた。きつとお前が花を持つて來てくれると思つて、掃除して待つてゐたのだ。

兎。恐れ入ります。

（兎花をそなへおじぎする）

爺。かうしてお前が親切にしてくれるので、わしもどのくらゐ嬉しいか知れない。婆さんもさぞよろこんでゐるだらう。

兎。さうおつしやつて下さつては恐れ入ります。たゞあなたがどんなにお淋しいかと思つて少しでもおなぐさめ出來ればうれしいのです。本當におとしとつてあんな目におあひになつてはたまりません。それに私にも責任があるやうな氣がします。

爺。そんなことはないよ。お前が逃がしてしまへと云つたとき、逃がしてしまへばあんなことはなかつたのだ。たゞ一寸したいたづらを恐れたのがいけなかつた。しかしもう何を云つてもとり返しはつかない。出來ることはあの狸を殺して婆さんのかたきをうつ許りだ。どうだ、狸のやけどはもうなほつたか。

兎。えゝ、もう殆んどなほりました。

爺。惡運の強い奴だな。やけどして背中中あか

むけになつた所に、お前にからしをぬられてころげまはつてゐたのも、ついこないだの話ぢやないか。

兎。えゝ、さうです。あの時は隨分痛快でした。しかし御安心なさい。今度こそあのどろ舟で狸の奴をしづめてやります。

爺。舟はもう出來たか。

兎。えゝ、今日中に出來上ります。明日天氣さへよかつたら狸をさそひ出してやらうと思つてゐます。日があの木の處へ來た頃、よかつたらあの川へ來て見て下さい。きつと狸を殺してお目にかけます。

爺。狸は舟にのることを承知したのか。

兎。えゝ。舟をやらうと云つたもので、逢ふ度にまだ出來ないかと催促します。

爺。よくお前に火をつけられたり芥子をぬられたりして、お前を信用してゐるね。

兎。まあ、信用してゐると云ふよりも、私を馬鹿にしてゐるのです。自分のやうな利口なものが、兎のやうな馬鹿ものにだまされることはないと思つてゐるのです。

爺。自惚がつよいな。

兎。それは自惚がつよいのです。自分は誰でもだますことが出來るが、誰からもだまされないものだと思ひこんでゐるのです。私もその自惚をたきつけて、どうして君はそんなに利口なのだと云つてやると、狸は得意になつて、俺が利口なのぢやない、世間の奴が皆馬鹿なまでさと云つて大得意です。まして私のやうな馬鹿ものにはだまされることはないと安心し切つてゐます。隨分笑ひたくなることがあります。しかし其處をしん抱しなければ駄目だと思つて、何處までも馬鹿にされて馬鹿な顔してゐるのです。

爺。もう一息と云ふ所だから、手ぬかりのないやうにしなければいけない。

兎。えゝ、用心に用心してゐます。自分でも私のやうなものにどうして狸をだます力があるのかと思つて、氣味がわるい位です。自分で自分を思つたより惡者ぢやないかとさへ思ふことがあります。あんまり狸が思ふつぼに落ちるのですから。しかし之もお婆さんのお助けかと思ひます。たゞ私は手ぬかりがないやうに、少しも油斷しないやうにやつてゐます。

爺。狸を馬鹿にしてはいけないよ。お前のことだから安心してゐるが、讐をうつてしまふまで安心してはいけない。

兎。えゝ、安心はしません。なほお言葉に從つて注意してやります。自分でもこはい程うまくゆくので、謹み深くしないではこはくつて仕方がありません。

爺。その心がけぢや、明日は讐がうてるだらう。きつと見に行つてやるから、立派に婆さんの讐をうつておくれ。しかし大丈夫と云ふ時がくる迄は疑はれないやうにしなければいけない。時と云ふものは無理するのが嫌ひだから。少しでも無理すると逃がしてしまふよ。

兎　はい。あいつが往生するときまるまでは何處までもあいつの味方のやうな顔してゐませう。一度時を逃がしても、又の時を待つことが出來るやうにしませう。

爺。明日天氣がよければいゝが。

兎。本當で御座います。お婆さんがきつと天氣にして下さるでせう。

爺。しかし雨がふつてもがつかりするなよ。

兎。はい。その時は更に勇氣を養ひませう。それでは之から念に念を入れて舟をつくります。狸に見られても疑ひをはさまれないやうに泥舟をつくるのですからなか〳〵骨が折れます。

爺。わしも今日舟を監察したいが、出かけて狸

奴に見つかると厄介だから見にゆかないが、明日天氣だつたらきつとあの柳の大木のうしろあたりにかくれて見てゐてやるから、しつかりやつてくれ。

兎。きつと見てゐて下さい。さうすればどんなに氣丈夫か知れません。それでは之で失禮します

爺。お婆さんにそのことを云つてやつてくれないか

兎。さつき申しましたが、もう一度讀まして戴きませう。さうして明日首尾よくかたきがうてるやうにお願ひいたしませう。

（兎一心にいのる）

爺。明日天氣がよかつたら、お前のすきなおからを煮ておいてやるぞ。

兎。ありがたう御座います。さよなら。

爺。手ぬかりがないやうにしろ。そしてうまくおやり。

（二人別れを惜むやうに顔を見合はす、

兎退場しようとする）

爺。兎、明日お前が負傷一つしないで勝つやうに祈つてゐるよ。

兎。（思はず平伏し）ありがたう御座います。

爺。うまくやれよ。

兎。はい。（立ち上り涙ぐみながら退場）

（爺さん、あとを見おくる）

七

（川岸、眞中より少し下手に川が流れてゐ、こちら岸は河原になつてゐて其處に小さな舟が二艘並んでゐる。兎が其處で働いてゐる。向う側の堤に柳の木があり草叢がある）

兎。狸の奴、もう來さうなものだが。あいつをこの泥舟にのせるのが一番むづかしい仕事だ。あいつは慾が深いから、この舟の方を少し大きく立派につくつておいてやつた。その上にこの舟の方へ御馳走をのせておいてやれ。（食ひ物やお酒の入れてある箱を泥舟にのせる）あいつはこのにほひをかいではこの舟にのりたがるだらう。かいも棹もこつちの方が少し上等だからこつちにおいてやれ。もう之で支度が出來た。早く來ればいゝが。へんに胸さわぎがする。やつて來たらしいぞうまくゆけばいゝが。

（狸登場、頭の後ろに焼けどのあとがのこつてゐる

狸。おはやう。

兎。おはやう。よく來たね。もう遲いからどうしたかと思つた。

狸。立派な舟が出來たね。どつちをくれるのか。

兎。どつちでもあなたの好きな方を上げませう。

狸。こつちの舟の方が少し大きいな。俺の方が大きいからどつちでもよければ、この舟をもらふかな。

兎。それが氣に入ればそれをあげます。しかしまあ、一ぺんのつて樣子を見て御らんなさい。

狸。うまさうなにほひがするな。一つ戴かうかね。

兎。舟にのつてからにしたらどうです。

狸。それならさうするかね。この舟は少し重かないかね。

兎。もし重いやうだつたら、この舟とかへませう。

狸。いや、この舟の方が氣に入つた。俺は何でも大きい方が好きだから。それなら早く舟にのるかね。御馳走が食ひたくなつた。

兎。まあ、どうせ食ひたい時食へるのですから。

狸。一つお加減を見ようかな。（一つつまむ）

兎。どうです。

狸。もう一つ食べて見ないとわからないな。（又つまむ）少しはわかつて來たやうだ。しかしもう一つ食べて見ないとよくわからないね。

兎。あとで食べるものがなくなると困りますよ。

狸。もう之きり食べないよ。（又つまむ）中々おいしい。それなら早く舟を出さう。

兎。出しませう。そつちをさきに出しませう。

狸。俺はのつてゐるから出してくれ。

兎。出してあげますから、のつてゐて下さい。

狸。（舟にのり）今日はいゝ天氣だな。酒もあるな。お前さんは中々氣がきいてゐるな。（酒をのむ）

兎。さあ、動きますよ。

狸。よし。あゝいゝ氣持だ。（舟をおろす。狸棹をさす）

兎。どうです、工合は。

狸。上等だ。

兎（も舟を出し）それならどつちにゆきませう。

狸。さうだな。何處かへ舟をとめて御馳走をたべてから漕ぎまはることにしよう。

兎。それならあの柳の前に棹をさしませう。

狸。あすこは深いだらう。

兎。大丈夫棹はとゞきますよ。

狸。それなら早くあすこに行かう。

兎。いゝ氣持ですね。（二人櫂で舟をこぐ）

狸。いゝ氣持だ。久しぶりに舟にのるよ。

兎。私も隨分久しぶりですよ。

狸。爺にとつつかまつた時は、こんなことをしてあそべるとは思へなかつた。毎日々々せまつくるしい小屋にゐて一生あのなかでくらさなければならないのかと思つた。

兎。それならこゝに棹をさして御馳走を食ひませう。

狸。それならさうするかな。（棹をさし舟をむすびつける）

狸。さあ、ねながら酒をのむか。

兎。（盃を出し）私にも一杯下さい。

狸。お前さんの舟には酒はないのか。起きるのか面倒だからあとにしたらいゝだらう。この酒は中々うまい酒だ。（舟はそろ／＼とけ出す）

兎。狸さん、へんなことをきくが、お前さんは婆さんを殺したことを後悔したことはありませんか。

狸。ないね。あんな惡い婆はくたばらす方が世間の爲になるからね。

兎。お前さんは人を殺すことを何とも思つてゐませんね。

狸。さうさ殺すものは殺しどくだよ。

兎。殺されるものは。

狸。自業自得だよ。

兎。婆さんを殺さなかつたらお前さんは殺されないでもすんだらうがね。

狸。婆をころしたつて、俺は殺されはしないよ。俺は婆のやうに馬鹿ぢやないから、殺されるやうなへまはしないよ。

兎。お前さんは隨分利口だね。

狸。さうさ。利口でなけりやあ、この世は渡れないよ。

兎。お前さんはもつとこゝにあそんでゐるか。

狸。あゝ、もう動くのがいやだ。この酒はうまい酒だな。お前にやらうと思つたが、もうやるのが惜しくなつたよ。（兎、舟の棹をぬく）

狸。お前さんは何處かへゆくのか。

兎。一寸もう少し漕いでくるよ。

狸。それはいゝだらう。お前さんが歸つて來たら魚の尻尾でも御馳走して上げよう。あゝい

い氣持だ。
（舟は徐々とける。兎は狸の舟より自分の舟を少しはなす）
兎。狸！
狸。（ねながら）なんだ？ 兎。
兎。お前は馬鹿だね
狸。（冗談風に）何が馬鹿だ。
兎。お前は餘程、呑氣ものだね。
狸。あはゝゝ。この酒がのめないのがそんなに口惜しいのか。まあ水でものんでおけよ。
兎。狸、婆さんが、お前を迎に來なさつたよ。
狸。なにを云ふのだ。死んだ奴なんか、こはかない。
兎。お前はもうぢき死ぬのだぞ。
狸。お前よりはさきには死なないよ。どうせ死ぬことは死ぬだらうが。
兎。お前は今死ぬのだ。
狸。冗談はいゝ加減にしろよ。
（兎、はちまきをし、たすきがけになる。狸氣がつき、一寸おどろき）
狸。兎、何をそんなに怒つてゐるのだ。酒がほしいなら酒をやらう。（ねながら酒を出す）
兎。さあ、尋常に勝負しろ。
狸。何を云つてゐるのだ。
兎。さあ、婆さんの讐をとつてやるからさう思へ、
狸。あはゝゝ。冗談はよせよ。（間）お前は本氣で俺を殺さうと云ふのか。それはよしたがいゝ。さかさまにお前の方が殺されるぞ。
兎。まあさう思へる間思つてゐるがいゝだらう。俺は手を下さないでも、お前の命はもう長くはない。
爺さんの聲。（姿は見えず婆さんの聲色で）お前の舟を見ろ、お前の舟を見ろ。
狸。（びつくりして立ち上り）誰だ！ 今の聲は
爺さんの聲。お前の舟を見ろ、お前の舟を見ろ。
狸。何を云つてやがるのだ、婆。（舟底をふと見、あはて出す）大變だ。大變だ。許してください。許してください。私がわるう御座いました。私がわるう御座いました。（お辭儀する）
爺さんの聲。お前は殺される程のまぬけではないだらう。
狸。許して下さい。許して下さい。（舟が動きだす）兎さん、兎さん。助けてくれ。（舟のうちをかけ廻る。舟くつがへる）助けてくれ。助けてくれ。
兎　お婆さんを殺したことを後悔したか。
狸。（おぼれながら）助けて、助けて……
（兎、櫂をふり上げる。同時に爺さん柳の下に姿をあらはし、扇をひらいて）
爺。出かしたぞ、兎！

――幕――

（一七、六、九）

よろこびよ

よろこびよ。
よろこびよ。
とう／＼時が來た
よろこびよ。

喜びは

喜びよ、お前は何處からくる。
深い、深い底からくるね、お前は。
たしかにお前は、自然の子だね、
さもなければ人類の子だ、
お前は。
個人から生れるにしてはお前は深すぎる。

お目出たき人

高島平三郎先生に
この小冊子を
千の感謝を以て奉る。

一

一月二十九日の朝、丸善に行つていろ〳〵の本を捜した末、ムンチと云ふ人の書いた「文明と教育」と云ふ本を買つて丸善を出た。出て右に曲つて少し來て四つ角の處へ來た時、右に折れようか、眞直ぐ行かうかと思ひながら一寸右の道を見る。二三十間先に美しい華な着物を着た若い二人の女が立ちどまつて、誰か待つてゐるやうだつた。自分の足は右に向いた。その時自分はその女を藝者だらうと思つた。白粉を濃くぬつた圓い顏した、華な着物を着てゐる女を見ると自分は藝者にきめてしまふ。

二人とも美しくはなかつた。しかし醜い女でもなかつた。肉づきのいゝ一寸愛嬌のある顏をしてゐた。殊に一人の方は可愛い所があつた。

自分は二人のゐる處を過ぎる時に一寸何げなくそつちを見た。さうしてその時心のなかで云つた。

自分は女に餓ゑてゐる。

誠に自分は女に餓ゑてゐる。殘念ながら美しい女、若い女に餓ゑてゐる。七年前に自分の十九歲の時戀してゐた月子さんが故鄕に歸つた以後、若い美しい女と話した事すらない自分は、女に餓ゑてゐる。

自分は早足で堀にぶつかつて電車道について左に折れて電車にのらずに日比谷にゆき、日比谷公園をぬけて自家に向つた。

日比谷をぬける時、若い夫婦の樂しさうに話してゐるのにあつた。自分は心私かに彼等の幸福を祝するよりも羨ましく思つた。羨ましく思ふよりも呪つた。その氣持は貧者が富者に對する氣持と同じではないかと思つた。淋しい自分の心の調べの華なる調子で亂される時に、その亂すものを呪はないではゐられない。彼等は自分に自分の淋しさを面のあたりに知らせる。痛切に感じさせる。自分の失戀の舊傷をいためる。

自分は彼等を祝しようと思ふ、しかし面前に見る時やゝもすると呪ひたくなる。

自分は女に餓ゑてゐるのだ。

自分は鶴のことを考へながら自家に歸つた。

* * * *

鶴は自家の近所に住んでゐた美しい優しい可憐な女である。自分は鶴と話したことはない。

月子さんがまだ東京にゐた時分から自分は鶴を知つてゐた。その時分は勿論戀してはゐなかつたが可愛い子供だと思つてゐた。逢ふ度にいゝ感じがして何時でも逢つた暫らくは鶴のことを思つてゐた。しかしすぐ忘れてしまつてゐた。

處が月子さんが故鄕に歸つてから三年目失戀の苦がうすらぐと共に鶴が益々可憐に見え、可愛らしく見え、鶴に逢はない時は淋しくなつた。

自分はその時分から鶴と夫婦になりたく思ふやうになつた。鶴程自分の妻に向く人はないやうに思はれて來た。自分の個性をまげずに鶴とならば夫婦になれるやうに思はれて來た。かくて自分の憧れてゐる理想の妻として鶴は自分の目に映ずるやうになつた。

女に餓ゑてゐる自分はこゝに對象を得た、その後益々鶴を愛するやうになり、戀するやうになつた。さうして自分の妻になることが鶴にとつても幸福のやうに思へて來た。

自分が鶴と夫婦になりたいと思つた時に先づ心配したのは、近所の人に冷笑されることだつた。話の種にされることであつた。歩く度に後ろ指をさゝれることであつた。

しかし自分はそんなことを顧慮して自分と鶴の幸福を捨てるのは馬鹿氣てゐると思つた。意氣地のない話と思つた。自分は斷じて近所の人を恐れないで見せる。自分は近所の人、口さがなき車屋の女房、のらくらしてゐる書生、出入りの八百屋、いたづら小僧、さう云ふ人に後ろ指をさゝれたり、惡口云はれたり、嘲笑されたりすることを平然として甘受して見せようと思つた。

次ぎに自分は母を恐れた。母は世間を恐れる人だ、近所の物笑ひになることは母には耐へがたいことだ。しかし自分を愛する母は自分の決心一つでどうでもなると思つた。

母さへ味方にすれば世間を馬鹿にしてゐる父は承知するだらうと思つた。

かくて自分は鶴を妻にするために出來るだけ骨折らうと思つた。翌年のくれに母を承知させ、その翌年の春に父を承知させ、その夏、間に人をたてて鶴の自家に求婚してもらふことになつた。

自分は其處まで思つたより容易に事が運んだので、十が九までうまくゆくと思つてゐた。その内には自分の家の彼女の家よりもすべての點に於て優つてゐると云ふ自覺も手傳つてゐた。

さうして自分はうまくゆく曉を考へて、嬉しき夢と、甘き夢と、くすぐつたい夢を見てゐた。

初めて逢ふ時のこと、お互に感じてゐたことをうちあける時のこと、最初の接吻の時のこと……そんなことさへ空想することがあつた。友のする風評、近所の人の風評も想像して見た。父や母や兄や姉や姪に對する鶴の態度も想像して見た。すべての想像は華な、明るい、甘い、さうしてまばゆい氣まりのわるいものであつた。

間に立つた人は七月の下旬に鶴の家に行つて下さつた。さうして無愛想に――何しろまだ若いのですから、今からそんな話にのりたくありません――とことわられてしまつた。此方の名を云はなかつたのが、せめてものまうけものにして、自分はそのことがあつてからも二度目に鶴に逢つた時は、以前と同じ程度に圖々しく鶴の顏を見る事が出來た。

その年の秋、鶴の一家は自分の家の近所から、一里程はなれた處に引越してしまつた。引越された當座は何だか自分が求婚したのが氣がついて、不快に思つて引越して行つたやうな氣がして淋しかつた。又彼女に逢ふ機會の少ないのが淋しかつた。自分は氣まりのわるい思ひをして翌年の三月迄毎月一度ぐらゐ何氣なく彼女の學校の歸りに逢ひに行つた。逢へない時には毎週一度ぐらゐ逢ひに出かけたこともあつた。しかしそれ以上逢ひに行く程圖々しくはなれなかつた。

その三月に再び間に立つ人――その人は川路と云つた――に鶴の家に行つて戴いて、求婚して戴いた。今度はこつちの名を云つた。さうして結婚するのは何時まで待つてもいゝと云つた。自分は鶴を戀してゐた。さうして女に餓ゑてゐた自分は一日も早く鶴とせめて許嫁になりたかつた。その上にその春鶴は學校を卒業するやうに聞いてゐたから。

しかし鶴はその春、まだ學校を卒業しないのださうだ。さうして兄が結婚するまではさう云ふ話を聞くのさへいやだと云ふ先方の答へだつたと聞いた。その後一度、偶然に甲武電車で逢

つた。それは四月四日だつた。その後鶴には逢はない。

その後鶴の話はそのまゝになつてゐる。自分には望みがあるやうにもないやうにも思へる。

自分と鶴の関係はあるかなし以上のやうなものだ。

自分はまだ、所謂女を知らない。夢の中で女の裸を見ることがある。しかしその女は純粋の女ではなく中性である。

自分は今年二十六歳である。

自分は女に餓ゑてゐる。

* * * * *

自分はこの渇を鶴が十二分に癒してくれることを信じて疑はない。だから一年近く鶴に逢はないでも鶴を恋してゐる、逢はない為にか鶴は益々自分の理想の女に近づいてきた。

だから今の所、この話のきまるまでは何年たたうとも他の女と夫婦にならうとは思はない。

しかし自分は女に餓ゑてゐる。鶴以外の若い美しい女は可なり強く自分をひきつける。又年増の女でも、さう美しくない人でも或時には可なりの力を以て自分をひきつける。

自然は男と女をつくつた。互に惹きつけるやうにつくつた。之がために自分は淋しく思ふこともあり、苦しく思ふこともある。しかし自分は自然が男と女をつくつたことを感謝する。互に強くひきつける力を感謝する。もし地上に女がなかつたら、愛し得るものがなかつたら、恋し得るものがなかつたら、さうして我利々々亡者許りが集つてゐたら、いかに淋しいであらう。

女によつて堕落する人もある。しかし女あつて生きられる人が何人あるか知れない。女あつて生れた甲斐を知つた人が何人あるか知れない。女そのものはつまらぬものかも知れない。（男の如く、否それ以上に。）しかし男と女の間には何かある。

誠に女は男にとつて「永遠の偶像」である。

「アダムは、イヴによつて楽園から逐ひ出されたかも知れない。しかし一人で楽園に居るよりはイヴと共に楽園を逐ひ出された方がアダムにとつて幸福だつたかも知れない。」

女そのものは知らない、しかし女の男に与へる力は知つてゐる。女そのものは力のないものかも知れない。しかし女の男に与へる力は強い。

所謂女を知らないせゐか、自分は理想の女を崇拝する。その肉と心を崇拝する。さうしてその理想的の女として自分の知れる範囲に於て鶴は第一の人である。

鶴に幸あれ！

しかし自分はいくら女に餓ゑてゐるからと云つて、いくら鶴を恋してゐるからと云つて、自分の仕事をすててまで鶴を得ようとは思はない。

自分は鶴以上に自我を愛してゐる。いくら淋しくとも自我を犠牲にしてまで鶴を得ようとは思はない。一度の飯を二度にへらしても、如何なる陋屋に住まうとも、鶴と夫婦になりたい。しかし自我を犠牲にしてまで鶴と一緒にならうとは思はない。

女に餓ゑて女の力を知り、女の力を知つて、自我の力を自分は知ることが出来た。

しかしあの柔かき興味ある身体、優しき心、なまめかしき香、人の心をとかす心。あゝ女と舞踏がしたい、全身全心を以て。いけない前に春が来てくれないと困る。

自分に自我を発展させる為にも鶴を要求するものである。

二

自宅に帰るとまもなく昼飯だつた。

昼飯を一緒に食ふのは母と自分と今年四つに

なつた姪とである。父は毎日會社に出てゐる、兄と義姉は會社の用で外國に行つてゐる。姪は祖母ちやん／＼で一日くらしてゐる。母は春ちやん／＼（姪の名で一日くらしてゐる。父が歸れば父の用があるが、父も孫で夢中だ。

自分も春ちやんが好きだが、春ちやんも自分のことを叔父さん／＼と云つて懷くが、とても春ちやんで夢中になることは出來ない。自家で自分だけが愛するものなしに生きてゐるのである。

晝飯の時春ちやんで賑かだ。何度母や自分は笑つたか知れない。實際見てゐると可愛い。我儘云つてじれる時や、泣く時は五月蠅いが機嫌のいゝ時は可愛い。しかし笑ふ時も母程夢中にはなれない。他人の子供も可愛いが、姪の方が遙かに可愛い。しかし自分の子供はもつと可愛いだらう。

自分は春ちやんを可愛く思ふが、思ひやうがあつさりしてゐる。さうして時々、母殊に父が夢中になつてゐると淡い反感を起す。しかしもし自分の子供だつたら、自分も夢中になるであらう。子供を通して自分の妻もよせて四人が夢中になるであらう。

晝飯は相變らずすぎた。自分は自分の室に歸つた。

飯食つてゐる時はまだよかつたが、室に歸つたら淋しい氣がした。久しく逢はない、鶴に逢ひたいなと思つた。しかし逢ふのがきまりがわるい。逢つたつて淋しい感じを抱くだけだ。結婚については彼女には少しも力のないことを自分は信じてゐる。

しかし逢ひたい、どうかはつてゐるか知らんと思ふ。

その時自分は今日は金曜日だと云ふ事に氣がついた。自分は中々の迷信家だ。人智を信じない自分は運命を信じたくなる。運命に賴り切れるほどには信じてゐないが可なり信じてゐる。從つて可なりの迷信家だ。打消しながら信じてゐる。少なくも氣にかゝる。

金曜日は西洋人が忌むと自分は聞いてゐる。それで二三年前から彼女に逢ひたい時でも金曜日だとなるべく逢ひに出かけないやうにしてゐる。しかしそんな迷信はわるいと思つて反つて出かけることもある。しかし一寸いゝ氣がしない。彼女が引越してからは逢ふのには一寸遠くに行かなければならない。從つて金曜日にわざわざ出かけるのはいやだ。しかしそれは迷信だ、迷信はよくないと思つて出かけた事もある。さう云ふ時は逢はないと反つていゝなと思ふことさへある。

まして一年近く逢はない鶴に逢ふのに、わざわざ金曜日に行くのはいやだなと思つた。しかし逢ひたい。

この時、折角今迄逢はなかつたのだから逢はない方が、甘くいつた時にも、まづくいつた時にもいゝと思つた。さうしてとう／＼逢ひにゆくのをやめた。

幸あれ！

自分は何か讀まうと思つてムンチの本をとつて見たがどうも讀む氣になれない。さうして淋しい氣がした。

自分はどうもたゞの空想家らしく思へていけない。何事も出來ず、これはと云ふ面白いこともせず、さうして天災で若死するやうな氣がする。これも空想だらうと思ふが、自分は雷か隕石にうたれて死ぬやうな氣がする。

さもなければ肺病になつて若死するかも知れない氣がする。どうも自分はなが生しないやうな氣がする。しかしさうかと思ふとなが生出來さうな氣もする、中々死にさうもないと思ふ。しかし天災、中でも雷と隕石があぶない。

自分は之からの人間だ、大器晩成の人間だ。

さう思はないではゐられない人間だ。それが今死んではたまらないと思ふ。しかしいくらたまらないでも死ぬ時が來れば死ぬ。したいことのない人はいゝ、したいことの多い自分は死ぬのがいやだ。

何しろ自分は戀も味ふことが出來ず、これはと云ふ仕事も出來ず、父たるの喜びも知らず、滅びてゆくやうな氣がしていけない。

自分はその淋しさをまぎらす爲に外に出た。

うつとしい曇つた天氣だつた。自分は色彩に乏しい陰氣な町を目的もなく淋しい陰氣な心持で歩いた。泣きたくつて泣けないやうな天氣は自分の心持に似てゐる。しかし歩いてゐる内に段々淋しくなつて涙ぐんで來た。かうなると自分の人格が一段と高くなつたやうな氣がする。さうして道ゆく人より自分の方が一段と偉いやうな氣がする。すべての人を憐み、すべての人に同情するやうな氣になる。

―なんの爲に貴男達は生きてゐるのですか。國の爲ですか、家の爲ですか、親のためですか、夫の爲ですか、子の爲ですか、自己の爲ですか。愛するものの爲ですか、愛するものを持つておいでですか―

自分はかう心に云つた。

三

翌三十日の祭日は土曜だつた。この日大久保の友の家で同窓會があつた。晝頃迄雨がしとしとと降つてゐたが午後一時頃自分が自家を出て大久保の友の處へ出かけた頃には殆んど傘もいらない程の小降りだつた。自分は傘をさしたり、つぼめたりして四谷まで歩いて甲武電車にのつた。

大久保には鶴が住んでゐる！　鶴の家は何處だか知らないが、友の家と百番地ぐらゐはなれた處に住んでゐる。

自分は滅多に大久保の友を訪はないが、鶴が大久保に引越してから大久保の友の處へゆく時は鶴のことを思はない時はない、電車で一緒になりはしないかと思つて見たり、途中で逢ひはしないかと思つて見たりする。

可なり待つて電車に乘つたが鶴らしい人はゐなかつた。大久保でおりて友の處へゆく途中の路のわるいのにおどろいた。可なり齒の高い高下駄の齒が沒してしまふ處さへあつた。それから見れば市中の道はわるいと云つても知れたものである。

自分はこのわるい道を鶴が毎日學校へ行く時に通つてゐるのだと思つた。この時自分は一昨年のくれに鶴にあつた時のことを思ひ出した。

―走けて御覽なさい―

と口の中で云つて、微笑んだ。

一昨年のくれに自分が鶴に逢ひたくつて逢ひに出かけた時だつた、自分は鶴の學校の前までゆくのはいやだから大概時間を計つて途中まで逢ひに行つて或處までゆくと右に曲つてしまふ。その時その曲り角近く來たが鶴の姿は見えなかつた。三十間程でまがる處に來た時、曲り角で四人許りの女學生が立ちどまつて後ろを見てゐた。

すると向うから一生懸命で走けてくる人があつた。

鶴ぢやないかと自分は思つた。かう思ふのは珍らしいことではない。同じ年恰好の女學生、或は女の人の遠くから來るのを見る時、或は後姿を見る時、いつでも、どんな處でも鶴ぢやないかと思ふ。段々さう思つて見てゐるとさう見える。さうして十が十までちがふ。そのくせこりずにさう思ふ。

しかしこの時、向うから走けて來たのは鶴だつた。高下駄をはいて夢中で走けて來た。その日は天氣がよかつた、さうして道もよかつた、

立ちどまつてゐる人は皆駒下駄だつた。

鶴は眞赤な顏して走けて來てとまつた、さうして四人におじぎして、

「お待ちどほさま」と云つた。この時、自分は鶴と三間とははなれて居なかつた。自分は一寸鶴の方を見て右に折れようとした。

すると鶴が何か云つた。すると皆、

「あまりお走けになるからよ」と云ふのが聞えた。その時自分はもうふり向いて居た。その時鶴は高下駄の歯を一つおとしたのをひろはうとしてゐた。

その時自分は鶴と顏を見合せたと思つた。自分は夢中で三十間許り歩いた。さうしてふり向いた時にはもう誰もゐなかつた。

この時大久保は道のわるい處だと思つた。それが今になつて思ひあたつたのだ。

走けて御覽なさいと云つたのは、鶴が自分の妻になつて一緒に高下駄をはいて歩く時に揶揄ふ言葉なのだ。永遠に揶揄ひ得る時は來ないかも知れない。しかし空想ではいくらでも揶揄へる。

自分が友の處へ行つた時は既に四五人の人が來てゐた。

その内に段々來て十五人程になつた。中には三四年ぶりに逢つた人もあつた。もう陸軍中尉で陸軍大學に入つてゐる人もある。學士になつてゐる人もある。妻をもつてゐる人、子供を持つてゐる人もある。

しかし皆集れば六七年前の昔に歸る。皆は六七年前の友である。六七年前の心になり得ない人は互に面白く夢中になることは出來ない。

自分が友の處へ行つたのは一時半頃だつた。それから十時半過までいろ／＼のことをして面白く遊んだ。遊んでゐる時には皆六七年前に歸つた。しかし雜談のさいには齢は爭はれないものだ。

もう五六人集つて、藝者の話にしきりと興味を持つて話してゐるかたまりもあつた。その内には今迄そんな話をすることの大嫌ひな人まで入つてゐた。彼等も女に餓ゑてゐるのだなと思つた。しかし圖々しく馬鹿に興味を持つてゐることを顏に現はして話をしてゐるのが不愉快であつた。自分はそんな話をぬすみ聞きするのが不快であつた。しかし時々聞えることを聞えなくすることは出來なかつた。誰とかが藝者に惚れられたとか、惚れたとか、デパートメントストアとか云ふ言葉がちら／＼と耳に入つた。

自分にかう云ふ話を聞いてはいくら女に餓ゑても藝者遊びは斷じてしないでよさうと思ふ。さうして美しい女と夜をたのしむ人を羨ましいとは思へなかつた。

この前の同窓會の時にも誰が細君をもらつたとか、今に誰かもらふとか、豫約者だとか、豫約濟だとか云ふ話に花がさいた。今日は誰が父さんになつたとか、冷笑的に云つてゐる人があつた。

道學者の自分にはかう云ふ性の問題を戯談にされるのは不快でいけない、嚴粛な問題を賑かにする爲につかはれては困る。

さうして自分の女に對する考へ、結婚にたいする考へと人々の考への間に非常に違ひがあるやうに思へて仕方がない。夢中で遊んでゐる時はいゝが、雜談の時、皆の口から出る言葉は自分に今後會へくるなと宣言してゐるやうにさへ思へることがあつた。

彼等はロダンの接吻を見て氣味のわるい笑ひ方をする男にちがひない。

しかし大體から云ふと今日の同窓會は大成功だつた。他の同窓會のやうに醉はらふ人は一人もゐない、顏をほんのりと赤くした人さへゐない。彼等のやうな興味の人間に醉はらはれてはたまらない。

十時過に皆、聲をからして、笑ひすぎて、食ひすぎて、運動しすぎて歸路についた。皆面白かつたと云つた。こんな子供らしい樂しみは外では味へないと云つた。

電車で四谷までくる間は連があつた。それからわかれて獨り歸つた。雨はもう少しも降つてゐないが、あたりに「もや」がかゝつてゐて、空には雲がかさなつてゐた。その雲がいやにどす黑くつてふちの灰色とでなほすごく見える。雲の足は早く、十七夜の月が時々すごく顏を出す。

自分は寢靜まつた處々瓦斯燈のついてゐる町の内をこんなことを考へて歸つた。

自分がもし鶴と結婚が出來たら、同窓會に行つたら、きつと嘲笑する人があるだらう。自分は嘲笑に報いるのに眞面目な怒を以てするから自分を揶揄ふことは眞の意味に於て自分と喧嘩することであるから、誰も自分には嘲笑をしない。隨分されてもいゝことがあるやうな氣がするがされない。

しかし鶴と結婚が出來れば隨分いゝ話のたねになるから、さう云ふ話に馬鹿に興味をもつ人はつい自分を揶揄ふかもしれない。

その時自分はかう答へる。

「え、見初めて結婚したのです。殘念ながら貴の戀を幾分か知つた僕には貴君のやうに多くの女に興味を持つことは出來ません。何でもござれとはゆきません」

かう云つて自分は苦蟲をつぶしたやうな顏をするだらう。さうして座はそれが爲に白けるであらう。しかし自分にはまださう云ふ時に超越することは出來ない。

このことに超越することが出來れば自分はもう道學者ぢやない、教育家でもない。さうしてもしその時皆が默つてゐたら自分は話頭をかへるであらう。しかしなほ自分を嘲笑する人があつたら、自分は默つて歸るにちがひないと思つた。かう思つた時自分は微笑んだ。

十一時半頃自家に歸つて、すぐつめたい寢床に入つた。

四

二月一日の晩に中野の友が來た。

この人は自分の今の戀を知つてゐる。今大學の文科に通つてゐて、自分と學習院の時同窓だつた人だ。三十日の同窓會にも來て居た

いろ／＼話をしたが、自分に忘れられない印象を與へた言葉は、

「美しい女の人で電車にのつて學校に通つてゐる人はすぐ評判になるらしいね」と云ふ言葉であつた。自分は、「さうだらう。皆美しい女に餓ゑてゐるからね」と云つた。

さうして鶴も評判されてゐるだらうと思つた。鶴は大久保から電車で學校に通つてゐる。

友は評判されてゐる二三の女について人から聞いたことを話した。

自分はその女を知らない。だから評判されても別に何とも思はない。しかし鶴が評判されては困る。女を玩弄物のやうに思つてゐる人々の口の端にのぼるのはいやだ。鶴は華美な女ではない。さうして粗末な着物を無造作に着て居る。（少なくも去年迄は）一寸人目にはつかない女だ。しかし美しい。なんと云つても、どんな風しても美しい。さうして可憐だ。男をひきつける所がある。マリアのやうな顏の形。ヸーナスのやうな目。

餓ゑたる男の目をのがれることの出來ない女である。鶴はもう少數な人には評判されてゐるにちがひないと思ふ。

このことは神聖なるものを穢されたやうな氣がする。

鶴を戀し得る資格のある人は自分一人でありたい。鶴の個性はたゞ自分の個性とのみ夫婦に

なり得るやうに自分は五年前からどうしてか迷信してゐるのだ。されば自然は自分をして鶴を話することもなくして強く戀し得るやうにさせたのだと思つてゐるのだ。

一鶴を戀してゐる人はゐないかも知れない。しかしさう考へ得る程には自分は目出度くない。

鶴を戀してゐる人があるとする。その人の性格が氣にかゝる。もし眞に鶴を戀して居る眞面目な人があるならば、自分が幸福の時にその人を不幸におとさなければならない。さうしてもし鶴がその人に心があつて、さうして親の命令で自分の處へくるならば鶴にも氣の毒である。自分は平然として鶴と結婚することは出來ない。

自分は自分の快樂の爲に他人を不幸にしようとは思はない。自分の戀の爲に他人の戀を犧牲にしたくはない。まして自分の戀してゐる女の不幸を喜ばない。鶴が自分を愛してゐてくれてると思へばこそ、自分の處へくるのが鶴の爲になると思へばこそ、自分は父や母に無理に承知させてまで求婚したのだ。しかしもし自分の處へ來るのを喜ばず、他の人の處――その人は自分より遙かに有望な人で立派な人で身體の丈夫な人であるとする――へ嫁きたく思つてゐるならば自分の求婚は考へものである。

自分から求婚されなかつたら、もつと幸福だつたらうと思ひながら鶴が自分の處へ來ては困る。

自分は自分の處へ來ることを一番幸福だと感じてくれる人でなければ、此方からお斷りしたい。自分は生れつきの道學者である。

さうして自分は極端の個人主義者である。

自分を他人の爲に少しでも犧牲にすることを喜ばない自分は、他人を自分の爲に少しでも犧牲にすることを恥とする。

ましてや、愛する故を以て愛するものの自由を束縛し意志を束縛するものを心から憎む自分は、極端にまで自分の爲に戀人を不幸にさせたくない。

しかし自分は鶴が他の男を戀してゐると云ふことを知らないのだ。自分を戀してゐてくれると云ふことも大なる疑問であるが、それ以上に鶴が他の男を戀してゐると云ふことは自分にとつて疑問である。

さうして自惚のつよい自分にとつて自分以上の人格者が鶴を戀してゐると云ふことは大なる疑問である。

こゝで問題は裏返しになる。もしかしたら自分が押しつよく求婚しないために彼女は他の外面的には遙かに自分よりよき人の處へ嫁さないとも限らない。さうしてそれが爲に自分の處へ來た程生の快樂と難有味を知らずに死ぬかも知れない。

から思ふと自分は鶴の爲に戰ふ時が來たやうな氣さへする。

しかし鶴とは一年近く逢はないのだ。自分は鶴と話したことはないのだ。自分はたゞ鶴の心と自分の心とはもう三四年前から他人ではないと云ふことを信じてゐる。しかし勝手に信じてゐるのだ。二三年前からマーテルリンクを愛讀するやうになつてからなほさう云ふやうに思へるやうになつた。

口ではうそがつける。耳にはうそがつける。しかし眞心はうそをつかない。眞心にはうそはつけない。自分はさう信じてゐる。しかし疑問が入る隙間もない程には信じてゐない。

から云ふことを自分は中野の友と外の話をしながら、沈默するとはきれ〲に思つた。

さうして中野の友が十一時近くに電車がなくなるといけないからと云つて歸つたあと、すぐ自分は自分に多大の同情をよせてくださつて、鶴と自分を夫婦にする爲に奔走してくださつ

た、さうして之からも一生懸命に奔走しようと云つて下さつた川路氏に手紙をかいた。

手紙の前置を書いてゐる内に自分は自分の鶴に對する態度の傲慢なのに氣がついた。

自分は女に餓ゑてゐるので今迄はなるべく早く夫婦になれなければせめて許嫁になりたく思つてゐた。しかし考へて見れば鶴はまだやつと十八歳になつた許りである。――自分は實は三四年前にもう鶴は十八ぐらゐにはなつてゐると思つてゐた――さうして兄はあるが一人娘である。兩親にとつて可愛い娘を若い内から手ばなして性質もわからない男に一生をたくさせるのは不安であらう。この頃は二十二三でいゝ處へ嫁く人が多い。その方が多い位だ。自分は自惚れてゐるから、自分をいゝ人だと思つてゐるが、鶴の兩親や兄は――兄は自分を知つてゐるわけだ――自分をのらくらした、だらしのない男としか思ふまい。女に見初めて夢中になつてゐる不快な、男らしくない男としか思へまい。さうして望みのない顔色のよくない男としか思へまい。さう思はれるのが當然だと思はないわけにはゆかない。

たゞ自分の父が一寸知れてゐるのと、兄が有望なのと、食ふことには困らない位がとりえなのだ。

やる處が他にないときまるまでは一寸くれる氣にはなれさうもないやうに思ふ。だから少なくももう二三年は自分の話にはのつてくれまい。さうしてその間にいゝ處があつたらやるにちがひない。

見初めて求婚する人にも自分より資格のいゝ人があるだらう。見初めるやうな馬鹿な眞似をしない有望な人で貰つてくれる人もあるにちがひない。

鶴はよし自分を戀してゐてもそれは兩親や兄の命に背く程のものとはどうしても思へない。

自分はかう思つたらなんだか淋しい氣がした。さうして自分は手紙に次のやうなことをかいた。

「…私は勝手に戀したのです、勝手にもらひたがつたのです。私は之がためにいろ／＼の人に迷惑をかけました。殊にお忙がしい貴君に大變御迷惑をかけました。

私は事がこゝまで運んだことを以てすでに望外の幸と思つてをります。最も誤解され易い話が誰にも誤解されずにこゝまで運んだことを望外の幸と思つてをります。

ですからこの話が駄目になりましても、理解して下さつた、同情して下さつた、さうして奔走して下さつた、方々に一生感謝いたす心算でをります。さうして感謝のしるしとしてよし今度のことが駄目になりましても少しもまゐらず、益々自分の進む方に進んで見ます心算です。

どうかこのことを信じて下さい。信じて下さることは力です。

しかし私は例のことに就て依然として元のやうな意志を持つてをります。まだ思ひ切りたく御座いません。一縷の望みのある間、私は思ひ切りのわるい人間で御座います。私はもう一度貴君をわづらはしたく思ひます。

のりかけた舟と御あきらめを願ひます。

それはもう一度先方へ行つて戴いて、此方と結婚の話にのれる時がくるまでは此方はまちますから、話にのれる時が來たらどうぞ此方にお知らせ下さい、又もし緣談がおありになつたら御面倒ですがそのことをなるべく早くお知らせ下さい、と云ふことをうまく云つて戴きたいので

す。

私は先方が斷る氣でゐるのに何度も何度も頭をさげて求婚するのは馬鹿氣てゐると思ひます。先方から進んで上げませう、來ませう、と云ふ氣がないのに此方から頭をさげて是非もらひたいとは思ひませぬ。

私は自分が勝手に戀し、勝手にもらひたがることによつて例の人を不幸にしたくはありません。私は戀人の喜ぶことこそ望みますが、戀人の悲しむことを望みませぬ。

私は例の人の誰かと結婚する迄は獨身でゐようと、兩親が承知しない前からきめてをりました。私は何年でも待つことは平氣です。平氣でなくとも勝手に戀した罰として平氣でおめにかけます。

どうか私の意のある所をおふくみ下され て、私に遠慮なく、例の人の人妻になつた時先方から知らせてもらふやうにおたのみして戴きたいのです。

誠に御面倒なことをお願ひいたしますが、かうやつてこの話を一先づかたづけて戴かないと何だか氣になります。

からして戴けば安心して運命に任せることが出來、安心して自分の道をすゝむことが出來ると思ひます。何時も我儘なことをながつたらしく書きます。

御許し下さい」

書きあげて時計を見たら二時少し前だつた。すぐ寢床に入つた。何だか興奮して中々ねむれなかつた、さうしてやゝもすると自分を憐れむ涙がこぼれる。

自分は男だ！　自分は勇士だ！　自分の仕事は大きい。明日から驚く程勉強家にならうと自分は自分を鼓舞した。その内にねてしまつた。

五

翌朝七時頃に起きた。飯食ふ前に昨夜書いた手紙を自分で投函しに出かけた。さうして投函する時、幸あれよと心に祈つた。

自分は祈の餘りきゝめのあるものとは思はない。しかし祈ると祈らない時よりは幾分かの安心を得られる。だから何か心配事や、からあつてほしいと思ふ時は一寸心で祈る癖がある。

今日は久々で天氣がいゝ。少し空氣の冷たいのも氣持がいゝ。自分は今日から餘り鶴のことを考へずに勉強しようと思つた。

どう考へても鶴のことはどうもならない。そんなことを考へて頭をつからせ、時間を空費するのは馬鹿氣てゐると思ふ。

自分はもう鶴に對して出來るだけのことをした。之で鶴が人妻にならうとも思ひおくことはないはずだ。かうすればよかつたと未練を殘すこともない。

さう考へはしたが鶴はどうしてゐるだらう、うまく行つてほしいとすぐ思ふ。さう思ふと近所の人の嘲笑を思ふ。

「鶴、己におたより。世間の人がかれこれ云へば二人が益々愛しあふ許りだね」と心に云つた。

八時半に朝飯だつた。春ちやんは相變らず元氣だつた。三つ四つの子供は身體の工合がよくつて愛してくれる人のわきにゐれば何時でも嬉しくつてたまらないやうにはしやいでゐるものだ。自分もそれに見惚れてゐると自然に微笑まれる。さぞ父や母は可愛くつてたまらないだらうと思つて二人の顏を見る。

實際二人は崩れさうな顏をして笑つてゐる。

この時自分は不意に鶴のこんなに喜ぶ顏を見たいと思つた。自分はすぐ思ひを轉じた。しかしもう自分は微笑むことが出來なかつた。自分は眞面目な顏して父や母の夢中で笑ふ時も、お

つきあひに一寸笑ひ顔を見せるだけで急いで飯を食つた。さうして淋しい心を抱いて自分の室に入つた。

自分はムンチの本を開いて讀みかけた。しかしどうもおちついて讀んではゐられない。

一體自分は廣義の教育家にならうと思つてゐるのだ。さうして破壊された殿堂のかはりに新らしき殿堂をたてたく思つてゐる。自分は現代の人の頭で罵倒し、心臓でのぞんでゐるものを捜し出して人々に教へたいと思つてゐる。

自分はこの重荷の爲に絶えず心を勞してゐる。しかし自分は弱い人間である。さうして才能のない人間である。

天に憧れながらたよるものなく地面をのたくつてゐる蔦のやうな人間である。頼れるものにぶつかれば何でも頼らうとする人間である。何時か今にたよるものを得るだらうと思つてゐる。この點で自分は樂天家である。さうして先づ鶴にたよりたく思つた。しかしそれは不可能らしい。

自分はこゝで云ひたくないことを云はなければならないと思ふ。自然の隱密なれと命ずることを告白しなければならないと思ふ。それは淫慾についてである。自分はこの慾でも持つてゐるはずのこの慾を自然が人をして恥かしいもののやうに感じさせる力を崇拜してゐる。この恥かしさがなくなる時男女の關係が如何に亂れるだらうかと思ふ時に自分はこの恥かしさを尊敬する。さうして自分はこの恥かしさを通して自然がこの問題をなるべく秘密にせよと命じてゐるやうに思ふ。しかし自分は謹んでこの命に背かうと思ふ。

自分は誰かと結婚しない間は淫慾に誘惑される時手淫に逃れて行かうと思つてゐる。自分は手淫もせず、女も知らずに立派に生活してゐる人を知つてゐる。又さう云ふ生活の出來得ることを信じてゐる。自分は人間の意志の力、理性の力を知つてゐる。しかし自分は可なり強いストラッグルの結果手淫を正當なものだと信ずるに至つた。後でメチニコフもさう云ふ考へを持つてゐると云ふことを友から聞いて力を得た。しかしこのことが後ろぐらい。自分の後ろぐらいことの殆んど唯一のものだ。豪さうなことを考へ、又云ふ時、自分の心の内に、「汝、手淫する者よ」と云ふ聲が聞える。自分はこの後ろぐらい所をなくす爲にも實は早く鶴と結婚したく思つてゐるのだ。

自分はムンテの本をおいて、ぢつとしてゐられないので神田に散歩がてらに行かうと出かけたら、途中で小石川の友に逢つた。自分の處に來ようと思つてゐる所だと云ふので一緒に自家に歸つた。

小石川の友は自分と一番親しい友で氣が合つてゐる。しかし趣味がちがふ、彼は高等商業學校を三年前に卒業して今三井に出てゐる。彼は何處までも實際家で空想を空な、力のないものと思つてゐる。さうして道徳なども虚しきものと思つてゐる。少なくも利害をはなれた道徳はないと思つてゐる。道徳は強者のつくつたもので弱者の荷はせられるものと思つてゐる。さうして弱い人を病人と同一に見てゐる。病人は罪がなくとも苦しむやうに弱者も罪がなくとも苦しむのが當然で、さう云ふ人のことを同情しても始まらないと云ふのが彼の説である。

彼と自分とはよく議論をする、しかしお互に云ふだけのことを云ふと議論したことをまるで忘れてしまふ。

要するに思想や興味では同じでないが、それ以外の點で相和してゆく仲のいゝ友である。しかしこの頃は時々にきり逢はない。

その日も何か話してゐる内に道徳についての議論になつた。

友は冷笑するやうに、
「今になつてもまだ、道樂はわるいものと思つてゐるのかい。開けないね」と云つた。
「道樂する人に自分は同情するが」
「羨ましくも思ふのだらう」
「さうかも知れない。しかし同情もするよ。より處のない女に餓ゑてゐる男が、慰みの手段として、快樂を得る手段として、女郎買ひに行つたり、藝者買ひに行つたりするのは無理もないさ。しかしいゝこととは思へないね。第一あゝ云ふ不自然なもの、金によつて操の切り賣する女があるので、女の價値がわからなくなるし、男女交際の必要はなくなるし、女の興味品性は下劣になるし、何しろ道樂者には都合がいゝだらうが、女にとつてはたまらないと思ふね」
「さすがに道學者だけあつて女の聲色を使ふね。しかし健全な男には健全な男の權利があるさ。道樂するものには道樂する權利があるさ。健全な人は病人の眞似をしないで飛びまはる權利がある。道學者の君は道樂してはいけないだらう。しかし健全な人が自然の要求に從つて道樂するのを責める權利はないと思ふね」
「自然の要求に强ひられて道樂するのだらうか。しかしそれはいゝとして、道樂そのものの害を君は知らないのだらう」
「知つてゐるさ、しかしさう害はないよ。世の中は道學者の思ふ通りにはゆかない。道樂者が榮え、放蕩しないものが神經衰弱になることなぞはよくあることだ。勿論道樂もしやうによつては滅亡するさ。しかしさう云ふ奴は滅亡していゝ奴なのだ。滅亡する程夢中になれたことを感謝して瞑すべき奴だ」
「僕の云ふ道樂の害はさう云ふ目に見える害を云ふのぢやない。もつと有益につかへるエネルギーや、時間や、金を空費することを云ふのだ。趣味のすさむことを云ふのだ。遊べない時の苦痛を云ふのだ。藝者を戀する時の不安を云ふのだ。家庭の平和のやぶれることを云ふのだ」
「なあに君、放蕩者はもつと甘く放蕩するよ。たゞ酒のんだり、女とさわいだり、すればいゝのだからね。個人を相手にするのぢやなくつて快樂を相手にするのさ」
「その快樂に夢中になるのだらう」
「夢中になることもあるだらうが、さう心配なことはないさ。たゞ愉快を得さへすればいゝのだ。瞬間的に愉快を得ればいゝのさ、何にも損せずに愉快な氣持だけを味ふのさ」
「しかし細君が可哀さうだね」
「細君を持たなければいゝさ。しかしうまくやれば、細君に可哀さうなことはないよ。女は放蕩者の方を君のやうな道學者より歡迎するものさ。第一面白いもの。君のやうなさばけない男は女には嫌はれるにきまつてゐる。女は馬鹿だから自分を尊敬して愛してゐるやうな男は女女しい奴だと思つてしまふ。道樂しないやうな男はつぶしのきかない、偏屈な男ときめてしまふ。君が女に戀されようと思つたら、プラトニックな考へをすてなければいけない。何んでも露骨にゆくに限る。さうして氣に入るやうなことをどん／＼云へばいゝのだ。女はこの耳から入るものを信じるからね。女はよくうそつくくせに他人にうそつかれ易い動物だからね。先づ女の肉體を占領せよ、女の精神はその内にあり、と云ふのが女を得る祕訣さ。君のやうな人間は一生女から戀されることはないね。地球が太陽のまはりを廻つてゐるやうに戀人のまはりを廻つてゐるより仕方がないね」
「話が大變それたぢやないか」と自分は少し耳の痛いことがあつたから話をかへた。
友は默つて笑つた。さうして言葉をあらためて、
「例のことはどうなつたい」と聞いた。友は自分

の鶴を戀してゐることを知つてゐるのだ。

自分は昨夜、大久保の友の來て話したこと、昨夜の手紙のことを話した。

友は少しも笑はなかつた。さうして自分が話し終つた時に、

「うまくいくといゝね、うまくいけば君程幸福な人はない。君なんかは道樂をする資格のない人だ」と云つた。かう云はれると自分も、

「しかし僕だつて道樂をしたくないことはない。自分は女に餓ゑてゐる、華な快樂に憧れてゐると云ひたくなる」

「さうだらう。しかし面白いこと許りぢやないよ」と友は笑つた。

「さうだらうね。僕もそれが怖いのだ。さもなければ隣の人がゐなかつたら遊んでゐるかも知れない。さうしてひどいめに逢つたらう。今逢つてゐる時分かも知れない」

二人は笑つた。議論は何處かへ飛んでしまつた。

友は晝前に歸つた。

翌三日の朝、川路氏から返事が來た。貴者のお心はよくわかつてゐる、お父さまと御相談して全力を盡すからすべてのことを任せて戴きたい、と云ふ意味のことが書いてあつた。

勉強しよう〳〵!

幸あれ!

六

自分は自分の目的に向はうとあくせくしつつ、鶴と夫婦になりたく思ひつゝ相變らずに日を送つてゐた。

一月十三日は鶴の誕生日である。自分は自分の誕生日の六月十一日をよく忘れることがあるが、鶴の誕生日は川路氏が學校で聞いてきて下さつた以後忘れたことはない。一月十三日は土曜日だつた。この日、用があるやうな顏をして十一時半頃に晝飯を食ひ、鶴に逢ひに出かけた。何だかかう胸がしめられるやうな、嬉しいやうな、恥かしいやうな、心配なやうな感じがする。

ダンテもかう云ふ感じを持つたことがあるだらうと思ふと氣丈夫だ。しかし鶴をビアトリスに比較するのはいゝとして自分をダンテに比するのは少しひどすぎる。しかし自分が賤しいだけに自分は鶴と結婚が出來るかも知れない。こんなことを歩きながら考へた。

自分はお目出たいから鶴の話も大概はうまくゆくと思つてゐる。さうしてその時自分に一年ぐらゐ逢はなかつた時の鶴の心、自分に今日逢つた時の鶴の心を聞くのを樂しみにしてゐた。又その時鶴が自分に今日逢つたことを忘れてゐようものなら可笑しなものだとも思つた。

その内に鶴に逢ふ機會のあり得る道に達した。鶴の學校の生徒のぞろ〳〵とつれだつてやつてくるのに逢つた。道は一直線ではない。一町許り先きで少し右に曲つてゐる。其處まできり見えない。そこ迄には鶴らしい人は見えない。しかしいつ鶴がその角から出てくるか知れない。自分は鶴がどんなになつてゐるだらう、今日はきつと逢ふだらうと思ひながら目に注意をあつめて、向うからくる女學生を一々注意しながら歩いて行つた。折れてゐる處にくると二町程さきが見える。其處を折れると見えるだらうと思つた。

自分は胸をどらせながら其處を過ぎた。女學生が二十人許り、二三人づつ一かたまりになつて、話しながらくる。最後にくる四人づれの内に鶴はゐはしないかと思つた。自分が今迄鶴に逢つた時は大概三四人と連れだつてゐた。

しかし近づくに從つてちがつたことがわかつた。ちがふと落膽する、しかし安心もする。角からは間をおいて女學生のかたまりが現はれる。話しながら此方にひきつけられるやうに歩

いてくる。しかし段々數はへつてくる。さうしてその内に鶴は居なかつた。とう／＼角に來た。其處で道が二つにわかれてゐる。鶴に途中で逢へば自分はきつと右にまがる。逢はない時でも左の道を一寸見て鶴が見えても見えないでも右にまがる。左にゆくと鶴の學校の前を通るのだ、それがなんだかこはいのだ。この時も左を一寸見て、右に折れようと思つた。しかし左の道を見て鶴が見えなかつた時、思ひ切つて左に折れた。

　自分はなるべくゆつくり歩いた。しかしもう學校の門から出てくる人は殆んどなかつた。三人許りあつたが、その内二人は自分の反對の方へ行つた。此方に來たのも鶴に少しも似てゐない人だつた。

　自分はその内に學校の前を通つた。通り過ぎる時一寸學校の内を見た。誰も居ない。自分は淋しい氣がした。鶴は病氣か知らんと思つた。それ以上に鶴が自分に逢ふのをいやがつて道を變へてゐるのではないかと思つた。そんなわけはないと思ふがなんだかさう云ふ風に思へるのだ。

　自分は最も近い路を選んで歸路についた。今度は淋しい、なさけない、さうして腹立しいやうな氣がした。もし鶴が自分の妻になつたら、明治四十〇年、鶴の十七回目の誕生日に自分に逢はなかつた故をもつて自分から小言を頂戴するにちがひないと思つた。

　鶴はその時何と答へるであらう。

　自分は自家に歸つても何だかなさけないやうな腹立しい氣がして仕方がなかつた。自分は室に入つてルードキヒ・フォン・ホフマンの畫でも見て自分の氣分をなほさうと思つた。ホフマンの本を捜したが見えない。自分は益々腹が立つた。呼鈴を強く押した。

　書生が來た。自分は、

「こゝに置いておいたかう云ふ本を見なかつたか」と云つて同じシリーズの本を見せて机のわきを指した。

　書生は「存じませんが」と云つて捜し出したが中々見つからない。自分は益々腹が立つた。

「本をさがす程癪にさはることはない。之から一切本はなぶらないで置いておくれ」と云つた。書生は「はい」と云つて捜して居る。自分はかう云つて見てゐたが、見て居ても仕方がないと思つたので、本を手あたり次第にとつては外の處へ投げるやうに置いた。自分が大變怒つてゐるので書生はあわてゝゐる。自分は怒ることは滅多にないのだ。自分は手あたり次第に本をのけてゐたら、捜してゐる本がとんでもない處から出て來た。考へて見ると自分の置いた處にあるのだ。

「あつたよ」と自分は云つた。書生は安心したやうに本をかたづけだした。「かたづけなくつていゝよ」と自分は云つた。さうして書生が去る時、無愛想に「御苦勞さん」と云つた。

　書生が居なくなると自分の八つあたりに罪のない書生に怒つたのが腹が立つた。この頃の自分の怒りつぽくなつたのに腹が立つた。

　女に餓ゑてゐるので心が荒んだのだと思つた。さうして自分の人格の低いに腹が立つた。しかし自分の心は荒だつてゐる。自分はホフマンの本を開けて見たが、ホフマンの感じのいゝ清い靜かな美しい繪も自分の心を慰めるわけにゆかなかつた。自分はホフマンの本を閉ぢてクリンゲルの繪を見た。グライナーの繪を見た。その力強い繪は自分の荒だつてゐる心をいゝ方に導いた。自分は全身に力を入れて室の中を歩いた。

　鶴が自分の妻にならなくとも、戀の味ひを味ふことが出來なくとも、自分は自分の心を荒まさずに見せる。自分はすべてのことに感謝しな

ければならない。

勇士々々！　自分に勇士だ！

から心に叫んだ。さうしてやゝともすると女々しい感じが心に流れこむのをふせいだ。

七

二月十五日の晩に自分は母から母方の叔父の病氣は矢張り癌だと云ふ事を聞いた。叔父は元來は人のいゝ人だつたが頑固なことの好きな奇行家で公卿華族で伯爵だつた。世の中を馬鹿にしたやうな所が父と氣があつて二人は仲がよかつた。

叔父の奇行は隨分ある。自分は未だに夏休に避暑に三浦三崎へ自家の人と行つてゐた時に、叔父がきて素裸で歩きまはつてゐたことを覺えてゐる。或日の朝當時十一二の自分は叔父と一緒に朝飯前に漁師の親方の處へ行つたことがある。その時叔父は素裸で褌さへしてゐなかつた。さうして裸と云ふことを意識してゐないやうに平氣で歩いてゐた。顏知つてゐる人にあふとあたりまへに挨拶してゐた。親方の處へ行くと、今日は大禮服で來たと云つてすまして座敷に通つて平氣で話してゐた。ついて居た自分も平氣だつたのが今思ふと可笑しい。叔父は寒中でもよく水を浴び、海岸へ行くと海へ入つた。さうして人を馬鹿にしたやうなことを傍若無人に振舞つた。又酒をよく飲んだ。之等のことが豪傑崇拜時代の自分には豪く思はれた。

叔父が或時甲府に行つた。まだ甲府まで汽車の出來ない時の事で行く途中ある町の旅館に泊つた。待遇が面白くなかつたとかで宿帳に××とつけた。

甲府へ行つた所が伯爵樣でもてた。それから警察でどうしてか、ある町の宿帳に×××と書いてあつたのを見て待遇がわるかつたのだと大いに驚き、その待遇の惡かつたのを譴責した。叔父はそれを聞いて氣の毒だと云つて歸りに又その宿屋に泊つたさうである。

會社をたてゝ失敗したことや、支那の革命黨員と交際して探偵にあとつかれたことなどもあつたさうだ。

身體の馬鹿にいゝ人で自分は嘗て叔父の病氣にかゝつたことを知らない。太つては居なかつたが、かつちりした身體で、丈夫だと自分も許し、他人も許してゐた。それでよく遊びよく酒をのんだ。三年前にある醫者が叔父の顏を見て酒の毒のまはつてゐる顏しておいでだから用心しないといけませんと叔母に告げたことがあるさうだ。

その叔父が二三ケ月前から歩きまはつてはゐたが血色が大變わるくなつて段々痩せて來た。さすがの叔父も心配して醫者に見てもらつたが、中々わからなかつた。癌ぢやないかと云ふ心配が叔父にも叔母にもあつた。僕達にもあつたが誰も公然とさう云つた人はなかつた。醫者はものがよく食べられるのと、通じのいゝのとでさうではないだらうと云つた。しかしどうも面白くはかどらない。血色は次第にわるくなつて耳などはまるで血の色がなくなつた。皆ひそかに心配してゐた。父や母はもしかしたら死病に叔父がとつつかれたのかも知れないと話しあつてゐた。

處が二月六日の晝叔父が赤十字病院に見てもらひに行つた所が、さすがに辛抱强い叔父ももう身體を動かすのが容易でないのでそのまゝ入院することになつた。便や血の檢査した結果、腎臟に癌が出來たのだらうと云ふことになつたのださうだ。

「癌になつてはたまりませんね」と母は父に云つた。父は「たまらんね」と考へこむやうに云つた。自分もたまらないなと思つた。叔父はまだ四十五六である。

十六日に母は何氣なく叔父を見舞つた。さうして歸つてきて、もしかしたら來月中もつまいと云つた。自分は十八日の朝蜜柑と林檎を持つて見舞に行つた。叔父はまだ癌と云ふことを知らない。

自分は青山行の電車に乘つて青山一丁目で赤羽橋行にのりかへた。天氣が馬鹿にいゝので可なり暖かかつた。もう春も近いなと自分は思つた。赤羽橋行にのつた時空いた席が一つあつた。自分は其處に腰かけた。さうして前に腰かけてゐる女をよく見た。三十許りの女でもう色のさめた女だ。目のまはりがどす黑くなつてゐる。なんだか荒んだ生活をして來た女のやうな氣がした。みなりは中以下でそろつて居ない。しかし顏は惡くはなかつた。殊に尻の下つた弓形の眉毛と目尻の上つた大きい目とがよかつた。かたく結んだ脣もよかつた。瓢簞なりの顏の形が少し氣になつたが、五六年前はさぞ美しかつたらうと思つた。自分は見てゐる内にその脣に自分の脣の引きつけられるのを覺えた。自分は接吻の甘さを夢で知つてゐる。しかしそれは溫和しい食ひしんぼた子供が他人の庭の甘さうな柹の實を見るぐらゐの程度だ。鶴が居なくとも結婚したいとは夢にも思はない、自分は叔父の死病にかゝつてゐるのを見舞ふために來たのだ。それなのにこんな呑氣なことを考へてゐた。赤十字病院下でおりて自分は急いで病院に行つた。

病院の廊下を歩きながら藥の香をかぎ、看護婦の白い姿を見ると病院だなと思ふ。さうして今更に叔父の病氣のことを思つた。しかし自分は叔父の病室の内にねてゐる姿を想像することは出來なかつた。たゞ病氣とか、死とか云ふ無形のものの姿を思ひ浮べた。

自分の行つた時叔母は用があつてゐなかつた。

附添人の許しを得て自分は病室に入つた。

叔父は二三週間前に逢つた時とは見ちがへる程やせてゐた。さうして苦しさうに仰向きに寢てゐた。その顏は骨張つてゐた。その色には黃味がかつてゐた。

自分もそれを見ると叔父は死ぬなと思つた。叔父は仰向きながら自分の方を見て「よく來てくれた」と禮を云つた。

さうして手を出してそのたるんだ皮をつまんで見せて、こんなに痩せたと苦笑した。

自分はこの時「イワン・イリキッチの死」を思ひ浮べた。その主人公の死病にかゝつた時皆が口から出まかせの慰めを云つて反つて主人を不快にさせたこと、さうして若い忠僕が眞實を云つて反つて主人公に慰安を與へたことを思ひ出した。しかしその忠僕のやうな誠心を以て叔父を愛することの出來ない自分は、心に責められながら、なるべく本當らしく叔父の氣やすめを云ふより外仕方がなかつた。

「時候さへよくなつたら、いゝでせう。なほりかけたら、痩せたのはすぐとり返しがつくでせう—」

と云つた。叔父は、

「痩せたのはかまはないが何にも食ひたくないので困る」と云つた。

叔父は死にはすまいかと思つてゐるにちがひない。しかしまだ生きられるとも思つてゐるにちがひないと思つた。自分はそれを見てたまらないなと思つた。

見て居る内になんだか氣の毒なやうな、どうかして上げたいやうな氣がした。さうして死と云ふものを今更に感じた。いづれは自分も死なければならないのだ。自分は長く其處に居て氣やすめを云つて居るのがつらくなつた。希望ある言葉が叔父の口から出る度に自分はなさけない氣がした。

「櫻の咲く時分には本復の祝でもしてさわがうかね」と叔父は苦笑して元氣らしく云つた。さうして自分の返辭を待つやうに自分の方を見た。自分は叔父が自分の答によつて自分が叔父のなほることを信じてゐるか、なほらないことを信じてゐるかをさぐつてゐるやうに思へた。

自分はたゞ笑ひながら「え」とのみ云つた。なまじつかの言葉は氣やすめとしか映じまいと自分は思つたのだ。

三十分許り叔父の處にゐて、元氣さうにあいさつして室を出た。たまらないなと思つた。

自分は夢で死の恐怖を知つてゐる。世の中に自分にとつて死の恐怖程いやなものはない。死ぬ程恐ろしいものはない。叔父はこのいやな恐ろしいものと、毎日々々顔を合せてゐると思ふとたまらないなと思ふ。しかし人は死ぬ瞬間までも、もしかしたら助かるかも知れないと空想し得る力を與へられてゐる。空想は現實によつて破られるかも知れない。しかし新らしい空想はヒドラの足のやうに切られても切られても生ずるものだ。これがよく人間にとつて唯一の隱遁場になる。叔父は恐らくこの逃場に時々逃げ込むだらうと思ふ。さう思ふと自分の今日逃場を大きくする爲に力を出來るだけつくしたことをよかつたと思つた。

病院の門を出て病院について右に曲つた頃には初春の日光と香とが自分の心を滿した。叔父によつて狹められた自分の心はせい〳〵してきた。道學者の自分は一寸すまぬやうに思つたが、これも自然の仕業と思つた。

自分は死ぬ時は鶴の看護を受けたいと思つた。鶴の看護を受ければ若死してもさうひどくはまゐらないやうな氣がした。

鶴のことはどうなつたらう、うまくゆくか知らん、うまくいつてほしいと思つた。この時叔父のことを思つた。さうして心にせめられるよりも、今鶴のことを考へるのは縁起がわるいと思つた。

(叔父は三月の二十日にこの世を去つた)

八

叔父を見舞つた日から又數日過ぎた。

一日として鶴のことを考へない日はなかつた。自分には鶴と一緒になつて初めて全人間たることが出來るやうに思へた。何かかくにつけ、讀むにつけ、見るにつけ鶴が居たらと思ふ。嬉しい時も淋しい時も悲しい時も、美しいものを見る時も、甘味いものを食ふ時も鶴と一緒だつたらと思ふ。

自分はよき父と、よき母と、よき兄と、よき義姉と、よき姪と、よき友を持つてゐる。「君程仕合せな人はない」とよく友は云ふ。自分もさう思ふ。しかし自分は更に愛するものと、賴つてくれるものを望む。自分は女に餓ゑてゐる。

自分は「この上例の人と夫婦になれたら末恐ろしい」と一二年前に麻布の友に話したことがあつた。しかし末恐ろしい程の幸福を正道を踏んで味つて見たい。自分の運命を犠牲にすることなしに味つて見たい。

自分は五年前からこの幸福に憧れてゐる。さうして鶴も自分を戀してゐてくれるやうに思つてゐる。自分が鶴を戀してゐるやうに鶴も自分を戀してゐるやうに思つてゐる。さうして自分が鶴と夫婦になれた時のことを夢みてゐるやうに鶴も自分と夫婦になれる時のことを夢みてゐるだらうと思つてゐる。

それにしても川路氏から何とか云つて來さうなものだ。

自分は不安を感じながら樂しみにして、希望に燃えて、川路氏から何とか云つてくるのを待つてゐた。もう川路氏は鶴の處へ行つて下さつただらう。何とも云つてこないのは面白くない

返事だつたからかも知れない。いや用があつてまだ行つて下さらないのだらう。それとも鶴の家で最後の決斷を與へる爲に返事をおくらしてゐるのかも知れない。お目出たい自分にはどうもその方がほんとのやうに思へる。

あれは三月二日の晩のことだつた。待ちに待つた川路氏から手紙が來た。自分は「幸あれ」と心に祈りながら不安と希望に燃えながら封を切つた。さうして讀んだ。自分は腹が立つた。

鶴の父に川路氏は逢つていろ／＼話して下さつたのだが、先方は依然として、鶴のまだ若いこと、鶴の兄のまだ嫁をもらはないことを云つて、今その話はきめたくないと斷つたさうである。さうして他からも醫學士とか何十萬圓の金持の息子とかからも結婚を申し込んで來たが此方と同じ答で斷つてゐると云つたさうである。川路氏はもつとつつこんで云はうと思つたけれども反つてそれが爲に話をやぶるやうなことがあつてはいけないと思つて、曖昧にして歸つて來られたさうである。

川路氏は手紙に、なほ他の方法で骨折る心算だが時期をまつ方がいゝと思ふと書き加へてあつた。

自分は全身に力を入れた。さうして自分は勇士である、勇士であると鼓舞したが、やゝともすると涙が出てくる。もう駄目になつたのだ、とりつく島もないのだと思はないではゐられなかつた。十時頃床に入つた。さうして泣いた。

しかし何時のまにか寢ぐるしい眠りに入つた。一時頃目が覺めた。自分をあはれむ情が強く起つた。自分はたまらないので起きて日記をつけた。

三日

一時頃目覺む。

自分は悲しく思つた。餘りだと思つた。はがゆく思つた。どうかしたいやうに思ふ。

自分は涙ぐんだ。

自分は足かけ五年前から一日も彼女のことを忘れたことはない。これは自業自得である。この罪は自分にあつて他人にあるのではない。しかし自分は自分を憐れまないではゐられない。かくまで目出たく出來てゐる自分を憐れまないではゐられない。

彼女を戀し始めたのは三十〇年九月である。それから滿三年半たつてゐる。この間自分は何時でも彼女と結婚したい、結婚しなければいけないと思つてゐた。

さうしてその裏には彼女の爲にもそれがいいことだと信じてゐた。彼女もそれを望んでゐるやうに思はれた。

馬鹿だ／＼、かくまで自惚れる自分は馬鹿にちがひない。

かくて自分は母や父を無理に贊成さした。それまでに十九ケ月を要した。自分はかくまで苦しんでゐるのだ。

かくて自家の人を初めとして川路氏や友に非常な同情を得たのである。同情をかち得る身はたまらないものである。自分は不氣な顏をしてゐる。父も不氣な時が多い。しかしこの爲に何度泣いたか、何度胸がせまつたか、何度不安になつたかわからない。

この憐れな自分に本人の鶴がいさゝかの同情をもたないならば自分はこの緣談をこちらからお斷りしたく思ふ。

緣談に冷淡なのは父であらう。しかし鶴がどうかしてくれるならば鶴の父ももつとどうにかなつたらう。

鶴は自分のことなんか、なんとも思つてゐないのだらう。

鶴がなんとも思つてゐないならば自分は鶴を妻にすることを好まない、多くの人をわ

づらはしてまで鶴の夫になりたくない。それ程お目出たい男になりたくない。
勝手になれである。
鶴に自分の妻になることが幸福でなければ、自分に鶴の夫となることが幸福なわけはない。
自分を夫にもつことをいやがるやうな女、そんな女は妻にしたくない。そんな女を妻にして喜ぶ程自分は肉慾許りの男ではない。
鶴の心が見たい。
鶴はもう自分のことを知つてゐるはずだ。知つてゐながら僕の不安な狀態にゐることに向つて、いさゝかも同情せず、この不安な狀態から救はうとすら思はないならば、鶴に自分の妻たるの資格はないのだ。
たゞ鶴が自分を愛し自分を憐れんでゐるか、鶴自身の力のないことを知つて默つてゐるならば、鶴は憐れな人間である。
自分には鶴はこの憐れな人間のやうにも思はれる、さう思はれる限り、自分はこのことを思ひ切らない。
かくてこそ思ひ切らないことが男らしく自分には思へ、思ひ切らないことがいゝことのやうに見えるのである。
この思ひ方がまちがつてゐるならば自分は思ひ切つて見せる。
彼女の心が見たい。
彼女の心は見ることは出來まい。彼女はとらはれてゐる女であらう。父と兄に自分の運命をたくしてゐる女であらう。それをいいことに思つてゐる女であらう。
情の動くまゝに自分の身を任すことを罪惡としか思へない女であらう。
かゝる女に自我はない。
自我のない女に自分の心の内の祕密を人にもらすだけの勇氣はない。自分にきく機會がないが、他の人に聞いてもらつても駄目だらう。
しかし聞いてもらひたい、から云ふ問題について女は可なり大膽である。女の一生はこの問題できまるのだから。しかしよし聞くことが出來ても力なき鶴の答はオーソリチーのないものだらう。
時期をまつより他はない、不安をつゞけるより他はない。
しかし不安な狀態をつゞけるのはいやなものだ、もうつゞけすぎた。
鶴が自分を愛してゐるか、愛してゐないかが知りたい、それを知れば思ひ切るのも切りいゝし、不安をつゞけるのもつゞけ甲斐が出來るわけだ。(夜、二時十分)
自分は日記にこれだけ書いたら少しは頭が休まつたやうに思つたので寢ようとした。しかしまだ興奮してゐる。自分は又おきた。目出たしと云ふ題をつけて次の新體詩を泣きながらかいた。

思ひ切れ〳〵
今となつて彼女のことを思ひ切らざるは
餘りに女々し
多くの男に戀さるゝ女
汝のことのみ思ふはずなし

思ひ切らず〳〵
我思ひ切らず

女々しき汝よ
思ひ切らざるにあらず
思ひ切れざるなるべし
男なる汝よ

男らしく思ひ切れ
汝を愛せず、汝の爲をはからぬ
女を思ひ切れ

我を愛せず？
我が爲をはからず？
そを我は眞に知るまで
思ひ切らず〳〵
思ひ切れざるに非ず
思ひ切らざるなり

汝三度求婚して
三度とも彼女の父によりていよく斷られた
るに
なほ彼女が汝を愛しつゝありと思ふか

我は思ふ〳〵
彼女の父の言葉
我をしてしか思はさざる爲には
餘りによわし

目出たき哉
甚もつて目出たき哉

我は目出たし
目出たし
汝の思ひをるよりも
更に目出たし
我、彼女を見すてることを
見す〳〵彼女を不幸におとすことと思ひを
る也
されば我、思ひ切らず
思ひ切らざるを以てほこりとす

我たゞ驚く
云ふべき言葉を知らず

さなり〳〵
汝の忠告をきかんには
我餘りに目出たし
目出たし〳〵
目出たき故に他人と自分を苦しめる程
目出たし

九

自分はその翌日、即ち三月四日に鵠沼の東屋に行つた。春休には間があるので、客は少なかつた。自分は二階の江之島の見える、日當りのいゝ室を占領した。

自分はこゝへ來て、勇氣を養はうと思つたのだ。鶴のことはすべて川路氏と運命に任せ、その事に就ては一切考へず、身體と思想を健全にしようと思つた。自分はこの頃少し神經質になりすぎてゐると思つたのだ。

本もなるべく讀まずに四日間濱や田圃を歩きまはつた。さうして五日目に自家に歸つた。

自分はそれからなるべく鶴のことを考へないやうにしたが、やゝともすると考へられてくる。さうして三月の十五六日になると何時の間にか自分と鶴は夫婦になるやうな氣になつた。

自分はまだ鶴が自分を戀してゐるやうに思つてゐる。それにもまして運命が自分と鶴とを夫婦にしたければおかないやうな氣がする。

「なぜ？」と聞かれても、「なぜだか」としか答へられない。自分の頭は理窟つぽいがどうしてかこの不合理なことを信じてゐる。信じ切つては居ないがさう思はれる。

この自分の氣持は説くことの出來ないものである。しかし去年の一月五日に小説風にその説明をしようとしたことがある。その終りにこんなことが書いてある。

＊　＊　＊　＊　＊

……彼女が熱烈に自分を戀する故かとも思つた。しかし彼女のそぶりはどうもさう熱烈に自分を戀してゐるやうには見へない。少なくも嫌つてはゐないやうだが、愛しても居ないかも知れない。さうして見た所、さう熱烈な女らしくはない。自分が彼女と結婚しないと自棄を起して自殺しはしまいかと無理に想像して見るが、どうもさう云ふ女らしくはない。自家の人の命ずる處にゆきさうな溫和しい、どつちかと云ふと昔風な、女らしい女である。どうも之も結婚しなければならない理由になるには薄弱だ。

どうしても自分が彼女を戀してゐる、さうして彼女と夫婦になりたく思つてゐる、さうしてならないではならないと感じてゐるとしか云へない。

しかし自分にはかう云ふ感じがたゞ無意味なものとは思へない。思ひたくないからかも知れないが思へない。さうしてから思つてゐる、

この事實、往來で時々逢ふ近所の十七八の女、優しくつて、美しくつて、淋しくつて、溫和しさうな、それで可なり快活な女、その女とは話したこともなければ挨拶したこともない、名も知らなければ性質も知らない、たゞ自分が十五六の時から逢つて逢ふ度に互に見かはす、さうして見かはした暫らくの間、何時でもいゝ感じのした女、その女を自分は一昨年からほんとに戀し出した。さうして自分はその女と夫婦になりたく思つてゐる。さうして又今迄になく道德的にも夫婦にならなければならないと思つてゐる。

この事は自分には未だ嘗て經驗したことのないことである。自分は今迄の戀に於て自分は結婚する資格ないものと思つてゐた。しかるに今度の戀は自分に彼女と結婚せよと命じてゐる。

自分はこの事實の裏に自然の命令、自然の深い神秘な默示があるのではないかと思ふ。この默示は、

「汝、彼女と結婚せよ。汝の仕事は彼女によつて最大の助手を得ん。さうして汝等の子孫には自然の意見が生れるであらう」

と云ふのだ。

之が自分の迷信である、どうしてか、さう思へる。さうして運命がお貞さんを戀させて失戀させたのは彼女と自分を結びつけるためではなかつたらうかと。

自分は今迄下等なことをした。しかし自然の默示にはそむかなかつたと思つてゐる。さうして近頃になつて自分は自然の默示を幾分か解し得た積りである。

されば自分はこの迷信してゐる默示に從はないことを恐れてゐる。自分はこのことを父にも母にも云はない。云つた所が笑はれるにきまつてゐる。しかし自分一人ではさう思つてゐる。それで父や母の機嫌を一時そこねてもこの迷信に從はうと思つてゐる。父や母に背くのはいやだ。しかしまだ救はれる。自然に背くのは末恐ろしい。

自分はこの迷信をほんとの迷信かと思ふ。さうして父や母を喜ばせようかと思ふ。しかし自分はもしこれが迷信でなかつたら大變と思ふ。

だから自分は父や母に得手勝手なわからずやの我儘者と思はれても彼女に求婚して斷られるまでは誰とも結婚しないでよさうと思つてゐる。

自分は出來るだけ自然の默示と迷信してゐることに從つて成功しなかつたら萬止むを

得ないが、自分の意志で背きたくないと思つてゐる。

それに淺はかな人智で自然を試みるのはわるいが、そのことが迷信か迷信でないかを知りたく思つてゐる。

かく云ふとも「それは君が彼女と結婚したいからそんな理窟をつけるのさ」と云ふ人があれば、自分はたゞ默するより仕方がない。

＊　＊　＊　＊

かゝる迷信を持ち得る自分はいかなる時も鶴と自分とは運命によつて合一されると云ふ希望を持ち得る。

初めはかう云ふ希望をもたうと知らず〳〵の内に苦心したかも知れない。しかし足掛五年の月日はこの希望を習慣にしてしまつた。いくらこれを否定する出來事が起つても、いくらこれを否定する理窟が立つても、何時のまにか鶴と自分とは夫婦になるやうな氣がする。

十

四月一日の朝、自分は早く起きた。天氣がよくつて氣持のいゝ朝だつた。自分は新聞投入函を見に行つた。自分の心は一種の興奮をしてゐる。

四月一日に自分は鶴の學校の卒業式のあることを知つてゐる。一昨年に自分はこの日鶴が紋附を着て學校に行くのを見た。さうして何處へ行つたのか夕方紋附を着て歸つてくるのを見た。自分はその時鶴が學校を卒業したのだなと思つた。その日朝日新聞に鶴の學校の優等生の名が九人程出てゐた。鶴の名はその内になかつた。

鶴は學問は餘り出來がいゝのぢやないな、なまじつか優等生で卒業すると人の注意を惹いて鶴を妻にもらひたく思ふ人が出ないとも限らない、優等生でなくつてよかつたと思つた。しかし鶴は學校が始まると依然と學校に通つた。自分は未だ卒業しなかつたのだな、道理で優等生の内に名がなかつたのだなと思つた。

その後自分は川路氏から鶴の學校の成績を聞いた。さうして成績のいゝのを得意に思つた。去年の四月一日の朝日新聞にも鶴の學校の卒業生で優等の人の名が十許りのつてゐた。しかし自分は鶴の今年卒業すると云ふことを知つてゐたから別に注意しなかつた。

今年こそ鶴は卒業するのだ。かう思つた自分は四月一日に早く起きて新聞を見に行つたのだ。未だ來て居なかつた。自分は朝の空氣をすひながら庭を歩きまはつた。さうして新聞配達の鈴の音を聞きおとすまいとした。暫らくして鈴の音がした。自分は一種の不安と恥かしさを覺えた。しかしすぐ見に行つた。

果して出てゐた。さうして鶴の名は第四番目にあつた。さうして卒業生は百三人である。自分は微笑んだ。さうして鼻が高いやうに思つた。

この時自分の學習院を卒業する時、三十何人の内終から四番だつたことを思ひだした。自分はこの偶然の暗合(?)を面白く思つて更に微笑んだ。

父や母は新聞を讀んだが鶴のことには氣がつかずにゐた。自分は一時頃に母の室に行つて何げなく鶴の優等生で卒業したことを云つた。母は「さうかい」と冷淡に云つて、「中々出來ると見えるね」とつけ加へた。自分は「さう見えますね」と冷淡を裝つて云つた。母は改めて「あのことが早くきまるといゝね。中々いゝ人はないからね、この頃は妾はたゞお前のことだけが氣になるのだ、早くきまるといゝと思つてゐるのだ」と云つた。

自分は母がこのことに冷淡だと思ふと、この

ことがきまらないとまゐるやうに何げなく見せかけるが、かう云はれると、

「僕のことは心配する必要はありません。世の中に自分程心配する必要のない人は少ないでせう」と安心させるやうな辯解するやうなことを云ふ。

「それでも妾にはいろ〳〵話しておきたいことがあるからね」と母は云つた。かう云はれると自分は嬉しく思ふ。さうして我知らず微笑む。鶴と母との間のうまくゆくことを信じてゐるが、母が鶴をもらふことに初め不服だつただけに時々は心配する。今は母がこの話に乘り氣になつてゐると思ふと嬉しい。

それにしてもうまくゆくか知らん。

その晩自分は隼町の友を訪うた。いろ〳〵の話をしてゐる時、友は「昨晩掘出しものをした」と云つた。

「なんだ」と聞くと、

「フィデュスのいゝ繪のあるユーゲンドを捜して來た」と云つて古いユーゲンドを出して見せた。どんな繪かと急いであけて見ると、怒濤の内を一艘のボートが走つてゆく、ボートは後半が一寸見えるだけだ、そのボートの上に若い男と女がのつてゐる、女は一心に行手を見ながら全身に力を入れて舵をとつてゐる、結つてない髪は風になびいてゐる、男は全力をもつて漕いでゐる、一言以て云へば二人は死物狂ひで或目的に向つてすゝんでゐる所がいかにも強く現はされてゐる。

目的地は何處だ? ツーア ブラウトインゼル(許嫁の島まで)である。

「いゝだらう」と友は云ふ。

「いゝね」と自分は云つた。

しかし自分は之を見てゐる時、自分のことを思つた、自分の戀を思つた、自分の鶴と結婚しようとしつゝあることを思つた。さうして二人を羨ましく思つた。もし鶴がこの繪の女のやうに全力を盡して自分との結婚の爲に働いてくれたら、どんなに嬉しいだらうと思つた。自分は繪を見とれてゐるふりしてこんなことを考へた。

さうして、

「いゝね、中々いゝ、フィデュスは鉛筆畫がいいね」と自分は今迄考へた末の結論のやうな顔して云つた。

「ほんとに巧いね、氣持がいゝ」と友は云つた。

自分はなほ繪を見とれながら、鶴が自分を愛してゐなかつたら、自分の努力は滑稽なものだと思つた。さう思ふとなほ二人が羨ましい。二人の敵は多いだらう。しかし二人の目的に向つてすゝむ時に疑惑がない。努力すればするだけの結果が現はれるのだ。互に勵ましてゆくことが出來るのだ。互にたすけあつてゆくことが出來るのだ。互に戀してゐることを信じてゐられるのだ。

自分は羨ましく思はないではゐられなかつた。

鶴が自分を眞に愛してゐてくれ、さうして自分と夫婦になるために心から骨折つてくれたならばどんなに嬉しいだらう。それでこそ張合があるのだ。

自分は默つてフィデュスの繪を下に置いた。さうして友といろ〳〵外の話をした。

話をしながら時々フィデュスの繪を見た。さうして鶴のことを考へた。

どうしてゐるだらう、自分のことをどう思つてゐるだらう、まさか、いやな、破廉恥な、厚顔しい、ひつこい蛇のやうな人間とは思つてゐまい、などとも考へた。

さうして十一時迄友の處に居た。

十一

もう一年以上鶴に逢はない、もう一生鶴に

遂はないかも知れない。今度逢へれば許嫁としてであらう。

自分はよくさう思ふ。さうして鶴はさぞ大人になつたらう、美しくなつたらうと思ふ。しかしどんなになつたか想像することは出來ない。時には鶴は病氣をしてやしないかと思ふこともある。負傷をしやしないかと思ふ時もある。さうして鶴の醜くなつたこと、不具になつたことを想像することもある。その時鶴の前に跪いて私は貴女を愛してゐます、私の妻になつてくれませんか、と云ふことを想像して見る。自分は鶴の美しい顏を愛してゐる。しかしそれにもまして鶴の性格を愛してゐる心算でゐる。

しかしかう思ふ時、自分は十年前に一人の同年輩の美しき男を戀した時のことを思ひ出さないではゐられない。實に美しい人だつた。多くの學生はその人の心をとることに苦心した。その時自分はその人の不意に醜くなることを空想した。さうして多くの人のその人を捨てた時、自分はその前に跪いて私は心から貴君を愛じてゐます、と云ふことを想像してその人の醜くなるといゝと思つたことがあつた。さうしてその時自分はその人の心を愛してゐると思つてゐた。

處がその人が齡とると共に醜くなつた。齡のせゐかも知れないが、醜くなると共にその人を戀することが出來なくなつた。さうしてその人の性格の醜い所も氣がつくやうになつた。

父や川路氏の聞いた所によると鶴はすべての人から評判のいゝ人である、よすぎる程の女である。自分の目に映じた通りに鶴の近所の人も友達も先生も賞めてゐるさうである。賞める許りである。しかし自分の鶴を戀し得たのは鶴の顏が美しかつたからである。美しい許りではない。美しい點だけで鶴より優つてゐる人は近所にもゐる。しかし醜かつたら、又十人並以上でなかつたら、自分は鶴をかくまでには思ひはしなかつたらう。自分は鶴の顏の醜くなる事を恐れてゐる。しかし今となつて鶴が醜くならうとも自分は鶴を捨てはしない。その時自分は鶴と結婚が出來たら喜ぶであらう。自分は初めは鶴の顏や姿を愛したらう。しかし今は鶴そのもの、目に見えないものを愛してゐると信じてゐる。しかし鶴の美しいことを望む、切に美しくなることを望む。しかし他の男の注意を惹くことを恐れる。さうしてもう鶴は多くの男の注意を惹いたにちがひない。鶴の父は他からの緣談を斷つてゐると云ふではないか。

なにしろ鶴がどうなつたか自分は知りたい。處が運命の神はこの願ひを五月十二日に叶へてくれた。

この日は水曜日で中野の友の休の日だ。自分は天氣がいゝので不意に八時頃中野の友を訪問することにきめた。さうして直ちに自家を出た。九時頃友の家についた。暫らく話してから散歩した。青々した麥畑や、雜木林の中を、澄んだ空や、黑い土を見ながら歩いた。都會に許り居る自分にはこの半田舍の空氣はなんだか懷かしい。

「僕も家を持つたら中野に來ようかな」と云つた。

「是非來給へ」と友は云つた。さうして思ひついたやうに、「例の話はどうなつた」と云つた。

「相變らずさ、だめとも思ふが、うまくゆくやうな氣もする」と答へた。

「どうかなりさうなものぢやないか」と友は云ふ。

「もうするだけのことをしたのだから仕方がないさ」

「甘くゆくやうな氣がするがね」

「僕もさう云ふ氣がするが、駄目な方が本當だらう」

自分はから云つた時淋しい氣がした。さうして友のかはりにわきに鶴が居たらと思つた。自分は話頭を變へた。さうして十一時半頃まで友の處に居て歸路についた。中野の停車場まで友は送つて來た。電車は來てゐない。さうして中々來ない。自分は來てくれない方がいゝのだ。自分は中野の友の處へ來る時、歸る時、鶴と電車で同車することを想像しないことはない。さうして電車をまてばまつ程鶴に逢ふ機會の多いやうに思へて嬉しい。

その内に電車が來た。自分は友と挨拶して電車にのつて眞中より少し後ろに腰をかけた。のつて暫らくしてから出た。鶴は停車場で電車を待つてゐるかも知れないと思つた。しかし今十二時頃だから飯を食つてゐるだらうと思ひ返した。しかし何時ものやうに大久保につくことを樂しみにしてゐた。電車が柏木に着いて一寸止つて柏木を出た。自分の胸はせばまるやうに覺えた。之は珍らしいことではない。さうしてから云ふ感じを何十度味つたか知れないが、鶴に逢つたことはたゞ一度だつた。それは去年の四月四日である。

電車が大久保につく時、自分はこは〴〵プラットホームを見た。六七人まつてゐる人があつた。その内に若い女が一人ゐた。鶴ぢやないかと思つてゐる内に電車は益々近づいて止つた。

鶴だつた！　鶴はこの瞬間に自分に氣がついたらしかつた。後ろから乘らうとした足がこの時ピタッと止つた。鶴は引きかへして前から乘つた。自分と見合つた時、目と目があつた。鶴は赤い顏して目をそむけた。さうして自分の腰かけてゐる右側に腰をかけた　鶴と自分の間には三人の人がゐた。

自分は鶴の大人になつたのに驚いた。鶴は相變らず粗末な着物を着て薄く白粉をぬつてゐた。自分は鶴程美しい女を見たことはないと思つた。

優しい、美しい、さうして表情のある顏、生々した目、紅の脣、顏色もいゝ。自分は鶴の顏をもつとはつきり見たいと思つた。しかし間にゐる人が邪魔になる。赤い髮の毛が一寸見えるだけだ　鶴の髮毛は赤い。自分のわきには勞働者がゐた。その隣が車夫で、その隣が四十許りの女で、その向うに鶴がゐるのだ。

自分は向ひ側の空いてゐる席に鶴の腰かけなかつたのを殘念に思つた。しかしあわてた樣子、自分と顏をあはせるのを氣まりわるく思つて同じ側に腰をかけたことを嬉しく思つた。

新宿で可なり人がのつた。代々木では殆んど滿員になる程人がのつた。自分は老人か子供を負つてゐる人が來てくれるといゝなと思つた。さうすれば自分は何げなく立つことが出來る。さうして鶴を見ることが出來る。しかし自分の前には男の人のみ立つてゐる。

千駄ケ谷で少しおりた。信濃町では五六人おりて、三四人のつた。四谷につく少し前に自分は立つた。鶴の方を見た。鶴と自分の目は會つた。鶴はすぐ目を轉じた。自分は思ひ切つて鶴の前を通つてとまることにした。電車はとまりかけたが鶴はたゝない。さうして自分に顏を背けてゐる。電車はほんとに止つた。自分は鶴の前を通らうとした。この時不意に鶴は立つた。自分は嬉しかつた。自分の手は鶴の背中にふれた。自分は鶴について電車を降りようとした。この時入口のそばにゐた子供をつれた人が立つた。自分は厚顏しくその男をかきのけて鶴のすぐあとに從ふ勇氣がなかつた。自分は鶴と自分の間に二人を入れた。

自分は電車をおりると二人を逐ひこした。さうして改札口を鶴について出ようとした。しかし鶴に改札口に達した時一寸後ろを見た。自

分を見た。さうして身體を少し右によせて自分に先にいらつしやいと云はぬ許りの態度をとつた。自分は夫の權威を以てさきに出た。しかし自分の心はあがつてゐた。切符を改札掛に渡さうとして落してしまつた。自分は落ちた切符をたゞ眺めて改札掛の拾ふのを見て、なるたけ落ついて停車場を出た。出て右に折れて段々を左側のはしを通つて登つた。さうして自分はふり向いた。鶴と又顏をあはせた。一階段を登りをはつてふりかへると鶴は自分の通つたあとを登つてくる。矢張り左側のはしを通つて。

自分は段を上りきる前に又ふり向いた。鶴は靜かに自分の歩いた處を歩いてくる。自分は登りきつて右に折れて麹町通の方へ行つた。ふり向くと鶴は段々を上りきつて未だ自分のあとをついてくる。自分はもう夢中だ。嬉しい。

「お鶴さん」と聲をかけたい程自分は親しさを感じた。さうしてさう聲をかけても鶴はおどろかないで、

「なに御用？」と笑ふやうな氣がした。自分の足はおそくなつた。自分は電車道をよこぎつて麹町通の左側を通つた。鶴は電車通をよこぎらずに右側を歩いてくる。

自分は何度ふり向いたか知れない。その都度、鶴と顏をあはせた。あはせるとあわてて自分は顏を元に戻した。鶴も顏をそむけたやうに思ふ。

自分は鶴が自分を愛してゐてくれたと思はないではゐられなかつた。自分の心は嬉しさにをどつた。

眞心は眞心に通ずる。自分が鶴を戀してゐるやうに、矢張り鶴も戀してゐてくれたのだ。

自分の足はをどつた。自分の足はつい早くなつた。六丁目あたりに來てふり向いた時、最早鶴の姿は見えなかつた。自分は鶴は何處かの商店に入つてゐるのではないかと思つたが見えなかつた。しかし自分は嬉しくつてたまらなかつた。自分は自家に急いだ。

鶴は自分を戀してゐるのだ。鶴は自分の妻になるのだ。二人は夫婦になる運命を荷つて生れて來たのだ。

なにしろ今日は嬉しい日だ。記念とすべき日だ。鶴も嬉しく思つてくれてるだらう。自分は自家に歸つてこの喜をもらさないではゐられなかつた。母に逢つて、今日鶴に逢つてよ、鶴はそれは美しくなつてよ、僕は萬龍より鶴の方が何十倍美しいか知れないと思ひましたよ、と云ひたかつた。母は萬龍を或日見て、美しい美しいと感心してゐたことがあつた。さうして鶴のことはさう美しいとは云はない。母に三年前自分は鶴の自分の室の窓の前を通る所を見せたことがある。

何しろ自分はおちついてゐられない。しかし母に打ちあけて云ふのは氣まりがわるかつた。晝飯食つてからもぢつとしてはゐられないので神田に行つた。さうして一人鶴のことを思つて微笑んだ。

美しい、美しい、優しい、優しい、氣高い、氣高い、鶴は女だ！

自分はその夕、麻布の友を訪れて、鶴に逢つたよ」と簡單に話した。友は「さうかい、そりやよかつたね」と云つた。

十二

自分は五月十二日に鶴に逢つてから愈々鶴と夫婦になれるやうに思つた。さうして鶴と夫婦になれたあとのことを考へた。

自分は夫婦となつたあと何時迄も幸福にゐられるやうな氣がする。世間の普通の夫婦間のやうに二人の間に面白くないことが起るとはどうしても想像が出來ない。淫慾をつゝしみ、お互にいたはつて感謝しつゝゆくならば不和はおこ

り得ないやうに思はれる。しかし人々は經驗ある人々はから思ふ自分の考へを若いと云つて、獨身の空想と云つて心から冷笑することを知つてゐる。

世に自己一個の經驗を笠にきて總ての若者が自分の踏んだ道をその通りふむときめて、先生顏する奴程自分にとつて癪にさはる奴はない。自分は理想的の結婚をし、理想的の家庭をもつて見せ、彼等の鼻をあかしたく思ふ。自分は彼等のやうに、細君を玩弄物とは見ない。彼等の醜くなること、ヒステリー的になることを自然と思つてゐる。その苦痛に多大の同情をはらつて見せる。自分は性慾の價値を眞に發揮して見せる。眞の戀を味つて見せる、自分は彼等の見出すことの出來ない禍根を見出して未だ芽の内に枯らして見せる。自分と鶴の戀は彼等の戀と全然別種であることを事實によつて證明して見せる。

男女の眞の戀は種々の形をとるも永遠不滅のものであることを事實によつて證明して見せる。

しかしもし鶴と自分との結婚が禍を生むならば、どうして禍が生れるかを眞にきはめたく思ふ。

自分は鶴と結婚する爲に他人から嘲笑されるであらう。しかしその嘲笑はやがて羨望になり、更に一轉して尊敬になり、自分の結婚は理想的結婚のある雛形となり得ると信じてゐる。

何しろ自分は自分の鶴に對する戀程、智的な運命のことを考へ、自分の仕事のことを考へ、二人の個性のことを考へた戀はないと思つてゐる。さうしてこの戀の成就によつて幾多の事實、かくれたる事實を知ることが出來るやうに信じてゐる。

自分は今や鶴と自分の夫婦になれることを殆んど疑はないやうになつた。たゞその時間が早いか遲いかが問題であると思ふやうになつた。しかしさすがに時々は不安になる。だめなやうな氣がする。しかし又何時のまにかうまくゆくやうに思ふやうになる。さうして別に理由もなく不斷はうまくゆくやうにきめてゐる。

五月も六月も自分は川路氏からいゝたよりがあるのを空しく待つてゐた。七月も八月も空しく果報を待つた。九月の初めに一寸沼津の千本濱に行つた。――自分は夏中東京にゐた――こゝに一週間計りゐて自宅に歸る時なぞは不在に川路氏から鶴の家でとう〳〵承知したと云ふ返事が來てゐるやうな氣がしてたのしみにして歸つて來た。しかし何にも云つて來なかつた。九月も無事に過ぎた。

十月の或日自分は氣分のいゝ淋しい秋の氣を深く呼吸しながら庭を歩いてゐたら女中が來た。さうして自分に一通の手紙をわたした。

自分の胸はをどつた。川路氏からの手紙である。

自分は封を切つた、さうして讀んだ。自分は全身に力を入れた。目から涙がながれた。

鶴は人妻になつたのである。

自分は耐へよう〳〵としたが耐へ兼ねて溢出して泣いた。自分はどうしていゝかわからなくなつた。自分は夢中で庭を歩きまはつて自分の室に入つて机の上に泣き伏した。

* * * *

鶴は柏木にゐる金持の長男で、今年工學士になつた人の妻になつたのである。

十三

その後自分は鶴のことを空想の庫から出して記憶の倉の中に入れようと努力した。しかしそれは徒らに淋しい苦しい努力であつて無益な努力であつた。時間の手に任せるより仕方がない。

自分は花をすべてとりさられた花園の内を淋しい心をもつて自分をあざけりながら歩きまはつてゐた。

女に餓ゑてゐる自分は他日また女を戀し得るかも知れぬ。そして今の失戀を祝福する時が來るかも知れぬ。しかし今の自分にはそんな考へは何にもならない。たゞ淋しい、情けない。ややともすると涙ぐむ。

自分は旅行しようかと思つた。このまゝゐては身體をこはしはしないかと思つた。しかし自分は自分を勇士と思つてゐる。自分を戀せぬ女が人妻にならうともそは自分にとつて幸なることであらうとも不幸なことではないはずだ。さう云ふ女を妻にしなかつたことは喜ぶべきである。自分は自業自得の失戀の爲に身體をこはすことを恐れるやうな人間ではないはずだ。自分はするだけのことをした以上は運命を甘受するだけの哲人にならなければならない人間だ。

自分は東京にとゞまることにした。さうして淋しい心をかくして平氣な顏をしてゐた。父や母や川路氏はこれならあんなにまで結婚させようと心配しないでもよかつたと思はれたにちがひない。

しかしするだけのことをしなければどうして我慢が出來よう。それがせめてもの慰藉ぢやないか。最愛の兒を失つた母にとつて出來るだけのことをしたと云ふのが唯一の慰藉ぢやないか。

十一月三日の晩に自分は今年工科を卒業した友を訪れた。さうして何氣なく鶴の夫のことを聞いた。友はよく知つてゐた。さうして快活ないゝ人だと云つた。立派な身體したいゝ人だと云つた。さうして近頃戀女房をもらつて元氣だと云ふことまでしやべつた。

自分は何氣なく「さうかい」と云つた。友は話したあとで不意に「なぜ聞くのだ」と聞いた。自分は顏のほてるのを覺えた。さうしてやゝともすると涙が出さうなのでよわつた。

「一寸聞きたいことがあつたからさ」とわけのわからないことを云つた。

友は別に追窮しなかつた。

* * * *

其後暫らくして自分は何時のまにか、鶴は自分を戀してゐてくれたのだが父や母や兄のすゝめで進まずながら人妻になつたのだと理由もなしに思ふやうになつた。さうしてそれから一月もたつた。今は鶴をあはれむやうな氣分になつた。さうして鶴の運命が氣になりだした。

自分はこの感じがあやまつてゐるか、ゐないかを鶴に逢つて聞きたく思つてゐる。

しかし鶴が「妾は一度も貴君のことを思つたことはありません」と自ら云はうとも、自分はそれは口だけだ、少なくも鶴の意識だけだと思ふにちがひない。

（一九一〇・二）

花のなかから

花のなかから
一人の男が出て、
花のなかの
一人の女の處にとんでゆく。
女はおどろきながらよろこび、
にげながら誘惑する。
それを一人の女が
靜かに見てゐる、
それは二人の守り神か、
自然の祝福か。
生々とした二人のよろこび。

（ブレークの繪を思ひ）

世間知らず

一

C子から初めて手紙をもらつたのは五月十五日の夜だつた。よかつたら來たいと云ふ手紙だつた。

知らない女の人が來たいと云ふのは生れて初めてだつたから、闘々しい女もゐるものだと思つた。一方では又ある期待ももつた。しかしその期待は恐らく破られるにちがひないとも思つた。しかし逢ふだけは逢つて見よう、さぞ自家の奴はおどろくだらうと思つた。それが又面白くも思へた。さうして來てもいゝが豫期を少しでもつくつて來たら失望するだらう、その覺悟で來るならば火木土の内午後一時半迄に來てもらひたいと云つて返事を出した。

來るかと思つたが一週あまり來なかつた。その間に二三度手紙をよこした。

その手紙の内にはこんなことがかいてあつた。

「私は年ばつかし大きくなりましていつまでも赤ちやんみたいですからそのおつもりでゐて下さいまし。

私は女は大きらひです。昔のおいらんが好きです。けれどもたゞ姿だけ好きなんです。私は迷信家で困ります、神信心ぢやありませんの、ただおばけだのけだものがこはいのです。そして目にちら〳〵していやでしやうがありません。人に殺されはしないかと心配で〳〵たまりません。私はきつと長いきしません。たゞ死ぬ時さぞ苦しいだらうと思へばこはくいやで〳〵たまりません。けれどもほんとは生きてゐるのは何よりいやなことですわ。

げいしやになるやうなうちに生れたらうれしいでせうとおもひます。父は私を馬鹿だと思つて見すてて居ますけれど私はちつともばかぢやないんですもの、孝行がしたくても私の眞心がとゞかないんですもの、つまらないわ、母様はかはいさうでしやうがありません、なぜお嫁にゆかないと馬鹿なんでせう。

私は泣きたいやうな氣でしじう居ますけど、つまらないと思つてしじううれしさうな顔をしてゐます。人間並と人に見くびられるのはいやですから。私は、お月様のお申子で、お月様の精だとおもつて居ます。

女は大きらひ、丸い女は一ばんきらひ、くろい女もいや、長い女もいや、みじかい女もいや。

私は西洋の繪の女だけ好き、活きてゐる人間はみんなきらひ。

男の人にちつとばかり好きな人がありますだけ。私は日本ですきな人に今まで逢つたことはないの。ちつとも生きてゐたくないわ。

私は利口なのに、子供の時はお利口だ〳〵つて云はれどほしました。こんどはばかだ〳〵つてうちの者までいひます。にくらしいわね。

ごめん下さい。どうぞ私を好きになつてくださる方ならうれしうございますが。

きらひだつたらさう申してください。

私をばみんな宅の者だの伯母さんがTちやんと云ふつもりをCちやんと云ひますから一人か二人がCちやんにしてしまひました。さう仰有つてかまひません」

自分はとんでもないものが舞込んだ様に友達

に吹聴し手紙を見せて笑つた。

二

初めてC子が來たのは二十四日だつた。前に二十四日に來ると云ふハガキをよこして、その日午後三時半頃C子は自分の家に來たのだつた。その日午後自分の處に高尾と長澤が來てゐた。自分は二人に今に女の人が來るかも知れないと云つた。さうしてどうせ不愉快な女にきまつてゐると口では云つてゐた。しかし美しい女かも知れない、さうあつてほしいと思つてゐた。何しろ藝者になりたいやうな口吻をもらす女なのだから。

しかし二時になつても來ないので來なくなつたのだらう、又あとで手紙でもよこすのだらうと思つてゐた。しかしくるかと思つてゐた。三時半頃に女中が來て「女の方がおいでになつてお目にかゝりたいとおつしやります、どういたしませう」と云つた。その顏には大變なことがと云ふ色があつた。自分はわざとおちついて、「こゝへお通ししおし」と云つた。さうしてどんな女か知らんと思ひながら出て見た。

自分の室はもと自家の長屋だつたので一軒はなれてゐる。出て見ると變な女が立つてゐる。西に傾いた日の光を受けて顏色のわるい痩せたヒステリーのやうな女が、髮をお下げにして、單衣の友禪のひふを着て立つてゐる。目のふちがくろく、白粉をぬつた顏にはしみがあるやうに見えた。自分は變な非常な不愉快を感じた。しかし「歸れ」とも云へないので、「お上りください」と云つた。女は躊躇してゐた。「お上りください」と自分は又云つた。女は上つた。さうして室へ入る敷居の上に坐つて自分達三人にお辭儀をした。自分は座蒲團を持つて來てその女の前において、「お坐りください」と云つた。その間女は殆んど一口もしやべらなかつた。自分が何か云つても聞えないやうなかすかな聲でものを云ふか、默つてゐるかであつた。しかし自分達は、少なくも自分は氣がおちつくと少し氣分の調子が高くなるのを覺えた。自分達三人は大聲でしやべつた。さうして笑つた。自分は時々其女、即ちC子に愛想を云つた。あんまりC子がおとなしくしてゐるので少し可哀想になつて來た。その内に段々不愉快はなくなつて來た。しかしもう少しは美しくつてもいゝと思つた。自分はC子の方をふりむくのを遠慮した。

高尾と長澤は餘りC子が默つて敷居の處に坐つたまゝ、座蒲團の上に坐らうともしないので、居ては氣の毒と思つたので何か云ひわけをつくつて歸つて行つた。自分はとめなかつた。

二人が歸つたあと、自分はC子の前の座蒲團をもつと奥の方に置いて「お坐りなさい」と云つた。するとC子はすぐ立つた。さうして座蒲團の眞中に坐つた。さうしてすんでゐない目を見はつて僕の方をぢつと見て淋しく微笑んだ。自分も淋しく微笑まないではゐられなかつた。

自分は繪を見せた。さうして「繪はすきなのですか」と聞いた。「さう好きぢやありませんの、ちつともわかりませんの」と云つた。自分は自分の知らない人が逢ひに來たがる時にはきつと繪を見にくるのにきめて、そのあつかひをするのにきめてゐた。C子はしかし默つて繪を見てゐた。左の手をついて首をのばして、僕に左の側面を見せた。西日のギラ／＼する光線はC子の右手にある障子を強く照りつけてゐた。自分は安心してC子を見つめることが出來た。のばした首から肩にかけての線の美しいのが氣がついた。顏もわりに綺麗な可愛い顏だと思へて來た。目の大きい、あごの小さい、口の可愛い、ビードロでつくつたやうな感じのする顏だと思つた。自分は見とれてゐる内にC子の頰や首すぢや喉を彫刻物をさするやうにさすつて見たい

氣がした。
　この時自分はふと思ひ出したことがあつた。
「ロダンの展覽會の時見に來たでしよ」と云つた。
「え、」とC子は答へた。「山脇の繪の前の椅子に腰かけて白樺を讀んでゐたでしよ」と云つたら、「え、」と繪を見ながら答へた。自分は一步進んで頰づゑをつく眞似をして見せて、「かうやつて見てゐたでしよ」と云つた。C子はとぼけて返事をごまかした。
　展覽會の時にC子は皆に評判された。何しろ姿も顏も目立つてかはつてゐたので、「畫かきだらう」と云ふ人もゐた。「女優にしたらいゝだらう」「女優にして氣狂ひの役をさしたらいゝだらう」と云ふ人もゐた。自分は實を云ふとその時のC子には可なり興味をもつた。その無遠慮な、非常識的な、人の注意をあつめて平氣でゐるやうな所もすきだつたが、顏もすきだつた。島田がつぶれてゐて髮の毛が散つてゐるのも面白かつた。さうして何度も何氣なく見に行つた。
　自分はそれですつかり興味を持ち出した。「山脇の繪はどうでした？」と聞いた。「覺えてゐません」「あんなに見つめてゐたぢやありませんか」「いゝえ、妾は繪は少しもわかりませんの」
「それならたゞ見てゐるふりしてゐたのですね」又C子はとぼけてしまつた。「兄さんと一緒でしたか」「え、」とC子は答へた。
「僕が居たのは氣がつきませんでしたか」「いゝえ、ちつとも。いらつしやらなかつたのでしよ」とC子は云つた。自分は開いた口がふさがらないやうな氣がして一寸默つてしまつた。
　自分はもうC子には遠慮なくなんでも云へるやうな氣がした。この女なら何を云つても何をしてもすましてゐるだらうと思つた。
「齡はいくつ」と聞いたら、それには答へず「兄は二十三です」と答へた。
　C子に話しながら繪をくりかへして見てゐた。自分はC子が繪が好きで繪を見てゐるのではなく、一番自分に自信がある顏を僕に見せる爲に繪を見てゐるのだなと思つた。
　C子はゼーマンで出してゐる三色版を入れてある箱の中の繪を見ながら、
「この内の繪を戴くわけにはいかなくつて？」
と云つた。
「僕にいらないのなら上げます」
「貴君がいらないのはつまりませんわ」
「いるのはあげられません」
　C子は繪を見ながら氣に入つたのがあると、「之は？」「之は？」と聞いた。自分は一々明瞭にいる奴は「いる」と云つた。いらない奴は「いらない」と云つた。C子は好きなのを別にした。その内には僕の「いる」と云つたのも入れてゐた。隨分いやな繪をいゝ方に入れたから惡口を云つた。すると好きでない方に入れた。
「貴女が好きならいゝぢやありませんか」
と自分は云つた。
「それでも」と云つてC子は淋しく笑つて見せた。
「之だけ戴いてよくつて」と十枚許り選んで云つた。やつて惜しいのは二三枚だけだつた。それも特に惜しいものではなかつた。皆やつてもいゝと思つた。しかし初めて來た女にさうやつてはC子の兄や、C子の友に自分が甘い奴と思はれると思つた。それで、
「そんなにはあげられません」
と云つた。
　C子は不平さうな顏をして見せた。しかし僕がすまして默つてゐるのを見たら、一枚その内から選んであとを匆々箱にしまつて、「それなら之を一枚戴いてよくつて」と云つた。
　それはC子が初め選ばなかつた繪だつた。そ

れを自分が「その繪が嫁ひなのですか」と云つた繪だつた。さうして「之は戴けるの」とC子が云つた時、「あげられません」と云つた繪だつた。自分はC子の心を見ぬいた積りだつた。C子は僕から好かれてゐる證據をほしがつてゐるのだと思つた。それで承知した。

　あと白樺の舊いのと、寫眞版の繪を一枚やつた。ロダン號をほしがつたが、それは斷つた。

　C子は、今日は早く歸らないと兄に叱られますの」と云つた。しかし六時近くなつても歸らうとしなかつた。晩飯までゐられては母や女中の手まへ面白くないと思つた。それで「もう歸らないと兄さんに叱られるでしよ」と三度許り露骨に注意した。C子はやつと六時過に歸つて行つた。

　自分は何年ぶりかに女の友を得たことを喜んだ。さうして氣樂に愉快に若い女と話をしたので少し氣分の調子の高くなつてゐるのを覺えた。

　C子が歸つたあとで母は自分に女中達がC子についていろ／＼うはさして大事件のやうにさわいでゐたことを云つた。さうして「女中が藝者が素人にばけて來たのかも知れないと云つてゐたから、Aのやうな人の處へ押しかけてくる程實意のある藝者ならおいてやつてもいゝと云つてやつた」と云ふやうなことも云つた。さうしてあんな娘を持つた親はさぞ心配だらう、あんな娘を嫁にもらふ人があるだらうか、なぞと云つた。自分はいゝ加減に相槌をうつておいた。

　自分はその晩、自然にぢつとしてゐられないので、恩地の處へ行つてC子の話を可なりくはしくしやべつた。恩地は非常に興味を持つた。自分はこれを注がれないでもいゝ加減に興味をもつてゐた所を油をそゝがれて歸つて來た。

三

　翌日C子から次のやうな手紙が來た。

「男の方が三人いらしつたつてほんとは私はちつともきまりなんかわるくはなかつたんですけれども、それではあんまりおてんばに見えますからわざとすましてゐました。

　けれどもあなたがいろ／＼お氣づかひ下すつて話しかけて下すつたり、こちらへいらつしやいつて仰有つてくだすつたりします度に、涙がこぼれさうになつてありがたく思ひました。

　御兄樣のやうな方だと思ひましたけれどもあとであんまり我がまゝを申しましたからきまりがわるくなりました。

　これは上げられないつて仰有つたら私悲しくなつて憎らしくなりました。なぜならそれまであなたはほんとにお優しくつてきつと私のいふ事は何でもきいて戴けると思ひましたからそろそろ我がまゝを始めましたら叱られて、こはうござんしたの。それでてれかくしにみんなしまつてしまひました。もう／＼私にあんな大人見たいに遊ばせばとてもまゐれません。私ほんとは只ぢつと坐つててかまひませんの。

　兄さんは人にあんなことを云つておきながら自分が遊びにいつてしまつてまだかへりはしません。私はほんとにもつと居ればよかつたと思ひました。（僕はこゝを讀んだ時に居られてはたまるものかと可笑しく思つた

　私かくさず申します。私はあなたのお顏を見ました時涙が出ました、なぜかしらないんです、かなしくなりました、私はほんとに泣きたくなりました。お淋しさうに見えたのですもの。

　あなたは私をきらひですか。御返事をください。だつてあなたはきらひな者とはつきあつて上げないつて仰有るんですから。私はあなたのお友達になれるわ。

私はむつかしいこと何もわかりませんの、ただ私は自分を人間以上だと信じてゐますから大變をかしいわ。」（C子はかう云ふものゝ云ひ方をよくする。）

私は[illegible]の生れかはりかもしれないわ。私はほんとは辰年三月十日生れですから、數へ年二十一になります。

大へん子供つぽく見えませう。みんな變な顏をします。でも羊の年の數へ年十八としてゐます。なぜならさうしないと下宿の家の母さんだのをばさんがおや〳〵二十一にもなつてゐるくせにと思ひますから。

私が十八と云つてもほんとにしないんですから、あなたも十七だとおもつて下さいまし。

なぜ羊にまでとびましたと云へば十二支の内で辰と羊より外にいゝ年はないんですもの。

私うそをつくのはきらひですから年をきかれるとすぐびく〳〵します、だつてほんと申せば何だ、いゝ年になつてと風がうそらしく見えますから、ほんとにつらいんですからこれはないしよにしてくださいまし。

これからお友達の中で年をきかれましたら、Cちやんは羊の年の生れでやさしい子だと申してくださいまし、後生ですから。

もう私のまゐるのはおいやでございますか、私はづぼらですからきつとおきらひでせうと心配で心配でたまりません。

今日はいろ〳〵書きましてありがたうぞんじました、うれしくつてたまりません、兄がかへりましたらさぞよろこびませう、ありがたう。

九時」

自分はくり返して讀んだ。さうして自分は面白い、いゝ友達の出來たことを喜んだ、しかし又あまり馴々しく、うまいことを書くので恐ろしくも思つた。しかし自分は避けようとは思はなかつた。むしろ正面にひきうけてゆく處まで行つて見よう、深入り出來るだけ深入りして見よう、ひどい目にあつたら、どうひどい目に逢ふか逢つて見よう、自分はC子がいくら勝氣な我儘な利口な女であらうとも、女には負けないつもりでゐた。又自分にはC子を運命が自分に與へてくれた得やすからざる贈り物のやうな氣もした。

自分は昨日は面白かつた、貴女を嫌ひではない、「貴女には何でも云へて氣持がいゝ、來てほしいと思つた時來て呉れと云へばすぐ來てくれる氣がする、いやな時には歸つてくれと云へばすぐ歸つてくれさうな氣がする、自分は貴女と友になれることを嬉しく思つてゐると云ふ意味の手紙をかいた。しかしあまり自家に來てもらつては困ると書き加へるのを忘れなかつた。

それからC子とはよく文通した。さうして段々よしになつた。C子は恐ろしく鋭い處に手のとゞく女だ。さうしてつけ上らせればいくらでもつけ上る女だ。さうして少しでもこつちがすきまを見せるとすましてそこに入つてくる女だ。そのかはり少しも氣の毒に思はず押へつけることの出來る女だ。自分はさう思つた。さうしてその猫のやうな所が可愛く思つた。

四

或朝C子から左のやうな手紙が來た。

「私が頼りにするやうな男はまだしりません。私が尊敬した男はまだ一人もありません。ただ私のために世に生き甲斐のある人となる男はお[illegible]限りなくしります。

どんな男でも私を得たら世に限りない寶をもつてゐる得意りを持つことが出來ることとおもひます。その時私は淋しい身を思ひます。愛する男はいくらも得られます。そして私を其まゝに尊敬し愛してくれる男はいくらもしります、たゞ私のすべてを被ふ男はしりませぬ。

女王のまゝに生きてゆくのは面白いでせうか、私はいらぬ氣づかひもなく私をすべて彼ふことの出來る男に愛されて見たいと考へないでもありません。

正直に申します。

私はあなたを淋しい方と眺めました、淋しさうな貴君の姿を見ました。私は正直に申します、きつとあなたは私のためにすつきりと充實した幸をお求めになることが出來るとしりました。それだけを知つて私はそれ以上どうすることも出來ない世を呪ひます。

たとへ私のためによき命が與へられると知りましたとて私はその人の爲に自分を捨てることはいやです、しばらくはいゝとしてもどうせいやになります、そしてそれはだめです。

たゞ私が尊敬し愛する人のためにはほんとに苦しみます。私は昨日から何となく苦しみました。運命を想ひました。私は自殺するやうになつてるかしらと考へました。私はどうしても悲劇の主人公に造り上げられて居ります。

私、よくわかります、私はほんとにコスモポリタンなんです。

たいていの男は私を專有にしたがります。そして世に矜らうとします。私はよくそれを知つてゐます。そして私はだれの手にも歸ることを好みません。

そして私は世を呪つてゐます。

そして子供を呪ひます、氣味がわるいんです。ほんとに赤んぼはいやです、そして子供から大人になりかけの眼をみると胸がわるくなります。いや、あゝいやになつた。

お友達になりませう。

C子はぼかんとしました、いまぼんやりしました。

その代りあなたを慰めます、いゝいゝお友達になりませう。私はほんとに道樂者です、私はほんとに不思議な女です。自分にははつきりしてるんだけど人はちつともわかつてくれないんですもの。

あなたは奥さんが好きですか、氣味がわるくてもらへないでせう、およしなさいね、ほんたうに、私さうすればもう／＼遊びにはゆきませんよ、そしてもう逢ひません。

私はあなたを私のものにしようとは決して思ひません。第一私は自分の外に一人でも自分の係累を想ふことは堪へられませんもの、自分とそして愛人とそれだけでたくさんですから。ほんとは私、山の中かほら穴にこもりたいのです、ほんとはほんとは。淋しい貴君の姿を想ひます。そして哀れないろ／＼の男を想ひます。世の中の男はみんな動物性の女に飽きてもの哀れなうら悲しい顏をして居ます。

動物性の女は子供をこしらへるより外は何のこともしりません。私は男の人を憐れみます。そして女をにくみます。今貴君は何をしていらつしやいますか。

私はもうこの男より以上の男はないと知つた時、もう私はその男のかけから一寸も姿の現はれぬやうになりたいと考へます。

私をかくし被せる男に逢ひたい。

私、男をさがす爲にどの男にでも口をきくと思つてはいやですよ。

ずゐ分まじめなのですから。それは知つてくれませう。

おてんばのせゐでもありません、つう／＼しいためだなんていやーなこつたわ、アバヨ——

自分はこれを讀んだ時、腹を立てた。初めの五六行でかつとしてしまつた。さうしてアバヨと云ふ言葉に胸をわるくしてしまつた。とんでもない女に逢つたものだと思つた。それで自分は十二行二十五字詰の原稿用紙にうんと上手に出た自分でも痛快に思つた程わる口をかいた。

自分は之でもうこの女とも絶交だなと思つた。さうして面白い女との關係を破つてしまふことを惜しくも思ひ、安心もした。

　自分のかいた手紙には、女なんかで生き甲斐を感じることが出來るにはお氣の毒ながら自分は齢をとつてゐる。自分は貴女より美しい女や、ノーブルな女を知つてゐる。たゞ貴女のやうな自由な女を知らなかつた。その自由が今の自分には必要だつた。だから友達にならうと思つたのだ。しかし自分は自分を見上げることを女の友に強ひても、自分の方で女を見上げることを強ひられるのは閉口だ。自分は淋しい顔してゐるかも知れない。又淋しがつてゐるかも知れない。しかし淋しがつてゐてもそれは自分にとつて益があつても害はないのだ。自分はその淋しさから力をくみとることを知つてゐるから。又自分は貴女に生き甲斐を與へ得るとは思つても、貴女から生き甲斐を得られるとは思へない、「僕はもう生き甲斐を得てゐるのだから」と云ふ意味のことを激してかいた。自分はかいてゐる内に益々興奮して來た。かき上げて郵便函に入れに行つた。さうして興奮をもらす爲に一里近く離れてゐる上野まで歩いて行つた。さうして歩きまはつた。

五

　自分は十二時過に自家に歸つた、少しつかれてゐた、飯を食つてからあと矢張りまだ氣がおちつかなかつた。しかし興奮は殆んどさめてしまつた。さうしてさつきの手紙は少し書きすぎた氣もした。さうしてそれで絶交してしまふのが惜しいやうにも思つた。C子は自分の手紙を見てどうしてゐるだらう、きつと何とか返事をよこすだらう、どんな返事をよこすだらうかと思つた。自分はC子からくる返事を心待ちにまつた。さうして少し不安になつて來た。どうなつたつてかまふものか、あの女を失へばまた新らしいもつといゝ女が出來るかも知れない。そんなことまで思つて見た。さうして疲れてゐたので午睡した。三時半頃目をさますと、女中が、「速達がまゐりました」と云つて一通の手紙を持つて來た。自分はその表の字を見ると與に何げなく、「あゝさうか」と云つた。それはC子からの手紙だつた。女中が去ると自分は手ばやく封を切つて讀んだ。手紙にはかうかいてあつた。

「今少し氣がおちつきましたから、一枚かきましたけれど、それはよします、そしてかきあらためることにしました。

　御手紙をいきなりやぶりましたからもうよみ直しが出來ません。しつてゐます。みんなしつてゐます、ごめんなさい、どうぞ。

　昨ばんねるまでいろ〱あの手紙を出したことについて、かいたことについて後悔してゐました、私はほんとに馬鹿です、ほんとに馬鹿です。少し上氣してゐます。私はけさのお手紙をくり返しくり返し拜見してゐましたところへあとのが來ましたので、すつかり上氣してゐます。はげしい動悸を感じます。

　貴君に惡く思はれれば私は大へん價値のない女になると知りますとき、私はたまらなくなります。

　ざんこくだとおもひます。私は我がまゝより知らないんです。自分のしたことにかまはず人を恨みます。私はきつとそばに居ればかみつきます。

　C子はいゝ子だとお思ひ返してください、後生ですから。そしてあなたもあの手紙をやぶいてそしてすぐC子はいゝ子ですと御返事をください。すぐ電報か速達でなければいやです。

　より美しい女、ノーブルな女をしつて居りますと云はれる程つらいことはありません。な

ふだていの苦痛ではありません。私はうつくしいためにゝ氣品のために、自分がいゝとは夢にもおもひません。けれども自分より美しい女、ノーブルな女のあることを思ふのはいやです。そしてそしてあるとは思ひません。あつたつてきつとつまりません。私は少しでもくはしく自分の立場を知らせたいとかんがへました。そしてごつちやになりました。私は正直に申します。そして私はたゞ無邪氣と我がまゝと正直より知らない子供です。

あなたを尊敬してゐるかゐないかは手紙で申したつてだめだとおもひます。そして言葉で通じあふものならつまりません。

私はあんなつまらない言葉をならべた中へ、寂しいあなたのお姿と、かいてゐるうございました。何のためにお寂しさうだ位はしつてゐます。

私は涙ぐんでゐました、すぐあなたとお逢ひした時涙が出ました。私は自分の感情が自然だと思ふより外にたよるところがありませんでした、今だつてありません。

その感情がきたなかつたり、けがれてゐたり、淺はかだつたりするならもう私は世の中に生き甲斐はありません。私はあなた一人にだつて見られて生きてはゐられません。あなたを敬してゐたつてあなたから愛されるとか何とかなくては私はいくらあなたがいゝ方だつてにくまれる方を尊敬してゐるのはつらいからいやです。もういゝから、もうわるく思はない、決して、と云つてくださいますまで私はつらい思ひをしてまいつてゐます。

そしてあなたはたゞおこりつぽい人ですわ、こはい方。もう／＼私は失禮なことは申しません。

きのふだつてそんな意味ではなかつたんですもの。

御申しわけおやないんですけど、あれは私のかき方が大變わるうございました。

私はほんとはつらさにあきてゐます。すぐ笑ひたくなります。

ごめんなさい。私の心は一人でつらく泣きますから、もうせめないで下さい、ゆるして下さいまし、すぐゆるしてくれなければ私はやけになります。」

自分はそれを讀んだら(すかすつかりすきになつた。とうとうはね起きた。とう[illegible]すぐ郵便局へ出かけて、ア[illegible]すこと電報を打つた、電信用紙を掛の人にわたす時、[illegible]自宅に歸るとき[illegible]の手紙[illegible]郵便局へ行つて速達で出した。[illegible]思つたので安心して

するとまもなく昔通りこの手紙が來た。僕が前の手紙をうけとらない内にかいた手紙だつた。それにはかうかいてある。

「こゝの家の女の子が速達を出しにいつてくれゝ名前を注意されてかゝされ[illegible]すからさつと子供つぽい字でせう。

ものなつかしいうれしい間柄を自分の手でこはしたと思ひましたらいやになりました

もう私は忘れ[illegible]私を見[illegible]ないでいつまでも仲よしになつてくださいまし。私のわるいところはきつとなほしますからいゝ子供にしてくださいまし、私はほんとにいけません、いけません。[illegible]私はわすれてしまいます。

お親しくしてくださいました、私もほんとにほんとにお親しくぞんじました、私は今日にもお目にかゝりたいとぞんじましたけれどほんととはまだすぐれなくて床に居ります、氣が立ちましたから大變わるくなりました。

私もうあはないわ、[illegible]

私は[illegible]の眞似が上手ですつて。

あなたも私に理窟を云つてはいやです、私は[illegible]、常識のない頭はすぐ[illegible]からかります。このまゝ、このまゝ、どうぞ、どうぞ、Cちやんはそれはいけない[illegible]、[illegible]かつて[illegible]に仰有つて下さいまし——

六

自分は[illegible]C子が好きになつた。[illegible]C子と喧嘩して仲な[illegible]たことを[illegible]、こんなことをしてゐる内に[illegible]當に[illegible]未だ[illegible]C子に心を許すことは出來なかつた。

其後C子に逢つた時C子は、[illegible]手紙には「お常に貴君が出てゐます[illegible]」と云つた[illegible]

自分はそれに同感しないではゐ[illegible]た。[illegible]として「君の兄さんにもしかして見られると困るから」と云つた。しかしそれは半分以上虚だつた。其時分自分はC子の手紙[illegible]大[illegible]ない[illegible]何[illegible]ら手紙をかいてゐた[illegible]平氣で露骨に手紙を[illegible]たり[illegible]その後[illegible]C子[illegible]手紙[illegible]た。

「Cちやん[illegible]の中でバタ／＼とはねまはつてお母さまお母さまつて泣きごゑをだします。[illegible]夢をみましてございます[illegible]泣きな[illegible]

[illegible]

この宅の小母さんと[illegible]

C子はしづかになりますとしみ／＼天下に[illegible]人[illegible]ことを[illegible]

私はこれ[illegible]存[illegible]

私は子供の時から[illegible]出來ませんでした[illegible]の半分は[illegible]みました。私の生れたときはどこへ私の籍を入れようかと母や父や母の姉やが相談しました。[illegible]私はK様の長女として伯母の子につ[illegible]

K伯母は世界一の美人と云つても耻かしくない程自然のまゝに、そして技巧の極みをつくしたやうな女です。そして美しい優しい露にぬれたやうな情をもつた女です。

私のやつと七つになつたとき母の子につけました。それはどうしても母がお嫁にゆかないと[illegible]した。それから[illegible]の時父は長女に[illegible]みんな大き出世[illegible]そして去年の九月父を[illegible]はりました。[illegible]私を[illegible]

私は父籍を伯母の家へうつされました、[illegible]私は父の[illegible]きずつけるのを恐れたためなたですつて。

私は[illegible]この子でも[illegible]母の子で[illegible]ないと思つ[illegible]けれども[illegible]私は十六七の時クリスチャンになりました。[illegible]正しい道を[illegible]泣いたり、母をいぢめたりして母をお[illegible]す。母をいぢめたことをほん[illegible]

時でも不幸と不孝の意味をごつたにしてゐるものです、母にすみません、すみません、不孝の子と思はれるためにか子供の時から我がまゝを許されました。田舎の人は私のことをみんな羨ましい中心にしてゐました。ほんとに我がままをしました。
　母もあまり我がまゝをすぎてもう取り返しがつかないであらうと恐ろしがりました。私が今求めて不自由するのをみんな神わざと云つて恐れて居ります。みんなに妙な感じをあたへました。私は死におくれて困りました。もう死ぬわけにもゆきません、生きてゆかれるだけ生きてゆきます、苦しくつたつてしかたがありません。
　急に私はあなたが頼りになりだしました。いけないことだと思ひましたけれど頼る方が出来たやうな力づよいかんじがしだしました。
　ごめん下さい、決して我儘を申しませんから私のことを忘れないで下さいまし、私はすぐ涙がこぼれます。
　ほんとになぜこんな子になつたかとをかしくなります。
　けれども私はいつまでも小鳥のやうにいやな顔はしません。私はしづんだ色やきたない顔はいやですから。いつまでもはれ／＼としてゐます。そして泣きたいことをうたひます。
　ほんとによく考へれば私はあんまりのんきではゐられません、もう私はほんとに父から貰つたお金をなくしました、そして今月は母に少し貰つたお金と、そしてお嫁にいつたお友達が少し貸してくれたのとですごしてゐますからきつと困りだすかもしれませんから、今のうちに何とかしなくてはならなくなつてゐます。いやな田舎の人がお金をおとりなさい、おとりなさいと申しますけれど私はちつとも父をわるくおもひませんから、もう／＼お父様やお母様へ私の苦労はかけたくありません。そして私からきたない言葉はだしたくありません。お父様がもうかまつてくれなければ私はおさいそくはしないとおもひます、そして兄は見てゐられないものですから、心配しますから今月もお友達が貸してくれたお金と、母から貰つたのと両方見せてこれだけ母さんが送つてくれました、そしてこれから毎月くれますから心配がないわ、うれしいわつて云つてやりましたら、兄がお前は一生お金にえんがあるんだつて申しました。そして私はだましたのがうれしくてしかたがありませんでした。
　こんなことを申し上げてもよいことでしたらどうぞどうしたらいゝかをしへてくださいまし。
　お手紙にかゝないでくださいまし、兄はしりませんから、私はお兄様のやうに存じます、ごめん下さい、又涙がでました」
　この手紙をもらつて益々C子が好きになつた。しかしC子の金に困つてゐることは視しい女にもおくびにも出さなかつた。それを云つて自分がC子に利用されてゐるやうに思はれるのがいやだつたから。よく女から猜疑心をもつた面地で、C子さんはどうしてくらしてゐるのだと聞かれた。その度に、お母さんから内證に送つてくれる金でくらしてゐるのだと云つた。
　しかし自分はその手紙の返事に少しあいまいな所を疑つたやうなことをかき加へておいた。

七

　するとC子から又手紙が来た。
「何でも御存じと、すぐ私は安心して終ひますと、もうすつかり御話し申したやうに存じまして安心してしまひました。考へれば生れてからたつた一度お目にかゝつた方がそんなに何でも御存じの筈はないのにいろんなことをお話し申してとんちんかんなことがどつさりございませ

う。さうして細く物を想ひますと私は泣きたくなつてしまひます。私は誰にも話したことのないことをばみんな御話してしまひました。そしてまだ〳〵お話しない私のことがあります。そして私はいろ〳〵のことをして居ります。私は何でもないと思ふことが人には意外の事であつたり、罪とゆふ名になつたりして居ります。そんなことがうるさくつてしかたがありませんから何でも平氣にしてそして自分をごまかして居ります。

ほんとに私も利口さうでまぬけでこまります、それは伯母に申させますと世間をしらないからだ、世間を見ずに、人にもすれずにそして世間をこはがらないからこはいと申します。

どんなに私はKのお母さんがすきかしれません。お母さんよりKのおつかさんがすきでたまりません。お母さんと呼べば母がハイと答へます。一人居るときはおつかさんとよべば伯母がアイと答へます、Cちやんて私をよびますと私はアーイと甘つたれて答へます。母がFちやん(C子は本當の名をF子と云ふのだ。呼びいゝ爲にC子とかりに云つてゐるのだ)と呼びますとハイと答へます。(中略)

そして私は自分をちつとも大切に思ひませんでした。私は自分のからだも生命をもちつとも大切に思つてゐませんでしたから、生きてゐることを何よりいやと思つてましたから。

只一つ想ふことは私の感情は月よりも星よりも清水よりも清らかに美しく澄んでゐると想つてました。そして自分の感情にあこがれたり何かしてゐました。その代り私のして來たことをお話したらあなたにあいそをつかされはしないかと心配になつてたまりません。たゞ正直にいたします、そして私はほんとに無邪氣ですから、邪すゐをしないでお叱りなすつてもかまひませんからだまつてそつぽをむいても取りあつて下さらないやうなことになりませぬやうに。私はほんとに悲しいことに思ひますから。

そしてほんとに私何でも私のしたことをみんなお話しますから、ほんとにわるいことでしたらばもう〳〵あらためますから、あいそをつかさないやうにしてくださいまし。私はたゞこれを心配してゐます。

あしたどうぞお目にかゝりたうございます。新橋へまゐりまして婦人待合室に居りますからCちやんつて呼んで下さいまし、たのしみにして居ります。

ほんたうは私ね、こんなおとなしいことはちらちらと想ふばかしなんです。もうお兄さんのやうな氣がしてゐて何でも私のことに心配して下すつて、そして私をば可愛がつて下さる方だと思ひこんでしまつてゐます。

私はほんとはちつとばかかもしれません。

優しくされますとすぐ甘えたくなりますから、かんにんしてくださいまし。

私は苦勞ばかしあつて、ふとらないのつてだれにもいひますと、羨ましい苦勞ね、何の苦勞なんですかつてみんなひやかします。私はその顔をみますとだまつて笑ひます。

しく〳〵泣いてるときなんかだあれもしらないんだと想ひだしてつまらなくなつたり、うれしくなつたりします。

あしたばかりまちます。一時半、きつと四時に出します」

八

翌月六月一日の十時に新橋に自分はC子とおちあふ約束をした。自分は九時半頃に行つた。少し早すぎたと思つたが、きまりのわるい、心細い氣をさせながら婦人待合室に見に行つた。C子はまだ來てゐなかつた。安心したやうな氣もしたが、なほ落ちつかないやうな氣もした。

自分は若い女を待つてゐるので女を待ち合せるやうな氣持にはなれなかつた。何となく氣がとがめた。自分は若い女と遠足するのは生れて初めてだ、それでなほ氣がおちつかなかつた。

自分は從妹と一緒に三崎から夜の汽船にのつて歸る時、客が多いのでぴつたり身體をくつつけてゐたことがあつたが、その時人々に見られても少しも氣がとがめなかつた。その心持になつてC子を自分の從妹の心算になつてゐればいいと思つたが、それは出來なかつた。十時になつてもC子は來なかつた。來ないのか知らん、十時半迄待つて來なかつたら歸つてやらうと思つた。自分はこんなことをするのに一番不適當な男としか思へなかつた。國府津行の汽車は十時十五分に出る。自分はそれを知つた時にそれに乘らうと云ふ氣があつた。十時に逢ふ事にきめた時、自分は十時十五分の汽車があることを知らなかつた。汽車は何時出てもいゝから十時に集らうと思つたのだ。さうして其處でそのさきのことは相談しようと思つてゐたのだ。しかし自分は何時のまにか、二人で江之島に行かうと云ふ氣になつてゐた。さうして十時十五分の汽車のあることを知つた時、おあつらへ向きの汽車があるのを喜んだ。C子も自分が存外氣がきいてゐると思ふだらうと思つた。

この日曜、雨が降つてゐたが十時頃にはすつかりあがつてゐた。人々は皆汽車にのりにどんどん改札口から入つてゆく。五分すぎになつてもまだC子は來なかつた。十分過になると鈴が人の氣をいらだたせるやうになつた。この時おちつかない自分は遠慮しながら新橋の正面の入口の石段の上に立つて來る俥を一々注意してゐた。すると一臺の俥がかけて來た。見るとC子がのつてゐる。自分は赤面した。俥夫は蹴棒をおろした。C子は顏色のわるい淋しい顏をして高下駄をはいて俥からおりた。さうして自分を見て一寸微笑みながら會釋した。其處に集つてゐる澤山の俥夫は自分達を見てそれとわかつてゐると云ふやうな顏をして、顏見合せて嘲笑した。だらしなく木綿の着物を袴を着ずに着てゐる書生と、顦顇した若い女と、彼等はすつかり自分達の心を見ぬいた心算になるのは當然である。自分は俥夫から見えない處に姿をかくした。さうして自分がC子の手紙で實則してゐるをよりもC子が醜い、不快なのを不快に感じた。C子は病氣擧句で顏色が非常にわるかつた。來なければよかつたと云ふ氣もした。しかし自分はあわてて、今出る汽車にのつて江之島にゆきませんか、と何となくもぢもぢしながら云つた。C子はどぎまぎしてゐた。さうして一寸自分を見つめてゐるきり返事をしなかつた。性急な自分はじれじれして來た。「のるならば早くのらなければいけません。のりませうか、江之島でいゝでせう」と云つた。C子は默つて合點々々をした。

自分は少し情けない氣がして來た。しかしすぐ決心をして藤澤迄の二等の切符を買つた。さうしてあわててプラットホームに入つた。C子は息をきつて高下駄であとをついて來た。二等の客車が見えたからすぐのつた。C子ものつていつた。誰も人がゐなかつた。二人は顏見合せて淋しく微笑んだ。

すると車掌が來た。

「何處へいらつしやるのですか」と云ふ。

「藤澤まで」と云つた。

「藤澤ゆきならばそれはその次の車です、これは神戸ゆきでこのあとにでるのです」と云はれた。二人はあわてておりた。自分は苦笑してゐた。さうして先きの車にのつた。さうしてならんで腰かけた。二人は又顏見合せて淋しく微笑んだ。同車の人は皆二人を見た。自分はつとめてC子の兄のやうな顏しようとした。C子の口元の眞似をして見た。しかしそれは駄目だつた。

二人は瘦せてゐる、二人は顏色がわるい、二人の顏には雀斑がある、二人は神經質だ、さうして何處か變つてゐる。だから二人は兄妹のやうに思つてくれるだらうと思つた。しかし顏がまるでちがふし、裝り趣味がまるでちがふ。C子は縮緬の道行のやうな被布を着て赤と白の鼻緒のついた高下駄をはいてゐた。自分は冬の鳥打帽をかぶつて、すりへつた駒下駄をはいてゐた。それに第一心に疚しい所があるから駄目だ。さぞ人々は二人をあやしいと思つてゐるだらうと思つた。

しかしそれで自分は反つて大膽になれた。

自分はC子の兄と云ふのが從兄だと云ふこと、それも血のつゞいてゐない從兄らしいと云ふことが何となく一番氣になつてゐた。自分はそれで遠まはしにさぐつて見ようとした。しかしそれは成功しなかつた。又自分の情人でないC子の兄さんがなんであらうと、そんなことを氣にするのが變な氣もしたのでいゝ加減にしておいた。

二人は餘り話をしなかつた。しても沈默の壓迫をとける爲にちよい／＼話をしかけるぐらゐでどちかと云ふと話さない方がいゝぐらゐの程度の話きりしなかつた。さうしてすぐ默つてしまつた。

その内に自分はC子の白粉の香の強いのに閉口した。自分は何氣なく外を見るふりして窓をあけたけれども矢張り白粉の香の強いので閉口した。「隨分白粉をつけてゐるのですね」と自分はとう／＼ふざけてゐるやうに云つた。しかしその言葉にはいやになる程毒があつた。

「さうつけてはゐませんわ、妾白粉をつけるのは嫌ひなのですもの」

「それでも耳の中までついてゐるぢやありませんか」

二人は又默つてしまつた。自分は窓から外を見た。さうして本當に來なければよかつたと思つた。しかしさう思ふと又C子が何となく可哀さうになつて來た。察しのいゝC子はきつと自分の氣持を察してゐるだらうと思つた。自分はどうかしてC子が好きになりたく思つた。C子がもつと美しかつたら、本當に女王のやうに氣高かつたら、自分はC子と一緒にゐることを誇ることが出來たらと思つた。自分は改めてふりむいてC子の顏を見た。二人は顏を合せた。自分は又窓から外を見た。

するとC子は立つてはゞかりに行つた。さうして中々歸つて來なかつた。自分はどうしたのか知らん、汽車は嫌ひだと云つてゐたからよつたのか知らんと思つた。さうしてふり向いた。すると隣の客車にのつてゐる帝劇のSと云ふ女優がふり向いてこつちを見てゐるのに顏をあはせた。その女優とは有樂座や帝劇でよく顏をあはせたことがあつた。勿論話したことはないから先方では僕の名を知らないにちがひないが顏だけは知つてゐるにちがひないと思つた。自分はその女優にC子、それも銘酒屋の女とまちがへられるC子と一緒にゐることを見られるのを喜ばなかつた。

C子は中々出て來なかつた。少し氣になつたけれども自分のことだからすましてゐた。さうして氣になるので時々もう出てくるかとふり向いた。その度にこつちをふり向いてゐる女優と目のあふのを覺えた。その内にC子は歸つて來た。「よつた？」と聞いたら「いゝえ」と云つた。自分は隣の室に女優のゐることを知らした。C子はふり返つて見て、「あれが女優なのですか、まるで田舍娘のやうぢやありませんか」と云つた。自分はこのC子の云ひ方が癪にさはつたので「昔よりはずつと綺麗だ。自分達はあの女優が好きなのだ」と云つてやらうと思つたけれども、女の心を尊敬してだまつてゐた。C子は

その後、氣にするやうに時々ふり向いた、さうして「こつちをまだ見てゐますよ」と云つた。自分もふり向くと顔をあはせた。自分はなるべくふり向かないやうにした。さうしてその女優の話聲や笑ひ聲が聞える度に自分達のことを話して笑つてゐるのではないか知らんと思つた。さうして少ししてふり向いたら、女優は席をかへてふりむかずに此方の見える處に腰かけてゐた。自分にはそのわざとらしい圖々しさが侮辱の意を示してゐるやうにうけとれた。

藤澤でおりて二人は電車にのつた。賑やかな處がいゝか、靜かな處がいゝかと云つたら、C子は靜かな方がいゝと云つた。それで不意に鵠沼にゆくことにきめた。鵠沼で電車からおりた。すつかり晴れてゐて日が強く照りつけて暑かつた。「俥にのりませうか、それとも歩きませうか」と云つたら、「どつちでも」とC子は云つた。「それならゆつくり話しながら歩きませうか」と云つたらうなづいた。それで歩くことにした。

自分は出來るだけゆつくり歩かうとしたが、やゝもすると早くなりかけた。さうしては氣がついて又ゆつくり歩いた。C子は高下駄なので歩きにくさうだつた。しかし神妙に汗をふきふきついて來た。白粉は處々はげた。自分は思ひついたやうに時々話しかけたが、直ぐに二人はだまつてしまつた。C子の方からは殆んど話しかけなかつた。人通りのない、かわききつた道を二人はとぼ／＼歩いて行つた。空も砂も松も日に照りつけられてギラ／＼してゐた。隨分厄介な處にC子を引つぱつて來たものだと思つた。さうして氣の毒に思つた。

晝飯時分だつたので自分は晝飯食ひに一度も行つたことのない鵠沼館へ行かうと思つた。東屋の方には顔を知つてゐる女中が居るので。

人家のならんでゐる處に出た。三四人子供が遊んでゐる。自分達が其處を通り過ぎると一人の子供が「やあ女が高下駄はいてら」と云つた。すると他の子供も一緒になつてはやした。すると家の中から女の人が見に出て來た。二人は又顔を見合せて淋しく微笑んだ。鵠沼館に入ると客や女中が好奇心をもつて見た。さうして二人の風評をして笑ふのが聞えた。二人は二階の一間に通された。晝飯をたのんだ。暫らくして女中が來て他の靜かな室に御案内いたしませうかと云つた。自分はその意味を感じて少し不快を感じた。自分達はそんな人間ではないと云ひたかつた。しかし實はその室に行つて見たくもあつた。自分の心の内にはあるものが時々頭をもたげてゐた。C子に「どうしよう」と云つたらC子は「こゝでよろしいわ」と云つた。

まだ客や女中が二人の風評殊にC子の風評をして不遠慮に笑ふ聲が聞えた。C子はすまして縁側に出て風評をしてゐる人の方を見た。

自分はC子にこの前C子が展覽會に來た時や自家に來た時皆がいろ／＼風評した話をした。C子は姿の風はそんなに變つてゐるのでせうかと云つた。さうしてよく往來を歩いてゐても何とか云はれますと云つた。

その中に飯がはこばれた。用のない女中が見に來た。C子はすましてゐた、自分もすましてゐた。自分はC子の手をいたづらしたく思つたが、する勇氣がなかつた。

飯食つて暫らくして二人は宿屋を出て海岸の方へ行つた。途中に小さい川があつて假り橋がかゝつてゐる。橋を渡り切つて濱へおりる處は丸太が二本渡してあるだけだ。C子は高下駄だから其處はとても渡れない。自分は手をとつて下してやらうと手を出したら、C子は身體全體を自分にもたれかけた。自分はC子を抱いておろすより仕方がなかつた。一町許り離れた渚に漁師が居て自分達の方を見てゐるのに氣がついたから少し氣まりがわるかつた。又見せつけ

るやうになつてもいやだと思つた。自分は何氣なくC子を濱の上におろした。

自分は初めてC子を見た時から、C子を處女だとは思はなかつた。C子からくるいろ／＼の手紙を見てなほ處女ではないことを知つた。さうしてC子には何をしてもいゝと云ふ氣がしてゐた。しかしこの時なほその感じが強くなつた。自分の内のいたづらものは自覺をもつて頭をもたげて來た。

二人は日の照りつけてゐる海岸に行つた。砂地をC子は歩きにくさうに歩いた。C子は江之島も鵠沼も知らないのであれが江之島だとか、烏帽子岩だとか教へた。C子は別に注意して聞いてはゐなかつた。二人はくたびれたので竝んで濱に腰をおろした。今迄とちがふ理由で自分は默つてゐた。自分は既に二三年前の自分ではなかつた。自分の心は童貞からよほど遠ざかつてゐた。自分の心の内ではなんだかあせるものが居た。

何しろまぶしいのと暑いので「もつと涼しい處へ行きませうか」と云つたら、「えゝ」とC子は云つた。二人は立つた、さうして又歩き出した。C子は晝よりも夜が好きだと云つた。まぶしいのは嫌ひだと云つた。二人はちがふ橋を渡つて松原の方へ行つた。二人は涼しい日陰をさがした。靜かな處をさがした。人から見られない處をさがした。人家の見えない處をさがした。しかし何處へ行つても松が小さいので日陰がなかつた。又何處へ行つても一人か二人の人の姿が見えた。少し大きい松があると皆別莊の庭木だつた。二人は汗をかきながらあつちこつちとうろついた。「あすこに行つてみませう」と何度も出かけて何時でも失望した。「暑いでしよ」「くたびれたでしよ」と自分は何度も云つた。C子は「いゝえ」と云つて汗許りふいてゐる、白粉は大概はげてしまつた。さうしてゐる時、不意にC子は、

「やつと氣分がおちつきました」

と云つた。自分は自分の心を見ぬかれた氣がした。自分がC子に不愉快をもつてゐるのを感じてゐたので今迄氣がおちつかなかつたのだらうと思つた。二人はいゝ處を捜しあぐんだので小さい松の木の小さい陰に腰をおろした。立つともう日があたるのだ。

自分はC子の手を何げなくいぢつた。C子は默つていぢらした。それから自分は自分の家にC子が來た時のことを思ひ出して何氣なく顔をさすつた。C子は矢張りすましてゐた。其處は人家の前で時々若い男の人が出て來たので二人は又立ち上つて「そろ／＼歸りませうか」と云ひながら電車の方へ歩いた。しかしそれなりで電車にのる氣にはなれなかつた。

二人は道々日陰をさがした、人通りのない道をえらんだ。一處往來からまるで見えない處があつた。方々氣をくばつても人が見えなかつた。二人は其處へ行つた。日陰は殆んどなかつたけれども二人はさし向いてぼんやり立つてゐた。

自分はC子の手をいぢつたり、くすぐつたりした。しかしC子は默つてゐた。自分は「少しもこはくありませんか」と云つて見た、さうしてC子が默つて微笑んだ時、「隨分圖々しいのですね」と云つた。二人は其處に腰をおろした。C子は深入りするだけ深入りしてしまつた。C子は子供は生れないと云ふことを保證した。しかし接吻する勇氣はどうしてかなかつた。二人は深入りしてしまつたらさつさと電車の方へ行つた。自分は別に後悔もしなければ不安も感じなかつた。さうしてそれは相手と齢と自分の思想のせゐだと思つた。

しかし自分はC子に惡いことをしたと云ふ氣をもつのがいやだつたからC子にゐる

いことの責任をもつてもらふことにした。
吉澤についた時はもう夕方だつた。汽車に乘るのに少しまがあつたので茶屋に休んだ。人々は二人を注意したけれども自分にはそれてゐたので別に不愉快を感じなかつた。さうしてこれから先きのことを考へて見た。自惚の強い自分には不安がなかつた。たゞあまりC子が平氣だつたのでいろ〳〵の男と關係がありはしないか、でもなつてゐはしないかと一寸思つたがすぐうちけした。さうして何が起つて來てもそれは自分を成長させることにすぎないと思つた。二人は前よりもよく話をするやうになつた。
汽車がくる時間になつたので茶屋を出た。汽車にはあまり人がのつてゐなかつた。自分達は一つの車が一等と二等にわかれてゐるボーギー式の車にのつた。入口に二人許り人がのつてゐたので一番遠くの隅に罪人のやうな隱遁をきめてこしをかけた。其處が一番一等室に近かつた。二人はいろ〳〵話をした。C子は不意に、「こんなことをおつしやるのでいやになりました」と云つた。自分はすぐその意味を察して、「だつて僕には子供の生れる時のことがまざまざと目に見えるんですからね、貴女のやうなたちでないのですから」と云つた。自分はC子がお□年前に二人の子供役者に關係したことを白狀した。自分は別に不快には思はなかつた。反つて自分の責任のかるくなるのを覺えた。さうして別にそれでC子をいやな奴とは思はなかつた。自分にはそれが何だか自分が今迄藝者や女郎と話をしたことのないことも自然のやうに、自然のことのやうな氣がした。C子は初め自分が遊んだことがないのを信じなかつた。しかし信じられた時、感心したやうなことを云つた。自分には反つてそれが變に思へた。C子のやうな女は道樂者が好きなはずだときめてゐたから。
自分はC子に持つてゐた金を少しわたした。C子はすましてそれを受けとつた。自分は何でも困つてゐることがあつたら遠慮なく云へといい、出來ないことは出來ないと云ふからと云つた。二人はわりに仲よく話をした。何んだか自分はC子が安心して自分にすつかりたよつてゐるやうな氣がした。自分はC子に、
「君は非常な善人にも思へるし、非常な惡人にも思へる」とふざけたら、C子は、
「妾にもさう思へますの」と云つた。
新橋についた時は八時頃だつた。自分の乘つてゐる客車には人目がつきはしなかつた。それもいゝ、と云ふ方の間にわつた。自分は何となくあと戻りするのがいやだつた。それで□をあけて一等室の方から降りようとした。C子は少しあとからついて來た。他に二人あとからついて來た。一等には女の西洋人が一人より乘つてゐなかつた。自分がその人の前を通つて降りようとしたら、「新橋？」とその女の西洋人は聞いた。自分は「イエース」と云つた。自分にしてはうまくすぐ答が出來たと思つて少し得意で降りた。さうして改札口を出て電車にのらうと思つて、人力車のじ符を賣る處の前を通つて俥の澤山ならんでゐる石段をおり切つて五六歩歩いた時、後ろから自分達を鋭く呼びとめる人がゐた。ふり向くと二人の驛夫のやうな人がづか〳〵と進んで來て、
「貴君方は、二等の切符で一等にのつて來たのでせう、一寸こつちに來て下さい」と云つた。自分は「いゝえ」と云つた。「それでも一等からおりるのを見てゐましたから誰云つても駄目です」と云つた。
自分はかつとした。しかし氣を無理に静めようとした。
前からの人の注意を惹いてゐるのを感じてゐた自分は、すべての人の注意が自分達二人に集

るのを覺えた。近くにゐた俥夫などは近づいて來た。人の輪をつくられてはたまらないと思つた。自分の心は少し逆上せて來た。

「降りたのは一等の入口にはちがひありません。しかし乘つて來たのは二等にちがひありません」

「二等にのつて來た證據がなければ、一等にのつて來たと見るより仕方がありませんからね」と云つて二人を見ながら笑つた。

「一等にのつてゐた西洋人に聞けばわかります」

「西洋人はもうどこかへ行つたでせう。そんな無理なことを云つても駄目です」

自分はなんでも早く歸してもらひたいと思つた。人だかりがするのがいやだつた。知つて居る人に見られては困ると云ふ氣もあつた。自分は腹も立ち氣もせいて來た。

「一等の入口から降りたのがわるいのなら知らなかつたのですから之から注意しますが、しかしのるのは二等にのつて來たのです」

「まあどちらかお一人こつちへ來て下さい」

自分はどちらか一人と云はれたのを幸ひに思つてすぐ承知した。さうしてC子に別れを告げて二人のあとに從つた。道でさすがの彼等も二人に一しよに來てくれと云ふのは心に疚しくつて云ひだせなかつたのだらうと思つた。彼等は二人を一緒に呼んで侮辱したかつたのだらう、退屈の暇つぶしと一種の反感から自分達を見のがすことを欲しなかつたのだらうと思つた。さもなければよし一等の口から降りたことが當に値することであつても見のがしていゝはずだと思つたから。

自分は小さい室に導かれた。自分をつれて行つた二人は自分を罪人のやうに三十五六の机を前にひかへてゐる男の前につれて行つた。自分はなるべく尊大にしてゐた。

自分は其處でも同じことを云ひはつた。自分は大人氣ないと思つたけれども、相手が相手だと思つたけれども怒りを帶びたものの云ひ方をした。三十五六の男は益々冷靜になつた。

「そんなことを云つても現在見てゐた人があつたのですからな。お二人、もう一人の人をつれておいで」と靜かに云つた。自分はこの時この男は自分が多分藝者の女と一緒に旅行としやれこんでゐるからいぢめてやらうと思つてゐるのだらうと思つた。しかし自分は爭ふよりもなるべく早くかたをつけたいと思つた。

「一等からおりたと云ふ事實だけで罰金を出さなければならなければ出します、いくら出せばいゝのです」ととうとう云つた。金を出すのかみすみす負けたことになるとは思つたけれども。

「一圓十錢です」と男はすまして云つた。自分は蟇口をしらべたら一圓十錢はなかつた。「持つてゐない」と云つたら、「あるだけ出しておいて歸つたらすぐ送つて下さい」と云つた。「とりに人をよこして下さい」「そんな暇な人はゐませんからね」「明日でいゝでせう」「いゝえ今晩中にとゞけてもらはないと困ります。つれの方でも持つてゐるでせう」「もう先きに歸つたはずです」そんな問答の末、自分は自分の番地と名前を紙切にかいた。さうして蟇口に入つてゐる金を五厘錢まで机の上にならべた。電車の切符まで出してやらうかと思つたけれどもそれは滑稽になるからやめた。

すると三十五六の男は金を持つてゐながらかくしてゐると思つてゐたと見えて、「それならあとでよろしいからまとめて持つて來て下さい、今晩中にですよ」自分は之だけ一先づおいておきますと云はうと思つたけれども、爭つてもつまらないと思つたので又蟇口にしまつた。さうして急いで其處を出た。電車にのらうと腹を立

てながらゆくと、C子はちやんと前の處に待つてゐてくれた。俥夫達の輕蔑の目と好奇心の目を一身にあつめながら。さうして心配さうに「どうでした」と聞くから、之々だと云つた。「お金なら持つてをりますわ」と云つた。自分はC子から二圓もらつて又あと戻りをした。

三十五六の男は「どうもお氣の毒でした」と云つた。自分は「どういたしまして」と云つて引きかへした。

この事があつたので自分は何と云ふことはなしに急にC子が好きになつた。可愛くなつた。さうして少しもC子が僕の過失をうらまずに、「妾が御一緒だつたからですよ、他におりた人があるのですもの」と云つた時涙が出る程C子が可憐に可愛くなつた。二人は電車にのつた。自分は銀座でC子に別れをつげて新宿行にのつた。

この最後のことがあつたのでその日の遠足は二人の間を密接にするのに大效があつた。

九

その晩自家に歸つてから二三の友にハガキをかいてC子と鵠沼に行つたことと、新橋の出來事を簡單に知らした。さうして初めてC子の思つたより醜いのが氣になつて不愉快を感じたけれども新橋のことがあつたので涙が出る程好きになつたとかいた。

自分は友達にC子を、醜いと殊更にかいたのはあとで友達から、そんなことはないよ、中々綺麗ぢやないかと云はれたかつたからだ。實際氣になる所があつて氣になつたのは事實だつたけれども。

十

そのことがあつて三日目の午後に、自分は小山の處へ行つて夕方大津の方へ廻ると云つて家を出た。

小山の處に五時半頃迄ゐてそれから大津の方へ廻らうと思つてゐたが、小山が五時頃迄に行かなければならない處があるので自分は四時頃小山の處を辭して一先づ家に歸つた。

歸ると女中が不在に三時頃C子が來たと云つた。さうして僕のゆくさきを聞いたと云つた、さうして小山の處に電話があるかと云つて、ないと云つたら番地を聞いて歸つたと云つた。

自分は之を聞いてかつとした。自分に疚しい處があるのと、C子の素性をまだはつきり知らなかつたので、自分は一種の邪推をした。何となくC子が脅迫しに來たやうな氣がした。さうして金でもゆする心算ではないかと思つた。自分はかう云ふ考への頭に浮んだことを悔んだ。しかし疑つた。

さうして自分はその怒りをもらす爲にC子に手紙をかいた。

「何の用があつて來たのか知りませんが、くるなら前に手紙を下さい、さうして僕の思はくを聞いてから來て下さい、不意に來てもらつては困ります。尤も絶交されたいならば毎日でもいらつしやい。逢はないだけです。しかし絶交するのがいやならば僕の許しを得ない内は來てくれては困ります。電信も電話も速達も困ります。以上」

さうしてすぐ郵便函に自分で出しに行つた。少しは氣分がおちついた。それから晩飯を食つて大津の處に出かけた。

大津に行く途中自分はC子を疑ひすぎたと思つた。C子はたゞ不意に自分に逢ひたくつて來たのだらう、たゞそれだけだらう、あいつのことだから來たくなればそんなことはやりかねないと思つた。大津の處へ行つたら、先刻一寸自分が不在の時にC子さんから電話がかゝつて君が來たらすぐ、電話をかけてくれと云つてゐた―

と云つた。

「しやうがない奴だな」と自分は笑つた。「何か用があるのだらう」と大津は云つた。自分はこの時不意に思ひついたことがあつた。「何に大概わかつてゐる」と云つた。その時「色情狂？」と云ふ考へが自分の頭にひらめいた。もしさうだつたらたまらないと思つた。

自分は大津から電話の番號のかきつけてある紙切を見せてもらつた。それにはたゞ番號きりかいてなかつた。何處からかけたかわからなかつた。

自分はそれでもわかるのだらうと思つた。さうして其處に電話をかけた。さうして「下谷〇〇〇〇番ですか」と云つたらさうだといふ。C子の名を云つてその人が來てゐたら電話口に出てくださいと云つた。「そんな人は知りません、何と云ふ處へおかけになつたのですか」と云はれた。自分はそれには閉口した。さうしてもう一度C子の名を云つて聞いて見たら、怒つたやうに「そんな人は知りません」と云はれたので電話を切つた。自分は暫らくは何となく氣がおちつかなかつた。C子はどうしてゐるだらうと思つた。

十一時頃大津の處を辭して家に歸つて室に入ると机の上に「速達」と朱印の押してある郵便がおいてあつた。一目見てC子だと思つた。

「この手紙がつきます頃おかへりになつてくださいまし、どうぞ〳〵。そしてもうおうちに御かへりになりましたらすぐ電話で（下谷〇〇〇〇）番、みかみやへ私をよび出してくださいまし、きつときつと、七時頃迄ゐます。（もし七時よりおそくつても一寸かけてみて下さいまし）兄にしられて（鵠沼ゆきのこと）へこたれてゐましたの、お逢ひしたくつてたまらないんですから。

大津さんはおるすでしたわ。お話が澤山あります。私ほんとに今日おあひしたいの、Uまで來て頂戴。ていしや場前のていりゆう場で下りますからそこでまつてくださいまし。電話をかけてそしてすぐ出かけてくだすつてもいゝわ。あゝどうぞ〳〵おうちならいゝが。あした有樂座へいらつしやるの？　私もいきたいわ、うそ〳〵、まゐりませんよ」

自分は之を見て少したじろぐやうな氣がした。しかしこゝまでおからさまに何んでも云はれたらいゝとも思つた。自分はさぞC子がいらいらした氣分で自分の電話を待つてゐたらうと思つた。さうして氣の毒にも自業自得だと思つた。

さうしてC子はさぞ家に歸つて自分の手紙を見て變な淋しい氣がしたらうと思つた。さう思つてゐる内自分もいら〳〵して來た。

十一

翌朝七時半頃顔を洗ひに行つたら、電話の鈴がけたゝましくなつた。中々女中が出さうもなかつたので自分が出ようかと思つたけれど、聞き耳をたてゝおつとしてゐる間に女中が出た。安心したが自分にかゝつて來たのか知らんと思つてまだ聞き耳をたてゝゐた。しかし自分に電話がかゝるのには早すぎると思つてちがふのだらうと思つた。

女中の「いらつしやいます、少しお待ち下さい」と云ふのが聞えた。女中は自分の方へ來て、注意深い顔してC子から電話がかゝつたことを知らした。自分は昨夕の手紙はまだつかなかつたのか、しやうがない奴だと思ひながら電話口に出た。いきなり、

「昨日何時頃にお歸りになりました」とC子は云つた

「五時頃一寸歸つてそれから大津の處へ行つて十一時頃歸つて來た、大津の處から電話をかけたが番號がちがつたので駄目だつた」と早口に

云つた。さうして、「昨日怒つて出した手紙を見ましたか」と云つた。

C子は昨晩父が故郷から出て來たので父の宿屋に行つて泊つたので僕の手紙は見ないと云つた。さうしてよかつたら宿屋まで來てくれないかと云つた。自分は女中や母が聞いてゐるだらうと思つたのであいまいな返事をした。さうしたら「いらして下さらなければ上りますからいいわ」と云つた。自分は「來てはいけない」と云つた。さうしてあとで返事すると云つて電話の番號と宿屋の名を聞いて電話を切つた。自分はあとで自動電話をかけて相談しようと思つたのだ。

自分は氣がせいてゐたが母や女中がなんとなく看視してゐるやうな氣がしたのでゆつくり湯に入つて九時過に恩地の處へ行くと云つて家を出た。少し遠廻りして自動電話をかけたら、何とかのお孃さんですかと聞く。大概C子のことだらうと思つたのでさうだと云つた。さうしたら「たつた今御出かけになりました」と云つた。

自分はなんだか氣がいら〳〵して來た。なぜ宿屋にゐないのだらう、自分があいまいな返事をしたのであせり出して、自分が家へ出した手紙でも見に歸つたのではないかとも思つた。なんだか氣分がおちつかないので宿屋にぢつとしてゐればいゝのにと腹が立つて來た。

自分は恩地の處へ行つた。さうしてもしか家に歸つてゐるかも知れないと思つたので速達で恩地の處に午後三時頃迄ゐるから恩地へ電話をかけてくれと云つてやつた。恩地は三時から用があるのだつた。

自分はいら〳〵氣分をおちつけようと思つても、やゝもするといら〳〵して來た。C子の馬鹿にも困ると何度も間投詞のやうに云つて見た。十一時頃もしかしたら歸つてゐるかも知れないと恩地に云はれて、ためしに電話をかけて見たら、「一度お歸りになりましたが今しがた又本郷のお友達の處へ行くと云つてお出かけになりました」と云つた。自分は少し前に電話をかければよかつたのにと思つたのでなほ調子を亂された。C子と自分との間の調子は少し狂ひ出したやうな氣がした。

おちつかない氣分でぶつ〳〵云つてゐたら、それから二三十分たつて、「お内からお電話がかかりました」と女中が知らせに來た。何かと思つて電話口へ出て見ると、C子が又來たのだと自家の書生が電話口に出てゐて云つた。自分はわざと落ちついて、「それならよかつたら恩地さんの方へ來るやうに云つてくれ、處を書いて教へて上げて」と云つた。さうして恩地の室に歸つた。

「自家に來たのだ。すぐにこゝへ來るやうに云つた、あいつは本當に仕樣がないなあ、來たら怒つてやらなければ」と云つた。

さうして暫らくして、

「こつちがアクチーブな氣分だからいけないけれども、さもないと不安だ」と云つた。

十五分もたゝない内にC子は來た。自分は恩地について玄關まで行つた。C子は自分に「二十錢持つていらして」と云つた。自分は二十錢C子に渡した。C子はそれを車夫にわたした。さうして二人に從つて恩地の室に來た。父に金をもらつたので三越に行つたと云つて反物を持つてゐた。

自分はその時、C子を鵠沼行の時よりは見ちがへる程美しく思つた。(その時のC子の髮や着物は今迄とちがつてファミリアに感じた。C子に手紙でその時の髮や着物のことを聞いたら、こんな手紙が來た。自分にはなんのことかわからないが、C子の性質が現はれてゐるから、そのまゝかく、「恩地さんへ初めてまゐりました時は髮は洗つたまゝの毛をそのまゝ前髮だけふ[illegible]

ましてみんなさげて、白いしいもで一寸くゝつておきました。着物は藤ねずでめのこまかい友禪ちりめんの單衣《つたのやうな模様》に帶は横にねずみを織り、たてに褪紅色が織りまして、その褪紅色でかたばみを模様にだしてありますから一寸見ますとむぢみたいに見えます。博多の帶をして居りました。襟も着物と同じいろの少し薄いやうな絽ちりめんへ秋草が染め拔いてございました。帶上げは赤い紋ちりめん、肉色の長じゆばんをきてゐました。帶〆は白いくみ紐に辰の子の形をした青い石でとめてゐました。これでなるべくくはしくかきました」）

さうして恩地がゐるのでC子の顏や手にさはることの出來ないのを物足りなく思つた。

自分は少し調子が高くなつて來た。いら／＼した氣分が何處かへ行つて快活な氣分になつた。

「あんまり僕の處へ來ては困りますよ、來たらおこらうと思つてゐたのです」と自分が云つたら、

「たつた三度で、おこられてはたまりませんわね」と恩地に訴へるやうに云つた。

「そんな氣だからたまらない」と自分は云つた。

三人笑つた。

C子は又、「昨日貴君の處へ行つて貴君が小山さんの處へいらしたと聞きましたので、小山さんの處へ行かうかと思ひましたけれど俥夫に聞きましたら遠かつたのでやめました」と云つた。

自分は、「來てもらつてたまるものか」と云つた。

さうして恩地に、「もしC子が小山の處へ行つたら、さぞ小山は驚くだらう」と云つて笑つた。

自分は勿論、恩地もC子も心おきなく、氣樂にいろ／＼のことを話した。自分は恩地と一緒になつてC子をからかつたり、惡口云つたりした。C子は利口に答へた。

自分はC子に「今日は大出來だ」と云つた。さうして恩地に、「今日のC子は之でも餘程人間並なのだ」と云つた。

C子は怒るまねをした。

恩地の處で自分もC子も御馳走になつて三時頃迄居た。三時から恩地が用があつたので、何處へ行つたらいゝだらうと話した。有樂座にゆくのはやめにしたのだ。いろ／＼考へたけれどいゝ處は思ひつかなかつた。それで、もし大津の都合がよかつたら大津の處へ行つて見ようか、と自分は云つた。C子は行つてもいゝと云つた。それで大津の處に電話をかけて見た。

大津は家にゐた、さうして電話口に出た。それで自分はC子と恩地の處にゐることと恩地が三時から用があることを話して、何處へ行く處がないので困つてゐる。もしよかつたら君の處にゆかうかと思つてゐるがどうだと聞いた。「中田が來てゐるがそれでよければ來てくれ」と大津は云つた。「C子に相談して見よう、九分通りゆく」と云つて電話を切つた。

自分はC子に大津の云つたことを云つた。さうして中田と云ふ人は米國歸りの人だと云つた。C子は、

「妾、米國歸りだつてちつともこはかありませんわ」

と云つた。それで行くことにした。

C子は恩地に禮を云つて立つた時、三越で買つて來た反物をすまして僕に渡した。自分は何氣なくそれを受けとつた。はゞかりにでもゆくのか知らんと思つてゐた。處がそんな氣配はなかつた。自分は持たされたのだなと思つた。C子らしいことをすると思つた。自分はC子の荷物をすまして持たされてゐるのを恩地の女中が見たら可笑しく思ふだらうと思つた。さうして少し氣まりがわるかつた。C子に返さうとした

けれどもC子はとぼけてゐた。
恩地の處を出てから人通りが多いと二人は赤の他人のやうな顏して歩いた。人通りが殆んどないと何時のまにか近づいて話をした。自分は家に餘り來てもらふと嫌疑がかゝつてよくないことを話して、わかつたかと云つたらC子はわかつたと云つた。さうして少しゆくと、C子は「荷物をもちませう」と云つた。
大津の處へ行つたらC子はすましてゐた。中田が、「先生に紹介してくれないか」と云つたからC子の名を云つて紹介したら、C子は、「名を無暗におつしやるのはいやですよ」と云つた。C子はすつかり默つてしまつた。大津は蓄音機でもやらうかと云つて蓄音機を出して來て、西洋もののハッティヤファラーヤエルマンヤクベリックのものをやつた。C子はすまして緣側に出て、其處にあつた腰かけに腰をかけた。
「どうしたのだ」と聞いたら、
「少し頭痛がしますの」と云つた。その内中田は遠慮して歸つて行つた。西洋ものは頭が痛くなると云ふので今度は日本の唄をやつた。すると蓄音機にあはせてC子は小聲で唄つた。いろ〳〵の唄を知つてゐるなと思つた。さすがに役者とかんけいした奴だけのことがあると思つた。しかし別に不快には思はなかつた。自分は恩地の處でも大津の處へ來たあとでも、C子を今迄になく可愛く思つた。今C子を失ふのは可なりつらいやうな氣がした。
C子は中田がゐなくなつて蓄音機がすんだら、又いろ〳〵饒舌りだした。お嫁にゆく人の氣が知れないとか、他人のお母さんをお母さんと云ふのが可笑しいとか、お嫁にゆくと皆すぐ子を生むのが可笑しいとか、いろ〳〵女らしい氣焔を揚げた。自分達はからかつた。
C子と自分は大津で夕飯を御馳走になつて八時頃迄大津の處にゐた。C子は一寸お父さんの宿屋へ行つて女中に兄さんから電話がかゝつたら、もうお寢になつたと云つてもらふやうに頼まないと不安心だと云つた。それでそれをたのみにゆく爲に八時頃大津の處を辭した。大津は途中迄おくつてくれた。大津とわかれて、二人は十五町あるC子の父のゐる西岡と云ふ宿屋まで歩いてゆくことにした。
途中うす暗くつて人通りのない處にゆくと二人はかたく手をにぎつた。自分に今迄求めて得られなかつた自由な氣がした。さうして自分はC子に、
「だん〳〵君が好きになつた。今にたまらなく好きになるかも知れない」と云つた。さうして、「君のやうな女を偽り好きになると不安だ」と云つた。C子はどつちかなどく好きでせう、相こにしておきませうねと云つた。
明るい處へゆくと二人は何時の間にか手をはなしてゐた。二人は暗い處をさがして歩いた。自分の口をC子の口のそばに持つて行つたら、C子は接吻した。自分は初めて接吻の仕方を知つた。
西岡に近づいた時、C子はこゝいらを歩きながら待つてゐて下さい、すぐに來ますからと云つた。自分は無理してはいけないと云つた。さうして一寸待つてゐて出て來なかつたら駄目だつたと思つて歸ると云つた。
C子は反物を僕に渡して、もし駄目でしたら之をあつかつておいて下さいと云つた。さうして宿屋の方へ行つた。中々立派な宿屋だつた。C子の父は身分がわりにいゝのだなと思つた。C子は宿屋の前で女中にしては可なりの風をしてゐる女の人と話をしてゐた。自分はそばの雜誌屋で雜誌を見た。少しして宿屋の方を見たらC子の姿は見えなかつた。家へ上つたのだらうと思つた。自分はどうしてかC子が今話してゐた女はC子の母ぢやないかと思つてゐた。それ

で首尾はわるかつたのだなと思つた。暫らく歩きながら注意してゐたがC子の姿は現はれなかつた。歸らうか知らんと思つて少し歩いて見たが、念の爲にあともどりした。するとC子にあつた。

「こんな處にいらしたの、姉は隨分さがしましたわ」と云つた。さうして甘く父について來た女中にあつたので、うまくたのんで來たから、もう安心だと云つた。もう何處へ消つてもいゝのですと云つた。自分は、

「僕は自家に歸るから、御安心なさい」とわざと云つた。二人は日比谷に行つて見た。思はしくなかつたので、電車にのつて上野に行つた。暗い處を選して歩いた。C子が可愛くつて仕方がなかつた。

* * * *

二人は歸路についた。C子は家に歸ることになつた。その時はもう十一時頃だつた。C子は江戸川行の電車にのつた。自分は[illegible]宿行の電車にのつた。路々C子を一人で家に歸したので何んだか不安になつた。しかし送ればよかつたとは思はなかつた。さうして大概大丈夫だらうと思つた。その晩一晩自分の舌はC子の舌を夢みてゐた。

十二

それから二日たつて、六日の午後三時頃にC子から次のやうな手紙が來た。

一がつかり身體が疲れました。

お手紙をかきますこともいやになりました。出馴れぬ身體をこのごろ少しつかひましたためかほんとにつかれました。そして何となく重い荷がとれたやうにがつかりいたしました。きのふは一日床につきました。今日も頭が重くてしかたが御座いません。

あなたもきのふはおつかれで御座いませう。大津さんにも、恩地さんにもおついでの節よろしくお申上げくださいまし。

なつかしげな恩地さんのお顏が思ひ浮びます、しづかな湖水のやうな大津さんの姿が淋しく思はれました。

うつくしい世をこそとCはしたひながら涙ははてなくこぼれさうになります。

あのアメリカがへりの男の人が、先生先生と私のことをさも〳〵一人前の女のやうに云はれたのがおかしくにさはりました。まだ私知らぬ男にいやらしい言葉をかけられるやうにはなりませんつもり。どうぞあなたもお友達にあんまりあやしまれるやうな御うはさはおひかへくださいまし。

私はうつくしい心を持つてゐると云ふ信念がきずつけられたら何のほこりが御座いませう。

どうぞ〳〵御信用遊ばして下さいまし。

それからまことに申しかねますが、どうぞもし御力にかなひましたらお金をおこしらへ下さいまし、正直に申上げれば只今のところ百圓ばかりなくては身動きが出來ないんですもの、どうぞ十二日までに願ひます。父が十三日にかへると申しますから、一先づ私もほこらしいかほをして母の顏を見にいつて來たいとおもひます。そして兄にはそのまゝ田舍にゐる筈にして私はすぐ引きかへしてまゐりたう御座います。(借りたお金五十圓、少し買物二十圓、あとは宅へかへるについて持つてゐたいお金)

私は貴君にお目にかゝりたく存じます、力づよくかんじますもの。

いたづらは内しよにいたしませうね。

只今お持ち合せが御座いましたら、少しでもよろしうございますから、御送りして欲しうございます、ほんとに困つてしまひましたから。

京橋…西岡に私あてで。

明日西岡へまゐりますから、西岡へ送つてお

いてくださいまし。恩地さんが御都合がよろしければ(大津さんでも)どちらかの御宅でお目にかゝりたうございます。(明日でもいつでも。一寸伺つておいて下さいまし 外でだつていいんですけれど

　自分は終りの方を讀んでゐる時鵠沼から歸る時にC子に何んでも遠慮なく云つてよろしい、出來ないことは出來ないと云ひますからと云つたことを思ひ出した。しかし讀み上げて考へてゐる內にむら／＼といやな氣がして來た。とうとうC子は尻尾を出したと思つた。自分のあの言葉をまに受けた顏をして金をしぼりとらうとしたのだと云ふ氣がつよくして來た。さうして今迄C子を信用して平氣で深入りをした自分を笑つた。C子の言葉よりほかC子のことをまるで知らない自分は自分の自家の女中と同じやうにC子を淫賣婦が化けて來たのだとすら思つた。

　百圓の金をすましてつくらさうとするC子をたゞの女とはどうしても自分には思へなかつた。殊に「いたづらは內しよにいたしませうね」が一種の脅迫のやうに思へた。自分はさう思ふ自分に反抗して見た。しかしどうしてもさうとしか思へなかつた。

「あいつはある女と關係して百圓とられたよ」こんな嘲笑が壁の向うでするやうな氣がした。たゞ百圓なければ身動きが出來ないと云ふ理由が如何にも子供つぽいのが條脈があるやうに思へ、たゞそれすら思つて居るうちに甘く見てゐると云ふ氣になつてしまつた。

　自分はすぐ次のやうな意味の手紙をかいた。

「僕には貴女に金を渡す義務があるさうだ、しかし貴女も知つてゐるやうに僕には百圓の金はどんなことをしても出來ない、五十圓の金が出來るか出來ないかだ　それをつくるにも自分の持つてゐる本を古本屋に賣るより仕方がない。もしかしたら五十圓もむつかしいだらう。君には僕よりももつと適當な女達があるやうだ

　僕は貴女を疑ひはした。しかし憎みはしなかつた。反つて同情した。僕はお人よしだ。優秀の人がすべてお人よしのやうにお人よしだ。自分はだまされても安樂に生きてゆける人間だ

　しかし今貴女があんなことを云ひ出すのは少し下手だつた。

　僕はもう貴女に逢はないかもしれないやうな氣がしてゐる。

　貴女は恐らく僕が疑ひすぎると思ふだらう。しかし貴女が顧みる時に、疑はれるのも當然だと思ふだらう。

　僕は十二日迄に出來るだけの金を送る、五十圓はつくる心算でゐるが出來ないかも知れない。もし貴女が私に逢はなかつたら、父親がお人よしでなかつたら、貴女はどうする積だつたらう。

　僕は一生面白い思ひ出として今迄のことを時々思ひ出すだらう。その時人のいゝ自分は貴女を憐れむだらう。可笑しな夢を見せてくれて難有う、さよなら。」

　書いてゐる時は一種のメラウドを感じてゐた。出してしまつてから、C子はこれを見てどう思ふだらうと思つた。まさか怒るだらうと思つた。怒つてもらひたいとも思つた。怒り方によつて自分はC子を信用することが出來ると思つた。しかし[illegible]可哀さうにも思つた。

　C子から中々手紙が來なかつた。苦しくゐだらうと思つたが來なかつた。晩になつても來なかつた。翌になつても來なかつた。自分は不安な心持になつた。まさかC子はそんな[illegible]女はめつたにないやうな氣がした。さうして今迄のことを考へるとC子にあてた手紙を出したことが可哀さうになつて來た。あれでC子ともお別れかと思つたら、惜しいやうな氣がし

た。もつと温和しい手紙をかけばよかつたと思つた。

しかし之でC子と別れる方が反つていゝやうにも思つた。

十三

夜の九時半頃やつとC子から手紙が來た。普通便で表に至急とかいてあつた。自分はあわてて讀んだ。

「昨日の手紙に私京橋の西岡の方へまゐりますとかきましたわね、たしかに。

きのふ午後西岡へまゐりました。父に逢ひにまゐりましたら父はあしたの午後三時に(今日の事)發つと申しました。私は昨日お願ひしたことが急に惡くなりまして、どうしようかとまごまごしました。どうせかへらないんですから、あゝどうしよう、あんな事申上げてとまごまごいたしました。

只今(午後五時)新橋へ父を見送つてかへりました。うちへ御手紙がまゐつてゐました。私は腹がいたくなりました。どうぞどうぞ御めん下さいまし。決してもう御心配はかけません。御目にかゝつて御話し申上げたく存じます。一寸御都合をお知らせ下さいまし、御云ひつけもありますから普通郵便にて一

自分は翌朝古本屋に來てもらつて古本を賣つた。五十圓許り賣りたく思つたけれども本がをしかつたので二十圓許りきり賣らなかつた。あとは又あとにしようと思つた。

その翌日C子から來た手紙にこんなことがかいてあつた。

「ほんたうなれば私ははげしくおこるとか、御べんかい申すところでありますけれども、私は後暗いところもなくそしてあまりに貴君を信じ申して居ります。

御手紙で申上げるのはいやでございます。御目にかゝつてでなければ私はいやでございます。それからちつとだつて私は貴君のおうたがひを受ける覺えがありません。外の男にあんな事を云はれた事も御座いません。そしてそんな場合は私には一生ございますまいとぞんじます。人に云はれぬ事故に貴君にお申し上げました。そして人からは聞かれぬ、御うたがひだの、おしかりを受けました。私は貴君ばかりに腹も立てはいたしませぬ。かへつてかへつてすまない事と存じて居ります。なぜ貴君はいやなことを仰有りますか。どうぞ又Cちやんとお呼び下さいまし。(僕が腹を立てて手紙をかく時は必ず宛名はCちやんとかゝずにF子樣とかいたのだ)もうもう御手紙にあゝにくらしい事はおかき下さいませぬやう。

あしたぜひ午後おめにかゝりたく、Kさんにお逢ひになりましたでせう。私は何ですかもう外の女に貴君を逢はせたくなくなりました―

自分はこの手紙を讀んで、外の男にあんなことを」と外の男とかいてあるのが氣になつたが外、すつかり嬉しく讀んだ。殊に私は何ですかもう外の女と貴君を逢はせたくなくなりました」が嬉しかつた。あの自由なC子は自分の腕のうちに入つて來たやうな氣がした。自分は返事に、「貴君も外の男に逢ふことはない」とかいてやつた。自分は兩手に可愛いC子の顔をはさんで、可愛い、可愛いと自分の額をつけてやりたくなつた。

十四

自分はC子に初めて七つ八つの時から憧憬に憧れてゐた、理想そのものを得たやうに思つた。自分は急にC子に逢ひたくなつた。

その翌日都合がわるくつて逢へなかつたので、その翌日十一日の午後に自分はC子と

云ふ料理屋で逢ふことにした。友達にC子と逢ふのにはIがいゝだらうと云はれたので。
　自分は自分が先きに行つてC子がもし何か不意に用事でも出來て來られなくなると困ると思つた。それでC子に手紙を出して、二時前にきつと行つてゝくれ、氣の毒だけれども自分よりさきに行つてゝくれと云つた。C子からきつと二時前に行つてをりますから「とみ」と云つて、たづねてくださいと云つて來た。
　自分は二時半頃にIにつくやうに家を出た。自分は一人で料理屋に入ると云ふことはまるでなかつた。會でもあつてゆく時にはきつと友達をさそつて一緒に行つた。だから一人で料理屋に入ることですら、何となく臆する。まして若い女をたづねてゆくのだ。何んだか氣まりがわるい。しかしなるべくおちついて度胸をすゑて入つた。さうして途々何と云つて聞かうかと考へた末、何度も口の内でくりかへしてゐた、
「とみと云ふ若い女の人はもう來てゐますか」
と云ふ言葉を云つた。
「いらしつてをります」
と愛想よく一室に通された。C子は丁度階段からおりた。自分は床の間の前においてある座蒲團の上に坐つた。さうして二人は挨拶した。女中がゐなくなると二人は顏見合せて笑つた。
　C子は「妾のことを何と云つておきゝになつたの」と云つたから、から〳〵だと云つたら、「まあ！」と云つてC子は笑つた。C子の方が料理屋のことは委しいと思つたので、すべてC子にまかせて自分は安心してゐた
　室は汽車からよく見える處だつた。障子をしめると暑いのであけると汽車から見られるやうな氣がした。汽車は時々通つた。知つた奴でも通つたら滑稽だと思つた。二時間許り二人は何も注文しなかつた。女中もよばなかつた。食ひたくもなかつたけれども何にも註文しないのも可笑しいので四時半頃、晩飯をもつて來てもらふことにした。女中をよんだ。C子はなれても心得たやうに註文した。
　夕飯が來て女中が世話をしようとしたらC子が、
「よくつてよ、妾がしますから」と云つた。
　さうして女中が歸つたらC子は自分の方を見て舌を出した。
「馬鹿！」と自分は微笑んだ。飯を食つてしまつても女中を呼ばなかつた。さうしてC子と眞面目に借金のことやC子の之からの方針を相談するかと思ふと呑氣な話をしたり、ふざけたりした。さうして眞面目な話の方はまとまらなかつた。C子は手踊をつくつて見せて、こゝでひいこむでしよと云つた。横笛の眞似して見ないかと云つたけれどもそれはしなかつた。
　六時頃Iを出た。別れる前に少し金をC子に渡した。C子は當然のことのやうにすまして禮を云つて受けとつた。C子はIで[illegible]をつくつてもらつて友達の處へ行つた。自分も家に歸つて妹に逢ふのが何となく氣がとがめるので[illegible]の處へ行つた。何處へ行つてゐたと聞かれても都合がいゝから。C子もその理由で友達の處へ行つたのだつた。
　九時頃迄ゐて家に歸つた。何となく身體に力がなかつた。自分の[illegible]いやうな氣がして氣になつた。C子もあんまり逢ふと仕事をする根氣がなくなりはしないかと一寸心配もした。その晩芝居を初めて見た時の[illegible]やうになんだかC子のことが、一種[illegible]になつて頭にこびりついてゐた。自分はまだ[illegible]にはC子と結婚することになるだらうと云ふ氣がして來た。さうして別に不安も感じなかつた。不安を感じるやうな結婚ならしないでもいいと思つたので。
　翌日もなんとなく身體がつかれてゐた。
　その日C子から手紙が來た。

内にこんなことがかいてあつた。

一きのふはどうもありがたう、涙が出さうで、出さうでほんとにかなしくなりました。あんまりお優しく仰有つて戴くと私は本當に勿體ないやうに思ひます。

私はまだ〳〵あなたから信用されたいと思ひます、どうぞ〳〵もつと〳〵信用してくださいまし、おねがひ申します。此度はきつと十八日におめにかゝりたう存じます。(中略)今日もうお逢ひしたくなりました。

昨夕Nさんて方がいらして(C子が昨晩行つた女の處へNが行つたのだ、Nと云ふのは男で僕も知つてゐる)何ですかあなたのお友達だつて仰有つてました、私はもう人があなたのおうはさをしますと、口惜しいやうにおもひます、私ばつかりお親しいのにとおもつたりいたします、ごめん遊ばせ。

お話がどつさりあつてしかたが御座いません。又お目にかゝつて申します。お手紙に憎らしい事仰有つてはいやで御座いますよ」

C子は昨日逢つた時、僕の手紙がくるとひやひやすると云つてゐた。一つおき位に憎らしいことが書いてあるのですものと云つてゐた。

自分はC子を段々可愛い娘だと思つた。

さうして「私はもう人があなたのおうはさをしますと、口惜しいやうにおもひます、私ばつかりお親しいのにとおもつたりいたします。ごめん遊ばせ」をくり返し讀んでは微笑んだ。

十五

四日程たつた六月の十四日にC子から手紙が來た。それには、

「私はがつかりする位にこの頃は身體中が力ぬけしてしまひました、そして心持がゆつくりしてまゐりました。私はこの秋が心樂しみになつてまゐりました。私が先の日を待つたことはこれまで一度もございません。こんどは何となく先がまたれてまゐりました。一日々々ゆつたりした心持が出てくるやうに思はれます。

私は何でもよくわきまへて仰有ることを守りますから、どうぞいろ〳〵叱つてわるいところをおなほし下さいまし。

私のほんたうの姿はどんな姿だと申すことをだれ一人知れることも出來ないと申します。それ程私には模様もありませんでした。

私は毎日あなたの御そばに居たくなりました。

しみ〳〵と私はあなたがられしくなりました。勿體なく思はれてきました。私はしあはせだとおもひます。どうしても一番美しい女になりたいとおもひます。一番すき通つた心になりたいとおもひます」

なぞとかいてあつた。自分は勿論嬉しかつた。

自分達は又十八日にIで逢ふことにきめた。

十七日にC子からこんなことを云つて來た。

「いろ〳〵御心配かけましてすみません。(C子の借金のことだ)どうぞ御心配をあんまりしないでくださいまし、私はほんとにられしうございます。

十八日もあしたになりました、日がなつかしくつて居ります。恩地さんへもあしたいらつしやるんで御座いませう。

あしたはきつとまゐります。早くまゐりましておまち申上げますからどうぞおまちがひなくおいで下さいまし。

私みたいなの人等はどうしても何でも自分の相手にはあんまり下品すぎるとおもつてゐました、何だか物たりなくつて〳〵たまりませんでした。私が尊敬した人は一人もございません。しみ〳〵貴方が尊く思はれます。そして私はそのくせ自分がえらくないためにあなたがえらく見えるのではなく、私もいゝ人でそしてその上

にもつといゝ方だからよくわかるんだと思つて居ります。……あしたを心たのしみに—

自分は十八日をたのしみにした。早く逢ひたいと思つた。自分は段々C子がすきになつた。翌日自分は午後から恩地の處へ行つた。さうして五時にIにゆくわけだつたので四時頃、恩地の處を出ようと思つた。おちつかない氣分でその時のくるのを待つてゐた。

その時C子から電話がかゝつた、さうして今出かけようとしたら、久しぶりの友達が來たので、友達がもしゆつくりしてゐるとIにゆけなくなるかも知れないと云つた。さうして明日の御都合はどうかと云つた。自分は明日は先約があつて駄目だと云つた。それなら明後日はどうだと云ふから、明後日ならいゝと云つた。

さうして「何時まで恩地さんの處にいらつしやるか」と云ふから五時迄ゐると云つた。さうしたらC子は、「五時までに電話をおかけしなかつたら、明後日にしてくれ」と云つた。自分は不快だつたけれども承知した。

自分はそれから何となく氣がおちつかなかつた。昨日から樂しみにしてゐたのがくづされたから。自分はいら〳〵して來た。さうして何となく腹が立つて來た。それをもらす處がないのでなほ腹を立てた。五時少し前にC子から又電話がかゝつた。さうしてお客がかへつたから、之から出かけるから來てほしいと云つた。自分は嬉しくも思つた。しかし頭が、今迄の惰性でへんにこんがらかつた。自分は五時少しして恩地の處を出て、電車にのつた。

Iについたら、「お一人ですか」と聞かれたから、「いゝや」と云つたら、すぐ察したやうな顔をして、愛想よくこの前來た處に導かれた。まだC子は來てゐなかつた。

暫らくしてC子が來た。二人は顔見あはせて淋しく微笑んだ。夕飯を命じてそれが來たら、この前のやうにC子は女中をさらした。自分は飯があまり食へなかつた。障子をあけないとあつかつた。障子をあけると蚊が群をなして入つて來た。

さつきのいら〳〵した氣分がまだ頭の底にのこつてゐた。外のお客の話聲がもれて來た。それにC子が髪を[illegible]下地にしてゐたのが何となくファミリアに感じられなかつた。

自分はなんだかおちつかない氣分がした。自分とC子の距離は一間程あいてゐた。二人は默り勝ちで、時々顔を見合はせて、一種の笑ひをした。

「蚊がひどい」と云つて自分は自分の方の障子をしめた。C子はC子の方の障子をしめた。

また「あつい」と云つて障子をあけた時分には自分がC子に對する興味は半ば以上なくなつてゐた。たゞねむかつた。自分はなるべくC子を可愛がつてやらうと思つたが、それがおつとめのやうな氣がして來た。自分は無意味なことをねむさうにしやべつた。さうして昨日のC子の手紙の文句を思ひ出して可笑しくなつた。「C子は之でも僕を尊ぶことが出來るか知らん」と思つた。

自分はぼんやりしてゐればよかつたのだが、無理にC子を安心させたいと思つて、金のことやこの秋のことをしやべつた。C子が、親の手を全くはなれるのはいゝけれども、なんと云つても金がないから仕方がない、それよりもう少しまつて金が出來て、安心してくらせるやうな身分になるまでは、親の手をはなれるのはいけない、この夏も故郷に歸つて親たちを安心させる方がいゝ、兄さんが二十四日に歸るならその時一緒に歸る方がいゝだらう、さうしてうまくいつたら借金のことも伯母さんか誰かに相談して見るといゝ、なぞと云つた。それが如何にも空虚でそら〴〵しかつた。C子のことを心隠し

てゐるやうな顏して實は自分に都合のいゝやうなことを云つてゐるやうに自分に聞えるのでなほ氣がとがめた。さうしていかにも口さきだけ尤もらしいことを云ふだけなほ氣がとがめた。

それでもC子は神妙な顏をして聞いてゐた。察しのいゝC子のことだから、自分の心を見ぬいてゐるだらうと思ふのでなほ云ひわけをする。それがなほ空々しくなる。自分はなんだか情けなくなつて來た。なまじつか信用されてゐると思ふので自分の氣分をそのまゝにさらけ出すことが出來ないので。

さぞC子も心細いだらうと思つた。

自分はしきりと暑いとか、蚊が多いとか、自分はこんな事に調和しない人間だから氣分が亂されて不愉快だとか、言ひわけをした。それが又如何にもそら／＼しかつた。

自分はなんだか氣がおちつかなかつた。早く歸らないと兄さんにおこられるだらうと云つて九時頃C子とIを出た。

出て四五町一緒に步いた。自分はその時もなほIのやうな家はおちつけなくつて不愉快だと言ひわけをしてゐた。

「貴君はよく不愉快だ、不愉快だとおつしやるのね、或ひはさうではありませんわ」とC子は云つた。

二十三日に又逢はうと約束して二人は別々の電車にのつて家に歸つた。

自分はC子がさぞ自分を見下げた男だと思つて心細く思つてゐるだらうと思つた。さうしてこんな關係をつゞけてゆくのが二人の幸福か知らんと思つた。お互にお勤めの氣分でゐてはたまらないと思つた。

その内に不圖、自分が人並より性慾がよわいのではないかと思つた。それが今日の不愉快の原因をつくつたのではないかと思つた。さうしてさう思つたのが不安でもあり、希望でもあつた。二人の間は性慾ばかりでつながつてゐるのかも知れないと思へたと共に、今に性慾が頭をもたげると共に、C子が好きになれると思つたから。

何しろ自分の體力の弱いのがいけないのだ、ねむかつたのがいけないのだと思つた。さうして之から身體をよくしてやらうと思つた。

十六

翌朝C子がさぞたよりなく思つてゐるだらうと思つて手紙をかいて出した。その日C子から手紙が來ないので、どうしてゐるだらう、自分に愛想をつかしたのか知らんと思つた。

その晚恩地が來た。さうして昨晚C子の兄より電話がかゝつた事や、その時恩地の妹が出たのでC子の來なかつた事を饒舌つてしまつたらしいと云ふ事を云つた。C子は兄に恩地さんの處へゆくと云つて家を出かけたのだつた。それで氣になつたので翌朝又手紙をかいた。さうしたらC子から手紙が來た

「御手紙は二つとも拜見いたしました。私はほんとに御手紙も出せなくつて申しわけのないやうな悲しい事に存じて居りました。どうぞ御めん下さいまし。唯今一寸お友達（近所の）の宅へまゐりましたからペンをかりておたより申上げます。

一昨日はいろ／＼御心配かけましてどうも恐れ入ります。それから恩地さんに、兄が電話をかけました時女中が出たと存じてゐたさうでございます。

いきなり、私は叱られました。けれども直には大津さんもいらしつたし、恩地さんも一寸いらしつたと申しまして安心させました。そして私はむりに落ちついて御手紙もかきませんでした。

それに御おこりもなくおたづね下さいまして

私は涙の出るほどうれしうぞんじました。私は二十四日にかへるやうな氣はいたしません。
私は二十三日にぜひ御めにかゝりたうございます。恩地さんの御宅ではいけませんでせうか。それですと大へん兄の手前よろしいのでございますが。
私はいろ／＼呑みこんでしまひましたやうにあなたになるべく御心配かけてはすまないと覺悟をいたしました。それからいままでもよくおしかりもなしにいろ／＼御待つていたゞいたことをうれしく思ひ出されました。
私もほんたうは今のところお金の心配が一番主なものになつて居ります。宅へかへりましても云ひにくうございますし、それに御うちあけしますとほんとは指わなどもなくしてゐますから母に恥かしくほんとに途方にくれて居ります。けれどもこないだよく申しつかりましたから私はみんな伯母にうちあけて、それでもしみんなで東京へ出しませんでしたら、一年でも二年でも田舍にゐましてほんとに自由になりますまで、あなたに御心配かけたくないとおもひました。けれども私は今では親に賴りますより、やつぱしあなたにおたよりした方がたくさんになつて居ります。母にうちあけるより、あなたにおうちあけして母には只安心ばつかしさせておきたいやうに思つてをります。
私はたゞお金の事だけは身のきられるほどもうあなたへはお申し上げたくないと存じて居ります。かなしくなつてきました。私はほんとにあなたばかりおたよりに思つて居ります。
おめにかゝつて父
自分はこの手紙を見た時本氣に金をつくらなければならない氣がした。いろ／＼考へたけれどもいゝ考へは浮ばなかつた。その時ふと木村のことを思つた。
あれに相談したらいゝ考へが浮びさうな氣がした。自分のさしづめほしい金は五十圓だけだつた。それでC子の借金だけを返さうと思つたのだ。自分にはC子の借金が何時のまにか自分の借金のやうな氣がしてゐたのだつた。さうして早くかへさないと氣になつて仕方がなくなつてゐたのだ。自分はならうことなら本を賣らないで金をつくりたく思つてゐた。それで木村に話して月に十圓か十五圓づつ返す約束で金をかりようと思つたのだ。他の友からは決して借りたくないが木村ならばいゝと思つてゐた。
それでその翌日四ケ月ぶりで木村の處へ出かけた。
木村は自分が學習院に居た時分同級だつた。彼は身體がよわかつたので早く仕事をしたがつた。父どうかして自活をしたがつた。又彼は非常な空想家だつた。それで途中で學校をやめていろ／＼のことをした。それが皆失敗したのでつい先日玩具屋をやりだした。小さい玩具屋だけれども、いくらか資本があるのだから五十圓ぐらゐの金は自由がきくだらうと思つてゐたのだつた。木村は文學はまるでわからなかつたが自分を唯一の友にしてくれ、自分の爲にはいくらでも働いてくれさうな氣ぶりをよく見せてゐた。
自分は途中で、C子にぶつかつてからとんでもないこと隨分經驗すると思つた。しかし金を借りたいと云ひ出す時のことを思つたらいやになつた。まあその時の工合にしようと思つた。もしせつぱつまつたら本を皆賣つてやらうと思つた。しかしさう思つたらなんだか手ばなしたくない本が頭に浮んだ。それに母や友が本の皆無になつた事から起すいろ／＼の想像を考へてそれも面白くないと思つた。するとC子はもしかしたら矢張り自分を信用して自分にたよつてゐるふりして、實は金をしぼりとるだけしぼりとるのが唯一の目的ぢやないか知らんと不安に思つ

た。しかしそんなことはあるまい、自分はC子の心をみぬいてゐる心算だと思ひ返した。さうしてゆく處まで行つて見ようと思つた。

木村の處へ行つたら大變よろこんでくれた。「よく來てくれた」と云つた。自分は何んだか氣まりがわるかつた。「さうして用があつて來た」と一寸云ひ出しにくかつた。

木村は玩具にはりつける値段書をかいて居た。さうして、「ゴム鞠は賣れにもあまりまうからないのだ、昨日は今迄の中で一番收入が多くつて二圓をこえた」とか云つた。自分は收入表を見せてもらつたら一日の收入は八錢と二圓二十錢の間をうろついてゐた。平均一圓を出るか出ないぐらゐだつた。さうしてたまにお客があると木村はあわてて出て行つていろ〳〵お世辭を云つてゐた。さうして自分はすぐに歸ると不平を云つてゐた。

自分はどうしても[illegible]いかくしてもらひたい」と云ひ出す氣にならなかつた。二時間許り他の話をした。まるでなぜしばらく來なかつたから、どうしてゐるかと思つて來たと云ふ顏をしておし通してしまつた。歸る時に木村は、「わざ〳〵來てくれたのに失敬した」としきりと愛想のなかつたことをあやまつてゐた。さうして電車の處まで二三町送つて來てくれた。自分はなんだか氣がとがめた。

自分はその翌日古本屋に來てもらつて、二十圓ばかり賣つた。もつと賣りたく思つたが、矢張り惜しくつてやめた。

十七

恩地の處で二十三日に逢ふ約束したがその日はC子の方が都合がわるかつた。さうしてC子が故郷に歸るのは少しのびた。それから時々逢はうとしたがどつちかの都合がわるかつた。それで七月二十日までのびた。自分はその間に三四日風邪でねた。

二十日の夕方、六時頃自分は恩地の處に行つた。雨が降つてゐた。實は自分は恩地の處を少し早くきり上げてC子と一緒に散歩するつもりだつた。二人だけで相談する必要もあつたけれども、それは手紙ですむことだつた。自分は雨が降つてゐるので一緒に散歩が出來ないのが心のこりだつた。雨がやんでくれればいゝがと思つた。實際やみさうでもあつた。しかしなほやまないらしかつた。

七時頃C子は恩地の處に俥で來た。自分は時々C子の今後のことについて相談をしかけたが、C子は恩地の前だつたので遠慮してゐた。さうして呑氣な話をした。

自分は矢張りC子はいゝ女だと思つた。失ふのはつらいと思つた。恩地の前なのでさうなれなれしくも出來ないので、反つて憧れるやうな氣分が起つて、さし向ひの時よりもずつとC子を可愛く思つた。

自分は少しいら〳〵して來た。恩地がはばかりにでも立つてくれればいゝがと思つた。

さうしてC子がゆつくりしてゐるのが氣になつた。自分は雨が降つてゐても一緒に散歩したかつた。しかしその理由があまり露骨なのでおちついたふりしてゐた。

座が一寸白けた。恩地は寫眞を出して來てC子に見せた。九時半頃C子の兄からC子に電話がかゝつた。さうして電話口に出てくれと云つた。

「今度は大丈夫だ」と云つて三人笑つた。C子は電話口に出た。C子は電話口から歸つて來てもおちついてゐた。

「もう歸つた方がいゝだらう」と暫らくして自分は云つた。何氣なく云はうと隨分努力したが、自分にはその聲の響が、自分の心をうら切りしてゐることを感じた。

「まだいゝでせう」と恩地は云つた。恩地に僕の意志を知りたがらわざとゝぼけてさう云つたのか知らんと一寸思つたが、善意にとつた。十時頃小山が來た。

十時過にC子は歸らうとした。「俥をよびにやりませう」と恩地が云つた。困つたことを云つてくれたと云ふ氣がした。C子は「それにはおよびません」と云つた。恩地はもう一度すゝめた。C子はもう一度斷つた。自分はC子が斷り切れなくなるのを恐れて口を入れた。さうして自分がC子を俥屋まで送ることになつた。表面は俥屋が近いと云ふのと、一寸話したいことがあると云ふことだつた。雨は可なり降つてゐた。

自分は高下駄をはいて傘をさして、一足さきに出て門のそとに立つてC子のくるのを待つてゐた。C子はとぶやうに門のくゞり戸から出て來て自分のさしてゐる傘の下に入つた。見るとC子は傘を持つてゐないのだ。さうしてひくい下駄をはいてゐるのだ。

自分はあひ〳〵傘で歩かなければならなかつた。自分は微笑まないではゐられなかつた。しかし氣まりがわるく思はずに嬉しく思つた。さうしてC子がわざとかう云ふことを計畫して傘を持つて來なかつたのではないかと思つた。さう思つても別に腹が立たなかつた。さうして反つてさう思ひたかつた。

二人は俥屋の方へ行つた。

「大森君はおちついてゐたねえ」

「貴君があんまりおちついていらつしやるので妾いら〳〵しましたわ」

自分達は俥屋の方へ行つた。俥屋まで一町もない。自分は人影がなかつたので立ちどまつた。二人は一寸接吻した。すると人影が見えた。又歩き出した。

自分は之からのことを相談しようとしたが、別に相談する程のこともなかつた。自分はC子が「もつと歩きませう」と云つてくれるのを心待ちにしてゐたが云はなかつた。自分の方から云ひたかつたけれどもC子が低い下駄をはいてゐるのと、ふき降りで傘が小さくつて、無遠慮に着物がぬれるので遠慮してゐた。

しかし俥屋のそばまで行つたら、自分達はひきかへした。水溜を用心して歩いた。自分はこの時程C子を可愛く思つたことは今までになかつた。自分はC子の自分の好きな目の方に接吻した。その目は自分が曾て戀した鶴の目に似て居た。又自分の小さい時一番すきだつた叔母の目にも似てゐた。二人は足の向く方に歩いた。何時のまにか自分の家の近くに來た。自分の家を知つてゐる人に會ひさうな氣がしたので又あと戻りした。さうして又恩地のそばの俥屋の方に行つた。自分は二十圓だけC子にわたした。さうして「あとはその内出來たらつくる」と云つた。C子は、「一緒になるのはおやめ遊ばせ」と云つた。自分は嬉しかつた。さうして翌日僕の家にC子がくることにきめた。その内に俥屋に來た。別れるのがつらかつた。

C子は別れをつげてつと俥屋の俥のおいてある處に入つた。俥屋の人は皆家の中に居て聲高に話してゐた。C子は一寸默つてしよんぼりと立つてゐた。暫らくして何か云つた。内から何か答へる聲が聞えた。自分は家の方へそろそろ歩き出した。

自分は傘も持たない若いへんな女が一人立つてゐるのを見たら俥屋もさぞおどろくだらうと思つた。さうしてC子の俥が今に自分をおひこしてゆくだらうと心まちをしながら歩いてゐた。

中々俥はこなかつた。自分は少し不安になつて來た。あと戻りしようかと思つたがなんとなく氣まりがわるいのでそのまゝ四五間あるいた。しかしとう〳〵あと戻りして見た。少し戻

ると一臺の俥とゆきちがつた。中にゐる人は勿論見えなかつた。しかしC子がのつてゐるのにちがひないと思つた。引きかへさうと思つたが、俥屋の前まで來て見た。C子はゐなかつた。自分は安心して戻らうと思つたが氣がとがめたのでそのまゝ歩いて行つた。遠廻りして家に歸つた。

着物はびしよぬれにぬれてゐた。着物をすぐぬいで寢まきに着かへた。はねのひどく上つてゐるのにおどろいた。C子の着物もさぞぬれてゐるだらう、はねも隨分上つたらうと思つた。又兄におこられるだらうと思つた。

するど兄が怒るのには嫉妬が入つてゐるのではないか知らんと思つた。しかし反對の證據もあるので、C子の父の手前監督をきびしくしてゐるのだらう、もしものことがあるのを恐れてゐると思つた。又どつちでもいゝ、C子は自分のものだから、さうしてC子の兄にはC子を己のものにしようと云ふ意志のないことが明らかだからと思つた

その二三日あとに恩地が來た時、C子から禮狀が來て、その內に、俥屋まで中々遠うございました とかいてあつたと云つた。自分は、あいつのまぬけにも困る」と云つて笑つた。その時

ふとC子をあんまり我がもの顏するのを恩地に恥かしく思つた。

しかし實際は自分は初めてC子にあつた時から、C子のことをC子々々と呼びつけにしてゐた。さうして友達は皆C子のことをC子さんと云つてゐた。

十八

自分にとつて一番氣になるのはC子の借金のことだつた。僅か五十圓だけれどもそれが自分の手では中々出來なかつた。自分は生れてから今まで自分の手では八圓きりとつたことはない。それも偶然のことだつた。

自分が母に知らさずに金をつくることが出來る方法はたゞ古本を賣ることだけだつた。その古本もC子を知る前に丸善の拂ひが多すぎて四五度賣り、C子を知つてから二三度賣つたので、今になつて五十圓だけ賣らうと云ふことは容易ではなかつた。

自分はそれでいろ／＼いゝ方法はないかと考へてゐる內、ふとこの前IでC子にあつた時、十圓だけでもいゝから返しておくといゝと云つた時、C子は氣まりわるがつて、「そんなことは出來ませんわ」と云つたのを思ひだした。その時はC子のことならさう思ふのは當然だと思つて別になんとも思はなかつたが今それを思ひ出したら腹が立つて來た。金をしぼりとる爲にそんなことを云ふのではないか、或は手切れ金に五十圓まとめて渡さなければならない男でもゐるのではないか知らんとさへ考へた。自分はそれで翌朝C子に手紙をかいて、

「默つて何時までも借りてゐるよりは十圓でも、十五圓でもいゝから一先づ返す方がいゝ。それは一時に返すのに越したことはないが、それは何時になつて出來ることかわからない。十圓や、十五圓かへすのは、きまりがわるいかも知れないが、俺に心配かけることを思へばその位なきまりのわるさは忍べないことはないと思ふ。返しやうによればかへつて全部一時に返すよりも先方にいゝ感じを與へることも出來るはずだ。あんまり氣まりがわるいなぞと云はれると疑ひたくもなる と云ふ意味のことを云つてやつた。

その翌日午後一時半頃C子は自分の處に來た。約束通り取り次ぎをことはずに一軒はなれてゐる僕の室に來た。

「誰かに見られた？」と聞いたら、「いゝえ」と云つた。自分はそれで女中を呼ばなかつた。さう

してC子とかるく接吻した。

C子は「來したに友達の處へよつて、十圓だけ御返ししに來ました」と云つた。自分はそれは感心だつたと云つた。さうして、「いやな顔はしてゐなかつたでしよ」と云つたら、

「えゝ」とC子は答へた。

自分は可憐に思つた。さうしてあとの四十圓もどうしてもつくらなければならないと思つた。萬一だまされてゐるにしてもだまされよう、自分は弱者ではないと思つた。しかし心の底ではC子を信じて疑ふことが出來なかつたのだ。

この時女中が來た。自分達は入口から一寸見えない處にゐた。自分は入口の方へ行つた。しかしC子の下駄が入口に脱いであるので、女中は變な顔をして一寸默つてゐた。

何の用だと聞いたら、杉さんから電話がかゝつて之から上つていゝかと云つて來たと云ふ。自分は自分が電話口に出ると云つた。さうしてC子が來たことがばれたと思つたので、お茶を持つておいでと云つた。

自分はすぐ電話口に出た、さうしてわざと少し大きな聲で、

「この前來た女が又來たのだ。それでよければ來てくれ給へ、僕の方は少しもかまはないのだ」と云つた。杉は「もう少したつてみてゆくかも知れない。しかし行かないかも知れない」と云つた。「よかつたら來給へ」と云つて電話を切つた。

さうして室に歸つたら、

「いらつしやるの」とC子は聞いた。「來るかも知れない、しかし大概來ないだらう」と云つた。「きつといらつしてよ、妾を見に」C子は女らしい自信をもつて云つた。

C子が來たと云ふことが女中仲間に知れたと見えて、御飯たきが何氣なく鎌を持つて自分の室のわきの草を刈りに來た。めつたにそんなことをしにきたことがないだけその心持がわかつて不愉快だつた。その日は風はあつたが實に暑かつたので障子をしめるのは如何にも不自然だつた。それで障子をあけておいた。御飯たきは自分達から見えない處で草をかつてゐたが、一寸あと戻りすればすぐ自分達を見ることが出來る處にゐた。さうして草を刈る音が聞えた。自分は見られたつて平氣だと云ふ風をしてゐた。

しかしふと思ひついたことがあるので自分は不意に立つた、さうして御飯たきの態度に腹が立つたあまりに、暑いのも顧慮せず障子をしめるふりをして、力をこめて障子をしめた。障子は高い音をたててしまつた。

自分は立ちながらC子の方を見て嬉しく笑つた。甘くやつたと云ふ氣と怒りをもらした勇ましさとを嬉しく感じた。自分はいきなりC子の傍にゆかうかと思つた。しかし元の自分の座に歸つた。その元の座に自分を歸したものが、二三分たつかたゝない内に又障子をあけさせようとした。

C子はしめておく方がいゝと顔でしらした。それで自分はあけに立たうとしたが又坐つた。しかし暫らくしたら思ひ切つてC子のわきに行つた。

暫らくして自分は又障子をあけた。御飯たきはもうとつくに居なかつた。三時になつても杉は來なかつた。杉が來てくれないと何となく不安になつた。二人だけである、猜疑心が霧のやうに二人をとりかこむことを感じた。自分は杉が來なかつたら恩地にたのんで來てもらはうかと云つた。C子はその律義な感情を笑つたので自分も笑つた。

書生を呼んで杉の處に電話をかけてもらつたら、もうお出かけになつたと云つた。

C子は「昨日ねむれなかつたのでねむい」と云つた。「なぜねられなかつたのです」と自分はある期待をもつて云つた。C子は笑つて人の顔を見る許りで答へなかつた。

自分はその日は元氣だつた。さうして氣持がよかつた。之ならC子と一緒に生活してもいゝと云ふ氣がした。さうしてC子が自分の室にゐるのは他人が居るやうな氣がしないでゐるべき人がゐるやうな氣がした。

暫らくたつて杉が來た。自分はC子を別にして杉と大きな聲で元氣よく色々の話をした。仕事の話もした。C子は默つてゐた。時々自分はC子の爲よりも寧ろ杉のお愛想としてC子に何か聞いた。

五時頃杉は歸つた。C子はその時一寸歸るけぶりを見せたが、自分は歸したくなかつた。それにC子と一緒に歩くのは杉がいやがるだらうと思つたので、一寸のこる方がいゝだらうと云つた。C子は殘つた。C子は「あまり長くゐるので氣まりがわるい」と云つた。それを聞くと自分も本當にさうだと思つた。さうして今更にある不安を想つた。自分はなるべくC子に早く歸るやうにすゝめた。C子が夜氣に歸るまでにもう一度逢はうと約束して、C子は杉より十五分許りおくれて歸つて行つた。送つてやりたかつたけれどその勇氣はなかつた。一人で歸つてゆくC子の後姿をなんとなく憐れに思つた。

十九

その夜三時頃自分は目が覺めた。

さうしてC子の借金のことを思つた。いろいろ考へた結果、田川に手紙をかいて三十圓だけ借りようかと思つた。田川ならきつと貸してくれるだらうと思つた。しかし田川は自分の友達の内で一番金の自由がきく男だけれども、金に困つてゐないことはあるまい、三十圓の繪を買ふのに中々考へてからでなければ買はないのだから、かう考へるとそんな手紙をかくのが、いかにも圖々しく友誼をもつて脅迫する行爲のやうに思はれて來た。しかし出しても出さないでもいゝからかくだけ書かう、存外心配する程のことでもないかも知れない。

自分は起きた、あかりをつけた。さうして云ひわけ澤山の手紙をかいた。書き上げると一寸躊躇したがすぐ封筒に入れて封じてしまつた。さうして蟇口から切手を出してその上にはつてしまつた。自分はC子と交通する迄に封筒や切手を持つてゐたためしはなかつた。封筒が入り用になると母の處へ行つて封筒をもらつた。女用の封筒きりないので困りながら、「自分がつかへば氣ざでもあるまい」とよくそれをつかつた。初めて手紙を出す人にも。しかしC子と交通するやうになつてから自分の机の上には常に封筒がのつてゐた。さうして自分の蟇口には常に切手が入つてゐた）さうして又寢床に入つた。

田川はきつと手紙を見ていやな氣がするだらうと思つた。自分達の仲間はいくら金に困つても友達に金を借りないのをほこりにしてゐる。友情をさう云ふ風に利用するのを恥としてゐる。それを自分は一人こつそりと女の爲にやぶるのだ。

しかし自惚の強い自分には田川に自分の心持はわかるやうな氣もした。さうして田川はあの手紙を見て不快には思ふまい。自分は半年のちに理由をくはしく話すとかいておいた。それ迄誰にも祕密にしておいてくれとかいておいた。田川はあの手紙を見て反つて興味を感ずるかとも思つた。蟲のいゝ空想家の自分はかう云ふ無邪氣な金の困りかたを自分がしたことを記念しておくのも面白いとさへ思つた。

翌朝自分は思ひ切つてその手紙を郵便函に入れに行つた。その日C子から[illegible]手紙が來た。

その内にこんなことがかいてあつた。
「私はきのふかへるのがいやで／＼たまりませんでした。そして門を出ましたら涙が出さうになりましたから、すた／＼と歩きました。淋しくなりました。あなたは私を追ひ出すやうになさいますもの。あしたでも、今日でも、ほんとは毎日々々御逢ひ出來たらうれしいとおもひます。いままで、よく一人でぢつとして來たとおもひます」
自分はその日一日不安でくらした。田川から中々返事が來ないので、晩大津の處へ行つたが、何んだか氣が落ちつかなかつた。腹がへんに空虚だつた。その晩歸つても田川の手紙は來てゐなかつた。なほいやな氣がした。田川は旅行してゐるのか知らん、それとも友情を惡利用したのを不快に思つて返事をよこさないのか知らんと思つた。惡意をもつなら勝手に持て、自分は困らないと云ふ氣もした。自分は翌日朝起きて飯食ふ室に行つたら、蠅入らずの上に田川の手紙が來てゐた、氣持のいゝ、承諾した返事だつた。自分は本當に嬉しかつた。すぐ禮狀をかいた。
この時自分は自分の知らない人から金の無心の手紙が來た時、「圖々しい人もゐるものだね」と皆に話したことを思ひ出した。あの人はさぞ自分よりもつとずつと金に困つてゐるのだらう、さぞ自分の返事を待つてゐたらうと思つた。しかし別に氣の毒とは思はずに、寧ろ自分を金持と思つてゐるのを可笑しく思つた。
この時自分はC子を押へつけてゐる心算で、何時のまにかC子の云ふ通りになつてゐることに氣がついた。さうしてC子は女で、自分は男だなと思つた、さうしてそれを面白く思つた。

二十

自分達は九日に又逢つた。
その前七日にC子から來た手紙には次のやうなことがかいてあつた。
「こんどの夏はどうぞ一しよにゐて下さいまし、その代り秋になりましたら、十月頃まで私は田舍に居ましてもようございます。今年一ぱいでもようございます。
F市の琴の師匠は私が一番好きな人ですからいくらでも居ります。師匠は横笛が得意で三絃の外にをどりでも何でもやります、その代り身體は弱くて／＼いけません。
昔から藝者の師匠の家でほんとに私は大好きです。私はほんとはもう少し習ひたいと考へて居りましたけれどもどうしても父は身を定めなければ決してそんな放縱な事はさせておけないと申しました。とぢこめておかれるのがいやなために私は東京へ出てまゐりました。そこへさへ毎日通はせてくれれば私はちつとも文句はなかつたんですけれども。
父は私の年を恐れて居ります、早くお嫁にゆかなければならないと申します。父の心には世間へ對する反抗があります。妾腹の娘の故にまだ父の身分があつても私のしまつがつかねると思はれるのを残念がつて居ります。
縣内のだれかれの家を數へてはどこへでもお前さへ承知してくれればよいと幾度となく申されました。私はとても見もしらぬ人、思想のわからぬ人と一しよに居る程の勇氣は出ませんでしたから、一生けんめいきりぬけました。父一つには私が嫁く筈の家が私がいやだと申しましたあてつけにお嫁さんをすぐ貰つて今は子供もありますから父はむら／＼として居ります。
私はとびだしてはのがれてゐました。私が悪いかしらと考へない事もありませんけれども、そんな事にまけるのはあんまり[illegible]よくないと考へましたから、いつも強く出てゐました。けれども、決して父と母に悲しみをかけるの

は嬉しいことでは御座いません。私は父と母の笑ひ顔に二三年來かつゑて居ります。一度晴れ晴れした笑顏を見たいと思ひます。
父は途方にくれて居ります。この間などは何になつてもいゝから早く落ちついてくれと申しました。
今の父の心にはもう世間普通の娘を持つ矜はとても出來ないから私に獨立させてなりともと悲しい心になつて居ります。女優などと云ふ言葉さへ父の頭に上るやうになつて居ります。昔は私が音樂學校へ入りたいのを墮落だなどと申してきかなかつたんですもの、あんまり〳〵可哀さうだと思ひます。私はほんとに不幸（不孝？）な子供と思ひます、自分から求めて見ぐるしい日々を去年から送りながら一日も心安くすごした事は御座いませんでした。
もしかしたら私は今度安心させる事が出來るかもしれないと存じて居ります
私はよくいろ〳〵の事を存じて居ります。私の考へることは一番正しいと考へて居ります。そして決してそれは間ちがつた考へではないと信じて居ります。
・私はほんとにいゝ人になりたいと存じます。あなたをお困らせしてはならないと考へて居ります。
私は自分のうける苦痛は可なり忍べることと思つて居りました。人に苦痛を與へるのはほんとにつらうございます。
私はあなただけには私の心配をしていたゞいてもちつともそれを何とも思ひません。していたゞいてもいゝ方だと思ひこんでしまひました。
外の人に心配してもらふのはとても私はそれが屈辱のやうに思へてたまりません。
私は一番きれいな女になりたいと考へます。
私は毎日々々自分の想ふ女に近づいてまゐります。
私は自分の姿や顏が美しいとも潔いとも思ひません。（こゝを讀んだ時まだ氣にしてゐるなと思つた）私より美しく生れついた女はたくさんありますけれどもその女が私の前へきても私より美しく見えるとは考へません。人間以上の女になりたいと考へます。
私はいろ〳〵の事からあなたとしじう御一しよにゐるのは一番心安らかな世を求める事が出來ると考へて居ります。長い間の途がみんなあなたとめぐりあふための運命のやうに想はれます。
風りんが鳴ります。私はしみ〴〵と又お逢ひしたくなりました。
まはらない言葉のためにわるく思召してはいやですわ、叱られるのはいやいや」
自分は之を讀んでとう〳〵來る處まで來たと思つた。自分は不安を感ぜずにこゝにおちつくことを知つてゐた。自分はさうしてこの手紙を見てたゞ嬉しく思つた。
自分はC子に處女の聖さがないのを物足りなく思つたことが何度もあつた。しかし自分はC子が一方何時でも罪の自覺をもつて謙遜な心を失はないのを嬉しく思つた。自分が何度も邪推をしてもC子はそれを恨まなかつた。さうして自分の心のあり場所を知つて、全身をもつて其處にすがつて來た。自分はそれを可憐に思ひ可愛らしく思つた。
自分は怒りもした、邪推もした、しかしC子を失ふことを恐れた自分は何時でもC子がすがりつく腕に私かに手をさしのばすことを忘れなかつた。C子は其處に涙なしには、思ひ出せないやうな可憐な態度をもつてすがつて來た。自分はC子の眞心と利口なことを信じるやうになつた。
だまされてるのではないかと何度も思つた

が、自分はそれよりもつよくC子を心の底では信じてゐた。自分は自分で自分の運命を信ずるのと同じ態度を以てC子を信じてゐた。自分はどうしてもC子を妻にすることによつて自分の世界は廣くなり、深くなることを信じてゐた。自分は今迄の自分の事を思つて、運命のいたづらを思つた。しかし自分は不安な感じなかつた。さうしてC子のやうに世間を恐れない人で初めて自分の妻になれるやうな氣がして來た。自分は自分のお目出たい性質を笑つた。しかし自分は不安を感じなかつた。さうして、C子ならば自分の膝にもたれながら、自分に讃美と感謝の言を惜まないと思つた。さうして子供らしい自分の心をたえずあたゝめてくれ、自分の[illegible]を着てゐる、さうして性急で我儘な心をなぐさめ、何時でも自分の心に己の心をふれさしてゐてくれると思つた。あまつたれて、何處までもつけ上る、そのくせ自己を責めても他人を責めることを知らないC子は。

自分はC子と結婚をすることを母のよろこばないことも、或友の不安に思つてくれることも尤もだと思つた。しかしそれは自分とC子を知ることの少ないからだと思つた。自分は恐れることなくゆく處までゆかうと思つた。

自分はC子に逢つてからよく友に、「自分が失敗すれば自惚が強いからだ」と云つた。それはもしもの時の云ひわけの爲だつた。しかし自分はそんな時の永遠に來ない事を腹では信じてゐた。それ程自分は自分とC子と運命とを信じてゐた。

二十一

九日の十時半に上野の停車場で逢ふことにした。田端か王子に出かけようと云ふのだつた。夕方からは蚊が多いだらうと云ふので晝にしたのだつた。

Iで逢ふと一番いゝのだが、自分がこの前自分の不愉快の原因を皆I(料理屋)のせゐにしたので、もうIで逢はうと云ふことはお互に口に出せなくなつてゐたのだ。

十時少し過ぎに自分は上野に行つた。C子はまだ來てゐまいと思つたら果して來てゐなかつた。自分はこの前新橋でC子を待つてゐる時程不安を感じなかつたけれども、やつぱり氣がおちつかなかつた。二等の待合室でC子を待つてゐるかと思ふと、改札口のそばの腰かけに腰をかけたり、停車場の入口に來たりした。さうして常にC子が今にくるか今にくるかと注意してゐた。自分はその内に田端か王子へ行つていゝ處がなかつたら出掛けてゐる、それよりは矢張りIの方がいゝだらうと云ふ氣がした。この前の不愉快の原因はその時の自分の氣分に十の九まであつたことを自分は知つてゐたから。

十一時近くなつてC子は俥にのつて來た。C子は俥からおりて自分にあいさつした。多くの人の注意をあつめたやうな氣がしたので、自分は其處にぐづ／＼してゐるのがいやだつた。自分は田端にするか、王子にするか、それとも又Iにするか、どつちにしようと性急に聞いた。さうしてC子が躊躇してゐる内に自分はぶら／＼Iの方に向つて、停車場を出て歩き出した。C子は默つて五六間ついて來て、「どこにいらつしやるの」と聞いた。自分はC子が、Iがいやでそんなとぼけたことを云ふのかとも思つたが、C子がIの方角を知らないのでそんなことを云ふのかとも思つた。さうして「ひきかへして王子の方へ行かうか、それともIに行かうか、こゝまで來たものだからIにしよう」と云つた。C子はうなづいて微笑んだ。

その日は暑かつた。日は暑く電車道を照りつけてゐた。C子は傘を持つてゐなかつた。自分はこの前の雨の晩も、その次ぎ自分の處に來た

時も、C子が傘をもつてゐなかつたことを思ひ出した。さうしてそれまでいつでも傘をもつてゐたやうに思つたので、金にでも困つて傘まで賣つたのか知らんと一寸思つた。

それで「傘は？」と聞いたら、「うちに置いて來ました」とC子は云つた。自分は、「あることはあるのですね」とわざと露骨に聞いたら、「えゝ」とC子は笑窪を見せた。

「傘は嫌ひなのですか」と自分は又聞いた。

「それだつて誰でも持つてゐるぢやありませんか」とC子は答へた。その答が如何にもC子らしいので、

「誰も持つて歩かなかつたら」と云つたら、

「それは持つて歩きますわ」とC子は云つた、さうして少しして、「本當は持つて歩くのは嫌ひなのです」と云つた。

Iに行つたら皆親しく少し微笑をふくみながら二人を迎へた。さうして自分達を何時もの室に案内した。自分も少し微笑んだ。自分は人が微笑んだ顔してゐるのを見ると何時のまにか自分も微笑んでゐるくせがある。しかしこの時は自分のやうな男が、C子のやうな女とこんな處にくるのが可笑しかつたのだ。

自分は何日でも木綿着物をだらしなく着ながしにして足袋もはかず、足のあぶらと塵で黒くなつてゐるすりへつた下駄をはいてゐる。さうして冬の鳥打帽子をかぶつて何時も粗末な傘を大事さうに持つてゐる。日に頭をてらされると困る自分はそれを日傘にもつかつてゐるのだ。さうして前こゞみに歩いてゐる。C子に何時か「一緒に歩いてゐると氣まりがわるいだらう」と云つたら「いゝえ、ちつとも」と云つた。しかし自分は氣まりがわるいはずだと思つてゐる。

室に通つてからまもなく飯をもつて來てもらつた。サイダを注文しさうにしたら、「毒ですからおよし遊ばせ」と云つた。矢張りC子は女中を去らして自分で配膳をした。二人ともあまり飯はたべられなかつた。

自分は窓に腰かけてC子の方を見てゐた。C子は縁の方に坐つて自分の方を見てゐた。二人の間は一間半許りはなれてゐた。縁には簾がかゝつてゐた。

二人は默つてゐた。何か口をきりたかつたが云ふことがなかつた。C子はつと立つて自分の腰かけてゐる處に來た。さうして自分の足許にすわつた。さうして自分の膝の上に首をのせた。自分は兩手でC子の首を抱くやうにはさんだ。さうして頰や喉をさすつた。C子はすましてゐた。

「君が初めて僕の處に來た時、横から見たら君の舌が蛇のやうに細長く見えた」と自分は云つた。

「うそよ」と云つて舌を出して見せた。

唇をあけて何氣なく齒ならびを見たら、「隨分わるい齒でしよ」と云つた。

この時自分はC子の一昨日よこした手紙を思ひだして、

「君は隨分馬鹿だね」と云つた。

「なぜ？」とC子はあまつたれるやうに云つた。

「だつて、君は今度お父さんやお母さんを安心させることが出來ると思つてゐるのだらう、僕とのことを云へば心配されるのにきまつてゐるぢやないか」自分はわざとさう云つた。C子が可愛らしくつてたまらなくなつたので。C子は默つてゐた。さうして自分の顏色を讀まうとした。

C子は言葉を換へた。

「君はまだ結婚に反對なのか」

C子はまだ默つてゐた。

「君が結婚したければ僕の方はしてもいゝのだ。結婚するのは今年より來年の方がいゝし、來年よりは再來年の方がいゝけれども、それも

君の都合でどうでもいゝのだ。母は君を嫌つてゐるけれども、僕さへもらひたがれば、承知さすことは出來るにきまつてゐる」

「それでも貴君は妾より美しい女や、ノーブルな女を御存知なのでしよ」とC子はすねるやうに云つた。

「人妻になつてゐるのだからいゝぢやありませんか」

「もしその方がこゝにいらしたら」

「そりや君より好きだらう」自分は露骨に云ふことによつてふざけてゐるふりにとらさうとした。しかし云ひすぎたと思つた。C子は今迄自分の顏を見てゐたが、顏をそむけてしまつた。さうして自分が何と云つてもだまつてゐた。喉をくすぐらうとしたら、無愛想に手をはらひのけた。自分も默つてしまつた。暫らくして、

「結婚したくない？」

「それでも愛してゐて下さらなければつまりませんわ」とC子は恨むやうに云つた。

自分は默つてC子の口に自分の口を近づけた。C子の口は逃げなかつた。二人は接吻した。二人はそれつきり結婚の話はしなかつた。

あとでC子は、「本當にあなたは時々憎らしいことをおつしやるのね。妾は誰も憎らしいと思つたことはありませんけれど、貴君だけは時々本當に憎らしいと思ひますわ。あんまり憎らしいことをおつしやるのですもの」と云つた。

自分はさう云はれるのが嬉しかつた。「妾は貴君ばかりを本當に愛してゐるのです」と云はれたやうに。

自分は友達からかりた三十圓と、母からもらつた十圓に、前から自分の蟇口にあつた一圓を加へてC子に渡した。四十と云ふ數がいやだつたから。

C子は歸りに一人の友にかへし、（C子は五十圓を二人の友からかりてゐたのだ）あしたもう一人の人の處へかへしにゆくと云つた。

四時半頃二人はIを出た。自分達はC子の故郷に歸るまでにもう一度逢はうと約束した。さうして途中でC子は俥をつくつて友達の處へ行つた。

あくる日C子から二人の友達の處へ行つた有樣を可なりくはしくかいて金をかへしたことを知らせて來た。

二十二

Iで別れてから四日目即ち、七月十一日にC子は兄に強ひられて不意に故郷に歸つた。さうして表むきには勘當されてゐるが、父と實母の家に歸つた。

歸つた日の手紙に「母も父もうれしさうで御座います。母とはもう話がどつさり／＼次から次へと出まして つきませんから困ります、一寸話をして見ましたら、まあねと申しましてほんとにうれしさうで御座いました」なぞとかいてあつた。

又、「母がほんとにやつれて、しばらく湯治にでもいつて顏色をよくしなければいけないし、きあうちに居たいときたない顏になるわねと申しました」と書いてあつた。うまく云ひわけをしてゐるなと思つた。

するとつぎのつぎの手紙に、「きのふもをとゝひもねてばかし居ります、それでも起きる度に少しづつ頰の肉のつくのが覺えますやう、母もけさはつくゞゝ少しは目がはつきりしたと申しました。目の下に黑い隈が出來てゐて見苦しいと氣をつけましたが、それがなくなつたと申してよろこんでをります」とかいて來た。

實は自分もC子のその目の下の黑い隈が氣になつて、何時かその隈のところを人さし指で何氣なくさはつて見たことがあつた。その時C子

はすましてゐた。

　こゝを讀んだ時「矢張り氣にしてゐたのだな」と思つた。十六日にその次の手紙が來た。それには次のやうなことがかいてあつた。

「きのふ初めて私に郵便がまゐりました。え、あなたからの。母に御手紙の表だけ見せましたらば、うれしさうによかつたねつて申しました。くげ沼のお話をしました時は少し變な顔をいたしましたけれども、ちつともうたがつて居りません、そして私がそんな事を申すのをうれしいと思つて居りますやうす。母だの妹だのつてをかしう御座いますわね。

　御手紙ありがたうぞんじました。私はほんとにうれしうございます。どうぞ私はいつまでも何でもおとなしくきゝますから、いつまでも可愛がつてくださいまし。

　ほんとに私はうれしうございます。まことにありがたう。あなたはほんとにいゝ方と思ひます。たゞ少しばかしにくらしいことを仰有りますけれども、このごろはちつとも仰有りませんからもうみんないゝ方で御座います。

　私はさう申せばほんとに御無理ばつかし申しました。御めん下さい。（中略）早くいつまでも、もうひとりぼつちでゐなくつて、いゝやうになりたう御座います。

　私の子供の時から四五年居りました書生のKは滿洲に今ゐまして、子供の寫眞を送つてまゐりました。昨年養子にやりましたTと申すものも子供が生れまして寫眞をとりました。父も母も羨ましいと申します。くすぐつたいやうな氣がします。さよなら―

　自分は之をよんで笑つた、さうして話が段々具體的に進んで來たことを察した。元より自分は不安を感じなかつた。豫期のまゝに事件の進んでゆくのを面白く見てゐた。自分はC子の心を察して「結婚する氣があるならば結婚してもいゝ、しかし何しろ母が君を信用してゐないのだから結婚するのはおそい程いゝだらう、しかし心配しなくていゝ」とかいてやつた。

二十三

　すると翌日C子から又手紙が來た。C子の故郷F市は東京から汽車で一番早くつて十七時間はかゝる。郵便は一晝夜かゝる。自分の返事を見ない內の手紙だつた。

　手紙をあけるとすぐ、

「封筒へ入れようとしましたら、あんまりながくかきすぎまして封筒へ入りませんからもう少しみじかくかきなほします。

　母がお人好しですからすぐ父へ申しました。父は何でも內々でする事だけはいけないと申しました。母はお父樣の思召し通り身をつゝしんでお家に居てちやんと御便りの來るのをまたないとあなたに笑はれますよと申しました。

　こんど御仲人の方をたのんで下さいまし。みんながしてくれる通りにしてどうでもようございます。いろ〳〵お話したり、いろんな事をしてお遊びしたりいたしませうね。妹だの父がよろこびますから、私はうれしくつてたまりません。早くお嫁にゆきたくなりました。けれども御いやならいつでもようございます、父も御約束さへしますれば二年でも一年でもうちにあづかつてゐても東京にゐてもいゝと申します」

と書いてある。自分は笑つてしまつた。

　自分はC子のとぼけたかき方につられて呑氣な氣分で返事をかきかけた、しかしかいてゐる內にいろ〳〵のことを考へた。するとC子の父が、「何でも內々でする事だけはいけない」と云つたと云ふのが變に腹が立つて來た。

　內々でしたからこそ話がこゝまで進んだのだ、內々でしなかつたならば自分はC子のこの世にゐる事も知らなかつたらう。今になつて內々〳〵

で事をしてはいけないと云ふのは、C子をおとゝいにして早く自分に結婚させようとするのだらう。今にきつと文通も禁ずるだらう。しかしその時損をするのは自分ではなくつてC子だ、C子の父だ。出來るならば親風吹かすがいゝ。自分は例によつてそんなことまで思つた。しかし一方、自分はC子の父のさう云ふのを尤もだと思つた。C子の父は自分のことをまるで知らないのだから。すると又そんなに信用のおけない自分を調べもしないで、最愛の娘を嫁けようとする親心を不思議に思つた。しかしそれ程までになつた親心に同情しなければならないと思つた。

自分はC子の兩親がC子のことを調べられて話がこはれることを恐れる餘り自分のことを調べる氣も起らずなんでもいゝから早く約束だけはしようと思つてゐるのだと思つた。

かう思つた時に自分は自分がC子の父に對して優勝者であることを感じた。その優勝者の自分を押へつけられるならば押へつけるがいゝ、自分はさう思つた。さうしてC子の父に向つて優勝者の寛大と愛をもつて對さうと思つた。頭を押へつけられたことなしに二十八まで來た自分はC子の父、やがて自分の義理の父になる人にも自分を押へつけることの不可能を知らしたいと思つた。

C子の母は表面は妾である。謙遜な心を持つてゐることは目に見えて明らかである。自分はそれを嬉しく思つた。又C子の故郷F市が東京より遠いのを嬉しく思つた。C子の親類とつきあふ必要がなくなるから。自分は又C子が勘當されてゐるのが嬉しかつた。自分の母の手前は少し都合がわるいけれども、ならうことならばC子が勘當されながら自分の妻に來てもらひたく思つた。さうするとつまらぬ義理のつきあひはしなくつていゝと思つたから。

自分はC子に、「仲人をつくるのはさうすぐはゆかない。それまでに母と獨逸に行つてゐる兄を承知させなければならない。母は君を非常に信用してゐないから、今その話を母にするのはまづい、來年まで待つてもらはないと困る。しかしいざとなれば母も兄も承知するにきまつてゐる。たゞなるべくあとを甘くしたいと思つてゐる。君のお父さんがもしそれまで逢つたり文通したりしてはいけないと云ふならば、逢ふのも文通するのも見合せるより仕方がない。しかし君のお父さんも藪蛇なことを云つたものと思ふ。その前に僕の爲人や、身體でも調べられるのが本當かと思ふ。又今迄の話の進んだことをお父さんは認めていらつしやるやうだが、それは内々つきあつた御かげだと思ふ。「君も結婚する心算なら、少しは裁縫も料理も心得てゐないと厄介なことが起りさうな氣がする」と云ふやうなことをかいた。

又少しあとでだつたけれども、C子から勘當されてゐることをお母さん達が心配してゐると云つて來た時に、「勘當されたまゝに來てくれる方が自分には都合がいゝのだ」とかいた。

二十四

C子と自分とは盛んに毎日文通してゐた。一日に二通くることは珍らしくなかつた。三通來たことも二三度あつた。さうして一日手紙が來ない時、二人はお互に怒つた。

自分はこんなに同一の女文字の手紙が來たら、物議を起すだらうと思つた。しかし勝手に起せと思つた。又母も氣がつき心配して何か云ふだらうと思つた。自分はそれをきつかけに母を承知させようと思つてゐたので別に心配しなかつた。

その時分C子から來た手紙をぬき書きして見よう。重複する所もあるけれども。

○「どうぞ私を叱ることと疑ふ事とはお忘れ下さいまし、私はそれでなくてもふるへるやうな事ばかり考へます。やすらかにたゞやすらかに私をあなたの胸に眠らせて下さいまし、一生私はあなたの胸にうづまつてゐたう御座います。美しい小さい聲で私はきつと朝から晩まで何かあなたにお話をいたしませう、いろんなこと。私はきつと一生あなたのお顔ばかしみつめてゐるかも知れません。ふりむけば悲しい世をみなければなりません。小さい胸はその度にどんなに怖れることでせう。私の身體からあなたの御手の離れるのはいやです。私はいつでもあなたの手にさはつてゐたう御座います。さうしたらどんなに安心するでせう」

○「私はちつとも信用がないんですもの、だれにも、ほんとに誰にも。子供の時にはみんなに可愛がられました。それで今でも、母でも伯母でも私位可愛い心柄の子はないと思つてゐます。けれどもなぜ女のくせにちつとも親の云ふ通りにならないのだらう、なぜ家をとび出したり平氣でするのだらう、なぜ父がかん當すると云つても平氣でそれをうけたらう、お嫁に單にいきたくないならばなぜ役者などに關係したらう、『道樂者に憎氣なし』こんなことを、伯母でも父でも母でも私にあてはめて居ります。その位私はみじめな取りあつかひをうけてゐます。どうでもいゝと考へてゐました。とても私の考へてゐる事をわかつてくれる人はないとあきらめてゐました、氣を許してあまえたこともなくすぎました。ごめんなさい、私は貴君にぶつかるやうによりすがらうとしました。淋しい想ひがして泣きたくなりました」

○「私も結婚はなるべくおそい方がいゝと思ひます。その代りなるべく早く東京へいつてゐて自由に毎日々々お逢ひの出來るやうにしてくださいまし、さうすれば私はちつとも心配しませんから」

○「私位、がう情に結婚を否定したものはほんとにないと思ひます。父にはどうしても否定する理由がわかりませんでした。父は私に不自由なくそして身勝手にふるまへる家へお嫁にやるのが何より私の幸福と考へてゐますから、さうしてその幸福を自分の樂しみにしようとしましたから。そして父は妾を藝人氣前だからだめだと見きつて居ます」

○「……こんな始末のために父は私達三人が父がなくなつてはだれにたよるところもないと申して居ります。F子(C子のこと)につれあひが出來たらその人に世話になるやうにするより外はないと申して居りました。そして父はいろいろしては私に家のため、家のためと申して居りました。父は自分の年と子供の年とを考へて居ります。そして父がなくなればすぐ、女ばかり三人の姉妹は今日から相談をする人のなくなるのも存じて居ります。父は本宅の母を他人のやうにして居りますから、本宅と私達の關係は父の存命中と云ふことは皆思つてをります」

○「父の友人等も心配しては早く姉様を片づけないといけないなどともう私の十六七の時から母に注意してをりましたが、今ではみんな私を信用してをりません、○○さんもお氣の毒だとみんなに噂をされて居ります。私は十八の春父の生家へゆくのをきらつて家出をしましてから、丁度三度かへつてはまた出また出しました。その度に大さわぎをさせました。とうと去年は父もあいそをつかして、籍をとつてしまひました。一年として落ちついた生活はこの家ではつゞきませんでした。父ほど寛大でそして大きい、そして温和な人はないと皆申します。只私はさう思ひながら一番慘こくな人とより思はれませんでした。(このごろはずるくなつてしまひましたから何とも思ひません)私はほんとにか

きつけるのにつかれてしまひました。私の心持は別に御話しなくつてもわかつていたゞけることと存じます。たゞ御ふしんもあります故、家の事情をおしらせいたします。一番同情のないかきかたをしました」

○「母が私の生れるとき卵を二つとつてたべようとしましたら一つの卵がくさつてゐまして一つの味のよかつた事を忘れられないと夢の話をいたします。私は双子で生れました。一人の子供はすぐ死にました。私はあんまり美しい子供でしたから皆評判したと申します。五つ位の時はお人形みたいだつたと申します。そして辰年の生れはよくなればよくなり、わるくなるとこはいからどうぞいゝ方の卵であつてくれればいゝがと今でも申します」

○「父はたゞ今ではもう早く身を定めたい一心でをりますから私がむりにゆきたいところがあれば結構だ位に思つてをります。そして母にどんなにか私かつぎましたらう。私の思つてゐる通りあなたの事を賞めておきましたからすつかり信用してをります。そんなにいゝ方と御一しよになれば今までの道樂も人はすぐ忘れてしまつて、世間の人もさすがちがつた方はえらいと云はれますからね、などとよろこんでをります。お父様は大丈夫だ、と母はよろこんでをります」

○「お裁縫は可なり上手だつてほめられてゐますけどお料理はまるで出來ません。お食事に苦心するなんてあんまりみじめな人生だとおもひます」

○「きのふ一日お手紙がまゐりませんでしたのよ、ずゐぶんがつかりしますわ。をとゝひの夜おかきになつたのがけさつきましたの、きうしてきのふのがいま（夜八時）参りました。ほんとに今日はうれしうございました。あしたもどうぞ。今朝のお手紙はほんとに私どうしたらいゝかわからない位うれしかつたんですもの。そして御返事をかきかけてもそは〳〵してついかけませんでした。三度も四度もやぶりました。唯今の御手紙はながい私の手紙を御らんあそばしてからなんですわ。きつと何か仰有ると昨日からまつてゐましたのよ。あなたはほんとにうつかり何でもお話の出來ない方、そしてしないわけにもゆきませんし。うちのことは御存じのない方にはほんとに私があんなこと申上げたら、さぞびつくりあそばしたでせうと思ひます。私何とも思ひませんけども、親の爲に一寸おはなししたんですわ、そしてうちの父はF縣では一番ゐばつてゐます。本宅との關係がなくなりましても母と妹二人の用意はしてあるらしう御座いますのよ。ほんとにそんな御心配はきつとかけないと思ひますわ。私わりによく何でものみこんでゐるんですもの」

○「私の父の年とあなたのお母さまのお年とは同じよ。きつとおやさしい方にちがひないと思ひますわ。それでも私はちつともよそのお宅へいつた事が御座いませんから少しこはいんですけれど、あなたがいらつしやれば私大丈夫よ。私はほんとにほんとに幸福を感じます。私みたいな女がまあどこにありませう。C子つて小猫の名みたいで私をかしくなりますわ。私はほんとに甘つたれよ、ようござんすこと」

○「あなたはよく〳〵いろ〳〵のこと仰有つて、私を馬鹿になさいますのね。きつとあなたはいつか私にかんしんなさる時がまゐりますよ。私は小さな事にも自分の罪をしどくおもひます。私はてんから自分に理くつがあつてもそれをしのび〳〵するくせがございました。人が何か私に犯せばかへつてその原因は自分にあると云ふことを見せなければ相手の安心するまで承知の出來ないたちでございました。臺所に女中が物の音をたてましても、どうぞ道

具をこはしてくれたのではなければいゝが、もしこはしたら知らぬかほして居てくれればいゝが、どうぞあやまりにこないでくれればいゝがとおもひます。そしてハッとしたその心持を察して私はむねがどき〱いたします。人がたゝみに墨をこぼしながら歩けば私はそつとふきながら歩いて、そしてどうぞ私のこの姿を氣づいて氣の毒がらなければいゝがと先にゆく人のふりかへるのを案じてどき〱いたします。女中などにも私は向うが氣味わるがる位親しにいたします。私はそのために自分のおちいるのが苦しいとも思ひませんでした。そして私は一人の人の同情をも引いてはをりません。それ程私の態度は傲慢でございました。私は妙な頭をもつて居ります、もし私の前にほんとに罪人とやら云ふ人間をつれてきましても私はどこが惡いか認めることはむづかしいとおもひます。私は反つて自分を同化させようとするかもしれません。私は只動かずにそのまゝC子の面目を保てるのはあなたのおそばに居る外はないと思ひます。動く姿に自分ながらつかれました。

〇―私はもう僞りらしい生活にあきました―

私はこゝまでくるのが當然で人の出來ない事をしたためにこゝまでくることが出來たと思ひます、あゝよかつたと思ひます。私のやうな幸福を受けるものは一人もないやうな氣もいたします。私はあなたより外の人にはちつともちつともたよることの出來ない人間と云ふこともよく存じてをります。私がなくつたつてあなたはいつまでもちつとだつて御不幸ではなくつて、私はあなたがなければゆきどころがなくつてきつと自殺したらうとおもひます。きつと今年と來年との先の年を知らないでゐたかもしれません、きつときつと。その位私は心細く思つて居りました。私に死んでくれ、死んでくれと申した若い男がございました。私は半分えゝと申して居りました。あがなはない半分の心をもちながらそれを知らせることを恐れてええと申して居りました。あがなふ事の出來ない半分の心が苦しみました。それでも苦しみながら若い男にひきずられるやうに世の中が悲しくなつてをりました。何事もどうぞお許し下さいまし。私は時々おもはず泣きたくなります。私のほろ〱涙のこぼれるときは妹も母もよりつけぬほど私をいとほしがります。人はみんな私をやさしすぎるからいけない〱と申します。私は自分ほどむごたらしいわるい人間はないと思ふことが度々ございます。けれどもしかたがない、かうするより道はないと又おもひます。どうぞもうみんなごめん下さい。私はきつといゝ子になります、もしわるいところがございましたら、なほりますまで見すてないで叱つてなほしてくださいまし。どんなに苦しくつてもきつときつと私はなほします。そしてきつとそれはつらくないとおもひます。どうぞ〱可愛がつて下さいまし、私はいま泣きながらかいてをります、私は毎日あなたに見すてられないやうにと幾度も幾度もいのるやうにおもつてをります。だん〱感情がせまつてまゐりますからこれでやめてしまひます

〇「どうぞ〱C子の惡い行ひをお許し下さい。一つづつ惡いことを悔むために又一つづつの惡い行ひを重ねるやうなことはいたしません、ゆきくれた野に犯した罪をどうぞ可哀さうだつたとお許し下さい。今日でも昨日でもからしておちついてはつきり自分のわかります時、しみ〱自分の惡いことがわかります。けれども惡いことばかり身にしみて思はれますとき、私は次々と重ねてゆくおろかさを今までいたしました。せつな、せつなの行動がどんなにおろかな事をいたしませうとも、私はやつぱり自分を忘れずに今日までまゐりました。よく出來心

の女と仰せ下さいました。出来心の見苦しさを再びくりかへす必要のない身分になりました事をよろこびます。どうぞどうぞ、いろ／＼のことをお許し下さいまし。世間の人とくらべることだけはおよし下さいまし。そして私一人のおわびをおきゝとゞけ下さいまし。私は貴君お一人にだけあやまつて許して戴かなければならないと思ひます。どうぞ私の味方になつて下さいまし。私は貴君をはなれてはどうしてもゐかれぬとおもひました、どうぞ私を愛して下さい、可愛がつて下さいまし――

自分はC子の手紙に同一のことがいろ／＼の方面からくりかへしくりかへし書いてあるのを嬉しく思つた。又文章に内容にあふリズムがあるのを嬉しく思つた。自分は言葉を誰はつけるがリズムは誰がつけないと思つてゐる。自分は前からC子が自分に誠実にたよつてゐることを感じてゐた。しかし時々は疑はないではゐられなかつた。しかしもうC子が本氣で自分にたよつてゐることを疑はなくなつた。自分は可憐に思ひ嬉しく思つた。

二十五

七月二十八日の午後に自分は大久保の林の處に行つた。

いろ／＼話してゐる内にC子の話が出た。いよいよ自分達は夫婦になるらしいと自分はとぼけた云ひ方をした。すると林が、「こなひだ君の處から歸つて妻にその話をしたらしきりとをしがつて折角今迄ちやんとしていらしたのにと云つてゐた」と云つた。

「さうか、さうだらうね」と自分は平氣な顔して云つた。自分はある不快を感じたけれども、林の細君のさう云ふのはあまり當然だから不快を感じるのが馬鹿げてゐると思つた。しかしいろいろの人もきつとさう思ふだらうと思つた。考へて見れば隨分亂暴な話である。自分はあたりまへの道をあたりまへの顔して歩いて來た心算でゐるが、二度目にあつた時既に關係してゐる。いくら考へてもあまり讃めた話ではないやうだ。この事實は自分達に可なり復讐をしてゐる。しかし二人はたゞの一度も後悔しなかつた。

自分はその時C子と結婚しようと云ふ氣はなかつた。しかしC子と自分の運命がそれによつてきずつけられないことを信じてゐた。自分はC子を友達以上の友達にしておきたかつたのだ。C子も亦自分にそれを望んでゐると思つてゐたのだ。妻子を養ふ資格が何時になつたら出來るかわからない自分は、又妻子と同棲することを、細君の實家との交渉を恐れた自分は、C子とさう云ふ關係を結ぶことを喜んでゐた。

自分はC子とつきあつてゐる内にC子と自分は遂には結婚することになることを知つた。恐らくC子よりもさきに自分はそれを感じた。しかし自分は別に不安は感じなかつた。C子が自分とならばどんな生活してもいゝと云ふ決心がつかない迄は斷じて夫婦にならない、しかし決心がつけば夫婦になつてもいゝ、自分はC子を抑へつけることを知つてゐるから、と思つてゐた。

自分はその時分から友によく、つまり二人は結婚することになるだらうと云つた。自分の云ひ方の平氣なのに興味をもつた人と不快をもつた人とあつた。しかし自分は不安を感じなかつた。さうして恐らく自分がC子をぬかせば一番自分とC子のことを知つてゐるだらうと思つた。贊成する友よりも、反對する友よりも、C子の家の人よりも、自分の家の人よりも。

だから自分は自分の結婚について惜しがられたり、不安がられたりするのはいやだつた。明らかに自分が侮辱されてゐるやうな氣がするので。

林の細君が惜しがつてくれたのはもつと單純な意味にちがひない、今迄道樂もせず、ちやんとやつて來たのが、女と關係して自由結婚のやうな結婚をするのを惜しがつてくれたのにちがひない、さう思つた自分はそれを不快に思ふのは大人氣ないと思つたけれども、いゝ氣がしなかつた。

五時半頃林の處を辭した。歸りの電車で、なぜ自分は今度C子と結婚するかと云ふことを手紙風にかいて、今度の結婚に反對しさうな人に見せようかと云ふ氣がした。さうしていろ〳〵考へてゐる内に、自分とC子は實際運命に導かれた無二の良緣と云ふ氣がして來た。

しかしC子の風を一度見た人は、さうしてC子と本當につきあはない人は、女に生に見える自分がC子に甘くやられたと思ふのも無理はないと思つた。飢ゑたる者は食を擇ばず、さう云ふ風に思つてゐる人もあるだらうと思つた。自分は何によつて激して來た。

C子にある危險なる性質は皆より美しいいものの爲に燃やすことが出來る、C子には愛と自負と謙遜な心がある。自分は何時もになくC子を理想的の女に築きあげて勢ひよく家に歸つて自分の室に入らうとした。すると室に母が立つてゐた。さうして自分の机の上にC子からの手紙が一通のつてゐた。見つかつたなと自分は思つた。

その時母は怒りの前にふるへて、

「お前はとんでもないことをしてくれたね」

「なんです」自分は母の前に立つて母を見おろした。自分の肩まできりない母は自分を見上げた。

「わかつてゐるだらう」

「大概わかつてゐます」

「お前の處へしよつちう手紙をよこす女は、この前來た變な女だと云ふぢやないか」

「さうです」

「よりもよつてなぜあんな女と關係したのです」

母は少し前から顳顬から耳にかけての神經痛でよわつてゐたが、その時は怒りと心配とでなほ神經痛がひどく痛んでよわつてゐた。自分は同情した。しかし折れようとは思はなかつた。自分は母の性質をよく知つてゐる。二十分も強情をはれば母は承知するにきまつてゐる。さうして話がきまれば運命に恐ろしく從順な母はC子に厚意をもつことはわかつてゐる。自分はわりにおちついてゐた。自分はC子から來た四五十通の手紙を昔机の抽斗に無造作に入れておいた。母は手紙を見たにちがひないと思つた。しかし腹も立たなかつた。自分は氣分で母に勝つてゐたから。

「氣に入つたからです」

「お前に惡口を云つてゐたぢやないか。お友達の方も丁度その時見て知つていらしたと云ふぢやないか」

「惡口は云ひました、しかし氣には入つてゐたのです。勿論あの時は結婚する氣はなかつたのです」

自分はわざとさう云つたが、母は結婚と云ふ言葉を聞いても今更に驚かなかつた。

「それはお前がもらひたければもらふのもいゝだらう。しかし何もあんな女を選ばなくつたつていゝぢやないか。もう少しはましな女がありさうなものぢやないか」

「あれでも家はいゝのですよ」

「いくら家がよくつたつて、あれぢや仕方がないぢやないか、妾はいゝとしたつて世間で笑ひますよ」

自分はこの時、母はいゝことを云つてくれたと思つた。

「お母さん、それはまちがつてゐます。お母さ

んがあの女がいやならいやと云つて下さい。世間の人が笑ふなんて云はれると、いやな氣がします。世間の人がなんと云つたつていゝぢやありませんか。世間の人はどうせ別に考へもしないで云ふのです。そんなことを一々氣にしてゐたらきりがありません」

「それでも今だに女中がわらつてゐるよ。妾も一緒に笑つてゐたのだよ。さうして女中はあんな娘をもつた人は氣の毒ですね、あんな娘を嫁にもらふ人があるでせうかと今だに云つてゐるよ。妾も一緒にさう云つてたのだよ」

「お母さんや女中がそんなことを勝手に云つたからつて何にもならない話ぢやありませんか。僕の方が自分のことは知つてゐますよ。きつと僕の方があの女を疑ふことも疑つたでせう」

「どうだか。お前はきつとだまされてゐるのにちがひないよ。いゝ女があんな風するものかね。一日見たつて男と關係した女と云ふことがわかるぢやないか」

「それは關係してゐましたさ。そんなことはお母さんより知つてゐます。知つてなほ安心してゐるのです」

「お前がそんなにあの女にまゐつてゐて、貰ひたいならもらふといゝだらう。どうせお前のことだから妾の云ふことなんか聞くわけはない。しかしきつとあとで後悔するよ、お前の不在に男でもつくつてごらん」

「大丈夫ですよ」

「どうだかわかるものかね」

「お前が一番ひどいめに逢ふのだからね」

「だから僕のことは僕に任せてくれればいゝでしよ。もう何しろ二十八なのですからね」

自分はから云つた時、自分が自分の力で食つてゆけないことが頭にひしいゝと來た。しかし何氣なく、

「自分のことは一番、自分が知つてゐます」とつけ加へた。

「それがあてになれば心配はないけれども」と母は云つた。

しかし母はそんなことを云つてゐるうちに何時のまにか二人の結婚を認めたやうな態度をとるやうになつた。さうして「何しろあんな風してゐてもらつては困る」「朝から晩まででれでれされては困る」「あんな女を娘にするのかと思ふと厭になる」「自分に來てくれなかつたらよかつたのだ」「話がきまるまで來ないやうにしてもらはなければ困る」「風はちやんとしてくれるだらうね」「家はいゝのだね」とか云つた。

自分は「お母さんと一緒に住んだならお母さんに氣に入らないこともあるだらうが、別家して時々お母さんが遊びにくるならはきつと氣に入るだらう、風なんかもさう云へばきつとちやんとするだらう」と云つた。

母は云ふだけのことを云つて歸つて行つた。

神經痛は可なりひどく痛むらしかつた。自分は後姿を見て涙ぐんだ。母を事實で喜ばしてやりたいと思つて。

母がゐなくなつてから机にのつてゐたC子の手紙をとつて封を切つて讀んだ。その内にはこんなことがかいてあつた。

「よく考へれば夏中家に居るのがいゝのかしらとも考へます。けれどもたうてい私にはたまりません。私はどうしても親の手からあなたの手へ渡されるのはいやな氣がいたします。私はどうしても一人であなたのところへずん〱かへります。今日だつてかへりたいんです。あしただつて」

自分はその呑氣な調子が腹が立つた。自分は母の様子を見に母の室の方に行つた。母は淋しさうな腹立たしさうな顏してゐた。さうして神經痛でよわつてゐた。しかし夕食の時二人は何事もないやうな顏をしてゐた。しかし何時もよ

り默つて飯を食つた。

夕食後をすぐ自分は室に行つてC子に手紙をかいた。母に氣がつかれたこと、母と議論したこと、母の承知したこと、しかし母がよわつてゐること、母の神經痛のことをかいて、「あんな呑氣なことを云つてもらつては困る。自分は母に同情した。母を喜ばしたいと思つてゐる。お前に本當にいゝ子になつてもらはないと困る。しかし安心していゝ、母はきつと今にお前が好きになる。母を喜ばすことは樂だ」とかいた。

翌日大津に母に見つかつたこと、母にからから云はれたことを話したら、

「君のお母さんは君の呼吸をすつかりのみこんでいらつしやるね」と云つた。

二十六

その後暫らく母は不平らしいやうな、不安らしいやうな顔してゐた。さうして「お前がきつと苦勞する」とか「あんな女を娘にもつのかと思ふと心細くなる」とか云つた。しかし一方では「仲人には川路さんをお頼みする方がいゝ」「來年兄が歸つてから話をきめるといゝ」なぞと云つた。さうして神經痛は二日許りしたら反つてそのことがあつた前よりもよくなつた。自分は安心した。

それから十日程して或日C子から寫眞をよこした。母に見せようかと云つたら、見ない方がよささうだと云つた。しかし暫らくしたら矢張り見たいやうなことを云つた。見せたら「之ならさう變なことはない、あたりまへだ。風はちやんとしてもらはなければいけないね」と少しは安心したらしく云つた。

その翌朝起きて手水をつかひに行つたら、母が笑ひながら、

「とう／＼お前に降參してしまつた。だん／＼憎くなくなつて可愛くなつて來た。初めはどうしようかと思つてくやしかつたけれども、少し樂しみになつて來た」と云つた。

自分は涙ぐむ程嬉しかつた。

C子からは又、こんなことを云つて來た。

「私はいろ／＼の事を想ひました。私はほんとに貴君にどの位、お話したいか分りません。けれどもよく筆がまはりませんからどうぞお察し下さい。私はほんとにうれしくつてたまりません。貴君のやうな方が私のためにたつた一人あるやうな氣がいたします。どうぞ可愛がつて下さい。私は貴君に愛されるのが一番うれしうございます。私はほんとに幸福をしんじます。貴君に愛されてほんとにうれしくかんじる事の出來る女は他にはないと思ひます。けれども貴君はもつとお好きな女がございますか。さうしたらば私はその女を殺してしまひます。どうしても男や女の犯せないたつた二人だけの間になりたうございます。どうぞ他の女に親切にしないで下さいまし。私はほんとに女王のやうな品格を保ちたいとおもひます。どうぞ朝から晩まで可愛がつて下さいまし。私はそれでないといくら叱られても、どうされても離れません。柱にくゝりつけられないさきにかみついてしまひます。押入へ入れられない内にしがみついてしまひます。けれどもちやんとおなかの中で可愛がつて下さいますなれば、御仕事の邪魔をしないでおとなしく坐つて居ります。私はすぐわかります。だまされません」

「人の妻には重ねてなるものではないと云ふことも心得て居ります。私はお嫁にいつて出るのもいや出されるのもいやだと考へてゐました。氣に入らなかつたらすぐ出してしまふなんて仰有ると私は泣きたくなつてしまひます。そんな位なら初めから氣に入らない方がよつぽどいゝわ。私だつてほんとに氣に入らなければ一秒だつて我慢の出來る人間ではないんですけ

ど、あなたなら大丈夫と高をくゝつて居ります。だつてどう考へたつてあなたを嫌ひになつたり貴君に嫌はれたりしよう筈がないとおもひますから。だつてちつともお嫁にゆくのがいやぢやなくなつてしまつたんですもの。さよなら」

自分は之を讀んで母のことを思つた。さうしてめでたし／＼と思つた。さうして微笑んだ。さうして之から先のことを考へた。

打出にて

○
何處までも
生きよ
この仕事。

○
生きる處まで
生きよ
この人間。

○
托された
生命生かせよ

兄弟。

○
三つのものよ
一つになれ。
隣人への愛
神への愛
そして生命への愛。

○
虚無の内を
つらぬく一つの力。
生命。
我は汝に托す。

○
動かせぬ
力に押されて
進む
自づと
我は。

○
生きてゐるうちに
面白い世界を
つくつて見たいものだな
君。

いぢけて

いぢけて
他人にすかれるよりは
欠伸して他人に嫌はれる也。
夏の日。

叱られると

叱られると
一寸はよわるが
すぐ又元氣にならないではゐられない。
健康な子供のやうだ
俺の心は。

のどかな空氣

のどかな空氣
ほがらかな空氣
今の世にそんなものを
呼吸して生きてゐるのは
すまないね。
だがつい呼吸する
のどかな空氣
ほがらかな空氣。

友情

自序

人間にとつて結婚は大事なことにはちがひない。しかし唯一のことではない。する方がいゝ、しない方がいゝ、どつちもいゝ。同時にどつちもわるいとも云へるかも知れない。しかし自分は結婚に就ては楽観してゐるものだ。そして本當に戀しあふものは結婚すべきであると思ふ。しかし戀にもいろいろある。一概には云へない。この小説の主人公は杉子と結婚しなかつた爲に他の女と結婚したらう。そして子が生れたらう。その子が男で、大宮と杉子の間に出来た女の子を戀して結婚するといふことも考へられないことではない。そして兩方がお互に生れたことを感謝しあふと云ふこともあり得ないことではない。

夫婦のことは何處か他の處で書かう。

自分はこゝではホイットマンの眞似して、失戀するものも萬歳、結婚する者も萬歳と云つておかう。

一九二〇、一、一四

實篤

上

一

野島が初めて杉子に會つたのは帝劇の二階の正面の廊下だつた。野島は脚本家をもつて私かに任じてはゐたが、芝居を見る事は稀だつた。此日も彼は友人に誘はれなければ行かなかつた。或はそれでも行かなかつたかも知れない。その日は村岡の芝居が演られるので、彼はそれを讀んだ時から閉口してゐたから。然し友達の仲田に勸められると、ふと行く氣になつた。それは杉子も一緒に行くと聞いたので。

彼は杉子に逢つたことはなかつた。しかし寫眞で一度見たことがあつた。それは友達三四人でとうつした十二三の時の寫眞だつたが、彼はその寫眞を何氣なく何度も何度も見ないわけにゆかなかつた。皆の内で杉子は圖ぬけて美しいばかりではなく、清い感じがしてゐた。彼はその寫眞を机の前に飾つておいたら、きつといゝ脚本がかきたくなるだらうと思つた。しかし彼は仲田に寫眞をくれとは云へなかつた。そして其後仲田の處へ行つてももう一度その寫眞を見せてもらふことは出来なかつた。そして當人にも逢ふことは出来なかつた。一度、噂を聞いたことがあるやうに思つた。しかしそれは杉子ではなく、杉子の妹の噂だつたかも知れなかつた。

彼が帝劇に行つた時はまだ少し早かつた。彼は廊下に出て今に仲田が妹をつれてくるかと思つた。それを心待ちしてゐたが、若い女をつれてくる男が仲田ではないと反つて安心もした。

彼はその時、村岡が友達二三人と何か高聲に話しながらくるのに出あつた。彼は村岡とはある會で一度あつたことがあるが、目禮をしたりしなかつたりする間がらだつた。そしてこの頃は逢つても知らん顔をすることを努めてゐた。それは彼が村岡のものをよく惡口云つたからである。今日でられるゝ時も彼は公にではない

が、可なり悪口云つた。元よりそれは文學をやる仲間同志で云つたので法科に行つてゐる仲田とは殆んど文學の話はしなかつた。仲田は彼が村岡のものを嫌つてゐるなぞと云ふことは知らなかつた。新らしいものだから、それに評判のいゝものだから、彼もきつと見にゆくだらうときめてゐた。それで說明掛位に彼をつれて芝居を見ようと云ふのだつた。彼はそれに氣がついてはゐた。そしてそれを迷惑にも思つた。しかし斷る氣にはなれなかつた。

彼は村岡と顏を見合せた。兩方がお辭儀したさうにも見えた。併しどつちも自分の方からさきにお辭儀しようとはしなかつた。お世辭のやうに思はれるのもいやだつたのだらう。或は先にお辭儀して相手に見くびられるのがいやだつたのだらう。少なくも村岡は彼より四つ五つ上で、世間にももう認められてゐた。彼は五つ六つ短かい脚本をかいたが、誰にも顧みられなかつたのは事實だ。しかし彼は自分の方から頭をさげるには、相手を輕く見てゐた。

とう〳〵お辭儀せずに村岡は通りすぎた。彼がふとふり返つた時、村岡は友達と彼の方をふり返つて何か云つてゐた。

「あれが野島だよ」

「あれか。くだらない脚本をかく奴は」

そんなことを云つてゐるやうに思つた。そして急に不快を感じながら顏をそむけると、向うから仲田が、妹の杉子とやつて來た。

寫眞よりはずつと人間らしくなつたと思つた。だが若々しく美しかつた。

「もう、君は來てゐたのか」

「あゝ、少し前に」

「之が野島君だ。僕の妹だ」

二人は默つて丁寧にお辭儀した。

二

野島は杉子とは殆んど話をしなかつた。杉子が芝居を感心して見てゐるらしいのに、不愉快を感じた。しかしそれは無理もないとも思つた。仲田も感心してゐるやうなことを云つたが、それはむしろ彼にたいするお世辭のやうに見えた。

「矢張り新らしいものは、我々に近い感じがするね」

そんなことを仲田が云つた時、彼は別に反對する氣にはなれなかつた。

「飯を食はう」

仲田はさう云つて先にたつて行つた。三人は向ひあつて飯を食つた。仲田の妹は野島のゐるのを別に氣にはしてゐないらしかつた。しかし本人と饒舌らなかつた。そして二人の話を別に注意して聞いてもゐなかつた。それよりは同じ年頃の女の人が居ると、その女の方を注意してゐるやうだつた。

野島はさうはゆかなかつた。彼は杉子の誰よりも美しいことを感じた。そして杉子のわきにゐることをこだはらないではゐられなかつた。いつも仲田には不遠慮になんでも云へた彼が、今日は何一つこだはらずには云へなかつた。村岡のものの悪口も彼は思ひ切つて云へなかつた。しかし彼は心のうちによろこびを感じた。そして呑氣なこと許り、いつもより調子にのつて饒舌つた。それが又彼には卑しいやうにも思へたが、心のよろこびはやゝもすると言葉となつて、あふれ出て來た。そして杉子が少しでも笑ふと彼は幸福を感じた。やがて幕のあくリンが聞えても彼はいつまでも其處に腰かけてゐたかつた。

しかし杉子はあわてて立つた。二人もあとをついて芝居を見に行つた。彼はもう芝居は氣にならなかつた。たゞ何げなく杉子の顏を見る機會をつくることに苦心した。こ

こに自然のつくつた最も美しい花がある。しかも自分の手のとゞくかも知れない處に。しかし彼は杉子とは一言も話す機會をつかめなかつた。たゞ兄と話すのを聞いて、快活な、思つたことは何んでも平氣で云ふ質だと思つた。そしてはつきりものを云ふ頭のわるくない女だと思つた。

次の幕の間に彼は、とう／＼聞いた。

「君の妹さんはおいくつだ」

「十六だ。まだ本當の子供だ。存外大きいが」

「さうか、僕はもう十七八位かと思つた」

彼は本當はもう十九か、二十ではないかと思つてゐた。十六ならまだ安心だ。自分と七つちがひだ。自分が少し有名になる時分に、丁度十九か、二十になつてゐる。

彼はそんなこと迄考へてゐた。彼は女の人を見ると、結婚のことをすぐ思はないではゐられない人間だつた。結婚したくない女、結婚出來ない女、これは彼にとつては問題にする氣になれない女だつた。

さう云ふ女にいゝ女がゐると彼は一種の嫉妬さへ持ち兼ねなかつた。女は彼にとつては妻としてより他、値のないものだつた。結婚が彼にとつてすべてであつた。女はたゞ自分にだけたよつてほしかつた。

さう云ふ彼が杉子を見て、すぐ自分の妻としての杉子を思ふのは當然であつた。彼はさう云ふ女を求めてゐた。そして杉子がさう云ふ女ではないかと私かに思つてゐた。處が事實は理想的以上に見えた。自分には少し勿體なすぎるやうにさへ思つた。そして仲田が、その女を自分の妹あつかひし、馬鹿にしてゐるのを勿體ないことをする奴だ位に感じた。

その晩、歸つても杉子のことを思はないわけにはゆかなかつた。

三

二三日たつても彼は杉子のことを忘れなかつた。反つて益々理想化して來た。彼は自分の心の平靜を失ひかけた。次の日曜の朝に彼は仲田の處に出かけて見たが、杉子らしい聲さへ聞えなかつた。彼は仲田と話しても杉子のことに氣をとられて、つい仲田の云ふことを聞きもらすことさへ多かつた。そして何となくおちつかなかつた。仲田とはロシヤの過激派について話してゐた。

「食ふに困れば人間はなんでもする。日本だつて今よりせめて倍も米が高くなれば默つてゐたつて皆、過激派になる。壓迫し切つても、何處かにすきはあるものだ。ロシヤに過激派の起つたのは當然だ。又それに反對するものの出るのも當然だ。當然と當然がぶつかつて、殺しあふのも當然だ。だがそれで益々米がたかくなるのも當然だ。この當然を何處かで切りぬけて、皆に飯を食へるやうにするのが問題だ。まあ、見てゐるより仕方がない」

仲田はそんな事を云つてゐた。

「當然だが、段々血なまぐさい方に、加速度に進んでゆきさうだ。それも當然だ。しかしもう皆、平和にあこがれてゐるだらう。今偉大な人間が出て來て、それが民衆の希望と一つになれば大したことが出來る。しかしそれは想像以上の事實で、ロシヤには人物も澤山ゐるだらうから、今に事實によつてある解決を與へてくれるだらう。その解決を與へてくれるもので、世界の思想が、大きな影響を受けるだらう。自分はレニンや、トロツキー以上の人物が今に頭をもちあげると思ふ。何處か思ひもかけない處で」

野島はそんなことを云つたが、心はほかにあつて、いつものやうに興奮することは出來なかつた。何かもの足りない。何かおちつかない。彼は立つたり、坐つたりした。いろ／＼の本を

もちだしてはひろひよみした。

「君はどんな人間を尊敬する」

仲田は不意にそんなことを聞いた。

「君の妹さんのやうな方を」と彼はふと云ひたくなつたが、まさか口には出せなかつた。

「僕は、矢張り、正義の觀念の强い、意志の强い、信じることを行ふ人間が好きだ。しかし出來るだけ他人の運命を尊敬するものが好きだ。何と云つたつて聖人や、神のやうな人は偉い、一時的の波瀾の爲に浮き沈みする人間は尊敬することは出來ない。それから慘酷な冷たい人間は嫌ひだ。いつも損をしないこと許り考へてゐるものも嫌ひだ。何處かに人間の面白味が出なければ」

この時、隣りで杉子らしい笑ひ聲が聞えた。しかしそれはすぐ消えて、向うの室に行つたらしかつた。

「君の理想はどうだ」

「僕は迷つてゐる。今の政治家の考へ、今の法律の基礎は隨分白蟻にたかられてゐる氣がするよ。之からの政治家はどう手をつけていゝかわからない。目的は世界中の平和、人類の幸福にあることはわかつてゐる。それを又亂さずに國民の幸福を樹立しなければならないこともわかつてゐる。富の不平均も、殊に食へない人間の運命を今のまゝにしておくことのよくないことも知つてゐる。しかしそれをどうしたら一番いいか、それはわかつてゐるやうでわかつてゐない。第一官吏になる氣もしないし、實業家になる氣もしない。學者になりたい氣もするが、嵐のなかにぢつとおちついて室にこもつてゐるのが、本當か噓かもわからない。實際、今の法科の學生は自覺をちやんとつかんでゐる人は少ないだらう。何かに動かされてはゐるだらうが、それで皆議論は多いがね」

仲田は野島がうはの空で聞いてゐるのがわかつたか、話をぷつつとやめた。

「なんでもいゝさ、ぶつかればわかるだらう。皆その人のもつてゐる價値だけ切り發揮出來ないのだからね」

四

野島は晝迄ゐて、仲田の家を辭した。杉子にはとう〳〵逢へなかつた。彼はなんだかものたりない氣がして四つ角を右に曲つた。すると十五六間さきから杉子が、生花をならひに行つた歸りと見えて葉蘭を油紙につゝんで持つて歸つてくるのに出あつた。彼は不意なのでびつくりして、立ちどまつた。そして氣がついて歩きだした時分に、杉子は近づいて來て少し微笑み加減にあいさつした。彼もあわてて丁寧にお辭儀した。彼は何か話しかけたかつた。しかし言葉は出なかつた。

杉子は通りすぎた。彼は夢中で、二三十步步いてふりかへつた時、もう杉子の姿は見えなかつた。しかしこの僅かなことが、急に彼を別人のやうに快活にさせた。

物質論者に云はすと、こゝに何か知らない物質が、戀する者から厚意を見せられると、血管のなかに生ずるらしい。人はその時自づと快活にならなければならない。野島は二十三にはなつてゐたが、女をまだ知らなかつた。

野島はこの氣持を自家に歸つてももつてゐた。そして誰かに杉子のことを讚美して話したい氣になつた。彼はもう杉子のゐる人生を厭ふ氣にはなれない。彼は自然がどうして惜し氣もなくこの地上にこんな傑作をつくつて、そしてそれを老いさせてしまふかわからない氣がした。

ともかく彼は日本の女の内に、殊に自分の近い處に、杉子のやうな女のゐることを讚美し、感謝したい氣になつた。日記にこんなこと

をかた。

「人生は空かも知れないが、そして色即是空かも知れないが、このよろこびは何處からくる。このよろこびを我等に與へてくれたものに、讃美あれよ」

彼は家にぢつとしてはゐられなかつた。何處かに行かないと、おちつかない氣になつた。彼は一番親しい大宮を訪ねることにした。

うちにゐるといゝがと思つたら、矢張りうちにゐた。その友は小說をかいて少しづつ世間に認められて來、彼のものよりはいつもほめられてゐた。この事は彼を時に淋しくさせた。しかし大宮との友情はそれで傷つけられるわけはなかつた。お互に尊敬してゐた。大宮は殊に彼の作物に厚意を見せ、世間が惡口を云ふ時は、淋しがる彼を慰めることに骨を折つた。野島はそのことを思ふと淚ぐみたい氣さへした。彼が當時自信のある作をあつめて本を出した時も、大宮が自分の本でも出すやうに骨折つてくれた。そしてその本が或人からさんざん惡口云はれた時、大宮は彼を祝して、

「君は前に復讐を受けてゐるのだ」君程よわらなくつていゝ人間はないと思ふ」

と云つてくれた。彼はその時、泣きたい程大宮の友情に感じた。そして大宮を自分の知己としてその期待を辱めたくないと決心した。二人はお互に認めあひ、鼓舞しあつた。勿論、ある時は、お互に手きびしく批評しあつて腹を立てあつたこともあつたが、すぐなほつて、反つて相手の云ふことが尤もだと氣がついてあとで心のうちで感謝し、なほ友情のますのをおぼえた。

大宮は彼が來たのを喜んだ。そして今まで讀んでゐた內村さんの本などを見せた。大宮は內村さんのものを愛讀してゐた。

大宮の書齋には以賽亞の四十章の、

「然れどエホバを俟望むものは新なる力を得ん。

彼等は鷲の如く翼を張りて登らん。

走れども疲れず、步めども倦まざるべし」

と云ふ字が紙にかゝれてピンではつてあつた。野島はそれを見て充實し切つた、力強い言葉だと思つた。

五

彼はしかし杉子のことを云ひ出す機會がなかつた。又云はうかと思ふと同時に云ひたくない氣もした。

二人は文壇の話や、自分達の仕事の話や、讀んだ本の話などした。そして自分達のしなければならない仕事の困難な、しかし希望の多い話をした。

この時、大宮は今朝ある雜誌から小說をたのみに來たと話した。その雜誌は有名な雜誌で、その雜誌に小說を出すと、小說家としての存在を世間に知られることになるのだ。

彼はその話を聞いた時、矢張り少し淋しくなつた。物質論者ならば、その一言で野島の腦のなかに何か毒素が生れたと云ふにちがひない、野島も亦そんな氣がした。嫉妬、そんな名のつく。彼はそれに打ち克たうとした。又友の成功は自分達の成功を意味するのだとも思つて見た。しかし毒素はどいてはくれなかつた。自分は實際自分を信じてゐるが、彼は自信に時々不安を感じないわけにはゆかなかつた。大宮はそれにすぐ氣がついたらしかつた。大宮は、

「こなひだ津田にあつたら君のものに隨分感心してゐた」

と云つた。此一ことは彼の毒素を消滅させるのに最もきゝめのある注射だつた。彼は自分ながら情けない程、他人によつて自分の氣分があがりさがりするのに氣がつかないわけにはゆかなかつた。彼は大宮と希望のある話をし、そし

て大宮の今度その雜誌に出す作のいゝことを信じ、そして自分達の勝利の道が近づきつゝあることを祝した。

歸りに彼は自分の人格のあまり上品でないことを反省した。自分は杉子の夫に値しないものだ、勉強しなければと思つた。

彼は自分にたよるものを要求してゐた。自分を信じ、自分を讃美するものを要求してゐた。そして今や、杉子自身にその役をしてもらひたくなつた。杉子は彼のすることを絶對に信じてくれなければならなかつた。世界で野島程偉いものはないと杉子に思つてもらひたかつた。彼の仕事を理解し、讃美し、彼のうちにある傲慢な血をそのまゝぶちあけてもたじろがず、かへつて一緒によろこべる人間でなければならなかつた。

しかし彼は自分を顧みる。そして自分の尊敬する人々のことを思ふ。自分の力なきものだと云ふことをあまりに露骨に知らないわけにはゆかなかつた。まだ二十三だ。しかしそんなに偉い素質があるだらうか。たゞ自惚にすぎなくはないか。

彼は日本の文壇の先輩を心私かに輕蔑してゐた。しかし自分の現在の仕事を思ふと、彼等以上とは云へない氣がした。

彼はイブセンや、ストリンドベルヒ、トルストイ、そんな人のことを思ふと情けない氣がした。自分が一體文學をやるのさへ、僭越なのではないかと思つた。

世界には嵐が吹きまくつてゐる。思想の嵐が。その眞唯中に一本の大樹として自分が立ち上つて、一歩もその嵐に自分を讓らない、その力がほしかつた。

そしてその力を與へてくれるのは。

杉子だ。杉子が自分を信じてくれることだ。

「妾はあなたを信じてゐます。あなたは勝利を得る方です。あなたの誠實と、本氣さは、あなたを何處までも生長させます。淋しい時は妾がついてゐます。しつかり自分の信ずる道をお歩きなさい。あなたの道は遠く、あなたは馬鹿な人からは輕蔑されます。だがあなたはあなたでなければ出來ない使命をもつていらつしやいます」

かう云つてくれたら。あの美しい、淸い、生々した純粹な杉子から。

彼は先づその資格をつくりたいと思つた。

「杉子はまだ若い。四年たてば俺だつて今の俺ではない」

六

彼はそんなことを思つては見たが、杉子を十六だとは思へなかつた。そして十七八で結婚しないとも限らない。杉子は男の注意を惹かないには美しすぎる。誰か杉子を見て心を奪はれない男があらう。仲田の友達は可なり多い。それ等が杉子に氣がつかないわけはない。さう云へばいつか仲田が妹に手紙をよこした不良青年があるやうに云つてゐた。今思ひだす。彼は不安を感じないわけにはゆかなかつた。彼は戀するものゝ不安を感じないわけにはゆかなかつた。

彼にも一人の妹がゐて、今は夫と一緒に外國に行つてゐた。今年二十一になる。彼は妹が年ごろになつてから、いろ〳〵の男の人が妹に近づからとしたのを思ひ出した。妹はさう美しい女には思へなかつた。しかしそれでも妹の處にいろ〳〵機嫌をとりにくる者のあるのを感じた。妹が琴をならひに行つてゐた。其處に尺八をならひに行つてゐた男が時々來たことがあつた。彼はその男を嫌つて、その圖々しさを心配した。そして妹が笑ひながら存氣にその男と話するのを見ると、ある不安さ

へもつた。しかし妹もその男を輕蔑してゐることを知つて安心した。

又自分の友達で女のこと切り興味をもてない男が、自分に話もないくせによく來て、妹にいろ〳〵土産をもつて來たり、手紙をよこしたり、歌留多やトランプをしたがつたりするのを氣にしたこともあつた。それやこれや考へると彼は齡ごろの娘をもつ親や、兄や、姉の心配をはつきり感じることが出來た。どうかして眞面目な、そして妹のことを本當に思ひ、愛してくれる人が妹の夫になつてくれればいゝがと思つた。

しかし幸に彼の妹は馬鹿ではなかつた。運命が許した最もよき人を選んだ。彼はその時心から安心した。杉子のことを思ふに從つて餓ゑたる狼がすきをねらつてゐるやうな氣がした。自分の妹より何層倍美しいかわからないだけ、彼はその心配をしないわけにはゆかなかつた。

仲田は友達づきあひの多い方だつた。殊に仲田の母は人づきのいゝ人で、夫の無口のせゐか、一人で愛想よくし、若い人達のくるのをよろこんでゐるやうにも見えた。彼も仲田の母に二三度あつて、お世辭を云はれたことがあるが、彼は無愛想の方なので、この頃は仲田の母は彼の處には殆んど出て來なくなつた。

娘を射るのには先づその母を射よ。こんなことを云つて母にとり入つて、首尾よくその娘と結婚した男の話を彼はいつか、大宮から聞いたことがあつた。彼はその時可なり不愉快を感じ大宮と二人でその男の惡口を云つたことがあるが、彼は杉子の母に自分の印象の面白くないことを自覺することは、今の彼にとつては少し打擊であつた。

七

彼には結婚することが二人にとつて幸福でなければならなかつた、又よろこびでなければならなかつた。杉子が自分の處によろこんで來てくれなければ、彼の自尊心はむしろ結婚したくないと思ひたがつた。だが彼は杉子を失ふことは考へてもたまらないことだ。

彼はその後仲田の處に三四度行つたが、杉子には逢へなかつた。杉子の學校の歸りに二度逢ひに行つて、一度逢つた。その時杉子は四五人の友達とうれしさうに笑ひながら聲高に話してゐたが、彼を見ると、いつもの人なつかしげに無邪氣なあいさつをした。彼も丁寧にあいさつした。彼は實際うれしかつた。

彼はある日の晩大宮の處にあそびに行つた。そして彼が歸る時、大宮が送つてくれた時、彼は杉子を戀してゐることを白狀した。大宮と仲田は友達ではなかつた。しかし大宮は杉子のことを知つてゐた。

「その人なら僕の從妹と同じ學校にゐる人だらう。どんな人か從妹の人に聞いて見てもいゝ。いゝ人だと思ふが」

「聞けたら聞いてくれたまへ、いくら評判がわるくつても、僕は彼女を信用はするが」

「僕も一ぺん從妹の處で寫眞を見たかも知れない。その人なら中々綺麗な人だつた」

「中々ではまだ不服だね」

二人は笑つた。

「ともかくうまくゆくといゝ」

「しかしまだ十六だからね」

「一、二年は大丈夫だらうが」

「今、そんな話をしたら第一當人がおどろくだらう。まだ無邪氣な女だからね」

彼はうちあけたので、その後も時々、大宮の處に杉子を讃美しに出かけた。大宮は友達に、「野島のくるのもいゝが、杉子の話には閉口だ」と云つた程。

彼はそれを聞いて、大宮には杉子のことは何にも云つてやらないと決心した。その決心はすぐきえて、相變らずその話をしに大宮の處に出かけた。そして日本の女の惡口を云ふものがあると、彼は腹のうちにあざ笑つた。

「君達はまだ本當の日本の女を見たことがないからだ。見ればもうそんなことは云へなくなる」

何處の國だつて本當の善人は多くない、甚だ少ない。美しい人も多くはない。甚だ少ない。しかしゐないことはない。たゞさう云ふ人に滅多に逢ふことが出來ないだけだ。

彼はその滅多に逢ふことの出來ない人に逢つた。彼は杉子と夫婦になることを考へる、それは樂園にゐることを考へるやうなものだつた。新聞を見ても、雜誌を見ても、本を見ても、杉と云ふ字が目についた。そして目につくとはつとした。しかし彼はまだ殆んど杉子とは一言も言葉を交さなかつた。

或日だつた。彼は又仲田の處に出かけた。すると杉子が門から出るのに逢つた。それが不意だつたので彼は反つて氣輕に言葉をかけることが出來た

「仲田君はうちにいらつしやいますか」

「えゝ」

「何處にいらつしやるのです」

「お花の稽古に」

これだけの會話が、彼にとつては鬼の首でもとつたやうに嬉しかつた。自分でよく言葉がかけられたと自分で感心した。そして彼女は自分を嫌つてゐないと思つた。

彼は自分の室に杉子がいけた花をかざることを空想した。彼はいつもの三倍も元氣に仲田と話した。

仲田は何かの話の途中で、

「本當に世のなかにはいやな奴がゐるよ。いつか妹に手紙をよこした奴が、又手紙をよこした。まだ十六になるかならない無邪氣な女に、もう心をもやしてゐるのだからね。たまらないよ。いやになつてしまふ」

八

彼はその手紙をよかつたら見せてくれと云つた。

「隨分蟲のいゝ手紙さ、自分のこと許り考へてゐて、相手の意志をまるで見てゐないのだからね。女を物品かなんぞのやうに思つて、自分が欲しいと云ふ強さだけをたてにして要求してくるのだからね」

「相手はどんな人だ」

「文士の卵ださうだが、どうせそんなことをするのは……」

と云ひかけて、

「君は別だがね」と仲田は笑つてつけ加へた。

「それで君の妹さんにその手紙を見せたのか」

「見せやしない。まだほんの娘だからね。そんな問題には今からふれさしたくない。せめて自分で男のよしあしがはつきりわかるやうになる迄はね。そして結婚と云ふことを本當に知り、自分で進んで結婚したいと云ふ氣が起るまではね。君も君の妹さんの結婚には隨分心配してゐたね。僕もまだ十六に切りならない妹の爲にもう結婚のことをそろ〳〵心配しなければならないと思ふといやになるよ。もう、結婚の申込みがちよく〳〵あるのだからたまらない。一切、僕が握りつぶしてゐるのだ。もう少し獨立した考へが出來るまではね。せめて夫を選擇する權利だけは當人の爲に保存しておきたいからね」

野島は、仲田の一言一句で自分の心が左右され、上つたり下つたりするのを醜く、淺ましく思つた。

仲田はたち上つて、まもなく手紙を持つて來た。

「今日偶然、私の誕生日にあなたに三月ぶりで往來でお目にかゝつたことは、私にはたゞの偶然とは思へませんでした。それでもう一度手紙をかゝして戴きます。私にはあなたを赤の他人とは思へないのです。自然がこんなにまで強くあなたのことを思はないではゐられないやうに私をつくつてくれたことを、私には無視することは出來ないのです。其處には何かの意志がはたらいてゐて、私があなたを得る爲に出來るだけ骨折ることを命じてゐるやうに思へるのです。その命令に從ふと云ふ理由で私はこんなあつかましい手紙を、淸いあなたにかくのです。私の心はあなたはもう感じてゐて下さるでせう。私は何にも云ひたくはありません。私はあなたに値しないものと云ふことは感じてゐます。しかし私はあなたなしに生きるのは淋しすぎるのです。運命があなたをつくり、私をつくり、そして二人を逢はしたことを、私は無意味とは思へないのです。二人が一つになることが二人にとつて最大幸福であり、又それが何かの意志だと思ふのです。私はあなたの運命を傷つけることを恐れることでは誰にもまけません。あなたの幸福をのぞんでゐます。あなたが私の處にくることがあなたにとつても一番幸福のやうに思ふので、こんな手紙をかくのです。私のことは氣になさらないで、あなたの一番幸福を自由につかんでほしく思ひます。私はあなたの前に跪いて、泣いてあなたの手を要求したくは思ひますが、私も男です、あなたの意志を尊重します。私の手に歸るのが本當でしたら歸つて來て下さい。道をきよめて待つてをります」

仲田は野島のよみ上げるのを見て云つた。

「一種の氣違ひだね。馬鹿だね。あきれてしまつた」

野島は自分の滑稽畫を見せられたやうないやな氣がした。

「君の妹さんはその男の人を知つてゐるのか」

「あゝ。へんな目をして、妹に逢ふと立ちどまつて、妹の方を見るので、妹も氣違ひなのだらうとこはがつてゐたよ」

九

野島は自分も杉子にそんな風に思はれてはたまらないと思つた。しかしその手紙を見ての意見一つで杉子に見せないのも亂暴だと思つた。

「手紙を見せないのも可哀さうだね」

「妹が十八にでもなつたら見せてやつてもいい。しかしその時分になつたら、この男はもう他の女と結婚して、妹と結婚出來なかつたことを反つて幸福に思つてゐる時分だらうよ」

「さうか知らん。それ程不眞面目な人ではないらしくもある」

「あてにはならないよ。僕の知つてる奴に、ある女を夢中に戀して、その女と結婚出來ないと死ぬやうなことを云つてゐた奴があつた。處がその女がふとした病氣で死んだのだ。その時は氣違ひのやうに泣いてゐたが、半年もたたない内にちやんと細君をもらつて今では幸福にくらしてゐる」

「しかしその女のことを時々は思ひ出すだらう」

「しかしその女でなければとは云へないだらう。男と女はさう融通のきかないものではないよ。皆、自分のうちに夢中になる性質をもつてゐるのだ。相手はその幻影をぶちこはさないだけの資格さへもつてゐればいゝのだ。戀は畫家で、相手は畫布だ。戀するものの天才の如何が、畫布の上に現れるのだ。ダンテにとつてビアトリチェはたゞの女ではなかつたら、神のやうなものだつたらう。しかし他の戀する男に

とつてはたゞの女だ。ある男から見れば更にすぎなくも見える。戀が盲目と云ふのは、相手を自分の都合のいゝやうに見すぎることを意味するのだ。相手はさう唯一と云ふことはないのだ。その人にめぐりあはなければ戀は生じないときまつたものぢやない。彼女になる資格のあるものは世界には何千、何萬とゐる。だから自分の內にある戀も生きるのだ。もし彼女が世界に一人きりだとして見たまへ、年ごろになるとなにはすてても相手をさがして歩かなければならなくなる。しかし戀の相手にぶつかる位は、學問をした片手間で澤山だ。又毎日の仕事をした餘暇で澤山だ、むしろ逢はないでよさうと思つても、つい逢ふ程、彼女は世界にごろ〳〵してゐるのだ」

「しかし」と野島は云つた。「だが一生彼女に逢はない人もあるだらう」

「いや、それは布があつても畫のかけない人だ」

「しかしかいてしまつた布は、かゝない布とはちがふだらう。ある人に戀される資格のある女は唯一でないかも知れない。だが戀してしまつたら、その人にとつてその女は唯一になるだらう。僕の知つてゐる人に、もつといゝ女に逢はないとも限らないと思ふのでなか〳〵結婚する氣になれないと云つてゐた奴があるが、ふとしたことである女、はたから見るともつといゝ女がいくらでもありさうに思ふ女だつたが、それと知りあひになつて、その內に深く戀してしまつて、その女と結婚の出來ない事情の爲に、つい二人で心中してしまつた奴があつた」

「世はさま〴〵だ。中々理窟通りにはゆかない。親の云ふ通り結婚して、幸福になつた奴もあれば、自分の戀してゐる女と無理に結婚してすぐ飽きる奴もゐる。結婚出來ないと云つて心中しかけて未遂で助かつて、まもなくお互に顏を見るのもいやになつた奴もゐれば、五年たつても十年たつても同じ女のことを思つてくよくよしてゐる奴もある。しかし大概の人はいゝ加減に戀して、いゝ加減に結婚するのだね。それが又利口らしい。要するに戀だけが人生ぢやないからね。もつと自分達にはしなければならない仕事がある」

「それはさうだ」彼はもう仲田と戀の話はしたくなかつた。それで話をほかにむけた。

十

その晩、彼は大宮に隨分逢ひたくなつた。大宮には自分の氣持が本當にわかつてもらへると思つた。大宮はうちにゐた。そして彼が來たことをよろこんだ。

「あの人のことを聞いたよ。大變ほめてゐたよ。器量は、君は不服だらうが、十人並よりは美しい方ださうだが、性質は無邪氣で、快活で、一緒にゐるとへんに人を愉快にさせる性質をもつてゐて、身體の隨分いゝ人ださうだ。僕はそれを聞いて、なほその話がうまくゆくといいと思つたよ」

「あの女の美しさはさう他の奴にはわからないさ。今日實は仲田の處に行つたら、門の處で出あつたのだ。そして話さへしたよ。本當にあんな美しい奴は滅多にないね」

「君にだけその美がわかるのだらう」

「しかしね。その女の美がわかるのは僕だけではないのだ。方々からもう結婚の申し込みがあるらしいのだ」

それから彼は女に手紙をよこした男や、仲田の戀愛觀などを話した。

「いやになつてしまつたよ。あんな兄貴をもつてゐたら、あの女も碌な女にはなれないやうな氣がしたよ。いやにつめたいのだからね。女なんか誰でもいゝのだ。そして戀なんかに同情するのは馬鹿氣てゐる以上につまらぬことに思つ

てゐるのだ。僕が妹を好きなのを内々察してわざとそんなことを云つたのかと思つて腹が立つたよ。あいつも一ぺん戀でもして見るといゝのだ」

「道樂者にはもう戀はわからないよ。仲田にとつてはどの女も同じなのだらうよ。しかし本當に戀したものは、失戀はするものぢやないと云つてゐるよ。それは隨分淋しい、耐へられない程淋しいものらしいよ。その女の夢なんか見るとどうしていゝかわからない程淋しいもので、本當に失戀するものぢやないと思ふさうだよ。だから君も、遠慮せずにぶつかるだけぶつかつて見るがいゝのだ」

「だけど、一人の女を多勢が戀するのが自然だと思ふと僕はいやな氣がしたよ。皆、ムキになつて一人の無垢の處女をねらつてゐると思ふと恐ろしい氣がするね。その内にはいろ／＼の奴が居るだらう。出世しようとか、持參金をあてにするものもあるだらう。弄ぶこと許り考へてゐるものもあるだらう。又あまつたるいこと許り考へてゐるものもあるだらう。思つてもたまらない。自分がその一人だと思ふとなほいやになる。そして彼女はそれを何も知らないやうな顏して、又それをのぞんでゐると思ふと、へんな氣がする。蜜蜂の受胎をする時の話があるね。女王蜂がとべるだけ高くとぶ、それを無數の雄蜂がおひかける。羽のよわい奴から段々消えてゆき、だん／＼雄蜂の數がへり、最後に二三疋のこり、それが又お互に出來るだけ競走しとう／＼一疋になる。それは雄蜂の内の最も勇士であつて、そして職務を果すと、身はこなごなになつて死んでおちてくる。人間と蜜蜂とはちがふが、最も人間として優つた男を彼女が選んでくれればいゝが、甘言や令色でだまされてはたまらないと思ふね。僕は戀は仲田の云ふやうに布の上に畫をかくのとはちがふと思ふ。それはあまり相手を見なさすぎる。それはさう云ふ傾きのある戀もある。實際戀の出來ない人は多いかも知れない。そして布は最も美しく自分の上に畫をかくことの出來るものを愛するのかも知れない。しかしもう少しお互の精神が、何處かで働いてゐると思ふね。意識の出來ない處でお互に引きあつてゐるやうに思ふね。それはお互に餓ゑすぎてゐては困る。しかしさもなければ、お互の心が一つになるので、其處にある幸福の殿堂、美の殿堂が出來上るのだと思ふね。相手の意志がまるで加はらないで一人角力をとる戀もあるだらう。しかしそれは自然とは思はないね」

野島は自分で云つてゐる内に、なんだかわけがわからなくなつた。

十一

大宮は云つた。

「ともかく戀は馬鹿にしないがいゝ。人間に戀と云ふ特別のものが與へられてゐる以上、それを馬鹿にする權利は我々にはない。それはどうしても駄目な時は仕方がない。しかし駄目になる處までは進むべきだ。戀があつて相手の運命が氣になり、相手の運命を自分の運命とむすびつけたくなるのだ。それでこそ家庭と云ふものが自然になるのだ。戀を馬鹿にするから、結婚が賤しくなり、男女の關係が歪になるのだ。本當の戀と云ふものを知らない人が多いので、純金を知らないものが、鍍金をつかまへるのだ」

野島は大宮の口からかう云ふ言葉をきくのは彼には大なる力だつた。自分は賤しい人間ではない、不正な思ひを心に抱いてゐるものではないと思ふことが出來たから。

「本當の戀を知らすのも、我等の仕事の一つだね」

「さうさ。美しい女に、不正な男によはさ

れるな、あざむかれるな、ころもを着た狼を用心せよ、さう云つてそれを見やぶる術を教へるのも我等の仕事の一つだ。それは女の運命を狂はさないことになる」

「本當にさうだ」野島は胸がすいたやうに思つた。

「ともかく日本人は戀を輕蔑しすぎてゐる。仲田ではないが、戀する男に娘をやるよりは見ず知らずの男に娘をやることを安心と心得てゐる。又若い者は女を欲求することと戀とを一つに見てゐる。女の運命を第一に氣にするのが戀で、自分の慾望を滿さうと許りするのが肉慾だ。娘を最も清く戀するものに與へるのが親兄弟の務だ。しかし男女の交際があまり許されてないとつい戀してはならないものを戀したり、戀にならない肉慾で女を得ようとするものがある、それは用心すべきだ。僕は結婚と云ふものに變に恐怖をもつてゐる。僕の死んだ姉なぞは身體も丈夫な方ではなかつたが、あやまつた結婚の犧牲になつたと云つてい〻のだ。母がなんでも樂な處に結婚さしたがつた。母は姉と小舅にひどい目にあつたので、なんでも樂な、一人者で、道樂をしない堅人を選んで姉をやつた。姉はさう氣がすゝんではゐなかつたのだが、いい人だと云はれて、反對する理由もなく、自分でも眞面目な人だと思つて結婚した。夫は眞面目で道樂をしなかつた。しかしそのかはり、自家で放蕩者の味ふやうな快樂を求めるものだつた。姉を妻として愛するのではなく、所謂猫可愛がりした。性慾の不調和もあつた。姉はそれでとう〳〵肺をわるくして死んでしまつたのだ。姉は隨分夫のしつつこいのをいやがつてゐたらしい。だからいくら見かけはよくつても、この道は祕密なだけに隨分厄介な問題だ。僕は矢張り姉が、自分で心から好きになれた男と結婚さしたかつた。さうすれば死なずにすんだかとも思ふ。死んだにしてもその方だと思ひ切りがまだい〻」大宮はさう云つて少し淚ぐんだやうに見えた。「姉は隨分死にたがらなかつた。しかし生きてゐても始まらないやうな氣になつて、病氣がなほつて――病氣の間はうちに歸つてゐた――又夫の家に歸らなければならないと思ふと、いつまでも病氣してゐたい氣もすると云つてゐたさうだ」

「隨分お氣の毒だね」

「あゝ、姉のことを思ふと、とり返しのつかない、すまない氣がするよ。その時分僕は十六だつたから何も知らなかつた。今の僕なら少しは姉の力にもなれたと思ふがね」

「一たい他人の意志で結婚するのはまちがつてゐるね。こなひだ僕は往來を歩いてこんなことを考へたよ。自分で人を殺したなら自分で責任をもつ、しかし他人が殺した責任をもたされてはたまらない。結婚でもさうだ。自分で結婚したなら責任をもつ、いくら親でも他人の意志で結婚させられてはたまらないつて」

十二

いつでも大宮の處へ行くと彼は胸がすいた。よき友を有することを感謝しないではゐられなかつた。自分が何しても少なくも大宮だけは理解してくれると思つた。彼は仲田とは逢ひたくなかつた。なんだか冷たいものが彼の心にふれ、彼の心が仲田の心を求めても、常にすかされるやうに思へた。殊に、杉子を愛してゐることを感づいて、豫防線をはられてゐるやうな氣がした。しかし彼はゆかないわけにはゆかなかつた。

或る日曜、それは晩春だつた。もう可なり暑かつた。彼は仲田を訪ねる決心で、仲田の家の門の前まで行つたが、氣輕に入る氣が出ないので、一度通りすぎた。しかし思ひ切つてあとも

どりして入つた。仲田はいつもになく元氣にしてゐて、彼の來たのを喜んだ。

「暫らくこなかつたね。この前の日曜に來るかと思つた」

「來ようかとも思つたが、なんだか留守のやうな氣がしたので」五分の一位本當のことを云つて、云ひわけした。

「僕は出無精でいつでも誰か來てくれるといいと思つてゐるのだから。遠慮なく來てくれ給へ」

「ありがたう」

彼は仲田にたいすることだはりがなくなつた。

「試驗は」

「もうせまつては來たが、僕のことだから餘裕があるよ。落第したつて結婚にさまたげのある他は、別に困らないからね。そして落第したから來ないと云ふやうな奴はこつちからお斷りするからね。あはゝゝ」

さう可笑しくもなささうに笑つた。野島も可笑しくもないのに笑つた。

「昨日妹がつくつてくれと云ふのでピンポンの臺をつくつたよ。君も一つやらないか」

「僕は下手だからね」

「下手な點では僕もまけないよ」

「しかし僕は殆んどしたことがないのだ」

「ともかくやつて見ないか」

「やつて見ようかね」

二人はピンポンをやつた。彼はちつとものり氣になれなかつた。しかしその一種の音が彼は杉子をよびよせはしないかと云ふ空想に心をひきつけられた。そしてやめようと仲田の云ふのを心配する氣味だつた。

しかしその音は少しも冴えなかつた。二人は珍らしく下手で、音が五つとはつゞかなかつた。殆んど勝負を眼中におかず、つゞけることを目的にしてゐたが。しかし仲田は云つた。

「君は質がいゝよ、見かけより」

「あんまりよくもないね。しかし君も見かけよりはうまくないね」

「丁度いゝ相手だ。妹とやるとすつかり飜弄されるのだからたまらない」

二人は乘氣もなく一時間近くつゞけた。しかし杉子は出て來なかつた。

「もうやめようか」野島は何度も云はうとしてやめた。しかし彼はます〱自分が馬鹿氣て來て心がます〱空虛になるやうに思つた。

もう思ひ切つてやめようと思つた。その時勝手口の方の戸があいた。そしてまもなく杉子が入つて來た。

急に一道の光がさして來た。

あいさつをすませたあとで、仲田は云つた。

「今日は早かつたね」

「ピンポンがしたくつて急いで歸つて來ましたの」

「それは丁度いゝ、野島君は隨分うまいのだから」

「さうお？」

「噓ですよ。仲田君よりもつと下手なのですよ」

三人は笑つた。そして野島は自分でも恥かしくなる程愉快になつて來た。

「人間はつくられた通りに心を動かすものだ」と思つた。

十三

杉子は彼とは話にならない程上手だつた。しかし杉子は彼を飜弄しなかつた。むしろ彼をいたはつた。彼へは打ちいゝ球切り返つて來なかつた。仲田とやるよりは遙に音がつゞいた。彼の方は時々質のわるい球をうち込まうとした。甘く見られるのがいやで。しかし杉子は感じないやうにちやんとした、すなほな球をよこした。

彼は其處に杉子の性質を感じないわけにはゆかなかつた。彼はそれを理想的に解釋した。すなほで、親切で、利口で、快活で、不正なことを氣がつかない顏して正しくする術を心得てゐる。彼はさう思つた。何處にこんなに無垢な美しい清い、思ひやりのある、愛らしい女がゐるか。神は自分にこの女を與へようとしてゐるのだ。さもなければあまりに慘酷だ。彼女は自分をまだ愛してはゐまい、だが嫌つてはゐない。彼女はよく笑ふ。その笑ひの無邪氣さよ。

ピンポンは今迄よりもずつと、賑かにやられた。笑ひ聲はたえまなく、わき上つた。杉子の妹まで出て來、遂にお母さんまで見に來た。野島はお母さんに丁寧にお辭儀した。お母さんも笑ひをふくんでお辭儀した。

彼は地上でこんな嬉しさを味へるものとは思へなかつた。幸福で幸福で誰かに感謝しなければならなかつた。皆に感謝しなければゐられなかつた。

仲田にも、仲田の母にも、そして杉子を地上に生んだ自然にも。

彼のうちには根づよく巢つてゐたはずの、陰鬱も、こだはりも、すつかり消え、時のたつのも忘れた。たゞ時々「もう歸らなければなるまい、あまり居て嫌はれては困る」と思つた。しかし皆がうれしさうにしてゐるのを見ると、彼はもつと居てい丶許しを得たやうに思つて、うれしく感謝した。彼はこのよろこびを勿體なく思つた。

彼も、いつもになく冗談や洒落を云つた。そして皆を笑はし、自分も笑つた。杉子とも平氣で冗談云へた。そしてそれは彼にとつて勿論、よろこびだつた。

すべては彼の爲に神から送られた喜びの饗宴のやうに見えた。彼はそれを謙遜な心をもつて、しかしわき上るよろこびにすなほに身をまかせて、幸福を感じ切つてゐた。

處へ女中が入つて來た。

「早川樣がいらつしやいました」と云つた。

「丁度い丶、こ丶にお通ししてくれ」と仲田は云つた。彼は戸のすきから風がふき込んで彼の横面にふきあたつたやうな氣が一寸した。しかし彼はさう思ふ自分を賤しく思ひ、平氣で早川を迎へようと思つた。

早川とは彼は今迄に二三度、仲田の處であつた。仲田とは同級生で特待生だと聞いたやうに覺えてゐた。その時分はさう聞いても、まるで氣にしなかつたが、そして逢つても一寸あいさつするだけで殆んど一口もきかなかつたが。

しかし今は平氣にならうと思ひながらも、何かを豫感しなければならなかつた。

仲田は迎ひに出かけた。まもなく早川は仲田と何か面白さうに話しながら、笑ひ顏して入つて來た。そして仲田の母や杉子の母に愛想よく挨拶した。仲田の母の四十五六のわりには若く見える、肉づきのい丶豐かな感じのする顏にはこぼれるやうな愛想が見えた。

早川は杉子とも挨拶したが、それはよく知つてゐる、しかしお互に無頓着な人同志するやうにあつさりしたものだつた。二人は愛してゐない、氣にもしてゐない、存在も認めてゐないと彼は思つた。早川は彼にも恭々しく挨拶した。彼も少し笑ひをふくんで挨拶した。

十四

彼と杉子は丁度ピンポンの勝負をしてゐる所だつた。彼は早川に見られる處で勝負をつゞけたくなかつた。あまりに自分がまづいので。しかしやめるとも云ひにくいので、勝負をつゞけるより仕方がなかつた。しかしもう無邪氣なよろこびは無くなつた。何處かにこだはりが出來た。しかし杉子が無邪氣に笑つたり、思つた

よりうまくいつて仲田がからかふやうに賞めたりすると、すぐ愉快になれた。早川は笑ひながら見てゐたが、少しも輕蔑してゐるらしくはなかつた。

「ピンポンがまづいと云ふことは恥づべきことではない」

彼はそんな言ひ譯をして見たが、うまかつたら、今感じてゐるやうなひけ目は感ぜずに、氣まりのわるい程、腹のうちで得意になりさうな氣がした。まづいので反つて輕薄な根性を露骨に出さずにすむと思つたが、うまかつたらこだはらずに、ます〳〵得意になれたやうな氣がして殘念な氣がした。

彼はまけてしりぞいて、早川がかはつた。二人はいゝ相手だつた。杉子は見ちがへる程うまさを見せ、頭も手も機敏に動いて、ぬけ目なく、相手のすきをうかゞはうとした。早川も亦まけてはゐなかつた。彼は見てゐて、氣持がよかつた。そして益々杉子を讃美したいやうな氣になつた。そして杉子がうまいことをやるとついほめたくなつた。文句ではなく、間投詞で。つい聲を出して、あとでキマリ惡く思つたが、誰も、それを氣にしてゐるものはなかつた。

杉子の顏は血色がよくなり、生々して來、球に從つて、身體や手がいろ〳〵の形を見せた。その形が彼をよろこばした。彼は早川のことは忘れて、たゞ杉子の生々した姿と、頭のはたらき、手のうごき方、それにともなふ身體全體の變化、それを讃嘆して見てゐた。

勝負は一勝一負で、見てゐる人は皆、ムキになつた。仲田も、杉子の母も、自慢してゐるやうに見えた。彼も亦自慢したかつた。實際早川よりもやり方が綺麗だつた。勝負に重きをおくよりも、練習でもしてゐるやうに、無邪氣にやつてゐた。

球のくるのを注意深く見てゐる目の生々さ、うまくいつて無邪氣によろこぶ時の口のまはり、前こゞみに、手を逆にして打つ時の腕の形、髮毛の前に亂れかゝるのをいそがしくなであげる時の手つきと顏、彼はそれをむさぼるやうに見つめてゐた。自分はどんなことがあつても杉子を失ふわけにはゆかない。それはあまり慘酷だ。自分を杉子に逢はした運命よ、お前に責任がある。

彼はそんなことを思つて、時のたつのを恐れながら忘れてゐた。

一時間近く二人は勝負をしてゐた。

「もうやめたらいゝだらう」

仲田はさう云つた。

「ノートを持つて來たかい」

早川に云つた。

「持つて來た」

彼はそれを聞いた時、自分が本當に居すぎたことに氣がついた。

「ついなが居してしまつた」

「もつとゐたらいゝだらう」

「今日は失敬しよう」

「さうかい、それでは又」

彼は仲田の處を辭したあとでも、杉子を讃美しないではゐられない氣になつた。

どうしてこんな女が地上に居るのだらう。そして彼女もあたりまへの女と同じやうに、齡をとつてゆくのだらう。彼女は他の人とちがふ法則のもとに生きてゐないのが彼にはむしろ不思議に思はれた。

彼は眞直に家には歸らずに方々歩きまはつた。

「彼女は無邪氣すぎる。しかし自分を嫌つてはゐない」

このことは彼には勿體ないやうな氣がした。

自分は本當に偉くならなければすまない。

彼は歸つてから、日記にこんなことをかいた。

「このよろこびは何處からくる。之を空と云ふか。空にしてはあまりに深すぎる。彼女の美しさは何處からくる。之を空と云ふか。それにしてはあまりに美しい。彼女は何處から來た。何の爲に來た。彼女の存在を空と云ふか。空にしてはあまりに清い。すぎゆく美か。それにしてはあまりに貴い。魔力か、魔力か。それにしてもあまりに強すぎる。愛しないではゐられない、失ふわけにはゆかない。斷じてゆかない。神よ、あはれみ給へ。二人の上に幸福を與へ給へ。神よ、私を彼女に逢はし、かくまでも深く戀させて下さつた神よ、彼女を私から奪ひはなさりますまいね。それはあまりに慘酷です」

十五

その晩大宮が、野島の處に來た。野島は笑ひながら、

「今日ピンポンをしたよ」

「ピンポンを？　どうして」大宮は不思議なこともあればあるものだと云ふ顏をした。

「仲田の處でさ」

「なあーんだ」大宮は笑つた。

野島は杉子のピンポンのうまいことをほめて話した。そして自分がピンポンを馬鹿にしてしなかつたことを後悔したと笑つた。

「教へてやらうか」

「まだ、あるかい」

「何處か捜せばあるだらう」

「教へてもらはうかな」冗談のやうに云つた。

大宮は一體に運動家だつた。テニスもうまかつたが、ピンポンは仲間では類がなかつた。もう四五年はまるでよしてゐたが。

「しかし女の爲にピンポン迄ならふやうになつては少し墮落だね」

野島は云ひわけのやうに云つた。

その後野島は大宮の處に行つたが、大宮はピンポンのことはまるで忘れてゐるやうだつた。野島も云ひ出す勇氣はなかつた。野島はその後仲田の處にゆきたく思つたが、仲田も試驗で忙がしいと思つたので遠慮した。

しかし杉子には一日逢はないでも氣になつた。大病をしはしないか、大傷をしはしないか、そんなこと迄氣になつた。自分を嫌つてはしないか、自分に逢はないので淋しがつてはしないか、そんなことを思つても見た。ともかく野島は杉子には往來でもいゝから逢はないでは氣がおちつけなくなつた。しかしあまり逢ひにゆくと杉子に手紙をやつた男のやうに思はれても困ると思つた。そして偶然逢つたやうにしたいと思つた。そして逢へばきつと仲田に、

「今日も野島さんに逢つてよ」

と云ふにきまつてゐる氣がした。それが又あまり氣持のいゝことではなかつた。

逢ひにゆくのはよさう。しかし十度に一度は逢ひにゆかないわけにはゆかなかつた。

初め逢ひに行つた時にはどうしても杉子に逢へなかつた。學校の門の前までも行つて見たが。逢へなかつたのは心細かつたが、反つて安心したやうな氣もした。

二度目に行つた時も亦逢へなかつた。今度は心配になつた。いよいよ杉子は病氣なのだ、それも、もしかすると命にかゝはる大病かも知れないと思つた。それでぢつとしてゐられないので翌日また逢ひに行つた。

今度は逢へたばかりではなく、杉子は矢張り仲間のうちの女王のやうに彼には輝いて見え、皆は杉子が笑ふと一緒に笑ひ、杉子が默ると皆も默るやうに見えた。そして杉子はますます健康さうに見え、彼を見ると、快活に少しも恥かしがらずに挨拶した。皆も彼の方を見た。彼は女王に挨拶されたやうに光榮を感じた。彼は紺がすりの着物を着ながしにし、鳥打帽子をか

ぶつてゐた。彼は一たいに身なりはかまはない方だつた。

この書生つぽに彼女が皆のゐる前で平氣で、丁寧に挨拶してくれた。このことが彼にはなほうれしかつた。

「貴き、貴き、彼女よ。
自分は貴女の夫に値する人間になります。
どうかそれ迄、他の人と結婚をしないで下さい」

彼はさう云つて祈りたい氣がした。

しかし考へれば考へる程、彼は自分に彼女の夫となる資格があるとは思へなかつた。しかし、それならば誰が、彼女の夫となる資格を持つてゐるのか。

そんな男は地上にはゐない。

彼女はあまりに淸すぎ、美しすぎる。

彼はどの男よりも自分が偉れたものを持つてゐると思へる種類の男だつた。世間は自分を輕く見るだらう。だが人間の價値を本當に知るものは。そして彼女はそれを知つてゐるにちがひない。

十六

仲田の方が休みになるまで、彼は往來で三度杉子に逢つた。最後に逢つた時は杉子の挨拶は何時もになく冷淡だつた。

彼はあまりに自分が圖々しいので杉子もつひに怒つたのかも知れない、來なければよかつたと思つた。又何か杉子に心配ごとがあるのではないかとも思つて見た。それとも試驗でもしくじつたのかと思つた。しかしどうも自分があまり度々逢ひにゆくので、何か氣づいて不愉快を感じたのではないかと思つた。それから彼は逢ひにゆくのを遠慮した。

氣になつてなほ樣子を見にゆきたくも思つたが、その内に休が來るので遠慮した。仲田は休になるとまもなく彼の處に來た。

「暫らく來ないのでどうしてゐるのかと思つてゐた」と云つた。

彼はそれを聞いてうれしかつた。

「試驗の邪魔をするとわるいと思つたので」と彼は云つた。

「もう休になつたからいつでも來給へ。ピンポンも少しうまくなつたよ」

「さうかい。それではもう僕の相手にならなくなつたね」

「まあ、來給へ、敎へてやらう」

「君が先生ぢや心細いね」

「もう早川とやつてもさうまけはしないよ」

「そんなにうまくなつたのかい」

「試驗勉强をして頭がへんになると妹を相手に勉强したのだよ」

彼は少し羨ましいやうな氣がしたので話をかへた。

「今度夏休に何處かへ行くかい」

「矢張り、鎌倉の別莊にゆくつもりだ」

「皆でかい」

「父や母は忙がしいからたまに切り來ないだらうがね。よかつたら君も泊りがけに來たまへ」

「ありがたう」

「君は泳げるのだらう」

「だめだよ。運動は一さい駄目だ」

「早川は運動はなんでもうまい」

「さうかい。僕の友達の大宮も大した運動家だよ。きつと早川君以上だらう」

「大宮君と云へば大したものになつたね。もう一流の作家になつたね。君より三つ上で、二十六だらう」

「さうだ」

「それでもう一流とは羨ましいね。妹も大宮君のものは隨分愛讀してゐる。一番感心してゐると云つてもいゝだらう」

「さうかい」彼は友達のことを賞められるのをよろこびたいと思つたが、心細かつた。杉子には自分を一番尊敬してもらひたかつた。

「妹の友達に、大宮君の從妹がゐるのださうだが、その人から大宮君のことはよく聞かされるらしいよ。その大宮君の從妹も大宮君崇拜で、面白い人ださうだよ。うちにも時々來るが、顏はさう美しくはないが、中々の氣焰家でね、男のことなんか糞味噌に云つてゐるよ、大宮だけは別らしいがね、大宮と云ふ人は隨分頭のしつかりしてゐる人らしいね」

「あゝ、隨分しつかりしてゐる」

「それにかくものを見てもわかるが、中々思ひやりのある人ださうだね」

「あゝ」

「それに家に金もあるのだから落ちついて仕事が出來るから鬼に鐵棒だね」

「まちがひのない奴だよ」

彼はなんとなく大宮のことをほめたくなかつた。しかしそれだけ、なほほめないとわるいやうな氣もした。

「實際日本で一番有望な小說家はなんと云つても大宮だらう。今にきつと世界的な仕事をして、日本の爲に氣焰をあげてくれるだらう」彼はさう云つたが、何となく口と心が別のやうな氣がした。

十七

仲田はまもなく鎌倉に行つた。

大宮の別莊も鎌倉にあつた。大宮にすゝめられて、むしろすゝめられるやうにして野島も鎌倉に行つて、大宮と一緒に生活した。

大宮と文學や、人生について話した。神についても、戀についても話した。二人は話がよく通じあつた。お互に同感のこと許り云はなかつた。それ程二人は親しかつた。初めは時々議論もしたが、いつのまにか二人の意見は理解され、理解されて見たらば、不服を云ふ必要がなかつた。お互に感化され、感化した。どつちかと云ふと年下の野島の方がより多く大宮を感化した。しかし野島の方がより多く慰められた。大宮はわりに世評に寛大になれ、平氣になれたが、野島はやゝもすると世評に可なりひどくまゐらされた。

大宮の方が早く理解された點もある。同じ程度に惡口云はれても野島の方が遙に強くそれを感じた。腹も立て、淋しがりもした。

ともかく二人はよき友であつた。二人が知りあつたことは二人にとつて感謝だつた。

野島は大宮の評判が自分よりずつといゝので、時々一種の嫉妬を感じることがあつても、大宮は野島にたいする信頼と尊敬を益々示してくれるので、感謝しないわけにはゆかなかつた。そして大宮のものが少しでも惡口云はれると怒らないわけにはゆかなかつた。

ある時大宮が、父と議論して、どうしても文學をやると云ひ切つた爲にもう少しで、勘當されかけた時、野島は本氣で、大宮が生活難に苦しんだら、自分で出來るだけ助けようと思つた。

今、二人は一緒の家に住んでゐたが、勝手な行動をとつた。一緒によく散歩もし、話もし、泳ぎもした。しかし一人になりたい時は一人になつた。野島は時々、仲田の處に出かけた。仲田も野島の處に來て、大宮とも知りあひになつた。仲田は大宮にもあそびに來てくれと云つた。しかし大宮は何とか、理窟にならないことを云つて仲田の處に出かけなかつた。

野島も一人で許り仲田の處にゆくのは氣がひけた。それで時々大宮をさそつて見た。しかし大宮はいつも行くのをいやがつた。

「さう云ふのは失敬だけど、僕は仲田に蟲がすかないのだ」とも云つた。

或晩、月のいゝ時、大宮と一緒に野島は散歩した。そして人のあまり行かない、砂丘の方を歩いた。すると、女の人の歌をうたふ聲が聞えた。

「いゝ聲だね」

大宮は感心するやうに云つた。さう云はれると、野島もいゝ聲だと思つた。すると同時に、

「あれは彼女にちがひない」と云つた。

「あれがさうなら君は仕合せ者だ」大宮はからかふやうに云つた。

「あんまり戀し過ぎると云ふことは弱點だ。なんだか獨立性がなくなつたやうで、魂を何かにあづけてゐるやうな不安を感じる。僕は戀をしてゐない君をむしろ羨ましく思ふ」

「それは本音かね。僕はそんなにまで一人を愛することが出來る君を羨ましく思ふよ」

歌は不意にやんだ。二人の影に氣がついたためだらう。

其處には三四人の人が集つてゐた。二人がそのわきを通りこさうとした時、野島は云つた。

「仲田君ぢやないか」

「野島君か。大宮君も一緒か。いゝ處であつた。よかつたら一緒に散歩しよう」

この時大宮は不意に云つた。

「殘念だが僕は今日は失敬しよう。一寸したいことがあるから。野島君はいゝだらう」

十八

野島は大宮に感謝したく思つた。しかし、自分だけのこる氣にもなれなかつた。他の人には默禮して、皆と別れた。杉子は月のかげにゐたので、よくは見えなかつた。

「君はのこればいゝのに」

「だつて仲田は君の方にのこることをすゝめてゐるらしかつたから」

「ともかく君は惜しい機會をのがしたやうな氣がしたらう」

「そんなことはない。あの歌をきいただけで本望だ。君に云はれて初めて杉子さんの歌のうまいことを知つた」

大宮は暫らく默つてゐたが云つた。

「僕は君の幸福をのぞむよ」

「ありがたう」

野島は心から感謝した。

「あのわきに居たのは早川と云ふんだらう」

「氣がつかなかつた」

「馬鹿だね、君は。お母さんの居たのは氣がついたか」

「お母さんらしい人が居たらしい」

「君はしつかりしないといけないぜ。君はあんまり杉子さんのこと許り思つてゐては駄目だぜ。君は早川の敵ぢやないね。しかし僕は從妹にさう云つてやらう。早川を杉子さんが信用しないやうに。あの男は信用の出來ない男だ」

「僕はそれ程には思はない。あつさりした、男らしい所のある人と思ふ。才子は才子だが」

「僕はもう見ぬいてしまつた。僕は君のために骨折るよ」

「ありがたう」

「君はあんまり人がよすぎる」

大宮は笑ひながら云つた。

「僕なら、あの時、一緒に皆と散歩するね。君が歸ると云へば君を歸らして」

「僕の位置にゐれば君はそんなあつかましいことは出來なくなる」

「戀はあつかましくなければ出來ないものだよ」

「本當の戀はあつかましいものには出來ない」

「ともかく戀も一種の征服だからね」

「僕だつて君の位置にゐれば、きつと積極的に出ると云ふかも知れないがね。あつかましく出

る人が居るとなほ引こみたくなるよ」
「まあ僕に任せておきたまへ。君にまかせておくのは心配だ」
大宮は笑つた。
「しかし其處が君のいゝ所さ」と慰めるのか、からかふのかわからないやうにつけ加へた。
野島は歸つてからも大宮が、杉子の歌のうまいと云ふこと、君は仕合せ者だと云つたことをよく思ひ出した。そして早川が自分にとつて大敵だと云ふことも痛切に感じた。
彼は早川を愛してはゐなかつた。輕蔑し、又憎みたかつた。しかしその動機があまり見えすくので彼は早川のことを反つてあまり惡くは云へなくなつた。存外いゝ人間かも知れないと理窟で思つたりした。しかし早川が杉子の母にこびてゐるのを見ると、いやな氣がした。又杉子自身にたいしてもお世辭を露骨に云つてゐるのを見ると、自分はそんな眞似はしたくないと思つた。
自分は戀する女の爲に卑しい眞似はしたくない、自分を益々立派にしたく思ふだけだ、自分の妻になる人間に自分をあざむくことは凡そ恥かしいことだ。自分の眞價を知つてくれて、それでもくる氣が出ない女、そんな女は用はない。ラスキンは「耶蘇教を信じる」と云へなかつた爲許りに、失戀して、病氣にまでなつたと野島は記憶してゐる。そしてそれでこそラスキンだと思つた。正直な男と云ふ傲りを失つてまで、女を得ようとすることは彼にはあまり恥かしいことだ、それは自分の一生を汚すことだ。彼はいくら戀しても自分の傲りを捨てることの出來ない人間だつた。

十九

それから一週間程たつて、大宮の從妹が、大宮の母と一緒に別莊に來た。大宮の從妹は武子と云つて、杉子より一つ上だが、まだ固い蕾のやうな所があつた。杉子は一つ年下でも既に咲きかけた花のやうな所があつたが。
武子の父は可なり有名な政治家で、武子は妾腹の子であつた、母のゆくへはわからなかつた。そして大宮の母に一番なつき、前にも云つたやうに大宮のことを兄と呼んでゐた。
杉子は豐な感じのする女だつたが、武子は少しやせた、感情家で、思つたことはなんでも云ふ質だつた。妾腹の子に似合はず、武子は我儘な勝氣な、そのくせ情にもろい所があつた。
野島は初めて武子を見た時に、杉子とは比べものにならない、女の樣な氣のしない女と思つた。そして反つて呑氣に話が出來た。
話してゐる内に彼は武子の思つたよりも美しく、利口なことに氣がついた。しかし杉子とはくらべものにならないと思つた。益々彼は杉子の美しさを感じた位だつた。
武子が來てからは杉子もよくあそびに來た。一緒に海にも入つた。野島も今迄より杉子と呑氣に話すことが出來るやうになつた。彼は杉子を戀してゐるやうに思はれるのはいやで、杉子に話す時は、武子にも話し、二人を同じやうにからかひ相手にした。大宮も時々仲間になつた。しかし大宮は杉子には可なり冷淡にしてゐた。
大宮はある時、野島にかう云つた。
「杉子と云ふ人は指の綺麗な人だね。僕はまだあんな綺麗な爪をしてゐる人を見たことはない」
今度ばかり切りわからない野島は、「さうかね」と云ふより仕方がなかつた。
わきにゐた武子はそれに贊成した。
「本當にあの方は綺麗な手をしてゐてよ」
野島はさう云はれてから注意して見たが、
「さう云へばさうらしい」

位に切りわからなかつた。彼は自分の愛するのは杉子の魂だ、杉子その人だ、その全體だ、と思ひたかつた。しかし杉子の手の美しいといはれたことは歌のうまいと云ふことと一緒に忘れることの出來ない、自慢の一つだつた。

　彼はその時分から段々露骨に早川に一種の嫉妬を感じた。早川の彼よりも體格がよく、さつぱりして、男らしく、そしてよく氣がつき、利口らしい點を彼は恐れないわけにはゆかなかつた。彼よりは何倍も女に愛される資格を持つてゐるやうに思へた。その上に早川は法科の特待生であつて、杉子の母には信用されてゐた。そして杉子に氣に入ることを常に心がけて、それを無邪氣さうに露骨に示してゐた。無邪氣な杉子は早川を益々信用するやうにさへ見えた。ある日、「早川さん、泳ぎを教へて頂戴な」

「えゝ、教へて上げませう。」

　かう云つて、早川が杉子の手をとつて泳がしてゐると、杉子は足を出來るだけバタバタやつて水をはねかへした。そして二人は無邪氣に大聲を出して笑つた。

「馬鹿！」野島はさう心で云つた。「あんな女は[illegible]にやつちまへ、僕に愛される價値のない奴だ」

　彼はさう怒つて、海からとび出して、家へ歸らうとしたが、「本當に杉子さんは無邪氣なのかも知れない。さう思ふ自分の方が、いやしいのかも知れない」と思ひ返して、平氣な顏をして、默つて海岸に立つて、遠くの雲を見るともなく見てゐた。すると武子が來て、

「あの雲はまるで惡魔のやうに見えますわね。まるで早川さんの顏のやうに」と囁いた。

　野島はほゝゑまないわけにはゆかなかつた。

二十

「杉子さん、杉子さん」

　武子はあわたゞしく、杉子をよんだ。杉子は、「なに」と云つて急いで海から上つて、野島と武子のわきに來た。無邪氣に血色のいゝ顏には微笑を見せてゐた。

　野島はひきつけられるやうに思つた。

「どうしても彼女を失ふわけにはゆかない。こんな天使が何處にゐるだらう」

「あの雲を御覧なさい。誰かの顏に、似てゐるでしよ」

「どれ」杉子は面白がつて指さされた雲を見た。

「本當に人の顏見たやうね」

「誰かの顏に似てゐるでしよ」

「誰の顏でせう」

「わからなくつて」

「わからないわ」

「早川さんの顏よ」

「まあ、可哀さうに」

「雲の方が、可哀さうね」

「まあ、武子さんにあつては敵はないわ」

　二人は愉快さうに笑つた。武子はまた早川に聲かけた。

「早川さん、あなたの寫眞があつてよ」

　早川はあわてゝ上つて來た。

「何處に」

「そら、あすこに、あの雲はあなたの顏をそつくりよ」

「あはゝゝゝ。武子さんに逢つては敵ひませんね」

　武子はふき出した。

　野島は何となく淋しい氣がした。そして、大宮が一人で波のりをしてゐる方に出かけた。

　三人はなほ何か云つて大きな聲を出して笑つた。

「早川の笑ひ聲は何と云ふいやな笑ひ聲だらう」彼はふり返らずにさう思つた。

大宮は白波をたてながら、勢ひよく濱邊に押しよせてくる浪に、半身を出して、板を胸にあてがひながら、氣持よささうにのつて來た。淺い處迄くると、起き上つて野島の方に笑ひ顏しながらやつて來た。

この時久杉子の笑ひ聲が聞えたがふり返つてやるものかと彼は思つた。そしてそんなことにすつかり無頓着な大宮を尊敬したい氣がした。何と云つても自分の本當のことがわかつてくれるのは大宮だ。そして自分がすつかり信用の出來るのも大宮だと思つた。感謝したい氣になつた。大宮は彼のそばに來て、

「僕は今波のりしながら考へたよ。波は運命で、人間がそれにうまくのれると何んでも思つたやうに氣持よくゆくが、一つのり損ふといくらあせつても、あわてても、思つたやうに進むことが出來ない。賢い人だけ次の波を待つ。そして運命は波のやうに、自分達を規則正しく、訪れてくれるのだが、自分達はそれを千に一つも生かすことが出來ないのだ。それを本當に生かせたら大したものだつて――

野島は大宮のこの言葉を、彼の戀にあてはめて同感を感じてゐた。すると久皆の笑ひ聲が聞えた。つい彼は不用意にふりむいた。

仲田も仲間入りして、杉子と早川はならんで立つてゐた。背恰好も、體格も實に似合ひの夫婦と云ふ感じがふとした。彼は自分の體格がよくなく、むしろ不自然な位、痩せてゐるのを反省しないわけにはゆかなかつた。

「己を知れよ」そんなことを一寸も思はないわけにはゆかなかつた。だが彼は自分の精神の優秀をもつてそれに打ち勝ちたく思つた。しかしそれは今の場合力のなさすぎる云ひわけだつた。彼は自分の見たくない正體を見たやうな氣がした。そして何げなくふり返つて、大宮を見た。そして大宮の筋肉がしまつてつり合ひのよくとれてゐる身體に氣がついた。そしてそのわきに立つ、自分の醜さを思つた。杉子はそれを見てゐる！　だが自分程痛切には感じてはゐまい。それが彼の唯一の言ひわけだつた。

皆は武子が先にたつて、野島や大宮のゐる方に來た。

二十一

武子は云つた。

「今皆で神があるなしの議論してゐましたの、お兄さんは神を信じていらつしやるのでせう。」

「さあ、神のことは野島に聞く方がいゝ。野島はその方では僕の先生だから」

野島は、大宮が杉子の前で彼を信用してゐることを示してくれたことを感謝した。

「それなら野島さん、判斷して頂戴ね。妾は神があると云ふのですが、他の方はないとおつしやるの」

「それは神によるでせう。神と云ふ概念に。神といふ言葉程、あいまいな言葉はありませんからね。皆その言葉を勝手に解釋してあるとかないとか云ふのでせう。兩方本當とも云へるし、兩方とも嘘とも云へるでせう」

野島はあいまいなことを云つた。

「妾はね」武子は少し不平さうに云つた。「見える神があると云ふのではないのですよ。妾の説はお兄さんの説をなほ下手にしたので、あなたの久弟子にあたるわけですかね」武子と杉子は無邪氣に笑つた。

それを聞くと、野島は自分の内のわだかまりが氣持よく消えたことに氣がついた。

「妾は人類とか、自然とか云ふ言葉ではあらはせない、或ものがあると云ふのです。そのものに身を任せる時にだけ人間は安心を得られると云ふのですよ。處が他の人はそのあるものは何んだか見せてほしいと云ふのよ。妾は見えない

ものだから見せやうがないと云つたのよ」

又皆は氣持よささうに笑つた。野島もその仲間入りした。

「野島さんは見せて下さつて」杉子は笑ひながら、野島の顔を見た。

「僕にも見せられませんよ」

杉子も野島も笑つた。

「ですが僕はそれを感じることはたしかです」

野島は眞面目になつたので誰も笑はなかつた。

「人によつて道徳とも云ふし、人類的本能とも云ふでせう。理性とも云ふでせう。ですがそれ以上の何かから出てゐるやうな氣がします。それはいゝことをすれば氣持がいゝ。このことは道徳に叶つたことです。人類的本能でも説明出來るでせう。ですが、朝早く濱へ出て歩く、人が誰もまだゐなかつたり、ゐても處々に一人か二人か三人位切り居ない。跣足であるく、少し波に足をあらはせる。さう云ふ時、私達は何となく愉快になるでせう。そしてひとりでに歌でも唱ひたくなつたり、説教でもしたくなつたりするでせう」

「そりや君、身體が健康になるから氣持がいゝのだよ。それはオゾンの働きだよ」

早川はさう云つた。

「しかしそれもあるかも知れないが、それだけで解決をつけるのは簡單すぎる」

野島は乘氣で喋舌つたのを腰を折られたので少し腹を立てた。早川に向つて議論がしたくなつた。

「しかし神をもち出す必要はないさ」

「しかし君は健康になればなぜうれしいか知つてゐるのですか」

「健康になればうれしいにきまつてゐるさ」

「我々は健康にしなければならないから健康になればよろこびを與へられ、病氣をしてはいけないから病氣をするのが苦痛のやうにつくられてゐるとも見ることが出來るでせう。齒醫者が齒の神經をぬけば齒はいたまない。そのかはり齒がどんなにわるくなつたつて氣がつかない」

早川が何か云ひたさうにした。

「まあしまひまで聞いてくれ給へ。髪毛や爪は切つても痛くない。切つて痛くないのを不思議にさへ思はない。さうつくられてゐる。神經を身體中にぬけ目なくくばつて人間の身體を保護してゐる、その保護してゐるものは人間ぢやない。自然と云つていゝかなんと云つていゝか知らない。こゝで神をもち出すのは早いことは僕も知つてゐます。しかしともかく人間でない何かの意志が其處に加へられてゐると云ふことは云へる。僕はこんな所から話を始めようとは思はないのですがね。神經は何の爲にあるかと云へば健康を出來るだけたもつ爲にある。しかし人間のやうなものに健康をたもたせたところが始まらないとも思へば思へるでせう。我々が人間をつくつたのではない。人類が人間をつくつたのではない。道徳や、理性が人間をつくつたのではない」

「蚤をつくつたものが、人間をつくつたのですよ。蛆をつくつたものが人間をつくつたのですよ」

早川は覺つたもののやうに笑ひをふくんで云つた。

「無論さうです。しかし蚤や蛆には健康は必要だが神は必要ぢやないのです。神が必要なのは人間許りです」

少し座が白けた。野島は喧嘩を買はれたやうな氣がして怒つた。ひかへ目を失つて來た。

「美だとか、無限だとか、不滅だとか、そんなものは蛆や蚤には不必要なのです。彼等を作つたものは彼等にそんなものを要求する本能さへ

與へるのを惜んだのです。爪や髮毛に神經を入れるのを惜んだものは、父蛆蟲に神を求める心を入れることを惜まれたのだ」

「それでは君は僕達や、杉子さんを蛆蟲だと思つてゐることになりますね」

早川は冷靜に更に冷笑をつよめていつた。

「さうです。もし無限だとか、不滅だとか、美だとか、永遠なものに合致するよろこびを少しも求めないなら蛆蟲です」

「僕達はそんな寢言はなくつても生きてゆけます」

「まあ、そんなことを云ふものぢやないよ」

仲田は仲裁しようとした。

「だけど、僕は、蛆蟲あつかひされて默つてはゐられないよ。無限だとか、不滅だとか云ふものは唐人の寢ごととしか僕には思へないよ。杉子さんも同感でせう」

「妾にはなんだかわかりませんわ。ですが、妾は健康に幸福に生きるには神樣なんかいらないと思ひますわ」

「杉子さん、あなたは自分をあざむいてゐるのですよ。あなたの心はきつと神を求めていらつしやる」と野島は云つた。

「妾、神樣のことはわかりませんわ。そして蟲けらも人間もつまりは同じと思ひますわ」

「ちがひます、ちがひます。人間には精神があります、魂があります。蟲けらからは耶蘇も、釋迦も出ません」

「もう遲くなつたから僕達はお先に失敬します」

と仲田は云つた。

「さうですか」大宮は云つた。

「さよなら」皆あいさつした。

早川は怒つたやうに先にたつた。仲田兄妹は早川におひついて、三人何か話して行つた。

野島はあとを見送つてゐたが、急に泣き出した。

「どうなさつたの」武子はおどろいた。

「かまはないで下さい」

「武子さん、海に入らう。君も早川の馬鹿のことなんか怒つてゐるより海に入る方がいゝ」

「えゝ。野島さんもね」

武子は勢ひよく海に入つた。野島は默つてゐたが、自分で元氣をつけて、海に飛び込んだ。

「勝手にしろ！　杉子とは絶交だ」そんな氣もした。

　しかし野島は海に入つても面白くなかつた。彼は海から出て默つて家の方へ一人で歸つた。

　彼は井戸端で水をあびて、身體をふいて自分にあてがはれてゐる室に入つて仰向けにねて、いゝいゝと云つて見た。淋しいやうな、腹立しいやうな、後悔するやうな氣がした。彼はその氣に打ち克つて、その氣を一方切りぬけて氣持よくなりたく思つた。だがその方はなかつた。稍もすると泣きたいやうな氣になつた。

其處に武子が來た。

「一寸、御本拜借」

「えゝ、どうぞ」

武子が本をさがしてゐる後姿を見て彼は武子が杉子だつたら、武子の心が杉子に入つてたら、彼はさう思つた。自分は矢張り杉子の心を愛してゐるのではなく、美貌と、身體と、聲とか、形とかを愛してゐるのだなと思つた。しかしさう思つて見れば見る程、杉子の桃のつぼみが今にも吹きかけてゐるやうな感じが、實になつかしかつた。失ふにしては餘りに貴すぎる。

　しかし屈辱は彼にはなほ耐へられないもののやうに思へた。

二十二

彼は夕食後一人でそつと濱に出た。矢張り杉

子のことを考へてゐた。彼はもう杉子を憎んではゐなかつた。杉子に嫌はれてゐるとも思つてゐなかつた。反つて杉子は、無邪氣なのを、自分の方で早合點して淋しがつたり、腹をたてたりしたのだと思つた。

彼は濱の石をひろつて、海へそれを投げた。そして、それが三つ以上、波の上を切つてとんだら杉子が自分としまひに結婚するのだとやつて見た。しかし石は波の上を切つて、一つ大きくとんだだけで沈んでしまつた。

「こんなことはあてになるものか」

しかしいゝ氣はしなかつた。今度は偶數の數だつたら一緒になれないのだ、奇數だつたら一緒になるのだ。一つきりとばなかつたのは二人が一人になる意味かも知れなかつた。今度は澤山とびすぎて、數へ切れなかつた。

三度目こそ本當だ。

彼は波のくづれようとする頭を目がけてなげた。その日は殊に波のおだやかな日だつた。

石は水をかすめて立派に三つとんで沈んだ。

「運がいゝぞ」

彼は氣持よく思つた。だが信用する氣にもなれなかつた。彼は又波のやつて來るか來ないかと云ふ處に小さく杉子と云ふ字をかいた。そして波が十度くる迄にそれが消されなければ杉子は自分のものだと思つた。彼は波を睨んでよせつけまいと云ふ顏をして立つて居た。一つ、波は來たが三間程前で、ひき上げた。

「それ見ろ」

波は又來た。それは一間程近く迄來て、彼を心配させ、そのかはり、彼にねめつけられて歸つた。

三度目、四度目、五度目、波は根氣よく來たり歸つたりしたが、杉子と云ふ字は消されなかつた。

「あと五度、くるな、くるな、來てくれるな」

しかし波は字を消したがるやうにこりずに來た。六度目のは可なりひどかつた。あと一尺。七度目は三尺前でとまつたが、八度目は悠々と來て杉子の字を消し、しかも一間程、あたりをなめて歸つて行つた。

彼はがつかりした。

「野島！　君は其處に居たのか。今、杉子さんが來たよ」

「どうしてゐたい」

「相變らず元氣にしてゐたよ」

「今は」

「武子と話してゐるよ」

「一人で」

「あゝ一人で、さあうちに歸らう」

「僕はもう少し居よう」

「それがいけないのだよ」

「だつて杉子さんは僕に逢ふのをよろこぶまい」少し大宮の意見をさくるやうに云つた。

「あの人は他人を憎むと云ふことは出來ない人だよ」

「さう云ふのは人を愛することも出來ないと云ふ意味かい」

「さうぢやない。しかし熱情家と云ふのとはちがふだらう。しかしそれは君の方が知つてゐるだらう」

「いや、僕の方が君の意見がきゝたいのだ。あの人は早川を愛してゐるだらうか」

「まだ愛してはゐないだらう。あの人はまだ誰も愛しようとはしてゐないよ。しかし今が正直に云ふと恐ろしい時と思ふね。今が一番大事な、危險な時だと思ふね。武子より一つ年下だと云ふが、武子とちがつてもう男に愛されるやうに用意されてゐる。誰か一人を愛し、たよりたがつてゐる。しかし處女の本能でそれを今用心深く吟味してゐる。まだ意識はしてゐないだらうが。だから君は今はむしろ少し圖々しい位

に杉子さんに逢ふのがいゝのだ。君のいゝ所は逢へば逢ふ程わかる所にあるのだ。君のいゝ所は中々わかりにくい。それだけわかればもうしめたものなのだ。だから君は今躊躇すべき時ぢやない。もう一歩杉子さんがどつちかにころんだら、それこそ事件は厄介になる」

野島は大宮の云ふことを本當だと思つた。

二十三

二人は大宮の室に入つた。武子の室からは時時二人の笑ひ聲が聞えた。野島はその方に氣をとられて默つてゐたかつた。しかしそれだけなほ氣がひけて、何か言葉を見出さうとした。だがそれがなほ技巧的でそら／＼しいのに氣がひけた。おちつかない氣持がした。

すると足音がして武子が入つて來た。

「お兄さん、トランプなさらなくつて」

「してもいゝだらう」大宮は野島に聞いた。

「あゝ」野島はよろこびをかくさうともせずに云つた。この友には萬事、かくす必要はないと思つた。

「それならこゝでしよう」

武子は杉子を呼びに行つた。

杉子はいる時に、一寸躊躇したやうだつた。入つた時、少し赤い顏してゐるやうにも見えた。二人は默つて丁寧に挨拶した。いつもの笑ひ顏を見せてゐた。

野島は何となく嬉しく思つた。杉子は和解に來たのだ。自分のことを氣にしてゐてくれるのだ。自分を嫌つてはゐないのだ。もしかしたら幾分厚意を持つてゐてくれるのかも知れない。

杉子は一寸遠慮して見せたが、武子に云はれるとすぐ座蒲團の上に坐つた。

「なにをしよう」

「なんでも」武子は云つた。

「組をわけてプラス、マイナスをしようか」

「えゝ」

「どう組むかな、野島と杉子さんと組んだらどうだ」

誰も返事はしなかつた。

「それなら女同志と男同志とやるか。それでやる勇氣がありますかね」

「ありますわ。ね杉子さん」

「えゝ。男の方の方でありさへすれば」杉子は少しきまりがわるさうに云つた。

「之はおどろいた」

皆笑つた。組はきまつて、大宮は器用にしかし無造作にきつてわけた。

トランプは殆んど武子と大宮の勝負だつた。杉子と野島は時々馬鹿氣たへまをやつた。野島は時にはうまいこともやつたが、隨分へまもした。杉子は時々トランプのことを忘れてゐるやうにも見えた。武子に注意されてあわててまちがつた札を出したりした。顏は益々赤くなつて、どうかすると手さへふるへるやうに見えた。

氣をとりなほすやうに氣がきいたことをするかと思ふと、すぐへまをした。野島もそれに氣がつくとへんに氣がおちつかなくなつた。何か見てはならないものを見るやうな氣がした。杉子は戀してゐるのだ。自分に？　いやもしかしたら大宮に？　もしさうだつたら。

野島はちらつとそんなことを考へた。しかし例の自分の廻り氣だらうと思つた。その内に杉子もおちつき出した。そしていつものやうに快活になつた。それで野島も、氣のせゐだと思つた。そしてへんに思つたことさへ忘れてしまつた。だが、その後も大宮を恐れる氣だけはのこつた。

彼は大宮の樣子を見ないわけにはゆかなかつた。しかし大宮は普段と少しもかはらなかつた。杉子を眼中においてゐないやうだつた。いつもよりいく分か快活に見えたが、それだけ

だつた。彼は大宮のその態度を感心したくなつた。武子は實に無邪氣だつた。そして少しでも勝つと喜んだ。そして少しでも負けさうになると怒つた。そして杉子を妹のやうに叱りつけたり、教へたり、おだてたりしてゐた。

杉子は武子に從順だつた。殆んど口答さへしなかつた。そして武子に云はれる通りにしてゐた。

その從順な所が、なほ可憐に見えた。武子は時々隨分亂暴なことを云つた。

「あなた、だめよ。そんなもの出して」

「それだつて他に何にもないのですもの」

「それならさつき妾の出す時、注意なさればいゝのに」

「だつて野島さんがもつと大きいのを出すと思つてゐたのよ」

「それだつてその札は野島さんがついさつきとつたのよ。あなたはぼんやりして見てゐなかつたのね」

「ごめんなさいよ」

皆笑つた。野島はその時の杉子の表情を限りなく可愛く思つた。

トランプは二時間程つゞいた。野島は時間もその他のことも忘れて幸福になつてゐた。そして杉子のよろこぶ時は心からうれしかつた。

「もう歸らなければ」と杉子は不意に云つた。

「まだいゝぢやありませんか」

「いつまでゐても限りがありませんから。それでは明日に是非來て頂戴ね」

「上ります」

「それでは失禮しますわ」

「さうお」

杉子は大宮に禮を云つた。

「其處まで皆で散歩しなくつて」

「してもいゝよ」

「お送り下さらないでも」

「いゝえ、お送りしてよ。散歩がてらに」

「恐れ入りますわ」

「遠慮すると怒つてよ」

四人はそとに出た。そして海岸を通つて杉子を送つて行つた。

杉子は野島にふいに話しかけた。

「野島さん、村岡さん御存知？」

「芝居をかく、いつか仲田君やあなたと見にいつた？」

「えゝ、あの方がお友達と鎌倉に來ていらつして。さつき一寸見えて、あなたのことを聞いていらつしてよ」

「さうですか」

「あの方はこの二十九日にうちで芝居をするので、女優がないから、妾に出てくれとおつしやるのよ。早川さんの親友で早川さんもおすゝめになるの。ですけど妾はなんだか氣まりがわるいのでお斷りしようと思つてをりますの」

「それは斷つた方がいゝね」と野島は大宮に相槌を求めた。

「それは勿論、お斷りになる方がいゝでしよ」

「兄が野島さんや、大宮さんにきいてきめると申しましたの。それならお斷りしますわ」

「それはお斷りしなければ、妾は杉子さんと絶交するわ。妾、誰が嫌ひだつて村岡つて云ふ人位嫌ひはないの」武子は云つた。

「どうしてそんなに大嫌ひなの」

「だつて嫌ひだから仕方がないわ。あなたはあの人のかくものを嫌ひにならなければ駄目よ」

「そんなら嫌ひになりますわ」

皆笑つた。

その晩、野島は幸福だつた。杉子は自分を嫌つてはしない。もしかしたら自分を愛してゐてくれるかも知れない。あの人は武子さんの云ふことなら何でも聞き、又信じる。武子さんは自分の價値を知つて居る。あの人も少しづつ自分

のいゝ所がわかり出したのにちがひない。彼は武子と大宮に感謝したかつた。その晩はよくねむれなかつた。

二十四

翌日だつた。朝早く彼は海岸に出て、ある沙丘の上に腰かけて海を見てゐた。幸福は彼の心を滿してゐた。希望は輝いてゐた。彼は何かに感謝したい氣がした。それと同時に、何かに未來の幸福の爲に祈りたかつた。

彼は杉子と一軒家をもつことを考へた。杉子が自分一人にたより、自分一人に媚び、自分一人の爲に笑顔をし、化粧をし、自分の原稿を整理し、自分の爲に料理をつくりする、彼はそんなことを考へると天國に居るよりもなほ幸福になれるやうな氣がした。その時、自分は精神界の帝王になり、杉子は女王になる。自分の脚本は世界を征服する。自分の脚本の私演を杉子がやる。自分達二人は一緒に旅行する。皆自分の幸福を羨ましがる。

彼はそんな夢を勝手に見てゐた。すると大宮がやつて來た。

「早いね」

「君こそ早いね」

「僕はよく眠れなかつた」

「さうだらうと思つた。僕は今日君によろこびを云はうと思つた。昨日初めて僕は君がなぜ杉子さんを本當に戀するやうになつたかがわかつた。僕は今迄杉子さんの價値を内心ひくく見つもつてゐた　あの聲とあの表情では大概の男がまゐるのはあたりまへと思つたよ。僕でさへ、君の妻になる人として尊敬する氣がなかつたら心を動かされたかも知れないと思つたよ。しかしそれだけぢやない、僕は杉子さんが君のいゝ所を認めだしたことに氣がついた。武子にも君のことをほめてゐたさうだ。早川はあんまり信用してゐないらしい」

「しかし僕より君を尊敬してゐるかも知れないよ」

「そんなことはないよ。僕は碌にあの人と話したことさへないのだから。少なくも君を信用してゐることはたしからしい。ともかく僕は昨日の杉子さんを見て、君の結婚の幸福を本當に望む氣がしたよ。今までさう云つては失敬だが、少し疑つてゐた。あれなら安心と思つた」

「ありがたう。君にさう云はれると僕は本當に安心する。僕ほど幸福なものはない」

「君は幸福になつていゝ人間だ。それで浮き足にはなれない人間だから」

「僕はまだよろこぶのは早いことは知つてゐる。しかしともかく僕は君達の信頼に背かないだけの人間になるよ」

野島は少し涙ぐんだ。

「海に入らうか」野島はさう云つた。

「入つてもいゝね」

「入つてから僕は一寸ねむりするのだ」

「僕は小説をかき出したよ」

「さうか。僕も何かしたくなつた。勉強もしたい」

「お互に偉くならうね」

「それはきつとなれるよ。君がゐてくれるのがどんなにうれしいだらう。日本も之から面白くなる。本當に仕事らしい仕事をしなければ不名譽だ」

「昨日、村岡の話にはおどろいたね」

「隨分圖々しい奴だね」

「きつと、見てゐたまへ、杉子さんが入らなければ芝居をやるのはやめるよ。あの仲間では村岡はまだいゝのだよ。もつと恐ろしい女たらしがゐるのだよ」

「しかし斷られただけで滿足はしないだらう。何か手をかへてくるだらう」

「いくら手をかへて來ても、武子がゐるから安心だ。あれは自慢ぢやないが、一こく者で、僕達を信じ切つてゐる。それに仲田のうちでも武子に一番遠慮してゐる」

二十五

杉子を中心にしていろ〳〵の男があつまり出した。仲田の家は交際家であり、仲田が父交際家であり、杉子がまた誰にでもある點までは遠慮なく愛嬌を見せる質であり、早川がまた社交家である。

仲田と一寸でも知つてゐるものや、早川の友達、さう云ふ連中が五六人、よく仲田の家に集つた。皆トランプしたり、ピンポンをしたり、一緒に海水に入つたりした。從つて野島は杉子のそばによりつくのがいやになつた。

早川とも少しへんになつてゐる。其處に村岡の仲間が近づき、ある一高の生徒が近づき、北極星の周りを北斗七星が廻るやうに廻つてゐる。皆が杉子を露骨に讃美することがはやり出した。武子さへ、杉子の家にゆくのをいやがつた。しかし仲田兄妹は暇を見ては大宮の家に來た。大宮に來るのか、野島にくるのか、武子にくるのかわからなかつた。

ともかく、杉子も仲田のくるのも目的は武子にあるらしく野島は思つた。しかし杉子の時々來てくれるのは何よりうれしかつた。それを厚意に解釋出來る時はなほよろこんだ。

大宮はます〳〵杉子に冷淡になつた。大宮は方々から原稿をたのまれ出したせゐもあつて書齋に籠つてゐる時が多くなつた。仲田は野島の處にくるやうな顏してゐた。野島の室によく四人集つて何かした。武子は大宮をよびに時々行つたが、

「書きものしてゐるから失禮します」とことづけた。之をきくと野島はある刺戟をうけた。しかし杉子とあそぶ時は大宮のことも、脚本をかくことも忘れた。たゞ杉子の歸る時がせまつてくるのを恐れるだけだつた。杉子はもう野島にはすつかり親しくなつた。

「大宮さんはあなたとちがつて勉強家ね」と云つたり、武子に「大宮さんは兄をお嫌ひぢやないの」と云つたりした。

しかしたまには大宮も出て來た。そして仲田とも仲よくあそんだ。

あるとき、仲田の家でピンポン大會をするからよかつたらしに來てくれと云ふ通知を杉子がもつて來た。

することは出來ないが拜見に上りますと答へた。大宮はゆきたがらなかつたのだが、野島にたのまれて出かけることにした。

三人はわざと少しおくれていつた。三人は皆に歡迎された。早川は大宮を先づ皆に紹介した。皆好奇心と尊敬とを見せた。村岡は、

「あなたのものをどれも感心して拜見してゐます」と云つた。

「どうも」と大宮はいつて、あとの「ありがたう」を口に出さずに感じだけで濟した。それが謙遜からか、傲慢からかわからなかつた。

次に野島が紹介されたが、それは露骨に冷淡にあしらはれた。むしろ約束でもしてあつた程、二人の間に尊敬の差を見せた。

野島は丁寧にお辭儀したことをとり返したいやうな氣がした。しかし知らん顏して居た。武子は皆に注意されてゐたが、一向平氣に氣輕にあいさつして、杉子のそばに行つた。

仲田の母は丁度來てゐた。そして、武子にいい處の席をすゝめ、大宮にはわざ〳〵紹介してもらつて、程度強く厚意を見せ、いゝ席をすゝめ、野島は自家の人のやうに親しさを見せて、大宮のわきの席をすゝめた。腰かけは十程、ふぞろひのがおかれてあつた。早川と村岡の仲間

は、向ひ側に腰かけてゐた。先づ五人ぬきの競技が始められた。

二十六

皆さううまくはなかつた。一人一高の生徒が闘ぬけてゐた。それは村岡を崇拝してゐるらしかつた。その他は勝つたり、負けたりしてゐた。一高の生徒は四人ぬいた。五人目に誰も出る人がなかつた。

「杉子さんは今日はやらないのですか」

「えゝ、今日は拝見するの」

「それはいけませんね」と誰かが云つた。

「だつてえ、負けるといやですもの」

「勝つたり負けたりするので面白いのでせう」

「負けて許りでは面白くありませんわ」

「あなたは負けませんよ。とても僕なんか敵ひません」一高生徒は云つた。

「おしなさいよ」武子は腹立つたやうに云つた。皆がいろ／＼喋べるのを聞くのがいやなやうに。

「武子さんがさうおつしやるなら、負けてもしますわ」

野島と大宮の他は皆喝采した。

一高の生徒は過失か故意か、つゞけて三つしくじつた。杉子の方が景氣がよかつたり、うまくやつたりすると、皆厚顔しくほめた。

「君は相手ぢやないね」

「とても杉子さんには敵はない」

杉子も一つ程しくじつたが、とう／＼勝つた。皆拍手喝采をした。

「それなら一つ兄の威光でやつてやるかな」

仲田はさう云つてかはつた。皆大笑ひして喝采した。全體の調子が急に高まつたやうだつた。

仲田に味方する者は誰もなかつた。仲田がしくじると皆嬉しさうに笑つた。そして杉子のうまいのを大げさに誇張してほめあつた。それが野島には空々しく輕薄に聞え、根性が見えすくやうに見えた。彼の顏は益々苦蟲をつぶしたやうになつた。来なければよかつた。毎日こんなことして皆さわいでゐるのだらうと思つたらいやな氣がした。彼は仲田の味方をしたい位に思つた。だが默つて笑ひ顏さへ見せなかつた。大宮はもつと自然な態度をとつて居た。笑ふ時は笑つた。不愉快な時は顏を一寸しかめたが、又すぐ愉快さうに皆と一緒に笑つた。だが手もたゝかなければ、何にも云はなかつた。

仲田は大笑ひのうちに負けてしりぞいた。

「それなら一つ仲田君の仇をうつかな」

早川はさう云つてかはつて出た。皆喝采した。杉子は實際、その日はうまくもあつた。時々駄目かと思ふ處をうまく切りぬけた。

皆はその度に嬉しがつた。ほめ上げた。杉子もうれしさうに、少し上氣した顏はいつもより生々して、美しく見えた。目が光つて、手が機敏に動いた。野島も何もかも忘れて、賛美したい氣持で見てゐた。しかし時々皆のお世辭の競争をするには閉口した。

早川も負けてしりぞいた。

「今日は杉子さんには何かついてゐるね」

皆よろこんだ。

四番目に、村岡が出た。

「それなら一つ負けに出るかな」

村岡の仲間は大喝采をした。村岡もいゝ加減うまかつた。しかし半分茶化したやうにした。そして杉子に其處を突込まれて强い球をたゝきつけられるとしくじつた。

皆その度によろこんだ。村岡もまけた。今度は誰もすぐは出なかつた。

「今日の杉子さんにはとても敵はない。五人抜したのも同じことだ」と誰かがいつた。

「本當にうまいのにおどろいた、いつも皆餡を

喰はされてゐたのだね」

「野島君、どうです」早川が云つた。

皆喝采した。野島は本當に閉口した。すると大宮が云つた。

「野島の代理を僕がしませう」

二十七

皆、大なる期待をもつてその勝負をむかへた。拍手は一きは盛んに起つた。皆、大宮には一目おいてゐることが露骨に感じられた。

杉子は赤い顏をしてぼんやり立つてゐた。思はぬ敵に出くはして、逃げこみたいやうにも見えた。何か云ひたさうにしたが、言葉は外に出なかつた。勇氣を起すやうに用意した。

審判官の相圖があつて、大宮がまづ球をうち込んだ。初めはしくじつたが、それは明かに杉子を頭からやつつけるやうに獰猛なものだつた。杉子は度膽をぬかれたやうにふるへ上るやうに見えた。二番目はそれ程ではなかつたがひねくれた球だつた。杉子は辛うじてうち返したが、次の極端に意地のわるい球には手の出しやうがなかつた。

皆、大宮のうまいのに驚いた。しかしその容赦のないのになほ驚いた。皆のピンポンは女王のお相手をしてゐるのなら、大宮のは獅子が兎を殺すにも全力をつかふと云ふ風だつた。

勝負は二度やることになつた。

杉子がサーブをして處女のやうな人のいゝ球を打ちこむと、それがまた脱兎の勢ひで歸つて來た。杉子はすつかり勢ひにのまれてしまつた。しかし杉子は自棄はおこさなかつた。一生懸命になつて暴君のお相手をするやうに見えた。

野島は見てゐて冷々した。いた〳〵しい氣さへした。他の人にたいしては痛快に思つたが。武子はうれしさうに見てゐた。勝負は無造作にかたがついた。座は少し白けた。

「大宮さんは本當にお上手ね」と杉子は少しどもりながら本當に感心したやうに、武子に云つて、上氣した顏に亂れかゝつてゐる髮をなで上げた。

「隨分亂暴でしよ」

「あれが本當ね。妾達のはマヽゴトね」

一高の人がかはつて出た。犬の噛みあひのやうな勝負をしたが、大宮の敵ではなかつた。仲田が出たが、すぐまけた。もう出る人はなかつた。大宮は野島を見て氣まりわるさうに笑つて引込んだ。それが野島には奥ゆかしく、うれしく思へた。

ピンポンはそれでお流れになつて、それから皆、菓子を食つたり、茶をのんで話をした。野島達はいゝ加減で切りあげた。

夏の夕は氣持がよかつた。別莊の澤山ある道は氣持がよく、蟬のなき聲も餘りに高くはなく、夏の夕らしい感じを與へた。三人は各々何か考へてゐるやうだつた。少しして武子は云つた。

「妾、胸がすいたわ」

「僕はあとで大人げない氣がして淋しかつた。しかし野島の困つてゐるのを見ると出ないわけにもゆかなかつた。出ればあゝやるより仕方なかつた」

野島に、

「君に不愉快を與へやしないかと氣にした」

「そんなことはない」

「皆があんまり空々しい御機嫌をとつてゐるのだらう。僕もしなければいゝが、すればあゝやるより仕方がなかつた。杉子さんにたいして尊敬は失ひたくないとは思つたが」

「杉子さん、ちつとも不愉快には思つていらつしやらなくてよ。反つてあなたのことをほめていらつしやつたわ」

「ピンポンがうまくつたつて自慢にはならな

い」

「だがあんな遊びでもその人の性質の出るものね」

「さう云はれると恥かしいよ。俺は自分ですぐムキになるのがわかつて滑稽な、恥かしい氣がした」

「僕は、君の態度を少しも恥かしがらなくつていゝと思ふよ。僕は本當に氣持よく思ひ、胸がすいたよ。僕は出ろと云はれた時、どうしようかと思つた。君が出てくれたので本當に嬉しかつた」

「君にさう云はれれば僕も安心する」

二十八

翌朝だつた。野島は不意にさむけがし、頭痛がした。熱をはかつて見たら三十八度九分あつた。彼は床に入つた。しかし元氣は失はなかつた。彼は寢床で西洋の本や畫を見てゐた。大宮や武子は心配したが、彼の方が反つて安心してゐた。醫者にかゝる必要もない、その内なほると云つた。そして風邪藥をのんだ。午後二人は海に入りに行つた。野島はうと／＼ねむつた。その内ふと足音で目がさめる迄、三時間許りねこんだ。

大宮は一人で入つて來て「どうだ」と云つた。

「大へんいゝやうだ。もう寒氣もとまつたし、かうしてゐると頭痛もしない」と云つた。

「杉子さんからお大事にとことづけがあつたよ」

「さうか」野島は感謝したかつた。

大宮は杉子のことはそれつ切り云はなかつた。そして野島の枕許にある泰西美術史を見てゐた。すると不意に、

「西洋にゆきたくなつた」と大宮は云つた。

「どうして」

「僕はレオナルドや、ミケルアンゼロや、レンブラントの本物が見たくなつた。ベートオフエンも音樂でぢかに知りたい。マーテルリンクや、ローマン・ロランにも逢つて見たい」

野島は大宮が西洋にゆきたい氣のあるのは前から知つてゐた。しかし大宮は三十二三になつてからゆくと云つてゐた。

「それは僕も行つて見たい。しかし今は矢張り日本にゐる方がいゝと思ふ」

「君は日本にゐなければ駄目だよ。杉子さんのことがあるから、僕は自由な内に行つて來たい」

「君は三十二三になつてからゆくと云つてゐたらう」

「僕はこの頃はすぐにもゆきたくなつた」

「そんな話はちつとも聞かなかつた」

「正直に云ふと今、不意にゆきたくなつたのだよ。この本を見てゐたら」

「なんだ。僕はもつと根據のある話かと思つた。今君に行かれると僕は本當に淋しい」

「僕も今君とはなれるのはよくないとも思ふがね。向うへゆけば、本や畫を送るよ」

「本當にゆくのか」

「あゝ、僕はもう決心した」

野島の腹の底の何處かではこのことをよろこんだ。彼は杉子が早川や、その他の人を尊敬してゐないことを感じだしてゐた。それと同時に彼にとつての大敵は實に親友の大宮だと云ふことを感づかないわけにはゆかなかつた。大宮は安心だが、杉子の方が、大宮にあまり感心してしまはれては困ると思つた。しかしさう思ふだけ、ことが露骨なので、とめなければわるいやうな氣がした。又實際、今大宮にわかれるのは淋しくもあつた。しかしどつちの氣が強いか、ややもすると押へようとしても押へきれない氣持はどつちか。それは寧ろ大宮の外國へゆくことをのぞむ心だつた。そして行くのをやめたといはれるのが反つて恐ろしい氣もした。外國へ行

くと思つてゐて行かなくなるとがつかりしはしないかと云ふ不安さへ感じた。そしてその根性を自分でも醜く思つた。之が自分の本音か、自分の友情か。野島はさう思ふと自分が骨の髄迄利己主義のやうな氣がした。しかし大宮は外國へ行けば行くで、何か獲物をしてくる男だ。大宮は何處へ行つてもまちがひのない、得るものをちやんとうる男だ。ジョットーや、ミケルァンゼロやレオナルドや、デュラー、レンブラントの本物を見る。又ドラクロア、ミレー、シャバンヌ、セザンヌなぞの本物を見る。それからよき芝居とよき音樂と、よき本を見る。自由な心で、

彼はさう思ふと其處に又一種の恐れを感じた。おい、おい、自分は何と云ふ見さげた男だ。

自分も眞價の方でしつかりやらなければならない。杉子よ、自分を信じてくれ、自分にたよつてくれ、この獅子に翼を與へてくれ。

野島はそんなことを考へた。

二十九

其處に武子は入つて來て、

「御病氣どう」と云つた。

「ありがたう、もう隨分よろしい」と野島は云つた。

「熱をお計りになつたら」

「ありがたう」彼は武子の親切をありがたく思つた。病氣で氣がよわくなつてゐるので、なほ、之が杉子だつたら自分は病氣したことをどんなに感謝したらうと思つたが。

熱は八度二分位にさがつてゐた。

「ありがたう。別に」

「何かお食べになりたいものなくつて」

「口がかわくでしよ。梨でもとりにやりませうね」

「それがいゝだらう」大宮は云つた。

「ありがたう」

武子は出て行つて、すぐかへつて來た。

野島は杉子のことが聞きたかつた。自分の病氣を本氣に見舞つたのか、たゞ禮儀に見舞つたのか、少しは心配してくれたのか、少しも心配してくれなかつたのか。しかし聞くことは出來なかつた。

大宮は武子に、西洋に行かうかと思ふことを話した。

「何處にいらつしやるの」

「まあ伊太利から佛蘭西だね」

「羨ましいわ、いつていらつしやるの、

「この九月か、十月に」

「そんなに早く、本當?」

「本當だよ」

「杉子さん、隨分……」武子はさう云ひかけてあわててどもつた。しかし之は野島には隨分の打撃だつた。しかし聞きちがへのやうな氣もした。誰も、そのことを氣がつかないやうな顔してゐた。

「妾も行きたいわ」

「行つたらいゝだらう」

「妾、だめよ。お兄さんが行くと云ふと叔母さん隨分心配なさつてよ」

「今の内ゆく方が反つていゝよ。もう六七年あとにゆくより」

「妾、音樂の才があれば西洋にゆきますがね。たゞ見ただけではすまないわ。それにお母さんは承知なさらなくつてよ。妾がわきに居るのはお嫌ひでも。妾をもう何處かに嫁にやらうと思つて心あたりをつけていらつしやるのですもの。再來年位になつたら、新婚旅行で外國にゆくかも知れないわ」

「さうすれば向うであふか」

「向うで逢へれば隨分うれしいでせうね。ルーブルにつれていつて頂戴ね。それから芝居や、音樂會に」

野島は二人の會話を聞いてゐる内に、へんにのけものになつたやうな氣がした。彼の家はやつと食ふに困らない程度だつた。大宮とはさう云ふ點では世界がちがつてゐた。しかしその點はまだよかつた。二人は矢張り自分にとつて赤の他人だと云ふ氣がした。武子だつて自分をたゞ大宮の親友としていくぶんか厚意を持つだけで、大宮の方をどの位、信用したよつてゐるかが露骨にわかつた氣がした。

杉子も。彼は淋しく、一人ぼつちのやうな氣がして、早く母のもとに歸りたかつた。彼は元氣な時には母のそばにゐるのを嫌つた。ある齢がくると子供は親の手からはなれたくなる本能をもつてゐることをよく感じた。處が人の家で病氣をすると母が戀しかつた。母なら本當に自分の事を心配してくれ、熱があると心配して手がすく度にやつて來て、頭をひやしてくれたり、うるさい程容態を聞いたりしてくれる。其處に誠があらはれてゐて疑ふ餘地がない。しかし母以外は今の自分にとつて誰も他人だ。しかしそれは無理はない。

三十

その晩はうと／＼してふと、大勢の笑ひ聲がしたと思つて目をさますと、大宮の室にはお客が來てゐるらしかつた。仲田の聲が聞えた。又皆の笑ひ聲が聞えた。その内に杉子の無邪氣なといふより、馬鹿氣たと云ひたい位に野島にはとれた、笑ひ聲がまじつてゐた。見舞に來たのか。さうぢやない。遊びに來たのだ。自分の病氣なぞは杉子にとつては蚤が喰つた程にも思はれないのだ。

彼は腹が立つて來た。勝手にしろと思つた。

しかし淋しかつた。孤獨の感じが更に強くした。自分は杉子が病氣だと聞くと本當に心配する。しかし杉子は自分の病氣はまるで氣にしないのだ。誰がなんと云つても、あの笑ひ聲でわかる。さう思ふと孤獨な感じがした。

大宮も笑ふ、武子も笑ふ、仲田も笑ふ、杉子も笑ふのはあたりまへだ。だが野島は杉子だけには笑つてもらひたくなかつた。

杉子が自分のことを心配してくれて、皆にへんに思はれることなんか平氣になつて、この室に來て、自分を看護してくれたら、自分はどんなに喜ぶだらう。極樂も之以上とは思へまい。さう思へば思ふ程、杉子の無頓着が、腹がたち淋しかつた。

大宮が西洋にゆく。いゝ氣味だ。自分はもう杉子のことなんか思つてやるものか。

自分は自分を偉大にする。自分は乞食ではない。愛を哀願はしない。自分を愛することも尊敬することも出來ないものに用はない。

しかし彼は淋しかつた。そして枕もとの雜記帳に、

「杉子よ、杉子よ、僕の病氣の時はどうか笑はないでくれ、たのむ。お前は親切な、人のいゝ女ぢやないか。お前たけは笑ふのはよしてくれ

しかし杉子の笑ひは、氣にすれば氣にする程、彼の耳にひゞいた。

彼はまだ杉子の見舞にくるのに望みをおいた。しかし來ないのがあたりまへだとも思つた。そして杉子はとう／＼來なかつた。十一時がなるのを彼は聞いたが、仲田兄妹の歸つたのはそれから可なりあとだつた。彼はおかげで自分の病氣が重くなつたと思つた。

しかし翌日になると、すつかり熱がなく元氣になつてゐた。起きると、少しふらつき、力はなかつたが。そして午後皆が水泳にゆく時、彼も、大宮や武子にとめられたが、杉子の様子が見たいので、出かけた。

杉子はもう來て居た。そして野島を見ると、微笑みながら近づいて、親しく挨拶して、

「御病氣はもうおよろしいの」と聞いた。
「えゝ」
彼は他愛なく幸福を感じた。彼は砂の上に腰をおろした。杉子は海水服のまゝ、そのそばに腰をおろして、
「大宮さんが西洋にいらつしやるつて、本當」
「えゝ」
「大宮さんがいらつしてはあなたお淋しいでせう」
「えゝ、大宮に行かれると、僕はもう話相手がなくなります」
「妾ではお話相手にならなくつて」
「あなたなら、話相手になります」
野島は幸福を感じた。
「妾この頃だん／＼神と云ふものがあるやうな氣がしてきましたわ」
「ありがたう」
「此からも、[illegible]いことがあつたら、色々教へて頂戴ね」
「僕に出來ることなら」
「あなたは大宮さんの先生でしよ」
「そんなことはありません」
「昨日大宮さんと武子さんであなたのことを隨分ほめていらつしてよ」
「僕はほめられる資格はありません」
彼は本當にさう思つた。そして大宮たちに謝罪したい氣がした。

三十一

彼は本當に幸福を感じた。自分が値しない幸福が彼に微笑みを見せて來た氣がした。彼はすべての人を愛と感謝をもつて見たく思つた。自然はどうしてかう美しいのだらう。空、海、日光、水、砂、松、美しすぎる。そしてかもめの飛び方の如何にも樂しさうなことよ。そして人間にはどうしてこんなに深いよろこびが與へられてゐるのだらう。まぶしいやうな。彼はさう思つた。自分のわきに杉子がゐる。そして自分を尊敬し、自分にたよらうとしてゐる。自分に住む資格がないやうな幸福が自分をとりまいて、悲しみと淋しさに向つて彼が自づと用意してゐた甲冑を溶かし無くさうとしてゐる。しかし彼はまだ何となく運命を信じ切れず、不安を何處かに感じてゐる。しかしうれしさがやゝもすると抑へ切れずにあふれてくる。
彼は皆に感謝したかつた。殊に神に。
「私は謹みます。出來るだけのことをします。どうかたつた一つのことは叶へて下さい。お願ひですから。杉子を私のものにして下さい。杉子を私から奪はないで下さい。私はあなたの爲に出來るだけ働きます。皆の幸福の爲に働きます。あなたの意志に出來るだけ從ひます。ですから、私を憐れんでこのあなたから與へられた限りない幸福を奪はないで下さい」
彼は杉子にいつまでも自分のわきに居てもらひたかつた。しかし杉子が立つてゆく時が怖すぎるので、早くいゝ時に立つて行つてほしくも思つた。あまり幸福すぎる時、彼は一種の恐れを持つ。人間にはまだあまりに幸福になり切れるだけの用意が出來てゐないやうに彼には思へた。生れたものは死に、會ふものは又別れる。さう云ふ思想は何時となく彼の心にも忍び込んでゐる。
「幸福であれ」と彼は心に祈つた。沈黙が一寸つゞいた。
「あなたは殆んど病氣をなさいませんね」
「えゝ、妾は隨分丈夫よ。武子さんに笑はれるのよ。あなたは樂天家だから病氣をしないのですつて。ですけど妾だつて心配はありますわ」
「どんな」
「だつて人間は誰だつて死ぬものでしよ。運と云ふものはわからないものでしよ。かうしてゐ

る内に母が死なないとも限りませんわ」
「だけど大丈夫でせう」
「大丈夫だと思はなければ、妾、とんで歸りますわ」
「あんまり心配しない方がいゝのですよ。夜半に嵐の吹かぬものかは、と云ふ歌がありますね。しかし私達は六千ぺんか、七千ぺん夜を無事に通して來てゐますからね。その方が反つて不思議な氣がしますが。あんまり心配すると損しますよ」
「妾だつて、さう本氣に心配してはしませんわ」
「あなたは出來るだけ身體を大事になさらなければいけませんよ」
「ありがたう。あなたもね」
「ありがたう。僕は本當に身體を大事にします」
「大宮さんがおつしやつてよ。あなたは意志の強い方で、身體のよわいのを意志で十分とり戻してゐるつて。しかし御無理なさらない方がおよろしいわ。大宮さんは父あなたのことを、どうしてあんないゝ奴が日本に生れたのだらうとおつしやつてよ。本當に大宮さんはいゝ方ね」
「えゝ、えゝ。あんないゝ人間はありません。僕は大宮を限りなく尊敬してゐます。あんなに友情にとんだ、人の心がよくわかり、思ひやりのある男は他にありません」
「本當ね。妾、あんなに友情の厚い方を見たのは初めてよ」

三十二

彼はもう恐怖なしに嬉しかつた。
「大宮が居なかつたらどんなに淋しかつたでせう。僕は大宮に慰められて勇氣をとり戻すことが出來たことが何度あるかわかりません」
「本當にあなた方はいゝお友達ね。それでこそ本當のお友達だといつも武子さんと話してをりますの」
其處へ仲田が來た。
「病氣だつたつて、もういゝのかい」
「あゝ、もうすつかりいゝ」
「昨日大宮君や武子さんが心配してゐたつけ」
「さうかい。もういゝのだ」
「早くなほつてよかつたね」
「ありがたう」
「僕は近い內東京に歸ることにした」
「どうして」
「もうそろ／＼涼しくなつたし、こゝにゐると五月蠅くつて勉强出來ないからね」
「勉强するのか」
「勉强するよ。僕も、この頃勉强する氣が猛烈に出て來た」
「それは感心だね」
「感心だらう。之からの世の中は何といつたつて勉强の世の中だからね」
「それはさうだ」
「おちついて勉强したくなつた。大宮君も西洋へ行つて、うんと勉强すると云つてゐた。大宮君が西洋へ行つて勉强してくれば本當に鬼に金棒だね」
「あゝ」
「世界的な仕事をするだらう」
「それはするだらう」
「僕も大宮君の話をきいてゐると、勉强しなければ嘘だと云ふ氣が本當にしたよ。勉强するのは今のうちだと思つた。思想もちやんとしておかなければ、之からの世界は駄目だからね」
「それはさうだ」
「僕も大いにやる。君も大いにやり給へ」
「やるよ。僕も負けてはゐない」
「大宮君は實に君を信じてゐるね。大宮君や武子さんの話をきいてゐると、君を見上げたくなつてくるよ。君はいゝ友達をもつてゐると思ふ

よ」
其處に大宮と武子が來た。
四人で話してゐる内に不意に、「明日一緒に東京に歸ら」と云ふことにきまつた。
大宮は西洋へゆく用意にとりかゝると云つた。
「何年いつていらつしやるの」と杉子は聞いた。
「三四年、もつといつた工合でゐるかも知れません」
「もつと早くお歸りになるかも知れないのでしよ」
「それははつきりしたことはわかりません」
「妾もゆきたいわ。何でもよろしいから、あちらにいらつしたら、何か送つて頂戴ね」杉子は甘えるやうに云つた。
「僕は不精ですから御約束は出來ません」
「それでも野島さんには何でもお送りになるでしよ」
「野島は別です」
「武子さんには」
「武子の母にたのまれれば」
「妾がおたのみしたのでは駄目」
「駄目です。しかし何かほしいものがあつたら野島におたのみなさい」
杉子はそれには答へないで默つてしまつた。
野島は大宮の頑固なのにおどろいた。自分が大宮の位置にゐてもあゝきつぱりは云へないと思つた。嘘がつけない點ではお互にまけないまでも。野島の方が頑固のこともあるが、道徳的潔癖では大宮には敵はないと思つた。

三十三

歸りの汽車は樂しいものだつた。野島は久しぶりに東京へ歸るのは嬉しかつた。夏の夕方の東京を野島は好きだつた。殊に本屋へ行つて本をさがすのが好きだつた。又久しぶりに自家の人に逢ふのも自家に歸るのも嬉しかつた。しかし汽車はいつまでも、いつまでも東京につかなければいゝと思つた。このまゝ極樂まで行つてもいゝと思つた。
其處には杉子がゐる。機嫌よくしてゐる。野島にもよく話しかける。梨をむいてくれる。身體のことを氣にしてくれる。笑ひ顔を見せてくれる。親しさが目に見えて進んで來たやうに見えた。あたりの人は樂しさうな五人を見る。羨ましがるものも、不快に思ふものも、一緒に笑ひにつり込まれるものもある。
野島にはそれは氣にならない。彼は汽車がいつもよりも性急なのを感じる許りだ。
「早いね」
いつのまにか横濱についた。
「早い」大宮は少し冷かすやうに云つた。
横濱を出るとなほ汽車は早かつた。東京驛で別れをつげて、四人は俥にのつた。野島だけは電車に乘らうとした。しかし電車は仲々來なかつた。身體は少しは大儀だつたが、歩きたい氣もした。それで電車道を通つて日比谷の方に歩いた。朝の十一時頃で、日は可なり強く照りつけ、あたりは日光を反射したが、彼は久しぶりに東京の土をふむのは嬉しかつた。歸ると母がさぞよろこぶだらうと思つた。しかし彼はそんなことより、杉子のことを考へてゐた。杉子のめき／＼と親切になつたことを考へた。
杉子の口からもれた一こと一ことを思ひ出しかみしめた。其處に自分にたいする親しさと厚意が味へた。彼は嬉しく思はないわけにはゆかなかつた。

三十四

その後大宮は外國にゆくのに忙がしかつた。
九月の末にはたつことにきまつた。その日野島は横濱まで送ることにした。東京驛に大宮を

送る人は五六十人來て居た。武子の父も母も來て居た。武子は大宮の母について横濱迄ゆくことになつてゐた。雜誌記者や、文士も見えてゐた。新聞記者も來て大宮と何か話してゐた。しかし野島はそれ等の人のことは氣にならなかつた。彼の氣になつたのは勿論同じく送りに來てゐた杉子だつた。杉子にしてはいつもより厚く化粧してゐて、いつもより美しくは見えたが、無邪氣には見えなかつた。そして誰とも話をせずに一人淋しく立つてゐた。つゝましく、だが何か考へてゐるやうに。少し瘦せたのではないかと思つた。

武子がそれに氣がついて近づくとさすがに笑つて見せた。大宮は野島に近づいた。

「僕は君の幸福を祈つてゐるよ」大宮はさういきなり云つた。彼は泣きたいやうな氣がした。大宮も涙ぐんでゐるやうに見えた。

「ありがたう。君は身體を大事にしてくれないといけないよ」

「ありがたう。僕が向うへ行つてる内に二人で來給へ。旅費位、どうでもするよ」

「さういけば―」

野島はそのさきは云へなかつた。其處へ大宮の母が來て、野島に挨拶して、「何とかさんがお見えになつたから、挨拶しておいで」と大宮に云つた。

「一寸失敬する」

「どうぞ」

切符を切る樣になつたので皆、我勝ちに入つた。

野島はこの日一生忘れることが出來なかつたのは杉子の態度と目だつた。杉子は誰にも氣がつかれない處に立つて、氣がつかれないやうに、一つのものを見つめてゐた。

それは大宮を見つめてゐるのだつた。野島は杉子の心がすつかりわかつたやうに思つた。

三十五

こゝで自分は少し筆をはしよる。野島は杉子が大宮を戀してゐることを瞬間的に直覺した。

汽車は動き出して皆萬歲を云つて、手をふつたり、帽をふつたりした。杉子も人々のかげで謹み深くはんけちをふつてゐた。彼女の姿は人々の動くので見えたり、見えなかつたりした。しかしその目は汽車の窓から首を出して皆に返禮してゐる大宮にそゝがれてゐた。野島は大宮の目をぬすみ見た。しかし大宮は杉子を時々見るやうでもあり、見ないやうでもあつた。しかし野島は大宮が立つたあとでも、仲田の處に時々出かけて、杉子に逢つた。杉子の態度は別にかはらなかつた。大宮の話も時には出たが、別に野島には氣にならなかつた。ピンポンもした。トランプもした。しかし前程のり氣になれなかつた。野島は段々おちつかなかつた。彼はいつ何時、杉子が人妻になるかわからない氣がした。彼はとう／＼一年後に間に人をたてて杉子の家に結婚の申込みをした。たゞ體裁よく斷られた。彼はそれではあきらめられなかつた。それで仲田に、「杉子さんの本當の意志を知らしてほしい」と手紙をかいた。仲田からは「當人も今結婚する意志はまるでない」と云つて來た。彼はそれから仲田の家にはゆくことが出來なくなつた。彼は段々仲田の手紙だけでおちつけなくなつた。仲田は如才ない男だ。當人の本當の意志でないことも當人の意志のやうに書き兼ねない男だ。本當に杉子さんの意志を知らない内は思ひ切りたくも思ひ切れないと思つた。

彼は其處で思ひ切つて杉子に手紙をかいた。

「私は貴女なくして此世に生きることの淋しさをあまり强く味はされてをります。私はそれに耐へ兼ねて失禮も顧みず手紙をかきます。私の心は貴女は既に御存知と思ひます。私は何

にも申しません。唯々お願ひします。貴女の本當の意志を御知らせ下さい。私は何年でもお待ちします。少しは望みがあるのですか。少しも望みはないのですか。何もかも正直に云つて下さい。私はこはいのです。しかし貴女の言葉をきかない内は、少しもおちつきません。少しでも希望のある言葉を私は望んでをります。私は知らぬ神に祈ります。泣いて祈ります。少しでも希望がありますやうに。ですが本當のことを知らして下さい。私も男です。本當のことを知れば、あきらめなければならない時はあきらめます。そんな時のこないことを祈つてをりますが。どうぞ御返事下さい。私は貴女からの宣告を恐る恐る希望に燃えながら待つてをります」

杉子はそれに簡單に答へた。

「御手紙拜見いたしました。あたたのやうな尊敬すべき方にか程迄云つて戴くことは勿體なく思ひます。しかし父や兄のお答へ申した通りより私も御返事が出來ませぬ。どうぞあしからず。心であやまつてをります」

野島はこの冷たい手紙を繰返しよんだ。そして絶望と云ふことを本當に感じた。彼はすつかり參つてもむせび泣いた。その二三日後に彼はベートオフェンの肖像に次のベートオフェンの言葉の原文を亂暴にかいて柱に鋲でとめた。

「お前は人間ではない。自分の爲に生きる人間ではない、たゞ他人の爲にのみ。お前には自分自身の内、藝術より他に幸福はない。神よ、私に克つ力を私に與へて下さい。私を人生に結びつけるものは何にもありません。Aとかうなつてはすべてが失はれました」たゞAのかはりにSがつかはれてゐた。

彼はこのことを巴里にゐる大宮には勿論報告した。大宮からは時々たよりがあつたり、本や畫の類を送つて來たが、その頃からばつたり杉子のことはかいて來なくなつた。彼はそれを自分の傷にふれない爲ととつた。

それから一年程たつて、既に結婚した武子が夫と西洋へゆく時不意に杉子も一緒に洋行することを野島は聞いた。

野島はそれを本當にはしなかつた。彼は文壇からは少しづつ認められて來、彼の芝居も二つ三つ演じられた。元よりそれは一般の注意をひく力はなかつたが、一部からは大いに期待され、恐れられもした。しかし野島はそれで滿足は出來なかつた。彼はたゞ淋しかつた。そして杉子のことが忘れられなかつた。

一度彼は往來で杉子に出逢つた。まばゆいやうに美しくなつたと彼は思つた。杉子は彼に氣がついた。そして謝罪するやうに彼に辭儀をした。彼も丁寧に罪人のやうにお辭儀をした。一こともまじへなかつた。彼はもう心を失つた人のやうに立ちどまつて、彼女の方をふり向いた。彼女はふり向かずに一番近い四つ角を右の方へ曲つて行つた。彼は杉子が御辭儀してくれたことが、嬉しかつた。そして感謝した。しかし同時に失つてはならないものを失つたことに氣がつかないわけにはゆかなかつた。自分は實に全世界を失つたのだと云ふ氣がした。彼は丸善へ行かうと思つて出たのだがすぐやめて家に歸つて、泣いた。そして大宮から送つてくれたベートオフェンのマスクに顏をあてた。それはベートオフェンの肖像を柱に鋲でとめたことを知らした時、少しおくれて大宮から送つて來たので、彼は大宮の友情に感謝して涙ぐんだ。その時の彼に之程ありがたい送りものはないと思へたので。彼は持つべきものは友だと思つた。杉子の洋行は事實だつた。彼はあることを感じはしたが、それはうち消してゐた。彼はまるで誰とも逢はず、散歩と讀書とものをかくのと泣くのとで日を送つてゐた。

杉子がたつて三四ケ月たつた時、彼に大宮からへんな手紙をうけとつた。それはミケルアンゼロのピエターのエハガキの裏全面に英語でかかれてゐた。大宮は佛語と英語が出來た。野島は獨逸語と英語が出來た。それで英語でかゝれてゐた。

一尊敬すべき、大なる友よ。自分は君に謝罪しなければならない。すべては某同人雜誌に出した小說(?)を見てくれればわかる。よんでくれとは云へない。自分の告白だ。それで僕達を裁いてくれ一

この僕達と云ふ言葉が野島にはへんに氣になつた。某同人雜誌は大宮を尊敬する人々によつて出されてゐる雜誌で野島もその寄贈をうけてゐる。彼はその雜誌をうけとると、すぐ大宮のものをひらいた。そしておどろいた。目まひがした。それには次のやうなことがかゝれてゐた。

下

一

大宮さん、怒らないで下さい。私が手紙をかくのには隨分勇氣がいりました 私は何度かきかけてあなたを不愉快におさせしてはすまないと思つてやめたかわかりません。あなたに怒られ、手紙をよこしては困ると、おつしやられては私は立つ瀨がありません。私はあなたに輕蔑され愛想をつかされることも恐れてをりました。ですがもう私はそんなことを心配してゐられなくなりました。一生のことです。一生のことよりもつと以上のことかも知れません。ともかく手紙をかきます。怒られても、愛想つかされても、この氣持でゐるよりはましと思ひます。

先日武子さまに三越でお目にかゝりました。夫の方も御一緒でした。武子さまは實際お美しくおなりでした。夫の方も立派な方でお似合の御夫婦と思ひました。その時、私の方では遠慮してをりましたが、御丁寧に挨拶して戴き、その上夫の方に引きあはして戴き、そして御主人の役所にゆかれる留守に退屈だから來てくれとのお話で、私も大喜びで一昨日參上いたしました。そしてあなたのお話も伺ひ、最近のお寫眞も拜見いたしました。ハイカラにおなりになつたと二人で笑ひました。しかしちつとも輕薄の感じのしないのが不思議だと申しました。私は其時、武子さまに大宮さんにおねだりしたいものがあるのですが、いゝでせうかと申しました。それはいゝでしよ、いくらでもおねだりになるといゝわとおつしやつて下さいました。そしてお處も伺つたのでした。武子さまも、この十一月にはお二人で巴里にいらつしやるやうなお話でした。どんなに羨ましかつたか知れません。巴里は私も是非一度はゆきたいと思つてをりますの。ゆけさうもありませんが、一番好きな都です。日本は別として。

私はおねだりしたいものは實は何にも御座いません。いや、あり過ぎるので御座います。が今日は御遠慮しておきます。あなたの御機嫌を伺つて見て、御機嫌によつて段々お願ひしたいと思つてをりますが、あなたはきつと頭から御斷りになると思ひますので。

野島さまはこの頃ちつともお見えになりません。こなひだ帝劇の廊下でちよつとお目にかゝりましたが、すぐ氣がつかないやうにお逃げになりました。くはしいことは野島さまからお話があつたことと思ひますが、私はおどろきました。私は野島さまを二番目に輕蔑してをります。いい方だと思ひます 私には勿體ない方とも思はれないことは御座いません。あなたはきつとさうお思ひになると思ひます。ですが、私は野島

さまの妻には死んでもならないつもりでをります。このことをあなたに申しておきます。両親が反對したからではありません。兄は少し薦めてもくれました。ですが私は、どうしても野島さまのわきには、一時間以上は居たくないのです。なぜだか自分にはわかりません。自分では説明もつきますが、それは要するのに私の神經の話で、かゝ程のこととは思ひません。

野島さまは私がゐなくつても、なほ立派になれる方と思ひます。この頃おかきになるものには凄い程、強い慾が出て來たやうに思ひます。ですが私はあなたのものゝ方がどの位好きで御座いませう。あなたのおかきになるものは一言一句拜見いたします。あなたについてかかれたものもすべて拜見いたしてをります。私はあなたの一番いゝ讀者になりたいと思つてをります。

あなたを尊敬してゐる方は澤山御座いませう。ですが他の方にはわからない所もちやんと私にはわかつてをりますつもりです。

さもないと口惜しいので、さう思つてをります。毎日々々、あなたの御健康と、御幸福を祈つてをります。どうかお許し下さい。どんな短かい御返事でも下さればとび上ります。

二

御手紙拜見しました。正直に云ふと、あなたの手紙を受けとらなかつたことを僕は望んでゐます。受けとつても御返事を出さない方がいゝのかとも思ひます。ですが野島のことを、もう一ぺん考へて戴きたいことを申します。

あなたはまだ野島のいゝ所を本當には御存知ないのです。野島の見かけ許りにまだなつかゝつていらつしやるやうに見えます。野島の魂を見てほしく思ひます。野島を友だからほめるのではありません。野島は實際、ほめていゝ僅かの人間の一人です。そんな男に戀されたことはあなたの名譽です。その名譽にあなたが値しないとは申しません。僕はあなたを野島とはなして考へるわけにはゆきません。僕は野島の妻になる人としてあなたを尊敬して來ました。

あなたは野島を二番目に尊敬すると云ひました。一番目が西洋人なら今の云ひ方がありません。しかしその人が日本人だつたら、あなたは野島を本當には知らないのです。正直に云ひます。あなたはあの言葉で、僕を尊敬してゐることをほのめかさうとしたのでせう。僕は野島より以上の人間ではありません。野島は僕の方が尊敬するのが至當の人間です。あなたは厚意をもつて野島をもう一度見て下さい。

野島をどうか愛してやつて下さい。愛される價値のある男です。人つきのわるい無愛想で、怒りつぽい。しかし人のいゝことは無類です。もう一度見なほして下さい。僕を信ずるならば、野島を愛して下さい。必ずいろ〳〵のいゝ所を發見されると思ひます。僕は嘆願します、野島を愛して下さい。

三

御手紙を拜見いたしましたが、それ許りは出來ません。私も負けずに正直に申します。あなたが此世にいらつしやらなかつたら、あなたにお目にかゝらなかつたら、私は寧ろ早川さんの妻になつてゐたでせう。私はその時でも野島さまの妻になるとは思ひません。私が野島さまを愛することが出來ないのは罪でせうか。そんなことがあるわけはないと思ひます。野島さまが私を愛して下さつたことを私は正直に申しますと、ありがた迷惑に思つてをります。お氣の毒な氣もします。しかし私のやうなものをさう本氣で愛して下さるのは不思議な氣もします。ともかく私はどんなことがあつても野島さ

まを尊敬しますが、愛するわけにはゆきません。

それはいゝことかわるいことか、わかりませんが、私には絶對な事實です。私の力ではどうすることも出來ません。あなたのおたのみでもこのことはきくわけに參りません。

私は何もかも申します。そして私の一生をきめてしまひたく思ひます。それは恐ろしすぎることです。しかし默つて運命に任せるわけにはゆきません。私は死力を盡して運命と戰ひます。私は戰ふと云ふよりは運命を開かうと思ひます。私は靜かに門のそとに立つて戶の自づとあくのを待ちたくも思ひました。しかし今はその戶をたたけるだけたゝきたいと思ひます。私の眞心が通じなければ仕方がありません。ともかく私は一生の勇氣をふるつて戶をたゝきます。

大宮さま、私を一個の獨立した人間、女として見て下さい。野島さまのことは忘れて下さい。私は私です。假りに野島さまのことを忘れて私のことをお考へになつたことを、どうかくはしくかいて下さい。正直に何もかもかいて下さい。さうすれば私はあきらめなければならない時はあきらめます。

私の寫眞をお目にかけます。私の云ひたいことはすつかりおわかりと思ひます。

四

あなたの云はうとすることはわかり切つてしまひました。僕はそれを恐れてゐたのです。僕は正直に云ひます。僕はあなたが僕に厚意を持ち出したことを感じたので、僕がゐてはいけないと思つて、日本を去ることにしたのです。僕さへゐなくなればあなたは當然、野島を愛して下さると思つたのです。そして結婚さへしてしまへば、僕にあなたが冷淡になるのはわかり切つたことです。僕はそれをのぞんでゐました。尤も僕のこゝに來たく思つてゐたのは昔からです。そして今は來てよかつたと思つてゐました。野島のこともあなたのことも殆んど忘れて、毎日畫を見たり、音樂をきいたり、芝居を見たり、本をあさつたり、散步したり、建築を見たり、何かかいたりしてゐます　こゝへ來てからいろ〱のことを考へます。私達は戀になんか醉つてゐる暇がないやうに思ひます。したいこと、しなければならないことが多すぎます。日本に貧弱すぎます。私達は出來るだけの力をもつて、日本の文明を高め、思想を高め、世界的の仕事をどん〱してゆくやうにしなければ、日本人は世界的存在の價値を失ひます。今は大へんな時です。私達がふるひ立たなければならない時です。あなたも、野島も。せめてあなたは、野島に親切にしてやつて下さい。野島は淋しさうです。本當にうちくだかれて參つてゐます。でも野島は今に起き上るでせう。しかし淋しさは野島につきまとふでせう。僕は今野島の脚本を一つ譯して西洋人に見せつけてやらうかと思つてゐます。僕はあなたを怨んではしません。しかし野島にさう冷淡なのをきくといやな氣がします。早川の妻になつたでせうはよくありません。あなたにはまだ本當の男の價値を見ぬく力はありません。あなたは野島を愛することが出來ないと云つてゐます。しかしそれは嘘です。野島のいゝ所にふれたら、あなたは厚意をもたないわけにはゆきません。一ぺん厚意をもてばそれが愛にかはらないとは限りません。あなたは僕をも本當に知らない。あなたは僕を理想化してゐる。僕の處に來たと假定しても、それはあなたにとつて幸福ではない。僕はいつか、野島には征服される人間です。かう云ふのは殘念ですが、正直にさう申します。

五

御手紙拜見しました。あなたは嘘つきです。

本當に譃つきよ。私はちやんと知つてをります。何もかも知つてをります。私はあなたがゐないことは考へられません。そしてあなたこそ本當に私を愛してゐて下さるのです。あなたは私を嫌ひ、私に冷淡を裝つていらつしやる。しかし私のいゝ性質をそのまゝに認めてゐて下さるのはあなた許りです。野島さま、野島さまのことをかくのはいやですが、野島さまは私と云ふものをそつちのけにして勝手に私を人間ばなれしたものに築きあげて、そして勝手にそれを讃美していらつしやるのです。ですから萬一一緒になつたら、私がたゞの女なのにお驚きになるでせう。このお方は意志の強い方です。おかきになるものは、あなたのものより世間を征服なさるでせう。しかしその時でも、あなたは一方に平氣で輝いていらつしやいます。あなたは何もかも御存知のくせして、無理にも友情をふるひ起してその他のものをはらひのけようとなさつていらつしやいます。野島さまは私があなたの處に參ればなほ偉くなる方です。そして決して參り切りにはおなりになりません。私は女です。私にはあなたのお役に立つことより他に望みはないのです。私はあなたのわきにゐて、あなたを通じて世界の爲に働きたい、人生の爲に働きたい。私のこの願ひをどうか、友情と云ふ石で、たゝきつぶさないで下さい。野島さまには出來るだけ親切にもいたしますし、尊敬もいたします。ですがそれ以上のことは出來ないことを、罪だと思ひません。

六

あなたからの御返事をおまちしてをりますが、まだ參りません。私は心配になります。怒つていらつしやるのですか、憐れと思つて御返事下さい。私は巴里に行きたう御座います。一目あなたにお目にかゝりたい。さうすれば死んでもいゝと思ひます。武子さまはこのくれにおたちになります。羨ましく思ひます。御返事を、御返事をお待ちしてをります。

七

僕は何と返事していゝかわかりません。僕は迷つてゐます。野島に相談したい。だが相談する勇氣はない。野島はあまり氣の毒です。偉くはなつてくれるでせう。日本の、いや、人類の誇りになつてくれるでせう。だがその時、僕達はどんな役をするでせう。しかしそんなことは問題にならない。しかし僕は親友の戀してゐる女を横取りには出來ません。それは友を賣ることです。あの尊敬すべき、そして僕を信じ、たよつてゐる友を。あなたはなぜ僕をそんなに愛してくれたのでせう。僕が野島にたいする遠慮から、僕があなたにこびず、冷淡にしてゐた態度をあなたが買ひかぶつたのではないでせうか。僕は野島のことがなければ野島よりもなほあなたに媚びたかも知れない。私はこの手紙を出さうか、出すまいか、考へた。出さない方が本當と思ふ。だが出す。野島よ、許してくれ。

八

あなたの御手紙はどんなに私をよろこばしたらう。ありがたう、ありがたう。私は今天國にをります。あなたがこの世にいらつしやる。私は本當に感謝いたします。私程の仕合せ者は世界中にありません。その内長い手紙をかきます。今はうれしくつて何にもかけません。

大宮さま、私程仕合せ者はないとしみ〴〵思ひます。よくあなたのやうな方がこの世に生きてゐて下さいました。そしてお目にかゝることが出來、そしてお話することが出來、そして私に厚意を持つて下さる。私は本當に、仕合せものです。あなたのおかきになるものを拜見した

時から、私はあなたを他人とは思つてをりませんでした。そしていつか芝居で野島さまと一緒にいらつしやる所を拜見してから、私はあなたのやうな方がこの世にいらつしやることを本當にうれしくたのもしく思ひました。私はその時まだ十四で野島さまとも御話したことはありませんでしたが、あなたの男らしい立派な御容子をその後忘れることは出來ませんでした。私はそのことを恥ぢました。そしてそのことをいつのまにか忘れることを望んでゐました。實際又忘れてゐました。その後往來で一度お目にかかる迄。あれは武子さまの處へ上つて二人でお友達の處に參る時でした。あなたのおうちの前を偶然通つて少し參りますと、あなたは大きな本のつゝみを重さうに持つて急ぎ足で歸つていらつしやいました。あつと思つた時、あなたは微笑みながら挨拶なさつたので、私はどの位びつくりいたしましたらう。私も赤い顏してあわてて御挨拶しようと思ひました時に、あなたが武子さまに御挨拶なさつたのだと云ふことがわかりまして、氣まりの惡いやうな、がつかりしたやうな氣がいたしました。妬ましいやうな氣さへいたしました。そして武子さまからあなたと從兄妹だとお聞きした時、羨ましい氣がいたしました。あなたは武子さまと何か話していらつしやいました。いゝ畫の本を買つたのだとよろこんでいらつしやいました。武子さまはその内、拜見に上つてよとおつしやいました。私は餘程、武子さまにおねがひして畫の本を拜見さして戴きたいと申しかけましたがやめました。私はこゝでもう一つ白狀いたします。それは私はあなたのお家の前を通つた時、お家の立派なのにおどろいたことです。しかし私を虛榮心の強い女とは思はないで下さい。野島さまがあなたの位置に居、あなたが野島さまの位置にいらつしても私はあなたを愛しないわけには參りません。私はあなたにだけは何んでも申し上げることが出來るやうに思ひます。世の中では女に生れても、本當の女のよろこびを味ふことが出來ない人が多いやうに思へます。むしろ本當のよろこびを知つた人は甚だ少ないと思ひます。私もあなたに逢ひ、あなたとお話し、あなたと一緒に遊んだり笑つたりするまではこの世にこんなよろこびがあり、人間がこんなにまでよろこべるものかと云ふことを知りませんでした。知らない内はよろしい。しかし一度知つた以上は、それを失つては生きてはゆけないやうな氣がします。いつかあなたとトランプをした時、いつかあなたと海岸で二人で散步した時——あなたが外國にゆくことをおきめになつた日——その晩またお邪魔に上つた時、私はうれしくつてうれしくつて、どうしていゝかわかりません。神に感謝しないわけには參りませんでした。人間に生れてよかつた。女に生れてよかつた。あなたに逢へてよかつた。勿體なすぎる程自分は運がいゝと思ひました。なぜか私はあなたの外國行をあの時、本當にはしてをりませんでした。私の力でもおとめして見せると思つてをりました。あなたが私に冷淡になさらうと努力なさる度に、反つて私はあなたが私を愛してゐて下さることを信じることが出來ました。ピンポンの會の時も、私はそれを感じて、負けてもうれしかつたのです。あなたの義俠心と男らしさと、女に媚びるものにたいする怒りと、其處に又私をひそかにいたはつて下さつた御心づかひとを私はちやんと感じてをりました。私は野島さまのことはまるで無頓着でをりましたから氣がつきませんでしたが、あなたの御心だけはちやんと見拔いてをりました。處が突然西洋にいらつしやる、私は本當にびつくりしました。心配になつて來ました。しかし私は東京驛へお見送りをした時にあなたの御心を又見ぬ

いたと思ひました。しかし私には一つ腑に落ちないことが御座いました。なぜあなたがそんなに迄、私に冷淡を装ひ、外國にいらつしたか、それがわかりませんでした。野島さまから求婚して下さつてから、やつと合點がゆきました。それで私は反つて安心もいたしました。

今になつてあなたが野島さまのことをいろいろおほめになつた理由が、すつかりわかります。あなたの外國へいらしつたことの表と裏の理由もわかります。

今でもあなたは野島さまのことを心配していらつしやる。野島さまへの義理をかゝない爲に、私を捨ててもいゝやうに思つていらつしやる。私はあなたの義理の固いのを尊敬いたしますが、もつと私のこともお考へ下さい。さもないと私が可哀さうです。野島さまはきつと私を失つても、もつと適當な方におあひになるにちがひありません。その證據には私を私のまゝにはお愛しになれないのでもわかります。第一、私の心に野島さまの愛が少しもひゞかないのでわかります。大宮さま、あなたは私をおすてになつてはいけません。私はあなたの處に歸るのが本當なのです。大宮さま、あなたは私をとるのが一番自然です。友への義理より、自然への義理の方がいゝことは「それから」の代助も云つてゐるではありませんか。どうぞ、私をすてないで下さい。私はあなたのものです、あなたのものです。私の一生も、名譽も、幸福も、誇りも、皆、あなたのものです、あなたのものです。あなたのものになつて初めて私は私になるのです。あなたを失つたら私はもう私ではありません。それはあまりに可哀さうな私です。私はたゞあなたのわきにゐて、御仕事を助け、あなたの子供を生む爲に（こんな言葉をかくことをお許し下さい）ばかりこの世に生きてゐる女です。そしてそのことを私はどんな女權擴張者の前にも恥ぢません。「あなた達は人になれなかつた。だから男のやうに生きていらつしやい。私は女になれました。ですから私は女になりました」さう申して笑ひたく思ひます。二人で生きられるものは仕合せ者です。ね、さうではありませんか。大宮さま。

九

あなたの手紙を見て僕は次の様な對話をかきました。僕の心のある所をお察し下さい。

「A。お前は何を考へてゐる。あの人のことか」

「さうだ。あの人のことだ」

「君は、君の親友のことは考へないのか」

「それを考へなくていゝのなら、僕は何を苦しまう。僕は二つの間に立つた。僕はどつちかを失はなければならない。僕は友のことを考へる。いや友のことは考へすぎた。そして僕はあの人の價値を出來るだけ、ひくく見ようと努力して來た。自分があの人を好きになつてはたまらないと思つたので。しかし正直に云へばあの人を好きになつたのは友達より先だつたかも知れない。しかしその時、自分はたゞ一目見ただけで、愛らしい女だと思つただけで、僕はそれ以上思はなかつた。そしてその女と結婚したいなぞとは夢にも思はなかつた。たゞ從妹と從妹の家の庭で繩とびしてゐるのを見ただけで、その女の名もその時はきかなかつた。しかし友からその女を戀してゐることを聞かされた時自分はその女ではないことをのぞんでゐた。そしてその女と云ふことが疑へなくなつた時、自分に少しがつかりした。しかし自分はそれを意識するのを恥ぢた。自分はその女のことをまださうひどくは思つてゐなかつたのだから。そして、その女をその後二三度見はしたが、たゞその時、可愛らしい娘だと思うただけにすぎなかつた。

處が友が來てその女のことをほめちぎる。自分も何か暗示を與へられたやうな氣がした。しかし自分は友の戀してゐる女だ、自分に要はないと思はうとし、又思つてゐた。そして出來るだけ冷淡にし、好きにならないやうに注意した。しかしその後ある夏、その女とKであつた時、自分はその注意がやゝもすると力のなくなることを感じた。自分は之では困ると思つた。それでその女をさけるやうにした。たゞ逢ひたい氣はやゝもするとした。そして或る月のいゝ夜、友と歩いて、いろ〳〵未來のことを話してゐる時、自分は美しい聲の歌をきいた。その聲はへんに自分の心に響いた。自分はその女を一目見たかつた。しかしその女はきつと醜い女だらうと思つて見た。その時友はあれはあの人だと云つた。自分はその時、一種の嫉妬に打たれた。同時に用心しなければと思つた。そしてその人は、矢張りその人だつた。遠慮して、自分達の足音が聞えると歌ふのをやめた。そして人かげに立つてゐた。だが自分は、目のいゝ自分は、その女が自分を見てゐることを感じた。眼の近い友にはそれはわからなかつたらう。自分は一寸釘づけにされたやうにぼんやりした。だが自分はすぐ意識をとり戻した。この女は友の戀人だ、自分が愛することは禁じられてゐる、すきになつてはいけない、さう思つた。それで一緒に散歩しないかとその兄にすゝめられたが、自分は斷つて一人わかれて歸ることにした。すると友も一緒について來た。二人は暫らく默つてゐた。しかし友は傲るやうに見えた。自分はその時から、やゝもすると、ある謀叛心が出かけた。しかし自分はそれを恐れた。それで反つて友にもつと積極的に出ることをすゝめた。その晩はへんに胸がおちつかなかつた。早くおちつきたい、あの女に無頓着になりたい、そして友人の妻としてのみ、あの女を見るやうにしたいと思つた。自分はある所までそれに成功して、道徳的偽りを自分でさへ感じた。そして自分はその友の幸福の爲に働きたいとさへ思つた

「しかしその爲には働かなかつたのか

「私は知らない。働いたらしくもある。しかしその結果は働いたことにならず、反つて自分をその女に立派に見せることに役立てたらしい。ともかくその女がその友を愛してゐてくれれば問題はなかつた。自分は自分のその女にたいする感情を厚意の程度でとめておけたらう」

「お前にはそれが出來たか」

「出來た。出來ないにしろ、二人がお互に愛してゐ、女が自分の存在に無頓着ならば、自分はどうすることも出來なかつたにちがひない。だが自分はその後間もなくその女が自分に本當に厚意をもつてゐることを知つた。その女は自分を見ると顏色がかはり、ぼんやり自分と二人は顏を見合せることが多くなつた。自分は一人女から離れてゐても、自分達の目はよく出逢つた。自分はそれをこばまうとした。しかしそれは自分の力にないことだつた。自分はその女の愛を友の方に向けたく思つた。事實向いたら心細かつたかも知れない。事實、何處かで安心し切つてゐたのかも知れない、しかしともかく意識的には出來るだけその女をさけ、そして友に對する務を果さうと思つた。しかしそれは何にも役にたゝなかつた。そしてやゝもするとあぶなくなつた。不安を感じた。友からその女を横どりしたい氣にもなつた。このまゝでゐたら困ると思つた。自分は人間を愛することに不安を感じる男だつた。人間の心はいつかはるかわからない。人間はいつ死ぬかわからない。自分はその上、尊敬する友と女の奪ひあひをするのがあさましく見えた。その女のまはりに多くの男があさましく集つてその女を女王のやうに大事にして、肉慾をかくした衣をきた狐の仲間

入りするのがいやでもあつた。自分はまだ女につかまり切つてゐない。今ならまだ自分は友にその女をゆづることが出來る、しかしこのまゝでゐてはあぶないと云ふことを益々感じた。自分は何度その女のもとを去らうと思つたか知れない。女の爲にも、自分の爲にも。自分が去れば女は自分のことを忘れるだらう。そして野島のことを思つてくれないとも限らない。自分はまだその女なくも生きてゆける。しかし友にとつてはあまりひどい打撃だ。しかも友は自分に前からその戀を打ちあけ、自分にたより、信じて安心し切つてゐる、そしてむしろ感謝してゐる。男が自分を信じるものを裏切ることが出來るか。出來ない。自分は友の爲に去るのが本當と思つた。それはその女が來て自分と一緒にトランプした晩だつた。その晩よくねむれないで朝早く起きて散歩にいつた。友は既に濱に出て何か考へてゐた。自分は矢張り友の方が本氣だと云ふことを感じた。そして友が前の晩のことを極端に感じてゐるのを見た時、自分は自分の友達甲斐のないことを非常に恥じ、友の爲に本當に働きたい氣になつた。友はよろこんでゐた。そして自分に感謝してゐるやうに見えた。しかし友もあることに感じてゐたやうに見える。その女が君を尊敬してゐたと云つたら、「君の方をなほ尊敬してゐるかも知れない」と云つた。自分は『勿論』とも思つたが、それをうちけして友を安心させ、なほよろこばした。しかし自分は自分の空々しいのに氣がとがめたので、その女のことをほめ、君が戀したのは尤もだと云ひ、自分も君の戀人と思はなければ心を動かされたかも知れないと云つた。自分はそれから益々意識して逃び出した。自分は友の爲につくす氣でゐたと思ふ。しかし二分は、三分かも知れぬ、もしその女が自分を本氣に愛してゐてくれるならば、それは友にお詫するが、本當か、奪ふのが、本當か、それがわからなくなつた。「よし、もう君がその女を戀しだしたことも、友につくさうとした心もわかつた。それで君はどうしようと云ふのだ。それが聞きたい」僕はもう少し強く友の爲に盡し、女の爲に女を思ひ切らうと努力した。しかし今その點について自慢しようとは思はない。自分は口と筆と手紙とでは友の爲に盡した。しかし心では自分はその女のことに益々無頓着になれなくなつた。こゝへ來ても自分は女のことをすつかりは忘れることかなかつた。そして何かで、友がその女のことをあきらめてくれたらと思つたり、ある時はふと友の死を考へたりした。友が死んでくれたらと思つておどろいたことも皆無とは云へない。獨身の男は女のことを空想しないわけにはゆくまい。そして自分はいくら考へてもその女のこと切り考へられなくなつてしまつた。しかし自分は西洋へ來て一年半程たつて、稍忘れかけた。勿論、時々は隨分淋しくつて、その女のことを思はないでよさうと思ひつゝ、思ひ出しても見たが、自分は戀したとまでもはつきり云へない氣でゐるのだから、たゞ他の女のことを考へることを禁じられてゐるのでその女のことばかりつい考へるやうになつたとも云へるのだ。ともかく自分はその女のことを少しは忘れることになれて來た、いや、思つてある處でとめることになれて來たと云ふのが本當かとも思ふ。處が其處に思ひがけなくその女から手紙が來た。そして寫眞まで來た。そして露骨に友達を嫉び、もつと露骨に好意を持つてゐてくれるのだ。君よ、それでも僕が心を動かしてはいけないのか。自分はそれでも戰つて見た。しかし冷たい手紙を出したあとではとり返しのつかない氣がした。そして女からくる手紙が少しでもおそいと僕はとり返しのつかないことをしたやうな氣さへし、友達をうらみたい氣と、

あやまりたい氣と、兩方した。僕はもう友達に拂ふものは拂つた。あとは自然に任せるより仕方がないとも思つた。勝手にしろ、なるやうになれ、どつちにいつても、自分は自分の一生をよりよくする。さうは思つても見たが段々女を失ふことのつらさが强くなつて來た。殊に寫眞がいけない。それがへんに生きて見える。自分は寫眞を破るか、誰か西洋人にやらうかと思つたが、その勇氣はなく、又それは女にたいしてもすまぬことの氣がした。そして仕事をする時、ついその寫眞を机の上にかざるくせが出來、どうかするとそれに接吻さへして見たくなる。もう萬事きまつたと自分では思つた。之が罪ならば罪でもいゝとも思つた。しかし自分は友のことを思ふと、同情しないわけにはゆかない。自分が女を失ふことのつらさを知るにつけて友のつらさがわかる。友からの手紙にはその氣持が露骨にかゝれてゐる。こゝに一つ最近に來た友の手紙がある。その一部をよんで見よう。

「僕は淋しい。僕は仕事にかじりついてゐる。無理にも仕事にかじりついてゐる。そして自分の淋しさに打ち克たうと思つてゐる。しかし淋しい。自分は毎日うろつきまはつてゐる。ゆきたい處も、ゆく處もない。郊外の田圃や、雜木林の中を歩いたり、小川のふちに腰かけこぼんやり水を見たりしてゐる。そしてやゝもすると泣きたくなる。自分は本當のひとりぼつちだ。君がゐてくれたらとよく思ふ。本當に失戀すべきものではないと思ふ。子を失ふ母よりもつとつらいやうに思ふ。自然は何の爲に人間にこんな淋しさを與へるのだらう。人間はなぜ又この淋しさを耐へなければならないのだらう。自分は鍛へられてゐるのだと思はうと努力する。だがつらすぎる。しかし自分は自棄は起したくない。そして益々人生と仕事にしがみつく。美しき彼女よ、自分を憐れめ、微笑の日光を一寸でもいゝからあててくれ。僕の生長力は凍えさうだ。君よ、僕を慰めてくれ。僕は淋しさに耐へ兼ねてゐる。無理に勇氣を起さうとしてゐる。君よ、どうか僕に勇氣を與へてくれ。君からも手紙が暫らくこないのでなほ皆から捨てられたやうな氣がする」」

「それなのにそのお前がその友達の戀人をつまり奪ふことになるのだな」

「さうだ」

「それではお前は何と友達に返事を出した」

「僕は默つて、石膏のベートオフェンのマスクを送つてやつた。そして友のかいた短かい脚本を一つ譯して佛蘭西の友の關係してゐる雜誌に出してもらふことにしたことと、その友がそれをよんで感心したことを報告してやつた。それがせめてもの罪亡ぼしと思つた」

「友はなほお前の友情のあついのに感心するだらう」

「それを思ふと、なほすまない氣がする。しかしさうするより他、仕方がない。友は必ず今度のことで本當に鍛へられるだらう。友は參り切つたり、自棄を起したりする人間ではない。人類、神と云ひたい所だが、人類は彼を本當に鍛へて偉大なる仕事をさせようと思つてゐるのかも知れない」

「それならお前は女を得て、仕事を失ひ、友は女を失つて仕事を完成すると云ふのか」

「さうは云はない。僕は女を得て、益々仕事をする力を得る。彼は女を失つて益々眞劍になる。兩方が、日本及び人類にとつて有意味であることを、自分は切にのぞんでゐる」

「お前も女を失つたらさぞ眞劍になるだらうな。その方がお前の仕事にはよささうだな」

「さう云ふな。俺はもう女を失ふわけにはゆかない。お互に愛してゐる。一人では生きられなくなりつゝある。恐ろしい勢ひで俺は二人で

なければ生きられなくなりつゝある。二人で生きるものは仕合せだと云ふ言葉は本當だ」

「それは誰が云つたのだ」

「あの人が云つたのだ」

「あはゝゝゝ」

「いくら笑つても本當のことは本當のことだ」

「お前は友情の厚い男だ」

「何とでも云へ。俺は運命の與へてくれたものをとる。恐らく、友は最後の苦い杯をのむことを運命から强ひられて其處で彼は本當の彼として生きるだらう。自分は女を得て本當の自分として生きるだらう。それは自分達が選擇してきめることの出來る道ではなく、强ひられて自づと入る道である。友は得られないものを强く求めた爲に何か他のものを得、俺は求めることをこばんだが、求めるものを得るくじを選んだ。俺はそれを幸福と許りは思はない　更に進軍ラッパがなりひゞいたのだと思ふ。彼は孤獨の道に神の言葉をきく。俺のわきには天使が居て、俺をなぐさめ、俺に勇氣を與へてくれる。それはすべて自分の力で得たのではない。意識して生み出したものではない。天與のものだ。自分は反つて今後の「彼」がこはい。しかし自分も負けてはゐないつもりだ。天使よ、俺が爲に進軍のラッパを吹け。今は人類が、立ちあがらなければならない時だ　自分達精神的に働くものは眞劍にならなければならない時だ。自分達、フランス人も、イギリス人もドイツ人も、イタリー人も、支那人も、印度人も自分達の仲間にゐる。皆若くつて眞劍だ。そして一つ目的、人類の爲につくしたがつてゐる。皆は自分を信じてくれる。天使よ、我を益々我たらしめよ。このよき時に、生れたる我を無意味に死なすな。汝の寫眞は、それ等の人の賞讃を得てゐる。何處にも、馬鹿はゐる、巴里にも隨分ゐる。だがそのしたに生きてゐる世界各國から集つてくる若々しい血を直接に感じる時、自分達は同じく兄弟だと思ふ。日本によき人間のゐることを彼等は本當に喜んでくれる。彼等の上に祝福あれ。

わが愛する天使よ、巴里へ武子と一緒に來い。お前の赤坊からの寫眞を全部おくれ。俺は全世界を失つてもお前を失ひたくない。だがお前と一緒に全世界を得れば、萬歲、萬歲だ。

十

あなたのお手紙は本當に驚喜させました。ありがたう、ありがたう。私は之から早速武子さんの處にゆきます。兄に話しましたら、兄も大よろこびで贊成してくれました。兄はあなたを實に愛してをります。しかし兄も氣の毒よ。武子さんに一寸氣があつたのよ。しかしもうすつかりそのことは忘れてをりますが。野島さんだつて、今にきつと私と結婚しないでよかつたとお思ひになつてよ。いゝ方がいくらでもいらつしやるのですから、結婚でもなさつて、お子さんでもお出來になると。だからあんまり野島さんのことはお氣になさらない方がよくつてよ。あなた以外の方が私を愛して下さるなんか不自然ですわ。何しろ私はもう夢中にうれしいのです。本當に巴里へゆきますよ。どうしても。母親には兄から話してもらふことにしました。母はきつとよろこびますよ。武子さんと御一緒ならこんなにうれしいことはありませんわ。ですけど武子さんに、私はまだ何にも話して御座いませんのよ。ですから少しきまりがわるいのです。ですけど、私はもう度胸がきまりましたわ。世界中の人が笑つたつて、そんな呑氣者も居ないでせうが、私はもう平氣ですわ。私の寫眞全部お送りしますわ、可笑しいのを。笑つて頂戴。しかし皆さんにはいゝのだけ見せて頂戴。私をそんなに賞めて下さるのはあなた許りよ。あんまり本物を見てもがつかりなされない程度で

話して頂戴よ。お目にかゝれたら私うれしくつて泣き出してよ。もうあなたとは少しもはなれなくつていゝのね。何處へでもついてゆきますわ。私はなんでも云ふことをきゝますから本當に可愛がつて頂戴。私はどんな洋服をきたらいゝのでせう。武子さんに御相談しますわ。之から武子さんの處へゆきますわ。歸つて又先をかきますわ。兄が今やつて來まして、母に話したら、母もよろこんで承知してくれたさうよ。私どうしてから仕合せなのでせう。思ひ切つて手紙をかいてよかつたわ。なんでも正直にぶつかるだけはぶつかつて見るものね。用心に用心して見て、私は二年間考へましたわ。隨分考へましたわ。それでもうまちがひないと思ひましたの。偉いでしよ。之からゆきますわ。

今行つて歸つて來ました。武子さんはもう知つていらつして、私のくるのを心待ちしていらつしたのよ。同時に出して下さつた御手紙が武子さんのお家は市内なので、少し前についたのよ。武子さんはびつくりしたけど、うれしかつたと云つて下さつてよ。本當に武子さんはいゝ方ね。私ないてしまひましたわ。二人であなたのことをほめて、ほめちぎつて話しましたわ。御一緒にルーブルにいつてモナ　リザの前に立つて、あの笑ひ顏の眞似しつこすることも御約束しましたの。

芝居や、音樂會にも一緒につれていつて頂戴ね。オペラも。あなたと御一緒に何の遠慮もなく歩けると思ふと、私は本當に、本當に、本當にうれしいのよ。なんでも御一緒に見たり聞いたり、話したり出來ますのね。尤も私は佛蘭西語はちつともわかりませんわ、英語だつて何にもわかりませんわ。ですが、あなたが外國の方と外國語で話して、愉快さうにしていらつしやるのを見ると、私もわかつた氣になつて一緒にトンチンカンな所で笑ひますわ。私は本當に考へただけで笑ひますわ。

本當に本當にあなたのやうな方が、この世にいらつして下さつたことはよかつたわ。私神樣に出來るだけ御禮申しますわ。私も出來るだけ立派な人間になつて皆さんの前に立つても恥かしくない人間になりますわ。本當に何處の國の方でもいゝ方はよろしいわね。あなたをほめる方は皆いゝ方よ、私はあんまりうれしいので何をかいたかわかりませんわ。いや味な所があつても許して頂戴。もう二ケ月たつと日本をたつのよ。あなたのいらつしやる處なら、何處だつてちかいわ。ありがたう〳〵。

十一

わが友よ。

自分は二人の手紙をこゝに公にする。そして君の面前にそれをさしつける。事實をそのまゝさしつける。自分は君の神經をいたはつてこの二人の手紙をかきなほして、君に見てもらはうかと思つた。しかしそれは反つて君を侮辱することになることを知つた。自分は君を尊敬してゐる。君は打ちくだかれゝば打ちくだかれる程、偉大なる人間として起き上つてくれることを僕は信じてゐる。そして露骨に事實を示せば、君は反つて怒ることによつて悲しみに打ち克つてくれると思ふ。僕は又君につまらぬ同情をしようとは思はない。又自分の君にたいする冷酷な態度を甘く見せようとも思はない。自分はたゞ事實を云ふ。

それに就て自分は何も云ひわけしない。いや云ひわけしたいことは既にかいた。こゝでは何にも云はない。たゞ自分はすまぬ氣と、あるものに對する一種の恐怖を感じるだけだ。自分はあるものにあやまりたい。そして許しをこひたい。一方自分は自分を正當だと思ひ、やむを得ないと思ふ。そして自分のとつた態度を必然の

やうな氣もする。だが何かにあやまりたい。自分は君に許しを請はうとは思はない。それはあまりに虫がいゝ。君はとるやうにとつてくれればいゝ。君は君らしくこの事實をとつてくれるだらう。自分の方は勿論君を尊敬し君にたいして友情を失ひはしない。しかしそれは反つて君を侮辱することになることを恐れる。

事實は以上のやうである。かくて僕は杉子さんと結婚することになるだらう。この事實にたいして君が自分達を如何やうに裁いてくれても自分達は勿論甘受する。自分は云ひたいことが随分あるやうだ　しかし僕から責められたり、攻撃されたり、侮蔑されたりするのは不快に思ふであらう。尤も僕達はもう十分に不快を與へすぎたであらう。今になつて遠慮するのもをかしなものだ。だから正直に云はう。自分は明日からヴエニスにつく杉子の一行を迎へにゆくわけだ。二人は遠くから、許してくれるならば君の幸福を祈る。そして君が、日本、否世界の傲りになるやうな人間になつてくれることを信じ又祈る。

十二

野島はこの小説を讀んで、泣いた、感謝した、怒つた、わめいた、そしてやつとよみあげた。そして自分の机の上の鴨居にかけてある大宮から送つてくれたベートオフエンのマスクに氣がつくと彼はいきなりそれをつかんで力まかせに引つぱつて、釣つてある糸を切つてしまつた、そしてそれを庭石の上にたゝきつけた。石膏のマスクは粉微塵にとびちつた。彼はいきなり机に向つて、大宮に手紙をかいた

「君よ。君の小説は君の豫期通り僕に最後の打撃を與へた。殊に杉子さんの最後の手紙は立派に自分の額に傷を與へてくれた。之は僕にとつてよかつた。僕はもう處女ではない。獅子だ。傷ついた、孤獨な獅子だ。そして吠える。君よ、仕事の上で決闘しよう。君の惨酷な荒療治は僕の決心をかためてくれた。今後も僕は時々淋しいかも知れない。しかし死んでも君達には同情してもらひたくない。僕は一人に耐へる。そしてその淋しさから何かを生む。見よ、僕も男だ。參り切りにはならない。君からもらつたベートオフエンのマスクは石にたゝきつけた。いつか山の上で君達と握手する時があるかも知れない。しかしそれまでは君よ、二人は別々の道を歩かう。君よ、僕のことは心配しないでくれ、傷ついても僕は僕だ。いつかは更に力強く起き上るだらう。之が神から與へられた杯ならばともかく自分はそれをのみほさなければならない」

野島はそれをかき上げると彼は初めて泣いた。泣いた、そして左の文句を泣きながら日記にかいた。

「自分は淋しさをやつとたへて來た。今後なほ耐へなければならないのか、全く一人で。神よ助け給へ。」

師よ師よ

「師よ、師よ
何度倒れるまで
起き上らねばなりませんか？
七度までですか？」
「否！
七を七十倍した程倒れても
なほ汝は起き上らねばならぬ」

土地

一

自分は一九一八年十二月の或日朝早く川岸に出た。清い川の流れは岩にぶつかり、泡を立てて流れてゐる。ある岸の岩の上に自分は立つた。自分は顔を洗ひ、うがひをつかつた。そして川向うの城の土地を見て祈つた。

日はまだのぼるのに間があつた。其處は四方山にかこまれてゐた。自分はあたりを見まはした。誰も居ない。

自分は曉方の空氣につゝまれた、その清い水と、清い山と、空を見た。自分は跪きたい氣がした。自分達の仕事はこの土地で始められる。神よ、守護してくれ、あなたの助けなくしてこの仕事は出來ない。

二

自分はこの仕事を始めようとしてまだ半年たつかたゝないかだつた。幸運は自分につきまとつて、この仕事を祝してくれた。

世間の人はこの仕事は必ず失敗すると云つた。しかし友は信じてくれた。仲間は一人ふえ、二人ふえした。一月たつかたゝないかに百人以上の熱心な仲間を得た。

東京で初めて仲間にあつた時は五六人だつた。しかも四度目にあつた時は三四十人になつた。或日書留の郵便が來た。あけて見ると千圓の小切手が入つてゐた。

自分達は何かに感謝した。

よき手紙がくる度に妻はよろこんで、自分にとびついた。自分は喜びの上に決心を今更に強めないわけにはゆかなかつた。

三

自分達は何をしようと云ふのか、新らしき社會をつくらうと云ふのである。其處では皆が働ける時一定の時間だけ働くかはりに、衣食住の心配からのがれ、天命を全うする爲には金のいらない社會をつくらうと云ふのだ。その上に自由をたのしみ、個性を生かさうと云ふのだ。

そんなことが出來るか？

出來る！

それが自分達の確信であり、その確信のもとに進まうと云ふのだ。

それには先づ土地が必要である。土地を共にする爲に、先づ我等は一定の土地を買はなければならない。

土地をたゞにする運動をするかはりに、少しづつでも土地を買つて、共同のものにし、たゞと同じだけの實をあげたいと思つた。

四

土地を何處にきめるか、それが第一の問題であつた。

初め東京から日歸りの出來る處を選まうとした。思想上に働くには日歸りの出來る處の方がいゝやうに思へたので。四五ケ處よささうな處を敎へてくれた。無理にも氣をその方に向けようと思つた。しかし何となく心細くなる許りだつた。

大體見當をつけて、參謀本部の五萬分の一の地圖を買つて、よささうな處を調べて見た。しかし心細くなる許りだつた。

人はそろつた。最初に住む人は殆んどきまつ

た。そして自分達の内の勢ひはます〳〵熱して來た。勢ひは自分達をまきこんで、どつかにつれてゆきたがつてゐる。しかしおちつく土地はきまらない。自分は毎日土地のことを考へた。

運命によつてきめてもらひたく思つた。自分の理性は迷信だと思はうとするが、自分はこの仕事がまちがつてゐない以上、何かでよき地を偶然、神から見ては必然であつても、人間から見ては偶然に與へられさうな氣がしてゐた。

近くにいゝ土地がないときまると、段々遠い處でもいゝと云ふことになつた。

正直な話、金さへあればどうにかなる。しかし金はいくら多くつても五千圓は超さないのだ。それもあぶないのだ。自分達の住んでゐる家が賣れるのをあてにしてゐるのだから。それはいつ賣れるかわからない。

かゝる自分達であつたから、何氣なく入つて來た千圓はなほありがたかつた。

自分達の仕事が正しければ、そして運命に甘えすぎさへしなければ金も入つてくると云ふのが自分の信念であつたか、

ともかく土地の安い處を捜さなければならない。

五

北海道と云ふことが第一に頭に起るのは自然である。しかし自分には北海道は禁物であつた。父は北海道で肺をやられて死んだ。それからもう一つは自分の初戀の女がゐることだ。自分はその女のことは何とも思つてゐない。しかしその女のゐる北海道は自分には禁物なのである。説明は他日する。

しかしそれも自分達の仕事の爲とあつては問題にすべきことではない。しかし北海道で仕事を始めるとなれば、大農式にやることが必要になり、そして我等には金が不十分だ。この理由も大した理由にならないかも知れない。しかし自分は北海道はどうも氣が向かなかつた。人がすゝめてもあいまいな理由で反對した。

ついで頭にくるのは日向である。

六

その時分、ある人が來た。その人はもう四十をこしてゐた。方々のことを知つてゐる人だつた。その人が日向のことを話した。友達に一緒に日向に住まないかとすゝめられたが、あんまり遠いのでやめた。しかし日向はいゝ處ださうですと云つた。

自分はそれを聞いた時、遠いなと思つた。別に氣は動かなかつた。しかしその晩急にのり氣になり出した。妻ものり氣になつた。何となくあかるい感じがして來た。

翌日友に話した。友も賛成した。其處で自分は日向にきめた。

日向の何處といふ事はきめられなかつた。しかし日向の何處かにしようと云ふことはきめた。それから日向に行つた人に話をきいたり、本をよんだり、地圖を送つてもらつたりした。

自分はその時、東京から汽車で一時間程はなれた田舎にゐたから。

その時、二十萬分の一の地圖と、五萬分の一の地圖を一枚づつ送つてくれた。その五萬分の一の地圖を見た時、自分達の土地はこの内にあるのだらうと思つた。しかしさう思ふのは例の迷信だと思つた。しかし事實はその通りになつた。自分が立つてゐる川岸はその地圖にちやんとのつてゐる。

七

しかし自分は話を前に戻す。自分は皆に日向に土地をきめたことを話した。東京に殘る友達

は皆違すぎると云つてくれた。一緒にくる仲間は皆賛成してくれた。

自分の氣になるのは母のことだつた。

自分は母の性質を知つてゐる。母は又自分の性質を知つてゐてくれる。

母は反對しない、しかし淋しがるだらうと思つた。母は運命には從順で辛抱づよく與へられたものを受けとる質で、女のなかでもその點は圖拔けてゐる。

「かうきめました」さう云へば、

「さうかい、立派におやり」さう母は云ふにきまつてゐる。自己の淋しさによつて息子の仕事を少しでも束縛することを母は罪だと云ふことを知つてゐるから。

そして自分が一たん云ひ出した以上はあとにひかないことも知つてゐるから、そして母のことも自分が十分考へた上できめたことも母は知つてくれるから。

「男の子はその位、しつかりしてゐなければいけない」

母はさう思つて一方よろこびながら、淋しさに耐へてくれる女だ。

自分はそれを知つてゐて淋しさを與へることはすまないと思ふが、仕方がないと思つた。

八

母には八人の子があつたが、皆死んで、自分と兄と、末子二人がのこつただけだ。父は僕の三つの時に死んだ。

その兄もいつ西洋へ行くかわからない。外交官だから。兄が西洋へゆけば六十七の母は十になる孫と二人東京にのこるわけだ。孫がゐてくれるので助かるが、孫はまだ相談相手にはならない。世話することは出來ない。自分が電報を見ても四日日位でないと歸れない處に永遠に住むことになることは何と云つても母には淋しいにちがひない。自分も母のことを思ふとつい涙ぐむ。

しかしそんなことを云つてゐられる仕事を自分はするのではない。

誰をも幸福にしたい爲に、不幸にしたくない爲にこの仕事は始められる。しかしこの仕事が完成するまでには可なりの決心がいる。

自分は決心したものだ。その位のことにおどろくわけにはゆかない。

九

母にうちあけた時、「せめてもう少し近い處だといゝのだがね」と云つた。しかしそれ以上は云はなかつた。兄も、日歸りの出來る處にはいゝ處がないのか、と云つた。しかしそれ以上反對はしなかつた。

自分は兄から二千圓寄附してもらふことにした。

この仕事は三千五百圓位で始められることになつた。旅費も入れて。

この金は多いと思ふ人には多いかも知れない。少ないと思ふ人には實に少ないであらう。しかし自分は腹の底で安心してゐた。そしてその金の内に、ありがたい金を多くふくんでゐるのを感謝し、そして決心をつよめればいゝのだ。

十

自分達は自分達の仕事の爲に雜誌を出してゐた。それに日向に土地をきめたやうにかいた。それを見て、日向の知らない人から、小林方面が一番いゝだらうと知らせて來た。自分はよろこんでその手紙を皆に讀んで聞かせた。自分達の仕事を世間的に知らせようとは思はなかつた。むしろ自分は世間が知らぬ内に、ある處まで仕事をしておきたく思つた。

「桃源自づから道をなす」と云ふ言葉がある。

自分は自分達の雜誌では自分の信ずることを他を顧みずに云ふ。しかし自分達の仕事を本當に知らないもの、本當に知らうとは思はないものにはまだ知らす必要はないと思つてゐた。何しろ、ごく小さい所から仕事を始めるのだから世間的になる必要はなかつた。たゞ眞に要求を共にするものだけの眞心を必要にしてゐた。

處がふとしたことから、新聞記者をしてゐる友の耳に入つた。そしてそれが仲間の人に知れた。そして思ひもよらない時に新聞種になつた。そして人々の好奇心にそれが投じた。

さうなればさうなるので自分は例によつて「それもよからう」と思つた。どつちがいゝかは知つてゐるものがあれば神だけだ。自分はどつちに行つても足を浮かさず、確信の道をこつこつ歩けばいゝ。

自分はどつちにころんでもその內から最上のものをとるやうに骨折ると云ふ主義だ。自分で好んでは世間的にはしない。しかし世間的になつてしまつた以上、それが反つていゝのかも知れない。

自分はそれで華々しいことをしたがる程馬鹿ではない。世間の好奇心がなくなる時分にそろそろ芽を出す位の根氣はある。

誤解したければ誤解するのもいゝ、それも面白いだらう。出來ないと云つてくれるのは反つていゝ。誰にも出來ることなら自分は出しやばりはしない。

自分は凡てか零かの主義者ではない。あれかこれかの主義者でもない。自分は自分を人類の意志からはづれさゝない限り兩刀遣ひだ。

愛と正義とに常に味方したい。眞理からは少しもはみ出たくない。本當になつて步けない道は一步でも步くのを恥とするものだ。が運命から與へられるものは甘受して、それを生かせるだけ生かす。何が來てもその內には何かとるべきものがある。敎はるべきものがある。いやな言葉だが利用すべきものがある。恐れてはゐない。

十一

九月の十四日に自分達は演說會を東京でした。なぜこの日を特別にかくか。それはその二ケ月あとの十一月の同じく十四日に、すでに土地がきまつたからである。

自分は九月の二十日頃、東京を立つた。仲間は元氣よく送つてくれた。自分は感謝した。

濱松により、妻の里の福井により、それから信州を廻つて、京都、大阪、神戸によつた。福井の他は至る處で饒舌つた。

土地を見る仲間は自分をよせて三人だつた。妻は神戸から實家に一人で歸つた。九州に入る時は隨分うれしかつた。目的地に近づくやうに思つた。中國の途中でも二人の兄弟に逢つた。いたる處未知の兄弟姉妹に逢ふのはうれしかつた。皆、よき人であつたことを感謝した。かの金を寄附してくれた人の家にもよつた。その家が小さく、生活が質素なのでなほ嬉しく思つた。その他熱心な人々に逢ふと、涙もろい自分はすぐ涙ぐんだ。

自分達は希望に燃えて九州に入つた。福岡でも饒舌つた。兄弟にも逢つた。自分達はそれから迂廻りに佐伯へ出た。其處まで一人の兄弟は福岡から送つてくれた。そして其處から一人の兄弟が土地搜しの仲間に加はつた。かくて自分達四人は船で日向に入つた。

十二

十日の午後六時頃船は日向の土々呂についた。其處で自分達は初めて日向の土地を踏んだ。我等の上に幸あれ。

我等が濱の砂の上に立つた時、一人の青年が

自分達の雜誌をもつて立つてゐるのを見た。自分はそれを見るとすぐちかづいて行つた。

果して小林方面の土地を知らせてくれた人だ。この人は土々呂から一里半程離れた處の小學校の先生をしてゐた。今日で二日の間毎日一里半程の處を迎へに來てくれたのださうだ。自分達はよろこんだ。そして氣丈に思つた。自分達はその晩延岡に泊つた。

十三

その晩小林方面の話をきくと、もう他をさがす氣になれなかつた、一直線に小林にゆくことにした。

十四

小林に着いたのは翌々日の晩だつた。その前の晩は自分達は雨にびつしより降られてある町の宿屋に夜遲くついたが、斷られて他の宿屋に泊り、翌日乘合馬車で十何里走らせ、福島から汽車にのつて小林に降りた。

役場の人や新聞記者がどうして知つたか迎へに來た。折角小林についても、もう暗いので、霧島も見えなかつた。翌日郡長に逢ひ、土地のことを聞き、役所の人に案内してもらつて土地を捜した。

それから毎日、捜して歩いた。朝早く出て日がくれて歸つた。出る時は今日こそはと思つた。歸る時は明日こそはと思つた。

何かに祈りたい氣がした。土地の上に跪いて祈り、土地に接吻してよき土地が得られるならば、自分達はよろこんで土地に接吻したらう。

しかし思はしい處はなかつた。

そして毎日自分達に親切にはしてくれるが、何となく敬遠主義をとる村長その他に逢ふと、心細い氣がしないわけにはゆかなかつた。自分達を理解しない人を、利用する、それは何となくぴつたりしないことだつた。その人達の親切に甘えようとする自分達が賤しいやうな氣がした。之も兄弟姉妹の爲だと云ひわけはして見る、しかし心の空虚さは否めなかつた。さう云ふ人につゞけて三度逢つた時は、そして皆に敬遠主義をとられた時は淋しい氣がした。

ある新聞からは我等は若い男や女を迷はすものとして危險視された。しかし小林にゐる二人の人が我等の仕事に厚意を見せてくれた。或日宮崎の若い人から隨分熱心に自分達の仕事を贊成して來た。又東京その他の仲間からはたえず、慰めてくれ、鼓舞してくれた。

それ等に自分達はどの位、感謝したらう。皆をよろこばす土地を得さして下さい、それは自分達の力ではありません、あなたの力です、かう何かに祈りたい。

自分達はその爲に心を出來るだけ清くし、熱心に求めることに骨折つた。その過勞の爲か同行の一人は元來わるかつた目を更にわるくし、あとの話たが遂に盲目にさへなつた。

十五

途中で二人、用があつて一先づ歸ることになつた。一人は信州の小學校の先生で、自分の責任ある生徒を卒業させるまで教育する爲に、一人は佐伯の人で目の養生も兼ね、うちの用もあるので。しかしそれと同時に入れかはりに二人の同志が來、鹿兒島から一人の仲間が三四日遊びに來た。今度はその人達と土地を搜して歩いた。

ある村で親切な有力家にあつて、一寸乘氣になつた處もあつたが、それは其處の村長さんの反對で駄目になつた。その内に自分達は他になければ仕方がないからこゝにしようと云ふ處を一つきめた。しかし其處を本當にきめるまでに

はまだ捜さない方面をさがして見ようと云ふことになつた。そして一たん小林方面を切りあげて妻の方面をさがして見ることにした。

この小林を切りあげようとした朝、自分は母から一通の手紙を受けとつた。それには自分達の仕事のよくゆくことをのぞんでくれてゐた。しかし終りの方に段々目がわるくなつて困ると云ふことがかいてあつた。自分はその時、今度、母に逢ふ時には、それはいつの事かわからない、その時母が本當に盲目になつてゐて、自分の顔を見ることが出來ず、手さぐりして自分に近づき、

「おゝＡか、よく來てくれた」

から云つて目を無理に開かうとし、もう一度顔を見たがりながら、それが出來ず、自分の顔を手さぐりする。

自分はふとそれを想像した。自分はたまらずに聲を上げて泣いてしまつた。

「母の目よ、ひどくならないでくれ」と祈つた。

その時はまだ友の目は安心してゐた。母はまだ盲目にならずにゐる。

十六

小林をたつて宮崎にゆき、其處で新らしく得た兄弟に逢つた。隨分興奮してよろこんでくれた。一緒に方々歩いた。その晩、宮崎に泊つて翌朝、妻驛に行つた。其處で驛長と、町の有志の人に迎へられた。この人に宿屋に案內してもらひ、土地のことを聞いた。茶臼原の孤兒院で自分達の來るのを心待ちしてゐること、其處にたよりになる人のゐることを聞いた。自分達は一道の光を見た。

その人の名だけは書いておきたい。茶臼原の農業の實際の方の主任をしてゐる津江市作と云ふ人だ。その人は我等の土地を得る上に杖とも柱ともなつた人だ。名が津江と云ふのもたのもしい氣がした。市作も惡い名ではない。

その日の午後自分達は二組にわかれて近所のよささうな處を地圖によつて搜した。

自分達は御陵參考地の方に行つた。自分達は參考地を通り越して偶然ある崖の上に出た。

そして不意に限界の開けたのにおどろいた。しかもその景色はこの世のものとは思へなかつた。霞がこめてゐた。其處に無數の山が島のやうに浮いて見えた。その山が皆鋭い輪廓をしてゐて高さが殆んど同じだつた。

この土地を見ればいかにも天孫の降臨しさうな處に思へた。さういふ傳説でも生み出したい處に思へた。之でこそ日向だ。初めて日向にぶつかつたと云ふ氣がした。之は霞の工合が實によかつたせゐであらう。自分達は狂喜した、運がいゝぞと思つた。小林方面は何處も新開地らしく、何處となくおちつきがわるかつた。こゝに來て日向は矢張り日向だと思つた。この美は他にはない。小林方面の美しさは北信州の高原に似て、稍劣つてゐる。しかしこの美しさは、天人が降臨しさうな美しさは他にはない。自分はふとモナ・リザの背景を聯想した。自分はその感じが、この世のものと云ふよりは、夢にちかいものゝ氣がした。この美しさは他の瞬間を見ると消えてしまひさうな氣もした。しかし自分達は希望をもつことが出來た。

いつか此處に小さい書齋でもたてたらと私かに思つた。その時は清い想像が自由に働いてくれさうにも思つた。しかし其處は御陵地の一部らしく、水の便利もよくはなささうで、買へる處はごく少し切りなささうだつた。他をさがして見た。しかしいゝ處はなかつた。それにもかかはらず自分は元氣に宿に歸つた。

他へ行つた仲間はまだ歸つて居なかつた。いい土地でも見つけてくれたか知らんと思つた。

しかし二人は失望して歸つて來た。

十七

翌朝孤兒院に行つて、方々案内された。そしてこれまでになる苦心を聞いた。二度しくじつて途中で引きあげた。三度目に大決心をして來てやつとものになつた話を聞いた。當時の不便さはどの位ひどかつたか、想像の外だつたらうと思ふ。土地は三百町歩以上で、その廣いのに感心した。家も方々に建ち、小學校や、農學校も出來てゐた。馬も牛も澤山ゐた。最初に來た時植ゑたと云ふ松ももう立派な材木になつてゐた。

自分達も二三十年たつたら何か仕上げて見せると、今更に思つた。すべてのことは澤山の人間の勞力のつみ重なりだ。何事も一朝一夕では出來ない。

自分はこの仕事を始めようと思つてから、地上に人間の費した勞働のつみ重なりを今更に注意しておどろくことが多かつた。何を見ても人間の精神と肉體の働きの積み重なりを語らないものがないのに驚いた。それは不可能に見えることをちやんと實現してゐる。

その爲に費された力はどの位であるか知らないが、自分達はその前に驚嘆し、感謝したい氣がする。孤兒院の仕事はそれから見るとおどろく必要がないかも知れない。しかし不便この上ない原野を切りひらいて、ともかく千人以上の人を養ひ、育てて來た土地を見ると、自分達の仕事を顧みないわけにはゆかない。負けてはゐられないと云ふ氣さへした。之を始めた石井氏はもうとつくに死んでゐた。自分は未亡人につれられて墓にお參りした。自分は墓の前に丁寧に頭を下げた。

十八

自分達はこゝである耳よりの話を聞いた。それは或人が自分達の仕事に厚意をもつて土地がもし氣に入つたら提供してもいゝと云つてゐることを聞いたことだ。

この提供の意味は自分達には明りしなかつた。しかしともかく厚意を持つてゐてくれる。暴利をむさぼるわけはない。こつちの事情をさつして、都合のいゝやうに計つてくれるかも知れない。土地をたゞくれるといふ意味にもとれるので、もしさうだつたら、大したことだと思つた。

そして運よく、もう歸つたかも知れないと云はれて内心がつかりしてゐた津江さんが、思ひがけない時に自分達に逢ひに來てくれた。運がいゝぞと思つた。そして孤兒院で晝飯を食つて、津江さんに先づ提供してもいゝと云ふ土地を案内して戴くことにした。

十九

その處は隨分氣に入つた。氣に入りすぎた。山ではあるが、何しろ大きかつた。立派なしつかりした家さへたつてゐた。中腹から清水がわき出し、大きな松の木、百年以上たつたと思へるのが、處々に立つてゐた。山をこえて一方海が見え、一方遠く霧島山が見えた。そしてその下を限りなく清い川が流れて居、其處では近頃、鮎が一晩で二百貫もとれたと云ふ噂を聞いた。

この地が提供されたら、話があまりうますぎる。今迄見たどの土地も足もとにはおよばない。他になければ買はうと思つた土地は、なほ足もとにもおよばない。

しかし自分達が子供のやうに喜んでゐるのを見て、津江さんは氣の毒さうな顔してゐるのに自分は氣がついた。自分にはさうとしか思へなかつた。話がうますぎるだけに何か話にちがひがあるのではないかと思つた。津江さんは持ち主をよく知つてゐる筈なのに、提供すると云

ふ言葉は聞かないやうに云つてゐた。何かのまちがひではないかと云ふ顔してゐた。しかし孤児院でその話をしてくれた人は、いかにもたしからしく話してくれた。

自分達は氣に入りすぎただけ反つて變に不安をうけた。少なくも賣る氣はあるのだらう。しかし少しでも高いことを云はれたら、自分達は買ふわけにはゆかない。

その晩、自分達は兒湯郡の高城に泊つた。皆元氣だつた。しかし變に不安だつた。翌日又他の土地を見に行つた。

そして其日一番あとに見たのが石河内の城だつた。

其處も自分達にすつかり氣に入つた。

其處は擂鉢の底のやうに、四方高い山に圍まれてゐた。そして城は石河内の村とは川をへだてて如何にも別天地だつた。それの三方をかこんで流れる川は昨日の見た川の上流で更に美しかつた。激流の處や淵の處があつた。仲間の一人は、十一月に近かつたが、その川にとび込んで泳いだ。

自分はともかく特色のある土地をのぞんでゐた。最初の土地に何かの點で、比類のないものを持つてゐる必要があつた。

二十

自分達はその土地を見たら、昨日とちがつて初めて氣がおちついた。こゝならまちがひなく買へると津江さんは云つた。そして民有地は三町歩に足りなかつた。土地の人は一反三十圓位で買へると云つた。自分達の金でも安心して買へると思つた。こゝが買へれば滿足すると思つた。昨日の處がよし駄目になつても。

やつとぶつかる處にぶつかつた氣がした。

二十一

しかし話はさううまくは運まなかつた。

提供すると云ふ土地は五萬圓なら賣ると云ふ土地だつた。自分達には手が出せない。そして城は一反七十圓なら賣ると云つた。

自分は少しいやな氣がした。自分は平均五十圓位なら買つてもいゝ氣があつた。しかし折れるにはきまつてゐると云ふ人もあつたが、中々折れて來なかつた。自分達は又土地搜しを始めた。高城の宿屋を根據地にして。

二十二

東京に居る、最初にくる仲間は、もうおちついてはゐられなくなつた。會社に出てゐた人は會社をやめて、土地がきまつたと云ふ電報が來たらすぐ出かけられるやうに用意をして待つてゐる。併し自分達からは中々電報はゆかなかつた。

その内に自分の妻と、仲間の一人の細君がやつて來た。又東京で遊んでゐても同じく金がかかるから、田舍の方が少しは安くつてすむだらうと云ふので仲間の人が、二人來、三人來た。土地がきまらないのに十人餘りの人が集つて來た。自分達は宿屋にゐたが、他の人達は高城の町に一軒の家を借りた。土地を賣る方は益々自信が出來て來た。金は段々無くなつてくる。

その時分流行出した流行性感冒に仲間も、一人やられ二人やられした。丈夫なのは三四人になつた。自分は其處で決心をきめないわけにはゆかなかつた。自分はまだ少しも見ない南那珂郡の方を見て、そしていよ〳〵城がよければ、それにきめよう。

ともかくきめる前に見るだけは見ようと思つた。そして一人の兄弟と、南那珂郡の方に出かけた。

二十三

船で飫肥の方にゆく途中、一人の紳士にあつ

た。その人が新聞で自分達のことを知つて厚意を見せてくれた。そして飫肥へ行つたら郡長に逢つて見るといゝとすゝめてくれた。話のわかる人で、南那珂郡はまだ人のわりに土地が廣すぎ、他縣の人のくるのを歡迎し、人情も惡くないと云つた。

自分達は郡長に逢つて見ることにきめた。一體自分達は今度は隨分方々で郡長や村長にあつた。皆親切によくしてくれたが、敬遠主義をとられてゐるやうな氣がした。しかしこゝに南那珂郡の市木村の村長だけは、わざ〳〵自分に手紙をくれて、よかつたら自分達の村に住んでくれ、いゝ處があるからと知らせてくれた。今度南那珂郡に來たのも、市木村の村長の手紙が原因の一つになつてゐた。

二十四

飫肥に着いたのは晝頃だつた。その日近所を歩いた。立派な杉の林が澤山あるのにおどろいた。翌朝、郡役所に行つて土地の掛の人にあつた。大へん親切に乘氣になつていろ〳〵土地のことを話してくれた。殊に大束村は有望な處だと話してくれた、其處なら何百戸と云ふ村をつくることが出來るだけの餘地が十分あると云つてくれた。

自分達は其處も是非見たいと思つた。その時、市木村の村長さんが其處に來てゐることを聞いた。そして逢ふことが出來た。自分達は運がいゝと思つた。村長さんはまだ若い人で僕達に厚意を見せてくれた。東京にもゐたことのある人で、早稻田を出た人で、なつかしさうにいろいろ話した。自分達は初めて氣樂に話せる村長に逢つてよろこんだ。そしてその日の午後その村長さんと同じ馬車で市木村にゆく約束までした。自分達は希望に燃えた。

この時郡長さんが、用がすんで逢ふと云つた。それで自分一人出かけて行つた。一言二言話した。自分は大束村のことを聞いて見た。しかし郡長は少しも乘氣がないやうに無愛想に答へた。自分はふとその郡長さんの表情を見た拍子に、その郡長と話す氣がすつかりなくなつてしまつた。頭がぼんやりしてしまつた。話がとだえ勝ちになつた。

今迄に逢つた誰よりも、この郡長は自分達を煙たがつてゐることがわかつた。自分達は不得要領にわかれてしまつた。自分達はその日の午後、市木村の村長さんと市木村に行つた。馬車のなかでいろ〳〵話した。文學の話なぞが出た。自分が木地を出して氣樂に話せるので氣持がよかつた。村長もよろこんでいろ〳〵土地の話をして、住むやうにしてくれたら出來るだけ骨折ると云つてくれた。

そして一年内霜の降らない處や、猿のゐる島の話をして、其處には青島にまけずに熱帶植物があり、作物もよく出來ることなぞを話した。

二十五

しかしこゝでも自分達は希望を裏切られた。翌日は隨分よろこんだ。村長が自分で案内してくれた。それに第一土地が安さうだつた。一反十圓以下で買へさうな話だつた。官有地であるが、拂ひ下げのために骨折つてくれると云つた。それに氣候がよく、暖國らしい感じがした。こゝなら友達がしきりとやりたがつてゐるオリブもよく育つであらう。

自分の好きな蜜柑は殊によく出來るだらう。その他いろ〳〵の作物がいかにもよく出來さうに見えた。それに海にも近く土地はまだ隨分餘裕がある。

二人は日ぐれに宿について希望をもつて話した。そしてその晩來てくれると云つて一ぺん歸

つた村長のくるのを待つた。そしていろ〳〵聞きたいと思ふことを聞かうと思つた。
　處が村長はいくら待つても來なかつた。翌日の朝も自分達が立つと云ふのに姿を中々見せなかつた。たつ時、村役場がちかいので宿の人に行つてもらつたら、來たけれども、まるで態度がちがつてゐた。何となく他々しく、土地のことには話をむけなかつた。何かから注意をされたらしく見えた。自分達はその日道案内をやとつて、隨分ひどい道を通つて大東村に出た、そしてその日すぐ自分達は大東村の役場に行つた。そして村長が風邪をひいて家にねてゐることを聞いた。
　すぐ村長の家をきいて、その方に出かけた。

二十六

　大東村は聞いた處よりいゝ處だつた。そしてまだ人間の手が甚だ足りないことを示してゐた。民地に草原が多かつた。すぐ開墾の出來さうなだらかな岡や、平らな小高い處はまだ手がつけてなかつた。四方を山にかこまれてゐる城から見ると、こゝは廣々してゐた。そして有明港が南の方二里許りはなれて美しく眺められた。

たゞふと氣になつたのは戰爭のことだつた。
　それから更に氣になつたことは、南那珂郡は一人の大地主がゐて、それの勢力があたりを支配してゐることだ。その人の意志に逆つては仕事が出來ないで困ると思つた。其處へ行くと城の方は安心だつた。城は木城村にあつたが、その村の勢力家と云へば津江さん位のものだつた。たゞ一寸大きい百姓にすぎない。そして氣の低い、いゝ人で、わかりが早く、少しも人の氣持に逆はない、珍らしい善良な人だ。孤兒院や村の人は、木城村の二宮尊徳だと噂してゐる。疲れることを知らない働きものださうだ。そしてお辭儀の丁寧な人なので皆困る位で、人に仕へても、人を抑へつける人ではない。處が南那珂郡の人は議員で、郡でも、縣でも幅をきかしてゐる。殊に南那珂郡では誰も手向ふ人がない。村長も郡長も一々その人の意を聞かないでは働けないらしい。殊に大東村一帶はその人の勢力範圍なのだ。しかしその人は話のわかる人だと聞いた。ともかくおどろいて許りはゐられなかつた。
　自分達は村長の家に行つて、そして病室に案内された。村長は一見してたのもしい人に見えた。

　そして村長は、何處から來たと云ふので一市木村から今日來ましたと云つたら、市木村からとおどろいてゐた。
　自分達の足の早いことは皆がおどろく。しかも自分は一月以上歩くことを修行した。初めは六七里あると可なりくたびれた。十里以上歩いた時は隨分くたびれた。しかし今は十何里の山路を歩くことはさう苦しくはなくなつた。友達は自分よりももつと歩くことの達者な男だつた。土地をさがす熱心では自分もたじろぐ程だつた。
　村長はそれを聞いて厚意をもち出したやうだつた。そして働くのは、人夫を雇はずに、自分達が自分で働くのだと話した時、村長は心から厚意をもつてくれた。
「よろしい、引受けました」
「ありがたう」自分は自分で氣まりのわるかつた程、神妙にお辭儀した。嬉しさが胸に浮んだ。
　やつと大任を九分通り果した氣がした。
　自分達は勇んで村長の家を辭し、その土地を今更に見廻した。村長は自分の名で土地を買つてくれると云つた。大變安く買へさうに云つてゐた。自分達は城の方が買へたにしても、大東にも土地を買ふことにきめた。城の方が駄目だ

つたら反つていゝ、こゝの土地が多く買へるから、こゝなら後々の發展にいゝと思つた。後ろは山をひかへ、前は廣々した平地であつて、そのつきる處に有明灣があつた。南國的の明るさがあつた。
　自分達は希望をもつてその土地を生かすことを話した。しかし自分は稍ともすると戰爭のことを思つた。

二十七

　その夜宿屋で目をさました時、自分は戰爭のことを考へた。自分は今迄戰爭の恐ろしさを何度も考へた。しかし今はそれが又ちがふ方面から考へられた。有明灣を敵が攻撃する、そのそれ丸が自分達の土地におち、自分達の仕事を破壞し、生命を傷つけることを想像した。それよりも、もつと敵兵が上陸して、自分達が何年も何年もかゝつてやつと築き上げた仕事を蹂躙に荒らしてしまふ。農園、果樹園を荒らし、家畜をほふり、家を燒くことを想像した。その爲に自分達の仕事は無駄にはならない、自分達の眞理はそれでこはされない、しかし自分達の兄弟姉妹の勞働のつみ重なりは破壞されてしまふ。その事の恐ろしいことをその時、はつきり知つた。
　戰爭の爲にどの位、そんな目にあつた人があるだらう。自分はその人達に心から同情することが出來た。しかし自分達は出來たらさう云ふ目にあひたくないと思つた。すると城のことが思ひ出された。
　あすこさへ得ておけば、そしてあすこにしつかりした根さへはつておけば、根までやられてしまふ虞れはない。其處は山の中の小部落だ。道がわるくて大砲一つ運ぶことは出來ない。大砲の彈丸一つ打てばそれだけ損になる處だ。兵隊が入りこんでも食ふものはない。一番ちかい街道筋からでも四五里ははなれてゐる。凡そさう云ふ點では安心な處だ。
　自分は矢張り「城」も得ておく必要がある。しかしそれは、我等を守護するものの心に任せよう。金のない今二つに別れて住むのも考へものである。すべてはなるやうに任せておかう。そして其處で全力を盡さう。許された範圍で、信義を守つて生きてゆかう。城は一反五十圓なら買ふ、それ以上ならよさう。さうきめよう。大東村は村長と約束をはつきりしたのだから、金の許す限り買はう。戰爭は滅多にはあるまい。恐れて許りはゐられない。

二十八

　翌朝、自分達は南郷村の宮島の郵便局の前を通つた時、馬車から下りて郵便局によつて大城にゐる兄弟から何か知らせがあるかと思つてよつて見た。妻から電報が來てゐた。
　それには五十圓にまけた、とかいてあつた。
　萬歳！　やつと萬事がうまくいつた。
　馬車は有明灣の岸を通つてゆた／＼ゆれながらも走つた、自分はみられなかつた有明灣を見た、美しい灣である。水は清く、漁舟が處々に浮いてゐた。自分はこの灣の岸にも、一町の家を自分達がもつことを空想した。
　海草は肥料になる。ある藥もとれる。魚もとれる。一たい人間はもつと今に海を利用するやうになるだらう。我々の生活は海の幸をもつと利用することによつて道が開けはしないか。牡蠣や海苔のやうに増殖してそれを飯のかはりにするものが發見されないと誰が云へよう、魚をとるのでも、もう少し考へやうがありさうなものだ。そんなことも考へて見た。いろ／＼考へると金がほしくなる。それは自分には誘惑のやうに思へた。
　自分の力にあふことだけしろ、その他のこと

は自づと道が開ける迄、待て。よき人よ、出よ。そして俺にかはつて、俺に出来ないことを、してくれ。俺は自分に出来ることだけをする。

二十九

馬車で大隅の志布志を通つて、都城に出、そこから汽車で宮崎に着いた時は夜の十一時近かつた。停車場前の宿に着いて、すぐ宮崎の兄弟をたづねて、喜びをわかつた。寝たのをとび起きて出て来てよろこんでくれた。そして明日高城に行かうと思つてゐたと云つた。

それで自分達は遊びにくるのかと思つて話してゐたら、自分達と一緒に仕事をするので今ゐる処をやめることにしたと云つた。

自分一人で入ることにきめてゐる。

自分達に相談もせず、許しも得ずに。自分達はそれを反つて面白く思つた。

三十

高城に帰つて皆に大東村の話をしたら、皆よろこんで乗気になつた。城の方は正式に折れて来たのではなかつた。まだ少しでも高く売りたい気ぶりも見えた。しかしもう自分達は決心してゐた。買へなければ買へない方がいゝ、買へれば買へる方がいゝが、どつちでもいゝ。買へなければ大東村に皆でゆくだけだ。

かう決心がついた為に、自分はその晩二人の兄弟と津江さんの処に行つて、正直に何でも話した。

南那珂郡に行つたこと、そして大東村の気に入つたこと、それでもし城が一反五十圓平均で買へなかつたら、五十圓は決して不當だとは思はない、それで買へなかつたら反つて幸だと思つて、大東村の方にゆく、もし買へればそれに越したことはないが。さう云ふ自分達の決心を話して、二三日の内に返答がなかつたら、大東村の方にゆくと云つた。

それは嘘ではなかつた。自分達にその決心はあつた。それで津江さんにはいろいろお世話になつたが、どつちの答でも嬉しいのですから、心配なく、話をまとめるなり、こはすなりして戴きたいと云つた。津江さんはよくわかつてくれて承知した。

そして自分達は家に帰つた。

三十一

その翌日二人の兄弟は大東村の土地をきめる為に出かけて行つた。その翌日の朝津江さんが来て宿屋の主人と土地の相談に石河内に出かけてくれた。宿屋の主人は深水桑一と云つて自分達の働くのを見て段々同意を持ち、悪口云ふ人があると本気に怒り、末の娘も自分達の仲間に入れることにきめてゐる男だ。夕方二人は帰つて来て先方が承知したことを知らせてくれた。その日はロダンの誕生日の十一月十四日だつた。

その時、わきにゐた妻が恥かしがる程自分は嬉しさうな顔をした。自分達にすぐ皆のゐる家に出かけた。皆、萬歳、萬歳とよろこんだ。

翌日方々へよろこびの電報を打つた。そしてその日、病人をのぞいて皆城を見に行つた。高城から二里半程はなれた処だ。峠から見おろすと、眞正面に三段の高低が出来て川に三方かこまれ、後ろは高い山につゞき、岸には青々と木のしげつてゐるのが城だ。

自分達は峠の上から見おろした。よろこんだ。あすこが我等の仕事の第一の根をはる処だ。幸あれ！

其処はもと城のあつた処で、今は一軒の家もなく、一人の人も住んでゐない。川をへだてて石河内の村がある。

自分達は舟で城に渡つた。自分達の土地に。

三十二

大東村に行つた人は失敗して歸つて來た。村長は初め歡迎してくれたさうだが、勢力家の人にあつてから、土地を賣ることに反對してその勢力家の土地を借りたらいゝだらうと云つたさうだ。そして土地の價も、自分達が聞いたよりは三倍以上高かつた。

それもいゝだらう。我々は約束を破らずに、皆、一つ處に住むことが出來るから。

先づ一つの處に根をはつて、それからゆるゆる方々へ手をのばさう。

實力がうちにあふれて、それから形を自由に大きくしよう。先づ與へられた土地を耕さう。

三十三

自分達夫婦は登記のすむまで高城にとまることにした。その他病人でない人は皆、石河内に家を借りて、其處から城に通ふことにした。

城から出て來た人は、畑を耕す苦しみを語つた。鍬をつかふと馴れないので腰の骨が痛むことや、仕事がはかどらずにあつちでも、こつちでも脊のびして休む形などをして見せた。自分は早く皆の仲間入りしたくなつた。

自分達はそれから荷車を曳いて買ひものに出かけた。

三十四

登記もやつとすんで自分は十二月のある日石河内に引越した。

その翌日の朝自分は城の下を流れる川の岸の岩の上に立つた。

その年の春、ふとした事から考へが次第にその方に向き、遂にその仕事を始める氣になつてから八ケ月程たつた。そして時の頁をめくるに從つて、自分達の仕事は順調にすゝんで來た。たつて見れば早いものだ。

日向々々と云つてゐたのが、いつのまにか日向に來、土地々々と云つてゐたのがいつのまにか土地を得、登記がすんだらと思つてゐたら、いつのまにか登記がすんだ。

そして今日から自分達の土地の上で働く。

幸よあれ。

三十五

自分は祈りたくなつた。

―我を生かしたものよ。我にこの仕事させるものよ。我に兄弟を與へ、この土地を與へたものよ。我の仕事がまちがつてゐなかつたら我々の仕事をたすけよ。自分は七度倒れても八度起きる。百度倒れても百一度起きる。いくら倒れても、何千度倒れても、必ず自分は起きる。死なない限りは。そしてこの仕事が正しい限りは。

私の一生をあなたに捧げる。私は一番正しい、まちがひでないものに一生を捧げないことを恥ぢるものだ。あなたよ、私を導け。私の未來の頁にはどんなことが書かれてゐるか知らない。だが背き切りにはならないやうにしてくれ。そして死ぬ時はあなたの懷に歸りたい。あなたを抱きたい。

私の仕事は時に消えかゝるかも知れない。油が不足になるかも知れない。だがその時でもあなたに背かなければ最後の勝利を得ることを知つてゐる。

私をこゝまで導いてくれた神よ。私にはもう人類は犧牲を拂はずにあなたのもとに歸れる時に達してゐるやうに思へます。私はその道を見出したと思ひます。

それはまちがひですか。いやまちがひとは思ひません。眞心さへ生きれば、私の眞心さへ

生きれば。兄弟姉妹の眞心さへ生きれば、全世界の眞心が生きれば。

神よ。私はあなたの前に跪きます。お導き下さい。私は今迄まちがつた生活の爲に、勞働力が半人前切りないでせう。私をお導き下さい。私をお使ひ下さい。そして私の足りない所を十二分におぎなつてくれる兄弟姉妹をお授け下さい。

すべて私の力ではありません。あなたの力です。しかし私の眞心を通してのみあなたがあらはれることを私は信じてをります。

神よ。自分は心で神に禮拜した。自分の目は涙ぐんでゐた。清き流れはたえず流れ、仲間を受入れて海へと流れてゆく。

幸よあれ！

（二〇、二、二五）

心のよろこび

○

だまつてほつたらかしておくと
いつのまにか
元氣になつてよろこんでゐる
俺の心の呑氣さ。

○

この心のよろこび
俺はどこかでいゝことをしてゐるのだらう。
この心のよろこび。

○

心といふ奴は
餘程よろこびたがる動物なのだが
人々はあまりに
いろ／＼の重荷を
負はせすぎるのではないかなの。

○

誰の心でも
無心になれば
自と
よろこべるものでは
ないのかな。

俺の心は
よろこぶことの名人
天下一品の代物かな——
心うれしく
心たのしい。

レンブラント

レンブラント！
お前は立つてゐるな！
耐へて耐へて立つてゐるな
帝王のやうに
一人で
帽子を阿彌陀にかぶつて、
兩手を腰にあてて、しつかと。
レンブラント！
お前は立つてゐるな！

（ある素描の自畫像を見て）

老いたるレンブラント

老いたるレンブラントは
一心に畫をかいてゐる。
誰もわかつてくれるものはない
だが彼は一心に畫をかいてゐる。
知己を求める氣もなく
自慢する氣もなく
金をとる望みもなく
その他のぞみもなく
たゞ一心に畫をかいてゐる。

幸福者

一

自分はこゝに自分の師の一生を書けるだけ書いておかうと思ふ。自分はこの書が、誰かに見られるか見られないかそれは知らない。又かやうなことは書くべきものか、かくべからざるものか、それも知らない。師がいらつしたら、書くなとおつしやるかも知れない、書けとおつしやるかも知れないが、しかしともかく自分は書かないではゐられない。自分のやうなものがかいても始まらないかも知れない。又自分は井の中の蛙で何にも知らない人間だから師のやうな方はこの世に澤山ゐるのかも知れない。そして師のおつしやつたことや行はれたことはさう後世に殘す程のものでないかも知れない。

しかしともかく自分は師によつて救はれたものだ。師があつて自分の一生があるのだ。こんな片田舍で自分が師のやうな方にお目にかゝれたことをどんなに自分は幸福に思つてゐるか知れない。ともかくこの世で師のありがた味を本當に知つてゐるのは自分達位かだけだ。そして自分が此のことをかゝなければ誰も他にかく人はない。自分がかくことによつて師のありがた味を少しでも他の人に知らすことが出來、そのことがその人の一生にとつて私の上に行はれたやうな變化を少しでも行ふことが出來ればその人はきつと私が師のことをかいたことをよろこんでくれるだらう。さう云ふ人が何處かにゐる。自分はそれを信じてこの筆をとる。

何からかき出していゝか自分にはわからない。自分は師の若い時のことは少しも知らない。師は若い時の話をされるのをよろこばない。

ある人の話だと若い時に師は女のことでしくじりをして、それから家に居られなくなつてとび出して、あゝ云ふ生活を始められたのだと云ふ。どうしくじられたのかそれは知らない、ともかく師は女を恐れてゐられたことは事實だ。

師はある時こんなことを云はれた。「女を愛するならば本當に愛しなければいけない。自分の運命と女の運命を傷つけるのを恐れなければいけない」

則ちその女と夫婦になれることを本當に知るまでは女の心を動かすやうなことをしてはいけない。自分は女を恐れるのは、自分と女の運命を傷つけることを恐れるのだ。それ以上に又神の教をきずつけるのを恐れるのだ。それから又師はある時私にかう云つた。

それは私が今の妻と結婚しようと思ふことを師にうちあけた時だ。師はよろこんでかう云はれた。「それはお目出たう。私もそれをのぞんでゐた、結婚は早すぎてもいけない、おそすぎてもいけない、無理が一番いけない、自然がいゝ。結婚したがるのもいけない、さけるのもいけない。來る時が來たら喜んでそれを迎へるがいゝ。戀はながくはつゞかない。それは人生には他にもつと大事な務があるからだ、女のことには一日も早く卒業するがいゝ。だがよろこびは味へるだけ十分に味ふがいゝ。だがそれも無理してはいけない與へられたもので感謝しなければいけない」

自分はその時、から云つた。「先生は結婚なさつたことがおありになるのですか」

「ない。結婚したいと思つた時はあるが、私がうつかりしてゐる内に、相手は他にかたづいて

しまつた」そして師は大きな聲を出して笑はれた。
「結婚するものも仕合せだし、しないものも仕合せだ、どつちにも人間のよろこびはある。馬鹿なものは獨身の間は結婚した時のよろこびを空想し、結婚すると獨身の時のよろこびを空想する。しかしそれは馬鹿だ。水を見た時は水の美しさを感じればいゝ、花の美しさを見た時はその美しさ許りに氣をとられるのが本當の人間だ。どつちでもいゝ、どつちにも美があり、よろこびがある。春もいゝが冬もいゝ、冬もいいが春もいゝ、どつちもいゝ。冬は冬をたのしみ、春は春をたのしむ。かはりがはりに來れば、又それをたのしめばいゝ。自分は獨身のことを考へると獨身もよく、結婚すれば結婚も亦いい、自然に任せておく、無理してはたに迷惑をかける程のものではない。お前が結婚すればそれが嬉しい、お前が結婚しなければそれもうれしい、その爲に誰をも不幸にしないですめばなほうれしい」
自分はその時、自分の妻を戀してゐる男のことを思ひ出した。自分はその男を同情することも愛することも出來なかつた。そして反つてその男を淋しくすることにある快感を感じてゐた。自分はそのことを白狀した。師は一寸いやな顏をされたが、すぐ「それも仕方があるまい。その男がそれから墮落するとも、それはお前のせゐではない。それでその男が墮落せずに更によくなつたら、そのことは反つてその男にとつて幸になる。さうなればなほよろこびだが—
「結婚すると人間は駄目になるものでせうか」
「そんなことはない、それは失戀すると人間が駄目になると云ふのと同じ程度の話だ」
自分は餘計なことをかきすぎた。ともかく師は常に自分に與へられた運命によろこびを感じて生きて居られた。
師は他人にたいして多きをのぞまれなかつた、他人がいゝことをすることをよろこばれた、他人の幸福をよろこばれた、それが自分には貴く思へた。そして自分がやゝもすると他人の幸福を猜んだり、呪つたりする傾きのあるのを情けなく思つた。自分は師にそのことを云つた。
それは仕方がない、若い内は自分もさうだつた。この頃は誰より自分が幸福だと云ふことを本當に知つた。だから他人のことは羨ましくは思はない。自分が他人をしのがうと云ふ氣がある間、自分が他人に負けるのをいやがる間、さう云ふ根性はなくならない。しかし氣にするな。又さう氣にも本當はしてゐないだらうが。そしてもつと大きい心を持つやうにする方がいゝ」
師は滅多に怒らない方だつた。すべて許す方だつた。
「俺は他人をせめることは出來ない、自分の内にはもつと恐ろしいものがあることを反省しないではゐられないから。自分の心のけがれを思ふのは情けないが、他人の罪に寛大になれるのはうれしい。しかしその爲に罪を罪のまゝ許すやうになるのは恐ろしい、自分のわるいことを本當に知つてゐる罪人は自分を正しいと常に思ひ込んで他人を責める人間よりはずつと幸福だ、その人は神の愛を知ることが出來るから、そしてありがたいとか勿體ないとか云ふことを本當に知ることが出來るから。この世に一番救はれないものは神にたいして不平をもつ奴だ」
師は又こんなことを云はれた。
「千べん惡の種をまいて、惡の芽が出ないことを本當にありがたがるものは、千べん善の種をまいて、その芽が出ないでも神を呪はない。更に善の種をまかうとする。そしてその芽のいつか出ることを信じて、それを信じることが出來

ることによろこびを感じる。そして惡の種をまくことの恐ろしさをますく感じてくる。さう云ふ人間は救はれる。人間はある時には神になる。しかしその次の瞬間には最も下等な人間にもなれるものだ。それと同じく最も下等な人間になり切つたことを本當に自覺した瞬間に人間は神にもなれるのだ。ある人を善人、ある人を惡人ときめるな」

自分はその時師にかう云つた。

「しかしこの世には、神になれない人間もあるでせう。私にはさう云ふ人の方が多すぎるやうに思へます」

「さう云ふ人はないとは云へない、しかしあるとも云へない。さう云ふことは自分達人間には云へない。本當に強い眞心をもつた人の愛の光りに照らされて見たら、存外に神になれない人と私達が思ひこんでゐる人間が神にならないとも限らない。それを知つてゐるものがあれば神だけだ。人間にはわからない」

師は小さい小屋に住んでゐられた。その家はある人が師に捧げたのだ。飯の世話は自分達が當番をきめて、うちでつくつた飯をはこんだ。自分の仲間は六七人で、かはり番に飯をはこんだ。師は初めは自分で自炊してゐられた。そして他人の耕作を手つだつたり、或人からもらつた僅かの畑を自分でたがやしたりしてゐられた。自分達が飯を運ぶやうになつてからは師は自分の土地を近所の一番貧しいものに與へてしまはれた。時々手つだはれることはあつたが、一人で方々歩きまはられることが多くなつた。師はその時何か大事なことを考へてゐられるやうだつた。師が口をついて出る言葉は多く、瞑想から得られた。本も時々はよまれるやうだつたが、非常な學者と云ふわけにはゆかなかつた。耶蘇や、釋迦や、孔子や、ソクラテスを尊敬されてゐた。しかし本をよむよりは考へる方を好まれたらしかつた。學者はあまりすかれなかつた。自分が生かすことの出來ない程多くを知りすぎるのは師には害があつて益がないやうに思はれた。

師はどんな學者が來ても恐れずに、自分の思ふことをしやべられた。「笑はれるのを恐れるよりは心にないことを云ふのを恐れたければいけない」

師はそれを實行された。師は心にないことは一ことも云はれなかつた。むしろ師の心には云ひたいことが多すぎた。師の内にある貴い言葉は、出る機會を得ずに、沈默の内に葬られた言葉がどんなに多いだらう。又よしその言葉が機會を得てあふれ出たにしろ、その言葉の價値をそのまゝ受け入れたことは殆んどないであらう。自分はそれをすまなく思つてゐる。

師はかう云はれたことがある。

「福音書は耶蘇のかゝれたものではない。たゞ其處に耶蘇の心からでなければあふれ出ない、言葉や行ひが處々に片鱗を見せてゐる。それが實に恐ろしい。その深さとその權威にふれると心が自づと清まつてくる。その前に跪きたくなる。全然とは同感の出來ない言葉があつても、その深さには頭がさがる。その力は何處からくるか。其處が面白い所だ。俺は來世も復活も奇蹟も信じられなくも、耶蘇の心の深さには實に心の底を動かされる。その力は何處からくるか。その力に自分は自分の一生をまかせたい。それだけが自分の一生をさゝへてゐる心棒だ。それがなければ世の宗教家程くだらぬものはない」

師はその力を信じてゐられた。或日のことだつた。師は私かに自己の心のうちだけで盲目の目を信仰の力でなほさうとされた。そしてそれが失敗した時に、師は泣かれた。「自分は信仰の力で盲目がなほり得ると云ふことをまだ信じ切

つてゐないのだ。それが信じ切れたら、盲目の目もなほらないとは思はない。だが、自分は正直に云ふと耶蘇が盲目の目をなほしたと云ふことも信じられないのだ」

「それならなぜなほさうとされたのです」

「あまり可哀さうだつたから。父と子が五年の間わかれてゐた、子が五年ぶりで歸つて來た、その五年の間に父は盲目になつた。父は自分の子供の顏を見たいのをぢつとこらへて涙ぐんでゐた。子は自分の顏や姿を父に見せられないのをたまらながつた。俺はそれを見てゐたらつい父の目をなほしたくなつたのだ。だが俺にはその力がないことを知りすぎてゐた。しかし心でその目のなほるのを神にいのらないわけにはゆかなかつた。そして心で目をひらけと云つて見た。その時自分の權威のないことを實に露骨に感じた。自分を恥知らずだと思つた。そしてつい泣いた。二人に同情して泣いたのではない。自分の恥知らずなので泣いた。汝信仰うすき者よ。自分で自分にさう云つて、歸りに山の中で跪いて祈つた」

しかし師のこの祈が神にきかれたと自分は云ひたい。しかしさう云ひ切るのを師は恐れてゐられた。彼の父の目はその後まもなく見えるやうになつたのだから。醫者は不思議がつた、しかしまゝさう云ふ運のいゝ方もあるものです、と云つた。

自分は師にそのことを云つた時、師は、

「その話はやめてくれ。俺にはそれは信じられない」

しかし師は祈はきかれるものだと言はれた。

「しかしそのきかれた方は人智ではわからない方法できかれるので、見やうによつてはきかれたとも思へ、きかれなかつたやうにも思へる。自分にはまだ信じ切れないが、本當に祈れる人間には祈はきかれるものだと思ふ。本當に祈れるには私心がすこしもあつてはならない。神の御心を心からあがめることが出來なければならない。この祈がきかれなかつたら大へんだと思ふ間はきかれない。大へんだと云ふことを忘れてしまはなければ。しかしかう云ふことははつきり云ふのがまだ自分には恐ろしい。ともかく心を清くして御心のまゝに自分をおつかひ下さい、さう云ふ氣持になり切れたら、既にその事が祈のきかれたことになるのだ」

師はよく自分のことを幸福すぎると云はれた。他人にこの幸福をわかちたいと云はれた。そして實際師にせつした人はその幸福のわけまへをうけとる。自分は師のことを思ふと涙ぐむ。心が清まる、そして清い幸福を心の底から感じる。其處には邪念がない、不淨がない、不淨と邪念がいかに人間の心を動搖させ不快にさせるかは、清いよろこびを知つたものだけが知つてゐる。すべてのこの世の惡は其處に生ずる。

それならばなぜ人は惡を愛するか。清い幸福を知るものはなぜ立派に惡にうちかてないか。

自分は或時美しい女が師をたづねて來たあとで師がかう云はれたことを聞いた。

「自分は罪の恐ろしさを本當に知らない。自分は今日の女は俺の自由になることを知つてゐたら、そして女が自由にされたあとで、そのことを絕對に祕密にすることを知つてゐたら、そして自分はその女を一度自由にしても二度と自由にする氣が起らないですむことがわかつたら、そしてそのことがその女に道をとくに邪魔にならないことがわかつたら、そしてそのことが自分の心を苦しくしないことが出來ることを知つてゐたら、そして女をもてあそびたい心はやがてすぎさるものだと云ふことを知らなかつたら、俺はあの女をたゞは歸さなかつた。しかし俺は女と三時間さし向ひに二人きりで話してその女

をもてあそばうとしなかつたのは、その反對のことをのこらず知つてゐたからだ。あの女は淫賣婦であつた。今も淫賣婦である。自分はもう少しで女の前に跪かうかと思つた。そしてその女の前に罪を犯して知らん顏をしようかと思つた。そのことは出來ないことでない。現在俺は今迄に正直な所、さう云ふことを絕對にして來なかつたとは云へない。俺はその罪をくり返すことの誘惑を可なりうけた。自分はそのことだけの罪と云ふことを存外強くは知らない男だ。俺は女の自然につくられた美を拜みたい氣の存外強い男だ。しかし俺はその時思つた。もしそのことをしたら、俺はその女とはもう靈の話は出來ないと思つた。そして萬一その女が俺にもてあそばれたことを吹聽したら、俺は君達になんとあやまつていゝかわからない氣がした。それは大したことではありませんと君達は云ふか。もしさう云ふにしても君達に隨分いやな感じを與へるだらう。君達はまだそれでもいい、しかしその時俺は僞善者になる、百日の說敎屁一つと云ふ諺があるがそれよりは遙かに罪が深く、きゝめがつよい。俺のつかへてゐる眞理の威光に關する。そして恥かしい話、俺の威嚴にも關する。女が祕密を守つてくれたら、俺は圖々しくすまして、聖人らしい道をとくだらう。しかしその時、俺はその女のことを思ふ度に、俺は不淨な考へを起すだらう。そしてその女には淸い話が出來にくくなるだらう。女が俺をたづねてくれた志を無にするだらう。俺は一寸その時辛抱すればいゝことを知つてゐた。それで俺は罪を犯さずにすんだ。女はそのことをよろこんだにちがひない。俺も今によろこぶにちがひない」

　自分はそれを聞いた時いやな氣がした。師はもつとそんなことに超越してゐられると許り思つてゐたから。師はそれを氣づかれ、から云はれた。

「俺の露骨な話は君を不快にしたらう。しかし君も思ひあたる時があるだらう」

　そして自分はその後まもなく思ひあたつた。しかしそのことはこゝにかく必要はない。

　その後師の處にはよくその女がたづねて行つた。師はその女の來るのをよろこばれてゐるらしかつた。しかし或日その女の情夫だと自稱した男が師の處にあばれこんだ、師は別に腹もたてられなければ、おどろかれもしなかつた。そして自分がその女とさう云ふ關係をつけなかつたことをよろこばれた。女は師のことを神のやうな方だと云つた。妾はあんな方にお目にかゝつたことはありませんと云つた。師がその女を弄ばれなかつたことは師にとつては大したことではなかつたかも知れない。しかし師程悟つてゐないその女の一生にとつては大した働きをした。

　師はおかげで女のことには卒業が出來た。自分はもう女をおそれないでもすむと云はれた。しかしその後も積極的には女の家には出かけられなかつた。

「自分の一生を平和にする爲には心を靜かにすることが必要だ。愛するのも怒るのもたまにはいゝ。しかしそれは淺薄ではいけない。利己心や小さい根性から生れるのは皆自分の心の平和を亂し、心をいやしくし、自分の生きてゐる世界をいやしくする。心を淸くもつものは自分の生きてゐる世界を淸くし、平和のよろこびを心の底から味ふことが出來る」

　或時だつた、或人が師をたづねて、この頃の人間はずるくつて困ると云つた。すると師は、

「さうですかね、私はまだずるい人にあつたことはない。ずるい人に逢ひたくなかつたら、ずるい人をよびよせるものを自分から遠のけるより仕方がありません。私の處にはずるい人は

用がない。だから私はずるい人に逢つたことはない。話てはきゝますが、私の處にくる人は皆いゝ人許りです。そしてその人がとくにいゝ心になつてくれる時だけ私と話が出來る、いい心になりたい人だけ私の處に話しにくる。私は仕合せものです。あなたもさうなつてはどうですか」

「ありがたう。だが私はずるい人が來てくれる身分の方を愛しますね」その人は笑ひながらさう云つた。その笑ひは私には卑しく見えた。或時師は又こんなことを云はれた。

「皆身から出たさびだ。さびが出るのは身から許りではない。又外界ばかりでもない。罪は兩方にある。さびを出すのがいやだつたら自分を純金にするか、たえず自分をみがいてゐなければいけない。自分を純金にすることが出來ないくせに、自分をみがきもせずにさびが出るのに不平を起すのは己を知らないものだ。殊に自分のことを棚にあげて自分のさびを相手の罪ばかりにさせるのは虫がいゝ」

或人が師をたづねて、

「この世の中はどうしたら幸福になるのか」と聞いた。師は云つた。

「あなたはそれを本當に知りたいのか。私も本當にそれを知りたい。ともかく私達は不幸な種を自分でまきすぎてゐる。それはたしかによくない」

「不幸な種をまきすぎてゐる?」

「さうです。たとへば自分の身體について云つても、本當に養生をしてゐる人は一人もないでせう。心を常に清くしてゐる人もないでせう。人と人との關係でも圓滿にやつて行つてゐる人はないでせう。さう云ふ點をよく考へると人間が全體病氣をしてないのが不思議になり、喧嘩しないのが不思議な位です。實際、いつかそれがかさなつて壽命が來ない前に死んだり、革命が起つたりするのです。それには境遇のせゐも、社會の制度の不正もあります。しかしそれ以上に個人の生活がまだ完全の域に達せず、禍の種をまきすぎてゐるからです。私などが禍の種をまかないことを本職にしてゐる人間ですが、それでさへ心を不淨にしたり、不節制したり、他人に過度の要求して、自己に寛大すぎたりします。感謝すべき時に不平をもつたりします。普通の人に至つてはその私がひや〳〵するやうなこと許りしてゐます。それで世の中が幸福になるわけにはゆきません。我々は幸福にしたければ心を清くし、他人を愛し、利己心をのさばらないやうにし、お互に禮儀を守り、不正なことから自己を出來るだけ遠ざけ、自己に接する人に、喜びと感謝と幸福を送れるだけ送るやうにしなければいけません、それが出來ない時は自己をつゝしまなければなりません」

師は實際その言葉をそのまゝ實行してゐられた。

「今の世には自分の許されただけの範圍を生かせるだけ生かさうと云ふものが少ない。すぐ自分に許されてない範圍にまでのさばり出たがり、其處までのさばれないと云つて不平を起す。自分に許された範圍で自分を生かせるだけ生かせたら、存外自分を生かすことが出來るのだがそれを知らない。そして自分に許された範圍で出來るだけ自分を立派に生かしたものは必ず自分の求める世界を必要なだけ獲得してゆけるものだと云ふことを信仰しない。それは自分の人格を立派にしようとは思はずに富貴をのぞむからだ。しかし同等に一方人間に與へられた才能を十分に發揮出來、又身體の養生を十分に子供の時から出來るやうな境遇にすべての人をおくやうにしたいと云ふ心がけをたえずもつことは必要だ。この二つは決して仲のわるい兄弟ではない、むしろお互に助けあはなければならない

兄弟だ」

師は自分達に食はしてもらふやうになつてから一文も金をもつてゐられなかつた。そして食物は贅澤なものを持つてゆくとそれには箸をつけられなかつた。どんな人間でも乞食でも師のやうに生活しようと思へば生活出來る。それを師は理想にされた。他人の幸福を眞に願ふことが出來るものは、今の世でも食ふことに困らずに生きてゆける、之が師の信念であり、又生活であつた。實際師を本當に知つたものは、師のためにはよろこんで飯をさゝげた。自分達六七人の他に五六十人の人は師に自分でつくつたものを食べて戴くことによろこびを感じ、それを反つてありがたがつた。師は勿體ない、勿體ないとたえず云つてゐられた。自分には君達にそんな親切にされるわけはない、しかしありがたいと思つてゐる。師はそのことを思ふとすぐ涙ぐまれた。

「自分は君達と一緒に働きたい、皆で一緒に働けたらどんなにうれしいだらう」と師は云はれた。しかし自分は君達のおかげで一層生きてゐることがありがたく、謹み深い氣持になれることをうれしく思ふと云はれた。

しかし師にも怒られる時はあつた。蟲のいゝ人間を師は嫌はれた。「蟲のいゝ人間には感謝はわからない、何處にでも感謝をほり出すかはりに、不平をほり出す。花咲爺の内に出る慾ばり爺のやうなものだ、人間に與へられた寶物をほりだすかはりに、人間に與へられた災をほり出す。そして不平をおこす。さう云ふ人間は天罰をうけてゐるものだ」

ある怠けものが師に不平を云つた。「ある人はのらくらして贅澤をしてゐるのに、自分達は働かなければ食つてゆけない。それはあきらかに不公平だ」

師はその人に答へられた。

「それは不公平だ、しかし本當に平和を愛するものは人間が勞働しなければ食つてゆけないことを知るであらう。他人の不合理な贅澤を味ふのを羨ましがるよりは自分が不合理な贅澤せずにすめることによろこびを感じるはずだ。その方がその人の良心を平和にするから。君はさう苦しい境遇にゐる人間ではない。君は不合理な贅澤をしたい根性が自分にあることを知つて、それを自分でたきつけてゐる。君のやうな人間がゐるから世の中には不合理な贅澤がなくならず、不合理な贅澤が傲りをもつてこの世に存在するのだ。その不合理がいやならば、まづ第一に自己の内の贅澤心にうちかたなければならない。この根性をもつことが自分にとつて不名譽なことを知らなければならない。世の中がよくなればなる程、人間は先づ働かなければならなくなる。正しい人間は働かないで贅澤をしようとは思はないものだ。この世の不合理をよろこぶことは誰にもゆるされてゐない。不合理をなくせるだけなくさうとする、さう云ふ人間にだけ私は同情がもてるのです。この世の不合理でとくするものは、この世のより正しくなることを心の何處かで恐れなければならない。君はそんな人間になるのをよろこびはしないでせう、私達は正しき世界がいつ來てもいゝやうに用意して、人類の幸福を心からよろこびたいものと思つてゐます」

自分はとりとめなく師の言葉をかきすぎたかも知れない。之から自分は師の傳記について自分の知つてゐることをかきたく思つてゐる。さうすれば師の人となりや、人生觀も自づとはつきりするだらうと思ふ。

二

その後自分は師に就ていろ〳〵の人から聞けるだけ聞いた。新らしい事實も少しは知ること

が出來た。師の父に就ては誰も知るものはない。師は父なし子であつた。父はある有名な僧侶だと云ふ噂もあり、母の家に出入りする商人だと云ふ噂もあつた。母はそれに就て一ことも云はなかつた。そして母は一生、結婚をせずに師を大事に育てられた。しかし師の母が師に云はれた言葉によつて自分は師の父を僧侶だと云ふことは明らかなる事實だと思つてゐる。但しその僧侶は有名な僧侶ではなく、無名に終つた、しかしたしかに面白い所のあつた僧侶ではないかと思ふ。自分はその破戒僧であることを認める。しかし人はよかつたのだと思つてゐる。少なくも師の父だ、何處かにいゝ所があつたにちがひない。

師の母は師が子供の時、蛇を殺されたのを見て、「お前のお父さんは何よりも殺生なことがお嫌ひだつた」と云つた。師は父に就てなほききたかつた。しかしどうしても聞けなかつた。それから師は殺生なことは一切しないやうにされた。

又或時師の母は師に、

「お前は私に似ないでお父さんに似てゐる。立派な人間にならないといけませんよ」と云つた。

又或時師の母は師に、

「お前のお父さんはそれは偉い方だつた。しかし女のことでしくじられた。お前も女のことだけは用心しないといけませんよ」と云つた。

之等の言葉は不用意に云はれた。しかし師はその言葉を忘れることは出來なかつた。母にはたえず父のことを思つてゐた。しかしそれを誰にも口外することは出來なかつた。たゞわが子を見て、ふと何か心配のある時、前後の考へもなく、之等の言葉を云はれたものと見える。そして云はれたあとでびつくりされた。話はすぐ不自然に他にとんだ。

聞く所によると、師の母は淋しい、謹み深い、辛抱の強い方だつた。どうしてこんな人が父なし兒を生んだのであらう。しかし師の母として如何にもふさはしい方だつた。自分は師は寧ろ母親に非常に似てゐられたやうに思ふ。しかし父親が知れないのでさう思ふのかも知れない。

師はある時、久米仙人に就てかう云はれたことがある。「久米仙人は女を見て天からおちた。それは本當だ。しかしそれで死んだのではない。皆に笑はれ、馬鹿にされ、神通力にも一時は見はなされたが、その後又神通力を得て今度は本當に誰にも氣がつかれずに、貧しい風して天へのぼつたのだ。どうも自分にはさう思へる」

師がかう云はれた時師の父のことを思はれたのであらう。

師の母はなぜ結婚されなかつたのだらう。それは師を育てたい許りではなく、師の父が又いつか來てくれるのを待つてゐられたからであらう。他に結婚の話があつたが、見向きもされなかつた。しかし師の父は師の母の處には一度も歸つて來なかつた。そしてその人の生死も師の母は知らなかつた。たゞ彼の子なる師を大事にされた。

母の家は豪農だつた。母の不行儀を一般に知られるのを恐れて可なりはなれた片田舎に小さい一軒の家をたてて其處に住ませた。二十八迄其處にゐられた。師は其處で生れ、其處で大きくなられた。母の家からは僅かの生活費が送られた。母は勘當のやうな目にあつてゐて、母をたづねてくれる人は殆んどなかつた。母は外出を嫌つて家に許りゐた。そして師を育てるのを唯一の仕事にされた。

二人は淋しい母と子であつた。母は子のことを思ひ、子は母のことを思つた。晩年に至る迄母のことを話す時に師はすぐに涙ぐまれた。

師の母は機を織つたり、小さい畑をつくつた

りした。竈も少し養つた。師は子供の時からそれを手つだつた。師の子供の時は別に他の子供に優つてゐるやうには見えなかつた。たゞ獨りぼつちでゐることが好きで、曲つたことは何より嫌ひで、譃をつくことを心の底から嫌つた。この兒は正直すぎると母に云はれた程だつた。

頭は可なりよかつた。そして常に何か考へてゐた。強情ばりで癇持だつたが、普通の時は優しすぎた。氣もよわかつた。たゞいざとなると死んでも折れないと云ふ意氣を示した。本をよむ事は可成りすきだつた。そして十位の時から世界中で一番偉い人間にならうと云ふ氣を持つてゐられた。朝早く起きて海邊に出て、人が一人も來ない處へ行つて海へ向つて演說されたこともよくあつた。

母はひそかに師のあとをついて行かれた。師はそれを知らずに巖の上に立つてから云つた。

「浪よ、きけ、海よ、きけ、こゝに立つ俺こそはこの世を救ふ爲にこの世につかはされたものだ。この俺の未來を心して見よ。俺の云ふことのうそでないことをやがて知る時が來るであらう―」

母はそれを聞いて恐ろしい氣がした。しかし聞かないふりをしてゐた。その時師は十四であつた。この自信は師の一生をつらぬいた。師はそれを露骨に見せはしなかつたが、母は師によつて救はれなかつたかも知れない。だが自分達は救はれた。

母と子は互にいたはりあつた。水をくむにも、火をおこすにもお互に自分でしようとした。師は早くねて早く起きられた。師は心を清淨にすることに骨折られた。自分の私生兒と云ふことは師の心をいためたが、自分の誕生の不可思議は、知らない父にたいする不思議な信仰は師の心をけがれから救ふ力をもつてゐた。

―父の淫慾は自分のうちに巢くつても、自分はそれに打ちやぶられはしない。母のその後の清淨な生活は自分の一生を清淨にさせないではおかない力がある。私が生れたことを人を祝福させる。それは父と母の罪を淨める唯一の道である―

師の日記の斷片にそんな文句があつた。

―父よ。あなたは何處にゐる。生きてゐて下さい。あなたには私と母とがあなたのことを思つてゐることをお知りになる時があるでせう。そして罪から生れたものがあなたの心の痛みを綺麗にぬぐひ去るでせう。あなたのしたしくじりは神の目からはしくじりではなかつた。私が生れたと云ふことが、それをよきことにかへて見せます。どうか母を愛して下さい。そして母の生きてゐる內に一度歸つて來て下さい。母はあなたをうらまずに待つてゐます。そして私を生んだことをよろこんでゐてくれます。母の一生をきずつけた、あなたと私は母にとつて有難いものなのです。このことは私には勿體ない。どうか私は私を生んだことを母のよろこびであり、誇りであるやうにしたく思つてゐます。さうしてあなたにとつても。父よ―

―父は天よりおちたならば、子は地より天にのぼらねばならぬ。父と母を償つて―

―いかに母の愛は聖き誠。母は淸すぎた。父もそれに敵しかね、罪もそれに敵しかねた。母を罪人と云ふものよ、私をつくつたことは罪か。罪ならば罪でいゝ。罪のうちから生れるものを見よ。お前達のあさ墓な心をもつてははかり知れぬ祕密のこの世にあることを知れ。德の內に蛆もわくが、罪の內に蓮の華もさく。ともかく自分に生れたことを人々によろこばれる人間になりたい。それが母の愛にたいする唯一の報恩だ―

―俺は淋しい。だが母はなほ淋しいであらう―

師は志をたてゝ勉強し、行ひをつゝしみ、身體をよくするやうに骨折られた。母も亦それ

をたすけた。

「お前が立派な人間になつてくれるのが私のたつた一つの望みなのだ。その爲には私はどんな苦勞も苦とは思はない。お前がいくら私の水仕事をたすけてくれても、勉强を怠つてくれたら、その方がどんなに私にとつてつらいかわからない。お前が勉强してくれ、身體を大事にしてくれ、そしてわるいことをしないでくれればそれが一番の孝行だ。私が可哀さうだと思ふなら立派な人間になつておくれ。そしてお前の母だと云ふことをよろこべるやうになつておくれ。お願ひだから」

母のこの言葉は子供なる師の眞心にふれ、ますます決心をかためさした。

母は子供の性質をのみ込んでゐた。子供の成長慾と名譽心と本氣さと義俠心と憐れみと恥を知る心とを巧みに刺戟して子供の邪道に入らず、正しき道を進んでゆくやうに骨折つた。そしてその骨折は更によき結果をもつて報いられた。

「お前が立派な人間にならなければ私は生きてゐない」

之が母の決心であつた。

師には意地惡と云ふ根性はないやうに見えた。師には別に友達らしい友達はなかつた。うちで母の仕事をたすける他は大抵一人で本をよんだり濱岸や野山をあるいてゐた。そして自分を立派な人間にしたいと思つた。立派な人間とはどんな人間か、本をよむことを知つた師は、社會的に有名になつたり、富貴な人間になることを望むことの賤しむべきことを知つた。それは空なことに思へた。もつと大事なことがある。則ち耶蘇や釋迦の道こそ一番本當の道と思へた。眞理の道、眞理をはなれない道、偉人の助けをかりない道、人間でありさへすれば、貧富の區別がなく、他人の助けにすがらずに到達出來る悟りの道、信仰の道、さう云ふ道をのみ歩いてゆきたかつた。他のことはそれに比べて賤しいものの氣がした。

自分さへ本氣になればどうしてもゆける道、他人の御機嫌も、運命の御機嫌も見ずに眞の幸福に達せられる道、其處では内を顧みて疚しくなく、權威を自からの内に感ぜられる道、さう云ふ道をのみ歩かないと師にとつては不安でならなかつた。師には正しいと信ずる道を歩くより外に安心の出來る道はない。師はその道を選んだ。そして人間にさう云ふ道の與へられてることを感謝し、その道が人間のゆかねばならない道であることを信じてゐられた。

この道より他に自分が人間に生れたことを心から喜べる道はない。他の道では眞の幸福が得られず、この道だけで幸福が得られる所に人間に生れた面白さがある。之をほかにしては人間は厭世的にならないわけにはゆかない。

之が師の十五六の時から最後までつらぬいた動かすことの出來ない信念だつた。時には動搖をまぬかれなかつたにしろ。

師が十四五の時、師のそばに美しい男の子がゐた。それは他の男の子と馬鹿な眞似してさわいでゐた。師のうちにはから噂くものが居た。師もその仲間に入れようとした。

「お前は心のうちで皆と馬鹿な話をしたり、馬鹿な眞似をすることを望んでゐる。そしてお前は心では美しい男の子をけがしてゐる。或は誰よりもひどく。しかしお前は勇氣がないのでその仲間に入らずにゐる。それはお前があつさりした人間でないからだ。お前があたりまへの人よりなほ醜い心をもつて、無邪氣にはなれないからだ」

しかし師はさう云ふ無邪氣にはなれなかつた。そして人々が下等な話をする時、師はいやな顏をしないわけにはゆかなかつた。

「お前は心のなかで清いのかい」
「さうではない。或は誰よりも穢れてゐるかも知れない。だがさう云ふ話を恥知らずにするものがあるとどうもいやな氣がするのだ」
「美しい男の子はその後[illegible]になつて死んだ。死なしたものは誰だ。自分は近づけなかつたのが反つて幸だつた」
「他人の死をお前は幸だと思つてゐるのか」
「ともかく自分がその原因にならなかつたことはよろこびだ。心で穢したものと行ひで穢したものとは同じではない。心で穢さないものは更に美しいが」
ともかく師は自分が誘惑には抵抗力のよわいことを知つてゐた。だが誘惑を近づけない力を師は小さい時から持つてゐたらしい。師はそれを自覺されてはゐないが。
自分は師の性慾の歴史をかうとは思はない。しかしその方で師は理想的に清かつたとは云へない。ある人は理想的に清かつたと云ふ。しかし一人の女性はそれを否定して師の祕密を自分にうちあけた。しかしそれはもつとあとの話である。
師の若い時のことを知つてゐる人は師に就て別にかはつたことは云はない。偏人だと云ふことと馬鹿正直と云ふことは誰も認めてゐる。無口で陰氣な少年だつたと云ふ人が多いが、一人議論好きで議論では誰にもまけたことがなかつたと云つた。その人の話だとその後大臣になつた某氏も議會では師にどうしても勝てず、師に一目おいてゐたさうだ。その人はかく云つたあと、師がもつと偉い人になるだらうと思つてゐたと話した。そして大臣になつた人は活動的で積極的だつたが、師は消極的で引こみ思案だからいけなかつたのだと云つた。その人の說だと師は友達がどん／＼成功してゆくので益々ひがんで隱遁的になり村夫子の出來損ひになつてをさまつたのだと云つた。
しかし師は大臣になつた友達のことなぞは頭においてゐなかつた。「正しい生活をすればする程、多くの人に敬はれそして必然に大臣になるなら大臣になるのもわるくないだらう。だが恥を知るものには出來ないことをしたことを證明する大臣になりたくない」と師は云つたことがある。それは友達のことを頭において云はれたにしろ、少しも羨む氣のなかつたことはたしかだ。師は自己を誰よりも幸福な人間と思ひ込んでゐられた。たゞ自分に德がまだ足りないことを恥ぢてはゐられたが、それは師を益々感謝することを知る人間にした。自己には天賦がありすぎることを師は本當に知つてをられた。
師はいつから師になられたか、前に云つた通り十五六の時から師の精神的な傾向はあらはれてゐた。しかし本當に精神的の仕事をしようと思はれたのは二十をこえてからであらう。自分は不幸にしてそのことをくはしく知ることは出來ない。ともかく師は二十三四の時にはもうはつきりこの世をつらぬいてゐる精神の力を感じてゐて、それに自分を服從させて生きてゆかなければ本當に生き甲斐を得られないことを感じてゐられた。それは何かあつたのであらうが、はつきりしたことはわからない。ともかく師は二十歲前後に一時的に懷疑に陷られた。人間は如何に生活すれば生き甲斐を本當に得られるかそれが二十三四の師にとつては唯一の問題であつた。その問題を解決せずに生きてゐられるには人間の一生はあまり空に見えた。「母の爲に生きてゐる、少なくも母の爲に死なない」母が居なかつたら師は自殺をしたかも知れない。「あまりに淋しい人生は無意義」としか師には思へなかつた。夢の裡の死の恐怖に師の生れたことを呪つた。生まれなかつたらよかつた。死の恐怖はそのことを

まざ〳〵と師に知らせた。しかし目が覺めて何かしてゐる時はそのことを忘れた。しかし何かでふと自分の一生のことを思ふと無意味のやうに思つた。人間は自然にとつて蟲けら以上ではない。蟲けらの如くに生れ、蟲けらの如くに殺されてゆく、それに人間は苦情を云へた義理はない。しかしそれでは淋しすぎる。

しかし師は今更昔の聖人や賢人の傳記をよむ時に何か心にさゝいた。そしてそれ等の人がこの「人生の無意味」に打ち克たうとしてゐる所を改めて見た。そして師は今更にそれ等の人を知ることを感謝し、そして神聖なよろこびを感じないわけにはゆかなかつた。

之等の人は蟲けらではない。それ以上のものに支配されてゐる。神の如き人だ。彼等が生きてゐてくれたことは我々にとつてどんなによろこびか知れない。そしてその喜びは我々に生きてゆく力を與へる。人間にたいする希望をとりもどす。それは理窟でなくして事實だ。その事實を面のあたり感じられる生活をしないで、人生を呪ふのは僭越だ。そして人生を呪つてゐるものは實に又さう云ふ生活を自分で行ふ力のない人に限る。そしてさう云ふ生活をしてゐるものは、人生を呪つてはしない。そして神や自然を讚美してゐる。師にとつてこの事實は涙ぐみたい程ありがたい事實であつた。

自分を本當に生かさう。聖賢の教へられるやうに自己を本當に生かさう。それから人生を悲觀するなら悲觀しよう。自分の生かしかたをまちがへておいて、人生を悲觀することは恥ちよう。師はさう云ふ自覺を二十三四の時に今迄よりもなほはつきり得られた。しかしそれを本當に生かすことが出來る迄にはなほ時を要した。

師が或る日往來を歩いてゐたら、一人の齢をとつた見すぼらしい僧侶にあつた。その僧侶は師の顔をじろ〳〵見た。師もその見すぼらしい老僧の顔を見た。

老僧は師にあいさつして、「何處へ行かれるのか」と聞いた。

「山へ行くのです」と師は答へた。

「何をなさりにゆくのです」

師は返辭に困つた。たゞ一人で考へたかつた。しかし何を考へるのか師は知らなかつた。眞理のことか、或は女のことか。兩方か。どつちにしろ師は答へることが出來なかつた。

老僧は師を見て云つた。

「あなたは偉い人間になるだらう。天の加護があなたにあるだらう。もし女のことでしくじらなければ、心に不淨なものを燃やさないならば。私を御らん。私にもあなたのやうな時があつた。私は天の加護を得られる身分になりつゝあつた。私の行爲は人々のよろこびであつた。だが私の内には小惡魔が居た。人目につかない處ではその小惡魔を勝手に生かした。そして天の加護をその爲に失ふことにまるで氣がつかなかつた。いや、氣はついてゐた。しかしこの位はいゝだらう、この位はいゝだらうと思つてゐた。天は寛大である。だが自分は自分の内の天を窒息させたことを知らなかつた、あなたはそれを本當に知らなければいけない」

師は默つて聞いてゐた。

「餘計なことを云つたことを許して下さい。さあ山へ行つて考へたいことを考へていらつしやい」

老僧はさう云つて會釋して去つた。

師は老僧の言葉を考へながら二三町來た。そしてはつと氣がついた。

「あの方がもしかしたら自分の父かも知れない」

師は躊躇した。しかします〳〵さうらしく思つた。師はびつくりしてあとを追ひかけた。しかしもう老僧の姿は見えなかつた。

師はなぜあの時氣がつかなかつたのだらうと、心から後悔したがどうすることも出來なかつた。そしてそのことを母に打ちあける氣にはなれなかつた。父は母や自分を見にそつと來たのか、或は他人か、或は自分の幻映か、師にはます／＼わからなくなつた。だが師はこの見すぼらしい老僧に逢つたことを忘れることは出來なかつた。そして自分がその時ぼんやりして何にも氣がつかず、何にも云はなかつたことが思ひ出す度に氣になつた。

父よ！　幸あれ、あなたの教を私は一生忘れません！

師はいつのまにか、その人を自分の父のやうに思ひこみ、父に自分が見守られ、又守護されてゐることを感じた。

天の加護。それは曾て孔子の信じてゐたものだ。そして師もそれを私かに信じてゐられた。

—天の加護がなければ自分は食つてもゆけない人間だ。人間に愛されるには虚僞でも澤山かも知れない。人間の愛は又變り易い信用のおけないものだ。しかし天の加護は心を底の底から清くしなければ得られない。そして天の加護を得るもので初めて本當の安心は得られるものだ。人間を敵とするのはこはくない。天の加護を得られる道からはみ出るのが恐ろしい。それは宗教家にとつては水をはなれた魚のやうなものだ。その時はもうその人は宗教家として死んだことを意味する—

—天の加護とは内面的にあるのですか、外面的にあるのですか—

「天の加護はよき種をたえずまく人にある。その人の言行が接するものの心を知らず／＼清める人にある。よき種をまくことの出來ることは既によろこびだ。之は内面的のよろこびと云つてもいゝだらう。よき種からよき芽が出る。それが又よろこびだ。それは外面的のよろこびと云つていゝであらう。天の加護をうけたる人は自分の心の清く美しきをたのしめる上に、自分の接する人の清く美しきをたのしめる。そして心の清きものから生れるものを自づとたのしめる。内と外とこゝでは力を一にして、その人によろこびを捧げるのだ—

—その人が心の清すぎる爲に迫害されることはありませんか—

—心が清すぎる爲に迫害される。そのことはその人にとつてよろこびだ」

—迫害がひどすぎたら—

「私はまだ迫害されて見ないからわからない。だが、肉體の苦痛は強よすぎる時はあつても、少しでも隙間があつたら自分の正しさに傲りを感ずるであらう。ソクラテスは罪がなくつて毒杯をのまされた。罪がないのに毒をのまされるのかと弟子が歎いた時に、ソクラテスはお前は私が罪があつて毒をのまされるのをのぞんでゐるのか、私には罪を犯すよりは毒をのむ方が幸福だと云ふ意味のことを答へられたさうだが、その權威にあなたは頭がさがらないか。私はそれを思ふと泣きたくなる程、頭がさがる。人間が生き甲斐を感じられる祕密は其處にある。

師はかの僧侶にあつてから目に見えて行ひをつゝしむやうになられた。そして一部分の人から師はもとめずに尊敬されることになつた。師はそれ等の人に自己の確信を語られた。

師の確信はこの世に愛想をつかすのはつかすものの生活が間違つてゐるからだと云ふのだ。師はから云はれたことがあつた。

—自分も今たに瞬間的に生の無意義を感じ生れたことの淋しさを感じることがある。しかしその瞬間は自分の邪路に入つてゐる時だ。少なくも自分の精神が本當には生きてゐない時だ。心のなかが清くない時だ。心が美しくない時だ。自分に與へられた最高のものを生かしきれ

ない時だ。ありがたいとか、清い喜びにふれるとか、或は美のうちに我を忘れるとかする時は生きてゐることを感謝する。聖人や、眞の宗教家の安心立命されるのは、當然なことである。我々も彼等の如き心をもつ時、死を思はない。たゞ涙ぐむ。謙遜をもつて御心のごとくならせ給へと祈る許りだ。そして心に深いおちつきを得る。其處までゆけない時には人生は無意味に見える。だが其處までゆけば人生は無意味だなぞと考へる餘裕はなくたゞ感謝の念やよろこびや平和で心が滿される。神にふれる時肉體の滅亡なぞはよろこびになつても悲しみにはならない、よしある淋しさは感じても、其處には高山の冷たさが伴ふ時もある。しかしそれは恍惚たる喜びだ。其處では死は神へ合致する道になる。自分は夢でその境を時々味つた。死は母のもとに歸るのだと云ふ氣がする。又生きてゐて、生々して、神にふれるのもよろこびだ、權威が自づからわいてくる。要するに神が心にやどるやうに心を清めてまつことが出來る人は幸だ。その人は生き甲斐を感じることが出來るから。兄弟を本當に愛することを知るものも幸だ。愛の内には神が宿るから。ともかく神、天と云つてもいゝ、神とつらなることが大事なのだ。其處では我々は不滅なものの一部となるから」

師はかう反省しながら云はれた。師の一生はこのことを示してゐる。師もかう云はれたことがある。

「俺の一生は神からはなれることが如何に淋しく、神につらなることが如何によろこびであるかを示してゐる。自分はよし人間が神をはなれて生きてゆかれるにしろ、その淋しさの耐へられないことを知つてゐる。又その無意味を知つてゐる。それなら如何にすれば神とつらなることが出來るか。それが人生にとつて一番大事な問題だ。その問題を本當に解決するのが自分達の務だ。自分は一生をもつてその務をいく分かでも果したいと思つてゐる」

自分は師はそれを立派に果したと思つてゐる。たゞ自分の力が足りないので、師の一生を語ることによつてそのことを十分に語れないことを恥ぢる。

自分はこゝで或る女が師に就て云つた言葉をかいておかう。かくことを師はよろこばれないかと思ふが、自分はかく方が本當の氣がする。それをかくと幾分か師が師になつた苦しみを暗示することが出來ると思ふから。

三

（ある女の話）

あなたはあの方を神のやうに思つていらつしやる。實際あの方は親切な方です。そして質素な、贅澤を知らない、酒や煙草をのまない、自分のことよりも他人のことを考へて居る方です。いや、このことは少し疑問にしておきませう。ともかく珍らしい方で、親切な方で、嘘をつかない、信用のおける、不平を云ふことを知らない、意地のわるくない、忍耐づよい方です。そして勉強家で、本氣で、金に冷淡な方です。妾はそれをすべて認めます。しかし私にはあの方に就て一つ疑ひがあるのです。あの方は僞善者ではないかと思ふのです。自分の名を惜しむ爲には他人の不幸を平氣でゐられる方ではないかと思ふのです。

たゞかう云つただけではわからないでせう、私は不幸な友達に就てお話をしませう。

その友達は一度近所に嫁いで來た女でした。それでのあ方にあつていろ／＼話をきいて心がやすまつて來たのです。その時分その友達はあの方のことを隨分ほめてゐました。妾たちけよくからかつたものです。殆んど毎日のやうに

その友達はあの方の處へ出かけてゆきました。あの方のお母さんが心配された程でした。

私達もへんな想像をめぐらしましたが一年程の間は二人の間は清かつたさうです。その間二人の間には何事も起らず、一日逢はないと淋しがる程で、友達は自分をマリヤ・マグダレナに比較して、暗にあの人を耶蘇に比較し、自分はあの方に救はれた、あの方の爲なら死んでもいゝ、あんな人がこの世にゐるとは思はなかつた、なぞと皆にあてつけたものでした。處が一年程たつたら友達はへんにおちつかなくなり、あの方と二人で山や野を歩くのを見た人も二人が人目をさけ、日かけもののやうな態度をとるやうになつたことに氣がつきました。

友達はもうあの方のことは風評しなくなり、あの方の處に他の女客でもあると露骨にいやな顔をしてあの方の處に怒鳴りこんだり、あの方と大聲で云ひあつたりしたこともあつたさうです。

處がその時、あの方のお母さんが不意になくなられたのです。するとあの方はその友達に手紙をよこして以後あなたにお目にかゝりませんからそのつもりでゐて下さいと云つて來たのです。その手紙を友達はやぶいたさうですが、隨分あやまつて來た手紙だつたさうです。そして母の死の原因も二人の關係にあるやうな氣がしてすまないとか、父のことを思つても二人の關係の不正がはつきりしてゐるとかそんなことがかいてあつたさうです。

結婚はしないと初めから二人の間に約束があつたさうです。友達はその手紙を見て半狂亂のやうになつてあの方の處に行つて見たらあの方はもう家にはゐなくつて、旅に出てしまつたさうです。あとに殘したものは殘らず母の片身として村に寄附するとかいた置手紙があつたさうです。

友達はだまされた、だまされたとくやしがつて居ました。妾達もそれからあの方に愛想をつかしました。その後友達は他の人に嫁ぎ今ではもういゝ年輩になり、あの方をうらんでゐませんが、反つて捨てられて幸福だと思つてゐるでせうが、あの方の處に女の人がたづねてゆくのを心配してゐました。あの方は聖人ではない、本當に恐ろしい人です。さう友達は云つてゐます。

四

この話は嘘ではないであらう。師が女をとはがられたのも之でわかると思ふ。師の母は師の二十八の時になくなられた。それから三年間、師は何をされてゐたか誰も知らない。その間、諸國をまはつて歩かれたと云ふ話もあり、山のなかにこもられたと云ふ話もある。ともかくその三年間は師にとつては苦しい年であり同時に大事な年であつたらう。そして自分達の村に來られたのは師の三十一の時だつた。

この女のこと及び、母の死は一生師の内面生活からはなれることは出來なかつた。母のことを話される時、師はよく涙ぐまれた。

――自分は母を喜ばす最上の時に死なしたと思つた。自分のことに安心し、自分の母たることに喜びを感じ、自分を生んだことを感謝し、自分を育てたことに誇りを感じて、母が死んでくれることを望んでゐた。處が事實は自分の失敗の時に、母は死なれた。母は自分のことを心配して死なれた。自分が邪道に入りかけた時に母は死なれた。自分がもし母を心配させるかはりによろこばすことが出來たら母はあんなに早く死ななくってもよかつたのだ。自分は母のことを思ふととり返しのつかないことをしたと思ふ。もう十年も生きてゐてくれたらと思ふ。本當にす

まないことをしたと思ふ。しかし正直なことを云ふと自分は母の死の打撃をうけて初めて本當の決心が出來た。死を恐れない覺悟はその悲しみから生れた。自分はその後も隨分まよつた、あやまちをおかしもし、邪道に入りかけた。その時自分を第一にいましめるのは矢張り死んだ母だつた。自分がまがりなりにもどうかかうか人間らしくなれたのは、そして今の幸福を得られたのは母のおかげだ。母のことを思ふとすまぬと思ひ、とり返しのつかぬことをしたと思ふ。しかし母の魂は死んでからも自分を守護してくれ、自分が善事をすることをよろこばれ、自分が邪道に入る時は泣かれるやうな氣がする」

師はさう云つて涙ぐまれたことがあつた。

自分はなぜ師がその女と結婚されなかつたかそれは知らない。經濟上の事情かと思ふ、他に之はと云ふ理由は自分にわからない。しかし母が死んでから女をすてて逃げられた氣持はわかると思ふ。そして自分は師をせめようとは思はない。師はきつと女の前に跪いてあやまりたい氣もされたらう。少なくも女をせめる氣にはなれなかつたであらう。そして自分が深入りし、謹むことを忘れた爲に女にくらい影をのこすことを恐れられたらう。師は女をすてて運命を遠くから見てゐられたらう。そして女の幸福をのぞまれたであらう。もし女が師の爲に不幸のどん底におちたら師は女のもとに歸つたかも知れない。しかしともかく師は自分の足を清め、思ひ切つて自分の過去を葬り、そして本當に清い生活に入りたくなられたのであらう。

自分は今になつて或日師がかう云はれたことを思ひ出す。

「僧侶が僧侶となる前に關係した女に往來で出逢つた。女は男のことをまだ忘れてゐなかつた。男も女のことを忘れてゐなかつた。二人は目禮してお互に好意を感じた。しかし僧侶は女にわかれてから女のことを思ふと、性慾にせめられた。それでその女をさけた。女は男の薄情をおこつた。しかし僧侶は女と深入りすることを恐れた。もし僧侶が以前その女と清くつきあつただけならば、僧侶は女をさける必要はなかつたのだ。それで僧侶は自分の以前の愼みを忘れたのを後悔した。しかし女に近づくことは出來なかつた。自分はかう云ふ僧侶をせめるわけにはゆかない。それは心を清くし、行ひをつゝしむことによつて女から自づから遠ざかるのだから」

自分はその時、なぜそんなことを不意に云はれたかわからなかつた。今思へばそれは師の父のことを思はれた以上に、自分のことを思はれたのであらう。もしかしたら師はその女にその二三日前にでも道で逢はれたのであらう。ある人が師の處に來て、

「自分が以前一寸いたづらした女がこの頃大へん不幸にしてゐることを聞いたのです。私は前に罪をつくつてゐなければ妻にさう云つてその女を助けたく思ふのです。尤も罪をおかしてゐなかつたらその女の不幸にさう同情をしないかも知れませんが。ともかく私はその女の不幸を同情するのですが、妻がうちにおいてやるといゝと云ふのですが、私にはそれが出來ないのです。おきたい氣もしないことはないのですが、それが恐ろしい氣もするのです。どうしたらいゝでせう」

師はそれに簡單に答へられた。

「うちにおくのは元よりいけません。おきたい氣持があなた達の心の平和をやぶるのに十分です。近くにおくのもいけません。もし純粹にたすけたいなら誰にも知られないやうに、殊に女の人には氣づかれないやうにして助けられるならお助けなさい。家におくなぞとは大まちがひです」

師は性慾を恐れるよりも、心のうちの神聖なものをけがすことを恐れる。それから心の平和を亂すことを恐れられる。

「仲のいゝ、おちついた、あぶなげのない夫婦は見てゐて氣持がいゝ。其處では性慾は心の平和を亂さず神聖を亂さない。さう云ふ夫婦こそ本當の夫婦だ」

「さう云ふ夫婦は澤山あるものですか」

「ある。俺はいたる處でさう云ふ夫婦を見る。それは分に安ずることが出來、己が業をけげむ人間に多く許されてゐる」

師はさう答へた。

五

師はなぜ自分の村に來られたか、之は偶然のことからだ。しかし偶然と云ひ切るのもこはい氣もする。又偶然を生かす生かし方にその人の實力が露骨に現はれるものでもある。

月のいゝ夜師は一人で川岸の細い道を歩いてゐた。すると向うから一人の若者が來た。すれちがひに師はその若者の顏を見た。すぐその男が自殺しようと思つてゐる事が師に感じられた。

師は若者をよびとめた。そして若者のゆく方にある村へ歩くのにはどうゆけばいゝのか聞いた。若者は默つて自分のゆく手を示した。若者は青白い顏をしてゐた。肺をわるくしてゐることが感じられた。

師は若者に禮を云はれて若者のあとに從はれた。若者は歩みをおそくしても師は先にゆかうとはしなかつた。

「私は肺病です。うつるといけませんから先に歩いて下さい」若者は遂々こらへられずに云つた。

「肺病は中々うつるものではありません。私は肺病をもつともこはい病氣とは思ひません。安心して咳でもなんでもして下さい」

二人は默つた。

「肺のわるいのに今時分歩いてはよくないでせう」

「よくつてもわるくつても同じぢやないでせうか。高々百年さきに死なうが、今死なうが、別に大した問題とは僕には思へません」

「それは死んでしまへば同じでせう。しかし生きてゐる間はちがひはしないでせうか」

「ちがふと云ふのは惡魔のいふことですよ」

「ちがはないと云ふ方が今の場合惡魔の言葉のやうな氣がしますね」

「人間は蟲けらと同じです」

「それは自然から見ればさうでせう。しかし人間にとつてはちがひます。人間は生き甲斐を自から感じることの出來る動物ですから」

「それはひとり合點にすぎないでせう」

「厭世はひとり合點にすぎないでせうが」

「あなたは生き甲斐を得てゐるのですか」

「少なくも心におちつきは得てゐるつもりです。いつでも自分を一歩すゝめば生き甲斐は得られるものだと云ふことを信じてゐますから」

「あなたは空想家ですね」

「君の方がなほ空想家でせう。本當に死ぬも生きるも同じことを悟つていらつしやるならこんな月のいゝ晩に川のふちなぞを歩いて見る氣はお出にならなかつたでせう。本當に淋しいと云ふことにあなたはまけたのでせう。そして一寸詩的な事がして見たかつたのでせう。生命をかけても」

若者は默つてゐた。

「君は人生に與へられた本當のよろこびを知つていらつしやいますか。そのよろこびさへ味へば人は神と一緒になつたやうなよろこびを感じることが出來るのです」

若者は不意に泣き出した。師は默つて見てゐ

た。

「私にはもうよろこびは與へられません。あまり淋しい」

若者はすゝりなきして、かるくさう云つて又ないた。

「御尤もでもす。しかしともかく、今日は私のゆく處にいらつしやい。おうちの方さへ心配なさらないなら」

「大丈夫です。私は轉地さきから今日こゝに旅行して來てまだ宿もはつきりはきめてないのですから」

「御飯は？」

「たべました」

「ともかく一緒に來ませんか。病氣のことは氣にしないで下さい」

若者はとう〳〵師について行く氣になつた。師は實に粗末な小屋に居た。疊も薄くすり切れ波うつてゐた。障子もひどくやぶれてゐた。師は其處の圍爐裡に火を燃して湯をわかし、もらつたのだと云つてもちをやいた。

師は、

「今日は本當にいゝ處でお目にかゝりました」

と云つた。そしていろ〳〵聖人や君子の話をした。

「お互に死ぬ時までは生きて人間の爲に少しでも働いてゆきたいものですね。私はよく思ひます、もし自分が肺病になつたら、自分の愛すべき何萬、何十萬と云ふ世界の肺病でくるしみ淋しがつてゐる人の安心を得られる道を出來るだけさがすやうに骨折りたく思ひますよ。出來ないまでも、その淋しさ苦しさのうちによろこびと感謝を本當に掘り出す仕事が出來たら大した仕事と思ひますからね。それは死の恐怖に克つ仕事です。我々は死に克つべきものか、死とよろこんで抱擁すべきものかわかりません、がともかく死の恐怖といかにたゝかふかと云ふことを本當に知るのは同胞にたいする我々のつとめの氣がします」

師はさう云つた。その時若者の目に涙があつた。その晩若者は師の寢床にねむらされた。日光消毒を十分にするから安心してくれと云はれて、その晩若者は生れて初めての異樣な感動をうけた。そして自殺の壓迫からのがれることが出來た。この若者が師にすゝめて自分の村にこさせ、師に少しの土地と小さい家をさゝげたのだ。この若者は自分の村の一番金持の息子だつた。その後病氣もなほり、師の價値をとくことにつとめた。自分もこの男によつて師を知つたのである。

六

自分が師に逢つた時は自分の一番偶像破壞的の氣持の時だつた。それで師を村につれて來た男から師の話を聞いても別に逢ひたくも思はなかつた。金持に媚びる坊主の一種のやうに思つてゐた。金錢に淡く、粗衣粗食を恥ぢないのを反つててらつてゐるのだときめてゐた。どうせ逢つても大した奴ではない、つれて來た男は人がいゝからだまされもしようが、自分はだまされはしない、そんな風に思つてゐた。そして師に偶然その男の處でおちあつても興味をもたないやうな顏をしてゐた。實際逢つても偉いとも思はれなかつた。たゞよく語り、よく食ひ、よく笑ふ、見えをかまはない、氣持の思つた程惡くない、聖人ぶらない男だと思つた。しかしそれだけ偉いとも思はなかつた。呑氣な世間話を大聲でして、笑つて茶をのんだり食つたりしてゐた。その時分師は美食も敢てさけようとはされなかつた。食ひしん棒のやうに見えた。しかし無邪氣で、媚びると云ふやうな所は見えなかつた。自分は段々師とおちあふのが好きになつた。そして師が時々意識もせずに云ふ言葉に同

感を感じないではゐられない時があつた。
或日だつた、自分は又その男の處で師に出逢つた。話は死と云ふ問題にうつつた。
「あなたは死を恐ろしく思はれませんか」とその男が聞いた。
その時師は、
「恐ろしいとよく思ひます。死んでもいゝ、自分なぞは死刑に處せられてもいゝ人間だと思つたこともあります。しかし死は恐ろしい、今死んでは大へんだと思ふこともあります。しかし私はその時自分を本當に生かしてゐるかどうかを見ます。私は自分を本當に生かしてゐる時は死を恐れない、たゞ自分を生かし切れない時に死が恐ろしく思へると云ふことを知ります。ある畫家が最後の傑作の佛像をかく時、それが出來上れば死んでもいゝ、それが出來上るまでは生かしてほしい、自分の最後の筆をつける時に同時に死にたい、さう心に願つて佛像をかいたさうですが、その氣持がわかる氣がします。力を出し切つた時死はなつかしいものにちがひないと思ひます。私達の死を恐れるのは現在自分の力を最善に生かす道を知らないからです。君達とかうして話してゐますね。私達の話がまだ本當の深い處から生きて來ない間は、私達の現在の生活は自分達を本當に生かしてゐるのではないのです。だから死が恐ろしい。死が問題になる。しかし私達が眞心に動かされて目に涙をためて心の底から話し合ふ時、私達は本當に生きた時で、その時はよろこびを感じ、感謝の念にうたれて、死のことなぞは問題ではなくなる。永遠と合致する時、死がどうすることも出來ないのはあたりまへです。自分を本當に生かしきれる、その人には死は問題にならない。耶蘇はどんな時でも、本當に生きることを知つてゐた。だから耶蘇には肉體の苦痛はあつても死は問題にはならなかつた。一寸の會話ですら、心の底が生きてゐる。それにふれると死は問題ではなくなる。それは死よりももつと深い生命の流れにふれてゐるからだ。「罪なきもの先づ石にてうつべし」この言葉の深さにふれたものは心がをのゝく、あの時之以上の言葉はどうしたつて發せられない。さう云ふ言葉をぴつたりと發せるやうに心が本當に生きてゐるものには死は問題にはならない。私の僅かな經驗でも眞心がぴたりと生きた時には、すべて否定的な氣分は消えてしまふ。それが生かせない時は死の恐怖はくる。だから私は死の恐怖を感じる度に自分の德の足りないことを痛切に感じます。死の恐怖を與へてくれたものを呪ふかはりに、自分の力の足りないことをあやまりたく思ひます」
「しかしいくら耶蘇でも山上の垂訓をしておりて來て病氣になつて死んだら、あの垂訓は今の世に殘らず、耶蘇の仕事は成就されなかつたでせう。いくら眞心を生かし切つた時でも、死が早く來すぎると云ふことはあり得るでせう」
「人間の目から見たらさうです。しかし神の目から見ればさうではありません。眞心をもつてゐる人で仕事を完成せずに無名で死んだ人はそれこそどの位あるか知れません。そして私達は實際その無名の人のおかげで眞心の力を人類から失はれずにすますことが出來たのです。眞心は亡びません。人は死んでもその人の眞心は何處かに生きてゐるのです。物質でさへも不滅の法則に支配されてゐます。眞心も何處かに生きてゐてそれが又人間の内に宿れる機會を待つてゐます。この地上に眞心は充滿してゐます。私はそれをよく感じてゐる。自分の内の眞心が少しでも生かされると、その世界に充滿してゐる眞心が私に味方をしてくれる。耶蘇の眞心も、佛陀の眞心も地上の何處かにかくれてゐる。そして私の眞心にそれをよびよせる力が出

來ればすぐその眞心がやつて來てくれる。そして私の感じをすなほに云ふのを許してもらへると、この世には無名な恐ろしく大きな眞心が、すべての人の眞心が其處に歸つてゆくかと思はれる程の眞心がある。それに自分の眞心がふれる時、死は何するものぞと云ひたくなる。私はそれを感じてゐます。私が罪を恐れるのは地上の名譽をきずつけるのを恐れるよりも、むしろこの眞心に擯斥されるのを恐れるからです―

師がさう云つた時、權威あるもののやうだつた。自分は師の言葉にたいしては半信半疑だつた。しかし師を尊敬する念は段々萌し出した。そして師に逢ふと心が清まり、そして靜まるやうな氣がした。

自分に師が田舍にうづまるのを恐れて、もつと方々へ傳道されたらどうかと云つたことがある。師はその時から云はれた。

「傳道もいゝでせう。しかし私はこゝにかうやつてゐるのもいゝと思つてゐます。本當の傳道は言葉や行ひではなく、もつと深いものによつてです。私がもし眞に人類に役立つ人間ならば、私はたゞ默つて自分の心をます／＼清くし神の命ずるまゝに日常生活をつとめるやうにすればいゝのです。さうすればそれが人類の根を又清めることになるのです。私はそのことを信じてゐます。それですから自分が無名で一生を終つても、人類は私がお役に立つだけのことは立たしてくれるのです。それを心配するのはまだ信仰がうすいからです。私は無名な人の味方です。有名な人々の内にも元よりいゝ人がゐます。しかし無名な人の内に更にいゝ人がある。それで人類がたもたれてゐるのです。有名になれる人は何十萬人に一人です。それ以上は人間の頭で記憶するわけにはゆきません。記憶されるのが目的では人間に安心は出來ません。私は無名なものの味方です。そして自分も無名な人として一生を終るつもりです」

「それは惜しい氣がします。もし假りに耶蘇のやうな人の名がこの世に殘らなかつたとしたらどうでせう。耶蘇が無名の人としてをはつたら」

「それは歷史的には大したことでせう。しかし私は耶蘇に匹敵する數人の人が無名でこの世から消えていつたことを信じてゐます。それ等の人は人間の意識出來る範圍ではこの世から無意味に消えていつたやうに見えるでせう。しかし私は決してそれ等の人が無意味に消えたとは思はないのです。否、その人は我等の心の底を耶蘇にまけない力をもつて清めてくれてゐるのです。人類の品位はさう云ふ無名の人にどの位恩をうけてゐるかわからないのです。耶蘇は洗禮のヨハネをほめた時に、しかし天國のいと小さき者もヨハネより優れてゐると云つてゐますが、天國の人の名は人間には知られない。だがさう云ふ人がゐて我々を清めてくれ、我々の眞心の力をつよめてくれ、そして人間に生れたよろこびを感じさしてくれるのです。決して有名な人許りが我々の生命を保つてくれてゐるのではありません。我々は人に知られない善行にどの位恩になつてゐるかわからないのです。我々の眞心には釋迦、耶蘇にまけない力がある。それが生き切れば、今の世でも世界は動くのだ。決して有名な人の眞心だけが人の心を動かすのではありません。私は無名な人の眞心が世界に充滿してゐることを感じます」

師はさう云つた。實際師は他人に自己を知られようとはしなかつた。だから自分が師のことをかくのもよろこばれないかも知れないとも思ふのだ。だが自分に書かないのは惜しい氣がする。

又師はある時、有名になりたがる人を見てかう云はれた。

「自己の生命が殘ることを欲しないで、自己の名だけをのこしたがつてゐるものがある。自己の名はのこつても、中身は他人の人がある。それは恥をのこすに過ぎない。私は名をのこすよりも自分の精神をのこしたい。何百萬、何千萬、何十億萬の人と同じく私は無名でいゝ、しかし自分の魂をこの世の何處かにのこして、自分を最も愛してくれる魂にまかせる。その魂は私の魂によつて力づけられ、勇氣を得る。私の助けをうけてゐると云ふことは知らずに。それでいゝ。私はそれをよろこぶ―」

自分にはそれ等の師の言葉に同感出來るとは云へない。だが有名になりたがると云ふぼん惱に打ち克つことが萬人を救ふものにとつては必要缺くべからざることだと云ふことを知つてゐる。そして目に見えず、又知られざる善行がつみ重なる時、其處に見えない神が宿り、その人を祝福することを師と共に信じるものだ。その神は無名であつて、何萬と云ふ無名な人の眞心から生れたものだと師は云はれたが、さう云はれるとそんな氣もする。

ともかく師は恐ろしく眞心の力を信じ、一人の人の心の底の底が動けば、他の人の心の底の底を動かすことを信じて居られた。「もしこゝに一人の人があつて、自分の心を最も貴く動かすことが出來たならば、その人は言行の助けを借らずに、もつと直接に人の心を貫く動かした人だ」と云ふことを信じてゐられた。しかし師は饒舌る時はよく饒舌り、働く時はよく働き、そして道をとく時うむことを知らなかつた。

「眞心が一番直接に眞心にふれるならば、道をとくと云ふ事は不必要に終りはしないのですか」或人が得意さうにさう云つた時、師は、

「そんなことはない。道をとくのは眞心の銹をとるのだ。眞心の曇をとるのだ。眞心が本當に生きるのをさまたげるものをのぞくのだ。そして眞心が本當に生きるやうにそして人間に生れた權威を感じることが出來るやうに骨折るのだ。もし日常生活に眞心を機會が與へられる度に生かすことが出來るものには言葉は不必要であらう。しかし多くの人はまだ言葉の御厄介になることで、自覺を得、信仰を得るのだ。言葉なくしては折角眞心が動いても意識にのぼらずに消えてゆくのだ。心の底を動かすのは眞心だ。だがその眞心のありがた味を意識するのには今の人はまだ言葉の助けをからなければならないのだ。聖人同志には默つてゐても話が出來る。だが普通の人には道をとくのに言葉が必要だ。説明が必要だ。面白味のある説明を聞いて初めて半ば合點がゆくのだ。本當に合點がゆく人には言葉は不必要だ。しかし今の世にはそれはまだ許されない。だから昔から聖人も言葉を惜しまれないのだ」

師は又陰日向をする者に就てから云はれた。

「多くの人は人の見えない處でいゝことをするのは馬鹿氣てゐるやうに思ふ。それは賞められるべき代價を同じく拂つておきながらほめられないから損したやうな氣になるのだ。同時に見えない處でわるいことをするのは罰を受けるべきことをして罰をうけないですむので得したやうな氣になる。しかし大事なのは見えない處で己をつゝしみ、わるいことをしないやうにし、心を正しくすることだ。見えない處につゝしむことを知らないものは自己を下等にする。見えない處で謹みを重ねてゆくもののみ、神の愛をうけ、運命の守護を受ける。多くの人は自己の心を清くするより、心なき他人の思はくを氣にする。他人からよく思はれたがり、賞められたがる。その爲に自己の眞價のくだるのを顧慮しない。自分の眞價を下等にして初めて得られる他人の賞讃よりは、自分の品位をたかめて他人の罵詈を甘受する方がどの位られしいかしれな

い。賢人はこのことをよく知つてゐる。人間誇りを相手にしてゐるものにはこの氣持はわからない。馬鹿氣て見える。しかしこの馬鹿氣たことが實は人生にとつて一番大事なのだ。人に見られる見られないは問題ではない、自分の心に神をやどすのが大事なのだ。自分を神の愛兒にするのが大事なのだ。それには陰日向は一番いけない。こゝに二人の人がある。一人は人に見える處で實によく氣がつき、親切でもあり、勉强家でもある、他の一人は我儘で他人のことはあまり氣にしない。たゞ自分の心をいつも清く持たうとしてゐる。多くの人は前者を善人と云ひ、後者を我儘者とよんでゐる。しかし前者の容貌はへんに俗になり、後者の容貌は次第に精神的になつた。前者は心のおちつきを得ないが、後者は心のおちつきを得てゐる。この二人のどつちに君達はなりたいか。云ふ迄もないことと思ふ。陰日向するものは何となく他人に賤しめられるのは無理のないことである」

自分は又かきすぎたかも知れない。

その後自分は師の處によく行くやうになつた。そして師の處によく出入りする五六人の若者にも出逢つた。皆氣持のいゝ若者達であつた。

七

師はよく若者と一緒に山に登られた。遠くに海が見えるのをよろこばれた。

「この世を假りの世の中とするにはあまり美しすぎる。空の色、水の色、草木の色、それ等の美しさは無限を思はせる。この美を本當に知れば我々は自分達のこの世に人間として生れたことの幸福を感じないわけにはゆかない。この世は美しいものが多すぎる。多すぎる爲に我々は無頓着になる傾きがある。しかしこの世のなかに無限の美しさを感じることが出來ないやうにこの世がつくられてゐたら、或は人間がつくられてゐたら、さう思ふ時、自分はこの地上に生れたことを感謝する―

「それでもこの美しい自然のうちに地獄のなかに居るやうに生活してゐるものが多いでせう」

「それ等の人は蟲けら以上にまだなれないのだ。まだ人間になりきつてゐないのだ。そしてつまらぬことに拘泥しひつかゝつてゐるのだ。私はまだ本當に人間になりきつた人の不幸を知らない。勿論、この世には悲しみも、苦しみもある。どうしてい丶かわからない時もあるだらう。だがそれはその人の特別な境遇に陷つた時に限る。それは例外だ。普通として人間になりきつた人は運命をおそれ、つゝしむことを知り、自分の責任を知り、そして感謝とよろこびを知る。自分のやうなものには天寵がありすぎる、勿體ないと思ふ。自分が不幸な種をまきすぎてゐながら幸福にしてゐられる。病氣になつても仕方がない氣が常にしてゐながら健康の時が多いことに感謝する。そしてたまに罰をうけると自分のわるかつたことに氣がつき、なほつつしみ、自分を責める許りだ。さう云ふ人間が本當の人間だ

「さういふ人間は意氣地なしになりはしませんか」

「そんなことはない。よろこびを内から感じ、感謝の念が内にあふれてゐるものがどうして意氣地なしにならう。彼はます〳〵生々した男になつて、正しい方に進んでゆく。彼は常に内に勇猛心を失はない男だ。大勇猛心を失はないやうに彼は常につとめてゐる人間だ。意氣地なしは日陰ものだ。彼は日向者だ。意氣地なしにはなりたくもなれないものだ。神は彼の味方をしてゐる。陰うつな時があつても、それはせかれる水だ。更に勇氣をふるひ起させる助けになるにすぎない。眞の勇氣はさう云ふ人から出る。

決してつゝしむことを知らない、勇氣を安賣りするものからは眞の勇氣は出ない」

「先生何か話してくれませんか」

或日一人がさう云つた。

「話さう」師は機嫌よく云はれた。「神樣がこの世の中に不仕合せな人をたづねて歩かれたのだ。何處へ行つても神樣は不仕合せな人に逢ふことが出來なかつたのだ。病人の處へゆかれると、今まで苦しがつて癇癪を起してゐた病人が神樣の姿を一目見ると、急にうれし涙をながして、ありがたい、勿體ない、私のやうな人間が皆さんに親切に看病されて野たれ死もせずに死んでゆけるのも、皆さんの御かげだ、今迄氣ずゐなこと許り云つたのはどうか許して下さい、皆さんがいつもよくして下さつたことはお禮の云ひやうはありません、私は幸福です、死ぬことも幸福です、私の心はよろこびで一ぱいです、さう云つて病人は死んでしまつた。それで神樣は之でいゝと思はれて、今度は刃物をもつて切りあつてゐる男の處にゆかれたのだ。二人は自分が死んでも相手を殺さないではおかないと云ふ有樣で喧嘩してゐたのだ。處が神樣の光が二人の男を照らすと同時に、二人は刃物をなげすてて、二人で抱き合つて男泣きに泣いたのだ。許してくれ、許してくれ。俺がわるかつたのだ。俺の方がわるかつたのだ。今迄通り兄弟のやうにしてくれ。二人は涙をこぼしてよろこび合つたのだ」

「どうして今まで喧嘩してゐた人がすぐ仲なほりしてしまつたのです」或人が聞いた。

「それは神樣の光がその人達の心を照らしたからだ。そして自分のわるいことに、一時に氣がつき、相手が自分によくしてゐてくれたことを一時に思ひだし、ごく一寸したことからムキになつて腹をたてたことを心から後悔したのだ。さう云ふ風に神樣はいたる處で、光が暗をさがして歩くやうに不幸や罪惡をさがして歩かれたのだが、折角、不幸や罪惡をお見つけになると、その不幸や罪惡がつよければつよいだけ、悔い改めや、和解や、感謝のよろこびが二倍も三倍もされるので、神さまは大へんよろこばれて、人間と云ふものはどうしてから可愛いのだらうと思はれた。そして得意になつて惡魔にお逢ひになつて人間と云ふものは、野たれ死しても、殺されてもよろこんでゐるものだね、十字架にかけられて勿體ないと云つてゐる奴まであると云はれた。惡魔はその反對のこと許りきり見てゐないので、人間程圖々しい慾のふかいあてにならない者はありません、千人の女を弄んでもまだ滿足せず、人間の腹をさいてもまだ慘酷な性を滿足させず、今和解してありがた涙をこぼしてゐるかと思ふと、もう本氣になつて呪ひあひ、にくみあひ、殺しあふものです。そんなことはない、人間は憎みあひ、殺しあつてゐる最中でもすぐ和解するものだ。其處で二人は益々議論をしたが、お互にまるで反對のこときり見てゐないので、はてしがつかなかつた。其處で二人は太陽をよんでどつちの云ふことが本當かを聞くことにした。太陽は二人の話を聞いて、お二人の云ふことは兩方とも本當です。それが人間ですと云つた。ふーん、さうかな、人間と云ふ奴はへんな奴だな、さう神樣は云はれた。何かもつと云はれたかつたのだが、丁度その時用が出來たので、その話はそれでおしまひになつた。私の話もそれでおしまひだ。どれ、山をおりて、畑でもたがやさうか」

自分達は時々師の畑をたがやすことを手つだつた。師も亦、いろ〳〵の人の處に出かけて耕作の手つだひをされた。あまり上手ではなかつた。時々何か考へてゐられた。しかし耕作の仕方は丁寧で親切だつた。師も害蟲は殺された。

「もつといゝものに生れてこいよ」師はある時

さう一人言された。

「害蟲を殺すのはいゝことかわるいことか知らない。惡いことだと云ふことがぴつたりわかるまで、いやだがなるべく殺すやうにしてゐる。」

自分はこの事に就てはへんに氣になつていろいろの人の意見を聞いて見た。殊に殺生戒をやかましく云ふ僧侶にも聞いて見た。しかるに腑におちた答を得たことはない。皆あいまいにきり答へてくれない。自分はかう云ふことはあまり氣にしない方が本當かとも思ふ。しかし殺す時、彼等の死にたがらない本能がかすかではあるが、はつきり感じられる。その癖殺さないのも氣になる。一たい世の中には矛盾したことが多い。一々どつちかにかたをつけないと氣がすまない人間には困る問題が多すぎる。自分は自分が神でないことを知つてゐるからさう云ふ問題に出くはしても、そのまゝにぼんやりさせて、はつきりわかるまで別に氣にしないでゐられる筈だが、害蟲を殺すのがわるいことであるのをはつきりわからない爲に殺すのだと彼等にすまない氣もするが、殺さないと氣になる百姓根性に從つてゐる。いゝことかわるいことか、氣にするのがをかしいのか氣にしないのがをかしいのか知らないが、自分は殺す方に今は從つてゐる。彼等に罪のないことは知つてゐるが、農夫のたんせいを無にするわけにもゆかない。わるいくじを引いた蟲たちのもつとよきくじをひくことをのぞむだけだ」

「生れかへるものでせうか」自分は師の一人言を思ひ出して聞いた。

「いや私にはよくはわからない。だが生れかへらないものとも云へない。自分の感じではむしろ生れかへるものだと云ひたい。それはしかし佛教で育つたからかも知れない。ともかくさう云ふことはまだ〳〵自分にはわからない。實際自分にはわからないことだらけだ。そして別に今の處わかりたいとも強く思へないことが澤山ある。たゞ自分にわかつてゐることは自分がこの世に人間として生かせられてゐることだ。そして人間として生きてゐる間、人間の爲に働いて、出來たら人間に生れただけのことをして、この與へられた生命を出來るだけ貴くつひやしたいと思ふだけだ」

師は畑をたがやしながら云はれた。

自分は師の言葉をかきすぎるやうな氣もする。だが書けるだけ書いておきたい。

はつきりおぼえてゐないで、意味をかきちがへる恐れのあることはかゝないが、はつきり覺えてゐる言葉はかいておきたい。自分の筆によつて師の言葉が歪になり、淺薄になり、力がよわめられることを自分は恐れてゐる。だがかけるだけは書きたく思ふ。

何かの意志が自分にそれを命じてゐるやうだ。だが恐ろしい。果して出來るかどうか自分にはわからない。たゞ自分は純粹な氣持でかけるだけかいて行かうと思ふ。その他は自分の力ではない。何かの意志にお任せするより仕方がない。

八

師は常にかう云はれた。

「自力で出來る間は不淨なものが入りたがる。自力のかぎりをつくした處には不淨なものは入らない。絶望的になるか、宗敎的になるかどつちかだ。その自力の働き方が惡ならば絶望に陥る。しかしそこに何か光明的なものがあれば、宗敎的になる。何かが自分を守護してくれてゐる氣がする。そしてそれは自分に出來ないことを許してくれ、そして自分が出來ないことをそのものにお任せする時よろこんで引受けてくれる。それで安心が出來る。心にひけめを感じることに全力を出したものにはその安心が得

られない。だから絶望的にならないわけにはゆかない。自分達は自分の力のかぎりをつくしてあとは何かにお任せの出來る仕事を一生してゆきたいものだ」

今の自分には師のことをかくのが僭越のやうな氣もする。かいても始まらない氣もする。だが自分は全力を出し切つて、野心も何もなく、人のよむよまないも考へることなく、たゞ自分の力の不足を感じる時、妙にすべてを何かに任せて、ともかく書ける所までかいて見ようと云ふ氣になる。この書が誰の心にひゞかなくともそれは仕方がない、ともかく自分に許された仕事を果さう。この書が埋れたまゝ誰の目につかなくも自分は自分がこの書をかく爲に自分の心を働かしたその心は何處かに響いてゐるにちがひないことを信じる。小は小なりにも。

師の周りにあつまつた若者に文學好きな男があつた。そしてある小說をよんで感心して師によむことをすゝめた。師は二三枚よんだが、

「こんなものが面白いやうぢや駄目だよ」と云つてその本を投げすてた。「これはつくりものだ。精神がない。人間の心がない。下等な趣味がある許りだ。趣味は馬鹿には出來ない。人間の上等下等はその人の趣味でわかる。下等な趣味は人の心をくさらし、心の平和を亂し、虛僞にし、人間にたいする信仰を失はす。この本をかいたものは恐らくキザな生意氣な半可通なごまかすことの平氣な奴にちがひない。もつといゝものをよんで、こいつの下らない、無責任な、人をだますこと許り考へてることがわかるやうにならないと心細い。之は心をがさつにする本だ」

「二三枚きりおよみにならないぢやありませんか」

「二三枚で澤山すぎる。半枚よむのだつて心のけがれだ。くさつた魚の臭を一分もかゞされてはたまらない。くさつた人間の心に自分の心を一致させるのはなほたまらないよ。君にも今に僕の云つた意味がわかる時があるだらう。又それをのぞむ。この作者が今の世に重く見られてゐるならば、それは今の人間が、正しき趣味と云ふものを知らないからだ。心のくさつた臭に無感覺になつてゐるからだ」

文學好きな若者は不平さうな顏をしてだまつてゐた。その男が歸つたあとで師は云つた。

「あの男はきつと今に俺の處に來なくなるだらう。あの小說が面白いやうぢや、俺の云ふことは面白くないにちがひない」

果してその男は、まもなく師のもとを去つて、東京へ出てその後可なり有名な小說家になつた。師はその男のかいたものを半頁程よんで、

「さすがくさつた心の臭さを知らない男の書きさうなものだ。何にもないのにありさうにかいてゐる」

師は又、畫に就ても一種の見方を持つて居られた。

「俗な畫が好きな奴は俗な奴だ。この畫の俗さは見てゐて胸がわるくなる」

「この淺薄な甘さ、はきたくなる」

「この何にもないくせにありさうに見せようとするもがき方」

しかしいゝものを見ると隨分感心された。

「さすがに一生を畫に捧げた男のかいたものだ。俗な所が少しもない。まじりつけがない。こつちの心にぢかにふれる。かうならなければ本當でない。不思議に人の心を清め、生々させる。そして萬物にたいする愛を深める。美と云ふものは不思議なものだ。美を意識でつくり出さうと思ふものは馬鹿だ。美を感じるのはその人の心の深さに比例する。多くの人は美をかゝうと思つて綺麗ごとをする。しかし其處には心ない人間の淺薄さが露骨に見える。本當の美の

わかるものは、無限の深さにふれる。無限の深さから許り美はあふれ出る。細工からは美はあふれ出ない。何ものにも歪にされず、人間の淺はかさが出る限もなき時にのみ美は顯はれる。すべてがやきつくされて自力が他力にふれる處から美はあらはれる。だからすべてよき藝術は永遠を思はせ、そして宗教的な感じを與へる。繪筆をとる時、無限にふれられるものが眞の畫家だ。畫家はあらゆる材料を通じて神を見るものだ。文學でも、音樂でもさうだ。それ以外のものはまやかしだ。商賣だ。職業だ。金錢以上のものはない。人間のまやかしも隨分多い。金錢以上に出られない人間も隨分多い。それは人間になり切れない人間だ」

九

自分達のうちにへんな俠客肌の強さをくじき弱きをたすける傾向の強い人がゐた。その人は理が非でも弱きに同情したがつた。自分にたよるものに味方した。師はその人にかう聞いた。

「君は獅子と狐とどつちがすきだ」

「獅子です」

「しかし獅子の方が強いぜ」

其處で皆が笑つた。その時師はかう云つた。

「なんでも強いものにつくは元より醜い。さう云ふ人が世の中には多すぎるのだから偶には君のやうな人も居てもよいかも知れない。だが正しきものより不正なものが弱いときに不正なものの味方をするのはよくない。その不正をしないではゐられない境遇に同情するのはいゝが。常に正しきものの方に味方し常に尊敬すべきものと尊敬すべからざるものとの區別をはつきりして、正しく、そして優れたる強者には尊敬をはらふことを忘れてはいけない。強いものに手向ふ根性に少しでも猜みや嫉妬や憎が入つてはいけない。元より社會的の強者は不正をしやすい位置にゐて、無理を通して、道理をひつこめがちだ。さう云ふものに味方するのは賤しむべきだが。其處の點をはつきりして、大事なのは常に正しいものに味方し、常に德義的に優れたものを尊敬することを忘れないことだ。俠客肌となると人間が簡單に、淺薄になりたがる。よし引受けた安心しろなぞと云ふことは自分のすることが何處までも正しいことを信じられる時、はじめて云へることで、それを本當に自分の力を知るものは容易には口にしないものだ。強いものにかつのにより強力をもつてするものは、更に強いものにあつては動きがとれない。我々は正しきものに味方し、強力にまけても、なほ人の心にかつ力にたよらなければならない」

自分達の仲間に又理窟好きな人がゐて、よく理窟の爲に理窟を云つた。師はそれを默つて聞いてゐたが、不意に云つた。

「君はなんの爲に理窟を云つてゐるのだ。本當のことを知りたい爲に云つてゐるのか。理窟を弄ぶ爲に云つてゐるのか。理窟にかつ爲に本當のことからどんなに遠ざかつてもいゝと云ふ勢ひは心ある人が聞いてゐると醜いものだ。少し用心した方がいゝ」

師にある人が聞いた。

「あなたでも腹を立てることがありますか」

「腹を立てることはある。腹をたてるのはまだいゝ。他人にへんに不快を感じたり、他人が困ることをのぞむやうなこともある。僕には皆のもつてゐる惡い點がわかるのは自分の内にそれ等の種があるからだ。他人が十分に尊敬しないと不服に思ふこともあれば、おだてられて内心得意になつてあとでがつかりすることもある。しかし自分はそれを反省して自分のわるい時はちやんと自分で知つて、それを未然にふせぐやうにする。自分のわるいことを他人のせゐにはしないやうにする。自分の心が何となくおちつ

かず、不愉快な時は、その原因を顧みる。そして其處に自分の至らぬ所を見出す。自分は自分の至らぬ所を發見することが出來ずには他人に不快をもつたことも、腹を立てたこともない。その時はきつと自分の方に蟲のいゝ所を見出す。だから他人を憎んだり、不快に思つたりするのは恥かしい。自分の蟲のいゝのを棚に上げて他人の蟲のいゝのをせめるのは、蟲がよすぎて恥かしい。その上、自分は出來るだけ自分をよくするのを自分の本職にしてゐる。本職で他人に負けるのは恥かしい。君達も自分を出來るだけ立派な人間にするのを本職にするがいゝ。それには第一反省が必要だ。他人を責める前に自分を省みるのが大事だ。さうすれば相手の氣持が理解出來、自己をよくすることよりも損させないことを本職にしてゐるものと自分が同等の立場に立つて腹をたてることの大人氣ないことを恥ぢるだらう。自分は多くの人に負けない不淨なものを持つてゐるが、多くの人はそれを自己の本體と思ひ、それをのさばらすだけのさばらすことを當然と心得てゐるが、自分はそれを人間の本體と思はず、反つて人間の本體をけがすものだと云ふことを知つて、それに打ち克つことに自覺せるよろこびを感じる點だけがちがふ。心が清淨で誰にも不快を感ぜず、心の底がすんでゐる時のよろこびはかく別だ。自分はそのよろこびを知つてゐる。そしてそのよろこびにはなれることを強ひられた時、なるべくすなほにそのよろこびに歸らうとするものだ。そのよろこびを心に感じる時、初めて他人を同胞のやうに思ふことが出來、愛をもつて兄弟とか姉妹とか呼ぶことが出來るのだ。他人の心を自分の心と一つにすることが出來るのだ。心がそのよろこびに至らぬ時、自分は自分の心がそのよろこびに至らぬ時、自分の至らぬことを自覺する。そして其處までゆけるやうにつとめ、其處までゆけないとその罪を自分に歸させる。七十にして則をこえずの域に達した孔子、三十三で十字架にかゝつて、彼等に罪はない、彼等は何も知らないのだと云つた耶蘇、皆自分の手本だ。他人の自分にたいする態度を責めるのは自分の至らぬ證據だ。さう云ふ根性が萌したら、自分の至らぬことを恥ぢてそれに克つやう努力してまちがひない。自分はそのことを本當に知つた點で、多くの人より幸福なのだ」

✝

「心が清くなる時、心は無限に接する。その時心からあふれ出るものは無限からあふれ出る。其處に善惡を越えた美があらはれる。又自他の境をこえた愛があらはれる」

「心を清くするにはどうしたらいゝのですか」

「一番身體の健全な時は身體のことを忘れてゐる時だ。それと同じく一番心の健全な時は心のことを忘れてゐる時だ。他人の思はくや、見えをかまつて正直になれない時は、何處か心にわざとらしい所が出來る、それをさけて出來るだけ正直にすなほにするより仕方がない。自信がないとつい自分を自分でないものに見せたがる。さう云ふものは心が清くならない。それから他人に不快をもつたり、不平をもつたりしては心がすなほにはならなくなる。心を平靜にして何ものにも邪魔にされず、邪魔が入つた時はそれを内からあふれ出る正直な心ではねのけて本當の心を表はすやうに骨折ると、段々心が清くなる。心を清くするには先づ正直になつて、自分の思つたことを一々反省して其處に不純なものがあつたらそれをとりのぞくやうにしなければいけない。花を見て美しいと云ふ。それが本當に美しく思つて云つたのなら、それは心の清い時だ。しかし美しいとぴつたり思はずにたゞそんなことを云つて見たのなら、その人

の根性が其處に露骨に出る。自分でそれが氣がつくと恥かしくなる。さう云ふ時は默つてゐる方がいゝ。ぴつたりものを感じる時、ぴつたりものが云へる時、その人の心の清い時だ。成心があつて何か云ふ時、その人の根性が顔を出す。その時は清くない時だ。それをよく知つてぴつたりものを感じたりものが云へたりするやうに心がけ、その境に入らない間、知つた風なことは云はないやうに注意すべきである」

「ぴつたりものが云へない時は默つてゐる方がいゝのですか」

「默つてゐては用がべんじない時があるだらう。しかし默つてゐることが出來たら默つてゐる方がいゝ。さう云ふ時に云はれた言葉は、その人のさもしさを示す許りで、生きない。權威がない。それは無限からあふれ出てゐるのではなく、あわてものの淺薄な根性から出てゐる。物云ふと脣さむしと云ふ感じがする。眞の言葉は無限から出て一言一句、權威をもつ。それでこそ言葉が生きるのだ。眞心にひゞくのだ」

師は又云つた。

「心の清さは雲のない時の空のやうなものだ。無限の清さをもつ。しかし雲をつらぬいてかゞやき出る日光も亦美しい。時にあまりに清淨な人よりは濁りのある處に無限から出る光が反射することで、反つて人間らしい美しさを見せる人もある。又かの耶蘇の死などはとざされた雲をたち切つて日光が照りかゞやいてゐるやうに限りなく壯美だ。十字架の苦痛をつらぬいて輝きわたる人の子の神々しさ。それは崇高の極みだ」

師は限りなく青空を讃美する、又限りなく雲のさけ間に見える青空を讃美する。又たゞよふ雲が日光にいろどられるのを讃美する。皆太陽の限りなき深き心のあらはれだ。神の如き人の心も亦そんなものだと云つた。

ある人が、「來て見れば聞くより低し富士の山、釋迦も孔子もかくやあるらん」と云つた和歌を面白がつたのを師は聞いて怒つた。

「馬鹿ものに何がわかる。馬鹿ものは釋迦や孔子のうちの糞を掘りあてる。釋迦や孔子の限りなき高さのわからぬことを自慢にするものは、自分の馬鹿で、生意氣で、淺薄で、無智で、美のわからないものだと云ふことを廣告して歩く奴だ。來て見ればなほも美し富士の山、釋迦も孔子もかくやあるらん。さう云ふ歌の方がどれだけ本當か知れない。生意氣な小猿に逢つてはかなはない。そんな奴は耶蘇を見て、お前は女を見て色情を起さないか、片輪もの奴と云ひかねない奴だ。恐ろしい恥知らずの奴だ」

十一

師のまはりに若いものがあつまり出し、師の影響をうけるに從つて、師を中傷したり、憎んだりするものが出來た。

殊に師が今の僧侶を非難して、

「宗教の元來の性質は生きてゐるものゝ爲にあるのだが、今の僧侶は死人にとつてより外役にたゝない」

と云つたのを聞いて、ある僧侶が怒り出した。僧侶の世間的信用をおとして得をしようとする商賣がたきとして師を憎んだ。

しかし師は別に氣にしなかつた。しかしその爲に師の處にくる若者のあるものは父や母に反對され、あるものは師の處にくることを禁じられ、又監禁同樣の目にあつた若者もあつた。しかしそれが爲に若者の師にたいする愛は增されても減じはしなかつた。自分も母に反對されたが、師のことをくはしく話したら、そんな方ならお逢ひしてもいゝと云つた。師は來る人をこばまず、去る人を追はなかつた。自分の正しいと思ふことを云ひ又行ふことをやめない許りで

はなく、月日と共にます／＼師の立場はつきりして來た。

師は益々權威あるもののやうに自分達には思へた。自分の心を不淨にすることより他何にも恐れないやうに見えた。そして眞心の光が他人の心を照らすことを邪魔するもの以外には師は寛大だつた。しかし眞心から出る光でないものを眞理のやうな顏して、眞心の模造品を押し賣りするものには容赦をしなかつた。眞理の聲色をつかつてその爲に眞理にたいする人間の信仰を傷つけるものには容赦をしなかつた。

師はある僧侶の師を中傷して歩くのを聞かれた時、僧侶と云ふ職業に從事するものの憐れなことを話された。

「僧侶のうちにもいゝ人がゐるかも知れない。しかし僧侶と云ふ選ばれた人間で初めてなれるものに、僧侶の息子だからと云つて僧侶にするのは隨分まちがつた、よくない考へだ。僧侶になりたくつてなりたくつて仕方がないものだけを僧侶にすべきだ。自分でまだ自覺が出來ないものを僧侶にするのも、僧侶と云ふ仕事を輕蔑した話だ。今では僧侶は寺の番人で葬式をするのに必要な職業をする男にすぎない。佛教でなければ自分が救はれない、坊主にならなければ生き甲斐がないと思つて坊主になつたものは今の世に千人に一人もゐないだらう。もしさう云ふ人がゐたら、くだらぬ儀式も、檀家の御機嫌取もいや氣がさすだらう。今の僧侶は佛教で食つてゐる。それも檀家の御かげでやつと食つてゐる。勢ひ卑屈になりやすい。御機嫌をとらないやうに見せては機嫌をとり、金持の世話になる。僧侶と云ふ仕事を舍以下の仕事にしてゐる。子供を澤山かゝへて生活難にくるしんでゐるものが多い。それでは佛教のありがた味を人に傳へることは出來ない。たゞ善男善女が來世のことを知らないのにつけこんで來世でおどしつけて、金をしぼりとることを職業としてゐる。今釋迦が出て來たら、一番よわるのは僧侶だらう。彼等が最も精神上の要求の強い若者の心を惹きつけることが出來ずに、最もさう云ふことに縁の遠い人間や死を前に見ないではゐられない死ぬことより他のことは考へない年寄達を惹きつけてゐると云ふことは恥づべきことだ。宗教は生きてゐるものの爲にあるものだ。自分の生命を最も貴く生かしたいと思ふ心から宗教は生れるのだ。生き甲斐を得たい爲に克ちたいので、更に生きたい爲に死のことを考へるのだ。無限なものに自己を同化させるためには自己をどう生かしたらいゝのかと云ふことが宗教心の起りだ。その要求を最も正しく、正面から生かした釋迦の教を今の佛教の多くは出來るだけ歪にしてゐる。よくも出來たと思ふ程歪にした。末世の僧に逢つては敵はない。自分達はそんなものに拘泥してはゐられない。我等はたゞ出來るだけ自分の一生を有意味に生かし、そして大往生をとげたいと思ふのだ。大往生と云ふのは死を意味してゐるのではない。本當に生きて無限と合致したことを示してゐる。川が海と合致したことを示してゐるのだ。聖人の一生は何處で終つても大往生が出來るやうに常に用意されてゐる一生だ。朝に道を聞いて夕に死すとも可なりと云ふのは、大往生をとげる用意が出來てゐる、いつ死が來ても、死にかつものをすでにつかんでゐるのだからと云ふことだ。この位まちがひのないことはない。我々は其處にのみ宗教のありがたみを見る。今神を見てゐる、今死んでもいゝ、さう云ふことを常に云へる人間は神の如き人だ。耶蘇は常に神を見てゐた、だから神が少しでも見えない時がくると、悲しんで祈つた。さう云ふ人は實にありがたい人だ」

師はその時から云ふ話をした。

「大きな樫の木があつた。それが木こりに切られることになつた。その木は山の大王で常に日の光を頂きにうけてゐた。彼は生を讃美し、太陽を讃美し、その他地上のあらゆるものと、天上のあらゆるものを讃美した。それ等のものは實際彼を生長させるために存在してゐるやうに見えた。しかし今や彼は木こりの爲に倒されなければならなかつた。彼はもう地上のあらゆる光榮から去らなければならなかつた。彼は悲しんだ。すべてのものが彼をなぐさめることが出來なかつた。「あなたは宮殿の棟木におなりになつて後世までも名譽をおのこしになるでせう」『それがなにになる』『きつと世界一の立派な神社の柱になつて後世まで人々の讃美をおうけになるでせう』『馬鹿！　それがなにになる。俺は死なければならない。この世のよろこびから遠ざからなければならない。お前達にわかれなければならない。それ所か、俺はどんなにながい間耐へられない苦痛をおはされ、そして何とも云へない淋しい死におちこまなければならない。死ぬ爲に生れたものに呪ひあれ』あるものは死後の幸福をといた。『そんなものが信じられるか。』誰かうゑ渇いた時に明後日になつたら随分清い水がおのめになりますと云つて慰める奴があるか』誰も默つてゐるより仕方がなかつた。樫の木は淋しさと怖れとに耐へ兼ねてしく〳〵泣いてゐた。この時一羽の見なれない美しい鳥が何處からともなくとんで來た。そして樫の木のいたゞきにとまつて神を讃美する歌を唄ひ出した。樫の木は、『默つてくれ、默つてくれ、神がなんだ』と云つた。『神なんかありはしない。あつたつて俺に用はない』しかし鳥はうたふのをやめなかつた。『あなたの心のうちにあなたの知らぬものが居る。それが私をよび、私に歌をうたはせる。あなたの知らぬものが、あなたの身のまはりにとんでゐて、あなたのうちに居るあなたの知らないものを抱きたがつてゐる』『俺の知らないもの、そんなものは俺にとつて何ものでもない』『そんな勿體ないことをおつしやるものではない。あなたは知らないが、それがあなたを救ふのだ』『俺は死なずにすむのか』『あなたは死ぬ、だが生きる。死と生きることは其處では一つになる』『よしてくれ、そんな寢言は』しかし鳥はもう樫の木の相手にならずに歌をうたひつゞけた。それを聞くと、だん〳〵死にたいする反抗心がなくなつてたゞさめ〴〵となき出した。淋しくはあるが、今迄よりも忍辱のあまき香がその内に認められた。『私は淋しい、耐へられません、神樣私をおたすけ下さい』『泣けよ、泣けよ、泣けよ、わが愛する大王よ、心のそこよりなけよ。そして身をへりくだれ、あなたの知らぬものの前に。知らぬものはあなたのうちにも、まはりにもゐる。あなたに死にかつことを知らしたがつていらつしやる。もう少しの辛抱、血の涙よ、ながれよ、角はとれ、反抗の心は去れよ。其處にあなたの知らないものの玉座をつくれ、へりくだれ、へりくだれ、御心のまゝにまかせきれ。大王よ、あなたの力でもどうすることも出來ないものを自由にする主の前にへりくだれ』樫はその言葉を聞いて益々泣いたが、その涙のうちにはいと高い人間の心にも、美しき涙をながさせ、そしてその人間の心をきよめるだけの力があつた。樫はその夜ねずに泣いた。そして自分の一生して來たいろ〳〵の我儘なことや、罪のことを考へた。枝や根をはり通し、よわきものをしへたげ、いたはらなかつたことを後悔した。彼は翌朝のくるのを待ち遠しがつた。皆におわびし、そして許しをこひたがつた。日が少し白みかけると彼は皆におわびした。そして自分が切られて倒れる時も、一本の草もなるべく傷さないやうに倒れたく思つた。彼は涙ぐみつゝう

すれゆく時の明星にわかれの言葉をつげ、覺悟をきめた。見よ、其處に太陽があらはれて、彼の頂きをてらした。彼は一生の間のうけた恩を太陽に感謝し、そしてわかれをつげた。今や彼は死の覺悟が出來て、立派に死にたいと云ふ願が彼の心を領した。立派に死んで見せる。さう思つた。その時又鳥が來て彼の頂きにとまり、彼の清き心に勇氣をつける歌をうたつた。彼はすべてのものに恩をうけたことを今更に思ひ出し、それをくりかへし感謝した。其處に木こりが來て切り出した。彼は苦痛を出來るだけ耐へようとした。しかしとう〳〵こらへきれず、うめき出した。それが野山をうごかした。彼はもうたまらなくなつた。神をのろひたくなつたのを、苦痛の爲に呪ひの言葉を出す力さへなかつた。だが見よ、彼はやがて切り倒されようとする時、無數のかの見知らぬ鳥が彼のまはりにとび廻るのを見、うたふのを聞いた。彼もその鳥と一緒にうたをうたひ出した。生きた、生きた、本當に生きた。彼はさう思つた。その時、同時に彼が大音響を發して倒れた時だつた」

十二

師は初め可なり喰ひ辛坊の方だつた。そして美食を決して嫌はれなかつた。そして自分では粗食をされてゐたが、御馳走になることを嫌はれなかつた。しかし師を御馳走するのが仲間のはやりになり、その爲に皆が苦心するやうになり、その苦心に眞心以外のものが加はり、その他に或人が細君や女中に小言を云ふのを聞かれてから、師は御馳走は食はないと云ふ主義を發表され、そしてそれを實行された。吾等の家の方と同じ物が食べたい、御女中さんと同じものが食ひたい。それ以上はお斷りする。師は自分では菜食された。しかし他では肉食を辭されなかつた。

しかし殺生は好かれてはゐなかつた。殺生は人間の價値を低めると云はれたこともあつた。殊に殘酷な殺し方や、生きながらの動物の解剖の話なぞはいやがられた。

「さう云ふ行ひは人間にたいする信用を低める。人間のあさましさを露骨に見せる。殺生の内にも人間らしさが何處かで出てほしい」學問の名で殘酷なことをするのは師はなほ嫌はれた。「理窟は別だ。たゞ淺ましい、心細い氣がする。せめて魔醉位はしてほしいものだ」と云はれた。

「お互に食ひつこしてゐる動物が殺されるのは自業自得と云ふ氣もするが、平和な動物を殺すのはその動物にたいしてすまない氣がする。少なくも苦痛と恐怖を出來るだけ少なくしたい」

その時、ある人か、豚を殺す時、熟睡してゐる時魔醉して殺すといゝと云つたのを皆が笑つた。

師は「私もよくさう思ふ。他にいゝ考へは浮ばない。人間を殺すよりは遙かに罪が少ない。しかし動物に與へられた死の恐怖や、苦痛は、彼等の肉體に歸つてくる。それは同情に値する。さぞたまらないだらうと思ふ。私は食慾を滿足させる爲に殘酷な殺し方をする話を聞くのは嫌ひだ。本當の人間は誰もその話をよろこんでは聞くまい。自分は鰻をさく殺し方を殘酷だと思つたが、なれた人はキリをさす時、鰻を魔醉させてしまふのだと聞いた時、いくらか安心した。自分の理窟は自分の不徹底な同情の仕方を笑ふ。しかし自分は少しでも樂に彼等を殺したい。彼等と人間とはちがふ。彼等はどんな殺し方によつて殺されても、あとに妄念はのこさない。その苦痛と死の恐怖だけをこの世にのこしてゆくだけだから。しかし自分は世界が眞に平和にな

る時は、人間は今より殺生に神經質になり、菜食主義が次第に勢力を得るだらう。そして人間の肉を食ふ人間の心持を我々が察することが出來ないやうに、彼等は我々が、牛や豚や、羊や雞を平氣で殺して食つたのを不思議に思ふであらう。こんな平和な可愛い、美しい生きものを、どうして平氣で殺すことが出來たのだらう。彼等はさう思ふにちがひない。しかしその時は菜食主義が進み、もつと進んで科學的な食物が發明された時であらう」

「その時は人が科學的に滋養分をとり、味覺を刺戟してよろこぶやうになるでせう。今から考へると反つて淺ましい氣もしますね」

「さう云ふことは、まあ、未來の人にまかせよう。餓ゑがこの世を支配してゐる時代に我々は生れてゐる。誰も餓ゑないですむ時代の話は未來の人にゆづらう。我々はさう云ふ時代が來ても、人間が人間の精神を最も高く動かした事實は、彼等の心の底をうごかし、彼等の心に慰めを送り、彼等はさう云ふ先祖をもつことを名譽とすることを知つてゐる。出來たら彼等のためにも、見えない處で働いておいて上げよう」

「どうすれば彼等の爲に働けるのです」

「それは心を美しくすることだ。眞理の爲に働くことだ。お互に仲よくすることだ。他人を責める前に自分をせめることだ。そして自分のわるいことをなほし、他人をせめないことだ。そして自分を出來るだけ自分の理想的人物にすることだ。見かけだけではなしに。そしてこの世のうちから寶石をとり出す人のやうに、人間の精神の内から、崇高なものと、美しいものをこの世に生かすのだ。自分のいやなことは他人にさせず、そして自他の幸福を最も深い處でむすびつけて、そして他人と心を貫くしてつきあへるやうにし、他人を不幸にせず、自分を賤しくせずに、出來たら他人を幸福にすることだ。自己を本當に生かし切ることが、人間の光榮を生かし切ることだ。何ものにも打ちかたれない最後の勝利をしつかとつかむことだ」

「私達にその勝利はつかめますか」

「つかめる。この世の眞心と一致出來るものは、神の軍隊に加はるものは、負けたくも負けられない。其處では本當の意味で、勝ちは勝ちで、同時に、負けるが勝ちなのだ」

「先生はその軍隊に加はつていらつしやるのですか」

「勿論、加はつてゐる。自分の心の底のものはさう云つてゐる。だが自分の内にはまだ〳〵不徳なものの芽が淨化されずに澤山殘つてゐる。それをあまり增長させると危險がなくもない。だがその時は祈るのだ。お許しを願ふのだ。すると又道はひらける。自分のまはりに自分を守護する負けざるものの流れを感ずる。それに身を任せ切ればそれでいゝのだ。その時御心の如くならせたまへ、さう云ふ氣が本當にする。それが一番よく、一番本當の氣がする。さう云ふ氣がまるでしないで俺のやうな仕事をしようとするものがあつたら、その位、まぬけな、馬鹿氣た心はあるまい。それこそうつけ者だ。權威のない僞善者だ。富めるものに安心を安賣りする惡魔の弟子だ。富と五慾にいろ目をつかふ他人の良心に媚びるたいこ持だ。俺はそんな人間ではない」

十三

或時、師の處にある青年が來た。そして自分は人生に就て煩悶してゐるのだと云つた。師はその青年の顏をじろつと見てゐたが、

「君は先づ女のことから卒業したらいゝだらう」

青年が不平さうな顏をして歸つたあとで師は

云つた。

「煩悶にもいろ〳〵ある。女を得られない所から起る煩悶も、金や、名誉を得られない煩悶もある。そんな煩悶は俺の處にかつぎこまれても困る。それ等の煩悶も、その人が眞面目な人ならば決して無意味にはをはらない、指す所は一つだ。人間の心はあてにならない。もつとあてになるものを求めたいと云ふ氣がその内の何處かに働いてゐる。しかしその動いてない、樂をしてうまい汁を吸はうと云ふ人間は俺の處に用はないはずだ」

或人が菅原道眞は「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん」と云つたが、最後が不幸だつたのはどう云ふわけですと云つた。

「道眞の最後が不幸だつて、それは凡人の見方だ。道眞自身、どう思つてゐたか誰が知らう。それは天皇のことや、都のことを時には思ひ出し淋しく思つたらう。しかし本當に心を誠の道に叶へることが出來た人だつたら、其處に又神の道を見出したらう。しかし道眞のかの歌はまだよわい。心が誠の道に叶ふ時は、それは同時に祈だ。祈以上だ。祈が既にきかれたことを意味してゐる。神が守る所ではない、神と一緒にゐるのだ。神と一緒に仕事をしてゐるのだ。道眞もそれを本當に感じた瞬間はあつた人だらう。しかし歌にする時、理窟が入つたのだ。心が誠の道に本當に叶ふと云ふのがすべてなのだ。其處にゆきたい爲に祈るのだ。かう云ふと理窟に見えるかも知れないが本當だ。神と一緒にゐる時は、神を忘れてゐる。少なくも神にはなれてゐる時、神のもとに歸る許しを得たい時、一番祈りたい氣持がする。それから神から見すてられようとしてすがりつく時に。神と一緒にゐる時は自由に生きればいゝのだ」

師は重荷を背負つて歩いたあとでかう云はれたことがあつた。

「重荷を背負つて歩くと、きつと大國主の神を思ひ出す。同胞につかへてゐる氣持だ。苦しい、實に苦しい、自分だけが同胞の爲に苦しんでゐるやうな氣がする。なぜ自分だけが苦しまなければならないのだ。そんな氣さへする。しかし何か自分以上のものがゐて、どうしても荷を目的地まで背負はないでは許してくれない。大國主の神は皆におくれて一人苦しんで歩いてゐた。だから憐れな兎にも思ひやりが出來、遂に姫も手に得たのだ。勿論、姫を手に得ないでも大國主の神は嘆きはなさらなかつたらう。そして姫の荷物も持たされて默つて歸つて來られたかも知れない。ともかく大國主の神は重荷を負ふ神樣で空手の神樣でなかつた。だから重荷を負ふ時、初めてあの神樣のありがた味がわかるのだ。默つてあとからこつ〳〵重荷を背負つて一足々々全身の力を入れないと歩けない姿は美だ。自分は重荷を背負つて歩く時に、あの平和な忍耐強い神を思ひ、勇氣と慰めを得る。大國主の神を大黑さんにしてあの俗な姿を與へたのは俗な藝術家の罪だ。誰か藝術家はそれを救ひ出す義務がある。大國主の神は富の神とするよりは、同胞の爲に重荷を負ふ神にする方が、似つかはしい方にちがひない」

十四

師は働くものの味方だつた。人間の爲にこつこつ働くものの味方だつた。奇拔なことや、珍奇なことは嫌はれた。平凡に見えてその内に味ひつくせないものがあることをよろこばれた。人間にとつて一番大事なのは日常生活で、それさへしつかりつかんでゐれば、いざと云ふ時に徐々に光をはなつものだと云ふことを知つてゐられた。師の生活は正しい日常生活の連續で、別に奇拔なことは何にもなかつた。奇蹟らしい話はたゞの一度も聞かなかつた。かの盲目の

になつた父の話の他は、これさへ師は失敗に終つたやうに思はれた。「神を見るものには奇蹟はいらない。たゞ如何にせば神を見ることが出來るかと云ふことだけが問題だ。自分は奇蹟のうちに神を認めることは出來ないものだ。耶蘇が死人をよみがへらし、パンをふやし、海の上を歩き、盲目や、いざりや、悪鬼にとらはれたのをなほし、無花果を枯らし、三日目によみがへつたとしても、その事實の内に神を認めることの出來ないものだ。それより山上の垂訓やいろいろの言葉や、人の子らしい行ひの内に神を見るものだ。神は奇抜な行ひのうちにあらはれない。自然の法則を變化する所にあらはれない。むしろ自然の法則に從順な時に顯はれる。自然の法則の前に、跪ける時に神はあらはれる。神は自然の法則を肯定する。自然の法則を無視するものを嫌はれる。自然の法則はどうあらうと、神はそれを超越されてゐる。奇蹟がなければ生きられない程、神は意氣地なしではない。自然に勝手なことをさしておく、しかし神の心を心にするものは生き甲斐を得られるのだ。其處が面白い所だ。死人をよみがへらさないと信者を得られない宗教よりは、信者を殺してもなほ信者をうる宗教の方が、より大きい奇蹟を行つたと云へるのだ。其處に宗教の神秘がある」

「一時的の興奮は宗教心のないものにも得られる、だが日常生活に、常に希望をもちこたへ、こつこつ自分の信ずる道に進んでゆくことは信仰のあついものでないと出來ない。世界はさう云ふ人間によつてたもたれるのだ。彼等は辛抱づよく、勤勉家でつゝしむことを知り、常に反省して道にはづれることを恐れる、彼等は人類の柱だ」

「平和な生活の深きよろこびを知るものは人類の基礎だ。平和な深いよろこびを知ると淺々しいよろこびの卑しさと、精神や身體を害することを知る。殺伐なこと、酒をのむことや、放蕩が眞の深いよろこびを損ねることを知る。我等はかうして毎日規則正しく生きる。即ち一心に働いたり、靜かに散歩したり、よき人と話したり、よき本をよんだり、このことに深き幸福を感じられるもので初めて、他人の運命を氣にすることが出來、他人の幸福と平和を望むことが出來る。その人は他人の自由と時間と運命を尊重することを知り、平和な幸福を味ふことの出來ない人々に心からの同情をもつことが出來るから。他人を不幸にしなければよろこべないもの、そんな人に平和なよろこびはわからない。自分達のうちにも不純なよろこびがある。だが平和なよろこびを本當に知れば、不純なよろこびの賤しい、そして一時的な、輕蔑すべきよろこびだと云ふことを知る。そして平和なよろこびに歸つて初めて深いおちついたよろこびを知る。平和に働けるもの、平和に勉強出來るもの、平和に人生のことを考へ萬人の幸福のことを考へることが出來るもの、さう云ふ人を多く有する社會は最も健全な社會だ、人類はさう云ふ社會を愛してゐる。人類過半がさう云ふ人によつて滿され、深い平和なよろこびをお互によろこぶやうになつたら、人類はどんなによろこぶだらう。その時は道ゆくものに、兄弟のやうに笑ひながら會釋し、よろこびと悲しみをわかつことが出來るであらう。宗教は百人でも多すぎる。しかし平和な人間は百人が五十人でも少なすぎる。百人が百人でも多すぎはしない。光は照らされるものゝために存在する。宗教家は眞心をもつ人の爲に存在する。眞心をもつ人に世界中の人間がなることは理想である。さう云ふ時が來てもよろこべるものは平和な人間だ。淺薄な人間は事件が起るのをよろこぶ。他人に悪事をなすものをよろこぶ。しかし平和な民は萬人の平和と幸福をのぞむ、萬人が規則正

しく生きても少しも閉口しない。むしろ心からさう云ふ時のくることをのぞんでゐる。兄弟、萬人と兄弟の如く生きてよろこべるものは平和のうちに深いよろこびを見出し得るものだ。自分はさう云ふ人を心から愛する。さう云ふ人のことを思ふと涙ぐむ。さう云ふ人がゐてくれると人間は望みをもつことが出來る。その人は人類の朽ちるのをくひとめる人だ

—趣味と云ふことは馬鹿に出來ない。人間の上等、下等は趣味で大概きまる。趣味で人間は自殺したり人殺ししたり仕兼ねない。惡を好んだり、不健全なことを好んだりする若者は、他人を不幸にすることを傲りにする。趣味で泥棒もすれば、贅澤をしたり、冷淡を賣りものにしたり、惡者の眞似をしたりする。下等な趣味を鼓吹する文學、美術、音樂を聖人が憎まれるのは、人間の心を荒くし卑しくし、思ひやりをなくなし、がさつにし、惡魔的にするからだ。最も趣味のよき人は芝居はしない。常に本心から動く、精神が最も直接にあらはれてゐる。それにふれた人は眞面目になり、本氣になり、眞心をゆり動かされる。そして心を清められ、美しくされ、思ひやりが深くなり、生々した心をもち、心を正しくし平和を愛し、人間と自然にたいする、愛と信仰を深める。聖人に趣味のわるい人はない。似而非宗教家に趣味のわるくない人はない。聖人は趣味を超越する。趣味の臭みから脱しきる、様子ぶつたり、見かけをかざつたりはしない。常に正しく、正直で、謹み深い。似而非豫言者は罪を恐れないと同じく、下品を恐れない。趣味が見えから出でて、結果を意識してゐる。無邪氣な所がない、赤子の純潔さがない、其處に賤しさが顏を出してゐる。そして人間の心を我利々々にして清くしない。趣味の卑しいものは人間の心を純粹にはしない。趣味の卑しくない人は心の卑しくなれない人だ。そして行なも出來るだけ卑しさから遠ざかる。かゝる人も人類を腐蝕から救ふ人だ」

「日常生活の美しい人、他人を責める前に自己を反省し、心を常に道からはなさないやうにつとめ、少しでも自分が賤しい心になると氣がとがめて、改めないではゐられない人、その人は人類の寶だ。自分のうちにある人類に與へられた寶をほり出す人だ。かゝる人はいつか人類のほこりになる。その人はそばにゐる人の心を高め、清め、人類にたいする希望をとり戻す人だ」

これ等の言葉は師が自身に就て云つてゐるやうな言葉だ。實際師のやうな方は人類の寶であり、人類の墮落を喰ひとめる人だ。自分達は師によつてたしかに墮落から喰ひとめられた。師がゐなかつたら、自分達は俗な人間としてこの世に人間に愛想をつかしつゝ、生意氣な心をもつて生きたらう。そして他人を不幸にすることを自己の特權のやうに思つたらう。

自分は師にあふまでは、惡人に同情をもつて正しき人間に反感をもつ、天探女が自分の内にゐた。

師と一緒に歩いて罪人を見た。自分は罪人に同情した。その時師はかう云つた。

—罪人に同情するのはいゝ、しかし更に善良な人間をありがたがらなければいけない。惡趣味な人はやゝもすると罪人に同情して善人を嫉ふ。自分の内の罪の芽を可愛がりすぎるからだ—

或人が善人と惡人の區別を聞いた。

—善人は他人を責めようとする時、自分を省みる、そして同じ芽が自分にあることに氣がつくことで、他人を責める勇氣を失ひ、同時に自己をつゝしむ。そして他人を思ひやり、他人に寛大になる、無理もないと思ふ。そして反つて責めようとした自分の厚顏しさを感じる。惡人は

その反對で、自分が惡いことをする時、他人の惡いことをもつて來て自分の云ひわけにする。そのくせ他人を責める時自分のことを忘れる。他人を憎むに急で自己を省みる暇がない。自分のすることはなんでも尤もで、他人のすることは何んでも惡く思はないではゐられない。思ひやりがなく、他人に不快な與へても自分だけは不快を感じない特權をもつてゐるやうにきめる。自己を責めることを知つてゐるものは善人で、他人許りをせめるものは惡人だ。自分の權利を知つてゐて義務を知らず、自分の快樂を求めて他人の不快に氣がつかず、他人のことに思ひやりが皆無で責めること許り知らないもの、それが惡人だ。惡人は世界が自分一人の爲に存在するやうに思ひ、自分が仕へることを知らない。善人も一面利己心をもつてゐる、しかし謹むことを知り、他人の心にたいして犧牲を知る。善人も惡の芽はことごとく持つてゐる。だがそれを持つてゐることを特權とは思つてゐない。その爲に反つて惡人を思ひやり、謹むやうになる。他人を責める前に、他人を責める資格のないことを知る。彼等はまだ道を自覺してゐない。善人にはまだ權威はなく、やゝもすると臆病で、消極的だ。だが我々は善人をありがたがらなければならない。それは人類のうちにはえる雜草を喰ひとめてくれるから　彼は自分のうちの雜草のはえるまゝにしておかないから。惡人は盲目な百姓で、雜草をいたる處にひろげて恥ぢない、善人は勤勉な百姓だ。我々はそれによつて平和に生きてゆくことが出來るのだ」

「善人よりももつと尊敬すべき人はどんな人ですか」

「それは權威ある人間だ。自己を消極的につゝしむ許りではなく、人類の爲に更に神の爲に積極的に働く人だ。彼はもう自分のうちの雜草を氣にする許りではない、自分のうちに與へられた、よき種を、いたる處にまいて、人々の心の糧となる人だ。道をとく人だ、神をとく人だ。道と共に生きる人であり、神と共に生きる人だ。聖者孔子や、釋迦や、耶蘇のやうな方だ」

「それ等の人の心には雜草はないのですか」

「いや、ないことはない　自分に云はすと、耶蘇は罪あるものを責めうる資格の自分にもないことを感じてゐられたやうに思ふ。釋迦も煩惱にはある女が家出したあとの淋道を歩いて子を生む、その子は釋迦でも救ふことの出來ない所になる。弟子達はその人を釋迦の子として遠慮してゐる。それは何處まで本當の話か知らない。恐らくつくり話だらう。しかし面白い話である。どんな人でもわるい種を絶對にまかないとは云ひ切れない。孔子は七十になるまでその爲に苦しみ苦心された。ソクラテスはある人に淫慾の強い人相をしてゐると云はれ、それを肯定して、しかし更にそれにうちかつものをもつてゐると云つてゐる。彼等は善人よりも、もつと謹み深い。しかしそれは更によき種をまく力を得る爲だ。人類全體を救はうと云ふ本願が強いのだ。その光に照らされる時、その他のものは消えてゆく」

或時或人が、

「性慾を惡だと云ひますが、皆が性慾をつゝしんだら人類は滅亡しはしませんか」と云つた。

「そんなことを云ふ奴はいくらでもゐる」師は怒鳴るやうにさう云つた。「ある葬具屋が、衞生衞生とあんまり云ふのをよして下さい。人が死なくなると困りますからと云つたとしたら、君は笑ふだらう。なんでもすぐ極端にもつて行つて話をしたがる人間には道のことはわからない。殺生がいけないと云ふと、すぐそれなら人間はどうして生きてゐられるのです。動物を殺すのがいけなければ植物を切るのもよくないで

せう。そんなことを云つて得意になつてゐるものがよくある。それは道を知らないものだ。本當に人生のことを考へてゐるものはそんなことは云はない。人間に百貫目のものをもつて歩けと云はないのと同じことだ。大男と云つても一丈はないでせう。大きな杉と云つても天にはとゞかないでせう。そんなことを云つて得意になるものはおよそ道に遠いものだ。道に叶つた生活をしようとするものは、自分の努力の足りないことを常に感じる人だ。性慾は恐ろしいものだと知れば、自分の謹み方の足りないことを思ふ。その謹むことの如何にむづかしいかを思ふ。自分が如何に道に遠いかを思ふ。そして自分の内にある性慾の恐ろしさを感じる。やゝもすると他人の運命を傷つけさうなことを恐れる。決して人類の種切れを恐れる程、さきつ走りはしない。足元をわすれて、茶くわしてすましてはゐられない。衞生や、養生や、醫者や、藥がいかに進歩しても死神は安心してゐる。不衞生、不養生のなくならないことも知つてゐる。道は近きより始める。千里歩くものは一歩より始める。そして一歩より本氣になつて歩く、決して千里さきにつく時のこと許り考へて足もとを忘れてはしない。そして一歩々々に生き甲斐をも感じれば、淋しさも感じ、後悔もすれば、傲りも感じ、よろこびも感じる、たゞ自分の足であるかず、汽車の上で居眠りしてゐるものだけが、千里さきのこと許り考へて、足もとのことを忘れる。足もとのことを考へ一歩正しくふむことを考へるもののみ道のことがわかり、人生のことがわかるのだ。思ひつき許りで、のんきにその日その日を送るものには何もわからない。人生に與へられた寶を本當に見もせず、味ひもしないのだ。今すれちがつたのは耶蘇と云ふ氣ちがひだ、道理でへんな顔してゐると思つた。それでもう話がすむのだ。君は地球にゐたか。ゐたよ。面白かつたか。くだらなかつた。それで一生がすぎるのだ。問題をすぐ極端にもつて行つてすましてゐる人間はそんな人間だ。ありがたいとか、勿體ないとか云ふ氣もちがわからずに一生をはるものの、この世に生れたのは寶のもちぐされだ。君はそんな人間にならないやうに用心しないといけない」

十五

或人が師にかうきいた。

「國家と眞理と矛盾した時、どつちに從ふべきですか」

「人間と神とが矛盾する時、人間は神に從はなければならない」

又、師はかうも云はれた。

「眞に國家を愛するものは、國家の眞理にそむくことの[illegible]いのを恥ぢ、どうかして少しでも眞理に國家を近づけたいと望むものである」

又云はれた。

「國家さへもち出せば、眞理でも引こむと思つてゐるものは、つぼを岩にぶつければ岩がわれると思つてゐるものだ。つぼを大事に思ふものは岩をさけなければならない」

又云はれた。

「眞理を張子だと思つてゐるものは、金に仕へてゐる人間だけだ。金に仕へない人間は、眞理の恐ろしく強いのを知つてゐる。眞理にあまり背くものはたふれる。眞理にとりのこされた國家は常に革命を恐れなければならない。眞理の力は人が自覺する自覺しないにかゝはらず、恐ろしく強いのだ。そして人の心をいつのまにかひきつけて放さない。それを知らないものだけが、眞理をおしのけても國家の爲につくさなければと云ふ。それは私は無鐵砲の惡漢です、だから愛して下さいと云ふことと同じことだ。私達は出來るだけ國家を正しいものにしたいものと

思ひます。たゞその力がないのを恥ぢ、日夜心配してをります。どうしたら國民を不幸にせずに眞理に近づくことが出來るでせう。眞理を尊敬する點ではまけないつもりです。又眞理に背く國家の滅亡することを知つてゐます。少しでも我が國を眞理に近づけ、立派なものにし、そして國民の生活を少しでも高め、幸福にしたいと心がけてをります。さう云ふ國家主義でなければお話にならない。國家眞理と矛盾してゐるのを得意にするやうな愛國家は、國を損ねるもので、同時に人間の價値をおとすものだ。さう云ふ愛國心は今後通用しない時代がくる。人々はもつと眞理に近づかないと承知の出來ない時が、ひし／＼とせまつて來てゐる」

或人が革命はいゝものですかと聞いた。

「憎惡や慾心からはいゝものは生れない。だが、愛や、眞理から生れたものには、我々は愛しないわけにはゆかない。二つのものが多くの革命には結びついてゐる。そして悲慘なことが起りがちだ。悲慘なことはどんな場合でも私には好きになれない」

父師は云つた。

「實に眞理を重んじすぎた爲に亡びた國はない。貪慾や、淫蕩や、暴力や、無道壓制の爲に國はつぶれた。しかし眞理の爲に國をつぶした國はない。もし眞理の爲につぶれた國があつたら、その國は世界に勝つだらう。さう云ふ國が一つもなかつたのは惜しいことである」

父云はれた。

「溫度の低いものが溫度の高いものに熱を與へることは出來ない。眞理に遠いものが眞理に近いものを感化することは出來ない。もしこゝに最も眞理に近く生きてゐる國民があつたら、他國の人はその國の國民を羨み、自國も一日も早くさうなることを望むであらう。又さうならないではをさまらないだらう。世界の王者とならうと思ふものはまづ自國を最も眞理に近い國にしなければならない。野蠻國は外から滅亡されなければ内から滅亡する。ある國の眞の文明が發達すればする程、その國の文明が他國の文明を進めることは、より溫度の高いものが、より溫度の低いものに熱を與へるやうなものだ。太陽は萬物を溫めようと思はないでも萬物をあたゝめてゐる。聖人もさうだ。正しき國もさうだ。國となるとちがふと思つてゐるのはまだ十分に生長した國がなかつたからだ。眞理にちがひはない」

眞理に近い國とはどんな國です

「其處では人間は金や名譽の爲に働かずに、義務や、同胞の爲に働く、その上自己を生かす爲に働く、病人の他は義務勞働以上人類の爲に働く、かくて自分も兄弟も、衣食住の心配なく、餘暇をたのしむことが出來る。病人は安心して病をやしなひ、各人は自分に適當な仕事をし、他人の運命や意志を尊敬し、肉體的不具者は勿論、精神的不具者も出來るだけいたはり、パンの爲に共同して働くと同時に神の爲に共同して働く國だ。私は今にさう云ふ國がこの世に生れることを信じてゐる。今いろ／＼の人類的煩悶は其處におちつかなければをさまらないことを示してゐる。利己心をたきつけて、其處にこぎつけようとしてゐるものは、よし其處にこぎつけても、同胞の爲に働くとか、生きるためによろこんで自から進んですべき義務勞働のありがた味を根こそぎ粉碎してしまふ。だからいや／＼働くことになり、從つて勞働を強制する機關が必要になり、武力が必要になり、人々は暴力を恐れてのみ働くことになる。この萬人は自からを奴隸におとすやうになる。この事は十分認められなければならない」

或時師は、理想國にあこがれてゐる、熱情家で社會主義の人に笑ひながら云つた。

理想國が來たら、働かずに食つてゐられると思つたらまちがつてゐる。今は金さへあれば遊んでゐられる。しかし理想國では誰でもともかく働かなければならない。其時は今より働くことは名譽になり、樂になり、そして健康を損ねないことになるだらう。そして働くことが人類に對する務を果しつゝあると云ふ自覺を與へてくれるだらう。しかしともかく働かずには食つてはいけない。それから理想國が來たら、金で女を買ふことや、贅澤をすることや、快樂を得ることは今の樣には出來なくなる。さう云ふ時代が來て本當によろこべるものは平和の民だ、日常の生活に深いよろこびを感じることの出來る人間だ。道樂氣で生きてゐる人間や、なんでも奇拔な事をしないと退屈する惡趣味の人間はさう云ふ時代が來たら困るだらう。我々はさう云ふ時代が來ないと困る人間でありたい。來ても困る人間にはなりたくないものだ。來ない間だけ來るといゝと人一倍叫んでゐながら求めてゐるものが實際來るのを内々恐れてゐるものがあつたら、それは醜い。豫言者よ出よ。天才よ出よ。かう叫んでゐる多くの人間は、いざ本當の豫言者や、天才が出ると一番先に惡口を云ふ人間になり易い。彼等は本當に求めてゐるのではなくつて、求めてゐる積りしてゐるのだ。内心は出て來ないことを望んでさへゐるのだ。我々はそんな人間になりたくないものだ。

十六

師は或日病氣になつてねてゐた。

自分達はかはり番に師を見舞ひ、食ひものや、藥の世話をした。師は「ありがたい」と云つた。

自分は君達に親切にされる資格があるとは思へない。自分は勝手なことを云ひ、勝手なことをしてゐる。それを君達が本當によろこんでくれるだけでも何かに感謝したい。自分は今度の病氣は自分の不攝生から來てゐることを知つてゐる。自分の心がけのいたらぬ所から來てゐることを知つてゐる。それなのに君達は親切にしてくれる。そして心配してくれる。自分はすまなく思つてゐる。そしてうれしく思ひ、ありがたく思ふ。本當に自分の罪を知つてゐるものだけが、本當のすまなさとありがたさを知るものだと云ひたい位だ。自分は正しいと思ひ込みすぎるものにはこの氣持はわからないだらう。さう云ふ人間はどんなによくされても、その方があたりまへだと思ひ、少しでもよくされ方がたりないと不愉快を感じる。自分は一度、自分のやうな人間は死刑にされても苦情の云へない人間だと本當に思つたことがあつた。その時、自分は自分に非常に失望したが、さう思ふ迄は自分は罪にゆるされてゐた。しかしさう思ひこんだ時自分は赦されたのだ、そして自分のやうな人間の平和に生きてゆかれるのをすまなく思ひ、ありがたく思つた。そして心の底から溢れるのを感じた。人間に與へられたいろ／＼の感じは、皆どれもそれ相應に深い不思議な感じを持ち、人の心を淋しくしたり、富ましたりしてくれる。しかしこの罪の自覺からくるへりくだりと、自分が不當に恩寵をうけてゐると云ふありがたさとの感じは、内でも不思議なものゝ一つだと思ふ。この感じの深さは人間がつくり得るものではないと云ふ自覺を與へてくれ、何か人智ではわからない深い處に觸れてゐるやうなものが信じて、その時に我等が生くことを望んでゐるやうな氣がする。人間はもつと力を信じて毅然と生きてゆかれると思つてゐる傲慢に住してゐる人間が、あさましくなさけなく見えるのは、この宗教的な感謝と云ふ感じを知らず、大きなものに身を任せると云ふことを感じないからだ。人間は一人で歩いてゆくにしては少し小さすぎる。無限に達した人間と云ふものは、大きなものから自

分を緣切りにした人間ではなく、大きなものに自分を常に結びつけておかないと淋しくつてたまらない人間だ。其處からのみ人は生きてゐることを無意味と思ふにはあまりに深い感じを與へられてゐることを知るのだ。何處へころんでも、どうしても其處までゆける人間はめぐまれた人だ。平穩に生きてゐても、よきことをしても、罪の內にてさへ、死刑の宣告を受けても、病氣や、死を前に見ても、恐怖その他の淺薄な感じのためにさまたげられないで、深いものを感じ、其處からくる感じに忠實になれるものは私達の師だ、希望だ、私達はさう云ふ人を心からありがたがる。さう云ふ感じをまるでもたずに、世の中をどうしようかうしようと云ふものは五月蠅い人間だ。恐ろしい人間だ。彼等は何にもしらないのだ。自分の求めてゐるものさへ知らないのだ。求めてゐるものが來た時、自分でそれをぶちこはすことさへ恐れない人間だ。深い處からわき上る感じに忠實になり切れることがすべてだ。其處では罪人は同胞だ。そして其處ではおそらく動物は又同胞だ。其處にすなほに歸つてゆくことそれが我等の願ひだ。しかし苦しんで歸つてゆけるのはなほ我等の希望になるかも知れない。どつちにしろ我等はそのものの前に跪いて、御心の如くならしめ給へ、と祈るより仕方がない、そしてその祈がきかれ、自分のその瞬間に生きてゆく道のわかるものは幸福だ。さう云ふ人のみ、權威ある人だ。その時の一擧一動、一言一句は神と共にゐると云つていゝ。自分達は普段は神を要せずに生きてゐる。その時の自分達は權威のない、どつちつかずの人間だ。だが何かのきつかけで眞心が生きると、見よ、其處にはいつのまにか神がゐて下さる。その神を感じるものは何にも恐れない。權威は自分から出るのではなく、神から出るのだ。その人の日常生活が大事だと云ふのは神を自分の內に宿すことに恐れをいだかず自分の內にある神の宮居を常に淸めて、いつ神が來て下さつてもいゝやうにしておくのだ。宮居さへ本當に淸まる瞬間には其處に神はいますのだ。罪の本當の自覺や、感謝や、ありがたいと云ふ感じはこの神の宮居を本當に淸めてくれる。私心が其處を穢さなくなる。だから本當のうれしさを感じ、皆に感謝し、皆の爲に本當に自分の一生をさゝげたい氣になる―

師は何か云はうとされたが、

「熱が上るといけません」と誰かが云つた。

「ありがたう。身體を大事にして一日も早く起きることにしよう。實際かうしてねてゐると君達が今迄よりも一層たよりになる。病氣しても誰もたづねてくれず、食べるものもない人もあるだらう。自分はさう云ふ人の心持を察して、さう云ふ人の幸福をいのらないわけにはゆかない。誰も來てくれないでも苦情は云へない。私なんかはまだ少しは精神の修養をした人間だ、それでさへ誰も來てくれず、米を買ふ金もなかつたら心細くないことはない。私よりもつと病がひどく、私よりもつと淋しがりの人で、誰にも見舞はれずに死んで行く人もあるだらう。私はさう云ふ人に自分が冷淡なのをすまなく思つてゐる。自分はさう云ふ人の爲に祈るが、その祈も力ない物だ。私は自分の德の足りないことをこの頃は實によく感じてゐる。自分の意氣地のない爲に、どの位自分は自分をつくつたもの、及び兄弟にたいしてすまないことをしてゐるかわからない。德が足りないのだ。そのくせ、もつと力を出せるくせに出さないのだ。自分は病氣がなほつたら、もつと積極的に働きたいと思つてゐる。しかしすべて御心に任せるより仕方がない。自分の持つてゐる光を、より強くするには根本からかへてゆかなければならない。もつと謹んで、もつと本氣になつて修養

しなければならない—

自分達は歸りに友達と話しあつた。師にあゝ云はれると自分達はどうしたらいゝのだ。「太陽でさへ自分の光にはまだ滿足してゐない。自分の光の足りないことを憂へてゐる—

自分は日記にそんなことをかいた。

自分はその後暫らくして何かの時師に、太陽でも自分の光には滿足してゐないでせうと話した。

「それはさうかも知れない。しかしもう太陽になると、七十歳以上の孔子のやうなもので、自分の光のことは問題にはしなくなるだらう。實際、萬物は今の太陽の光にちやんと調和してしまつた。今急に太陽がもつと光り出したら、萬物は面喰つてしまふ。太陽の德はあまねくゆきわたつてゐる。自分の光に滿足する滿足しないと云ふ問題はもう通りこして、たゞ自然に悠々と生きてゐればそれが同時に最上の生活に入つてゐる。來るものはこばまず、去るものはおはず、自分の生活のまちがつてゐる、まちがつてゐないと云ふことを考へる必要もなく、自分の存在の有意味無意味と云ふことも問題にならず、たゞ悠然と生きてゐる。我々はまだあゝなれないのだ。晩年の釋迦や、孔子、老子はあゝなれたかも知れないが、さう云ふ氣持はまだ自分達には少し遠い氣持だ。身がその境に入らずに、心だけさうなると云ふわけにはゆかない。又それが反つて自然なのだ。我々は光の足りないことを氣にしなければいけない。しかし太陽になればそれを氣にしないでいゝのだ。もういゝもわるいもないだらう。しかし君達には太陽はまだ自分の光に滿足してゐないと云ふ意氣込みが必要だ。太陽がもつと光つたら、世界はもつとかはつてゐた。どうかはつてゐたかけ知れないがかはつてゐた。そして又太陽はそれをよしと見られたであらう。自然がいゝ。概念や。警句にとらはれてはいけない。君が太陽が自分の光に滿足しないと云ふのに興味をもつたのは、その事實よりは、その云ひまはしに得意になつたのでは面白くない。しかし見やうによればさうではないから、それもいゝだらう。さう思ふのが、君を眞劍にさせ、本氣にさせるならば—

自分はさう云はれたらなんだか恥かしい氣がした。

十七

師の病氣はまもなくなほつた。師は病人には前より同情が厚かつた。自分達が病氣になると、よく見舞に來られた。その他看病する人のない病人を自から看病されたこともあつた。師は死んでゆく人を慰めるには困つてゐられた。そこで死の問題は普通の人には殆んど話されなかつた。さう云ふ話をしても慰めにはならないことを信じてゐられた。そして師は方便にも自ら進んで譃をしやべることは出來なかつた。自己に信じられないことは云へなかつた。「南無阿彌陀佛ととなへると極樂にゆけると云ふのは本當でせうか」と聞かれた時、師は譃だとも本當とも云へなかつた。

「南無阿彌陀佛と云ふとありがたい氣になれれば、救はれるでせう」と云つた。

或時、罪にせめられてゐる老婆が、「地獄と云ふものは本當にあるのでせうか」と云つた時、師は「安心なさい。地獄はありません。人間はこの世で生きただけで十分なのです。その上に地獄に入れられるやうな目にあふことはありません。神樣はそんなにしつつこい無情な方ではありません。しかし心がやすまるなら、南無阿彌陀佛を云つたらいゝでせう。—矢張り人によつて小乘も必要になる。偶像も必要になる—師はある時、さう云つた。—其處には寺院が必要だ。宗教が一般的になるには偶像が必要だ。人々が

その前に跪けるものが必要だ。今の一般の人智ではそれが必要だ。たゞしその寺院を守るものは徳のある人でなければならない。自分もその本像を崇拜出來る人でなければならない。眞心を動かさずに、本像を禮拜して、一心に本像ををがむものを腹の中で笑ふやうな人ではいけない。僧侶も人間だが選ばれた人間でなければならない。自分の一擧一動が神をけがすやうな人間は僧侶にはなれない。一擧一動神の前に畏れないではゐられない人間でなければ。今の多くの僧侶は僧侶の資格がない、從つて寺院は神の住家でなく惡魔の住家になつてゐる。心ある人は信心深くなることが出來ない。信心深い人を愚婦愚民と思はないわけにはゆかない。之は僧侶が口だけ僧侶で、眞心は金に賣つてしまつてゐるからだ。本當の宗教家が出ればその住居は寺になる。ありがたがる人間は愚婦愚民ではない、最も正しい人間になる。其處では方便は不必要になる。空氣が自づと神聖になり、人々は心から何かの前に跪きたくなり、其處に神がのぞまれてゐるやうに感じる。多くの人はその理解出來ずに禮拜してもその人は自づと清まつてくる。その寺は不淨なことをいむ。不淨な金や、行ひや、人をいむ。其處では金を多くをさめるよりも眞心を貴ぶ。行ひを慎むものにでなければ御利益を安賣しない。其處で理解出來ないものも、ありがたさを本當に感じることが出來る。さう云ふ寺院は今の世にもあつていゝのだ。どんな粗末な寺院でも神がその内に居る寺院は空氣がちがふ。眞心を動かさなければ神はをがめない。其處にくると金のことなぞは忘れてしまひ、本當に神の御旨のまゝに生きなければすまないと云ふ氣に自づとなるのでなければ本當の御利益をうけたとは云へない。金まうけの取りつぎをする神様は本當の神様ではない、それは尻尾のはえた角のある神様だ」

ある時、人々はその時分はやり出した、ある宗教について話した。師はその時云はれた。

「ある宗教の本物か、譃ものかは、その宗教を信じると人間が、清くなるか、清くならないかできまる。またその宗教が金に媚びるか、媚びないかできまる。それからその宗教家が徳のある人間か、ない人間かできまる。その人の話をきくと自づと心が清まる人でなければ本當の宗教は生れない。臭氣を發する宗教家や、奇蹟や、御利益をおし賣りする宗教は本當の宗教ではない。又世界中の人がそれを信じると、益々人類が幸福になる宗教でなければ本當の宗教ではない。或る國だけをエコヒイキしてゐる神は本當の神ではない。基督の話してゐる宗教の神様は氣が小さい。又その信者が奇蹟許りをありがたがつてゐる。それではその宗教を信じるわけにはゆかない。廣告のうまい宗教家も本當の宗教家ではない。謹むことをまるで知らない人間は、まことの宗教家にはなれない。本當の宗教家とうその宗教家はその人が、人間に與へられた最も貴いものを本當に生かさうとしてゐるか、それに氣もつかないかできまる。自分に人間の内にゐる神のありがたさを知らしてくれない宗教は要のない宗教だ。ありがたみを感じることの出來ない神、それは味を失つた鹽よりなほ醜い。そんな神を賣物にして得意でゐるものは阿呆に限る。問題にする程のものではない」

「それならさう云ふ宗教はつぶさなければなりませんね」

「つぶす必要もない神だ。あつてもなくつても同じ神だ。ほつたらかしておけばいゝだらう。それより本當の神を見出すことが必要だ。それには自分の心を清くし、行ひをつゝしむより仕方がない。神に愛される資格のあるものは神を感じる資格のあるものだ。我々は神に愛される人間にならなければならない」

十八

或人が師に云つた。

「神を見てゐる時に、不幸な人のことは考へないのですか。不幸な人のことを考へれば、神を見てもよろこびは感じられないでせう」

「君は理窟でものを見てゐるね。人間がどうつくられてゐるかと云ふことを知らないのだね」師はさう云つた。「君は甘いものを食つてゐる瞬間に不味いものを食つてゐる人のことを考へて甘いものをまづいと思ふかね。美しいものに見とれてゐる瞬間に醜いものを見てゐる人に同情して美しいものを醜いと思ふかね。もしさうなら君は不幸な人だ。神を見る、そのありがたさを強く感じればこそ、次の瞬間に自分の徳の足りなさを感じるのだ。不幸な人のことを思ふのだ。自分のしなければならないことを本當にしようと思ふのだ。耶蘇の言葉に聞きとれてゐた間マリアはマルタのことを忘れてゐたのだ。だが耶蘇が居なくなつたら、マリアは一層マルタの爲に働いただらう。本當のことを見ずに理窟でものを見ると、折角面白いことが面白くなくなる。美を見る次の瞬間に醜を思ひ、眞理に接した後で眞理に接しない人のことを思ふ、併しそれは美や眞理のありがたみを本當に知つた人でなければならない。美を見た時は美を、眞理に接した時は眞理を、本當に感じた人でなければならない。神を見得る時は少ない。その時は何ものをすてても神を見なければいけない。そしてありがたがれるだけありがたがらなければ。それでこそ生き甲斐を得、人間に生れたよろこびを感じられるのだ、さうして本當に正しい生活を送る氣になれるのだ」

十九

師は決して如何なる時も虚僞を好まれなかつた。しかし人間はまだ眞理には遠いものだ。愛や眞心から出る、相手の心掛や神經をいたはる所から出る譃はやむを得ないこととして認めてゐられた。「正直なのはいゝが露骨なのはいけない」とも云はれた。或日自分が一人師をたづねた時、師は次のやうなことを云はれた。「日光をぢかに種にあてては種はひあがつてしまふ。日光と種の間には土呂が必要だ。人の目は日光に生かされるが、日光を正視することは出來ない。

「眞理にぢかに照らされては人生はひあがつてしまふ。眞理がいろ〳〵のものを通してちよいちよい現はれるので人間は生きてゆける。いろいろの美しい色は物體が日光を受け入れてその一部を自己を通じて生かす所にある。眞理をうけ入れて、それを自己の愛を通じて生かすべき時に生かした人が聖人だ。人間的な愛を通らない眞理は我等には強すぎる。

「眞理には道徳的價値はない。絶對だ。ぐらつかない。其處にありがた味がある。だがその前に人間が立つにしては人間が小さすぎる、威壓される。そのくせ眞理なしでは我等は生きてはゆけない。あまりにより所がない。

「眞理は本當の内での、最も本當のことだ。本當のことを知らない人間はおちつけない。だがあまりに本當のことを知つたら、人生には色もつやもなくなる。人生は永遠の前に立つては餘りに貧弱で、あまりに御粗末だ。

「人間にもし愛を通した眞理にふれるよろこびがなかつたら、人間に生れたと云ふことは、滑稽であり氣の毒なことだ。人間に愛想をつかしきつた人のことを見よ。愛想をつかしても人間は人間だ。人間らしいことより出來ない。

「吾々は概念で生きて、愛で生きない時、人生は悪い諺だ。玉手箱だ、そつとしておくより仕方がない。かう云ふ話をしてゐると淋しくな

るだらう。話をしてゐる間はつい、人間が概念的になりやすいから、生きたものとも取組まないから。しかし今、君をすぐ、生きてゐることによろこびを感じさせて見よう」

師はさう云つて次のやうな話をされた。

「自分がこゝに來る一年程前に、人間に生れたことを後悔した時があつた。自分は人間に生れたいと思つて人間に生れたのではない。人間がどんなものであるか、この世がどんな處か知らずに生れて來た。この人生がもつと醜い悲慘なものであつて、人間の出來がもつと絶望的に出來てゐても自分は小言の云へない人間だ。又この世がもつと悲慘で、何等の希望なく、天災がつゞいて起り、見るもの聞くものがもつと不愉快であつても、自分達は小言は云へない。だまされて生れて來たのではないから。私は人間に生れたことを後悔した時も、この世に美があり、人間に善人と、美人と、賢人と、聖人の居てくれることを感謝し、草の青く、空や水の色が限りなく美しく、日の形や色、月の形や色、花の形や色、その他のもの形や色の限りなく美しく、小鳥や、毛物の可愛らしい姿を感謝した。しかし人間があまりあはれで、そしてこの世に生きてゐる間のあまりに短かく、人生の無常なのをなさけなく思つた。自分が、死んでも生きても、どつちにしても同じであることを感じた。苦しんで生きてゐる甲斐のない人生だと思つた。一思ひに死ぬ方がどんなにさつぱりしてゐるかわからないと思つた。しかし自分は死ぬことは出來なかつた。何かこの人生に未練をのこすものがあつた。何しても始まらないし、何しても同じことだとは思つてもこのまゝ死ぬのは心殘りだつた。自分は亡き父や母の意志を、自分の内に感じることが出來た。それは自分に立派な人間になつてくれと云つてゐた。そして自分達か地上に生かしたく思つて生かせなかつたことを生かしてくれと云ふやうに思へた。自分もこの世に人間として生きた以上は何か人間の爲に働いてゆきたいとも思つた。働いても始まらないと思つたが、それでも何かしてゆきたいと思つた。少しでも人間に役に立つことを、何處かにしてゆきたい。自分にはそれは出來るとも思へなかつた。出來るだけのことをもせずに出來ないと見切りをつけるのは自分をつくつたものにすまないと思つた。自分はさう思ふと元氣になれた。人間よ、私はあなたの爲に働きます。愛すべきあなたの爲に。自分の力は少ないでせう。だがあなたの爲に働きます。自分はさう決心をした。自分はその時分よく旅行した。そして山路を歩きながらそんなことを考へてゐた。そしてお役に立てゝ下さい。どうかお役に立てて下さい。私の一生をその爲にお使ひ下さい。自分は時に氣持でさう云つた。自分の心は安まり、うれし涙が出て來た。人間はくだらない、つまらないものだと思へば思ふ程、愛を感じ、出來るだけ人間の爲に働き、そして人間は生き甲斐を感じられる動物だと云ふことを本當に知る爲に働かう。地上にある、金剛石や金を見出す爲に人々は隨分骨を折る、自分は人間の心の内にある人間に生き甲斐を與へてくれる寶を見出すものにならう。自分はさう思つた時、勇氣を得た。自分は日がくれてから淋しい峠を、そんなことを考へて夢中に歩いてゐた。すると、峠をこして少し行つた時、町のあかりが見えた。家々から燈火がもれた。自分はそれを見た時に、本當に驚いて祈つた。人々よ、幸福でゐてくれ、私はかくれてゐる處であなた方のために働きます。自分は泣いてしまつた。自分は今でもその心持をよく思ひ出す。そして、人生にたいする希望をとり返す。人生の爲に働いてくれたものすべては自分の師だ、自分はその末席にゐて、自分の一生を少しでも人間の御役

に立てることが出來るとうれしいと思ふ。君はさうは思はないか」

「思ひます」自分は涙ぐみながらさう云つた。そして師は今更に貴いと思つた。

二十

師が三十五六の時だつた。師は一つの小さい寺院を建てることを本願にした。そして自分達は材木や、金や、勞力を寄附した。師と一緒に、カヤをかつたり、木を切つたりした。大工を雇つたが、他は自分達が力をあはせてつくつた。十五六坪の家で、それは町はづれで往還筋の淋しい處だつた。いつか其處で自殺があつた處で、夜歩くのに少し淋しい處だつた。師は其處に、一人の熱心な弟子と共に住はれた。

その寺院は金がなくつて、宿をとることの出來ない人をとめるのが目的だつた。師は放浪してゐた時に、二三日飯の食へない時があつた。その時から師はさう云ふ家を建てたいと思つてゐられた。師はその時或る親切な家であたゝかい飯をよばれ、心よく泊めてもらへた時のよろこびを思ふとなほ、さう云ふ寺院をたてたく思つた。さうして自分の受けた恩を小さい兄弟に報いたく思つた。

その上に師は佛壇のやうなものもつくりたがつた。其處には釋迦の像が祭つてあつた。自分は矢張り御釋迦樣の前に一番すなほに頭がさがると云はれた。「それは子供からの習慣だらう」

その寺院で師は每月一度第一日曜に話をされた。

集つたのは矢張り自分達の仲間で、それに時時物好きの人が加はつた。若い女達も師を訪ね出した。自分の妻もその内の一人だつた。

最初の話は寺院に就てと云ふやうな話だつた。

「私はこゝに誰にも屬しない一軒の家を、皆さんの助力で建てることが出來ました。この家は私の家ではない。神樣の家にしたい。この家は小さく粗末だ。併しこの家を神樣の家にしたい。この家の客は神樣の客であり、我々は神樣に仕へる下男でありたい。神樣は何處にでもいらつしやる。この家にもいらつしやる。たゞ私が不束だと神樣はいらつしても、私の方で氣がつかない、口だけで神樣神樣、と云つてゐるだけだ、その言葉はうつろで、君達の心にひゞかない。しかしこの家を本當に自分が神樣のお役にたてることが出來たら、この家の神樣のものだと云ふことを我々は感じないわけにはゆかない。私はこの家を神さまのおぼし召しのまゝにつかひたい。私の望みにまだ私の力はそはない。だが私はこの家を自分の利己心の爲にはつかはないつもりだ。この家を如何に役立たせるかは私の神樣を知ることの深いか淺いかを示す、私がまた口許りの人間か、眞心をもつ人間かを示す。私はこの家を、泊るに家のない旅人のものにしたい。元よりこの家に泊れる人は少ない。だが皆無よりは、一つでもあつた方がいい。この地上には神や佛の家が澤山ある。しかしそれを人間が横領してゐる。本當の神の家は私は一つもないと云ひたい。いや、ある、ないことはない。私の知らない處にきつとある。だが神の家は少なすぎる。慈善家はゐる。信心家もゐる。しかし神の家は少なすぎる。旅人、それも好んでする旅人ではなく、おちつく處なくさまよふ旅人が、神樣に一夜の宿をおねがひしても、きかれないことは往々ある。私もその經驗がある。人間の内の物慾が威張りすぎる間人間の内の神樣は生きられない。私はそれを心細く思ふものだ。そして自分には少し恐ろしすぎるが、この家を神樣にさゝげたく思つてゐる。今の世に寺院は必要がないか。私はまだ必要が

あると思ふ。必要のない時は、いたる處に神様が生き、人間の住ふ處には必ず神がいらつして、人間の住ひには寺院が存在する時だ。今はまだその時ではない。神様の家は少なすぎる。そして人は神様の家に馴れてゐない。私はこゝを木賃宿にしてしまふかも知れない。しかし私はこの戸を金では開かない。神様の名によつて一夜の泊りをたのむ人をとめる。そして私は神に捧げた穀物によつて、その人達にあたゝかい飯を捧げたい。私はそれによつて元より自分の名を出したくない。自分の内の汚れたるものが少しでもこの家を利用したら私は恥知らずだ。私はその時人間と神とを汚すものだ。君達の希望、君達の清き心をけがすものだ。自分はそんな人間にはなりたくない。それからこの家で、私は君達と神様の話がしたい。いつでも私はこゝに居て、君達と神様の話をしたい。自分の心の清まる話をしたい。人間は今時でも、こんな話をして心からよろこべ、本氣になつて神様のことを考へて生きてゆけることを知りたい。元より神様は人間の神様だ。我々のうちにある神様で、人間を愛し、人間の不幸や、罪悪や悲惨の爲に心をいためられる神様だ。私は神様に身を任せたい。私は時々不淨なことを思ひ、不淨なことに心をひかれることもあらう。だが神様のことは忘れない。それを忘れては私は生きてゆけない。人間を信じることは出來ない。私はさう云ふ人が世界には澤山ゐると思ふ。私はさう云ふ人の兄弟だ。小さくも兄弟だ。そしてさう云ふ人の爲につくしたい氣では人後におちないつもりだ。自分のとり柄は其處だけだ。それを失ふわけにはゆかない。貧弱と云はれるのはいゝ、そんなことしても始まらないと云はれるのも覺悟してゐる。だが虚僞な人間、恥知らずの人間にはなりたくない。私を信じてくれ、私は自分の一生をカリカチュアにはしないつもりだ」

　師はさう云つた。實際その寺院は師にとつては眞剣な仕事だつた。時には客もあつた。毎月の集合は少しではあつたが聞き手はふえて行つた。

　二度目の説教は、「神に愛される者」と云ふ題だつた。

二十一

　師は説教の時、理窟はなるべくさけられた。本當のことを直接に感じさせるやうに骨折られた。その點、師は福音書に顯はれた耶蘇の言葉に、感心する上にも感心された。理想的以上だと云はれた。あの生々した言葉は何處からくる。たゞ神と同じ深さにたつした人の子からのみあふれ出る。

　師は「神に愛される者」と云ふ題でかう云ふ話をされた。

「こゝに二人の人間が居た。一人は金もあり、身體もよく、働きもした。だがそれは自分の爲許りであつた。他人は他人、自分は自分、そして世界を自分の爲にのみ存在してゐるやうにあつかつた。學問もあつた。しかしそれはこの世的に立身する爲に使ふにすぎなかつた。彼は道樂をした。そして樂天家であり、世間的に地位も得、よき妻子ももつてゐた。誰もがその人を幸福だと云つた。その人自身も自分を幸福だと思ひ、働きのある人間だと思つてゐた。しかし彼は誰をも愛することが出來なかつた。女を澤山可愛がつたらう。しかしそれは相手を人間として愛したのではない。まして眞理や、正義や、美には無頓着だつた。我々はその人を見て、愛を起すことは出來ない。その人の内には何等愛すべきものを見出せなかつた。その人の内には俗なもの切りなかつた。面白い所が少しもなかつた。金錢上や社會的に損をしないこと許り

考へてゐた。そして得をすること許りを名譽と心得てゐた。彼は體面を重じた。しかし他人と心をうちあけることを知らなかつた。うるほひがなかつた。かゝる人はいくら幸福でも神から愛されることは出來ない。神の愛を立派に拒んでゐる。そしてそんなものの存在をすら認めてもゐなければ必要も感じてゐない。かゝる人は神を要しない人で、社會の奴隷である。社會の要求する通りに體面をつくり、社會の要求する通りの才能をはたらかし、それ以上は何ものぞまない人だ。かゝる人はいかなる社會にもうまく適應して得をすればそれでいゝ。それ以上のことを望まない、かゝる人許りでこの世が出來てゐたら、神は存在する必要はない。かゝる人も神を祈るかも知れない。だがその神は彼を益々社會的の幸運兒にする神で、それ以上の神ではない。我々はかゝる人間を愛することは出來ない。かゝる人間許りでこの世がつまつてゐないことを我々はのぞむものだ。他の人は金もなく、身體もわるく、十分に働けない人間だつた。しかし彼は常に自分の力の足りないことに淋しさを抱いてゐた。どうかして自分を何かのお役にたてたく思つた。彼はよくはがゆがり、おちつかなかつた。癇癪持で、人の惡口も云つた。損しても彼は氣持のわるいことは出來なかつた。彼は自分のやうな人間が他人に親切にされるのは勿體ないと思つてゐた。彼は他人に不平をもつたり、不快に思つたりするとあとでわるかつたと思ふ。彼にも名譽心はあり、快樂を嫌ひはしなかつた。しかし彼はそれ等によつて行動するのを恥ぢた。彼は或著作をしようとしてゐた。それは人間の誇りとなるいろ／＼の人の事蹟をこの世に傳へることだつた。彼は人々がそれをよむことで、自分がそれ等の話をきいた時、感じたやうなよろこびをつたへたく思つてゐた。そして少しでも人々の生きてゆくのに御役に立てばいゝと思つてゐた。彼は皆から馬鹿にされ、うちの人からは厄介ものにされてゐた。彼もそれを無理とは思はなかつた。彼は小さい家で、出來るだけ簡單に生活して、自分の仕事を遠慮しながらしてゐた。自分の仕事に時々は誇りを感じ、よろこびも感じた。だが、多くの時は自分の分にすぎた仕事をしてゐるやうに思つた。そしてよく見知らぬ神に祈つた。私の仕事がもしあなたの御心に叶ふならお助け下さい。あなたの人類にあらはれた足跡を少しでも人々につたへる力をお與へ下さい。それは私の力ではありません。あなたの力です。自分を信じてゐませんが、あなたを信じてこの仕事をしてゐるのです。どうか御心に叶つた御言葉許りをかゝして下さい。私の醜い心がその御言葉をけがすことを私は恐れてゐます。から云ふ人間は多くの人から見ては馬鹿に見え、零のやうに見え、働きのない人のやうに見える。だが神はその人を憎みはしない。神はその人を愛される。神に愛されるには、己の眞心をつくして生きてゆかうとする意志がなければいけない。自分の幸福よりも、自分の正しいことを望む人でなければならない。この世の成功をするよりも、惡いことをつゝしむ人でなければならない。損をしないことを許り考へるよりは、自分を賤しくしないやうにつとめる人でなければならない。他人をあざむいて他人を不幸にして得をするよりも、他人をあざむくことが出來ず、他人の運命をいたはつて損をする人でないと神様に愛されない。この世的に缺點のない人間が神様に愛されるのではない、眞心を生かさないと生きてゆかれない人間でないと神様に愛されない。圖々しい人間や、あざむくことの平氣な人間は神に愛されない。神は兄弟の爲に心から心配し、自分の惡いことには氣がとがめないではゐられない人を愛する。惡う御座いました、し

かしどうかお見捨て下さいますな、さう心から見えない神の前に跪けるものは、神樣に愛される。同じく神の前に捧げものをしても、眞心のないものには神は顏をそむけ、眞心のあるものの心に神樣は慰安を與へる。神に愛されないでも平氣な人はいゝ。しかし神に愛されたいと思ふ人は、純粹な氣持で生きなければならない。不淨な心を自づともやしつくす程本氣になつて生きられる瞬間をもたなければならない。それから、神の前に恥づべきものは恥ぢ、あやまるべきものはあやまり、隣人にした惡いことは再びしないやうに注意をし、自分の罪を忘れて他人の罪をせめたことを後悔し、隣人と出來るだけ和解し、すべての人に出來るだけ厚意をもち、そして出來るだけ清く、美しく自分の今後の生活をしようと心がけなければならない。もし本當にさう心がけることが出來ると、神は我々に清き涙を下され、あらたに生きる勇氣を與へて下さる。さう云ふ人はよろこんでいゝ。それは神さまが愛してゐて下さる證據だから」

二十二

或日の夕方だつた。師の處に一人の乞食がたづねて來た。若者が出た。それは可なりひどい癩病やみだつた。一夜のやどりを請うた。師に反感をもつてゐる僧侶から聞いたと云つて。若者はおどろいて師にそのことを知らせた。そしてどうしませうと云つた。

「勿論とめてあげろ」

師はさう云つた。

「蒲團はどうしませう」

「俺の蒲團を出せ、俺はお客の蒲團でねるから」

「もしうつつたら」

「あとで十分に消毒する」

「それならお客蒲團でもいゝでせう」

「癩病のねた蒲團だと思つたら、お客はいゝ氣がしないだらう」

若者は躊躇してゐる。

師は自から立つて、その男に、「どうぞお上り下さい」と云つた。その男は平氣で上つた。師は、「飯はまだでせう」ときかれた。

「まだです」その男は少し反抗的に云つた。

師は自分の茶碗で飯を食はした。そして男はつかれてゐると云ふので早く師の蒲團にねた。

翌日その男は禮を云つて歸つて行つた。

師は若者に癩病人が來たことをなるべく默つてゐろと云つた。師はすべてのものを消毒した。そして消毒したあとで、すまして自分の茶碗をつかひ、自分の蒲團にねた。

若者は默つてはゐられなかつた。そして自分達の間にはその話が美談として私かに話され、そしてそれが人々に段々公然と話された。それに就て師は反つて昔から尊敬された。

師はかう云はれた。

「癩病人をとめたのは少しも偉くない。自分はそのことをむしろ恥ぢてゐる。自分は癩病を恐れてゐる、自分は決して、深い決心でとめたわけでもない。しかし美談をつくりたい爲にとめたのではないだけが自分の取柄だと思つてゐる。自分はそれで內證にしておくつもりだつた。元よりごく小さい出來事だ、癩病患者がそれで救はれたわけでもない。正直に白狀すると、自分は若者が癩病患者をもてあましてゐる顏を見たので、決心が强まつた。殊にあの坊主から聞いて來たと云ふ時に自分は戰ひをいどまれたやうな氣がした。自分はさう思つたことを恥ぢはしたが、自分の決心は固まつた。蒲團のことも、あれが心配してゐるのを見た時、すぐ決心がついた。自分は元より、この寺院をたてる時から、癩病人のくるのをかく悟してゐた。自分は少しもほめられる資格のないものだ。自分の信仰のよわさと、德の足りなさをあの晩心から

祈つた。どうか美談としないでくれ。恥かしいから」

しかし師にこのことがあつてから、徳望がふえて、その次の説教をきゝにくる人は隨分多かつた。それは三度目の説教で、同時にそれが最後の説教になつた。なぜそれが最後の説教になつたか、それはあとでかくことにしよう。

二十三

題は「幸福者」と云ふのだつた。

師はいきなりから云はれた時に自分は心配した。

「食ふに米があり、住むに家があり、着るに着物のあるものは仕合せだ。健康なものは仕合せだ。金に困らないもの、借金に苦しめられないものは仕合せだ。身體の自由と思想の自由を金で賣らないものは仕合せだ。自分の嫌ひなことをしないでも、生きてゆけるものは仕合せだ。愛するものは仕合せだ。第一愛するものを持つてゐるものは仕合せだ。貧乏しても心のおちついてゐるものは仕合せだ。金持になつても、金に執着の少ないものは仕合せだ。心のひがまないものは仕合せだ。人を憎み或は猜むことのないものは仕合せだ。隣人の幸福をやきもきしないものは仕合せだ。隣人と仲よくするものは仕合せだ。他人の幸福を望めるものは仕合せだ。病氣しても天命を甘受するものは仕合せだ。努力仕甲斐あるものに努力するものは仕合せだ。何ものの奴隷にもならず生きてゆけるものは仕合せだ。天命をまつたうするものは仕合せだ。他人と協力出來るものは仕合せだ。日かげものにならず日なたものになれるものは仕合せだ。心のすなほなもの、心の賤しくないものは仕合せだ。淺墓な所以上のものをもつものは仕合せだ。心のおちついてゐるもの、生々したものは仕合せだ。他人の心にふれられるものは仕合せだ。あしき種をまかずよき種をまくものは仕合せだ。後悔しないですむものは仕合せだ。過ちを改めることの出來るものは仕合せだ。忍耐強いもの、熱心の強いものは仕合せだ。善きことによろこびを感じるものは仕合せだ。美を感じるもの、眞理に向へるものは仕合せだ。臆病でなく用心深いものは仕合せだ。親切で平和なものは仕合せだ。人類を愛する事の出來るものは仕合せだ。心が狹しくなければ何ものをも恐れないものは仕合せだ。自分を正しく生かしてゆけるものは仕合せだ。生長のとまらないもの、全力を出し切れるものは仕合せだ。人力を盡して天命をまつものは仕合せだ。尊敬すべきものを尊敬するものは仕合せだ。そして感謝すべきものに感謝出來るものは仕合せだ。他人の運命をいたはるものは仕合せだ。いと小さきものをも愛することの出來るもの、いと小さきことにも自己を最上に生かせるものは仕合せだ。死に打克てるもの、生を肯定出來るものは仕合せだ。最も仕合せなものは神と共にゐるものだ。そして同胞の爲に生き、同胞の爲に死ねるものだ。生きてゐても神を見、死につゝも神を見るものだ。自分の一擧一動が無限に達し、少しも歪まず、少しも穢されず、神の愛と人の愛とが自づと溢れ出る人だ。自分は總ての人が仕合せものになつてくれることを切に望み祈るものだ。世界の人よ、仕合せものになつてくれ。神よ、總ての人を仕合せものにしてくれ。私はその爲には土呂の上に手をついてあなたの前に祈る。世界の人よ、仕合せものになつてくれ。私は頼む、私は祈る。その爲に少しの努力でも惜まないものは仕合せだ。私はその本願を充すことが出來るならば、死んでもいゝ人間だ。皆さんもその爲に働いて下さい。お頼みします」

人々は涙ぐんだ。女の内には聲あげて泣いたものさへあつた。師も今にもなきさうだつ

た。自分も泣いた。そして師の爲に盡さうと思つた。

自分は滿場の人が師の言葉に動かされたと思つた。だが其處に黑い影が動いてゐた。自分達はそれに氣がつかなかつた。

二十四

それからまもなく誰かわからない人が新聞に師のことをしきりとほめた。それはまだよかつた。しかしそれを墮落した僧侶を攻擊する爲につかつた。黑を黑くする爲に白をつかつた。殊に師を最も憎んでゐる僧侶を破戒の僧侶として最もつよく攻擊した。師はそれを知つた時、いやな顏をされた。いたくない腹をさぐられさうに師は思はれた。弟子をして自分をほめさし、憎む敵を惡口させたやうに相手にとられさうに思はれた。師はさう云ふいやしい人間に思はれることに潔癖だつた。しかしわかる人にはわかると思はれた。實際、師の處によく出入りしてゐる人にそんな投書をしてゐる人はなかつた。又相手の僧侶の私行を知つてそれをあばくやうな人は居なかつた。だが心のよくないものが見れば、殊に惡口云はれた方から見ればさう思ひたいのが人情だ。さぞ不愉快を感じてゐるだらうと自分達は思つた。内々それを心よく思つた人もなくはなかつた。

相手の僧侶は沈默してゐた。しかし今に仕返しをして見せると云つてゐたから用心するといいと師につげた人もあつた。師は別に氣にされなかつた。一二週間は何事もなかつた。

或日若者が用があつて一晩不在の時があつた。その夕方一人の女の客があつた。旅のもので一晩とめてくれと云ふのだつた。師はまよつた。斷るべきものか、とめるべきものかわからなかつた。

しかし師は斷ることが出來なかつた。何しろ日はくれかけてゐた。女はとほくから或人をたづねて來たのだがその人はもう居なかつた。そして何處にも泊ることは出來ないのだと云つた。是非とめてくれと嘆願した。師はその言葉をすつかり信じられなかつた。だがとめることに決心された。

女の話だと、師は當惑されたらしかつた。ぼんやり立つて何か考へてゐられた。斷られるのかとひや〳〵したさうだ。師はあとでその時のことを女にかう云はれたさうだ。「私にはとめる資格も斷る資格もない。私の不淨なものがとめろと云ふ。斷つては氣の毒だと云ふ。私はそれに反抗することが出來なかつた。自分を誘惑しに來たのではないか、さうも思つたが、さうでないかも知れないと思つた。ともかく斷つて扉をしめ切り、とぼ〳〵歸つてゆく姿を見る氣にはなれなかつた。私は神樣に伺つたけれども、清くない私の心には神樣のお答を得ることは出來なかつた」

女は實際彼の僧侶にたのまれて師を誘惑しに來たのだ。女に、「あの人だけはいくらお前でも誘惑出來まい、もし誘惑出來たら何でもやる」と云ふやうなことを云つた。女は出來まいと云はれたことが策略に落ちることとは知つてゐたが、腹が立つた。出來ないことはないと云つた。それなら出來なかつたらお前の一番大事にしてるダイヤの指輪をよこすかと云つた。あげますとも、と女は云はないわけにはゆかなかつた。男と差し向ひになれば必ず誘惑が出來ることを長年の經驗で女は信じ切つてゐた。それで師の一人切り居ない晩をさがしてゐた。女は師を一目見た時に、この人は誘惑することはわけないと思つた。しかし飯を出された師の顏を見た時、女は之は一通りの男ではないと思つた。今迄逢つたどの男よりも、威嚴のある人だと思つた。何とか話しかけたかつたが、口を切

ることが出來なかつた。思ひ切つて、少し自棄氣味に、

「酒はないの、何處かにかくしてないの」

「ない」

怒られたやうな氣がして師を見たら、師は微笑んでゐた。しかし其處には賤しい所がなく、憐れみがあつた。女は反抗したい氣になつた。

「氣がきかない方ね」

師は默つてゐた。

「勝手に飯をくつて、其處に蒲團がありますから勝手にねて下さい」

「妾、一人でこんな淋しい處にねられませんわ」

師は默つて自分の室に歸られた。女は一人ぼつちになつた。しかし今に師はきつと出てくると思つた。だが森として師の室で本の紙をめくる音と、天井で鼠がさわぐ音より外なにも聞えなかつた。女は本當に淋しくなつた。それ以上怖くなつた。早く痩我慢をせずに出てくればいゝのにと思つた。本當に臆病もので、意氣地なしだ、男のくせにして、女はそんなことを思つた。とう〳〵待ち切れなくなつた。

「御免なさいよ」

女はさう云つて師の室に入つた。必ず誘惑して見せると云ふ決心で。師は机に向つてゐた。女を見た。

「妾、一人ではこはくつて仕方がないの、こゝにねていゝでしよ」

「あなたは私を誘惑しに來たのですね」

「さうよ」媚びをふくんでわざとらしく女は云つた。

「そんな罪なことはするものではありません」

師はうちとけたやうにさう云つて、机の上を見られた。其處にはお釋迦さんの像があつた。女はあとで云つた。「妾は寺の本堂でもいたづらをしたことがあります、お釋迦さんの像なぞにおぢけをふるふ程やさしい女ではなかつたのです。しかしその時のお釋迦さんの像だけはありがたい氣がしました。威嚴に打たれました」

師は云つた。「あなたのしようとすることは恐ろしいこととは思はないのですか。あなたは久米仙人が何年も何年も苦行して得た仙術をやぶつた女を罪な女とは思ひませんか。私は久米仙人ではない。しかし私は正直に云へば、あなたが怖い。しかし私は自分を清くする事を自分の仕事にしてゐる。一晩の快樂の爲に一生をだいなしには出來ません。送つて上げますから、默つて家にお歸りなさい」

「妾は歸りませんよ。あなたは本當に臆病な方ね。誰も見てやしないぢやありませんか。妾を清く歸したつて、妾があなたを誘惑したと譃を云へば誰だつて本當にします。何處へ出ても妾は平氣で譃がつけてよ。この人はこんな顏してゐたつて―

「譃と本當とはちがひます。譃なら何と云はれてもかまひません。出來るだけ譃をお云ひなさい。私は譃なら平氣です。皆がその譃を信じ切つた時、あなたは心にきつとせめられるでせう。私は譃をこはがりはしません。私の怖いのは世間の噂ではありません。本當に誘惑されることです。その時、いくらあなたがあなたと私との間が清かつたと云はれても、私は云はれれば云はれる程、穴のなかに入りたい氣がするでせう。思ひ切つて歸つたらいゝでせう」

「何も妾をこはがらなくつてもいゝでせう」

「あなたはこはくないが、自分がこはい」

二人は默つてゐた。師は又机に向はれた。暫らくして師の方から口を切つた。

「あなたは誰かにたのまれてこゝに來たのでせう」

女はうそを云ふ氣にはなれなかつた。

「えゝ、その名前を教へて上げませうか」

「いえ、聞くにはおよびません。その人はなぜあなたにそんなことをたのんだか知つてゐますか」

「知りませんわ」

「私の一生を傷つけようと思つてゐるからです」

「なぜ傷がつくのでせう。そんなことで傷がつくならあなたの一生も隨分くだらないのね」

「そんなことはありません。寶石でもなんでも、いゝものになればなる程、小さいきずを恐れます」

女はそれを聞いた時に、心から自分がけがれてゐることを感じた。女は泣きたいやうな氣になつた。反抗しようと思つても、師の顏と、お釋迦さんの像と、あたりの空氣がそれを許さなかつた。師はそれに氣がつかれた。

「寶石だつて寶石になるまでは、いくらでもこすられ、もまれることが必要です。初めつから無きずのものはありません。研かれないものは傷をあまりいとひません。あなたは顏に出來た腫物はどんなに小さくつても氣にするでせう。それがあなたの本職だから。私の本職は心を美しくしておくことです。だから心に傷をつけることは恐れます。私があなたの顏に少しでもあざをつけたらどうします。あなたはどんなに怒り、なげくでせう。あなたの顏にあざをつけるものは罪なことをする人間です。そのやうに、私の心や行ひにあざをつけるのは罪なことです」

「それならば、妾は、こゝにぢつとしてゐますわ。妾はおとなしくして、あなたの御勉强の邪魔はしません」

師は默つてゐた。

師は又机に向つた。机の上には聖書がのつてゐた。師は默つてそれをよんで居た。師はどこをよんでゐられたか、それを聞くことはもう出來ない。ともかく暫らくして師がふりかへられた時は師はおちついてゐられた。そしてから云つた。

「あなたが今日來てくれたことは私にはよかつた。私は決してあなたが來て下さつたことを惡くは思つてゐない。私はあなたをよこした人も憎んでゐない。むしろ氣の毒な人と思つてゐる。坊主にさへ生れなかつたら、あの人は私を敵にしないですんだのだ。新聞にあの人の惡口が出たのは私の知らないことだ。あの人も心のなかに入れば惡い人ではない。誰だつて愛すべき一面をもつてゐるものだ。私はあの人を憎んではゐない」

「妾はあの人をちつとも愛してやしません。あの人はあなたの思つてゐるよりもつと恐ろしい人です。あの人は自分の思つてゐることはどんなことをしてもやらないではおかない人です。あなたは用心しないといけません。妾達でさへあの人を皆おそれてゐるのです」

「私はこはくない。あの人は私の心をどうすることも出來ない」

「ですが、あの人はあなたを殺すことは出來ます」

「殺すことは出來ても私の心を奪ふことは出來ない。私はもうあなたも恐れない。私はもう決心してゐる。私は自分をあるものに捧げてゐる。そのものに氣に入らないことは出來ない」

「妾は地獄におちるでせうか」

「地獄なんと云ふものはない」

「極樂は」

「極樂は勿論ない」

「それなのにあなたはなんの爲にこの世を面白くなくくらしていらつしやるのです」

「私は幸福にくらしてゐる。人間は快樂許りがたのしみではない。あなただつて酒のんで許

りゐても、淋しくなることがあるでせう。身のゆく末を考へることもあるでせう。やけを起すことがあるでせう。私はやけを起したことはない。私はいつも安心して、心のどかにくらしてゐる。私は自分を幸福だと思つてゐる。こはいものはない。私は自分さへ正しくしてゐられればこんな幸福はないと思つてゐます。この幸福は何處からくるか知りません。しかし私は幸福なのです。心さへ亂されないなら。さもなければ人間に生れたと云ふことは心細いことです。淺墓なものです。あなたはいろ／＼の人に逢つたでせう。なほ人間の淺ましいたよりにならないことも知つてゐるでせう。人間程圖々しい、自分のこと許りきり考へてゐないものはないと思ふでせう。そしてたまに實意のある人があるとうれしいでせう。しかしその人だつてたよりにはならない。人間はたよりにはならない。たよりになるのは神樣許りで、神樣の御氣に入らないことをしないやうにすれば、それでうれしいのです。私はあなたも神樣から私に與へられた人のやうな氣が今やつとするのです。あなたはいゝ方です。誰も知らない、あなた自身でも知らない程、あなたはいゝ人です。決してやけを起したり、わるい人の味方をしてはいけません。そして少しでもいゝことをしてゆきたいと思ふ私を誘惑するのはいけません。誰もゐない夜に私の處に泊りにくるなぞと云ふことはいけません。今度くる時は晝來て下さい。皆がゐる時に、平氣で來て下さい」

　女は「歸ります、歸ります」と云つた。

「ありがたう。身體を大事にして下さい。私が町の入口迄送つてあげませう」

　師は提灯に火をつけた。

　二人はそとに出た。女はしく／＼泣き出した。師は默つてゐた。

「本當にわるう御座いました」

「そんなことはない。私こそあなたにあやまらなければならない」

　師はさう云つた。町のはづれで二人は丁寧にあいさつしてお互に身體を大事にして下さいと云つてわかれた。その晩師はいのつた。女は泣いた。女はあくる日ダイヤの入つた指輪を僧侶にとゞけさした。そして「妾が立派にまけました」とことづけさした。

二十五

　師は今や、何が來てもおどろかない決心が出來たやうに見えた。師をきずつけようとしたことは、師の名聲を高めるに過ぎなかつた。師のありがた味を一層はつきりするに過ぎなかつた。自分達はそれをよろこび、名譽のやうに思つた。何ものが來ても師はけがされない。ますます眞價を發揮するにすぎない。自分達は益々師を信じた。しかし世間では師と女の間の清かつたことを信じられないものも多かつた。それを信じて師のかたくななのをあざわらつた人もあつた。しかし師はおちついてゐられた。女はその後毎々師の處に見えた。そして誰にも師のことをほめるのに遠慮がなかつた。それで反つて疑ひを深めた人もあつた。しかし女も師も平氣だつた。しかし二人だけであはれたことは一度もなかつた。女は師を心から信じた。そのことは我等を喜ばし、我等は女に好意を持つやうになつた。女は皆に彼の僧侶を用心するやうに云つた。そして師の生命を不安がつた。しかし師は安心してゐられた。神と共に生きられないことだけを心配された。神と共に生きられれば死は死ではない。更に生きることだ。師はさう云ふ信念をかたく持たれた。「俺は人間の希望となりたい。死に負ける人間ではない。たゞ死ぬ瞬間に自分を生かせさへすればそれでいゝ。その時、俺の眞價が生きる。さうすれば死は最

後のものではない。更に生きる道だ。自分は他人の苦心を恐れない。自分の恐れるのは、人間の道にそむいて生きることだ。自分はもう死ぬ時でも淺ましいことは出來ない。更に美しく生きることが出來る許りだ」

自分は師の決心の前にをのゝいた。そして師の最後が近づきつゝあるやうな氣がした。皆で用心しよう、師の生命を守らう、師に一日でも多く地上に生きてゐて戴くやうに骨折らう、自分達はお互にさう云つて興奮した。

師の一人で歩くことを自分達は禁じた。師の生命をねらつてゐるものがあるやうな氣がした。かの女もその心配をした。しかし師は笑つた。

「若い者達が心配してくれるのはありがたい。しかし安心してゐていゝ。私はまだ殺される程、恐ろしい人間ではない」

女が師をたづねてから一週間位は別に何事もなかつた。一週間程たつた或夜、風のはげしい時だつた。自分は一ねむりしてふと目が覺めると、半鐘の音がしてゐた。音を數へたら二つばんだつた。遠いので安心した。同時に師の家のことを心配した。それはいつもの癖でもあつた。しかしそんなことはあるまいとも思つた。しかし氣になるので、起きようとした。其處へ、雨戸をはげしくたゝく人があつた。

「起き給へ、火事は先生の家の方だ」

自分はおどろいてとび起きた。

出ると師の家の方が赤くなつてゐた。

「もしかしたら」と自分は思つた。

「先生の家らしいね」

「家はどうでもいゝが、もしものことがあつたら」

「大丈夫だらう」

「大丈夫とは思ふが」

二人は師の生命を心配したのだ。二人は走れるだけ走つた。息がくるしくなると早足であるいた。そして又驅け出した。

途中で俥をとばしてくるものに出あつた。かの女だつた。

「大丈夫でせうね」

「大丈夫でせう」

二人は俥と一緒にかけた。坂道にかゝつた時、女は「失禮ですがおして下さい」と云つた。自分達も興奮してゐるので默つておした。

其處をのぼればぢき師の家だ。そして今や、燒けてゐるのは師の家と云ふことは疑ひなかつた。

「師の生命に別状がありませんやうに」

三人は別々に祈つた。坂をのぼり切り、少しゆくと家がぼう〳〵燃えてゐた。人々は手を下しやうがなくつて、遠まきに見てゐた。自分達はそのなかにとび込んだ。そしてその内に師と若者を見出した時、自分達はどんなによろこんだらう。

「先生」自分は夢中でさう云つた。

「よく來てくれた」

「御無事で」自分達は泣きたかつた。かの女は聲出して嬉しなきに泣いてしまつた。

遂々皆がかけつけた。自分の妻になつた人もかけつけて來た。水がたりないのに、火はもう半分以上家をなめつくして手の出しやうがなかつた。皆、師の無事なのを見てよろこんだ。家はかまはない、師の生命さへ別状なければそれで澤山だつた。皆、よかつた〳〵、興奮した。師は禮を云はれた。師の目には涙があつた。

師の庭にゐる若者は、

「火事はつけ火だ」と云つた。

その時師は、

「そんなことを云ふものでない」と云はれた。

「私の過失かららしい。誰なしにさうらしい」

「そんなことはありません」

「他人を疑ふやうなことは云つてはいけない」

「かうしてゐても仕方がありませんから、私の家までひきあげませう」師を村につれて來た男が云つた。其處に巡査が來た。師は何處までも火事は自分の過失からしいと云はれた。

皆、其處をひきあげた。皆その夜、興奮した。師はねむいと云つて寢室にしりぞかれてから、皆よつて、

「つけ火にちがひない」と話しあつた。ほつたらかしておくといゝ氣になつてどんなことをするかも知れない。どうにかしなければいけないと話しあつた。

しかし翌日師は皆に集つてもらつてから云はれた。

「惡に抵抗するのに惡をもつてするなと云ふのは本當だ。私はあの家の燒けたのは實際、自分の過失だつたやうな氣がして仕方がない。しかし萬一つけ火だつたにしろ、私は默つて知らん顏をするより仕方がない。私はどんなことをしても、自分の品位をさげるわけにはゆかない。相手と同等になるわけにはゆかない。寶玉になれば瓦がぶつかつて來た時、寶玉はさけなければならない。ぶつかれば相手をなほきずつけるにしても、さら云ふことは出來ない。私は自分の心を下等にしたり、賤しくしたりすることは死ぬことよりも恥ぢる。どうか、私を愛してくれるならば、糞の敵を糞でとらないでほしい。糞をぶつけられたらそれを肥料にして、自分をより正しく生きるやうにしたい。土はどんなよごれたものが來ても土に化し、海はどんなきたないものが流れこんでも自分をけがさせはしない。殊に太陽はどんなものが來ても、それを自分を光らす材料に化する許りだ。私はまだ不德ではあるが、惡がとびこんで來てもそれを善にかへることが出來ないのをこの上なく不名譽にするものだ。私のことを思つてくれるならば、君達はどんなことがあつても、私を不德な人間にしないでほしい。決して私に加へられた惡では怒らないでほしい。私はそれを必ず生かして、自分の德を研くやうに骨を折つて見せるから。私は其處にこの上なくよろこびを感じるものだから」

そして師はどんなことが起つても、復讐だけはしないでくれと云つた。「自分に加へられた罪は皆許してほしい。土には誰も罪を犯すことは出來ない。海にも、空氣にも、太陽にも、誰も罪を犯すことは出來ない。私は彼等を理想にしていたらぬのを恥ぢる許りだ。耶蘇には誰も罪を犯すことは出來なかつた。パリサイ人も、ユダも耶蘇の眞價を發揮する道具にすぎなかつた。私はまだ／＼力の足りないものだらう、しかし力が足りないことを恥ぢることを知つてゐるものだ。加へられたる惡をそのまゝに突返さなければならない程、自分をいく地なしとは思はない」

自分達はそれをきいて恥ぢた。そして復讐は必ずしませんから安心して下さいと云つた。

「ありがたう。それを聞いて安心した」

師はさう云はれた。

自分達は凄い程、心が淸められた氣がした。

自分達は師に今迄より立派な寺院をたてさしてくれと願つた。師は、あてつけにならない程度で承知された。

自分達は更に勇氣を起して家をたてる仕事に從事した。自分達は眞劍になつた。

二十六

師の自覺は益々段がついたやうに思はれる。

師はもう天命を樂しむことを會得されたやうに見える。師は靜かにおちついて日常の生活をくり返された。沈默の時は前より多くなり、一人何か考へながら歩いてゐられる時もよくあつ

た。家をたてる爲には自らも働かれた。しかし師はある時から云はれた。

「この家はまた燒けるかも知れない。しかし燒かれるまではたてなければならない」

自分はそれを聞いた時、「人間は死ぬかも知れない、だが死ぬまでは生きなければならない」とふと思つた。そしてさう思つたとき、師の生命のことを考へないではゐられなかつた。緣起はよくないと思つた。考へないでよさうとした。しかし自分は豫覺を誇らうとするのではないが、かう思はないわけにはゆかなかつた。私は殺されるかもしれない、しかし殺される迄は生きなければならない、師はさう云はうとされたのではないかと。

まもなく新聞に師の惡口が數日にわたつてかかれた。それはあの女を師がだましたと云ふのが主な惡口であつた。女は怒つたが師は「よかつた」と云はれた。あの晩無事にすんだことを師はその時、なほはつきりよかつたと思はれたのだ。しかし人々は師にたいして蔭口をした。そして人は見かけによらないものだと云つた。師の世間的の名聲はたしかにその爲におちた。女はそのことをすまないと云つた。しかし師は平氣でゐられた。自分達は益々師を信じないわけにはゆかなかつた。しかし自分達は人々の不信の目をもつて師を見るのを感じた。自分達はそれを心細くも思ひ、はがゆくも思つた。どうかして師にたいする不當の非難を打ち消したくも思つた。しかし師は云つた。「私は罪深い人間だ。私はもつと恐ろしいこともして來た。今度の非難も自分にとつては不當なことと許りは思へない。それに自分は世間の非難はへんに氣にならなくなつてゐる。自分はもつと大きい、もつと強いものに味方されてゐるから。今度のことも自分の眞心の力を否定することは出來ない。自分は眞心の力をもつともつと信じてゐるものだ。自分は今迄のことをすべて懺悔したい氣がする。ともかく自分は色情にかけて他人の運命を傷つけたことが皆無な人間でないと云ふことだけは白狀さしてもらひたい。その白狀をぼんやりにでもしないでは自分は安心して死んでゆけない人間だ。不當の賞讚、それは不當の非難よりも良心にとつては重荷だ。私は自分の爲に生きることに淋しさを感じた人があつたら、その人の前に跪いてあやまりたい」

自分達は師の心が、惡口する人達の心とはまるでちがふ世界に生きてゐることを感じないわけにはゆかなかつた。

二十七

師を信仰するものはあさましい程、數がへつたが、しかし師を信ずる我々は熱心を失はなかつた。むしろなほ熱心になつた。かの女が一層熱心になつたことは云ふまでもない。そして師を信ずるものにたいして女は心から感謝してゐた。「ありがたう、ありがたう」と云つた。

師はます／＼おちついて來られた。確信あるもののやうに見えた。しかしこの時分から師は人類の運命に就ては今迄よりもなほ強く心配された。そして一方段々神祕的になられた。忘れることの出來ない日がつひに來た。自分は師にさそはれて二人きりで山に登つた。その時師はかう云はれた。

「やつと自分は天命を知つたやうな氣がする。自分の内に自分の力と云ふものがまるでないやうな氣がする。すべてが何かの意志に支配されてゐるやうな氣がする。賞讚も罵詈も自分の心を動かさなくなつた。自分はたゞ何かに自分を任せきれる時のみ安心してゐる。それから少しでもはなれると自分は不安を感じないわけにはゆかない。しかし自分はやつとその道からはなれることが少なくなつた。そしてよしたまには

なれてもすぐすなほに歸れるやうになつた。私は神を信じる。だから云ふが、宇宙には必ず一つの意志がある。その意志に背くことの出來るのが人間で、同時にその意志に自覺して身をまかせることの出來るのも人間だ。前者はすべてを利害關係で見るが、後者はすべてを正不正で見る。前者は不正であつても得することを望む。それに反して後者は損をしても正しきをとらうとする。賢者はその意志を知つてよし迷ひ出ても、歸る道を知つてゐるが、愚者は迷ひ出て歸る處を知らない、たゞ正しき道によつて立つ時のみ人間は權威を得る。その權威は利害關係からは生れない。五慾からは生れない。五慾はあまりに私的の慾望だ。枝や葉の慾望だ。一人の人が食慾を滿足しても他人はそれが爲に食慾を滿足はされない。性慾も一人の人が性慾を滿してもそれは他人の性慾を滿したことにはならない。それはあまりに一個人にくつつきすぎてゐる慾望で、他の人に反感を起させ易い性質をもつてゐる。五慾は萬人共通でありながら各自にとつて私的である。自分一個を生かす爲に必要なもので、他人の同じ慾望とは反つて衝突しやすい性質をもつてゐる。かゝる慾望からは權威はわかない。それ等の慾望は我等を不滿にはしてくれない。かゝる慾望にのみ自分を任せるものは死にうちかつことは出來ない。又かゝる慾望を滿すことによつて自分の品位を高めることは出來ない。自分の人格や精神を美しくする。かゝる人にとつては他人の不幸は氣にならず、互にあざむきあひ、陥れあひ憎みあふことは辭さない。かゝる人には平和の日ではない。かゝる人を我々が尊敬出來ず、是認出來ないのは當然である。かゝる人は人間に與へられた貴きものに觸れない人と云ふより仕方がない。いやさう云ふ人は自分の内の貴きものを窒息させた人である。貴きものの生きる餘地を與へなかつた人である。我等はかゝる人の内にも貴きもののあることを信じ、それの生長することを切にのぞまねばならぬ。かゝることを切にのぞむことはいゝことである。自分はそれをのぞんで來、今ものぞんでゐる。そして今後も永遠にのぞむものである。そして又誰にものぞむものである。人間の内の貴きもの正しきものを生かすと云ふことは今の世では殊に困難なことだ、今の社會はそれを要求してゐないし、むしろおそれてゐる。云ふ迄もなくそれがあまり生きると社會の狀態が變化しなければならないから。しかしそれにもかゝはらず我々の心は人間の心が歪にされず、正しく美しく清く生きてくれることをどんなに望んでゐるだらう。かゝる心にふれる時にのみ、我々の心は生きるのだ。其處に萬人共通のものがあり、我々の内に與へられた最も尊いよろこびと、感謝があらはれる。私は夢で耶蘇と[illegible]道に逢つたことがある。自分はその時、その前に跪いてありがた涙を出してあなたの前に跪きますと言つた。その時の耶蘇は[illegible]悲しいもので、本當に死んでもいゝと云ふ氣がした。自分が耶蘇や、釋迦の時代に生きてゐて、彼等の姿をまのあたり見てもそんな氣は起らないかと思ふ。しかし彼等が眞心に燃えて愛をもつて眞理をとくのをまのあたり見或は聞いたら、私は夢の内に味つたと同じよろこびを味ふだらう。人間にはさう云ふよろこびが與へられてゐるのだ。そしてそのよろこびを我等は貴い想像によつていつでも味ふことが出來るのだ。人類のことを考へて見給へ。兄弟のことを考へて見給へ。戀人があるならば戀人のことを考へて見給へ。そのよろこびを眞に味へる心、それが本當の宗教心で、その心が生きる時に、その人は本當の宗教家だ。百歳になつた老衰した使徒ヨハネは常に目に涙をためて人を見ると、一お互に愛し下さい。お互に

愛して下さいと云つたさうだ。さう云ふ人の心のありがたさがわかる人は宗教心をもつ人だ。實際今の人間の運命を見ると恐ろしい。兄弟よ、お互に愛して下さい、お互に殺しあはないで下さい、いぢめないで下さい、意地惡をしないで下さい、いたはりあつて下さい。さう云つて歩きたい。このまゝだと今にきつと恐ろしい血なまぐさい事が世界に起りさうだ。兄弟の名によつて相愛しあつて下さい。さうして下さつたら私はお辭儀します。をどり上つてよろこびます。さう云ふ氣狂ひになりたい位だ。君が生きてゐる間にどんな恐ろしいことが起るか知れない。その時はどんなに淋しくつてもふみとゞまつて、兄弟姉妹の幸福の爲に心から祈つてほしい」

「先生だつてまだお若いぢやありませんか」

「私も生きてゐれば元より、何か御役に立ちたいと思ふ。その時は君達と一緒に働きたい。しかし私がゐなくなつても、君は立派に働いてくれなければいけない。私のことを思ひ出して」

「先生はまだ中々お死にになつてはいけません。生きていらつしやらないといけません」

「難有う。私は生きてはゐるつもりだが、天命が許さなければ仕方がない。併しまだ〳〵恐らく死にはしまい。しかし私にとつてはどつちでも同じ事だ。今死ねば私は寧ろ幸福だと思つてゐる」

「なぜです」

「恐ろしいことを見ずに死ねるから」

「先生は重盛のやうな考へをもつていらつしやるのですか」

「私は重盛ではなく、人類は平家ではない。人類はどんなことがあつても、それを生長の糧にする力をもつてゐる。私はそれを疑はないが、憐れなのは個人だ。自分の愛するものの死は見たくはない。しかし私はさう云ふ時が必ずくると云ふのではない。たゞ今のまゝで進んでゆけば遠からずにさう云ふ時がくると云ふのだ。又よしさう云ふ時が來ても、私は自殺はしない。さう云ふ時がくれば私はむしろなほ生きて、悲慘なことを喰ひとめようとするだらう。自分をうづにまきこまさずに、殺すな、殺すな、人を殺すな、それはよくないことだ。許してあげよ。許してあげよ、それはいゝことだ。愛しあへ、愛しあへ、それは最もいゝことだ。お互に一方を殺さなければ自分が死ぬと云ふやうな處までくるしい處に入らずに、何處かで折れあへ、仲なほりをしろ、それが出來なければ勝利者よ、まけたる者も同じく愛すべき個人であることを知れ。だが勢ひだ、勢ひだ。勢ひはおそろしい。其處までゆくと刃から手を引こめた方が殺されることになる。私はその勢ひをおそれる。そして今の世はその勢ひをたきつけてゐる。火花がちり、血の雨が世界を洗禮しつくさない間、その勢ひは消滅しては行かないやうな氣がしてゐる。何處かでその勢ひの方向を變化させなければと私は思つてゐる。私はこの頃それを常に考へてゐる。だが私の力ではその勢ひの方向をかへることは出來ない。しかし出來ないと云つてすましてはゐられない。私は自分の一生を捧げて恐ろしいものが來ないでしかも正義がこの世を支配する道をこつ〳〵つくりたい。だが自分にその力があるかないか、それは自分にはわからない。自分の仕事さへ正しければ、助けは何處からか來るものだ。私は君にだけ正直なことを云はう。君は今愛人をもつてゐる。僕の云ふ言葉は君の心をきずつけはしまい——

師はさう云つて少し默つた。自分は自分のことを云ふのはいやだがその時今の妻と既に許婚になつてゐた。

師は語りつゞけた。

「正直なことを云ふと私は自分の壽命がさう長くないことを感じてゐる。私は病氣で死ぬ

か、過失で死ぬか、或は誤つて殺されるか、或は本當に殺されるかそれは知らない。私はこの土地を去らかとも思つた。この土地を去れば自分の命はたすかるかも知れない。自分の命がたすかれば、もつとお役に立つ時がくるかとも思ふ。しかし自分はこゝを去つてはいけないと云ふ答を、祈りの最中に得た。それは自分にとつては絶對なものだ。何かこゝに自分が居なければならないことがある。私にはそれはわからない。しかしともかく私はこゝを去れと云ふ許しがある迄、私はこゝで平氣に生きてゆく。それは私にとつて一番いゝことだから。たゞ私はあとのことが氣になる。私が生きてゐるよりも私の死ぬべき時に死ぬ方がよりいゝことを私は信じてゐる。だがあとのことが氣になる。君達のことが氣になる。こんなことを云つて私はなが生きするかも知れない。だが萬一のことがあつたら、君達は決して私の一生を無意味にしてもらつては困る。則ち復讐は絶對によくない。人間が淺墓な智慧で神が折角成就されたことを破壊するのはよくない。神が折角もくろまれたことがどの位、人間の手で破壊されたらう。それを思ふと私は神の寛大と愛を思はないわけにはゆかない。そして人間のあさはかさと、あつかましさを思ふ。自分達は神がもくろまれたことからそむいてはいけない。どんな時でもあなたの御心の如くならしめ給へ、と云つてその通りを行はれた方は實際神と一緒にゐる方だ。私はその方にあやかりたい。神の御心を知ることの出來るものは、どうして他のことが出來やう。それは死よりも恐ろしい」

師はさう云つて暫らくだまつた。

「私は今日何もかも君に云つてしまひたい。私は同じことをくり返しくり返し云ふかも知れない。ともかく私は君に正しい人間になつてもらひたいのだ。この世にかう云ふ人がゐてくれたらどんなに氣丈夫だらう。さう思へる人に君はなつてくれなければ困る。それが私の願ひだ」

「先生、私にはその力がありません」

「力がないと云ふのはやさしい。しかしさう云ふのは卑怯だ。決して君は力のない人間ぢやない。よし君自身には力がなくも、君さへ眞心を燃やして生活することが出來れば、力はおのづから加はつてくる。力がないと云ふのは信仰のうすいものの云ふことだ。今の世はどんな世であつても眞心の力は強い。人々の希望にならうと思へば君にはなれる力がある。そしてその人間になれば人々の力は君によつて一つになる。その時もう君はよわい人間ではない。重荷すぎるかも知れない。しかし君はその重荷をさけてはいけない」

「さけはしませんが、僕より他にいくらでも人がゐます」

「それはゐるだらう。しかし他人をたよつて自分の重荷をのがれようとするのはいけない。謙遜も事による。私の信用を辱めてはいけない。君はともかくこの世で出來るだけまちがはない道を歩かなければならない。いくら苦しくも、いくらはたが新らしがつても、いくら淋しくも、君は動かない人間にならなければいけない。神の道とは愛の道だ。思ひやりだ。他人の目の塵を氣がつく以上、自分の目の梁に氣をつけることだ。否他人の目の梁を氣にする前に自己の目の塵を氣にすることだ。正しきことの爲には他人が辛抱の出來ないことを辛抱し、他人が氣をゆるす時に氣をゆるめず、神から來たものと、その他のものから來たものとを區別してあやまらないことだ。神は不正の内にはゐない、不德の内にはゐない、憎みの内にはゐない、呪ひの内にはゐない、下賤と嫉妬のうちにはゐない。君はすでにそのことを知つてゐるだらう。私は君にたの

む。この世の鹽になつてくれ」

自分は承知する勇氣も反對する勇氣もなかつた。たゞ師の前に跪きたかつた。そして自分の賤しいことが反省されて、穴に入りたい氣がし、顏がほてるのをおぼえた。

「もうそんなことは云はないで下さい」自分はさう云ひたかつたが、さう云ふ勇氣もなかつた。自分は涙ぐんでうつむいてゐた。師はうつむいてゐられた。

「君は自分の缺點を思ひ、又自分の力のないことを思ひ、それ以上に自由と快樂を思ひ切るの未練をもつてゐるのだらう。私は決してそれ等をこばまない。君はなにしてもいゝ、決して窮屈になつてはいけない。勇氣を失つたり、歪になつてはいけない。殊に快樂を求めるものに内心うらやましがつて、道をといてはいけない。快樂を享樂する爲には快樂さへ辭さない方がいゝ。他人を不幸にする淋しさと良心の苦悶を味つても、決して自分を墮落し切つた男と思つてはいけない。何より正直で自然でなければいけない。努力は必要だ。修養も必要だ。しかし内心の要求以上を行つてはいけない。貴い言葉を生かせるだけ生かすのは必要だが、それが借りものではいけない。それが生きてゐなければ、云はないではゐられなくつて云ふのでなければ。其點を殊に注意して、死んだ貴い言葉や行ひをしてはいけない。殊に人々に貴いものを虛僞と思はせる罪惡を行はないために、死んだ貴い言葉や行ひをさけなければならない。僞善の一番いけないのは善にたいする人間の信用をおとすことだ。僞惡は惡趣味だ。しかし僞善はなほ罪惡だ。之からの宗教家はいやが上にも正直でなければならない。精神が内にあふれて、それが自づと言行にならなければならない。内から自由でなければならない。教義にしばられて行きたい處に行けなくつてはいけない。大膽で、自分の信じてゐることを萬人の前に云ひ、又行へる人間でなければならない。自分の教義が出來ても、もつと眞理に近づくためには内からそれをこはすだけの力がなければいけない。神の言葉をきいてそれのみを云はねばならない。自分の利害關係に支配されてはならないことは云ふ迄もない。何よりも何よりも自分が確信出來ることを云はねばたらない。だが兄弟のことは考へてほしい。社會の不正の根本を見やぶり、それをあらためて人類の運命を狂はさないやうにしてくれ。それは重荷だ。重荷にちがひない。しかしそれを心がけてくれ。私はそれを心がけて來た。私は萬人が私のやうに生きることを望める道を出來るだけ歩いて來た。そして人々の内にある貴きものを目覺せるだけ目覺したく思つた。そして神の意志によつて行はれたるものを人間の淺墓な智慧で歪にしないやうにつとめて來た。私のことは一番君が知つてゐるはずだ。私の精神はまちがつてゐるとは思はない。私の言行には時々まちがつたことがあるかも知れないが、目ざす處に向つて眞直ぐに射られたものであることは君は認めてくれるだらう。惡には善に味をつける役だけをさせればいい。惡魔は神の偉大を證明させる爲に宗教心のある人間の發明したものだ。之からは恐ろしい時代が來るかも知れない。來さうな氣がする。自分は可愛い子供を見ると、その未來を思つて何んだか恐ろしい氣がして祈りたくなる。そして幸福をのぞみたい氣がする。そして苦しみにたへてほしい氣がする。彼等の内に偉大な人間が居てくれることを望む。だが一人の力では勢ひが放たれた以上はどうすることも出來ない。勇士であれ、正しきことの爲には耐へられないことを耐へしのんで、人類の狂ひの内にかたき岩になり、狂ひをくいとめ、人間の價値を發揮し、よき人々の希望となり、慰めとなり、よ

ろこびとなる人を自分は讃美したい。少なくも君はその一人になれる。又なつてほしく思ふ。さう云ふ人々こそ神の軍に加はつた人だ。負けざる人だ。君は負けざる人になれるのに、負ける人になりたくあるまい。偶像は我等にとつては不名誉だ。真の幸福者は、負けざるものだ。彼は殺されても負けず、侮辱されても負けず、世間から嫌はれにも負けない。無名で終らうが、犬死しようが負けない。彼の心は神と共にゐる。その他のことはあまりに小さい。私はどんな目にあつても幸福者だと思つてほしい。決して私のことは心配しないでほしい」

師はさう云つて立ち上つた。

「私の今日云つたことを君は時々思ひ出してくれるだらう。私は天命を知つた。帰るべき時に帰らなければならない。さあ帰らう」

その時日は沈みかけてゐた。

自分は今になつてその言葉を思ひ出す。その度に自分にとり返しのつかないやうな淋しさを感じる。自分は途中で師に別れてからも、変に興奮してゐた。

二十八

その夜十時頃だつた。自分が寝ようとしてゐる所に、師と一緒にゐた友と、師に家をかしてゐた女と、かの女がおとづれた。三人とも心配さうな顔してゐた。

何事か起つたことを知つた。師の上に何か起つたことを直覚した。

三人が黙つてゐるので、

「どうしたのだ」と云つた。

「心配なことがあるのだ。君は今日先生を見なかつたか」

「今日先生と一緒に山にのぼつた」

「何時頃まで一緒だつた」

「六時頃だつたらう」

「それから先生は何処へゆかれた」

「君の家の方に帰られたことと許り思つてゐた。まだ帰られないのか」

「まだ帰られないのだ」

「今に帰られるだらう。心配なことはないだらう」自分はさう云つたが、自分は胸さわぎしてゐた。

「僕もさう思ふのだ。しかし」

かの女があとをついだ。

「妾は心配で、心配で仕方がないので、皆さんと一緒に先生をおさがししようと思つてゐますの。実は、妾の處に七時頃先生がいらつしたの。妾がよくいらつして下さいましたね、とういらして下さつたのね、さう云つてお茶を入れに立つて帰つて見ると、もう先生はいらつしやらないのです。妾はその時は別に気にしてゐなかつたのですが、先生のいらつしやる處をさがして見てゐる内に段々心配になつて来ましたの。誰も先生を見た人はありませんの。そして襖の開いた音も、しまつた音も誰も聞いたものはないのです。妾はもうぢつとしてはゐられなくなりましたの。それで先生にお逢ひしようと、上つたら、先生はいらつしやらないのですよ。妾はびつくりしました。どうしていゝかわかりませんの」

女は今にも泣きさうな顔した。自分もあわて出した。まさかとは思つた。しかし気にならないわけにはゆかなかつた。

「すぐさがしませう。先生とおわかれした處がわかつてゐますから、其處から調べて見ませう」

「えゝ、さうして頂戴、妾は今晩、先生にお目にかゝらなければどうしてもねられませんから」

「きつと今に帰つていらつしやいますよ」

「もう帰つていらつしやるかも知れないね」

「それだつたらどんなにうれしいでせう。妾は先生のお顔を見たら泣きますわ―」

四人はすぐ家を出た。少し遠廻りだが友達の家によつて見た。まだ歸つてはゐられなかつた。自分達は本當に心配しだした。しかし大丈夫だらうと無理にも思つた。大概の不幸は豫期した所に起らないものだ。友達が自分を呼んだやうな氣がして、あとでその友の上に不安を感じたことは自分も一度は經驗があるが、何んでもなかつた事があつた。しかし段々不安にまして來た。もしものことがあつたら、さう思ふと自分はどうしていゝかわからなかつた。

「本當に來て御らんになつたのですね―」

「えゝ、本當にいらつしたと思ひましたの。」

「どんな顔していらつしやいました―」

「ふだんと別にお變りにならない顔していらつしやいました。しかし一ことも仰しやらず、眞面目な顔して少しあはれむやうな、いくぶんかしづんでいらつしやるやうにも見えましたわ。いつものやうに微笑まれたやうにも思ひますが。妾はその時少しも不思議に思ひませんでした。大丈夫ですわ。きつと先生のことを思つてゐたので、ついそんな[illegible]を見たやうに思つたのかも知れませんわ。かうしてゐる時に、向ふから先生が歩いていらつしたら、どんなにうれしいでせう。誰か來たやうね。しかしあの足音は先生のではありませんね」

自分達は人に逢ふ度に、くらくつてよくわからないので、一々のぞくやうに見てあるいた。淋しい處へゆくと、あてもなく、「先生」と呼んで見たりした。

「大丈夫だらうと思つたか、さう思ふ度に反つて不安になりました。皆段々沈默した。

その晩は[illegible]お月がよかつた。師の處にゐた女は、夕方師が出られなかつたかと知つてゐさうな人がある。聞きにでした。誰も見なかつたと云つた。自分達は別れてから二町來た處で、初めて師を見たと云ふ人に出逢つた。その人は師が四つ角で[illegible]てゐられたが、右に曲られたと云ふことを云つた。

その時自分達は希望の光を見た。

それは師が日頃、愛してゐられた若き弟子の家にゆかれたことがわかつたからだ。

「[illegible]かつた」

「きつといらつしやるにちがひない」

四人は言ひ合ひながら、急いだ。しかし自分達は、[illegible]、向ふを見たかときいた。見た[illegible]人があつた。自分達は希望を認めた。心配が少しゆるんで其處から希望の光がかゞやき出すと、反つて自分達は涙ぐんだ。そして足を急いだ。

その家へゆくには六町程松原を通らなければならなかつた。其處は淋しい人通りのない處だつた。皆のうちにはその弟子たちもおられたことがわかると同時に、その松原のことを思ひ出さなかつたものはなかつたらう。しかし誰も口には出さなかつた。

その松原を通る時は、皆、默つていそいだ。松原を出るとすぐ友の家だ。自分達は今にも師の聲高の話聲や、足音が聞えて來はしないかと思つた。そしてそれをのぞんでゐた。しかし曲り角をまがつても師らしい姿は見えず、聲も聞えなかつた。その弟子はいつも、師をその松原のはづれ迄は送ることにきめてゐたから、話聲が先づ聞えるはずだ。

松原をぬけた時は、皆[illegible]足のやうだつた。その人の家にとび込んだ。その家からは師の聲も笑ひ聲もきこえず、しんとしてゐた。自分達は泣き出したい氣になつた。

室内を[illegible]た。

皆は弟子に[illegible]されてきた。師のことを聞いたら、六時[illegible]頃一寸見えて、一時間程いらつ

したがお歸りになつたと云つた。
「いらつしたのですね」
「えゝ、いらつしやいました」
ともかくその弟子に逢ふことにした。その人は熱があつてねてゐたが、師のことで聞きたいことがあると云ふので、
「ねたまゝでよければ」と云つて逢つてくれた。
其處で自分達は、師がいつものやうに快活に話をされてゐたこと、その人の身體を大事にしてくれと云はれたこと、それから、其處で珍らしく半紙三四枚に字をかゝれたことを知つた。
その一枚には、
「先づ身體を大事にし、精神が内に生きられるやうにしないといけない」
とかいてあつた。
次には、
「すべてをあなたに任せる。一番いゝやうにお使ひ下さい」
次の紙には、
「私の一生をかへりみる。私はあなたにたいして罪人でないとは云へないことを恥ぢる。私は自分を最上に生かす力がなかつたから。いやその力はあつても、私は時に油斷もし、いやしい心におち込むことを好んでもゐたから。私ははぢる。だが私のまいた種の最上のものはあなたのお氣に入つて、地上の何處かにはえてくれるだらう。
「お、人間にあたへられたごく少しの最上のものを愛し、その他のものをゆるしてくれるあなたよ。私はあなたの前に跪く。私は人間に生れたことで、あなたに十分に酬いることの出來なかつたことをあやまる。許して下さい。
「我が愛する友達よ。私の惡いことは許してくれ。私の神に仕へたことだけを思ひ出してくれ。それは私の爲ではなく神の爲だ。
「君達の恩は忘れない。君達がゐなかつたら自分はどんなに淋しかつたらう。君達がこの世にゐてくれた事は不思議な氣がする。それだけ猶嬉しく感謝する」
そんなことがかいてあつた。
その上、若き弟子は一つの不思議なことを云つた。
「先生は歸られる時、いろ〳〵ありがたう、さう云はれて丁寧に御辭儀をされて、身體を大事にしてくれ給へ、私達が身體を大事にしないでいゝ時はたつた一つ切りない、神の爲に働く時だ、身體を大事にするのも神の爲だが、君達が仲よくしていゝことを考へてくれ私のことを思つてくれる時はきつと私もその席にゐるよ、さよなら、さう云はれて歸つてゆかれた。最後の言葉が自分は聞きまちがへのやうな氣がしてぼんやり聞いて居ました。私はたゞさよならと云つただけでした」
から云つた時、師についてゐた友達も云つた。
「さう云へば先生が今日家を出られる時、一ことへんなことをおつしやつた。私はこの頃へんに死にさうな氣がすると。死んでも私は皆の處にゐられる氣もするよ。君は一番私の缺點を知つてゐるだらうが、私が譃つきでないことも知つてくれるだらう。死ぬと云ふことは非常に恐ろしいことにも思へれば、簡單なことにも思へる。ともかくなが生きはしたいとは思つてゐるがね。そしてそとに出られるとまもなく一寸もどられたので、忘れものですかと云つたら、君の顏が見たくなつたのだよと笑つて冗談のやうにおつしやいました」
「さう云へば、僕にも今日へんなことをおつしやつた。出がけに僕の書齋の窓からのぞかれて、一寸行つて來ます、君はこの頃丈夫だね、さうおつしやつて何か云ひたさうに默つていらつしやるので僕は何か云ひにくい御用でもあるのかと思つた。誰かに金でもやりたいと思つて

いらつしやるのかと思つたので、何か御用ですかと聞いたら、いや、君の顏があんまり丈夫さうになつたのでうれしいので見とれてゐたのだよ。それから一寸行つて來ますと云つて出かけられた」

「そんな話はよしませうね」かの女は云つた。

「それではあんまりお邪魔してお身體にさはるといけませんから歸りませう」

歸らうとした時、病氣の友は一寸自分をよんだ。自分は皆のあとにのこつた。

「なんだ」

「心配なことがあるのだよ。先生が歸られて五分もたゝない内に、たつた一度だつたがね、鐵砲の音のやうなものが聞えたのだよ」

自分はそれを聞いた時、泣き出してしまつた。もう絶望と思つた。

「しかし、時々夜中でも鐵砲の音が聞えることもあるのだから、安心とは思ふがね。先生の居處がわかつたら、すぐ教へてくれ給へね、僕も心配だから」

「教へるよ、すぐ教へるよ」

自分は皆にあふ迄に泣きやまうと思つた。がついしやくり泣いた。

「どうしたのだ」

自分はだまつてゐた。

「先生がどうかなさつた？」

「いゝえ、はつきりしたことはわからないのです」

自分は一人先にどん〱友の家を出た。皆ついて來た。

「どうしたのだ？　どうしたのだ？」

「心配なことがあるのだ。先生がこの森にかゝつた時分、たつた一つださうたが鐵砲の音のやうなものが聞えたさうだよ」

皆、泣き出してしまつた。

「どうしませう、どうしませう」

「どうしよう。もしものことがあつたら」

「森のなかを搜して見よう」

「先生が歸つていらつしやるかも知れない」

「もつとよく調べよう」

てん〲に手をわけた。森を先生が出られた姿を見た人があるかないか先づ調べて見ることにした。

二十九

しかし手がかりはなかつた。家にも歸つてゐられなかつた。一番先生と親しくしてゐた人、十四五人に通知された。森のなかも調べた。何の手がかりもなかつた。

その晩、とう〱先生は歸つて來られなかつた。先生はピストルや鐵砲類はもつてゐられなかつた。夜中に鐵砲の音を聞いた人は十人をこしてゐた。その時間は丁度、かの女が先生の姿を見た時と暗合してゐた。二三日たつても師は歸つて來られなかつた。師からたよりもなかつた。その後半年たつ、今になる迄何の消息もない。

人々はもうあることを疑はなかつた。

かの寺院は出來かけて淋しく立つてゐる。

師の机の奧からは死後に讀んでくれと云ふ一通の手紙が出て來た。それには次のやうなことがかゝれてゐた。皆の前でよみ上げられた。

三十

「私は近い内に死にさうな氣がする。死なないかも知れない。しかし死んだ時の用意としてかいておく。自分はあらためて君達に禮を云ふ。自分はこの世で君達の如き人々に逢へたことをうれしく思ふ。君達の私につくしてくれた厚意を深く感謝する。自分は君達皆に、一人々々御禮をのべたい。私は又そのことを神にも感謝したい。私のやうな人間がこの世に平和に生きて

ゆけたのはすべてあなたの御蔭だ。あなたの御かげでのみ友達を得たことを感謝し、それを光榮に思ふ。あなたの意志にそむいては一人の知己も得なかつたことを私は一生の誇りにしてゐる。あなたがなくして私はゐない。私はあるかなきかの小さいものにすぎない。その私があなたの意志に從ふ時だけ、私は誰にも負けない、負けざるものになる。私を殺すことは出來る。私を罵詈し、私を迫害することは出來る。しかし私にこの世、少なくも人類の精神を支配してゐるあなたのあることを信仰させないことは出來ない。あなたによる時に生活を知るものはあなたをはなれて生きてゆくことの本當の不安を知つてゐる。そしてあなたを味方にしてくれゝば何にもおそれることはない。どんな惡名も、どんな迫害も、私を參らすことは出來ても、あなたにたいする私の信仰をなくすわけにはゆかない。そしてあなたの力を感じさせないわけにゆかない。私はすべてをあなたに任せる爲に、本當に安心する幸福を得る爲にのみ、日に何十度、何百度も反省し、恥知らずのことをする時、あなたの前にあやまり、ゆるしを請はないわけにはゆかなかつた。私にとりえがあればたゞそれだけだ。他にとりえがある人はいくらでもあるだらう。だが自分は自分の唯一の取柄を最も幸福な取柄と思つてゐる。私は君達に手紙をかくのも自分が何度も何度も云つたことをはつきりさせ、主の御旨を少しでもはつきりさせたいからだ。自分の一生を自分の神に捧げ、自分の神のおほせのまゝに生きたいのが自分の願ひなのだ。自分の神、その神から先づ語りたい。自分の神はどんな神であるか自分は知らない。それは見ることの出來るものか出來ないものかそれも知らない。少なくもこの肉眼では見えない。そしてその神は世界に充ち滿ちてゐられる。神は一人でゐられるか、何人ゐられるか、恐らく人格的の神と云ふよりも、見えざる神、あらゆるものの内に生きる神、人間の内に生き個人と自然の内にも生き、空氣の内にも生き、光のうちにも生き、暗のうちにも生く。精神のうちに生き、美しきもの、清きもの、生々したものの内に生き、正義と善行と愛のうちに生く。すべて無限の深さあるものに生く。我等はその内から自分の生かせるだけの神を呼吸して生きる。神は外にあり、内にあり、兩者の間にある。神は呼ばずに來、よんでも來ない。心の内の宮居がおのづと清まる時、其處に神があらはれる。本當に無限を感じる時、その感じを與へるものの内にあらはれる。我等は神を感じられる時、其處に神がゐる。そしてそれは神を知り、見、感じたものだ。昔の宗教家は神と共に生きるものだ。眞の藝術品には神がゐる。作者がゐる奥に神がゐる。接するものはその前に跪きたくなる。愛しないではゐられなくなる。宗教家の心は神と共にある。彼の言葉、行ひの奥には神がゐる。だからありがたい。神は自覺しないものの内にも生きる。嬰兒の内にも生きる。人は神が氣がつかないことは出來る。だが神を傷つけることは出來ない。赤子を殺さうとしてその無心の笑ひに殺せないものは、神を感じたのだ。平氣で殺せたものは神を感じることが出來なかつたものだ。神は今迄に何度も人間を通して生きた。その本質を君達は知つてゐるであらう。物質的ではなくありがたいと云ふ感じを人間にたいして持つことが出來るのは、人間にたいして持つのではなく神にたいして持つのだ。釋迦や耶蘇の心に神が顯はれてゐないと誰が云はう。そんな人間は救はれない人間だ。完全に神をあらはしたものはないであらうが、皆自己流に神をあらはした。それは完全に色彩全體を生かしたものがないやうなものだ。神は全體として顯はれるのには、神は人間にとつて大きすぎる。

たゞ神を自己の内に宿し、神のまゝに自己を生かしたものは神と共にゐるもの、その時、神が人になり、人が神になる。その時、摩擦はわき、その云はれた言葉、行ひ、殊に生きた精神は、不滅のものになり、人類の宝になる。それは人類を清める。宗教に新らしい古いはない。しかし人智は時の支配をうけ、その時代の人類の経験も、その時における人類の要求、運命の支配をうける。だが宗教をつらぬくものは一つだ。神を愛し、隣人を愛し、敵を愛せ、すべての人間を愛せ。自然と萬物を愛せ。愛のある處に神がある。たゞ人間の霊性をそこなふものは許すな。人の子をそこなふものは許すな。人間は許しても、その心根を許すな。不正なものは不正と云へ。よくないことはよくないと云へ。しかしそれは私情に少しでもけがされてはいけない。そして悔い改めるものにたいしては、神に感謝して、悔ゆる兄弟としてよろこび迎へよ。無意味に人を不幸にするな。また自惚れて自分に出来ない苦業をしようとして神をうらむな。自分の人間と云ふことを知つて神に許された範囲で生きることに満足せよ。しかしそれを云ひわけにつかふな。すべてを神のみ知る。あさはかな智慧でそれをけがすな。心を清くせよ。私情や、先入主や、欲望によつて人を悪にするな。他人を責める前に自分を顧みよ。他人の位置に時々自分をおき、自分の位置に他人をおき他人の気持を察し、小我をのさばらすな。愛する兄弟よ。すべての人の心の内に入れよ。すべての人の境遇と苦悩を思ひやれ。其時、其處に自己を見出し、兄弟と云つて涙を目にためて抱きあひたくなる程、愛を感じるだらう。病的に残酷なものと、思ひやりの皆無なもの、それを病人としてあつかへ。かゝるものを人間の自然性とは思ふな。神の愛は我等の閉されきつた心と思ふものも開かぬことはないと信ぜよ。ともかく今後生きることは随分つらく淋しい時もあらう。だが相愛して生きて、そのつらさや、淋しさを同じく耐へなければならない。人を愛して、出来るだけ勇ましく生きてほしい。正しいものと、善良なものの味方であれ。そして美しきもの、優れたものを讃美せよ。だがあらゆるものに思ひやりを忘れるな。しかしその為に快活を失ふな。人智にとつては矛盾と思はれるあらゆることも神と共にゐるものは、最も自然に最も美しくその矛盾を生かす。喜べる時には喜べ。快活な時は快活であれ。泣く時は泣け。耐へる時には耐へよ。自分の最も要求する人間に先づ自分をなせ。他人に要求することを先づ自分に要求せよ。自分にも要求出来ないことを他人に要求するな。自分の要求することで自分に出来ないことを他人がした時には感謝せよ。他人に許り無理な要求するものはつひに救はれない。君達は普通の人と同じでいゝと思つてはいけない。君達は他人が耐へられないことを耐へ、他人が思ひやれないことを思ひやり、他人が愛せないものをも愛するのを當然と思ひ、自分の力の足りないことを常に知らなければならない。甘もしないと云ふことは云ひわけにはならない。

私はたのむ、君達は立派な人間になつてほしい。そして神の力、眞理、正義、愛が、今もなほ、いや、今になつてなほ人心を支配すること強く、それにたよらなければ人間は水をはなれた魚に等しいことを身をもつて知らせてほしい。眞の力は神からのみ出る。神によるものは、あらゆるものを超えて生きる。私はゴルゴダに行くあの人の苦しい姿を思ふ。其處に負けたる人間と、勝ちつゝある神を見る。神の意志はさけられない。神と知るものは、神に自分すべてを任せないわけにはゆかない。神の御心よ、私は御身に一生をまかせる。私の死もお

まかせする。どうかお役に立てて下さい。兄弟よ、私の死が君達の一生のお役に立つことを願つてゐる。私が萬一醜い死にざましても許してくれ。それもすべておまかせしてある。安心してゐればいゝのだ。君達を淋しくしないことをのぞむ。私の罪は許してほしい。君達よ、幸福であれ。

「いかに犬死するとも、私は幸福だ。神よ。

「私には敵がない。

「神には敵がない。

「すべてを神の榮光にたいする油たらしめよ」

後書き

師は果して死なれたのであらうか。恐らくもう望みはないであらう。しかし自分達はますます自分達の内に師の生きてゐられることを感じる。

自分はよく師のことを思ひ出す。自分には神からつかはされた方のやうな氣さへして來た。師の一生は短かい。師は世間的には無名な人としてをはられた。殊に最後は何等の手がかりさへない。嫉妬で殺されたのか、憎みで殺されたのか、過失で殺されたのか、それもわからない。死骸はどうなつたか。炭やきのかまどの烟にでもなつたのではないかと云ふ人もある。ともかく死骸の今だに見つからないのは事實だ。

警察にはわざと訴へなかつた。それが師の心と思へたので。すべては神の御心のまゝか。それにしてもあつけない氣がする。しかしその爲今にも師は歸つて來られさうな氣がする。

かうしてゐても師の聲は聞え、姿はうかぶ。

師は無名でをはることをのぞまれた。

自分はこの書を公にしていゝものかわるいものか知らない。又それだけの價値があるかないか知らない。

自分は出來るだけ正直にかいたつもりだが、大事なことをかきおとしたかも知れない。

自分は之をかいたことが師の深き精神を傷つけず、又神の前に罪を犯さないことであることを切にのぞんでゐる。

自分は謙遜の極の氣持でゐる。この書が、人人に慰めを與へ得れば自分は幸だ。もしその價値がなかつたら自分は師と兄弟の前に値なきものとして謝罪する。

○年五月十二日　　片田舍の小さき弟子

戸をたゝく音

○

戸をたゝく音を知らないか
人類は自らすべての人の戸をたゝいてゐる。
いざと云ふ時に、お前も私の爲に働いてくれるだらうな。
から人類はいたる處の戸をたゝいて
人々の良心にさゝやいてゐる。

○

戸をたゝく音が聞える
たしかに。
兄弟姉妹
用意はいゝか
用意は。
戸をたゝく音がする
兄弟姉妹よ
謹んで戸をあけよ。
もしかしたら
待つてゐるものが
來たのかも知れない。

年譜

明治十八年

五月十二日、東京市麹町區元園町一ノ三八に生る、第八番目の末兒なり。時に父三十五、母三十三。上の五人の兄姉既に死し、七つの姉と、四つの兄だけ生きてゐた。

明治二十年

十月二十七日、父死す。自分は學校に行つた時親は母一人のものと思つてゐた。父の記憶なし、たゞ旅から青い馬をもつて歸つてくると聞かされてゐたことを記憶する。

明治二十四年

學習院初等科に入學。怠けもの也。成績は中の上。褒狀をいつももらつてゐたか、兄がいつも特別優等賞をもらつてゐたので、怠けものとしていつも母に心配かけてゐた。臆病で泣きみそだつた。

明治三十年

學習院初等科卒業。

六年間に一度喧嘩して、武者小路のやうな人はたまに喧嘩する方がいゝと云つてほめられた。しかし癇癪持と云ふことと、手巾とりのやうな遊戯の時、武者に手巾をもたせれば大丈夫だと友達に云はれてゐた。身體よわく、走けつこはびりから二番位だつた。嫌ひな學課は作文、體操、唱歌、圖畫。

明治三十二年

十二月十二日に姉を失ふ。時に姉二十一、結婚して一年目なり。自分は姉を實に愛してゐた。その頃から近視眼になつた。

明治三十三年

四月、自分はお貞さん姉妹と知る。その前同級の男の人を私かに戀したことがあるが、お貞さんは自分の初戀の人となる。その時お貞さんは十三、自分は十六。

明治三十五年

此頃から自分は作文の必要を感じ、毎日文章をかくことにきめた。膽力養成が自分の一つの仕事であり、禪學や、王陽明を生嚙りした。その以前孫子、吳子なぞを机のなかにかくし、武術の本などを愛讀した。小說類もよんだ。

明治三十六年

お貞さん故郷に歸る。自分は戀をうちあけなかつた。しかし隨分打擊を受けた。その一年前から聖書や、トルストイの本をよみ出した。母の弟、勘解由小路資承の影響による。その時分叔父は三浦の金田と云ふ處で半農の生活をしてゐた。（お貞さんと結婚してゐたら自分は誠の意味での一生一夫一婦で通せたかとも思ふ。あてにもならないが。そのかはり、房子を幸福にしてやることも出來なく、又新子や妙子も生れなかつたであらう。自分はどつちがよかつたかを知らないものだ。そして恐らく、失戀しなかつたら文學はやらなかつたかも知れない。そのかはり他の子供が生れ、（お貞さんは今八人の子を持つてゐるさうだ）他の運命が開けてゐたかも知れない。今となればどつちもよしである）

明治三十九年

學習院卒業。東京帝大文科社會科に入る。志賀、正親町、木下と文學をやる決心をし、四人で雜誌をだす計畫などす。

明治四十年

大學をやめ、「白樺」と云ふ題で四人で雜誌を

いよ〳〵發行しようとしたが、とう〳〵やめる。

明治四十一年

單行本「荒野」を出版、思ひ出すと冷汗もの也。後年彼此から再版をすゝめられたこともあれども斷る。この秋、兄の子、芳子死す。その芳子の十ヶ月許りの日のことを「芳子」と題してかく。之自分の處女作と思つてゐる。

明治四十二年

四月から友人十數名と「白樺」發行の用意を始む。

十月、脚本「或る家庭」（一幕物）をかく。

明治四十三年

二月、「お目出たき人」中篇をかきあぐ。

四月、「白樺」發行。創刊號に夏目さんの「それから」の評をかき、夏目さんにそれを送つてハガキをもらひ、大いに喜ぶ。「朝日」の文藝欄にも何かかくやうにたのまれる。

明治四十四年

札幌に有島武郎を訪ねて一ヶ月滯在。お貞さんが小樽に來てゐたので訪ねる。札幌にゐた時詩十數篇をつくる。「誕生日の[illegible]想」はこの時の作なり。お貞さんに逢ふ。

七月、「平凡な四人の男の會話」、「をどりくらべ」、八月、「[illegible]な二人の[illegible]の會話」、十二月、「彼に來るもの」をかく。小說集「お目出たき人」を出版。

明治四十五年　大正一年

二月、一幕物「ある日の事」、九月、「[illegible]」、「二つの心」、十一月、短篇「Aの手紙」をかく。

房子と知り、中篇「世間知らず」をかく、房子と結婚す。

「世間知らず」を出版。

大正二年

二月、回想小品「四谷熊」、回想斷片「第二の母」、三月、「[illegible]」、[illegible]月、一幕物「ある日の[illegible]休」、小品「[illegible]の[illegible]くぐり」、六月、一幕物「[illegible]見」、[illegible]中の「小出來事」、七月、一幕物「[illegible]父」、十一月、脚本「わしも知らない」をかく。

感想集「生長」、創作集「心と心」を出版。

長與、岸田、千家と益々仲良くなる。

大正三年

一月、一幕物「二十八歳の耶蘇」、對話「Aと運命」、二月、脚本「罪なき罪」、四月、脚本「母親の心配」、長詩「浦島太郎の出發」をかく。

この春、[illegible]町の兄の家を出て、下[illegible]番町に[illegible]間の家をかりる。

七月七日、父死す。短篇「死」を夏目さんにすゝめられて「朝日」にかく。子供は出來さうもないので從兄の子供喜久子を養女にする。

十月、長篇小說「彼が三十の時」、十一月、短篇小說「小さき世界」をかく。

大正四年

一月、鎌倉に引越す。

二月、脚本「その妹」、一幕物「未能力者の仲間」、八月、脚本「[illegible]思ふ」をかく。

この夏、「わしも知らない」が文藝座で上演される。自分のもの最初の上演也。

小說「彼が三十の時」、「向日葵」を出版。

十月、一幕物「[illegible]幻影」をかく。

この年のくれに、千駄ヶ谷に引越す。

大正五年

二月、一幕物「ある日の出來事」、短篇「嫉妬」をかく。「その妹」を出版。

四月、小說脚本集「小さき世界」を出版。

九月、短篇「新しき家」、十二月、脚本「日本武尊」、「ある青年の夢」を完了す。

年のくれ千葉縣我孫子に家を立て引越す。

大正六年

三月、小說「不幸な男」をかく。

五月、小説集『新しき家』を出版。
六月、童話劇『かちかち山』、『花咲爺』、七月、一幕物『AとB』、八月、短篇『ある父』、『ある母』、十月、短篇『母としてのわが母』、十一月、喜劇『野島先生の夢』、十二月、短篇『ある父の手紙』をかく。
有日志賀や柳とゆききす。手賀沼に舟を棹さしてゆききしたことも度々。

大正七年

二月、脚本『四人』、七月、短篇『ある教育家の手紙』、『若い男の手紙』をかく。
八月、感想評論集『新しき村の生活』を出版。新しき村の仕事を始め同志と共に日向にゆく。
九月、小説『ある脚本家』、『一人の彼』、長篇小説『幸福者』をかく。
十一月、第一新しき村の建設に着手する。

大正八年

四月、『白樺』十週年記念に上京。
五月、一幕物『新浦島の夢』、六月、短篇『へんな原』をかく。
八月、感想評論集『自己を生かす為に』を出版。
十月、対話『勇士と聖人』、十一月、短篇『A夫婦』をかく。

大正九年

二月、短篇『土地』、『一休に聞いた話』、三月、一幕物『西伯と呂尚』、短篇『Cの話』をかく。感想集『新しき村の労働』、『人間的生活』を出版。
四月、一幕物『地蔵と鬼』をかく。小説集『一本の枝』を出版。
五月、『耶蘇』をかく。評論集『自分の人生観』を出版。
七月、一幕物『小曲』、『小喜劇』をかく。詩集『雑三百六十五』を出版。
八月、一幕物『佛陀と孫悟空』をかく。
九月、評傳『耶蘇』を出版。
十月、感想評論集『新しき村の信仰』を出版。
十一月、一幕物『一日の素盞鳴尊』、短篇『久米仙人』、『友の話』をかく。

大正十年

一月、短篇集『土地』を出版。
二月、短篇『ある都會』、三月、短篇『ユダの弁解』をかく。脚本集『生きんとする者』を出版。
四月、短篇『ヨハネ、ユダの弁解をきいて』をかく。
六月、脚本集『未能力者の仲間』を出版。
七月、短篇『ある夫婦』をかく。感想評論集『演説二つ』を出版。
八月、短篇『ある日の手紙』をかく。
十二月、感想評論集『雑感』、童話劇集『童話劇三篇』を出版。

大正十一年

三月、短篇集『燃ゆる大地』を出版。
五月、一幕物『神と男と女』、短篇『エピソード』をかく。
六月、小説集『彼の結婚と其後』を出版。
八月、小説集『二人の彼』を出版。
九月、長篇小説『ある隠者の運命』、十二月、一幕物『秀吉と曽呂利』をかく。
房子と別居し安子と家庭をもつ。

大正十二年

一月、脚本『父と娘』をかく。小説集『ある青年の夢』を出版。
三月、脚本『楠正成』をかく。
四月、脚本集『人間萬歳』を出版。
八月、脚本『桃源にて』をかく。長篇小説『ある男』を完結す。
九月、脚本集『楠正成』を出版。関東大

地震に驚いて日向から上京する。

十月、脚本『秋の曲』をかく。感想評論集『理想的社會』を出版。

十一月、一幕物「だるま」をかく。自敍傳小說『或る男』、感想評論集『愛に就て』を出版。

十二月、一幕物『[illegible]』をかく。新子生る。

この年春より『武者小路實篤全集』を藝術社より刊行、十二卷に及ぶ。

大正十三年

一月、對話『のんきな親子』をかく。脚本集『父と娘』を出版。

三月、感想評論集『新しき村の生長』、『一人間的社會』、隨筆集『女の[illegible]に』を出版。

四月、感想評論集『新しき村の今後』、感想小品集『草原』を出版。

五月、脚本集『脚本五つ』、脚本小品集『[illegible]源にて』を出版。

六月、短篇『一休の獨白』をかく。感想評論集『自分達の使命』、『新建設の時代』、小說『第三隱者の運命』を出版。

七月、短篇集『眞理の人々』を出版。

九月、感想評論集『三方面』を出版。

十月、隨筆集『筆の向くまゝ』を出版。

十二月、脚本『運命と碁をする男』をかく。

大正十四年

二月、妙子、新しき村にて生る。

七月、感想評論集『人生を斯く考へる』を出版。

九月、『ある畫室の午後』をかく。小說脚本集『武者小路實篤集』、脚本集『運命と人々』、感想集『泉と鐘』、詩集『詩百篇』を出版。

十一月、脚本『愛慾』を書く。

十二月、兄がルーマニア公使となつたので、病身の母のそばに段々近つきたく、奈良にすむ決心をする。新しき村は自分がゐないでも安心なので、それに村外會員もふやしたいので。

大正十五年　昭和一年

一月、奈良にすむ。狂言『或る犬の品評會』をかく。

二月、一幕物『夢の國』をかく。感想評論集『自然、人生、社會』を出版。

三月、狂言『出鱈目』、脚本『ある物語』をかく。脚本集『愛慾』を出版。

五月、『耶蘇』を出版。

六月、『孤獨の魂』、七月、一幕物「みない鳥」、同『須世理姫』をかく。脚本集『七つの夢』、感想評論集『死に克つには』を出版。

八月、脚本『ある畫室の主』をかく。感想評論集『文學に志す人』を出版。

九月、脚本集『孤獨の魂』を出版。

十月、狂言『生命の王』をかく。

十一月、脚本『田園小景』をかく。感想評論集『戀愛、結婚、貞操』を出版。

十二月、紀州和歌山に引越す。姉の墓のある近く。日記集『氣まぐれ日記』を出版。

昭和二年

一月、感想評論集『人類の意志のまゝに』、長篇小說『若き人々』を出版。

二月、小說『運命と碁をする男』を出版。

三月、東京府下南葛飾郡小岩村小岩に引越す。朝日に小說『母と子』を連載す。雜誌『大調和』を創刊し編輯する。

六月、感想評論集『文藝雜感』を出版。

九月、『平和な村』を出版。

十月、長篇小說『母と子』を出版。

俺はこの幸福を

俺はこの幸福を誰に感謝しようかな。

昭和二年十一月一日印刷
昭和二年十一月五日發行

現代日本文學全集　第二十六

著者　武者小路實篤

發行者　山本美
東京市麴町區內幸町一丁目參番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市麴町區內幸町一丁目參番地
幸ビルディング壹階

振替東京八四〇二番
電話（銀座一七三三番
銀座四五五八番
銀座五〇四六番）

株式會社秀英舍印刷

改造社